

純粹現象学及現象学的哲学考案

フツサル著

池上鎌三訳

凡例

- ・底本における旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めている。
- ・いくつかの語で送り仮名を現代的に統一をした。更に、底本に対し次の変換をした。「尚ほ」↓「なお」、「乍ら」↓「ながら」、「丈け」↓「だけ」、「共」↓「ども・とも」、「唯」↓「ただ」、「可く・き」↓「べく・き」、「略ぼ」↓「ほぼ」、「呉れ」↓「くれ」、「度い」↓「たい」、「逢著」↓「逢着」など。
- ・底本における「ノエシス」ノエマなどの等値を意味しない等号「＝」は、原著の通り「＝」に換えた。
- ・明らかな印刷上のミスと見えるモノは注記なしに訂正した。
- ・本訳書中に挿入した独・英単語でポイントの小さいもの及び、□で挿入した注記および頁末の脚注は、すべて本PDF作成者による挿入である。□で挿入した別訳は他の意味にも取りうるなどの提示であって、元訳が過ちとの指摘とは限らない。みず書房刊渡辺二郎訳を参照したが、あくまで初学者の理解に資するため、参考に付したものである。英訳は「E. Keisen」訳を参照した。訳者池上の造語と見える語に重点的にドイツ語・英訳を附したが、それらは無視すれば底本通りである。スラッシュで Deutsch / English の別を記したが、スラッシュないものは一方のみということである。
- ・ルビは、作成者によるものである。特に「信憑^{ドクサ}」とルビを振つたのは、作成者である。
- ・原著には多数の *aspect* 表記部分があり、底本では圈点を付されていたが、すべてゴシック体とした。
- ・参考文献名が青地斜体であるのは、ネットに公開されていることを示す。
- ・底本に使用した岩波文庫では、上下2巻であったが、一つにしている。底本では章の区切りで改ページはしていないが、本PDFでは改ページをしている。

目次

訳者序言

フッセル哲学解説

緒論

第一卷 純粹現象学概説

第一篇 本質と本質認識

第一章 事実と本質

- 一、自然的認識と経験
- 二、事実、事実と本質との不可分離性
- 三、本質諦視と個体直観
- 四、本質諦視と想像、本質認識はすべての事実認識から独立
- 五、本質に就いての判断と形相的普遍妥当性を有つ判断
- 六、二三の基礎概念、普遍性と必然性
- 七、事実学と本質学
- 八、事実学と本質学との依属関係
- 九、領域と領域的形相学
- 一〇、領域と範疇、分析的領域とそれの諸範疇
- 一一、文章法的対象性と究竟的基体、文章法的範疇
- 一二、類と種
- 一三、類化と形式化

一四、基体範疇、基体本質とトデ・テイ

一五、独立的対象と非独立的対象、具体者と個体

一六、実質的領界に於ける領域と範疇、先天綜合認識

一七、論理学的考察の結び

第二章 自然主義的誤解

一八、批判的論議への導き

一九、経験と原的能与の作用とに対する経験論的同一視

二〇、懐疑論としての経験論

二一、觀念論の側に於ける不明晰なる諸点

二二、プラトンの実念論なりとの非難、本質と概念

二三、イデー化の自発性、本質と仮構

二四、あらゆる原理の原理

二五、自然科学者として実践してゐる場合の実証論者、実証論者として反省してゐる場合の自然科学者

二六、独断的観方に立つ諸学と哲学的観方に立つ諸学

第二篇 現象学的基礎考察

第一章 自然的観方に於ける措定とその排去

二七、自然的観方に依る世界——私と私の周囲世界

二八、コギト、私の自然的周囲世界とイデーの諸周囲世界

二九、『他の』諸々の私主観と共同主観的なる自然的周囲世界

三〇、自然的觀方の總措定

三一、自然的措定の根本的変更、『排去』、『括弧入れ』

三二、現象学的エボケー

第二章 意識と自然的現実

三三、現象学的剰余としての『純粹』乃至『先驗的意識』への序説

三四、主題としての意識の本質

三五、『作用』としてのコギト、非顯在性変様

三六、指向的体験、体験一般

三七、コギトに於いて純粹我が或るもの『に向けられてゐる事』、及び把握的注意

三八、作用への反省、内在的知覚と超越的知覚

三九、意識と自然的現実、『素樸』人の見解

四〇、『第一』性質と『第二』性質、有体的に与えられたる物は『物理学的に真なる物』の『単なる現出』

四一、知覚の实的成素と知覚の超越的客觀

四二、意識としての存在と実在としての存在、直觀仕方の原理的區別

四三、原理的誤謬の解明

四四、超越的なるものの単に現象的なる存在、内在的なるものの絶対的存在

四五、知覚せられざる体験、知覚せられざる実在

四六、内在的知覚の疑なき事、超越的知覚の疑わしき事

第三章 純粹意識の領域

四七、意識の双関者としての自然的世界

四八、吾々の世界外の世界の論理的可能と事象的悖理

四九、世界撥無後の剰余としての絶対意識

五〇、現象学的觀方と現象学の分野としての純粹意識

五一、先驗的予備考察の意義

五二、補説、物理学上の物と『現出の知られざる原因』

五三、心を有てるものと心理学的意識

五四、続き、超越的な心理学的體驗は偶然的にして且つ相對的、先驗的體驗は必然的にして且つ絶対的

五五、結び、一切の實在は『意味付与』に依つて存在する、『主觀的觀念論』にあらず

第四章 現象学的還元

五六、現象学的還元の範圍に就いての問題、自然科学と精神科学

五七、純粹我排去の問題

五八、神なる超越は排去される

五九、形相的なものの超越、普遍学としての純粹論理学の排去

六〇、質料的・形相的諸学科の排去

六一、現象学的諸還元の体系的理論の方法論的意義

六二、認識論的序説、『独断的』觀方と現象学的觀方

第三篇 純粹現象学の方法と問題とに就いて

第一章 方法に就いての予備考察

六三、方法に就いての考察の現象学に対する特殊の意義

六四、現象学者の自己排去

六五、現象学の自己自身への退帰的關係

六六、明晰なる所与の忠実なる表出、一義的用語

六七、闡明の方法、『所与近接』と『所与隔遠』

六八、真の明晰性段階と真ならざるそれ、正常的闡明の本質

六九、完全に明晰なる本質把握の方法

七〇、本質闡明の方法に於ける知覚の役割、自由想像の優位

七一、体験の記述的形相学の可能性の問題

七二、具体的、抽象的、『数学的』等の諸本質学

七三、現象学の問題への適用、記述と精密なる規定

七四、記述学と精密学

七五、純粹体験の記述的本質学としての現象学

第二章 純粹意識の一般構造

七六、以下の研究の主題

七七、体験領界の根本特性としての反省、反省に依る研究

七八、体験反省の現象学的研究

七九、批評的余論、現象学と『内省』の諸難点

八〇、純粹我に対する体験の關係

八一、現象学的時間と時間意識

八二、続き、三重の体験地平、同時に体験反省の地平として

八三、『イデア』としての統一的体験流の把握

八四、現象学的重要主題としての指向性

八五、感覺的ヒュレーと指向的モルフエー

八六、機能の問題

第三章 ノエシスとノエマ

八七、予備的注意

八八、体験の实的成素と指向的成素、ノエマ

八九、ノエマ的供述と現実供述、心理学的領界に於けるノエマ

九〇、『ノエマの意味』、『内在的客観』と『現実的客観』との区別

九一、指向性の最広領界も同断

九二、ノエシスの見地及びノエマの見地より見たる注意の変化

九三、高次意識領界のノエシス・ノエマ的構造への移行

九四、判断の範圍に於けるノエシスとノエマ

九五、情緒及び意志の領界に於ける類比的区別

九六、以下諸章への導き、結語

第四章 ノエシス・ノエマ的構造の問題に就いて

九七、実的な体験契機としてのヒュレー的契機とノエシ斯的契機、非実的な体験契機としてのノエマ的契機

エマ的契機

九八、ノエマの在り方、ノエシスの形式論、ノエマの形式論

九九、ノエマの核と、現前及び現前化の領界に於けるその諸性格

一〇〇、ノエシス及びノエマに於ける、表象の本質法則的段階形成

一〇一、段階の性格、種々異なる『反省』

一〇二、性格づけの新次元への移行

- 一〇三、信性格と存在性格
- 一〇四、変様としての信憑の様相
- 一〇五、信としての信様相、存在としての存在様相
- 一〇六、肯定と否定並びにそれ等のノエマ的双関者
- 一〇七、反復されたる変様
- 一〇八、ノエマ的性格は『反省』に依る規定性にあらず
- 一〇九、中和性変様
- 一一〇、中和化されたる意識と理性の判決、仮定作用
- 一一一、中和性変様と想像
- 一二二、想像変様の反復可能性、中和性変様の反復不可能性
- 一二三、顕在的措置と潜在的措置
- 一二四、定立の潜在性と中和性変様とに就いての統論
- 一一五、応用、拡張せられたる作用概念、作用遂行と作用発動
- 一一六、新しき分析への移行、基づけられたるノエシスとそれのノエマ的双関者
- 一一七、基づけられたる定立と中和化的変様論の結了、定立の一般概念
- 一一八、意識の綜合定立、文章法的形式
- 一一九、複定立的作用の単定立的作用への転化
- 一二〇、綜合定立の領界内に於ける指定性と中和性
- 一二一、情緒及び意志の領界に於ける信憑的な文章法的形式
- 一二二、肢体ある綜合定立の遂行様態、『主題』
- 一二三、綜合定立的作用の遂行様態としての混乱性と判明性

- 一二四、『ロゴス』のノエシス・ノエマ的層、意義作用と意義
- 一二五、論理的・表出的領界に於ける遂行様相と、闡明の方法
- 一二六、表出の完全性と普遍性
- 一二七、判断の表出と情意ノエマの表出

第四篇 理性と現実

第一章 ノエマの意味と対象への関係

- 一二八、緒論
 - 一二九、『内容』と『対象』、『意味』としての内容
 - 一三〇、『ノエマの意味』なる本質の限界づけ
 - 一三一、『対象』即ち『ノエマの意味』に於いて規定せられ得るX』
 - 一三二、充実の様態に於ける意味としての核
 - 一三三、ノエマ的命題、定立的命題及び綜合定立的命題、表象の範囲に於ける命題
 - 一三四、命題学的形式論
 - 一三五、対象と意識、理性の現象学への移行
- ### 第二章 理性の現象学
- 一三六、理性意識の第一基礎形式、即ち原能的能与の『見ること』
 - 一三七、明証と洞観、『原的』明証と『純粹』明証、実然的明証と必証的明証
 - 一三八、十全的明証と不十全的明証
 - 一三九、すべての理性種類の交織、理論的、価値論的、及び実践論的真理
 - 一四〇、確証、明証なき権利づけ、措定的洞観と中和的洞観との等価性

一四一、直接的理性措定と間接的理性措定、間接的明証

一四二、理性定立と存在

一四三、カントの意味に於けるイデーとしての「物の十全的所与性」

一四四、現実と原的能与の意識、終結的諸規定

一四五、「明証の現象学」に対する批判的考察

第三章 理性論的問題群の一般性段階

一四六、最も一般的なる問題

一四七、問題の分岐、形式論理学、価値論及び実践論

一四八、形式的存在学の理性論的諸問題

一四九、領域的存在学の理性論的諸問題、現象学的規整の問題

一五〇、続き、先驗的導引としての物なる領域

一五一、物の先驗的規整の諸層、補説

一五二、先驗的規整の問題の他諸領域への移動

一五三、先驗的問題の全広袤、研究の区分

訳者序言

此処に訳出するのは、フッサール Edmund Husserl (1859-1938) の主著 „Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie“, I, 1913, である。本書の第二巻及び第三巻は遂に未刊に終った。

現代哲学に於けるフッサールの位置に就いては今改めて絮説する必要があると思う。勿論人は彼に於いて既に多くの「過ぎ去れるもの」を指摘することは出来るであろう。けれどもそれと同時に又人は、「現に存する」多くの哲学が如何に深く彼に負うているかを忘れてはならない。のみならず現象学乃至現象学的方法というものが、単にかかる時代的意義を超えて、永遠なる哲学的共有財の圈内にその座を占め得る資格のあることを想わねばならない。吾々はフッサールの此の著作に対して、過去のなると同時に永遠的なものという意味に於いて「古典」の名を賦与しても敢えて過当ではあるまいと考える。

本書の解説は別項「フッサール哲学解説」に譲ることにする。其の項は E. Hauer, W. Ziegenfuß, G. Jung 等の „Philosophen-Lexikon“, 1937 に収載されたフッサール自筆に係る叙述を基礎としたものである。それに依つて吾々は本書『考案』そのものの内容の概略と、同時にフッサール哲学の発展過程に於ける『考案』の位置とを知ることが出来るであろう。

i 後に、弟子たちによって3巻まで出版された。

本訳書は元来岩波書店の或る計画の一部として約十年前以前に一応訳了したものであったが、計画の消滅と共に此の稿も不完全の姿の俛に久しく筐底きょうていに放置されていた。それが改めて岩波文庫に収められることとなつて、訳者は再び十年の塵を払つて加筆訂正の事に従つた。訂正に当つては鬼頭英一氏の邦訳書及びギブスンの英訳書を参照して得る所があつた。

訳稿整理中原著者の訃報に接した訳者は図らずも本訳書にネクロローク【Zeligの死亡記事】の意を寓することとなつた。附記して彼の講字一向の生涯に深甚の敬意を表したいと思う。

最後に本訳書の成立に際して、機縁と刺戟とを与えられた伊藤吉之助先生に対して深謝の意を表す。なお嘗つて旧訳稿の一部に対して閲読の労を執られた武田信一君に感謝する。

昭和十三年盛夏

訳者識

フッサール哲学解説

フッサール哲学の特質を知るには、個々の著作を分離して各個それぞれの主題を観察するという如き仕方に依つては不可能である。彼の著作を歴史的に排列して見る時、それを通じて一つの目的が漸次明瞭に意識されて行く過程を看取出来る。彼の哲学的思索は首尾一貫して此の目的の追求に終始していた事を知らねばならない。その目的を一言にして云えば、哲学を根本的に新しく基礎づけるという事にほかならない。

元来フッサールは数学及び自然科学を修めたのであつて、当初究極の目的として念頭に置いたのは、論理学及び心理学を根柢として算術成立の可能性を厳密に基礎づけるということであつた。其の師ブレントノに捧げられた処女作『算術の哲学』第一卷（一八九一年）は此の目的のために書かれたものにほかならない。此の書はハレ大学の就職論文——その一部は『数の概念に就いて』と題して一八八七年既に刊行された——を増訂したものである。此の書の根柢には作用と高次対象、心理と論理、主観と客観等をその緊張の統一に於いて双関的に観察するという態度が既に存在している。

此の態度は、カール・シュトゥンプに捧げられた『論理学的諸研究』に於いて、十年研究の結晶として一層豊富となり具体的となつた。此の書は二卷から成り、その第一卷は『純粹論理學序説』（一九〇〇年）、第二卷は『現象學及認識論研究』（一九〇一年）と名づけられる。此の両卷は、人々の批評がこれを看過しているにも拘らず内面的なる統一を保有している。その統一とは即ち双関的観

察法なる方法的原理の実現にほかならない。けれども此の「主観的・客観的」なる統一的研究を正当に評価するには、先ず第一に客観——此処では論理的成体——の客観性を一切の誤まれる主観化から防護する必要がある。そこでフッサールは第一巻に於いては、論理的成体を「イデーの統一」と解し論理的法則を「イデー的法則」と解してその存在意味を、当時論理学を支配していた心理主義と批判的に対決しつつ闡明することに努力した。フッサールの批判に依れば「心理主義」とは論理的なる概念及び命題を心的成体とする見解であり、論理学的法則を心理学的事実法則とする見解である。此の批判の要点は畢竟、各種の心理主義が相対主義なる所以を証明する点に帰着する。積極的には此の批判に依つて純粹論理学のイデー性乃至先天性が明らかになるのである。そこで最後の章に於いてかかる純粹論理学そのものの考案を展開して、此の学^に二重の課題を与えている。一、先天的知識学たること、即ち「学乃至理論の可能性のイデー的制約」に就いての学たること。二、「形式的」概念に就いての先天的学たること、此の概念は対象一般に対して規整的であり、「何等かの認識資料の一切の特殊性から独立」である。（認識資料とは例えば対象、事態、一、多、集合数、関係等々）。以上に依つて結局純粹論理学はその主題上二つに分れることになる。即ち「意義範疇」（概念、命題、推理等々）の論理学と「対象的範疇」の論理学、後の用語法では命題学的論理学と形式的存在学（対象の形式的理論）である。そして此の両者の統一が可能的理論形式乃至「集合」（複素体）の理論としての純粹集合論である。次に第二巻は六個の研究に分れ、純粹論理学の方向と現象学の方向とを取る。先ず第一研究は『表出と意義』に関するものであつて、意義指向と意義充実、意義体験に於けるノエ

シスの内実とイデーの内実との間の本質關聯を分析的に闡明し、以て純粹論理学の課題に対して論理的體驗の文法的側面への洞觀を予め確保する。此の第一研究は言語哲學者並びに論理學者に多大の影響を与えたものであつた。第二研究は『種のイデーの統一と近代抽象說』に關するものであつて、「イデー化」の說を初めて基礎づけるに當つて普遍者の心理学的実体化、各種の唯名論、特に英吉利感覺論の唯名論的抽象說に反對する。第三研究は『全体と部分』に關するものであつて、之は明らかに「対象そのものの天先的【天天的】理論」の根柢を成している。具体的に直觀的な「内容」（知覚与件乃至事物対象）を手懸りとして説明して、畢竟全体性を規整するものとしてこの本質法則の挙示に到達する。此の本質法則は根本的に、天先的「分析」法則と天先的「綜合」法則とに分たれる。此の區別には、純粹論理学に含まるる形式的なる天先的对象論と、質料的なる天先的对象論（此の方は対象の実質性を基礎とするアプリアーリに關する）との原理的区分が内含されている。此の二つの方向に向つて包括的な分析が行われているのであるが、之と並んでなお外に「対象論」の基礎づけも行われている。なお此の対象論の構想のプリアリテートに就いてはマイノングとの間に論争があるが、彼自身に従えばマイノングに先立つこと数年であるという。第四研究は『独立的意義と非独立的意義との區別及び純粹文法学の考案』であつて、これは第一研究を繼續發展して純粹論理学的特殊学科としての全範疇的意義の天先的形式論の考案——即ち「純粹論理学的文法学」の考案——を企図している。フッサール哲学を更に發展せしめるに中心的重要性を有するのは第五、第六の二研究である。此の二研究に至つて初めて現象学的研究法が十分に發現して来る。第五研究は『指向的體驗とその内容』に

関するものであつて、論理的成体が発出し来る主観的源泉への遡源を示し、現象学的なる判断論を指している。分析的問題設定を予め極めて広く且つ根本的にして、意識生活一般及びその指向性の如何に一般的なる構造と雖も主題たり得る様にしてある。普遍的本質、例えば指向的作用の如きは記述的に取出し得る基礎契機から観てこれを性格づけ、質料と性質、更には作用の本質可能的基づけの如きは分析的に追究される。極めて重大なる意義を有する所の意識分析の豊饒さは既に此の処に現れている。第六研究は大部であつて、『認識の現象学的解明提要』に当てられている。これは指向性の現象学的要素構造を指向と充実との綜合として分析し、認識段階の詳細なる現象学を示し、合一と撞着（非両立）なる論理的概念を闡明し、明証と真理（真存在）との双関関係の闡明への重要な誘因を与える等々のことを行う。第六研究の第二部は挙げて感性的直観と範疇的直観との根本的区别に当てられている。

扱『論理学的諸研究』を全体として観ると、双関的觀察法なるものが『算術の哲学』と比較して著しく進歩した段階に達していることが発見される。一般に此の「現象学」の根本性格として注目すべきことは、現象学は一切の論定を専ら純粹に内在的な直覚からのみ汲み取り、直観的所与という此の領域からの如何なる逸脱をも拒むという事である。併し此の直覚的明証なるものは単なる経験心理学的明証ではないのであつて、此の明証の洞観はすべて必証の本質洞観にはかならない。心理主義と戦つて奪取したイデーの国即ち「アプリアーリ」の国は、思弁的基構の国ではなく必証的直覚の国である。そして此の直覚は究極的には常に遡つてすべての「アプリアーリ」の原分野に、即ち意識主観

性の原分野に關係している。内在的領界に於いて証示され得る存在及び現出はすべて本質法則性に依つて統制されているという洞觀に支持されて、純粹なる意識生活が普遍的意識研究の主題とされたのは此処が最初なのである。更に進んで此の現象学の根本性格を挙げるならば、研究の焦点を専ら純粹に意識そのものとしての意識に置き此の意識に本来固有なる綜合的聯関に於いて觀て、何よりも先ず第一に指向性と、此の指向性を指向的對象の側から問題とする方法との固有的本質が利用されたという事、従つて「心的現象」に關するブレンターノ説の無効なる分類記述的方法が克服されたという事である。『論理學的諸研究』に於ける発端を發展結実せしめる事は無論『考案』に至つて初めて可能である。此処に至つてそれは、「第一哲學としての普遍的意識現象學」の課題の構想として、即ち吾々に對して「存在するもの」一切の普遍的なる規整的解明という概念の下に現れて来る。『論理學的諸研究』に於いては意識分析は猶お未だ主として「ノエシス」に、即ち視点を反省的に體驗に向けることに依つてのみ行われた。即ちその分析は猶お、各々の體驗に属しているノエマ的意味層即ち體驗の主題的内実を研究するに至つていない。『考案』に於いて初めて、両側面の意識分析の必要が十分に明らかにされたのである。と云つても併し、ノエマ的構造の論定が『論理學的諸研究』に全く欠如しているわけではない。就中、直觀（知覺等々）の如き論理以外の領界に於ける意味契機の証示、思考心理学を刺戟した如き新しき認識は既にあつたのである。

『論理學的諸研究』以後フッサールの研究は、現象學を体系的に擴大して普遍的なる意識分析となさんとする点に集中された。一九二八年に至つて出版された『内的時間意識の現象學講義』（ハイデ

ツガー編）は主として、直観の現象学に関し一九〇五年ゲッティンゲンで行った講義に由るものである。『論理学的諸研究』に於いては研究主題を主として自発的能動性の指向的作業に採ったのであるが、此の『講義』に於いては純粹に受動的なる発生の指向的作業を明らかにした。此の後者の作業に於いて、流れ去りつつある意識生活は厳密なる本質法則に従つて、隠れたる連続的綜合に於いてそれ自身、時間的に存在する体験の流れとして規整されるのである。此処で指向性の本質と指向的^{本質}内容を形成する指向性の仕方とに対する新しき洞観が展開して来る。此処に於いて既にすべての超越的妥当の徹底的排去の方法は遂行されたのであるが、併し心理学的意味に於ける主観性を純現象学的に解釈したものと、先験的主観性とを、原理的に対照せしめるということはまだ欠けているのである。

一九一一年には広く世人の注目を惹いた例の『厳密学としての哲学』なる論文が『ロゴス』誌上に現れた。これは新しき現象学の普遍哲学的意味の暫定的なるプログラムの素描である。有限に坐する実践的人間に指針を与える哲学としての世界観哲学の目的と学的哲学の目的との、当時蔓延していた混同に反対してフッサールは、後者の哲学の真の意味を新しく規定してその永遠の権利を承認しているのである。一方に於いては感覚論的自然主義と戦ひ他方に於いては歴史主義と戦つて——即ち一方に於いては意識の自然化に反対し他方に於いては歴史的人間主義に反対して——真の心理学及び精神科学並びに又普遍的哲学に対してその根柢として指向性の普遍的現象学の必要なる所以を論述したものである。

規整的現象学の真の原典とも云うべきものは即ち此処に訳出した『純粹現象学及現象学的哲学考案』

(一九一三年)にほかならない。此の書に於いて現象学なる新しき学は、第一哲学即ち『哲学の基礎学』としての意味及び機能の体系的に基礎づけられたる説明を受けるに至つた。『事実と本質』に関する第一篇の後、第二篇『現象学的基礎考察』に於いては「純粹」乃至「先験的」現象学の固有領分が方法的に開拓され始める。フッサールは先ず「自然的觀方」の分析から出発する。此の觀方は世界現存の前提をなすものであつて、此の前提は一切の實踐的並びに理論的生活に於いて不明確に行われている不斷の前提なのである。此の前提を廃棄し、従つて自然的觀方を根本的に變更することに依つて、現象学的觀方は初めて可能となる。此の變更は、世界現存及び之に内含せられる所の各種對象の端的指定の一切に対する確乎不拔なる「括弧入れ」を基礎とする。此の括弧入れの後に残存するものは即ち世界思念を行う所の純粹意識である。「世界」とは意識生活の一定聯関の双關者を示す名称となつたのであつて、此の聯関に於いて此の意識生活は對象的現存をそのものとして思念する、即ち直觀的に經驗したり、曖昧に表象、思惟、評価したり、實踐的に努力したり等々して思念するのである。かくて世界は「世界現象」となる。専ら意識的被思念という意味に於ける現象が「現象学」の一般主題なのであつて、現象学は體驗的にして被思念的なる要素から觀たる純粹乃至先験的意識の学である。換言すれば又現象学とは、現象学的主觀に於いて時々に存在的として妥当する世界（並びにまた現象学的主觀に「イデー的」対象として妥当する存在）——これ等は被思念的内実を有する意味付与的純粹意識體驗の内にある——の構造の学である。

第二篇は先験哲学的認識一般を方法的に確保する上に有效である。即ち此の篇は現象学的方法の完

全なる体系を、先験的にして形相的な還元の一として展開している。換言すれば世界現存を括弧に入れた後に残存する絶対的主観性の先天的本質認識としての還元の一として展開している。第三篇『純粹現象学の方法と問題とに就いて』は、原理的に方法的なる分析を以て始まっているが、内的時間生成の問題と自我の問題とはこれを除いて爾後の研究に委ねている。『ノエシスとノエマ』及び『ノエシス・ノエマの構造の問題に就いて』の章に至つては、その各節が全く基礎的な構造を新しく呈示しているのであり、これに依つて規整研究の全く新しき問題地平が示されているのである。

第四篇『理性と現実』に於いては、指向的規整という一般的根本問題が明証及び毎時それに属する存在意味の規整問題として取扱われている。明証の根本種類があるのと同数の対象性の根本種類があり、規整問題の根本種類と同数の理性論的問題のそれがあるのである。十分に拡大された先験的問題と一般的規整問題との概念を展望した所で『考案』の第一巻は終っている。続刊予定の第二、第三巻の広汎な草案は一九一三年から一六年に互つて学生に講述筆記せしめて影響を与えた。その中特に著しい問題としては、純粹に自然的経験からの統一としての物質的自然の規整的現象学の詳細なる根本問題とか、知覚し、働き、物的自然へ身体的に働きかける所の私の機関及び肢体ある機関組織としての特性ある身体、乃至は又自然物体としての身体の規整とか、更に又広義に於ける自然実在としての心及び人間（乃至動物）の規整とか、感情移入なる作業の規整的解明に依る「他人」の規整とかいう如きものがある。自然科学的観方と精神科学的観方という根本的区別に結び付いて、物的及び心的、物的なる自然の規整と反対の方向に、種々なる秩序の人格の規整問題の所論が生じ、これが人格的周

囲世界に關係しては文化的周圍世界、從つて又一般に「精神的」世界の規整が論究された。

『考案』以後フッサールの研究は実証科学との關係に於ける現象学の根本的闡明の問題と定まつた。即ち心理学的意識研究に対する現象学的分析の限界づけの問題及び兩者の内面的關係の問題である。更に一般的に換言すれば新しき現象学的哲学が依つて以て究極の方法的洞觀及び最高の問題領界へ前進すべき普遍的方法の問題である。他方又此の間の歲月を広汎なる具体的研究に精進した。フッサールの講義は常に彼を直接に動かす問題に就いて行われたので、その澆刺たる講述に依つて哲學的著作に与えた影響は實に甚大なるものがあつた。

多年著述を差し控えて蘊蓄した成果を披瀝した第一作は一九二九年に著された『形式的論理学と先驗的論理学』（論理的理性の批判試論）である。此の書は客觀世界の学の現象学に対する關係を言わば範例的に述べたものである。形式的アプリアーリを主題とする学としての伝統的な——從つてその意味が深く究められ明らかにされている——論理学から出發して我々は、その前提の批判に依つて、右論理学の根ざす所の先驗的意識の顯在的及び含蓄的指向性の規整的聯繫に於ける根元に遡及せしめられる。そこで此の書は二篇に分れる。第一篇は「客觀的な形式的論理学の構造と範圍」であつて、これは『論理学的諸研究』に於いて企図した「純粹論理学」の問題を更に徹底化した仕方であり、採り上げて、此の論理学の構造的三分法の内部に於いて、整合の純粹論理学（これに於いては真理の概念は未だ主題的根本概念となつていない）の限界づけ並びにそれに属する現象学的解明を行つたものである。これと聯関して形式的論理学の形式的数学及び兩者を包括する形式的「普遍学」に対す

る關係は本質的深化を受けている。第二篇は『形式的論理学から先驗的論理学へ』であつて、これは規整の問題への明確なる還帰を課題としている。就中此の篇の研究には、存在と真理とに関する明証の一般の問題、根本的な判断論等々に関する詳細なる研究がある。特に重要なのは、『考案』に於いて既に明らかにされた形相的意識心理学と「先驗的」現象学との区別である。これと同時に、方法上全現象学的哲学に対して基礎を与える所の、「先驗的心理主義」の解明が行われている。此処に至つて初めて、先驗的主觀性の心理学的主觀性に対する關係は確乎たる明証を得るのであつて、此の明証に依つて、両者の混同のために生ずる純粹現象学への誤解が除かれる。

以上のほかに『デカルト的省察』（一九三二年）があるが、これは一九二九年の春ソルボンヌで行つた四回講演を増訂したものである。此の書に於いてフッサールは現象学的哲学の全体を概説し、就中他人の心の経験としての感情移入に対する詳細なる分析に依つて、先驗的主觀性を完全に開明するに必要な基礎が先驗的共同主觀性なることを示し、そしてこれに依つて規整の問題全般の完全なる輪廓を描いている。

最後に學術論文として絶筆と思われるものにリーベルト主宰の『フィロソフィア』誌第一卷（一九三六年）に掲げられた論文『歐洲學術の危機と先驗的現象学』がある。これは一九三五年「人間悟性研究のためのブラーグ哲学会」の招聘に応じてブラーグ大学に於いて行つた講演を推敲したものであるが、所載の分はその一部に過ぎず、逝去のため遂に未完結に終つたわけである。フッサールとしては珍らしくその年来の所信を哲学史との聯関に於いて論述したものであつて、その点から云つ

ても此の論文が完結を見るに至らなかったのは遺憾である。

フッサール (Edmund Husserl) 略歴

一八五九年四月八日　メーレン州（旧オーストリー領、現チェコスロヴァキア領）プロースニツに生まる。

一八八七年　ハレ大学私講師

一九〇一年　ゲッティンゲン大学員外教授

一九〇六年　同大学正教授

一九一六年　プライスガウのフライブルク大学正教授

一九二八年　右退職

一九三八年四月二十七日　逝去

フッサール主要著作

1. Philosophie der Arithmetik, 1891.

2. *Logische Untersuchungen*, 2 Bde. 【『論理学研究』立松弘孝訳みず書房刊】

I : Prolegomena zur reinen Logik, 1900, 4. Aufl. 1928.

II/1 : Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis, 4. Aufl. 1928.

- II/2 : Elemente einer Phänomenolog. Aufklärung der Erkenntnis, 3. Aufl. 1922.
3. Philosophie als strenge Wissenschaft, in : Logos Bd. 1, 1911.
4. Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenolog. Philos. I.: Allg. Einführung in die reine Phänomenologie, 1913, 2. Aufl. 1922, 3. Aufl. 1928. 【『ベートヘン』全5巻みすず書房刊】
5. Husserls Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins, hrsg. v. M. Heidegger, in : Jahrbuch für Philos. und Phänomenolog. Forschung, Bd. 9, 1928.
6. Formale u. transzendente Logik, in : Jahrb., Bd. 10, 1929. 【『形式論理学と超越論的論理学』立松弘孝訳みすず書房刊】
7. Phänomenology, in : Encyclopaedia Britannica, 14. ed., 1929.
8. Nachwort zu meinen "Ideen z. e. r. Phänomenol. u. phänomenolog. Philos.", in: Jahrb., Bd. 11, 1930.
9. Méditations cartésiennes, Introduction à la phénoménologie, 1931. 【『デカルト的省察』舟橋・谷沢中央公論新社刊】
10. Die Krisis der europäischen Wissenschaft und die transzendente Phänomenologie, Eine Einleitung in die phänomenolog. Philos. (unvollendet), in : Philosophia, Vol. 1, 1936.

【"Phenomenology and the Crisis of Western Man"】

【『幾何学の起源』青土社刊、『間主観性の現象学』全3巻ちくま学芸文庫】

緒論

純粹現象学——吾々は本書に於いて斯学への尋求、他のすべての学に対する斯学独特の位置の描出、及び哲学が哲学の基礎学なることの証示を試みたいと思う——はひとつの本質的に新しく、その原理的特質の故に自然的思考から遙かに遠ざかって居り、そして此の故に今日に至って漸くその発展へと急ぎつつある学である。此の学は『現象 Phenomenen / phenomena』に関する学と呼ばれる。現象には猶お疾に知られている他の諸学も亦関係する。即ち人の知る通り、心理学は心的現象に関する学であり、自然科学は物的なる『現出 Erscheinungen / appearances』乃至現象に関する学であると言われる。それと等しく、歴史に於いては歴史現象という事が、文化科学に於いては文化現象という事が屢々言われる。此の事は實在に関するすべての学に就いても亦同様である。斯く現象に就いて論ぜられる場合に、現象という言葉の意味が如何に異なっているとしても、又仮令其の他如何なる意義を有つとしても、現象学も亦之等『現象』のすべてに對し、而もすべての意義に應じて、関係しているという事は慥かである。が併し、此の場合には全く別の觀方に立つのであつて、此の觀方に依つて、吾々の疾に熟知している諸学に於いて用いられている現象の意味は、悉く一定の仕方では變様される。かく變様された意味としてのみ、現象の意味は現象学の境界内へ入り来るのである。此の變様を了解すること、更に精確に言い換えれば、現象学的觀方を遂行すること、現象学的觀方の特質と自然的觀方の特質とを反省

i 「みかた」 Einstellung (英 attitude) 態度・身構え・態勢・設定などを意味するが、以下「觀方」と訳されている。

してそれを学的意識に迄高めること——此の事は、吾々が現象学の地盤を獲得してその独自の本質を学的に確保しようと欲する場合に、完全に果さねばならぬ第一の、そして決して容易ならぬ課題である。

最近十年間^{ドイツ}独逸の哲学及び心理学に於いては、現象学に関して甚だ頻繁に論議が行われた。人々は『論理学的諸研究』⁽¹⁾に同意している様なつもりで、現象学を似て経験的心理学の底層であり、心的体験の『内在的』記述の領域である（此の内在的記述は厳密に内經驗⁽²⁾の範圍内に限られる、彼等の所謂内在とは此の意味である）かの如く考える。此の見解に対する私の抗議は殆んど役に立たなかつた様である。そして、両学の区別に就いての少くとも二三の重要点は明確に釈明した所の附随的諸論述も、了解されないか、或は無視放擲^{ほうてき}されたのであつた。それ故に又、心理学的方法に就いての私の批判に對して、私の叙述の率直な意味を逸したために全然空虚となつてゐる答弁が現れた——私の批判、それは決して現代心理学の価値を否認したものでもなく、又決して優れた人々の果した実験的研究業績^{けいせき}を貶したものでなく、心理学的方法の或る字義通りに根本的な欠陥を暴露したものなのである。蓋し私の考える所に依れば、心理学を一層高い段階の学^{けだ}に迄高める事も、又その研究分野を著しく拡張する事も、此の欠陥を除かなければ不可能なのである。私の攻撃ならぬ『攻撃』に對する心理学の側の必要な防禦^{ぼうぎよ}に就いては、後に又少しく論及する機会があるであらう。私が此處で此の論争に触れるのは、広く行われて居り且つ影響甚大なる誤解に對して次の事を予め明確に強調しておかんがためである。それは、吾々が以下に於いて通路を開拓して行こうと欲する純粹現象学——『論理学的諸研

究』に於いて初めて出現し、最近十年更に研究を進めてその意味が私に益々深く益々豊かに解つて来た所の現象学——は心理学でないという事、及び現象学を心理学に数える事が却けられる所以は偶然的なる範圍区劃や用語の故ではなく原理的なる根拠に基づくという事である。現象学が心理学に対して要求すべき方法的意義は如何に大なりとはいえ、又、現象学は心理学に向つて如何に本質的『基柢 Fundamente / foundations』を提供するとはいえ、現象学は（イデーの学として既に）自身即ち心理学であるのではなく、それは恰かも幾何学が自然科学でないと同様である。否現象学と心理学との區別は此の幾何学と自然科学との區別に対する比較の示すよりも更に根本的である事がわかる。此の事は、現象学は『意識 Bewußtsein / consciousness』を、即ちすべての体験種類、作用 Akten / acts、作用の双関者 Akte / act-correlates を取扱うという事実によつて少しも變化されない。以上を理解するには、一般の考え方の習慣にあつては、慥かに慥からぬ苦勞が要る。従來の考え方の習慣を一切排去する事、従來の考え方が吾々の思考の地平に繞らしていた精神的障壁を認めて之を破壊する事、斯くて、すべての方面に障壁を徹せられた地平が初めて吾々に示す所の全く新規に提出さるべき眞の哲学問題を、思惟の完全なる自由によつて把握する事——これは困難な要求である。けれども此の要求は低減できない。なおその上にひとつの新しい、自然的なる経験の觀方及び思考の觀方に対して**全然變更された仕方の觀方**が必要である——この事は實際、現象学の本質の把握、現象学の問題の独特なる意味の了解、爾他すべての学問（特に心理学）に対する現象学の關係の了解を、甚だ異常に困難ならしめるものである。決して旧き觀方に逆轉せず此の觀方に於いて自由に活動し、眼前に在るものを視、區別し、記

述する事を学ぶには、更に又、独特且つ困難なる研究を必要とする。

此の新しい世界への突入の過大なる困難を、言わば一つづつ征服し得る如き途を求めて行くという事が、即ち此の**第一**巻の最も重要な課題であるであろう。吾々は自然的立場から、即ち吾々に対立する世界、心理学的経験に於いて現れる意識から出発し、そして此の立場に本具的な前提を暴露しよう。次に吾々は『現象学的還元』(Reduktionen / reductions)の方法を完成しよう——此の方法に由つて吾々は、すべての自然的研究法の本質に属する認識の障壁を取除き自然的研究法固有の一方的視方向を転ずる事ができ、最後には、『先験的』(transzendental / transcendental)に純化された現象の自由なる地平を獲得し了^おえて、それに依つて吾々独特の意味に於ける現象学の分野を獲得し了るに至るのである。

吾々はなお少しく精密に予備的説明の輪廓を描こう。そして現代の先入見の要求に随^{したが}つて、が又同時に事象の内面的共通性の要求する所にも随つて、心理学に結び付けて論じよう。

心理学は経験科学である。斯く言う時、経験という言葉を普通の意義に使うならば二つの事が含まれている。即ち、

一、心理学は**事実** (Tatsachen / facts) に就いての、即ちデイキッド・ヒュームの意味に於ける matters of fact (事実の事) に就いての学である。

二、心理学は、**實在** (Realitäten / realities) に就いての学である。心理学的『現象学』としての心理学が取扱う『現象』は実在的な出来事であつて、これはかかるものとして、それが現実的定在 (wirkliches Dasein / actual existence) をもつ限り、此の出来事の属する實在的主観 (realen subjekten / real subjects) と共に、

omnitude realitatis (『全実在界』)としてのひとつの時空間的世界に属する。

これに反して純粹乃至先驗的現象学は事実学としてではなく本質学 (『形相的 eidetische / eidetic 学』) として基礎づけられるであろう。即ち専ら『本質認識 Wesenserkennnisse / cognitions of essences』だけを確定せんとし、『事実 Tatsachen / matters of fact』を確定せんとは全然しない学としてである。此の場合の還元——即ち心理学的現象から純粹『本質』へ、或は判断的思惟に於いては事实的 (『經驗的』) 普遍性から『本質』普遍性へと遷り行く還元——は形相的還元である。

第二に先驗的現象学の現象は非実在的な事の特質とされるであろう。形相的還元とは別の、先驗的という種類に属する還元は、心理学的現象を、此の現象に実在性を与えその故に之を実在的『世界』の一種たらしめるものから『純化する』。吾々は吾々の現象学を、実在的現象のでなく、先驗的に還元されたる現象の本質論たらしめんとする。

上述のすべてが更に詳細には何を意味するかは、以下述べる所に於いて初めて明らかになるであろう。今は姑く若干の序説的研究の図形的輪廓を示したのである。私は此處でただひとつの注意を附け加える必要があると思う。上に傍点【右のゴシック体】を附した二点に於いて、普通一般に行われている唯一の学の種類即ち実在科学と觀念科学 (或は經驗的科学と先天的科学) という分類の代りに、却つて、事実と本質、実在的なものと非実在的なものという二組の対立に依じてする二つの分類が用いられてあつたのは読者を驚かすことであろう。実在的と觀念的との対立の代りに此の二重の対立を区別する事は吾々の研究の後の進行に於いて (即ち第二巻に於いて) 詳細に立証されるであろう。又、

實在という概念はひとつの基礎的な境界づけを必要とするのであって、之に依つて實在的存在と個体的存在（全く時間的な存在）との間に區別が確立されねばならぬという事が示されるであらう。純粹本質への移行は、一方に於いては實在的なものに就いての本質認識を、他方に於いては残りの領域に關して、非實在的なものに就いての本質認識を与える。また更に、先驗的に純化された『體驗』はすべて、決して『現實的世界』に算入される事なき非實在であるという事が示されるであらう。此の非實在こそ正に現象学の研究するものである、が併し個別的单独体としてではなく『本質』に於いてである。併しながら先驗的現象は如何なる点に於いて個別的**事實**として研究され得るかという事、及び斯くの如き事實研究は形而上学なる觀念に對し如何なる關係を有つであらうかという事は、本研究の結末の部分に於いて初めて考察されるに至り得るであらう。

併し**第一卷**に於いて吾々は、**啻**に先驗的に純化されたる意識とそれの本質双關者とを吾々に觀取到達せしめる現象学的還元^たに就いての一般論を扱うに止まることなく、なお吾々は此の純粹意識の極めて一般的なる構造に就いての明確なる觀念を獲得し、之を仲介として、此の新しき学に属する最一般的なる問題群、研究方向及び方法の明確なる觀念を獲得すべく試みたいとも思ふのである。

次に**第二卷**に於いて吾々は二三の特に重要な問題群を詳細に取扱う。之等問題群の体系的表現と範型的解決とは、一方に於いては物理的自然科学、心理学及び精神科学に對し又他方に於いては先天的なる学の全体に對する現象学の困難なる關係を真に明瞭ならしめるための予備条件である。その場合描かれる現象学的スケッチは同時に、**第一卷**に於いて獲られた現象学の理解を著しく深め且つ現象

学の広大なる問題圈に關する遙かに内容豊富なる知見を獲得するに適する如き手段を提供するものである。

最終の**第三卷**は哲学の觀念に充てられてある。絶対的認識なる觀念を實現する事をその目的とする眞の哲学は純粹現象學に基づくものである、そして此の事は、全哲学の此の第一哲学を体系的に嚴密に基礎づけ完成する事が各形而上學及びその他の哲学——『**學**として現れ得るであろう如きそれ』——にとり欠くべからざる予備條件をなすという程に重大な意味に於いてである、という此の洞觀が第三卷に於いて喚起されるであらう。

現象學は今、ひとつの本質學として——ひとつの『**先天的なる**』學として、或は又形相的なる學とも呼ばれる學として——基礎づけらるべきである。それ故現象學そのものに捧げらるべきすべての努力に先立つて、本質及び本質學に關する一聯の基礎的討究と自然主義に対する本質認識の本来的固有權利の擁護とをなすのが有利である。——

術語の簡単な吟味を以て吾々は此の緒論を終えよう。**先天的** a priori、**後天的** a posteriori という言葉は、既に『論理學的諸研究』に於いての通り、私は成るべく之を避けようと思う。その理由は、之等の言葉には、普通の用法では人を迷わす不明瞭や多義やが附着しているからであり、又過去の悪い遺産として、惡評ある哲學説が結びついているからでもある。で之等の言葉は、前後の聯関で意味が一定される場合、及び明晰にして一定的な意義が与えられている他の用語が附加されて此の附加された用語と同義語をなす場合に限つて使おうと思う。殊に歴史的並行關係を想わせる必要がある場合に於

いてそうである。

イデー Idee 及び **イデー** der Ideal という言葉は、多義混乱の点に於いて、恐らくそれ程甚だしくはないであろう。併し、拙著『論理学的諸研究』が屢々誤解を受けたので痛感させられた通り、やはり概して相当よくない言葉である。私が此の術語を換えることにするのは、最も重要な **カントの所謂イデーの概念**を、(形式的乃至質料的) 本質という一般概念から全く引き離しておきたい要求に迫られるためでもある。それで私は、外国語としては、術語として未だ使い古されていない **Eidos** (形相) の語を、ドイツ語としては、無害ではあるが併し時には確かに厄介な曖昧を有つ **Wesen** (本質) の語を用いようと思う。

酷く多様な意味を負わされている **Real** (實在的) という言葉は、適当な代用語を得さえしたらば、之を取り除きたかつたのであるが能わず遺憾に堪えない。

猶お一般的な注意を加えよう。全く歴史的哲学用語の範圍外に在る様な術語を選ぶことは不可能である。又殊に、哲学上の根本概念は、直接達し得る直観に基づいて何時でも同一義と認められ得る確定的概念に依つて定義的に決定される事ができない、否寧ろ、終局的に解明規定されるには一般に長い研究が先行しなければならぬ。それ故、ほぼ同様の意味に使われる **数個**の一般用語を——その個々を術語として明別した上で——組立てて作られる複合語法は屢々必要なのである。哲学に於いては数学に於ける如くには定義する事ができない。此の点からみて数学の態度を模倣する事は悉く害に無益な許りでなく悖理であり、且つ又有害な結果を伴うものである。なお又、此の点に関して——一般的

にも——右の術語を哲学的伝統と仔細に批判的に比較する事は本書の紙幅の都合上からも既に断念せざるを得ぬのであるが、併し論考の途次一定にして自身に明証的な指示に依つて確定的意味を保たしめることにしよう。

(一) E. Husserl, 《*Logische Untersuchungen*》, 2 Bde., 1900 und 1901.

(二) 拙稿《Philosophie als strenge Wissenschaft》【厳密な学としての哲学】，Logos, Bd. I, S. 316-18 に於て。
（特に経験の概念に関する論述、頁三二六に注意）。拙稿《Bericht über deutsche Schriften zur Logik in den Jahren 1895-99》Archiv. f. system Philosophie 《, Bd. X (1903), S. 397-400. に於いて既に現象学と記述的心理学との関係に捧げた詳細な議論を参照。今日も猶お私は一語をも変ずることが出来ないであろう。

第一卷 純粹現象学概説

第一篇 本質と本質認識

第一章 事実と本質

一、自然的認識と経験

自然的認識は経験と共に起り経験の内に留まる。それ故吾々が『**自然的**』と呼ぶ理論的観方に於いては、可能なる研究の全地平は**一語**を以て示される。即ちそれは**世界**である。^{したが}随つて、此の根源的な ^(c)ursprünglichen / original 観方に立つ諸学は総じて世界に関する学である。そして専ら此の観方のみが行われる限り、『**真の存在** *wahrenhaftes / true being*』、『**現実的** *wirkliches / actual* 存在』、即ち**実在的** *reales / real* 存在という概念と『世界に於ける存在』という概念とは——すべての**実在的**なるものは合して世界という統一になるのであるから——互いに合致する。

各々の学には、その研究領分として或る対象範囲が対応する。そして之等諸学^{これら}のすべての認識即ち此処では正しき供述には、当該範囲の対象がそれに於いて自体に与えられ或は尠くとも部分的には**原的に与えられる**如き確実な直観が、供述の正しさを示す基礎づけの源泉として対応する。最初

i 「**原的**」 *originär* (英 *originarily*)。『オリジン (原点) に関して』、あるいは、派生的ではないとの意だろう。

の、即ち『自然的』なる認識領界とその領界の学のすべてとの**能与** *gebende / presentive* 直観は自然的経験であり、此の**原的能与**の経験は、普通の意味に解されたる**知覚** *Wahrnehmung / perception*である。實在的なものが原的に与えられているという事と、それを端的に直観して『認知 *gewahren / attentively to perceive*』し『知覚 *wahrnehmen / experience*』するということとは同一である。原的経験を吾々は物的なる事物に就き『外知覚 *äußeren Wahrnehmung / external perception*』に於いては有つのであるが、併し回想乃至予期的期待に於いては最早有たない。又吾々は原的体験を吾々自身や吾々の意識状態に就き所謂**内知覚**乃至自己知覚に於いて有つのであるが、併し他人や他人の体験に就き『感情移人 *Einfühlung / empathy*』に於いて有つという事はない。吾々は他人の身体的表現に対する知覚を基礎として『他人に於いて彼等の体験を認める』。感情移入に依つて斯く認めるという事は成程直観的、能与的作用ではある。けれども最早**原的能与**の作用ではない。他人とその精神生活とは成程『自体其処そこに』、そして其の身体と一つのものとなつて其処に、在りとして意識されはする。併し其の身体の如く原的に与えられたりとして意識されはしない。

世界は、可能的経験及び経験認識の対象——即ち顕在的経験を基礎として正しき理論的思惟に依つて認識せられ得べき対象——の総体である。経験科学の方法は詳細には如何なる工合であるか。又その方法は経験の直接所与 *gegebenheit / givenness* の狭い埒内を超える自己の権利を如何にして基礎づけるのであるか。此の事は今此処こゝに論ずる限りでない。意味の広狭を問わずすべての所謂**自然科学**、即ち

i 「原的能与」 *die originär gebende* (英 *presentive of something originarily*) 派生的になく与える所の…。

物質的自然に関する諸学、並びに又心的・物的自然を具えたる「心を有てるもの」に関する諸学、随つて又生理学、心理学等々の如き、は悉く世界に関する学であり、随つて自然的観方に立つ学である。同様に又すべての所謂**精神科学**、即ち歴史、諸文化科学、各種の社会学的学科等も亦之に属する。この場合之等精神科学は自然科学に並列さるべきか或は対立さるべきか。乃至は精神科学そのものは自然科学と見做さるべきか或は本質的に新しき型の学と見做さるべきか。此の事は吾々は姑く決定せず置いて差し聞えない。

(一) 此処に根源とは何等歴史の意味でいうのでない。此の根源という言葉に於いては、心理学的・因果的発生も発生の発生も考える必要なく、又考へてはならない。之等以外如何なる意味であるかは、後に至つて初めて反省的に学的に明晰となるであろう。併し、経験的・具体的な事実認識が他の認識の各々——例えば数学的・イデー的认识の各々——より先にあるという事が何等時間的意味を有つ必要なく非時間的に了解出来るという事柄は、誰しも始めから感知している所である。

* 第二版に於いては「客観的な時間的意味」となっているが、第三版に於いては「客観的な」を削除して初版の形に帰っている。(訳者注)

二、事実、事実と本質との不可分離性

経験科学は『**事実**』学である。基づけの働きをする経験という認識作用は實在なるものを**個体的 individually**に措定する。即ちそれを空間的・時間的に定在するものとして措定する。即ち**此の時間位 i setzen (英 posit) 「定立」**とも訳される。仮定する・断定するなど、ある事物・事象を在るとして捉える思考作用。

置に在り、自己の此の持続を有ち、その本質上他の如何なる時間位置にも同様に在り得たであろう如き或る實在内実を有つ所の或るものとして措定する。更に又、此の場所に此の物的形態に於いて在る（或は此の形態を有つ身体と一つになつて与えられて在る）所の或るものとして措定する。此の場合同じ實在的なものが、それ自身の本質から見て、如何なる任意の場所にも、如何なる任意の形態に於いても亦同様に在り得るのであり、現に事実としては変化していないが変化する事もできるのであり、或は事実変化するとは別の仕方に変化する事もできるのである。如何なる種類の個体的存在も、おしなべて『**偶然的**』である。それは斯様である、が併しそれはその本質上斯様とは別様でもあり得るのである。斯々の實在的狀態が事実として存する場合には斯々の一定の結果が事実として存せざるを得ぬという事を示す或る一定の自然法則が妥当するにしても、斯くの如き法則はただ事實的規則づけを表出しているに過ぎないのであつて、此の規則づけ自身は全く別様でもあり得るのであり、且つ又それは可能的経験の対象の**本質**に始めから属する事柄として、「此の規則づけに依つて規則づけられている斯くの如き経験対象はそれ自体として見れば偶然的なものである」という事を既に前提しているのである。

併しながら事実性と呼ばれる此の偶然性は、時空間的事実の整頓に就いて妥当する規則の単なる事實的存立を意味するのではなくて**本質必然性** Wesens-Notwendigkeit / eidetic necessity という性格を有する所の、その故に又**本質普遍性**に對し關係を有している所の、或る**必然性**に双關的に關係 *korrelativ / correlative* 【相關關係】している。此の点でその偶然性の意味は制限されるのである。吾々は曩に各々の

事實は『それ独自の本質上』現在とは別様であり得ると言つたのであるが、それは既に、「各々の偶然的なるものの意味には、正に或る本質を、その故に又純粹に把握さるべき或る形相 *Eidos* を有つという事が含まれている」という事を言い表したものである。が此の形相は今や種々なる段階の普遍性を有つ本質真理に属するのである。個体的対象は、単に一般的に個体的なる対象、此処に在る此のもの！、一回的なる対象というに過ぎぬものではなく、それは『それ自身に於いて』斯々の性質ある対象として、その特質を有っている。即ち、その対象の他の第二次的な相対的規定が属し得るためには『対象がそれ自身に於いてあるが如くに在るもの』としてのその対象に是非属さねばならぬ所の**本質的客位語** *predicables* 【述語要素】の貯えを有っているのである。それで例えば、各々の音はそれ自身にひとつの本質を、最高には音一般或は寧ろ聴覚的なるもの一般という普遍的本質——これは個体的なる音から（単独に、或は他の個体的なる音との比較に依つて、『共通なるもの』として）観取さるべき契機として純粹に解される——を有っている。同様に各々の物質的なる物はそれ固有の本質性質を、最高には、時間規定一般、持続、形象、質料性等一般を具えたる『物質的なる物一般』という普遍的なる性質を有っている。個体的本質に属するものはすべて、他の個体も亦之を有つ事が出来る、そして今吾々が例示した如き種類の最高の本質普遍性は**個体の『領域』乃至『範疇』**を境界づけるのである。

三、本質諦視と個体直観 *Wesensschauung und individuelle Anschauung / Eidetic Seeing and Intuition of Something Individual*

先ず第一には『本質』は、個体という独自の存在に於いてその何として見出されるものを指した。併し斯くの如き何の各々は、『イデーの中へ置』かれ得る。経験的直観即ち個体直観は本質諦視（イデー化）へ転化され得る——この可能性こそは経験的可能性でなく本質可能性と解さるべきである。そこで、諦視された *in seest* ものは、最高範疇にせよ、その特殊化（完充 *vollen / full* なる具体者に迄至る特殊化）にせよ、兎に角個体に対応する純粹なる本質乃至形相である。

本質を付与する、時には原的に付与する此の諦視は、例えば吾々が本質としての音に於いて容易に達し得る如く、十全 *adequate* なる諦視であり得る。が又多少とも不完全なる、即ち『不十全』なる諦視でもあり得る。そして此の事は明晰判断度の多少に就いてのみ言われるのではない。或る種の本質範疇の特性には、それに属する諸本質はただ『一面的』に、順次的には『多面的』に与えられ得るが而も『全面的』には決して与えられ得ない、という事が含まれている。随つて之に双関して、斯くの如き本質に対応する個体的単独者は、ただ不十全なる『一面的』、経験的直観に於いてのみ経験され表象されるに過ぎない。此の事は事物的なるものに関する本質の各々に対して、詳しくは延長或は質料性という本質成分のすべてに就いて、言い得られる。加之、更に仔細に見れば——後に行う分析に依つて明らかになる如く——すべての実在一般に対して言い得られるのである。勿論その場合には一面性、多面性という曖昧な言葉は一定の意味を与えられ、そして不十全性の種々なる種類が区別されるであらう。

i 「諦視」 *Wesenserschauung* 「本質観取」とも訳される。諦視は見極めるの意が強いが、英訳など単に *seeing* とする。

今は姑く次の事を指示して置けば足りる。即ち、物的事物の空間形態が既に原理的にただ単なる一面的射映に於いて与えられ得るに過ぎぬという事、又、連続的直観をどれ程進ませて行つて如何なる獲物を得たとしたところで猶お且つ残存する所の右の不十全性を度外視しても各々の物的特質は吾々を無限の経験へと導き入れるという事、又、経験の多様は仮令如何に広く拡げられても更に一層詳細にして且つ新しき事物規定を展開するという事、そして斯くて無限に至るという事、である。

十全なるにせよ不十全なるにせよ、孰れの種類の個体直観と雖も、それは本質諦視へ転向するを得る、そして本質諦視は、個体直観に対応して又十全なるにせよ不十全なるにせよ、**能与** *gebenden / presentive* の作用たる性格を有っている。以上の事には次の意味が含まれている、即ち、

本質（形相）は新しき種類の対象である。個体直観即ち経験的直観に於ける所与 *Gegebene / datum* **は個体的対象であるが、それと同様に、本質諦視に於ける所与は純粹本質である。**

此処には単に外面的に過ぎざる類比があるのではなく、根本的な共通性がある。形相的对象が正に対象である様に、**本質諦視も亦正に直観である。**『直観』と『対象』という双関的に組をなしている概念を更に拡張する事は、勝手な思い付きではなくして、事象の本性に依つて強制的に要求されているのである。^(一)経験的直観 *Empirische Anschauung / Empirical intuition*、即ち特別な用語で言えば経験 *Erfahrung / experience* は個体的対象に就いての意識である。そして直観的意識として『それは個体的対象を所与 *Gegebenheit*【所与性】に迄齎し^{もたら}』、知覚としてそれは原的所与【所与性】に迄、即ち対象を『**原的**』^(二)、

i 能与 *gebenden*: 所与 *Gegebene*、^(一)「与える働きをする」対「与えられるもの」(英 *presentive : data or givenness*)

その『**有体的**』ⁱ 自性 selbheit / selfhood 【自己性】に於いて把握する意識に迄齎すのである。それと全く同様に本質直観も或るもの Etwas / Something に就いての意識である。即ち或る『対象 Gegenstand / object』、即ち直観の視向ⁱⁱが向い、直観に於いて『自体に与えられ』ているひとつの或るものに就いての意識である。が此のものは亦他の作用に於いて『表象 vorgestellt / objectivated』され、漠然と或は判明に思惟され、真及び偽なる述定の主辞ⁱⁱⁱとされることも出来る——例えば、**形式論理学の必然的に広い意味に於ける各々の『対象』**の如きはまさしく之である。各々の可能なる対象、論理的に言えば『**可能的な真なる述定の主辞の各々**』は、あらゆる述定的思惟以前に、表象し、直観し、対象を時にその『**有体的自性**』に於いて発見し『把握』する所の視向の中へ這入る、それ**固有**の仕方を有っている。本質諦視はそれ故、直観である。そしてそれは深い意味に於ける諦視であつて、単なるそして恐らくは漠然たる現前化ではないとすれば、それは本質をその『**有体的**』自性に於いて把握する**原的能与**の直観である。^(二)併し他面に於いてそれは原理的に**独自**にして**新しき種類の直観**である。と言うのは、即ち他の範疇の対象性に双関的に関係する種類の直観、特に言えば普通の狭い意味に於ける直観即ち個体直観に此して、独自にして新しいのである。

個体直観の主要素、即ち個体的なるものが現出しているという事、分明であるという事が、本質直観の根柢に横たわっているという事柄は慥かに本質直観の特性の中に存している、勿論個体的なるも

i 「有体的」 leibhaftig (英 personal) 生けるという意味合いで、有りの尽だけではなく「生身の生き生き」の意味も
ii 「視向」 Blick (英 regard) 類出語で、視線・目差しということ、視線が向いている事を指す様だ。
iii 「述定」 Prädikationen (英 predications) 「……である」と述語づけること。「主語「述語」文で述べられる対象とも。

の如何なる把握も、又現実としての如何なる種類の指定も、其処に在るのではないが。その結果本質直観は、それに『対応する』個体的なるものへの視向擬向と類例意識の形成との自由なる可能性がなければ不可能であるという事は慥かである、——と同様に亦逆に個体直観も、イデー化遂行の自由なる可能性と、該個体に対応し且つ個体的に分明なるものに於いて類例化している本質の方へ、イデー化に於いて視向を向ける事の自由なる可能性とがなければ不可能である。併しながら此の事は、**兩種の直観は原理的に異なっている**という事実は何等の変化を来さない。そして吾々が今述べた如き命題にはただ兩種の直観の本質関係だけが示されているにすぎない。直観の本質的区別には、『現存』(Existenz【実存】)(此処では明らかに個別的に定在 Daseiendem / factual existent【現存在】するものの意味)と『本質』(Essenz)即ち**事実と形相**との間に於ける本質関係が照応している。斯くの如き聯関を辿つて吾々は、以上の用語に属して居り且つ今後確定的に属さしめられる概念的**本質を洞観的** *einsichtig / with insight* に把握する。斯くて、主として形相(イデー)、本質等の概念に附随している**幾分神秘的な思想はすべて綺麗に除去されて了うのである**。

(一) 此の簡單にして且つ全く基本的な洞察を確認する事が、現代の心理学者達には如何に困難であるかは、例えば、丁度今入手した著書《Realisierung》(I (1912), S. 127. に於いてオスワルト・キュルペ Oswald Külpe が、範疇的直観に関する私の説に対して加えている奇妙な駁論が適例である。私は此の優れた学者に依つて誤解された事を遺憾に思う。けれども、本来の論定の**意味**が跡形なしにされる程完膚なく誤解されている場合には、批判的答弁は不可能であろう。

i 「視向擬向」Blickwendung (英 turning one's regard to) 「目指しを向け変える」。「擬向」Wendung は turn のこと。

(二)『論、研、』に於いては私は、イデー化という言葉は原能的能与の本質諦視という意味に、加之多くの場合には十全なるその意味に使用する習慣であつた。けれども此の言葉には、端的且つ直接に本質に向つて之を把握し措定する意識の各々——之は『不明なる』随つて最早直観的ならぬ意識の各々をも含む——を包括する所の一層自由なる概念を与える事が明らかに必要である。

(三)『ロゴス』誌第一巻に於ける拙論三一五頁参照。

四、本質諦視と想像、本質認識はすべての事実認識から独立

形相即ち**純粹本質**は経験所与、例えば知覚、回想等々の経験所与に於いて、直覚的に類例化し得る。が同様に又**単なる想像所与**に於いても類例化し得る。それ故吾々は、本質を自体に又**原的に**把握するためには、それに対応する経験的直観から出発し得る。と**同様に又経験的ならぬ、定在把握的ならぬ、寧ろ『単に想像的なる』直観からも出発し得る。**

吾々が自由想像に依つて任意の空間形態、旋律、社会上の出来事等々を創り出し、或は経験、適意liking乃至不適意、意欲等々の作用を仮構phantasyすると、それに於いて吾々は『イデー化』に依つて種々なる純粹本質を——例えばそれが空間的形態、旋律、社会上の出来事等々**一般の本質**にせよ、或は当該特殊類型の形態、旋律等々の本質にせよ——原的に諦視し時には加之十全にさえ諦視する事が出来る。此の場合、斯くの如きものが何時か顕在の経験に於いて与えられたか否かという事は、どうでも良い事である。心理学上からは如何なる奇蹟に依るにせよ兎に角自由仮構というものが、原理的に新

しき種類の与件 Data、例えば経験に於いては嘗て現れた事なく又何時も現れぬであろう如き感性的与件を想像せしめるとしても、此の事はその想像された与件に応ずる本質が——想像された与件は決して現実的与件ではないにも拘らず——原的に与えられるという点には何等の変化をも及ぼさないであろう。

以上と本質的に聯関する事であるが、**本質を指定して先ず第一にそれを直観的に把握するという事は何等か或る個体的定在の指定を少しも含んでいないのであり、又純粹なる本質真理は事実**に就いての主張を少しも含んで居らず、随つて**本質真理のみからしては毫末の事実真理も導出され得ないのである**。すべての事実思惟、事実供述は（此の事実思惟の**確實性**の本質が経験を必然的に要求する限り）自身の基礎づけのためには経験を必要とする。それと同様に純粹本質に就いての思惟——純一なる、即ち事実と本質とを結合せざる思惟——は、**基礎づけ** *be gründende / legitimating* の土台 *Unterlagen / foundation* 【根拠】として本質諦視を必要とする。

五、本質に就いての判断と形相的普遍妥当性を有つ判断

ところで今度は次の事に注意せねばならぬ。本質及び本質態に就いての *über / about* 判断 *Urteilen / Judging* と形相的判断一般とは、吾々は後者の概念はこれを広く解さねばならぬ故に、両者同一でない。即ち**形相的認識はそのすべての命題に於いて本質を『被客観化対象** *Gegenständen-wörter / objects about which*』【どうであるかとしての対象】とするわけでない。而して之と密接に聯関している事であるが、経

驗即ち存在把握に類比をなす意識（即ち、經驗に於いて個体的なるものが把握されると同様にそれに於いては本質が**對象的**に把握される意識）としての——上來解した如き意味の——本質直観は、如何なる**定在**指定 *positing of factual existence* をも排除して本質を自身の裡に蔵する意識としてただ一のものではない。本質は、それが『被客観化対象』とならぬのに、直覺的に意識される事も出来るし、又或る仕方では、把握される事も出来る。

吾々は判断から出発しよう。更に精しく言えば、本質に**就いての判断**と、**絶対普遍的な仕方**で且つ個体的なるものの指定を交えずに、而も**個体的なるものに就いてではあるが純粹に本質の単独体として「一般」という様態に於いて判断する判断**と、此の二つの判断の間の區別を論ずるのである。例えば吾々は純粹幾何学に於いては通例直線、角、三角形、円錐曲線等々という形相に就いて判断するのではなく、直線や角一般或は『そのもの』*as solche* に就いて「そうしたものを「そうしたものとして」、個体的三角形一般に就いて、円錐曲線一般に就いて、判断するのである。斯くの如き全称判断は**本質普遍性**という性質を、即ち『純粹』なる、或は又所謂『**厳密**』なる、**絶対『無制約的』なる普遍性**という性質を、有つてゐるのである。

議論を簡単にするため吾々は、今問題となつてゐるのは、事実如何なる他の判断も間接的基礎づけに於いて還歸する『公理』即ち明証的判断に就いてである、という事にしておこう。斯くの如き判断は——それが、此処に前提されている如く、既述の仕方で個体的単独体に就いて判断するものなる限

り——それをノエシス的に基礎づけるため、換言すればそれを洞観的たらしめるためには、或る一種の本質諦視を必要とする。之は（**変様** *modifiziertem / modified* された意味で）本質把握とも呼び得られよう。そして此の本質諦視も亦、対象化的本質直観と同様、本質の個体的単独体を分明にして居るという事に基づいているが、併し右単独体の経験には基づいていない。此の本質諦視にとつても亦単なる想像表象乃至は寧ろ想像分明性で十分である。分明なるものはそのものとして意識されている。それは『現出 *erscheint / appears*』している。けれども定在 *daseiend / factually existent* するものとして把握されてはいない。吾々が例えば本質普遍性（『無制約的』にして『純粹』なる普遍性）に於いて『色一般は音一般と異なる』と判断する場合の如きは、今述べた事を確証する例である。本質『色』の単独者や本質『音』の単独者は直覺的に『表象 *vorstellung / objective*』される。而もその単独者の属する本質の単独者として表象される。其処には（定在措定を伴わぬ）想像直観と本質直観とが同時に或る仕方で存する。但し後者本質直観は本質を**対象**とする直観としてではない。所が、此の事情の本性には、これに対応する客観化的観方への転向は吾々に何時でも自由であるという事、此の転向は正に本質可能性であるという事、が属している。此の変更された観方に随つて判断も亦変化するであろう。即ちその場合には判断は「本質（『類』）色は本質（類）音とは別のものである」となる。その他すべて此の例に倣う。

逆に、**本質に就いての各々の判断はその本質の単独体そのものに就いての無制約的に普遍的なる判**

i notischen ノエシスは後に詳しく論じられる。こゝでは「作用成素的に」＝「斯くあるとの内実を持ったモノとして」

断へ等值的に翻えされる事が出来る。斯くの如き仕方では、純粹なる諸本質判断（純粹に形相的なる諸判断）は、如何なる論理的形式であろうとも、相属 *zusammen / together* しているものである。それ等本質判断の共通点は、それ等は個体的なるものに就いて——正に純粹なる本質普遍性に於いて——判断する場合と雖も、何等の個体的存在をも措定しないという事である。

六、一三の基礎概念、普遍性と必然性

扱以下の諸概念は明らかに相属している。即ち形相的 *eidetic* 判断作用、形相的判断即ち形相的命題、形相的真理（即ち真なる命題）、後者の双関者としては、形相的真理の裡に成立するものとしての単に形相的事態 *Sachverhalt / predicatively formed affair-complex* そのもの、最後に前二者の双関者としては、単なる被思念性という変様された意味に於ける、即ち、存立的 *bestehend / obtain* でも或は非存立的でもあり得る所の判断されたそのものという意味に於ける、形相的事態がそれである。

形相的に普遍的なる事態の形相的特殊化及び単独化の各々は、それが然る限り、ひとつの本質必然性と呼ばれる。それ故本質普遍性と本質必然性とは双関者である。けれども、必然性と言う場合、相属的双関関係に随つて、その意味は動搖する。即ち右の事態に対応する判断も亦必然的と呼ばれるのである。併し、区別を顧慮する事、殊には本質普遍性を（普通なされる如く）それ自身に必然性なりと称せざる事が肝要である。必然性の意識、更に詳しくは、事態が形相的普遍性の特種化として意識されている判断意識は**必証的** *apodictic* 【必当然的】意識と呼ばれ、判断自身即ち命題は、それが関係さ

れている普遍的命題の**必証的**（或は又必証的・『必然的』）**帰結**と呼ばれる。普遍性、必然性、必証性の間の關係に就いて述べた諸命題は又、純粹に形相的なる領界に限らず任意の領界に対して妥当する様に一層廣義に解される事も出来る。けれども之等の諸命題は、形相的領界に限定される事に依つて、明らかにひとつの著しき又特に重要な意味を獲得する。

個体的なるもの一般に就いての**形相的判断作用**の、個体的なるものの**定在措定**に対する關係も亦極めて重要である。本質的普遍性は、定在的として措定された個体的なるもの、乃至個体的なるものの無限定的に普遍的なる領界（此の領界は定在的領界としての措定を受ける）に移される。幾何学的真理を（現実的なりとして措定されたる）自然の事例に『適用』することは皆此の例に属する。依つて、現実的なりとして措定された事態は、個体的現実態なる限りは**事実**である、が本質普遍性の単独化する限りは**形相的必然性**である。

自然法則の無制限なる普遍性を本質普遍性と混同してはならない。『すべての物体は重量がある』という命題は勿論、全自然内に於けるある一定の事物性を定在的として措定するものではない。けれども此の命題は、その意味上自然法則として、依然ひとつの定在措定を、即ち自然そのものの、時空的現実の、措定を自身に伴っているのであつて、すべての物体——**自然に於いてはすべての『現実的』物体**——は重量があるという意味である。その限り此の命題は一定の事物性を措定するものではないにも拘らず、形相的普遍的命題の有つ無制約的普遍性を有っているわけではないのである。それに反して『すべての物質的事物は延長がある』という命題は、主辞の側面で行われる定在措定が排去され

る限り、形相的妥当性を有っていて、**純粹**に形相的なる命題と解され得る。此の命題は、物質的事物の本質の中に又延長の本質の中に純粹に基礎を置いている事柄を供述し、又吾々が『無制約的』普遍妥当性として洞察し得る事柄を供述している。此の事の可能なのは、吾々は物質的事物の本質を（例えば物質的事物に就いての自由仮構 Fiktion / phantasying を基礎として）原的所与【所与性】に迄齎し、次いで此の能与意識に於いて思惟の歩みを——上の命題が明示した本質態の『洞観 Einsicht / insight』即ちその原的所与が要求する所の思惟の歩みを——遂行するに由るのである。空間に於ける**現実的なもの**が此の種の諸真理に適うという事は単なる事実ではなくして、本質法則の特殊化としてひとつの**本質必然性**である。此の場合に於いて事実とは、それに対して適用が行われる現実者そのものに過ぎないのである。

七、事実学と本質学

如何なる個体的対象に**その本質**として或る本質額 Wesensbestand / essential composition 【本質成素】が属しているのであつて、それは逆に如何なる本質にも、その本質の事實的単独化とも言い得べき可能なる諸個体が対応しているのと同様である。此の事は、個体的対象と本質との間に存する（それ自身に形相的なる）聯関に依るのであるが、此の聯関は、事実学と本質学との間に於ける右聯関に対応する相互關係を基礎づけるのである。**純粹本質学**、例えば純粹論理学、純粹数学、純粹時間論、空間論、運動論等々の如き諸学がある。之等諸学は、そのすべての思惟の歩みの上から見て、事実の措定とは

全然無関係である。同じ事を更に言い換えれば、之等諸学に於いては経験としての経験、即ち現実としての経験、定在を把握し或は措定する意識としての経験は、基礎づけの機能を担当するを得ない。之等諸学に於いて経験が働いている場合と雖も、それは経験として働いているのではない。黒板の上に図形を描く幾何学者は、その描く事に依つて、事実に定在する黒板の上に事実に定在する線を創り出す。幾何学者が物を創り出すという事と同様に、その創り出されたものを彼が経験するという事（経験する事としての経験する事）も亦、彼の幾何学的なる本質諦視及び本質思惟に対して基礎づけをなすものではない。それ故、彼がその際幻覚に陥つて居ても居なくても、又実際に描く代りに線や作図を想像界へ作るか否かも、それは問う所でない。自然科学者に於いては事情は全く異なる。彼は観察し実験する。換言すれば彼は経験的定在を確立する。即ち彼にとつては経験する事が、単なる想像に依つては決して代用され得ないと言われる所の基礎づけ作用なのである。此の故にこそ、言うまでもなく**事実学と経験学**とは等値概念なのである。然るに、現実ではなく『イデー的可能性』を、現実態 Wirklichkeitsverhalte / the predicatively formed actuality-complexes ではなく本質態 Wesensverhalte / predicatively formed eidetic affair-complexes を探究する**幾何学者**にとつては、**経験の代りに本質諦視が究極的基礎づけ作用なのである。**

以上はすべての形相的なる学に於いても言い得る。間接洞観的なる思惟に依つて、而も全く直接洞観的なる原理に随つて、所与に迄齎される所の間接的本質態は、直接的洞観に依つて把握される本質態（或は形相的公理）を基礎とする。此の故に**間接的基礎づけの歩みは何れも必証的であり、形相的**

に必然的である。それ故、純粹に形相的なる学の本質は、斯学しがくが全く形相的なる態度を執るという点に在る。即ち形相的妥当性を有つ事態——随つて直接に原的所与に迄（原的に諦視された本質に直接基礎を置くものとして）齎もたらされ得るか或は斯くの如き『公理的』なる事態から純粹推理に依つて『帰結』され得るか的事態——以外には、終始一貫して何等の事態をも認識しないという点、に在るのである。実は近代数学に至つて初めてその実現を教えられた所の**精密なる形相学の実地的理想**なるものは、右の事柄と聯関している。その理想というのは即ち、思惟の間接的進行のすべてを、体系的に固く組織されたる当該形相の諸公理の下への単なる包摂に還元して、又若し（**普遍学**^(二)という**最広義**に於ける）『形式的』乃至『純粹』論理学そのものが初めから問題とされていない限りは、此の論理学の全公理の助けを藉りて、それに依つて如何なる形相的学にも最高度の合理性を付与しようというのである。而して上述の事とは亦『**数学化**』の理想も聯関している。此の理想は、今その特質を述べた理想と同じく、認識の全額 *gesanter Erkenntnisbestand / entire stock of cognitions* 【全認識成素】が（例えば幾何学に於ける如く）純粹に演繹的なる必然性という点に於いて若干少数の公理の普遍性の外に出でない所の『精密』形相学科のすべてに對して、認識運用上の重大なる意義を有っている。今は此の点を細論すべき場所(三)でない。

（一）普遍学としての純粹論理学の概念に就いては『論、研、』第一卷、末章参照。

（二）此の点に就いては本書後述第三篇、第一章、第七節【第七〇節、触れているのは第七二節】参照。

八、事実学と本質学との依属關係 Relationships of Dependence

上來述べた所に依つて明らかなる如く、形相的なる学はその意味上、經驗的なる諸学の認識成果の**内含を悉く原理的に排斥する**。之等經驗的諸学の直接なる諸論定に現れる現實性指定は、無論すべての間接的論定を貫いている。事実からは常に事実のみが結果する。

扨一切の形相学は一切の事実学に対し原理的に非依属的であるが、他方**事実学**の方に就いてはそれと逆の事が言われる。学として**完全に発達**しながら、而も形相的認識と無關係であり得、随つて又**形式的であれ質料的であれ兎に角形相的なる諸学に対し非依属的であり得る**如き事実学は存在しない。何故ならば、**第一に經驗科学は、判断に依る間接的基礎づけを行う場合には必ず、形式的論理学の取扱う形式的原理に随つて進まざるを得ないのは自明の理であるからである**。また、一般に經驗科学は、何れの学も然るが如く対象の方へ向つてゐる故、**対象性一般の本質に属する法則に緊縛**きんばく**せられざるを得ない**。それ故經驗科学は、狭義の形式的論理学以外にも、形式的なる『**普遍学**』に属する爾余の諸学科（随つて算術、純粹解析、集合論）をも包括する所の**形式的存在学**の諸学科全体と關係して来るのである。加えるにまた**第二の理由**としては、如何なる事実も或る**質料的なる本質額** *materialen Wesensbestand / material essential composition* 【本質要素】を含んで居り、此の事実中に含まれてゐる純粹本質に属する形相的真理の各々は、与えられたる**事実的単独体**——並びに各々の**可能的単独体一般**——が緊縛されている所の或る法則を示さざるを得ぬからである。

九、領域と領域的形相学

各々の具体的なる経験の対象性は、その質料的本質の点からみて、ひとつの最高の質料的なる類即ち経験の対象の『領域 Region』に属する。そこで純粹なる領域的本質には**領域的形相学**、乃至吾々の別称し得る所に依れば、**領域的存在学**が対応する。此の場合吾々は次の事を認容する。それは、領域的本質乃至その成素たる種々なる類に基づいて非常に豊富にして且つ多岐なる認識がある、それ故領域の個々の類成素に依じて存在学の諸学科のひとつ或は全体に就いて語るのが右認識の体系的發展一般の上から云つて有益である、という事である。此の予想が事実非常に広い範圍に於いて実現されているという事は、吾々は十分に確信し得られようと思う。それ故一領域の範圍に属する経験科学は、形式的存在学の諸学科へと同様に、領域的存在学の諸学科へも本質的に關係されているであらう。吾々は此の事を亦次の様に言い表し得る。即ち、**各々の事実学（経験科学）は形相的諸存在学の中に本質的な理論的基底を有している**、と。何故ならば、純粹にして且つ無制約的に妥当なる仕方領域の可能的対象のすべてに關係する所の豊富なる量の認識は——此の可能的対象の一部は対象性一般の空虚なる形式に属し、一部は言わばすべての領域的对象の必然的な質料的形式を示す所の領域の形相に属している限り——経験的事実の研究に対し無意味であり得ないという事は（前述の認容 assumption が正しいとすれば）全く自明であるからである。

斯くの如くにして例えば自然科学のすべての学科に対しては——事實的自然には、純粹に把握し得る i 「領域」の意味としてこの文が引用される。領域とは、経験の対象を質料的本質から見た最高の質料的類を言う。

る形相、即ち無限に豊富なる本質態を自身の裡に含む**自然一般**なる『本質』が対応している限り——**物的自然一般**に就いての**形相的学（自然の存在学）**が対応するのである。吾々が、自然に就いての**完全なる合理化せられた経験科学**という**観念**——即ちその学に含まれる特殊なるものはすべて最普遍的にして且つ最原理的なる自身の基礎に還元されている程に迄理論化の点で進歩している所の経験科学という**観念**——を考えてみると、**此の観念の実現は此の観念に対応する形相学的諸学の完成に本質的に依属している**という事が明らかである。それ故に又、すべての学一般に同様な仕方で関係している**形式学**の外に、**自然の本質**を、随つて又、**自然対象性**そのもののすべての**本質性質**をも**理性的な純粹**さに於いて、即ち正に**形相的に**、**分解する所の質料的存在学の諸学科の完成に特に依属している**という事が明らかである。而して此の事は勿論如何なる任意の領域に就いても言い得られる。

認識運用上から言つても亦予め次の事が期待さるべきである。即ち、**経験科学**が『**理性的**』段階即ち『**精密**』にして**法則学的**なる学の段階に近づけば近づく程、随つて又完成せる**形相学科**を基礎となしその**形相学**を自己の基礎づけに用いる程度が増せば増す程、その**経験科学**は**認識運用の働きの範囲と力と**を愈々増大するであろうという事である。

此の事は**理性的諸自然科学**即ち**物理学的諸自然科学**の発達が確証している。古代（而して**本質的にプラトン学派**）に於いて既に**純粹形相学**として高度に完成されていた幾何学が、**物理学的研究法**に對し近世一挙に且つ大仕掛に利用されるに至つたのであるが、右自然科学の劃期的発達が近世に於いて始まつたのは言う迄もなく此の**事実**に依るのである。**物質的な物の本質**は *res extensa*（延長ある物）

たる事であり、それ故幾何学は斯くの如き物性の本質契機即ち空間形式に關係せる存在学の学科である、という事を近世は明らかにした。更に進んで亦近世は物の普遍的（吾々の用語では領域的）本質の範圍は更に遙かに広く迄及ぶという事も明らかにした。その証拠には、前述の發達は同時に、幾何学と同列に置かれ且つ經驗的なものの合理化なる幾何学同様の機能を任とする新しき学科の一列を完成するという方面をも辿つたのである。形式的及び質料的なる数学的諸学の壯麗な開花は此の傾向から生まれてゐる。之等諸学は強烈なる熱心さを以て、純粹に『理性的』なる学として（吾々の意味では**形相的存在学**として）完成され、或は新しく形成された。但し（近世の初期及びそれ以後長く）それらの学自身のためにではなく經驗的な学のために形成されたのである。かくてこれ等經驗的諸学も亦、讚嘆の的たる理論物理学と並行的に發達して、所期の成果を十分に収めたのであつた。

一〇、領域と範疇、分析的領域とそれの諸範疇

吾々が任意のひとつの形相学、例えば自然の存在学の中へ入つてみると、吾々は対象としての本質へ向つてゐるのではなく、今の例で言えば自然という領域に下屬する本質の対象へ向つてゐるのだという事を覚る。（これは勿論正常のことである。）がその場合吾々の看取する所に依れば、『**対象**』といふのは、例えば『物』、『特性』、『關係』、『事態』、『集合』、『順序』等々の如き多種なる、併し互いに相屬する形態を表す名辭なのである。勿論之等形態は互いに同一平面上に在るものではない。それは夫々振り返つて、言わば**原対象性** *Urgegenständlichkeit / primordial objectivity* なる上位を占める一種の対象

性を遡示するのであつて、此の原対象性から見れば爾他すべての対象性は言わばその単なる転化と見えるのである。今吾々の例で言へば、無論**事物自身**なるものが事物的特性、事物的關係等々に對し此の種の上位を占めるのである。けれども正に此の事こそかの形式的規法 *Verfassung / structure* の一部なのであつて、その**闡明**^{せんめい}がなければ、対象に就いての議論も対象領域に就いての議論も困乱【混乱】を脱し得ないであらう。吾々は以下此の闡明を行うのであるが、その闡明に由つて、領域の概念に關係ある重要な**範疇**という概念が自ら生じて来るであらう。

範疇という言葉は、一面『**領域の範疇**』と複合語をなせば恰かも当該領域例えば物的自然という領域を指示する。が又他面に於いては、その時々にな定なる**質料的領域**をば**領域一般なる形式**——換言すれば**対象一般なる形式的本質**及びこれに属する『**形式的範疇**』——に關係せしめる。

最初に重要な注意を加えておこう。対象一般なる形式的本質と領域的本質とが互いに同様な役割を演ずる如く見える限り、初め一見した所では形式的存在学は質料存在学と同一線上に在る様に思われる。随つて人々は今迄の様に單に領域と言う代りに寧ろ質料的領域と言ひ、此の領域に並べて今度『**形式的領域**』なるものを置きたくなるであらう。吾々が若し此の言ひ表し方を採用するにしても、若干の用心をしなければならぬ。一方には**質料的本質**が在つて、之は或る意味に於いて『**本来的**』**本質**である。併し他方には、形相的ではあるが質料的本質とは根本的に異なるものがある。即ちそれは、**成程**^{なるほど}ひとつの本質ではあるが併し全然『**空虚**』なる本質である所の**單なる本質形式**である。即ち又空

i 「を遡示する」英訳では“point back to”と。渡辺訳「対象性に逆に関係づけられていて」

虚形式という仕方であらゆる可能なる本質に適合し、自身の形式的普遍性に依りあらゆる普遍性を、最高の質料的普遍性をも、自身の下に下属せしめ、且つ自己に属する形式的真理に依り之等すべての普遍性に法則を指定する所の本質である。そうするとやはり、所謂『形式的領域』なるものは実は質料的領域（単に領域と云われるもの）と同列のものではないのである。即ち形式的領域は本来は領域でなく、領域一般の空虚なる形式なのである。それはすべての領域を——それ等領域のすべての実質的な特殊化本質を含めて——自己と同列に置くものではなく、却つて（単に形式的にはあるが）自己の下に置くものである。扱斯く質料的なるものが形式的なるものに下属するという事は、次の事に於いて示される。それは、形式的存在学は同時にあらゆる可能なる存在学一般（即ちあらゆる『本来的』且つ『質料的』なる存在学一般）の形式を自身の裡に蔵して居り、質料的存在学に対しそれ等すべてに共通なる形式的規法 *structure* を指定するという事である、——此の規法の中には、今吾々が領域と範疇との区別の点で研究せねばならぬ所の規法も亦含まれている。

吾々は形式的存在学（常に普遍学に迄十分拡張された純粹論理学として）から出発しよう。すると此の形式的存在学は、吾々の知る如く、対象一般に関する形相的学である。対象とは此の学の意味に於いてはあらゆるすべてのものを謂う。そして普遍学の多くの学科に分配される無限に多様な真理は即ち斯くの如き対象に關して確立され得る。けれども之等の真理は悉く、純粹論理学的諸学科に於いて『公理』の働きをなす少数の直接乃至『基礎』真理に帰着する。そこで吾々はそれ等の公理に現れる純粹論理的基礎概念を定義して論理的範疇乃至対象一般なる論理的領域の範疇とする。茲に所謂

基礎概念とは即ち、対象一般の論理的本質が公理の全体系内に於いて由つて以て規定される概念の事である。換言すれば、或る対象そのもの即ち何か或るもの——それが一般に或るものであり得るという限りに於いて——の無制限に必然的且つ規整的なる諸規定を表す概念の事である。吾々の絶対精密に限定された意味に於ける純粹論理的なるものは『**総合的なもの**』に対する『**分析的なるもの**』⁽¹⁾という哲学的に唯一重要な（而して確かに基礎的に重要な）概念を規定するものであるから、吾々は右の範疇を実に**分析的範疇**とも呼ぶのである。

論理的範疇の例としてはそれ故、特性、相対的性質、事態、関係、同一性、相等性、集合（集積）、集合数、全体と部分、類と種、等々の如き諸概念がある。が又『**意義範疇**』、即ち種々なる種類の命題、命題分節肢及び命題形式という命題 Satz(Apophansis) / proposition の本質に属する諸基礎概念も亦論理的範疇に属する。かく言われるのは、吾々の定義上、『対象一般』と『意義一般』とを互いに結合し、而も純粹なる意義真理が純粹なる対象真理に翻えされる様に結合する所の本質真理を顧慮しての事である。恰かも此の故に『**命題学的論理学**』は、仮令専ら意義に就いて供述しているにしても、猶お、十分に包括的な意味に於ける形式的論理学に属するのである。にも拘らず吾々は意義範疇を独自の群としてそれだけ分離し、之に對し他の範疇を、深い意味に於ける**形式的なる対象的範疇**として、對立せしめなければならない⁽²⁾。

なお補記すべき事は、吾々は範疇を一方に於いては意義という意味での概念と解し得るが、他方に

i 「規整的」 konstitutiven (英 constituent) 「規整：規律を立てて整える」と好んで訳されている。「構成的」「構成する」

於いては、而して更に適當には、その意義に於いて表出される形式的本質と解する事も出来る事である。例えば事態 Sachverhalt / predicatively formed affair-complex、多、等々の如き『範疇』は、後者の意味に於いて、事態一般、多一般等々の如き形式的形相を意味する。如上の曖昧が危険なのはただ、斯くの如き場合普く区別せねばならぬもの——即ち『意義』と意義に依って表出 Ausdruck / expression 【『表現』】され得るもの、更に意義と意義せられたる対象性——を截然と区別する事を知らぬ限りに於いてだけである。術語としては吾々は、**範疇的概念**（意義としての）と、**範疇の本質**とを明白に区別することが出来るのである。

(一)『論、研』第二卷、第三研究、第一——一二節参照。

(二)論理的範疇を分けて意義範疇と形式存在学的範疇とにする事に就いては『論、研』第一卷、第六七節参照。特に全体と部分との二範疇に就いては第二卷の第三研究全体に於いて論じてある。——歴史的の理由で不都合な存在学 (Ontologie) という言葉を私は『論、研』当時は未だ採用する勇氣がなかった。即ち私はその種の研究を（第一版二二三頁）『**対象そのものの先天的理論**』 (apriorische Theorie der Gegenstände als solcher) の一部と呼んでいた。アレクシウス・フォン・マイノングは之を縮めて『**対象論**』 (Gegenstandstheorie) なる言葉を作ったのである。この言葉に対して、今では私は時勢の変化に鑑み、存在学なる古い言葉を再び主張する方が却って正しいと考えている。

一、文章法的対象性と究竟的基体、文章法的範疇

意義の形式論の内部に於いて『文章法的 Syntactical 【構文論的】形式』と『文章法的基体』乃至『材料』

との（『純粹文法学的』なる）區別に反映する所の、対象性一般の範圍に於ける重要な區別を今度は必要とする。此の區別に依つて、形式存在学的範疇が**文章法的範疇**と**基体範疇** Substratkategorien とに分れるという事がわかる。以下此の区分を更に詳しく討究しようと思う。

文章法の対象性なるものを吾々は、他の対象性から『**文章法的形式**』に依つて導来されたる対象性と解する。此の文章法的形式に対応する範疇を吾々は**文章法的範疇**と名づける。之に属するものとしては例えば、事態、関係、性質、一、多、集合数、順序、序数等々の如き諸範疇がある。吾々は茲に現れている本質状態を次の如く記述することが出来る。即ち、如何なる対象と雖も、それが表明され得、他の対象へ関係され得、約言すれば論理的に規定され得る限りは、種々なる文章法的形式を採る。又規定的思想の双関者としては、より高次の対象が規整【構成】される。即ち例えば、性質と性質的に規定されたる対象、何等か或る対象間の関係、一の多、順序の項、序数規定の保持者としての対象等々の如きが規整される。思维が述定的思维なる場合には、表出、及びそれに属する文章法的意思成体——即ち文章法の対象性をその有つ肢体 Gliederungen / articulations【分節】及び形式のすべてからみて、精確に対応的意義文脈の中に反映する所の、文章法的意思成体 Bedeutungsgebilde / signification-formations——が漸次に生ずる。すべて此の『**範疇的对象性**』⁽¹⁾は、対象性一般と同じく、再び又範疇的成体の基体としての働きをなし、以下此の事を繰り返す。逆に斯くの如き成体 Gebilde は悉く明らかに**究竟的 letzte / Ultimate 基体**を、即ち最初層乃至最下層の対象を遡示する。随つて、**最早文章法的・範疇的成体**

i 「対象を遡示する。」 zurück (英. refers back to)、「対象へと逆に関係づけられている。」

ならぬ対象——即ち思惟機能（賓辭づける事、否定的に賓辭づける事、關係づける事、結合する事、算える事等々）の単なる双関者なるかの存在学的形式をば最早毫も自身の裡に含まぬ所の対象——を適示するのである。以上に依つて、対象性一般なる形式的領域は、分れて究竟的基体と文章法的対象性との二つとなる。後者を名づけて吾々は、対応的基体——此の基体にはまた、後直ちに吾々の知るであらう如く、すべての『個体』も属する——からの**文章法的被導出者**と呼ぶ。吾々が個体的特性、個体的關係等々に就いて云云する場合に此の被導出対象が個体的と呼ばれるのは、勿論、それが導出せられて来た基体が個体的なるが故である。

なお次の事を注意して置こう。文章法的形式なき究竟的基体へは、意義の形式論の側からも亦到達出来る。何故ならば、如何なる文章、如何なる可能なる文章の句もその文章法的形式の基体として所謂『名辭』を含んでいるからである。此の名辭が名辭であり得るのは、単に相対的なる意味に於いてである。何となれば名辭は自身再び形式（例えば複數形式、添辭等々）を含み得るからである。併し孰れの場合にも吾々は、自身の裡に最早文章法的形式を毫も含まね所の**究竟名辭**、究竟基体に、而も必然的に、歸着するのである。^(三)

(一)『論、研、』第二卷、第六研究、第二篇、特に第四六—四七節参照。

(二)意義の形式論——即ち『先天的文法学』の此の基礎的部分——にとつて甚だ重要な（『文章法的形式』及び『文章法的材料』の）理論の詳述は、純粹論理學に關する私の多年に亙る講義を公刊する際に報告しよう。『純粹』文法学と意義の形式論の一般的課題とに於いては『論、研、』第二卷、第四研究参照。

一二、類と種 *Gattung und Art / Genus and Species*

扱今度は、本質の全領域に属する新しい一群の範疇的區別を行う必要がある。本質は、実質的本質たると空虚なる（随つて純粹論理的なる）本質たるとを問わず、悉く本質の段階的系列の中へ、即ち**類性と種性**との段階系列の中へ配列される。此の段階系列には必然的に、二つの決して一致しない限界が属している。下降すれば吾々は**最低の種差**——換言すれば**形相的個別体**に到達し、上昇すれば、**種本質及び類本質**を通じて**最高類**に到達する。形相的個別体とは、自身の上には自身の属する類として『より普遍的』なる本質を必然的に有つてはいるが、併し自身の下には最早、それに対しては自らが種（直上の種或は間接的なる、より高次の類）である如き特殊化を有たぬ所の本質である。同様にして、自身の上に最早何等の類をも有たぬ類は最高類である。

此の意味に於いて意義の純粹論理的領域に於いては、『意義一般』が最高類であり、各々の一定の文章形式、各々の一定の文章肢形式は形相的個別体であり、文章一般は両者を媒介する類である。それと丁度同様に集合数一般は最高類である。二、三等々は集合数の最低差乃至形相的個別体である。実質的領域に於いては、例えば物一般、感性的性質、空間形態、体験一般等の如きが最高類であり、一定の物、一定の感性的性質、空間形態、体験そのもの等に属する本質額 *Wesensbestände / eidetic compositions* 【本質要素】は形相的にして、而も実質的な個別体である。

類と種とを以て示される**之等**^{これら}の本質関係（部類関係即ち集合関係にあらず）には、特殊的本質の中

により普遍的なる本質が——形相的直覺に依つてその特質を把握せらるべき或る一定の意味に於いて——『直接或は間接に**含まれ**』ている、という事が属している。此の故にこそ多くの学者は、形相的特殊体に対する形相的種、類、の關係を『全体』に対する『部分』の關係に算入しているのである。全体と部分とはその場合正に、形相的なる種關係がそのひとつの特殊相である所の、『含むもの』と『含まれるもの』という最広概念を、有つのである。それ故、形相的個別体は自身の上位に在る全普遍を内含し——此の全普遍の方も亦、より高次のものは常により低次のものの中に在るといふ風に、階段的に『互いに他の中に存して』いる——のである。

一三、類化と形式化 Generalisierung und Formalisierung

類化 generalization 【一般化】と種化 specialization との關係は、**実質的なもの**の**純粹論理的に形式的な**るものへの**普遍化**と、逆に論理的に形式的なるものの**実質化**との、右とは本質的に別種なる關係から峻別せられねばならぬ。換言すれば、類化は、例えば数学上の解析に於いて甚だ重要な役目を演じている如き**形式化**とは全然別のものであり、種化は、**形式脱離**、論理的・数学的空虚形式乃至形式的真理の『填充 Ausfüllung / filling out』【内容あるもので満たすこと】とは全然別ものである。

以上の故に、或る**本質が純粹論理的**の本質の形式的普遍性の下に立つという事は、或る本質がその属する一層高次の**本質類**の下に立つという事と混同されてはならない。で、例えば三角形なる本質は空間形態なる最高類に下屬し、赤なる本質は感性的性質なる最高類に下屬する。他方に於いて赤乃至

三角形は（その他之等と同質の本質並びに異質の本質のすべても）『本質』なる範疇的名称に下属するのであるが、此の範疇的名辞は右本質のすべてに對して決して本質類なる性格を有つものでない、というよりも寧ろ上の本質の何れに就いてもかかる性格を有つものでない。『本質』を實質の本質の類と見做す事は悖理^{ぼつり}であつて、それは恰も、対象一般（空虚なる或るもの）を各種の対象に對する類とし、そして次に、勿論無雜作に、唯一最高の類即ちすべての類の類とするの誤解と同様である。そうでなく吾々は、すべての形式存在學的範疇と呼んで、『形式存在學的範疇一般』なる本質を最高類とする形相的個別体なりとせねばならぬであらう。

同様にして、各々の一定推理、例えば物理学に於いて用いられる或る一定の推理は或る一定の純粹論理的なる推理形式の単独化せるものであり、各々の一定の物理学上の命題は或る命題形式の単独化せるものである、等々という事は明らかである。けれども、純粹形式は實質的なる命題乃至推理の類であるのではなく、自身最低差にすぎない。即ち他のすべての同様の類と等しく『意義一般』を以て自己の絶対最高類とする所の命題、推理等の純粹論理的なる類の最低差にすぎない。それ故論理的なる空虚形式——普遍學に於いては空虚形式の外には何ものもない——の填充は、究竟的種差化に迄到る眞の種化に比しては全然異なる『操作』である。此の事はすべての場合に確言出来る。例えば空間から『ユークリッド複素体』へ移るといふ事は類化ではなくしてひとつの『形式的』普遍化である。

此の根本的なる區別を確証するには、すべての此の種の場合に於ける如く、本質直覺 *Wesensintuition* に迄立ち戻らねばならぬ。此の本質直覺が直ちに吾々に教える所に依れば、論理的なる形式本質（例

えば範疇）は、普遍的赤が種々なる色調の赤の中に、或は『色』が赤乃至青の中に存している如くに、実質的な単独体の中に『存している』のではなく、又普通の狭い意味での部分関係と十分に共通点を有たせれば「**含まれている**」という言葉を使つても差し聞えない様な本来の意味に於いて、実質的な単独体の中に『其の中に』在るのでは決してないのである。

個体的なるもの、一般には「此処に在る此のもの」の、本質の下への**包摂**——これは最低差に関するか或は類に関するかに従つて種々異なる性格を有つ——も亦、本質の、その一層高次の種乃至類の下への**従属**と混同すべきでない事は、別に詳論を俟たずして指示出来る。

同様に又、特に全称判断に於ける本質の機能に関する所の、種々意味の変る**外延**という言葉に就いて——この言葉は勿論上に論じた區別に伴つて分化せざるを得ない——単に指示してだけ置きたい。最低差ならぬ本質は悉く、**形相的外延**を、諸特殊体の外延を、而して最後には如何なる場合にも、形相的個別体の外延を有っている。他方形式的本質は悉く、その形式的乃至『**数学的**』**外延**を有っている。更に又一般に如何なる本質も**個体的**単独体の外延を、即ち形相的・普遍的思惟に依つて関係し得る可能なる諸々の特殊体のイデー的な総体を有っている。**経験的外延**という場合には意味が更に限定される。即ち**純粹**普遍性を棄てる定在指定が織り込まれるため、**定在**の領界に制限されるのである。以上の事は勿論、すべて本質から移して、意義としての『概念』に就いても言われる事である。

一四、基体範疇、基体本質とトデ・テイ τόδε τι【いいにあるこのもの】

吾々は更に進んで、一方に於いては『完充的 *vollen / full*』、『実質的』なる基体、及びそれに対応して『完充的』、『実質的』なる文章法的対象性と、他方に於いては**空虚基体**、並びに又それらから形成された文章法的対象性、即ち空虚なる或るものから転化せるものとの、此の両者の間の区別に注意しよう。後者の部分は決して自身空虚なる、或は貧しきものであるのではない。即ちそれは、普遍学としての論理学の所有に属する事態——この事態の築かれる基礎なる範疇的対象性のすべてを含めて——であると規定される。それ故、此の部類に属するのは、何等かの三段論法の或は算術上の公理乃至定理が陳述する事態の各々、即ち各々の推理形式、各々の算術数、各々の数成体、純粹解析の各函数、純粹解析に於いて十分に定義されたユークリッド複素体乃至非ユークリッド複素体の各々等である。

扱実質的な種類の対象性を採るに、吾々はすべての文章法的形成の核としての**究竟の実質的基体**に到達する。此の核に属するのは、『**実質的な究竟本質**』と、『**此处に在る此のもの**——*Dies da / This here*!』乃至純粹にして文章法的形式なき個体的単独体との、二つの選言的な主要名称に配分される所の**基体範疇**がそれである。*Individuum*（個体、不可分なるもの）という言葉は先ず第一に思付く用語であるが、今の場合には不適當である。何故ならば、此の言葉が随伴的に表出する所の、不可分性なるものこそ、それが如何に規定されるにしても、正に右の概念の中に取り入れてはならぬのであって、*Individuum*という特別にして全く必要欠くべからざる概念のために保留して置くべきものであるからである。それ故吾々は、斯くの如き意味を、尠くとも語義上伴わぬ所のアリストテレスの所謂トデ・テイ〔此处に在る此のもの〕という語を踏襲しようと思う。

吾々は上來形式なき究竟的本質と「此処に在る此のもの」とを対立せしめた。が今度は吾々は、此の両者の間に成立している本質聯関を確証せねばならない。即ち如何なる「此処に在る此のもの」も**その実質的性質**——「今示した意味に於いて無形式なる基体本質」という性格を有する**実質的本質**——を、有つているという点で両者の間に成立している所の**本質聯関**を確証せねばならない。

一五、独立的対象と非独立的対象、具体者と個体

吾々はなおひとつの更に進んだ基礎的區別を、即ち**独立的対象と非独立的対象**との間の區別を必要とする。例えば範疇的形式は、それが形式である基体を必然的に遡示 *zurückweist / refers back to* する【基体逆に関係づけられる】限り、非独立的である。基体と形式とは互いに他に頼つて居り、『相互なく』しては思惟され得ない本質である。それ故此の最も広い意味に於いては、純粹論理的形式、例えばすべての対象質料に対しての対象なる範疇的形式、又はすべてこの一定本質に対しての本質なる範疇等々は非独立的である。斯くの如き非独立性は措いて、吾々は非独立性乃至独立性という意味深い概念を、本来『内容的』なる諸聯関に、更に一層本来的なる意味に於いて『**含まれている**』、**ひとつになつて**いる、又時には**結びつけられて**いるという諸關係に、關係させて見ようと思う。

茲で吾々に特に興味のあるのは、究竟的基体に於ける、及び、更に狭く言えば、実質的基体本質に於ける事情である。此の実質的基体本質に対しては二つの場合が可能である。即ち、此の実質的基体本質は**一つの本質**という統一を或る他の本質と共同して基礎づけるか、或は然らざるか、の二つであ

る。第一の場合には、時に一方的なる或は相互的な非独立性という更に詳しく記述すべき関係が起る。そして又、合一した本質の下に属する形相的にして且つ個体的なる単独体に就いて言えば、一方の本質に属する単独体は、他方の本質に対し尠くとも類の共通性だけは有っている所の本質に依つて規定されなくては存在し得ないという、必証的に必然的な帰結が生ずるのである。⁽¹⁾ 例えば感性的性質は何等かの差ある拡がりを必然的に頼りとし、拡がりの方も亦必然的に、それと合一し且つそれを『蔽う』ている所の性質を有する拡がりである。例えば強度という範疇の『亢進 Steigerung / enhancement』の契機は或る性質的内容に内在するものとしてのみ可能である。そして此の類の内容も亦何等かの亢進度なしには考え得られない。或る一定類の体験としての現出は、『現出するものそのもの』の現出としてでなければ不可能であり、その逆も亦不可能である。等々。

扱上述の事からして、個体 *individuum*、具体者 *concretum*【具体物】及び抽象者 *abstractum* 等という形式的・範疇的概念の重要な諸規定が生じて来る。非独立的本質は**抽象者**と呼ばれ、絶対独立の本質は**具体者**と呼ばれる。此処に在る此のもの——その実質的本質は具体者である——は**個体**と呼ばれる。類化の『操作』を、論理的『転化 *Abwandlung / variation*【導出・転成】』なる今や拡張されたる概念の下に入れて解するならば、吾々は「個体は純粹論理的に要求せられたる原対象『*Gegenstand*』、即ちすべての論理的転化【導出物】が遡示する所の論理的絶対者である」と言うことが出来る。

種と類（之等両語は普通最低差を含まない）とは原理的に非独立であるから、具体者は言う迄も

i das logisch Absolute, auf das alle logischen Abwandlungen zurückweisen. 絶対者に導出物は逆に関係づけられている。

なく形相的個体である。それ故**形相的単独体**は分れて**抽象的**なるものと**具体的**なるものとなる。

同一類に属する二つの形相的単独体は一つの**本質の統一**中に結合されている事は出来ない、或は又換言すれば、一つの類の諸最低差は相互に『相容れ得ない』、という形式存在学的法則があるが、此の法則を顧慮する事に依つて、一つの具体者の中に選言的に含まれている形相的単独体は必然的に『異質的』なのである。それ故具体者に属する単独体は、種差として見れば、悉く種及び類の別個体系へ到達する。随つて又別個の最高類へ到達する。例えばひとつの現象的事物の統一に於いて、一定の形態は最高類たる空間形態一般へ到達し、一定の色は視覚的性質一般へ到達する。然るに又具体者に於ける最低差は、選言的でなく抱合的でもあり得る。例えば、物理学の特性は空間的諸規定を前提し且つ自らの裡に含んでいる如きである。此の場合には最高類も亦選言的でない。

更に進んで類は、特質的にして且つ基礎的な仕方に分れて、具体者を下屬せしめている類と、抽象者を下屬せしめている類とになる。形容詞になるため曖昧であるにも拘らず、便宜上吾々は**具体的類**、**抽象的類**という名称を使う。何故曖昧かと云うと、具体的なる類そのものをもとの意味での具体者と解する等とは何人かと思いつき得ないのだからである。併し精確に言う必要がある場合には、具体者乃至抽象者の類という煩雑な言葉を使用せざるを得ない。具体的類の例は、**實在的事物**、**視覚的現象**（感性的に充實されて現出している**視覚的形態**）、**体験**等々である。それに反して**空間形態**、**視覚的性質**等々は**抽象的類**の例である。

(一) 詳細なる分析は『論、研』第二卷、第三研究、特に新版（一九一三年）の些か改訂を施した叙述、参照。

一六、實質的 sachhaltigen 領域に於ける領域と範疇、先天綜合認識 Synthetische Erkenntnisse a priori

個体及び具体者という概念に依つて、**領域**という知識學的基礎概念も亦嚴密に『分析的』に定義される。領域は**具体者に属する最高の類統一の總体**に他ならない。随つて領域は具体者内部に於ける最低差に属する最高諸類の本質統一的結合に他ならない。領域の形相的外延は、右の類の種差を具體的に統一せる複合体のイデーの總体を包括し、〔領域の〕個体的外延は、斯くの如き具體的本質の可能的個体のイデーの總体を包括する。

領域的本質の各々は『綜合的』本質真理を規定する。換言すれば、此の類本質としての**領域的本質に基礎を置いて形式存在學的真理の單なる特殊化ではない所の本質真理**を規定するのである。領域の概念とその概念の領域的分種とは、それ故、上の如き綜合的真理に於いて自由に変異する事は出来ない。即ち、關係的なる規定名辭を無規定的なものを以て置き代える事に依つて形式的論理學の法則が生ずるという事は、すべての『分析的』必然性にあつてはそれ特有の仕方で見れるが、右の綜合的真理に於いては不可能なのである。領域的本質に基礎を置く綜合的真理の總体は領域的存在學の内容をなす。その綜合的真理の中の**基礎真理即ち領域的公理**の總体は、**領域的範疇の總体**を限界し——而して吾々に**定義**してくれる。之等の概念は概念一般の如く單に純粹論理的範疇の特殊化を表出するに過ぎぬのではなく、又次の如き特異性を有っている。即ち、これ等の概念は、領域的本質に**固有的**に属するものを領域的公理に依つて表出する、或は該領域の**固体的対象**に『**先天的**』且つ『**綜合的**』

に帰属すべきものを形相的普遍性に於いて表出するという事である。斯くの如き（純論理的ならぬ）諸概念を、与えられたる個体へ適用するという事は、必証的に又無制約的に必然的な適用であり、なおその上に領域の（総合的な）諸公理に依つて規則づけられて居るのである。

それ故、若しカントの理性批判との類似を——根本見解上の著しい差異あるにも拘らず（但しその差異は内面的親近を許さぬものではない）——固持したいと思ふならば、人は**先天的綜合認識を領域の公理**という意味に解すべきであろう。そうすれば此の先天綜合認識の領域と同数の還元不可能なる部類があることになるであろう。『**綜合的基礎概念**』即ち**範疇**は領域の基礎概念（一定の領域及びその綜合的原则に本質的に關係せられたる）となるであろう。そうすれば、**領域**が區別されると同数の**區別されたる範疇群**がある事になるであろう。

此の場合**形式的存在学は外見的**には領域の（即ち本来の『**質料的**、『**総合的**』なる）存在学と同列に入る。形式的存在学の領域概念なる『**対象**』は形式的なる公理体系を規定し、此の事に依つて形式的（『**分析的**』）なる**範疇**の總体を規定する（上述第一〇節参照）。既に強調せる本質的區別の存するにも拘らず兩種存在学を並行せしめる事の弁明は、実に此の点に在るのである。

一七、論理学的考察の結び

吾々の全考察は純粹論理学的考察であつた。即ちそれは何等『**質料的**』なる領界に於いて行われたものではなかつた。又は同じ事であるが、何等**一定の領域**に於いて行われたものではなかつた。即ち

それは諸領域及び諸範疇に就き普遍的に論じたのであった。そして此の普遍性は、逐次築き重ねた諸意義の意味に随つて、純粹論理学的普遍性であつたのである。吾々はひとつの図式を、すべての可能的認識或は認識対象性に対する純粹論理学から発する基礎的規法の一部として描いたのであるが、それは正しく純粹論理学の地盤に於いてであつた。此の図式に随えば個体は『先天綜合原理』の下に概念及び法則に随つて規定され得なければならない。或は此の図式に随えば又、すべての経験科学はその学に必要な領域存在学を基礎としなければならないのであつて、単にあらゆる学に共通なる純粹論理学を基礎とするに過ぎぬのではない。

同時に此の点からしてひとつの課題の觀念が発生する。即ち吾々の所謂個体直觀の範圍内に於いて具体性を有てる最高類を規定し、斯くしてすべての直觀的な個体的存在を存在領域に随つて配分するという課題である。此の領域の各々は——最も根本的な本質根拠からなるが故に原理的に——區別されている所の形相学（乃至学群）と経験科学（乃至学群）とを示すものである。が又此の根本的區別は決して錯綜と部分的重疊とを許さぬものではない。それ故例えば『物質的事物』と『心』とは相異なる存在領域ではあるが、而も後者は前者に基づいて居り、此の点からして心の論が肉体論に基づくという事が生ずるのである。

学の根本的『分類』という問題は主として領域区分の問題である。而して此の区分のためには復予め先ず、上述に於いて簡單に爲した如き種類の純粹論理学的諸研究を必要とする。他方に於いては又勿論現象学——斯学に就いては吾々は未だ何等知る所がない——をも必要とする。

第二章 自然主義的誤解

一八、批判的論議への導き

事実及び事実学に対立する本質及び本質学に関し吾々が先ず先頭に置いた一般論の取扱つたのは、純粹現象学——斯学は緒論の所説に依れば無論ひとつの本質学となると言われる——の考案の設立と、すべての経験科学、随つて又心理学、に対する現象学の位置の了解とに對しての、本質的基礎に就いてであつた。ところですべて原理的規定は——之は甚だ重要な事であるが——正しい意味に於いて理解されねばならぬ。之は嚴に強調したい事であるが、吾々は上の原理的規定に於いて、ひとつの予め与えられたる哲學的立場から論議したのではなく、即ち何等伝來の哲學説をも、仮令一般に承認されている哲學説と雖も、利用したのではなくして、吾々は二三の、嚴密な意味に於いて**原理的な指示**をなしたのである。換言すれば吾々は、ただ**直観**に於いて吾々に直接に与えられた諸區別を忠実に表出したのみである。吾々はそれ等の區別を、何等の仮説的乃至解釋的説明をも加えずに、又古今の伝承的理論が吾々に暗示しているであろう如きものを入れて解釈せずに、精確にそれ等區別が其処に与えられているその儘に受取つたのである。斯くしてなされた論定 *Feststellungen / findings* は其眞の『始原 *Anfänge / beginnings*』である。そしてこれが吾々の論定の如く包括的な存在領域に關係されている普遍性を有つものである場合には、それは慥かに哲學的の意味に於いて原理的論定であり、自身哲學に属するものである。けれども此の哲學と雖も、吾々は前提する必要がない。即ち吾々上來の考察

は——以下の考察もすべて然らしめようと思うのであるが——哲学の如く論難疑義ある『学』¹に対しては何等の依属關係をも有っていないのである。吾々の基礎的論決に於いて吾々は何ものをも、哲学の概念と雖も、前提しなかつたのであり、今後も亦此の態度を保たうと思うのである。吾々の企てる哲学的エポケー² *epochē*、〔判断中止〕は、之を明瞭に言い表せば、次の点に帰すべきものである。即ち前以て与えられている全哲学の学説内容に關して全然判断を中止し、すべて吾々の証示は此の判断中止の埒内に於いて行ふ、という事である。他方吾々はそれかと云つて、一般に哲学に就いて語る事、歴史的事実としての哲学に就いて、即ち善い意味に於いても甚だ屡々悪い意味に於いても人類全般の学的確信を規定した所の事実としての哲学的諸傾向に就いて語る事は、吾々は之を避ける必要がない（そして又之は決して避け得ない事である）。而も此の事はとりわけて上來論じた基礎的諸点に關してそうである。

正に此の点に於いて吾々は經驗主義との論争に入らざるを得ない。即ち、茲に取扱うのは直接的論定に従う諸点である故、吾々の所謂エポケーの内部で十分決着を附け得る論争である。苟も哲学が真の意味に於ける『原理的 prinzipiellen / essentially necessary』基礎の若干額³を有つものであり、随つて此の基礎はその本質上直接能与 *gebende / presentive* の【与える働きをする】直観に依つてのみ基礎づけられ得るものであるとすれば、此の基礎に關する論争の決定は、如何なる哲学的学からも——即ちその学の觀念と、外見上基礎づけられているかの如くに見えるに過ぎぬその学説内容との所有から——独立なの

i einen Bestand an „prinzipiellen“ Grundlagen 「或るひとかたまりの『原理的』基盤を」

である。経験主義が『イデー』、『本質』、『本質認識』、等を否認するという事情こそ吾々をして論争を避け得ざらしめるものである。自然科学は『数学的』自然科学としてその高き学的水準を形相的基柢づけに負うこと甚大でありながら、而もこの自然科学の勝利的進出が正に、哲学上の経験主義を促進して遂に支配的確信と迄——否経験科学者の社会に於いては殆んど唯一支配的確信と迄——ならしめたのは何故であるか。今は此の事の歴史的根柢を開陳すべき場所でない。が兎に角此の経験科学者の社会では、随つて又心理学者に於いては、イデーに対する敵意が存在していて、此の敵意は畢竟経験科学自身の進歩を阻害せざるを得なくなる。というのは、此の事に依つて、経験科学に対する未完結なる形相的基柢づけが——即ち経験科学の進歩に欠くべからざる新しい諸本質学の、時に必須なる規整 *Konstituierung / constituting* 【構成する】が——阻止されるという理由に因るのである。後に至つて明らかになる如く、上述の事はとりもなおさず、心理学及び諸精神科学の本質的な形相的基柢をなす現象学に関する事である。依つて、吾々の論定 *findings* を弁護するため二三の詳論を必要とする。

一九、経験と原的能与の作用とに対する経験論的同一視

経験論的自然主義は、吾々の認めざるを得ぬ如く、極めて尊敬すべき動機から発している。此の主義は、あらゆる『偶像』に反抗し、伝統と迷信との力、粗笨^{そほん}なる及び洗煉されたる各種の先入見の力に反抗して、真理問題に於ける唯一の權威として自律的理性の權利を主張しようとするひとつの認識運用上の徹底主義である。併し事象に関し理性的乃至学的に判断すると云う事は、**事象自体**に従うと

の謂いであり、或は説論意見を去つて事象自体へ立ち帰り、事象をその自体的所与性に於いて究め、事象に縁なき先入見は悉く之を取り除くとの謂いである。経験論者の言う所に随えば、「すべての学は経験から出発しすべての学の間接的認識は直接的経験に基づかねばならぬ」というのは、とりも直さず右の事実を示す他のひとつの言い表し方に過ぎない。それ故真の学と経験科学とは、経験論者からみれば一つである。経験論者の言う所は以下の如くである。事実に対立する『イデー』、『本質』——斯くの如きものはスコラ的存在、形而上学的幽霊以外の何ものであらう。斯くの如き哲学的妖怪から人類を解放した事こそまさしく近代自然科学の主要功績である。すべての学の取扱うべきはただ経験可能なる、又實在的な現実だけである。現実でないものは想像であり、想像から成る学はとりもなおさず想像された学である。心的事実としての想像は勿論許されるであらう。即ちそれは心理学に属する。けれども、——前章に於いて述べようと試みられた如くに——想像からして、此の想像に基づく所謂本質諦視 *eidetic seeing* に依つて、新しき所与 *Gegebenheiten* / *data* 即ち『形相的 *eidetic*』所与が發出し、之が即ち非實在的な対象であるという私の主張は、とりもなおさず『觀念学的誇大』、『スコラ学への逆転 *Rückwendung*』、乃至は自然科学を識らぬ觀念論が十九世紀前半に於いて其の科学を甚しく阻止した場合の因をなしたあの種の『先天思弁的構成』への逆転である——と斯く経験論者は結論するであらう。

併しながら上述の如き経験論者の所論はすべて——元來彼を指導する動機は如何に善意ある良きものであるとは言え——誤解と先入見との上に立っているのである。経験論者の議論の原理的誤謬は、

『事象自体』への還帰という基礎的要求を、**経験**に依つてすべての認識を基礎づけようという要求と同一視し或は混同する这一点に存する。認識可能なる『事象』の範囲を明らかに自然主義的に制限するため、経験を以て事象自体を示す唯一の作用なりとする事が経験論者に於いては一議に及ばず正当とされる。併しながら**事象**は即ち**自然事象**であるのではない。普通の意味に於ける現実はいち現実一般であるのではない。而して吾々が**経験**と呼ぶ所の**原的能与**の作用は、**ただ単に自然現実**に係するに過ぎない。此の場合に両者を同一視し、自明の理と誤解して取扱うのは、極めて明晰なる洞見に於いて与えられる区別を看過等閑視することに外ならない。そこで、**先入見**は彼我孰れの側に在るかという事が問題となる。真に先入見を有たぬという事は、『経験を離れたる判断』の除去を只管に要求するものではなく、**判断の固有の意味**が経験に依る基礎づけを要求する場合にのみ要求するものである。**すべての判断は経験に依る基礎づけを許す**、否実に要求しさえするとのみ無頓着に主張して、それ等判断の本質をその判断の根本的に相異なる性質上予め**研究**することをせずに、又同時にその主張が結局悖理なる主張でないかどうかを思量せずにおく事——此の事はひとつの『先天思弁的構成』であつて、此の構成は此の場合には経験論的方面から出発しているからと言つてそれ故により良くなるわけではない。真の学及びそれに固有なる無先入見性はあらゆる証明の根柢として、自身の妥当を直接に**原的能与の直観** *originär gebenden Anschauungen / originally presentive intuitions* から引き出す所の直接妥当的 *gültige / valid* なる判断そのものを要求する。而して此の**原的能与の直観**は、右の判断の意味——乃至対象及び判断態の固有本質——が規定する通りの性質を有っている。対象の基柢的領域、

並びにそれに双關して、能与的直觀の領域型、それに属する判断型、及び最後に斯くの如き判断を基礎づけるため其の都度他の種の直觀でなく正に此の種の直觀を**要求する**所のノエシスの規範——之等のものをすべて人は頭から要請し或は決定する事は出来ない。人はそれをただ洞觀的にのみ確定し得る。換言すれば即ち、原的能与の直觀に依つて挙示しそれをその直觀に於いて与えられたものに忠実に適應する判断に依つて確定し得るのである。真に先入見を脱せる、即ち純粹に事象的な態度は、右の如きものに外ならぬであらうと、吾々にはどうしても思われるのである。

直接に『視る Sehen / seeing』という事、単に感性的な、經驗的な視るという事に限らず、**如何なる種類たるを問わず原的能与の意識として視る事一般は**、あらゆる理性的主張の究極の權利源泉である。此の源泉が權利付与の機能を有つというのはただ、それが原的能与の源泉であるからのみであり又その限りに於いてのみである。吾々が或る対象を十分なる明晰さに於いて視る場合には、即ち吾々が視るという事を純粹に基礎とし、且つ又現に視られつつ把握されているものの埒内に於いて表明及び概念的把握をなして、その上で吾々がその対象は如何なる性質を有っているかをひとつの新しい『視』方として視る場合には、——その場合には忠実なる表出的供述がその權利を有つのである。その供述のなされるのは何故かという問いを出した場合に、若し『私がそれを視ている』からという答えに何等の価値をも与えないとすればそれは悖理であらう——此の事を又吾々は洞見するのである。或は起るかも知れぬ誤解を予め避けるため茲に附け加えて置きたい事であるが、今述べた事は併し、或る事情の下に於いてはひとつの視るという事が他のひとつの視るという事と相反する事もあり、同様に又

ひとつの**権利ある**主張が他のひとつの権利ある主張と相反する事もあり得る、という事実を許さぬものではないのである。何故ならば、右の如くに言つてもそれは——ひとつの力が他のひとつの力に依つて打勝たれても、その力が最早力ではないという事を意味しないと同様に——視るといふ事は何等の権利根拠でもないという様な意味は含んでいないからである。それで上述の事は無論次の如き意味なのである。即ち、或る範疇に属する直観——而してこれは正に感性的経験の直観を指す——に於いては^{おそ}怯らく、視るといふ事はその本質上『不完全』である、即ち視るといふ事の力は原理的に増減可能である、それ故に、直接の、随つて又眞の権利根拠を経験の裡に有つ主張はどうしても経験の進行につれて、経験の優勢にして圧倒的な反対権利のために廃棄されざるを得なくなる、という意味なのである。

二〇、懷疑論としての経験論

上述の故に吾々は経験の代りに一層普遍的な『直観』なるものを置き代え、それに依つて学一般と経験科学との同一視を却けようと思う。なお又人の容易に認める通り、若し此の両者の同一視を支持して純粹に形相的な思维の妥当に抗論するならば、ひとつの懷疑論——眞の懷疑論としてならばそれは悖理に依つて自滅する——に陥るに至る。経験論者に向つては、彼の全稱的提題（例えば『すべての妥当なる思维は唯一能与の直観としての経験に基づく』という如き）の妥当の淵源を問ひさえすれば良い。そうすれば経験論者は明白なる悖理に陥るのである。直接的経験の与えるのはどうしても

ただ個別的单独性だけであつて、何等の普遍性をも与えない。随つて直接経験では不満足である。経験論者は本質洞観 *Wesensinsicht / eidetic insight* を否定する故、彼はそれに頼るを得ない。そこで彼の頼り得るのは勿論帰納なのであつて、随つて又一般に、経験科学が由つて以てその全称的命題を獲得する所の間接的推理法の全部なのである。吾々は問う、然らば演繹的推理にせよ帰納的推理にせよ、間接的推理なるものの真理とは如何なるものであるか。その**真理**なるものは——しかのみならず加^す之^を吾々は「単称的判断の真理は？」とさえ問うことが出来るであらう——自身或る経験可能なるものであり、それ故に結局知覚可能なるものなのであるか。而して又、人々が議論乃至懷疑の場合に頼る所の推理法の**原理**、例えば三段論法の原理、即ち『第三概念一致』の原理その他、の如きは間接推理の場合に於いて究竟的源泉としてあらゆる推理法の立証がどうしてもそれへ遡^そ源^{げん}せしめられるのであるが、その推理法の原理なるものは如何なるものなのであるか、以上のものは自身復^{また}経験的なる一般化なのであるか、或は斯くの如き考えは自身の裡に極めて根本的な悖理を蔵していないであらうか。

今茲にこれ以上絮^{じよせう}説しなくとも——絮説するとしてもそれは他の場所に於いて既に述べた事を繰り返すに過ぎないであらうが——尠くとも次の事は明らかに言つてよいであらう。即ち経験論の基礎提題は何よりも先ずより正確なる分解、説明、基礎づけを必要とするという事、及び此の基礎づけ自身がその提題の陳述する規範に随つていなければならぬという事である。同時に又明らかな事であるが、茲には尠くとも、此の循環関係の裡には悖理が埋蔵されてはいなからうかという重要な疑念が存している、——然るに此の關係に關し眞の明晰さと学的基礎づけとを得ようとする試みが眞面

目に行われたという事は、経験論の文献に於いては實際殆んどその萌芽も見出し得ないのである。学的なる経験的基礎づけは、茲に於いても亦他の場所に於ける如く、次の事を要求するであろう。即ち、理論的に厳密に確定された個々の場合から出発して、原理的洞観に依つて限なく照し出されている厳密なる方法に随つて全称的提題へと進んで行くという事である。経験論者達が彼等の諸提題に於いて全認識に提出している所の学的諸要求は同時に彼等の提題そのものに向けられているという事を、彼等は看過して来たものの如くである。

彼等経験論者達は真の立場哲学者として、随つて先入見から自由であるという彼等の原理と明かに矛盾して、説明せられず基礎づけられざる偏見から出発している。然るに之に反して吾々はあらゆる立場の**以前**に在るものから出発する。即ち吾々は、直観的に、且つ又あらゆる理論化的思惟そのもの以前に与えられているものの全範圍から、即ち、——吾々が格別先入見に依つて眩惑げんわくされず、真なる所与を觀察することを妨げられない場合には——吾々が直接に視て把握し得るもののすべてから、出発する。若し『**実証論**』とはすべての学を、『**実証的なるもの**』、即ち原的に把握せらるべきものの上に、絶対的に先入見を離れて基礎づけようとするものにほかならぬとするならば、**吾々**こそは真の実証論者なのである。実に吾々は**如何なる**權威にも——『近代自然科学』の權威にさえも——、すべての種類の直観を認識の等値的權利源泉なりと認める權利を、侵さしめないものである。真に自然科学が語る場合には、吾々は悦んでその弟子として傾聴しよう。けれども自然科学者が語る場合必ずしも自然科学が語っているのではない。而して自然科学者が『自然哲学』や『自然科学的認識論』に就いて語る

場合には自然科学が語っているのでない事は確かである。とりわけ、自然科学者が、一般的なる自明の理、例えばすべての公理の表出する如き自明の理（例えば、 $a + 1 = 1 + a$ 、判断には色はあり得ない、性質上相異なる二つの音は何れもその一方は低く他方は高い音である、知覚は**それ自身に於いて**或るものに就いての知覚である、等々という如き諸命題）は経験事実^{しじふ}に就いての表出であるという事を吾々に信ぜしめようと欲する（吾々は、斯くの如き諸命題は形相的直覚の所与を表明表現するものなる事を**十分なる洞観**に依つて認めるのに）——という如き場合は特にそうである。ところで、正に以上の事に依つて吾々の明らかにした事実は、『実証論者』達は時には直観種類の基本的区別を混淆^{こんごう}したり、また時には成程それ等直観種類を相反するものとしては見るが併し己れの先入見に囚われてそれ等の中の唯一つだけを妥当なりと——或は存在するのはそれのみなりとさえ——認めようと**欲する**という事である。

（一）懷疑論という特質的概念に関しては『論、研、』第一卷（『純粹論理序説』第三二節参照）。

（二）『論、研、』第一卷、特に第四章及び第五章参照。

二二、觀念論の側に於ける不明晰なる諸点

此の場合反対側に於いても亦勿論不明晰な点が行われている。成程彼等は純粹思惟、『先天的』思惟を認め、随つて経験論の提題^{しじふ}を却けはする。けれども彼等は、経験的直観に於いて個体的實在が与えられると全く同様に本質が対象として原的に与えられる所の一種の与えられ方として、純粹直観と

いう如きものの在る事を反省的に明晰に意識する事をしない。換言すれば彼等は、如何なる判断的洞見と雖も——無制約的に普遍的なる真理に対する洞見は特に——正に多様の分化、就中論理的範疇と並行する分化を有する所の能与的直覚なる概念の下に属する^(二)、という事を認知しないのである。成程彼等は明証に就いて云々しはする。けれども此の明証を洞見として、普通の「視る事」と本質關係に立たしめることをせずに、神秘的なる真理指標として判断に對し感情の着色を与える所の『明証感情』の事を云っているのである。斯くの如き見解は、意識種類に就いて上の方から理論を作らずして、意識種類を純粹諦視的 *rein schauend / in pure observation* に又本質に従つて分析するという事を習得しない間だけ可能なるに過ぎない。此の有名無実なる明証の感情、思惟必然の感情は——その他如何なる名辭を以て呼ばれようとも——理論的に捏造された感情以上の何ものでもない^(三)。此の事は、苟くも明証の何等か或る場合を真に諦視的な所与に迄齎らしてそれを同一判断内容の非明証の場合と比較した者ならば、誰しも承認する所であらう。此の事を承認する場合には其人は直ちに次の事に気付くのである。即ち、多量に感情を含む此の明証論の有つ暗黙裡の前提——即ち「他の心理学的本質からみては同様なる一判断作用も、或る場合には感情的に着色されて居り他の場合には着色されて居らぬ」という前提——は根本的に誤まつていたのであつて、寧ろ、同様なる上層即ち単なる意義的表出として同様なる供述という上層が、或る場合には『明晰に洞見する』所の事態直覚に漸を追つて適合し、他の場合には反之全然別の現象が——即ち直覚的ならぬ、時には全く混乱不明瞭なる事態意識が——下層として働いているのである。斯様にして又、經驗の領界内に於いて、同じ事態に関する明晰忠実な

る知覚判断と任意の曖昧なる判断との区別を、単に前者は『明晰感情』を具有するもの後者は然らざるものという点に存するに過ぎぬと解すならば、それはやはり上述と等しく權利なき主張である。

(一)『論、研』第二卷、第六研究、第四五節以下参照。本書第三節も同様の論旨。

(二)例えばエルゼンハンスがその新著 *Lehrbuch der Psychologie*, Tübingen 1912, S. 289ff. に於いてなしている論述の如きは、私の観る処では毫も現象の裡に基根を有たぬ心理学的仮構である。

二二、プラトンの実念論 Realism なりとの非難、本質と概念

吾々が『プラトン説を奉ずる実念論者』としてイデー乃至本質を対象なりと主張し、且つそれ等に對し、他の対象に對する如くに現実の（真の）存在を歸し、同様に又、右と双關的に、直覺に依る被把握可能性を歸する——以上實在の場合に於けると異なる事なし——という事は、幾度も非常な反對を招いたのであつた。著者に對し著者の全然関知せざる讀者自身の諸概念を押しつけて、然る上で易々として著者の論述から不条理を拾い出す所の輕率なる讀者のあの遺憾ながら夥しく多数の種類の人々に就いては、茲には言及しない事にしよう。^(二) **対象と實在的なものと、現実と實在的現実とが若し同一のものを意味するとするならば、イデーを対象や現実と見る事は慥かに背理なる『プラトンの実体化』である。**けれども『論理学的諸研究』に於いて為された如く、両者が嚴密に区分される場合、即ち対象とは何か或るもの——それ故例えば真なる（定言的、肯定的なる）供述の主辞——であると定義される場合には、曖昧なる先入見から来る反對以外如何なる反對が残存し得るであろうか。広き對

象概念なるものは私の創案に係るものでは勿論ないのであつて、私は単に純粹に論理的なる命題のすべてが要求する所の広き対象概念を恢復し、それと同時に広き対象概念は原理的に必要不可欠なる、随つて又一般學術用語を規定する概念たる事を指示したに過ぎぬのである。即ち此の意味に於いて、音階に於いて番号上唯一の項なる音性質c、或は又集合数系列に於ける数2、幾何学的形象のイデー界に於ける図形円、命題の『世界』に於ける任意の命題——約言すれば多種のイデー的なもの——は『対象』である。イデーに対する盲目は一種の心盲である。即ち彼は先入見のために、彼がその直観の分野に於いて有つてゐるものを判断の分野に持ち來たす事が出来ぬ様になつてしまつたのである。實は何人も、而も言わば絶えず、『イデー』乃至『本質』を視てゐるのである。即ち思惟に於いてイデー乃至本質を取扱つて居り、本質判断をも亦なししてゐるのである——ただ彼等はこれ等を彼等の認識論上の『立場』からして解釈上放棄してゐるだけなのである。明証的所与は忍耐強い。即ちそれは理論が所与自身に就き放談 *hinwegreden* / *pass them by* することを許す、が而も依然としてその本領を失わぬのである。所与に従うという事が理論のなすべき事である。そしてその所与の基礎的種類を區別し且つそれをその固有本質に従つて記述するという事が認識論のなすべき事である。

理論的に見て先入見は著しく寡慾なものである。(先入見に依れば) 本質、随つて又本質直観(イデー化)なるものは在り得ない。それ故本質なる言葉が一般用語法に悖る限り、それは『文法的実体化』——之に依つて勿論人は『形而上学的』実体化へ驅り立てられてはならぬ——の事でなければならぬ。事實として眼前に在るものたり得るのは、實在的な經驗乃至表象に結びつく所の、『抽象』という

實在なる心的出來事だけである。「と先入見は称する。」此の故に『抽象の理論』は熱心に構成され、経験を誇りとする心理学は此処に於いても、又あらゆる**指向的領界** *intentional spheres*——これは実に心理学の主要主題をなしている——に於いても捏造せられた現象、**実は分析ならぬ心理学的分析に富む様になるのである**。即ち謂う、イデー乃至本質はそれ故『概念』であり、概念は『**心的成体** *Gebilde / constructs*』即ち『**抽象の所産**』である、そしてこの概念は斯かるものとして無論吾々の思惟に於いて重大な役目を演じている、と。『本質』、『イデー』乃至『**形相**』、之等は『**飾気なき心理学的事実**』に對する御上品な『**哲學的**』名称に過ぎぬ、それは又形而上學的暗示を含むが故に危険なる名称であると称するのである。

右に對し吾々は答えて言う。慥かに本質は『**概念**』である——但し、人が概念を即ち本質の意味と解する（斯くする事は此の多義的な言葉に於いては可能である）場合には——と。ただ此の事は明らかにしておかねばならぬのであるが、**此の場合に**心的所産という事を言うのはノンセンスなのであり、又**概念構成** *Begriffsbildung / concept-formations* という事を言うのも、此の語が嚴密且つ本來的なるそれと解されているべきである限り、同様にノンセンスなのである。吾々は時折或る論文に於いて「**集合数の系列は概念の系列である**」とあり、更に進んで「**概念は思惟の成体である**」とあるのを読む事がある。斯くて先ず第一に**集合数**そのものの、即ち本質が概念と呼ばれたのである。吾々は問う、けれども**集合数**なるものは吾々がそれを『**構成 bilden / form**』すると否とに拘らずその然かある所のものであるのではないか、と。勿論私の算え作用は私の為す所であり、私は私の数表象を『一つ又一つ』という

風にして構成するという事は確かである。此の数表象は今此の数表象である、けれども他の場合に仮令私たとひがそれを同様のものとして構成するとしても、それは今とは別の数表象である。此の意味に於いて一にして同じき数に關し、時には何等の数表象もない事があり、時には多くの、任意に多くの数表象がある事もあるのである。ところで斯く言う正にその事に依つて吾々は既に明らかにひとつの區別をなした——而も吾々は必然的に然かせざるを得ぬ——のである。即ち数表象は数そのものではない、換言すればそれは、数系列の此の唯一の項——これは此の種の唯一独自なるすべての項の如くひとつの非時間的存在である——たる「二」ではないのである。数そのものを心的成体と呼ぶのは、それ故、悖理である。即ち算術的言説の全く明瞭なる、妥當なりとして常に洞觀し得る、随つてあらゆる理論の以前に存している所の意味に對する撞着どうちやくである。若し概念が心的成体であるとすれば、純粹なる数という如きものは概念でない。又純粹なる数が概念であるとすれば、概念は心的成体でない。それ故吾々は、上の如き危険を有つ曖昧を脱する正にそのために、新しい術語を必要とするのである。

(一)『論理学的諸研究』及び私のロゴス誌の論文に對する駁論は、好意ある駁論と雖も大多数は遺憾ながら此の水準に於いて行われている。

二三、イデー化の自發性、本質と仮構 Eikūm

「けれども亦、家等々の如き概念、或は本質（と言つてもよい）は個体直觀から抽象に依つて生ずるものであるという事は真にして且つ明証的なのではないのか」と彼等は抗論するであろう。「而し

て君等は既に形成せられている概念から恣意的に概念を構成するのではないか。そうすれば其処にあるのは確かに心理学的所産なのである。」恐らく彼等は更に附け加えて言うであらう、「右の事は恣意的仮構の場合に於けると似ている、即ち吾々が自由に想像する「笛を吹くケンタウル」はとりも直さず吾々の表象成体 *Vorstellungsbilde / objectivational formation* である」と。——吾々は下の如く答える。『概念構成』並びに又自由仮構は確かに自発的に行われる。そして自発的に産出されたものは精神の所産である事は自明である。けれども、「笛を吹くケンタウル」に就いて言えば、それは表象されたものが表象と名づけられるという意味に於いては表象であるが、併し表象とは心的体験の名称であるという意味に於いては表象でない。ケンタウル自身は勿論何等心的なものではない。それは心の中にも、意識の中にも、又その他の何処にも現存しない。それは言う迄もなく『無』である。それは徹頭徹尾『想像』である。更に精確に言えば、ケンタウルに就いて想像する事は想像体験なのである。然る限り体験そのものに勿論『思念されたものケンタウル』、想像されたものケンタウルは属する。けれども斯く言えばとて今度は又人は、正に此の想像体験を此の体験に於いて想像されたそのものと混同してはならぬのである。同様に自発的抽象作用に於いても亦、産出せられたものは本質ではなくして、本質に就いての意識なのである。そして此の場合事情は次の如くである。即ち本質に就いての**原****的能与**の意識（イデー化）はそれ自身に於いて且つ必然的に自発的意識である、然るに感性的能与の意識、即ち経験的意識には自発性は本質上属していない、而も明らかに本質上左様であるという事情である。換言すれば、個体的対象は『現出し』得、把捉的に意識されて居り得る。けれども個体的対

象に『対して』の自発的『活動』なしにであるというのである。それ故、右の混同を来たす動機以外には、本質意識と本質そのものとの同一視、随つて又本質そのものの心理学化を来たす虞れある如き動機は見出し得ないのである。

併し猶お、仮構する意識の並置が問題となるかも知れない。即ち本質の『現存』という点に就いてである。本質を仮構であると考えるのは勿論懷疑論者の欲する所であるが、事実左様ではなからうか。併しながら、仮構と知覚とを『直観的意識』なる上位概念の下に並置する事は知覚に於いて与えられたる対象の現存を害するものである如く、右の本質と仮構との並置は本質の『現存』を害するものである。物は知覚され、回想され、斯くて又『現実的』なりと意識されて居り得る。乃至は又変様されたる作用に於いて疑わしい、無である（錯覚である）と意識されている事もあり得る。最後に又全然別の変様に於いて、『単に眼前に髣髴』^{ほうふつ}して居り、又宛^{あた}かも現実なるが如く、無なるが如く（等々と髣髴していると意識されている事もあり得る。本質に於いても事情は之と全く同様である。そして此の事と聯関して、本質も亦他の対象の如く、時には正しく時には誤まつて（例えば誤まれる幾何学的思维に於ける如く）思念されている事もあり得る。本質把握や本質直観は併し、多様の形態を有つ作用である。特に**本質諦視** *seeing essences* は**ひとつの原的能与の作用** *originary presentive act* であり、且つかかるものとして**想像に對してではなく感性的知覚に對して類比をなすものである**。

(一) 此の点に就いては本書諸後篇の現象学的諸分析を参照。

二四、あらゆる原理の原理

兎に角背理なる諸理論に就いては上述で十分であると思う。「各々の原能的能与の直観は認識の權利源泉である、即ち吾々に『直覚』に於いて原的に（言わば有体的^{ありてい}現実性に於いて）顕現するものはすべて現れている通りに素直に受け取られるべきである、そして又それが其処に現れている所のその限界内を出でてはならぬ」、此のあらゆる原理の原理に就いては考え得べき如何なる理論も吾々を惑わせる事は出来ない。如何なる理論と雖もその真理そのものは又原的所与 *originary data* から汲み取るより他仕方ないであろうという事は実に吾々の洞見する所なのである。それ故此の原的所与を単なる表明や精確に適合する意義やに依つて表出するに止まる所の供述は悉く實際、吾々が本章の緒論〔第一八節〕に於いて述べた如く、真の意味に於ける置礎 *Grundlegung / foundation* に適する絶対的始原 *Anfang / beginning* 即ち *primum*〔始原、根源、原理〕である。そして此の事は原理 (*Prinzip*) という言葉が普通それに専用される所のその種類の普遍的本質認識に就いては殊に当て嵌まる事である。

此の意味に於いて**自然科学者**が「自然の事実に関するすべての主張に就いては、該主張を基礎づける経験に徴すべきである」との『原理』に従うのは全く正当である。何故ならば、それはひとつの原理であるからである。換言すればそれは——吾々が右原理に用いられている諸用語の意味を十分明晰にし且つそれ等用語に属する本質を純粹所与に迄齎らすならばそれに依つて何時でも確信し得る如く——普遍的洞観から直接に汲み取られた主張であるからである。而して同様の意味に於いて**本質研究者**は、又全称的命題を用いて陳述する者は何人と雖も、右原理と並行なる原理に従わねばならない。

そして斯くの如き原理は存在するに違いない。何故ならば、経験に依つてすべての事実認識を基礎づけるという今承認された原理にしてからが既に——各々の原理及び各々の本質認識一般と丁度同様に——自身経験に依つては無論洞観し得ぬものだからである。

二五、自然科学者として実践している場合の実証論者、実証論者として反省し

ている場合の自然科学者

事実上実証論者が本質認識を否認するのはただ、彼が『哲学的』に反省して経験論哲学者の詭弁に依つて欺かれて^{あきむ}いる場合に限るのであつて、彼が自然科学者として常規の自然科学的観方に於いて思惟し論証している場合に否認しはしないのである。というのは後者の場合には彼は、本質洞観に依つて指導される事が明らかに甚だ大であるからである。周知の如く純粹数学の全学科、即ち幾何学乃至運動学の如き質料的学科、算術、解析等々の如き形式的（純粹に論理的）学科は、確かに自然科学上の理論構成の基礎手段なのである。之等の諸学科の態度は経験的でなく、経験された図形、運動等々に対する観察及び実験に依つて基礎づけられるものでないという事は明らかである。

経験論は勿論上述の事を認めようとしなない。けれども、「上述諸学科を基礎づける如き経験は無いのではない、否寧ろ無限の経験が意の俣に基礎づけの用をなすのである」という経験論を人は真面目に受取るべきであらうか。すべての人類の、否先行獸類さえ全経験に依つて、幾何学的及び算術的印象の巨額の財宝が集積され理解の習慣性という形式で集成されたのであつて、今吾々の幾何学的洞

観は此の蓄積から汲取つているのである、と経験論者は言う。——併しながら此の集積されたと称せられる財宝も、若し何人もそれを学的に観察し忠実に証示した事そもそがなかったならば、抑も人は何に依つてそれに就いて知るのであるうか。永く忘れられて居り且つ全然仮説的な経験が、自己の本来経験的な機能及び経験範囲に就いて細心に吟味せられたる現実的经验に代つて、ひとつの学しゆのみならずの——加^し之最も精密なる学の——基礎となつたというのは何時からなのであるか。物理学者は観察し実験する。それ故、継承されて来たと称せられる経験に関する本能的なる理解や仮説は勿論のこと、先科学的経験にも満足しないのは尤もである。

或は又人は「吾々は幾何学的洞観を『想像経験』に負うている、即ち吾々は幾何学的洞観を**想像実験からの帰納**としてなすのである」と——事実他の方面から言われた事のある如く——言おうとする積りであるか。吾々は之に反問して言う、「然らば一体物理学者は何故に左様な驚くべき想像経験なるものを使用せぬのであるか」と。彼等は答える、「勿論それは、想像上の図形、運動、集合が決して現実のそれではなくして想像せられたるそれである、と正に同様に想像上の実験は想像せられたる実験であるからなのである」と。

併し吾々はすべて此の種の解釈に対して、議論を上下してその解釈と同一の地盤の上に立つ事をせず、数学のなす主張の**固有**の意味を指摘するという最適の方法を採ろうと思う。数学上の公理の供述する所を知り、而も疑いなく知るためには、吾々は経験論哲学者に頼るべきではなく、吾々が数学研究に於いて公理的事態を十分なる洞観に依つて把握する所のその意識に頼るべきである。若し吾々

が純粹に此の直覺に留まるならば、公理の裡に於いて純粹なる本質聯関が經驗事實の措定を毫も伴わずに現れるという事には何等の疑いも容れない。人は幾何学的なる思惟や直觀を生き生きと行い且つ直接的分析を基礎としてそれに内在する意味を規定する事をせずして、それに対して外部から哲學的思索や心理學的思索を施してはならない。吾々は過去の時代の認識から認識性向を繼承しているでもあろう。併し吾々の認識の意味と価値とに就いての問題にとつては認識繼承の歴史は、恰も吾々の金の価値内実にとつてその繼承の歴史が然る通り、無關係なのである。

二六、独断的觀方に立つ諸學と哲學的觀方に立つ諸學

上述の如くにして自然科学者は數學及びすべての形相的なるものに就いては懷疑的に語る、然るに彼の形相的方法の点では**独断的態度**をとる。寔に好都合な事ではある。自然科学が今日の大を致したのは、殷盛を極めた古代懷疑論を無造作に無視し且つその克服を**断念**したという事に由るのである。「外界」自然一般の認識は如何にして可能であるか、古人が既に此の可能性の裡に見出した所の難点はすべて如何に解決すべきであるか——此の稀有の難問に心を悩まさずして、自然科学は寧ろ好んで實際達成され且つ出来る限り完全なるべき自然認識即ち精密自然科学という形に於ける認識の適當な方法の問題に努力したのであった。自然科学は此の転回を行つて、それに依つて又その事實上の研究に對し自由なる軌道を獲得したのであるが、併し又自然科学は新たに懷疑的反省の余地を許し且つ又懷疑的傾向のために自身の可能なるべき研究範圍を制限されるという事に依つて半分退歩したので

ある。経験論的先入見に陥つた結果として、懷疑論は今や**経験の領界**に就いてだけは無力にされていても**本質の領界**になるともうそうでないのである。何故ならば、経験論の偽旗を掲げるだけで形相的なものを己れの研究圏内へ引き入れる事は、自然科学には力が及ばぬからである。かかる価値顛倒に平然堪え得るのはただ古来既に基礎づけられて居り且つ又習慣法に依つて論争の余地なしとされている所の形相的諸学科だけである。即ち数学の諸学科の如き之である。併しそれに反し（既に指示して置いた如く）新しき形相的諸学科を基礎づけるに就いては経験論的先入見は重大なる障礙しょうがいとならざるを得ない。良き意味に於いて**独断的な即ち先哲学的なる研究領界**——即ちすべての経験科学（のみに限らず）が属する所の研究領界——に於ける**正当な態度**というのは、あらゆる『**自然哲学**』及び『**認識論**』と共にあらゆる**懷疑論を十分に意識して除去し**、そして認識対象性を現に見出す場合には——その認識対象性の可能性に対する認識論的反省が後になって如何なる難点を示すとしてもそれは問わず——その対象性を受け取るという態度である。

学的研究の領内に於いて恰もひとつの避け難く且つ重要な区分をなさねばならない。一方には、如何なる認識論的乃至懷疑的問題群にも無関心に事象に立ち向う所の、**独断的観方に立つ諸学**がある。之等の学はその事象の原的所与から出発する——自己の認識を吟味する場合には毎時此の原的所与に還つて行く——、そして、その事象は如何なるものとして直接に与えられるか、又そのものを基礎として如何なるものがその事象及びその範囲の事象一般に對し間接に推論され得るか、という事を問うのである。他方には、認識論的な——即ち**特に哲学的という種類に属する**——**観方に立つ学的諸研究**

がある。之等の研究は認識の可能性に対する懷疑的な問題を探究する。即ち先ずその問題を原理的普遍性に於いて解決し、然る後既得の解決を適用して、独断的諸学の成果の究極的な意味と認識価値とに対する評価に断案を下して行くものである。尠くとも**現在の時勢に於いては**、そして又一般に十分に完成し且つ完全なる厳密性と明晰性との域に迄発達した認識批判が欠如する間は、『**批判主義的**』**問題提出に対し独断的研究の境界を遮断するという事は正当である**。之を換言すれば、認識論的な(而して通例は懷疑的な)先人見——そのの正当不当に就いては哲学が決定すべきであつて、独断的研究者を煩わすを要しない——が独断的研究者の研究の歩みを阻害しないように配慮する事が今のところの正当であると吾々には思われるのである。然るに斯くの如く不利なる阻害を与えるというのがとりも直さず諸懷疑論の遣り口なのである。

まさしく上述の事に依つて同時に又、学としての認識論がその故に固有の次元を必要とするに至る所のその特有の事情が示されているのである。純粹に事象を目指し且つ洞観の上に立つ認識は如何に満足しているにしても、認識が反省的に自己自身を省みるや否や、あらゆる種類の認識——その下には又直観や洞観をも含む——の妥当の可能性は錯雜なる不明晰、殆んど解き難き困難を負わされている様に見えて来る。而して此の事は、認識客観が認識に対して要求する所の超越性に関する場合には**特に**そうである。如何なる直覚、如何なる経験及び洞観にも抵抗して自己の権利を主張し且つ更に進んでは**實際上の学問所究に於ける障礙**をなす事さえもあり得る所の**諸懷疑論**が存在するのはまさしく此の故なのである。吾々は、此の障礙を自然的なる『**独断的**』学——上述に依つて明らかなる如く茲

には吾々は此の語に依つて毫も輕蔑を示そうとしてゐるのではない——の立場に於いて次の事に依つて排去する。即ち、吾々はただあらゆる方法の**最普遍的原理**、即ちあらゆる**所与の根源的權利**という**最普遍的原理だけを明らかにし且つそれを生き生きと記憶して置くのであつて、それに反し種々なる認識種類及び認識双関關係の可能性という内容的にして形態多様な問題は之を無視する——という事に依つて排去するのである。**

第二篇 現象學的基礎考察

第一章 自然的觀方に於ける指定とその排去

二七、自然的觀方に依る世界——私と私の周圍世界

吾々は吾々の考察を自然的生活をなす人間として、即ち『**自然的觀方 attitude に於いて**』表象し、判断し、感情し、意欲する人間として始めよう。それが何を意味するかを吾々は、簡単な省察に依つて明らかにするのであるが、これは第一人称で語る事に依つて行うのが最上である。

私はひとつの世界を、即ち空間に於いて無限に拡がり時間に於いて無限に生成既成する世界を意識している。「私はその世界を意識している」という事は何よりも先ず「私はその世界を直接直觀的に眼前に見出す、即ち私はそれを經驗している」という意味である。何等かの仕方では空間的に分布する物体的事物は、私がそれに特に注意して觀察的、思维的、感情的、意欲的に關係していると否とを問わず、視、触、聴等々の作用を通して、即ち種々なる仕方の感性的知覚に於いて**私に對し単に其處に在る**、即ち字義通りの乃至譬喩^ゆの意味に於いて『**手前に**』(vorhanden on hand 【利用可能の内に】)在るのである。例えば人間の如き心を有てるものも亦私に對し直接に其處に在る。即ち私は彼等を仰ぎ、視、その近づくのを聴き、その手を握り、語を交えて、彼等は何を表象し思惟しているか、彼等に於いて如何なる感情が起っているか、彼等は何を願望乃至意欲しているかを直接に了解する。彼等も亦、

私が彼等に注意していない時と雖も、私の直観の野の裡に現実として、手前に在る。けれども、彼等も、同様に又その他の諸対象も丁度私の**知覚の野**の裡に在るという事を必要とはしない。現実的客観は、一定の、多少とも知られている客観として、それ自身は知覚されず否直観的に現在してさえないなくとも他の顕在的に知覚されている客観と一緒になつて、私に對し其処に在る。私にたつた今視て注意していた机から私の注意を移動させて、室のうち私の背後の未だ見なかつた部分を通り、ヴェランダへ、庭園の中へ、四阿あずまやの中あずまにいる小供達へ等々と、即ち直接随伴的に意識されている私の周囲の此処かしこ彼処に存在するという事を私が正に『知っている』所の客観のすべてへ、転ずる事が出来る——茲に『知っている』と言つたその知は毫も概念的思惟を含まない、そしてそれは、それに注意を向けると初めて（が併しその場合でも單に部分的に且つ又多くは甚だ不完全に）明晰的直観へ転化するものである。

併し此の直観的に明晰乃至不明に、判明乃至不判明に**随伴的に現在するもの**——即ち顕在的知覚野の恒常的周辺を為すもの——の範圍を以てしてさへも、覺めている時は如何なる瞬間にも私に對し意識上『手前に』在る所の世界は尽されるものでない。此の世界は却つて、確定的なる存在列次をなして無限に及んでゐる。顕在的に知覚されているもの、多少とも明晰に随伴的に現在し且つ規定されているもの（即ち尠くとも幾分かは規定されているもの）は、**無規定的現実の不明に意識されている地平**に一部は混じて居り、一部は取り囲まれている。私はその地平の中へ、種々変化する成果を収めつつ、注意という照明的視向光線 Strahlen des aufhellenden Blickes / rays of the illuminative regard を放つ事が出来る

る。次第に規定されて行く所の、即ち始めは不明で後次第に生き生きと明らかに成つて行く所の現前化は、吾々に或るものを取り出し示してくれる。即ち斯くの如き回想の鎖は連結して行き、規定の圏は次第々々に拡大して行つて、時には遂に**中心的**の周圍部としての顯在的な知覚の野との聯関が設定されるに至る事がある。併し一般には成果は別様である。即ち不明なる無規定性の空虚な霧は直觀的な可能性乃至蓋然性を宿して、ただ世界の『形式』だけが正に『世界』として示される。なおまた無規定的の周圍部は無限である。霧がかかつて決して完全には規定出来ぬ地平が必然的に其処に在るのである。

時間の繼起に於ける存在列次から見た世界も、その事情は上來私が探究した空間的現在の存在列次に於ける世界と丁度同様である。今——而して勿論覺めている「今」の各々に於いて——私に對し手前に在る此の世界は、二つの方向に無限なる時間的地平を有つてゐる。即ち知つてゐるのと然らざる、直接に生き生きとしているのと然らざる過去と未來との二つである。手前に在るものを私に直觀せしめる所の經驗という自由活動に依つて、私は私を直接に取り囲む現實の此の諸聯関を辿ることが出来る。私は空間及び時間中に於ける私の立場を変更し、視向を此処彼処へ、時間的には前方や後方へ向けるという事が出来る。即ち私は絶えず新しく、多少とも明晰な且つ内容に富む知覚及び現前化を、換言すれば又多少とも明晰な形象——此の形象に依つて私は、時空的世界の固定的形式の中に於いて可能的にして蓋然的なるものを直觀に持ち來たす——を得ることが出来る。

i 「現前化」 *Vergegenwärtigungen* (英 haul something out for me)。渡辺によると、「準現前化」。現前してゐない対象をありありと思ひ浮かべ、思ひ描いて作用。

上の如き仕方に依つて私は、覺めている意識に於いては常に内容的成素は變つても而も一にして同じ世界に關係している所の私自身を見出す——此の事は決して變改することが出来ない。此の世界は絶えず私に對し『手前に』在る。そして私自身も此の世界の成員をなしている。此の場合、此の世界は私に對し密に**單なる事象の世界**として許りでなく、それと同様の直接さに於いて**価値世界**、**福利世界**、**実践的世界**としてそこに在るのである。私は手前の物が事象の諸性狀と同様に価値の諸性質を具有している事を、即ち美醜、適意不適意、快適不快適等々である事を直ちに認める。直接的に物は使用客觀としてそこに在る。即ち例えば『書物』を載せた『机』、『コップ』、『花瓶』、『ピアノ』等々の如き之である。之等の価値性質や実践的性質も亦、手前の客觀や客觀一般へ私が向くと否とに拘らず、『手前に』**在る客觀そのものに規整的に属している**のである。此の事は勿論『單なる物』に對すると等しく私の周囲の人間及び動物に對しても亦言い得られる。即ちそれ等は私の『友』或は『敵』、私の『召使』或は『上長』、『他人』或は『親族』等々なのである。

二八、コギト、私の自然的周圍世界とイデー的諸周圍世界

多様に變化交代する私の意識**自発性**——即ち探究的考察、記述に依る表明と概念化、比較と區別、集積と計算、前提と歸結等の作用、約言すれば種々なる形式と段階とに於ける理論構成的意識——の全体は實に此の世界、即ち**私がその中に在り同時に又それが私の周圍世界である所の世界**に關係している。と正に同様に又、情緒及び意欲の形態多様な作用と狀態、即ち適意不適意、嬉悅憂愁、希求

逃避、希望、恐忌、決意行動等も此の世界に關係している。上例はすべて——自発的にその方へ向き把握する事に依つて世界が**直接**に手前に在る世界として私に意識されている所のその端的なる「私の諸作用」を含めて——デカルトの一用語**コギト**の包括する所である。自然的に生活し去つてゐる時は私は、私がコギトを供述すると否とを問はず、即ち私が私及びコギト作用に『**反省的**』に向つてゐると否とを問はず、私は絶えず右の「コギトという」全『**顯在的**』**生活の根本形式**に於いて生活してゐるのである。若し私が反省する場合には、そこにはひとつの新しきコギトが働いてゐる。が又此のコギトの方は反省されて居らず、それ故又私にとつて對象的になつてはいないのである。

私は絶えず私に依つて、知覚し、表象し、思惟し、感情し、欲求し、等々する所の或る者として見出される。そしてその場合に私は**多くは**、恒常的に私を取り囲む現實に顯在的に關係してゐる所の私を見出すのである。「多くは」と言つたのは、私は常に右の如く關係してゐるとは限らないからである。即ち、私がその中に生活してゐる所のコギトの各々が物、人間、私の周囲世界の任意の對象乃至事態をコギタトゥム cogitatum 「コギトされたるもの」として有つてゐるとは限らないからである。例えば私は純粹なる数及びその法則の如きを取扱うという場合があるのである。此の種のものは周囲世界即ち『**實在的現實**』たる此の世界に於いて手前に在るものではない。数の世界もやはり、正に算術的取扱ひの客觀の野として私に対してそこに在る。斯くの如き算術的取扱ひを受けてゐる間は個々の数乃至数成体は、一部分は規定されて居り一部分は規定されて居らぬ算術的地平に取り囲まれて、

i 「コギト」ラテン語 cogito と、主語はないが、これで一人称単数現在形だから I think (Je pense)、「私が思う・考える」

私の視点の裡に在るであろう。併しながら斯く、定在者そのものの如く、「私に対しそこに在る」とは言っても、それは定在者の場合とは明らかに別様なのである。算述的世界は、私が算術的観方を執っている時だけ又その間だけ、私に対してそこに在るものである。然るに自然的世界即ち普通の語義に於ける世界は、私が自然的に生活し去っている間は絶えず私に対してそこに在るものである。又私が自然的に生活し去っている間は、私は『自然的観方 in the natural attitude』を執っているのである。無論此の二つの言い方はとりも直さず同じ事を意味するのである。此の事實は、私が時に算術的世界やそれに類似の他の諸『世界』を、夫々に適応する観方をなす事に依つて獲得する場合にも、全然変改されるを要しない。斯くの如き場合にもあい変らず自然的世界は『手前に在る』世界で居るのであり、私は依然として自然的観方に居るのである。此の点は新しき観方に依つて乱される事がない。私のコギトが単に此の新しき観方の諸世界内にのみ働いている場合には、自然的世界は注意の外に在る。即ちそれは私の作用意識に対して背景をなしているのであつて、算術的世界の属する地平をなしているのではない。同時に手前に在る之等両者の世界は、両者の私への關係——これに依つて私は私の視向 my regard 及び私の作用を自由に両者の一方へも他方へも向け込み得る——を外にしては、互いに聯関がないのである。

二九、『他の』諸々の私主観 Ichsubjekte / ego-subjects と共同主観的な自然的世界
私自身に就いて言われ得る事はすべて、私の知る所に依れば、私が私の周囲世界に於いて手前に在

るのを見出す所の他の人々のすべてに就いても亦言い得られる。彼等を人間であるとして経験して、私は彼等を私自身もその一である如き私主觀として、又彼等の自然的周圍世界に關係しているものとして了解し、受取る。ところで此の場合私は、彼等の周圍世界と私の周圍世界とは客觀的には一にして同じき世界であつて、これが單に吾々のすべてに對して種々異なつた仕方で意識されるに過ぎぬものであると解している。各人は夫々其処からして手前に在る物を視るところの場所を有つて居り、随つて又各人が夫々異なる物体现出を有つてゐる。顯在的なる知覺の野、回想の野等々も亦——その裡に於いて共同主觀的 intersubjective に共通に意識されているものでさえ、種々異なる仕方に依つて、即ち種々異なる把握仕方、明晰度等々に於いて意識されているという事實を姑く措いても——各人にとつて種々異なる野である。以上にも拘らず吾々は隣人達と互いに意思を疏通させ、且つ又共通にひとつの客觀的なる時空的現實を、**吾々すべての、而も吾々自身もそれに属する所の、定在的** *daseinde / factually existent 周圍世界* として措定するのである。

三〇、自然的觀方の總措定

吾々が上來自然的觀方に於ける所与の特性を示すために、又その事に依つて自然的觀方そのものの固有特性を示すために述べた事は、**あらゆる『理論』**以前の純粹記述の一部であつた。理論——茲ではそれは各種の先入見を意味する——をば吾々は此の諸研究に於いては嚴密に遠ざけようと思う。理論が吾々の研究領域に入るのはただ吾々の周圍世界の事實としてだけであつて、現實的なる乃至は思

念されたる妥当の統一としてではない。が吾々は今茲では、純粹記述を続行し、それを高めて自然的觀方（のみならずそれと調和的に組み合され得るすべての觀方）に於いて見出されるものの、体系的に包括的な、即ち広さと深さとを尽す程の特性叙述たらしめる事を課題とはしない。斯くの如き課題は——學問上の課題として——確立され得るものであり又確立されねばならぬものではある。そして又それは従来は殆んど気づかれなかつたとは云え、ひとつの非常に重要な課題ではある。がそれは今吾々の課題ではない。吾々現象學の門戸へと努力しつつある者にとっては此の方面に關しては必要な事はすべて既に成就されている。即ち吾々の今必要としているのはただ、吾々の以上の記述に於いて既に又十分**豊富なる明晰さ**を以て現れた所の**自然的觀方**の全く一般的なる二三の特性に過ぎない。此の豊富なる明晰さこそ正に吾々にとって特に肝要な点なのである。

吾々は左記に重要な点をも一度取り出して置こう。唯一の時空的現實——即ちその中に存しそれに対し同様の仕方で關係している所の他のすべての人間と等しく私自身もそれに属している現實——を、私の対者として恒常的に手前に在るのを見出す。私は『現實 Wirklichkeit / actuality』を——既にその語義から言つて左様であるが——**定在的** *factually existent* として眼前に見出し、そして**それが私に与えられる通りに、やはり定在的として受取る**。自然的世界の諸所与に對する如何なる懷疑や拒否も、**自然的觀方の總指定**ⁱには何等の変化も及ばさない。世界『なるもの』は現實として常に定在する。即ちそれはたかだか此処又は彼処に於いて私が想つたと『別様』であるに過ぎない。即ち此の又は彼の

i 「總指定」 *Generalthesis / general positing* which characterizes the natural attitude 自然的態度がなす「一般的假定・断定」

ものが『仮象』、『幻覚』等々の名称の下に**その世界なるもの**から言わば抹殺されねばならない。茲に世界なるものというのは——総指定の意味に於いて——常に定在する世界の事である。此の世界を、素樸なる経験知識が為し得るよりも更に包括的に、更に、確實にあらゆる点に於いて更に完全に認識する事、即ち素樸なる経験知識を地盤として提出される學的認識の課題のすべてを解く事、此の事が**自然的觀方に立つ諸学の目的**である。

三二、自然的指定 Thesis / Posting の根本的変更、『排去 Ausschaltung / Excluding (排除)』、『括弧入れ』**扱此の自然的觀方に留まる事なく、吾々はその觀方を根本的に変更したいと思う。**今や此の変更の原理的に可能なる事を確める必要がある。

實在的周圍世界が恒常的に、単に一般に把捉的に意識されている許りでなく**定在的『現実』**として意識されているという事の抛つて可能なる総指定の本質は、**勿論ひとつの独自の作用即ち現存に関する明確に言い表されたる判断に存するものではない。**此の総指定は勿論、「自然的」觀方の続く限りの間、即ち自然的に覺めて生活し去っている間絶えず存立しているものである。時折に知覺されたもの、明晰乃至不明に現前化されたもの、約言すれば**自然的世界から經驗的に且つ如何なる思维にも先立つて意識されたもの**のすべては、その全統一に於いても又そのあらゆる鮮明なる輪郭から云つても『そこに』、『手前に』という性格を有っている。此の性格は、此の性格に一致せる表出的 ausdrückliches / explicit (述定的 predicate) なる存在判断 Existenzurteil / judgment of existence が本質上それを基礎として築

かれる所のものである。吾々が此の存在判断を陳述しても、而も、吾々の知る所に依れば、此の判断に於いて吾々は、非主題的に、思惟せられずに、述定せられずに、既に根源的経験の裡に何等かの仕方、或は経験されたものの裡に『手前に』という性格として存していたものを、主題として述定的に把握したにすぎぬのである。

それ故、潜在的にして表出的ならざる措定を吾々は表出的なる判断措定と全く同様に取扱う事が出来る。斯くの如き如何なる時にも可能なる処置の一例としては、例えば、デカルトが全然別の目的のために、即ち絶対に疑いなき存在領界を明らかにし尽す意図で企てた所の普遍的なる懷疑試行の如きがそれである。吾々も此の試行から始める。が併し直ちに強調すべき事は、吾々は普遍的なる懷疑試行をこれ——これの本質に就いては確定せるものとして——に依つて明証的に露呈さるべき或る諸点を取り出すための方法的手段としてのみ役立たせたいと欲するにすぎぬという事である。

普遍的なる懷疑試行は吾々の完全なる自由の範圍に属する。というのは、吾々が如何に固く信じているものでも、否十全なる明証を以て確認しているものでも、その各々のすべてに吾々は懷疑を試みる事が出来るのである。

斯くの如き懷疑作用の本質の裡に何が存するかを吾々は熟考してみよう。懷疑を試みる者は何か或る『存在』を、即ち述定的に表明すれば『それは在る！』、『それは斯々の状態である！』等々という事を疑おうと試みる者である。此の場合存在種類には無関係である。例えば彼がその存在を疑わぬところの或る対象が斯々の性質であるか否かということを疑う者は、正にその対象の「**斯々の性質であ**

る」という事を疑っているのである。此の事は勿論疑う事から移して疑う試みに就いても言い得られる。更にまた明らかなのは、吾々が或る存在を疑って且つ同じ意識に於いて（即ち同時という統一形式に於いて）此の存在の基体に措定を施す——随つてそれを『手前に』という性格に於いて意識している——事は不可能である、という事である。同様の事を言い換えれば、吾々は同じ存在質料 *Sensmaterie / material of being* を同時に疑い且つ確実と考える事は出来ぬのである。又全く同様に明らかな事であるが、**手前に在りとして意識されている或るものを疑う試みは措定に対する或るひとつの廃棄を必然的に招来するもの**だという事である。そして正に此の事こそ吾々の関心を有つ点である。これは措定 *Thesis* を反措定 *Antithesis* に、肯定を否定に、転化する事ではない。それは又推量、期待、不決定、懷疑（言葉の如何なる意味に於いても）に転化する事でもない。斯くの如きは無論吾々の自由なる恣意の領分に属してはいない。却つてそれは全然独自のものである。吾々がなした措定を吾々は放棄するのではない。吾々は吾々の確信に何等の変化をも加えるものではない。その確信は吾々が新しい判断動機を導入しない限りそれ自身に於いて何処迄も現にあるが俟でいる。そして斯くの如き動機導入は吾々の正になさざる所なのである。とは言え而も吾々のなした措定はひとつの変様を受ける——即ちそれはそれ自身に於いて現にあるが俟でいるのではあるが、併し吾々はそれを言わば『作用の外に』置き、吾々は『それを排去』し、吾々は『それを括弧に入れる』のである。その措定は、丁

i 「措定を施す」 dem Substrat dieses Seins die Thesis erteilen (英 posit the substrate of this being) 「テーゼを付与」 〓 措定。
存在を疑っているながら、同時に「それを在ると思う」ことは…
ii i schallen sie aus (英 exclude it) 「それをオフに」。渡辺訳 「その定立の流れを止め…遮断するのであり」

度括弧に入れられたものが括弧の中に、排去されたものが排去の聯関の外に在ると同様に、依然猶おそこに在るのである。吾々は之を又次の様にも言うことが出来る。即ち推定は體驗である *positing is a mental process*。併し吾々は推定を『使用しない』。が併しそれは勿論、無意識なる人に就いて「彼は何等の推定も使用しない」と言う場合の如く、欠如の意味であるのではない。然らずして此の用語に於いては、すべての之に並行なる用語に於ける如く、もとの端的推定（それは顕在的な、加之又述定的なる存在推定であると否とを問わず）に附加し、正に独特なる仕方に依つてそれに価値顛倒を加える一定独特なる意識仕方を指示する事を示そうとしているのである。此の価値顛倒は吾々の完全なる自由に属することであり且つ又、推定と並列さるべくして而も『同時』という統一に於いては推定と相容れぬ所の思惟態度のすべてに対し、恰も一般に本来の語義に於ける態度なるもののすべてに対すると等しく、対立するものである。

推定に対し、又吾々の前提する所に依れば或る確實にして且つ持続されたる推定に対し加えられる懷疑試行に於いては、反推定という変様に於いて、又それを以て、即ち**非存在の『推定』**を以て、『排去』がなされる。それ故此の非存在の推定は懷疑試行の随伴的根柢をなしているのである。デカルトに於いては此の非存在の推定は甚だ優勢であつて、彼の普遍的なる懷疑試行は本来は普遍的否定の試みであると言ひ得られる程である。此の事は吾々は姑く措く。というのは、懷疑試行の如何なる分析的要素も、随つて又懷疑試行に対する精密にして十分なる分析も吾々の関心する所ではないからである。吾々はただ『括弧入れ』乃至『排去』の現象だけを剔出しようとするのである。此の現象は懷疑

試行の現象からは特に容易に取り出す事が出来るとはいえ、明らかにそのみに結びついているのではなく、却つて他の現象とも錯綜して、又同様にそれ自身単独にも現れ得るものである。吾々は如何なる措置に關しても、而も又全く自由に、此の独時のエポケーを行う事が出来る。即ち真理に就いての明証なる、それ故に現に不動なる、又時には動かす可^べからざる確信と調和する所の或るひとつの判断中止を行う事が出来る。措置は『働きの外に置』かれ、括弧に入れられる、即ちそれは『括弧に入れられたる措置』という変様に転化するものであり、單なる判断は『括弧に入れられたる判断』に転化するのである。

勿論人は此の意識を『單に想い浮べる』という意識、例えば『ニンフ達が輪舞している』という如き意識と單純に同一視してはならない。此の兩者の意識間の近き親近性は他の方面に於いては明らかに存しているとは言え、現に生き生きとして居り且つ何処迄もその状態を続ける確信に対する排去は後者の意識に於いては何等現れていないのである。況して排去されたる意識は『假定 *Annehmens*』乃至『仮説 *Voraussetzens*』の意味に於ける想い浮べ——普通の曖昧な言い方では『私はそれが斯々である事を想い浮べる *it seems to me* (私はそういう假定をする)』という言葉を以て言い表される——等を指すのではない。

更に注意して置くべき事であるが、上述意識の方面と双關的に、措置される対象性——それは如何なる領域乃至範疇に属するとしても——に關しても亦括弧入れを語るに何等妨げもないのである。此の場合には、此の対象性に關係せしめられている措置は何れも排去され且つその括弧入れの変様に転

化さるべきである、という意味である。精密に見るならば、「働きの外に置く」と言うのは孰れかといえは作用乃至意識の領界に適合するものであるが、それと丁度同様に括弧入れという譬喩は元來寧ろ対象の領界に適合しているのである。

三二、現象学的エポケー

扱吾々は次にデカルトの普遍的懷疑試行の代りに、吾々の嚴密に規定された新しい意味での普遍的『エポケー』を代らせる事が出来るであらう。併し吾々は十分なる根拠を以て此のエポケーの普遍性を制限するのである。何故ならば、若し仮りに此のエポケーが苟くもその可能なる限りに包括的なものであるとするならば、如何なる措定乃至判断も全く自由に変様され、判断の主辞とされ得る如何なる対象性も括弧に入れられ得る故、変様せられざる判断に対する余地、況んや学に対する余地は最早残されないという事になるであらうからである。然るに吾々の目指す所は、ひとつの新しき学的領分、而も**正に括弧入れ**——けれども此の場合是一定に制限された括弧入れ——の方法に依つて獲得せらるべき領分の發見に外ならぬのである。

如上の制限は次の如く一言を以て言い表され得る。

自然的觀方の本質に属する總措定を吾々は作用の外に置く。即ち此の措定が存在の点に於いて包括するあらゆるすべてのものを吾々は括弧に入れる。即ち**それ故此の全自然世界**——これは恒常的に『吾々に對しそこに』、『手前に』在る、そして吾々が勝手にそれを括弧に入れても猶お意識的『現実』

として引き続きそこに残るであろう——を括弧に入れるのである。

斯く私が、私の完全な自由に従つて、上述の如く括弧入れを行う場合に、私は宛もソフィストであるかの如く此の『世界』を否定するのでもなく、宛も懷疑論者であるかの如く此の世界の定在を疑うのでもない。私の行うのは、私をして時空的定在に関する如何なる判断をも全然差し控えしめる所の『現象學的』エポケーなのである。

それ故此の自然的世界に関するすべての学を、仮令それが私に如何に確實に思われ、私がそれを如何に嘆賞し、又私がそれに毫末の抗議でも加えよう等とは思ひも寄らぬとしても、私はそれを悉く排去するのである。即ちそれ等すべての学の妥当を使用しないのである。私は之等の学に属する命題——仮令それが完全に明証的であつても——のただ一つをも採用しない、即ちそれ等命題の何れをも私は受け取らず、その何れをも私は基礎としないのである、——但し此の事は、その命題が、之等の学に於いて然る通り、此の世界の諸現実に関する真理であると解される限りに於いてである事は十分注意すべきである。私がその命題に括弧を施した後にだけ、私はそれを仮定するという事が許される。換言すれば、ただ判断排去という変様せられたる意識に於いてだけであり、随つてその命題が学に於ける命題、即ち妥当を要求し且つその妥当を私が承認し使用する命題であるとして仮定出来るのでは決してないのである。

人は茲に問題となつてゐるエポケーを実証論者の要求するそれと混同しはせぬであらう。そして実証論者は勿論——吾々の信ぜざるを得なかつた如く——己れの要求するエポケーを自ら犯しているの

である。今茲に問題になっているのは、研究の純粹事象性を曇らすあらゆる先入見の排去でもなく、すべての基礎づけを直接眼前に見出し得るものに還歸せしめる事に依つて『理論から自由』な、『形而上学から自由』なひとつの学を規整する事でもなく、又右の如き目的——此の目的の価値に關しては勿論問う所でない——を達するための手段でもない。吾々の要求するものは別の方面に在る。自然的觀方に依つて措定せられたる、即ち經驗に依つて現實的に眼前に見出されたる全世界は——たとい假令それが、現実に經驗されたる世界即ち經驗の聯関に於いて明らかに現れる所の世界である通りに、全く『理論から自由』に受取られても——今は吾々に取つて何等の価値もない。即ちその世界は、吟味されず又論議もされずに括弧に入れられる運命にあるのである。同様にして、此の世界に關する理論や学は、假令実証的乃至その他の仕方で基礎づけられた如何に立派なものでも、すべて右と同一の運命に陥るべきものである。

第二章 意識と自然的現実

三三、現象学的剰余としての『純粋』乃至『先験的意識』への序説

吾々は上來既に現象学的エポケーの意味を了解するに至った。併しその可能的作業は全く不明である。特に不明なのは、エポケーの全領界に対する上述所示の制限に依つて、實際如何程迄エポケーの普遍性に対する制限が与えられているかという事である。すべてのコギト作用を有つ吾々自身をも含む所の全世界が排去されている場合に、抑も何が残存し得るのであるか。

上來の省察を支配する興味はひとつの新しき形相学に関するものなる事は読者の既に知る所である。それ故、事実としての世界こそ排去を受けるが併し形相としての世界は、同様に又如何なる他の本質領界も、排去されはしないという事は読者の先ず第一に予期する所であろう。實際又世界の排去といつても、例えば数系列及びそれに関係する算術の如きものの排去を意味するのではない事は勿論なのである。

にも拘らず、吾々は如上の途を歩むのではない。吾々の目的は又その方面に在るのでもない。即ち吾々は吾々の目的を「真の領域の各々と同様に個体的存在の領域である所のひとつの新しき、即ち從來その特質に関して限界を劃された事のなかった存在領域の獲得」とも呼ぶ事が出来るのである。これが更に詳細には何を意味するかは、後に述べる論定に依つて明らかになるであらう。

吾々は先ず直接呈示の途を進んで、自然的観方に於いて吾々に与えられている我なるもの、意識な

るもの、体験なるもの等の側から考察しよう。何故ならば、呈示さるべき存在は、吾々が本質的基礎に由つて、『一方に』純粹なる『意識の双関者』と他方に『純粹我』とを有つ所の『純粹体験』、『純粹意識』と呼ぶであろう所のものに他ならぬからである。

私は——私、即ち自然的世界に於ける他の人々と同様に現実的人間乃至實在的客観である。私は諸コギタティオ cogitationes 即ち広義及び狭義に於ける諸『意識作用』を為すが、之等の作用は、此の人間の主観に属するものとして、同じ自然的現実の出来事である。同様にその他の私の体験もすべてそれの出来事である——自我作用と特に呼ばれるものは此の体験の変化する流れから全く独特な仕方（のちめ）で閃き出で、相互に融合し、結合して綜合をなし、間断なく変様するのである。最広義に於いては意識という言葉は——勿論此の場合の用法は些いささかか不適當ではあるが——あらゆる体験 *Erlebnisse / mental processes* を総括する。決して迷わぬが故に極めて確実なる習慣に依つて吾々が学的思考に於いても亦執つてゐる如くに、吾々が『自然的観方を執つて』いる場合には、吾々は心理学的反省に依つて見出し得る此の体験なるものを全部實在的な世界出来事、即ち正に心を有するものの体験であると考えゐる。此の心理学的反省に依つて見出し得る体験を單に右の如き体験とのみ見ることは吾々にとつて甚だ自然的であつて、吾々は、今や既に變更されたる観方の可能なる事を熟知し且つ新しき客観範圍を捜し求めているのでありながら、而も上の体験領域が、それから新しき観方に依つて新しき範圍が生ずる所のその当のものなる事には全然気づかない程なのである。吾々が、吾々の視向を此の体験領域へ向けて置かずに、之を転じて、算術、幾何学等々の存在学の領分に新しき客観を求めたのも無論上

述と聯関する事である——勿論斯くしては本来の新しきものを獲得する事は不可能であろう。

以上の故に吾々は視向を緊乎と意識領界に向けて置いて、吾々が**此の領界**に於いて内在的に見出すものは何であるかを研究するのである。先ず第一に——未だ現象学的判断排去を行わずに——吾々は意識領界に対して、決して完璧ではないが併しひとつの体系的なる**本質分析**を施して行こう。吾々にとつて是非必要な事は、**意識一般の本質**に対して、及び特に又、それ自身に於いて、即ちその本質からみて『自然的』現実が意識される限りの意識の本質に対して、或る普遍的洞観 Einsicht / insight をなすという事である。吾々は此の研究に於いては、吾々の目指すべき洞観を行うに必要なる限り研究を進めよう。その洞観とは即ち、**意識はそれ自身にひとつの固有存在を、即ちその絶対的なる固有本質上現象学的排去を蒙らぬ固有存在を有っているという洞観である**。此の故に意識は『現象学的剰余』として残存する。即ち實際に、ひとつの新しき学——現象学——の分野たり得る所の原理的に独自の存在領域として残存するのである。

右の洞観に依つて初めて『現象学的』エポケーはその名に値するに至るであろう。即ち十分意識してエポケーを遂行する事は、**吾々をして『純粹』意識及び更に進んでは現象学的全領域に到達せしめる所の必須的操作であるという事がわかるであろう**。正に此の事に依つて、此の領域及び此の領域に属する新しき学が従来知られずに居らざるを得なかつた理由が明らかになるであろう。自然的観方に於いては自然的世界以外には決して何ものも見られ得ない。現象学的観方の可能なる事が認められ

i 「視向を緊乎」 den Blick festgerichtet auf (英 keep our regard fixed upon the sphere) 「目指しをつつかり」

ず、且つ又此の現象学的観方と共に生ずる対象性を原的に把握せしめる所の方法が完成されなかつた間は、現象学的世界はひとつの未知の、否殆んど予想だにされざる世界たるに留まらざるを得なかつたのである。

吾々の術語に就いて猶お次の事を附加して置きたい。今後甚だ屢々論ずるであろう所の『純粹』意識の事を吾々は又**先験的意識**とも呼び、並びに又此の意識が由つて以て獲得される所の操作をも**先験的エポケー**と呼ぶのであるが、之は認識論上の問題群に基づく重要な理由に因つて正当とされる事である。方法的には此の操作は『排去』乃至『括弧入れ』の相異なれる段階に分れるであろう。随つて吾々の方法は段階的還元という性格を採るであらう。此の故に吾々は、しかのみならず加之主として、**現象学的諸還元**——乃至は又その全体統一という点から見て統一的に、現象学的還元なるもの——という言葉を用い、それ故に認識論的見地からしては又先験的諸還元とも称するであらう。兎に角之等及びすべての吾々の術語は、専ら**吾々の**叙述が指定する意味に随つてのみ理解さるべきものであつて、歴史とか読者の用語癖とかの示す所の、何等か他の意味に解さるべきではない。

三四、主題としての意識の本質

吾々は現象学的エポケーに努めざる範圍内に於ける一聯の考察から始めよう。吾々は自然的なる仕方『外界』に向つて居り、且つまた吾々の我 Ego【自我】及び我の体験 *its mental living* に対し、自然的観方を棄てることなしに、心理学的反省を施すのである。吾々は、あたか恰も吾々が新しき種類の観方に就

いて何事も知らない場合に為すであろうと全く同様な風に、『或るものに就いての意識』の本質に沈潜する。（此の意識に於いて吾々は例えは物質的な物、身体、人間の定在、技術的作品、文學的作品の定在等々を意識している）。吾々は吾々の普遍的原理即ち「如何なる個体的出来事も、形相的純粹さに於いて把握され得る所の、且つ此の純粹さの点から見て、可能的なる形相的研究の分野に属さねばならぬ所のそれ自身の本質を有っている」という原理に随う。それ故『我在り』、『我思惟す』、『我は我に對立してひとつの世界を有つ』等々の如き一般的なる自然的事實も亦その本質内実を有っている。そして今吾々は専ら此の本質内実のみを取扱いたいと思うのである。それ故吾々は実例として任意の個別的意識體驗を——自然的觀方に於いて与えられる如く實在的な人間的事實と解して——行おう。或はまた吾々は右の如き意識體驗を回想乃至は自由に仮構する想像に依つて現前化しよう。斯くの如き実例を基礎として——吾々は此の基礎を完全に明晰なるものとして前提する——吾々は吾々の関心する純粹本質を十全なるイデー化に依つて把握し確定する。その時個別的事實、自然的世界一般的事實性は——吾々が純粹に形相的な研究を行う場合には常に然る如く——吾々の理論的視野から消え失せるのである。

更に吾々は吾々の主題を制限しよう。吾々の主題の標題は「意識、或は更に明らかに、非常に広い意味に於ける——此の意味を精密に定義する事は幸い当面の問題でない——意識體驗一般」というのであった。右の精密なる定義は、吾々が茲に行う種類の分析の始めに於いて存するものではなくして、大なる労苦の後に来る成果である。出発点として吾々は、先ず第一に現れる含蓄深き意味——デ

カルトの**コギト**即ち『我思う』という語に依つて最も簡潔に表される所の意味——に於ける意識を採ろう。周知の通り、コギトという語はデカルトに於いては『我知覚す、我回想す、我想像す、我判断す、感情す、欲求す、意欲す』の各々、従つて無数の流動的特殊相に於ける何等か之と類似の自我体験のすべてを包括する如き広い意味に解された。吾々は我そのもの——即ち自我体験がすべてに關係して居り、或はその我が自我体験に『於いて』非常に種々なる仕方では『生活』し、能動的、受動的、自発的であり、又受容的及びその他の仕方では『態度を取る』所のその我——斯くの如き我は之を差し当り考察の外に置く。即ちあらゆる意味に於ける我を考察の外に置くのである。我に就いては吾々は後に至つてなお根本的に取扱おう。今のところでは、分析と本質把握とに根拠を与えるには外に十分材料がある。その場合吾々は直ちに、意識体験 *Bewußtseinserlebnis / mental processes of consciousness* なる概念を特に諸コギタテイオと呼ばれるものの此の圈内以上に拡張せざるを得ざらしめる所の包括的な体験聯関を考察せねばならぬ事を覚るであらう。

意識体験を吾々は**具体性の全く豊富な所で**考察する。意識体験は此の具体性と具体的聯関——**体験の流れ**——を成して現れるのであり、そして意識体験はその固有の本質に依つて互いに結合して此の具体的聯関を成すのである。右の考察をなす場合には、反省的視向の触れ得る体験の流れは孰れも、**固有の、直覺的に把握さるべき本質を**、即ちその**固有性自体**に於いて觀察される所の『内容』を有つているという事が明証となる。吾々に取つて大切なのは、コギタテイオの此の固有内実をその**純粹なる固有性**に於いて把握し且つそれを普遍的に性格づける——随つてコギタテイオがそれ自身に於いて

然かある所のものから見てそのコギタティオの裡に存せざるものはすべて之を除外して然かする——という事である。同様にまた必要なのは、**意識統一**を、即ち**諸コギタティオの固有性に依つて純粹に**要求されて居り且つまた此の統一なくしては諸コギタティオが在り得ない程にまで必須的に要求されている所の意識統一を性格づけるという事である。

三五、『作用』としてのコギト、非顯在性変様

吾々は実例を以て始めよう。私の前には薄暗がりの中に此の白い紙が在る。私はそれを視、それに触れる。かく紙を知覚的に視たり触れたりする作用は——此処に在る紙に**就いて**の完充 *in this orientation* なる具體的体験として、換言すれば、精確にこれ等の性質に於いて与えられたる、即ち精確に此の比較的の不明晰さに於いて、此の不完全なる被規定性に於いて、私への此の定位に於いて *in this orientation* 現出している所の紙に就いての体験として——ひとつのコギタティオ即ちひとつの意識体験である。自身の客觀的諸性狀即ち空間に於ける延長、私の身体と称する空間物に対する客觀的位置等を有つて此の紙自身はコギタティオではなくしてコギタトウムである。即ち知覚体験ではなくして知覚されたものである。ところで成程知覚されたもの自身が意識体験であるという事は勿論あり得る。が併し、物質的な物——例えば知覚体験に於いて与えられている此の紙——という如きものは、原理的に何等の体験でもなくしてそれとは全く別種の存在種類に属する存在であるという事は明証的である。

更に考察の歩を進めるに先立つて吾々は引例を敷衍^{ふえん}しよう。本来の知覚 (*Wahrnehmen*)、即ち認

知 (Gewahren) としての知覚に於いては私は、対象例えば此の紙へ注意を向けている。即ち私はそれを此処に今存在する此のものとして把握 erfasse / seize upon する。把握とは取り出して把握する事 Herausfassen / singling out and seizing である。言い換えれば如何なる知覚されたものもひとつの経験背景を有つてゐるのである。此の紙の周囲には書物、鉛筆、インク壺等々が、或る仕方ではやはり『知覚』されて、知覚的に其処に、『直観の野』に在る。けれども私が紙に注意を向けている間はそれ等は如何なる注意も把握も——単に第二次的なるそれと雖も——受けていない。それ等は現出はしたのであるが、併し取り出され、それ自身として措定されはしなかつたのである。斯くて物の知覚の各々は一つの**背景直観**——直観という言葉が既に「注意を向けている」という意味を含むとすれば、背景直観 (Hintergrundsanschauungen) は背景観 (Hintergrundschaungen / background-seeings 【背景眺望】) と言い換えても良い——の庭を有つてゐる。之もやはりひとつの『**意識体験**』、約言すれば『意識』、即ち随伴的に観られたる対象的『背景』の裡に実際存しているすべてのものに『**就いての**』意識である。併し此の場合に論じてゐるのは、客観的空間——仮令此の空間は観られたる背景に属するとはいへ——の中に『客観的』に見出さるべきもの、即ちあらゆる物及び物的なる出来事——それは妥当的にして進展的な経験が其処に在りと確定するものであるとはいへ——に就いてでないことは自明的である。論ずる所は専ら『客観に注意を向ける』という様態に於いて行われる知覚の本質に属する所の意識の

i 「それ自身として措定」 *in sich gesetzt* (英 *positd singly for themselves*) : この文から、『措定 *setzt / posit*』が単なる現出以上のものとして意識に上つてゐる事を指していること¹が分かる。

i i 「庭」 *Hof* (英 *halo*) 渡辺訳でも「庭」であるが、英訳は「暈・光背」という意味に取つてゐるのではないか。

庭に就いてだけであり、更に進んでは此の庭そのものに固有なる本質の裡に存するものに就いてだけである。ところでこれには次の事が含まれている、即ち、吾々が『視向』——格別に又單純に肉眼的なる視向なのではなくして『**精神的視向** geistigen Blickes / mental regard』の自由擬向と呼ぶもの、即ち最初に視向を**与えられた**紙から、既に初めから現出して居りそれ故に『含蓄的』に意識されている対象——それは視向擬向 the regard is turned to の【目ざしの向きを変えた】**後には**顕現的に意識されたる即ち『注意して』知覚されたる乃至は『附帶的に認められたる』対象となる——への視向の自由擬向と呼ぶ所の或る変様を、原体験に加える事が可能であるという事が含まれている。

物 Ding / Physical things は知覚に於ける如く回想及び回想に似た現前化に於いても亦意識され、自由想像に於いても亦意識される。孰れも時には『明晰なる直観に於いて』、時には著しき直観性なしに『不明』なる表象という仕方、意識される。即ち之等の場合物は種々なる『性格づけ』に於いて、即ち現実的な、可能なる、仮構せられたる等々の物として、吾々の眼前に浮ぶのである。吾々が知覚体験に就いて詳述した事がすべて、之等の本質的に異なる諸体験に就いても当て嵌まる事は明らかである。之等の意識仕方に依つて**意識された対象**（例えば想像されたニンフ【水の精】）を「それに就いての意識」なる意識体験と混同するという事等は吾々の夢想でもない所である。次に又吾々は以下の事を認めるのである。即ち上述の如きすべての体験——此の体験は常に完充 Σ なる具体性に於いてあるものとする——の本質にはかの注目すべき変様、即ち**顕在的に注意をそれに向けている**という様

i 「擬向」Wendung (英 turning) 多数出てくる言葉で、「方向転換・向きを変えること」微妙に異なる意味で使用される。

態に於ける意識を**非顕在性**という様態に於ける意識に移らしめ又此の逆をも行う所の変様が属しているという事である。或る場合には体験はそれの対象者に就いての言わば『**顕現的**』なる意識であり、他の場合には含蓄的な、即ち単に**潜在的**なる意識である。対象者は知覚に於けると同様に回想乃至想像に於いても既に吾々に対し現れている事はあり得る。併し吾々は、仮令二次的にも、**それに對し未だ精神的視向を『向けて』**いるのではない、況んや特別にそれを『取扱つて』等いるのではない。

上述と同様の事を吾々は、デカルトの引例範圍の意味に於ける任意のコギタテイオに於いて、即ち**思惟、感情、意欲**というすべての体験に對して、確認するのである。但し、次節に於いて明らかになる事であるが、**顕在性**の特性を表す所の「の方に向つてゐる」、「に注意を向けてゐる」という事は感官の表象の諸例——最も簡單なるが故に上來特に引用した諸例——に於ける如く意識客觀に對する選出把握の注意と全く一致するというわけではない。それ等体験のすべてに就いても亦「**顕在的体験は非顕在的体験の『庭』に取り囲まれてゐる**」という事は明らかに当て嵌まる。即ち**体験の流れは決して純粹に顕在性のみからは成り立ち得ないものである**というのである。此の**顕在性こそ正に、吾々の引例圏外に出でざるを得ぬ最廣の普遍化に於いて、また非顕在性に對する既述の対照に於いて、『コギト』なる語即ち、「私は或るものに就いての意識を有つてゐる」、「私はひとつの意識作用をなしてゐる」という事の深い意味を規定するものである。此の確定的概念の嚴密な區別を保持するために、吾々はデカルトの所謂コギト及びコギタテイオという用語を専ら右の確定的概念のために保留するであらう。尤も明確に『**非顕在的**』等々の如き附加語を加えて変様を示す場合は別である。**

『**覚めたる**』 **我**を定義して吾々は「己れの体験の流れの内に於いて、コギトなる種類の形式に於ける意識を連続的に行う所の我」と言うことが出来る。これは勿論、その我はそれ等の体験を絶えず或は一般に述定的表現に迄齎して居り且つ又齎し得るものである、という意味ではない。言う迄もなく動物的なる自我主観も亦在るのである。然るに上述した所に依れば、覚めたる私の体験の流れの本質には、連続的に進行する諸コギタテイオの連鎖は絶えず非顕在性なる仲介に依つて取り囲まれているという事が属している。即ち此の非顕在性は常に顕在性なる様態に移り行くべく待構えて居り、同様に又逆に顕在性は非顕在性に移り行くべく待構えているのである。

三六、指向的体験、体験一般

顕在的意識の体験が非顕在性への移行に依つて受ける変化は如何に徹底的であるといえ、而もその変様された体験は猶おもとの体験と著しき本質共通性を有っているものなのである。各々の顕在的コギトの本質には普遍的に、或るものに**就いての意識**であるという事が属している。曩に詳述した如く、**変容されたるコギタテイオも**、それ自身の仕方では、**同様に意識**であり、且つ又それに対応する変様せられざるコギタテイオの場合と同じものに**就いての意識**である。意識の普遍的なる本質特性はそれ故、変様の場合にも猶お保持されている。此の本質特性を共有する体験はすべて『**指向的体験**』（『論理学的諸研究』の**最広義**に於ける作用）とも称せられ、それは或るものに**就いての意識**である限り此の或

i 「指向的」 intentional (英: intentional) 訳語としては「志向的」が主流。最重要語で「志向」と読み替えた方がよいが。

るものに『指向的に關係されている』と称せられる。

此の場合よく注意せねばならぬ事は、茲に論じているのは何等か或る心理学的出来事——体験と呼ばれる——と或る他の實在的定在——対象と呼ばれる——との間の關係に就いてではなく、乃至は又客觀的現實に於いて一方と他方との間に現れると言われる如き心理学的結合に就いてでもないという事である。然らずして茲に論ずるのは、純粹にその本質から見た体験に就いてであり、乃至は純粹本質に就いてなのである。又本質の裡に、即ち『先天的』に、即ち無制約的な必然性を以て含まれている所のものに就いてなのである。

体験 *mental process* は或るもの *etwas / something* に就いての意識であるという事、例えば仮構は一定のケンタウルの仮構であり、又知覚はそれの『現実的』対象の知覚であり、判断はそれの事態の判断である等々という事、此の事は世界に於ける——特に事実としての心理学的聯関に於ける——体験事實に關してではなくして、イデー化に依つて純粹イデーとして把握されたる純粹本質に關して言われる事である。体験自身の本質の裡には、単にそれは意識であるという事のみでなく、それは何に就いての意識であるかという事及び如何なる規定的乃至無規定的意味に於いて意識であるかという事も亦含まれている。それ故非顯在的な意識の本質の裡にも亦、上に論じた変様——即ち吾々が『以前には注意されなかつたものに対する注意的視向の擬向 *tuning*』と呼んだ変様——に依つてそれは如何なる種類の顯在的コギタティオへ移行され得るかという事が含まれて在るのである。

最広義の体験という時吾々は体験の流れに於いて見出されるあらゆるすべてのを意味する。それ

故單に指向的體驗、即ち顯在的及び潛在的なるコギタティオ——その完充なる具體相に於けるそれ——のみに限らず、此の體驗の流れ及びその具體的諸部分に於ける實的契機に於いて見出し得るものを悉く意味するのである。

即ち容易にわかる通り、指向的體驗の具體的統一に於ける**質的契機の各々がそれ自身指向性なる基礎性格を**、随つて『或るものに就いての意識』であるという特性を、有つてゐるわけではないのである。此の事は例えば、物に対する知覺的直觀に於いて甚大なる役目を演ずる所の**感覺与件**のすべてに就いて言われ得る。此の白紙の知覺という體驗の裡に、更に詳しくは此の紙の白さという性質に關係してゐる知覺要素の裡に、吾々は適當なる視向擬向に依つて白という感覺与件を發見する。此の白は此の具體的知覺の本質に不可分離的に屬する或るものである。即ちそれに**實的なる具體的成分として屬するものである**。それは此の紙の現出的白を示現する内容としては、或る指向性の**所持者**である。けれどもそれ自身或るものに就いての意識であるのではない。丁度之と同じ事が他の體驗与件、例えば所謂**感官的感情**に就いても言われ得る。此の事に就いては吾々は後に至つて更に詳しく述べるであらう。

三七、コギトに於いて純粹我が或るもの『に向けられてゐる事』、及び把捉的注意

指向的體驗に対し更に立入つて記述的なる本質分析を加える事は茲には不可能であるが、吾々は今以下の論述のために注意すべき二三の契機を取り出しておこう。指向的體驗が顯在的であり、それ故にコギトという仕方で行われている場合には、主觀はその體驗に於いて指向的客觀に『向つて』ゐる。

コギト自身にはそれに内在的な「客観『への視向』」が属している。此の『への視向』は他方又『我』から発出する。それ故此の我は決して欠如するを得ないものである。或るものへの此の自我視向は夫々の作用に従つて、即ち知覚に於いては知覚的な、仮構に於いては仮構的な、適意 *liking*【気に入る】に於いては適意的なる、意欲に於いては意欲的な等々の『への視向』となる。それ故これは次の事を意味する。即ち、コギト即ち作用そのものの本質に属する所の此の「視向の中に、即ち精神的なる眼の中に有つ」という事はそれ自身又独自の作用であるのではない、そして特に知覚（如何に広い意味に於ける知覚でも）とは混同すべきでなく、且つ又知覚に親近なる他の如何なる種類の作用とも混同すべきでない、というのである。注意すべきは、意識の**指向的客観**（それは意識の完充なる双関者という意味）は決して**把握された客観**と同じものを指すのではないという事である。吾々は「把握されている」という意味を客観（対象一般）の概念に無造作に含ましめる習慣がある。というのは吾々は、その概念に想い及び、その概念に**関して**或る事を言うや否や、直ちにその概念を「把握されたもの」という意味に於ける対象としてしまうからである。最広義に於いては把握という事は、特別に注意しているか或は附帶的に注意しているかは問わず兎に角「或るものに注意する」、「或るものに気が付く」という事と同じである。尠くともこれ等の言葉が普通理解されている所ではそうである。ところが**此の注意乃至把握**というのは、**コギト一般の様態**即ち顕在性の様態を指すのではないのであつて、更に精確に見るならばこれは、未だそれを有たぬ如何なる意識乃至作用と雖もそれを採り得る様なその**特殊的作用様態**を指すのである。作用が此の様態を採ると、その作用の指向的客観は單に一般的に意識

されているのみでも、又精神的にそれに「向けられている」という視向の中にあるのみでもなく、それは把握せられたる即ち気づかれたる客観なのである。吾々が物に向っているのは勿論把握という仕方
方に依るより外は不可能である。すべての『**端的に表象され得る**』**対象性**に於いても亦之と同様である。即ちその場合「向う」という事は（仮令仮構の場合と雖も）それ自身『把握』、『注意』なのである。併しながら吾々は評価の作用に於いては価値あるものへ、喜びの作用に於いては喜ばしきものへ、愛の作用に於いては愛せられたるものへ、行為する場合に於いては行為へ、その孰れをも把握する事なくして向っているのである。指向的客観、即ち価値あるもの、喜ばしきもの、愛せられたるもの、希望されたるものそのもの、行為としての行為等は寧ろ、独自の『**対象化的**』**対向**（「向き直り」）に依つて初めて把握せられたる対象となるのである。成程或る事象に評価的に向っているという事の裡には同時にその事象の把握が含まれてはいる。けれども**評価作用の充満なる指向的関連者をなすのは単なる事象ではなくして、価値ある事象乃至価値なのである。**（此の事に就いては吾々は後更に詳しく述べるであらう。）それ故『或る事象に**評価的に向っている**』という事は直ちに価値を『**対象**——それに関し決定するには吾々が有たねばならぬ如き把握される対象という特別な意味の対象——として**有っている**』という事を意味するものではない。この事はその対象に係するすべての論理的作用に就いてもそうである。

それ故評価的作用という如き種類の作用に於いては吾々は、**二重の意味に於いて指向的客観を有つのである。**即ち吾々は**単なる『事象』と充満なる指向的客観とを区別し、それに対応して二重の指向**

即ち二重の「向っている事」を区別せねばならぬ。吾々が評価の作用に於いて或る事象に向っているとすると、その時その事象へ向っているのはその事象への注意即ちその把握であつて、而も又吾々は——但し把握という仕方によつてではなしに——価値にも『向つて』いるのである。単に事象表象 *Sachvorstellen / objectivating of the thing* のみに限らず、それを取り囲む**事象評価**も亦**顕在性**なる様態を有つものである。

併し吾々は直ちに、事情が斯く簡単なのは正に簡単なる評価作用の場合に於いてだけである、という事を附け加えねばならぬ。一般に情緒作用及び意志作用はより高次的に基づけられている作用であり、随つて指向的客観性も亦複雑化し、統一的全客観性に含まれる客観が対向を受ける仕方も亦複雑化するのである。併し何れにしても次の主要命題の言う所は正当である。

注意という様態は如何なる作用に於いても働いてはいる。併し此の様態が端的なる事象意識でない場合即ち事象に対し『態度を取る』所の進んだ意識が事象意識に基づけられている場合には、事象と完充 *full* なる指向的客観（例えば『事象』と『価値』）とは、同様に又注意 *Achten / heeding* と「精神的視向の中に有つ *Im-geistigen-Blick-haben / having the mind's eye on*」とは必ず互いに別のものとなる。けれども同時に又此の基づけられている作用の本質には変様の可能性が属している。即ち此の変様に依つて該作用の完充なる指向的客観は注意されたる対象となり、此の意味に於いて又『表象されたる *vorgestellten / objectivated*』対象となる。斯くなると此の対象の方では又、表明、関係づけ、概念的理解及び述定に対して主辞として役立ち得るのである。単なる自然事象のみならず、各種の価値及び実践

的客觀、即ち都市、照明裝置ある街路、住宅、家具、芸術作品、書物、道具等々が自然的觀方に於いて、随つて**自然的世界の一部分として**吾々に対立するのは、如上の客觀化に依つてなのである。

三八、作用への反省、内在的知覚と超越的知覚

更に進んで吾々は次の如く附加しよう、即ちコギトの裡に於いて活きる時吾々はコギタティオそのものを指向的客觀として意識して有つているのではない、けれどもそのコギタティオは何時でもそうなる事が出来る、即ちコギタティオの本質には、『**反省的**』**視向擬向** *Blickwendung / turning of regard*（勿論新しきコギタティオ——それは端的把握という仕方で前のコギタティオに向けられる——という形での視向擬向）の原理的可能性が属している。換言すれば、如何なるコギタティオも所謂『内部知覚 *inneren Wahrnehmung / internal perception*』の対象となる事が出来、更に進んでは**反省的**評價即ち賞讃乃至非難等々の客觀となり得るのである。これと同じ事が、「印象なる作用」という意味に於ける現実的作用に就いて言われる如く、吾々が想像に『於いて』、回想に『於いて』、或は又他人の作用を了解し追体験しつつ感情移入に『於いて』意識する所の諸作用に就いても亦、適當なる変様の下に言い得られる。吾々は**回想**、**感情移入**等々に『於いて』反省し、それ等に『於いて』意識された作用を把握及び把握を基礎とする「態度を取る作用」の客觀となすことが——種々なる可能的変様に於いて——出来るのである。

吾々は茲には先ず**超越的**なる知覚乃至作用一般と**内在的**なる知覚乃至作用一般との區別に結びつけ

て論述しよう。外部知覚及び内部知覚という言葉を用いる事は、深甚の警戒を払う必要がある故、吾々は之を避けよう。吾々は次の如く説明する。

内在の方へ向けられた作用、更に広くは**内在に關係せられたる指向的体験**という時吾々は、「その指向的対象は、苟くもそれが存在する以上、その体験自身と同じ体験流に属する」という事を己れの本質中に含む体験を意味するのである。それ故此の事は例えば、作用が、同じ私の作用に（コギタテイオがコギタテイオに）關係されている場合、或は同様に作用が、同じ私の感覚的感情与件に關係されている場合等々に於いて常に當て嵌まる事である。意識とその客観とは純粹に体験に依つて打建てられたる個体的統一をなしているのである。

以上の事の現れない指向的体験は**超越の方へ向けられている**。例えば、本質に向けられたる作用のすべて、或は他の体験流を有する他の私の指向的体験に向けられたる作用のすべて、同様に又物に向けられたる作用のすべて、実在一般に向けられたる作用のすべて等の如き之である。此の事は後に示されるであろう。

内在の方へ向けられたる知覚即ち短くは**内在的知覚**（所謂『内部』知覚）の場合には、**知覚と知覚せられたるものとは本質上ひとつの媒介なき統一を、即ち唯一の具體的なコギタテイオの統一をなしている**。此の場合知覚する作用はその客観を自己の裡に蔵しているのであつて、知覚は客観から単に抽象的にのみ、即ち単に**本質的には非独立的なる知覚**としてのみ引き離され得るに過ぎぬのである。知覚されたものが指向的体験である場合、例えば吾々が或る正に生き生きとしている確信を（例えば

「私は……なる事を確信す」と供述しつつ反省する場合の如きに於いては吾々は、二つの体験——その中、少くとも比較的高次の体験は非独立的であり、且つ加之それは比較的、低次の体験に單に基づいている許りでなく同時に又それに指向的に向つてゐる——の抱合を有つのである。

此の種の**実的に『含まれている事』**（之は本来は譬喩にすぎぬ）は**内在的知覚及びそれに基づいて**いる「**態度を取る事**」のひとつの著しき特徴である。此の特徴は指向的体験の内在的關係の上述以外の場合の多くに於いては欠如するものである。例えば回想の如きに於いては固よりそうである。回想されている昨日の回想は現在の回想に対し、後者の具體的統一の**実的成分として一緒に属している**のではない。昨日の回想なるものが**實際は存在しなかつた**という如き場合と雖も、現在の回想はその**固有の、全本質上存在し得る**であらう。ところが併し昨日の回想も、若しそれが**事實存在した場合には**、現在の回想と共に、両者を多様な体験具體相に依つて連続的に媒介する所の、決して中断されていない一にして同じき体験流に、必然的に属するのである。此の点から見て、超越的知覚及びその他の超越に關係せられた指向的体験は明らかに全然別様の状態に在るのである。物の知覚は單にその**実的成分の裡に物そのものを含んでいない許りでなく、それは又物とは——勿論その物の存在は前提されているのであるが——如何なる本質的統一をもなしていない。体験そのものに固有なる本質に依つてのみ規定されている統一としては、ただ体験流の統一があるのみである。**同一の事を換言すれば、**体験は体験とのみ結合して全体——此の全体の全本質は之等体験の固有本質を包括し且つそれに基づいている——をなし得るものである。**此の命題は後に至つて更に一層明晰となり、且つその重要な意義

を獲得するであろう。

三九、意識と自然的現実、『素樸』人の見解

吾々が既に獲得した体験及び意識のすべての本質特徴は、吾々を絶えず指導している目標に達するために、即ち現象学の分野をそれに依つて規定しようと思ふ所のかの『**純粹**』意識の本質を獲得するために、吾々にとつて必須なる第一段階をなすものである。吾々の考察は形相的であつた。然るに体験、体験の流れ、随つて又あらゆる意味に於ける『意識』の本質の個々の单独的事例は、實在的な出来事として自然的世界に属するものであつた。吾々は無論自然的觀方の地盤を放棄したのではなかつた。個体的意識は**自然的世界と二重に**絡み合っている。即ちそれは何等か或る人間乃至動物の有つ意識であり、且つ又、尠くともその特殊相の大多数に於いては、此の世界に就いての意識なのである。扨然らば**實在的世界との此の絡み合いから見るならば、『意識はひとつの『固有なる』本質を有っている、**即ちそれは他の意識に対して、それ自身に完結し、純粹に此の固有本質に依つて規定されているひとつの**聯関、即ち意識の流れの聯関をなしている**」という事は何を意味するのであるか。此の疑問は——吾々は茲で意識を如何に広い意味にも、即ち最後には体験の概念と一致する意味にも解する事が出来る故——体験の流れとそのすべての成素との固有本質性に關するものである。先づ第一に、物質的世界は如何なる点に於いて体験と原理的に別種な、**体験の固有本質性から除外されたものである**というのであるか。物質的世界が若しかかるものであるならば、即ち全意識及びその固有本質性に対し『疏

遠なるもの』、『別の存在』であるならば、如何にして意識は此の物質的世界と絡み合い得るのであるか。物質的世界、従つて意識に疏遠なる全世界と絡み合い得るのであるか。「従つて」という理由は、人の無論容易に確信できる通り、物質的世界は自然的世界の任意の一断片ではなくて、爾他すべての實在的存在がそれに**本質的に**關係されている自然的世界の基柢層をなすものだからである。此の物質的世界に猶お欠如しているものとして人間の心及び動物の心がある。そして此等の心が導入する新しいものは先ず第一に、それ等の心がその周圍世界に対し意識的に關係されることに依つて『体験する』という事である。とはいえ此の場合意識と物性とは結合せられたる全体をなしている。即ち吾々が「心を有てるもの」と呼ぶ所の個々の心的・物的統一体に於いて結合されて居り、最高段階に至つては、**全世界の實在的統一**体に於いて結合されているのである。全体の統一はその部分の固有本質に依つて統一的となつてゐるより外仕方がないであらう。随つてその部分は原理的異質性でなく何等かの**本質共通性** Wesensgemeinschaft / community of essence を有たねばならない。

事情を明らかにするため吾々は究竟的源泉 ultimate source を探し求めよう。即ち私が自然的觀方に於いて行ふ所の世界に対する總措定 general positing がその養分を汲み取る源泉、従つて、私が定在的なる物の世界を私に對立するものとして意識に依つて眼前に見出す事、即ち私が此の世界に於ける私に對しひとつの身体を歸しそれ故に私自身を此の世界に組み入れ得る事、此の事を可能ならしめる所の**究竟的源泉**を、探し求めるのである。此の究竟的源泉は明らかに**感性的經驗**である。併し吾々の目的に

i "die es also ermöglicht, daß .. " 渡辺訳は「これらを可能ならしめる所の總措定」の源泉を探す、と読む。

取つては**感性的知覚**を考察すれば十分である。蓋し感性的知覚は経験諸作用の中に在つて或る正しい意味に於いて原経験——他すべての経験作用は基礎づける力の主要部分を此の原経験から得て来る——の役目を演ずるものであるからである。如何なる知覚意識も、**個体的客観**——それは又純粹論理的意味に於いては個体乃至個体の論理的・範疇的転化である——の**有体的自体現在**（*own presence "in person"*）の意識であるという固有性を有っている。感性的なる、即ち更に明瞭には、物的なる知覚に関する所の吾々の場合に於いては、論理的個体は物なのであつて、物の知覚を、（特性、経過等々に就いての）他の知覚のすべての代表者として扱えばそれで十分である。

吾々の自然的なる覚めたる自我生活は絶えざる**顕在的乃至非顕在的知覚**である。物の世界と、その世界に於いて吾々の身体とは、絶えず知覚的に**定在する**。然らば、**それ自身に具體的存在たる意識そのもの**と、意識に「**対立 over against**」するとし且つ『**アン・ウント・フル・ジヒ un und für sich / in itself and by itself**】（即且対自的）』なりとして意識に依つて意識されたる存在即ち**知覚されたる存在**、との両者は、如何にして互いに分離し且つ分離し得るのであるか。

私は先ず『素樸』人として省察してみよう。私は物そのものをその有体性に於いて視且つ把握する。勿論私は時々誤まる。而も単に知覚された性状に就いてのみに限らず定在そのものに就いても亦誤まる。錯覚乃至幻覚に陥るのである。その時知覚は『**真の**』知覚ではない。併し若し知覚が真の知覚である場合には、即ち換言すれば、若し知覚が**顕在的**なる経験聯関に於いて、時に依つては正確なる経験思惟の助けを藉りて『**確証**』される場合には、知覚された物は**現実的にあり**、知覚に於いては現実

的にそれ自身に、即ち有体的に与えられてあるのである。此の場合知覚作用は——若しそれを單に意識として観て身体及び身体諸機關を度外視すれば——宛もそれ自身に本体なき或るもの、即ち空虚なる『我』が己れと顯著に接觸する客觀そのものの方を眺め遣るという空虚なる働き、であるかのように見えるのである。

(一) 上述第一五節(七二—七三頁) 参照【「扱上述の事から」以下】。

四〇、『第一』性質と『第二』性質、有体的に与えられたる物は『物理學的に真なる物』の『單なる現出』

上來私は『素樸人』として、『感性に依つて欺かれて』上述の如き反省を縷説するといふ傾向に従つたとするならば、今度は私は『學的人』として、あの有名な**第二性質**と**第一性質**との區別を想起するのである。此の區別に従えば感官性質という種類の性質は『單に主觀的』であり、幾何學的・物理學的性質のみが『客觀的』であると称せられる。物の色、物の音、物の臭及び味等々は、仮令それが物に於いて如何に『有体的 (i. person)』に、その物の本質に属するものとして、現出しているにしても、それ自身として、又其処に現出しているものとして現実的であるのではないのであつて、或る第一性質に対する單なる『記号』なのである、と称せられる。併しながら若し私が周知の物理学説に想い及ぶならば、私は右の甚だ人氣ある命題の含む思想が恐らく字義通りのものではあり得まいという事を直ちに察知する。字義通りのものといふのは、知覺された物に就いて單なる現出であるのは實際

ただ感性的『という種類の』性質のみなるかの如く考える思想である。此の思想に随えば、感性的性質を控除した後に残る『第一』性質は他の現出せざる第一性質と並んで、客観的に真に存在する物に属するという事になる。斯く解するならば、延長——即ち物体性及び他すべての第一性質の此の本質核心——は第二性質なしには考え得られぬというバークレの古き抗議は無論正當となるであらう。知覚された物の**全本質内実**、それ故に又有体性に於いて其処に存する全物——その性質のすべて及び何時かは知覚され得べき性質のすべてを込めて——はむしろ『**単なる現出**』なのであって、『**真なる物**』は**物理学的なる学**に於ける**物なのである**。此の学が、与えられた物を専ら原子、イオン、エネルギー等々の如き概念に依つてのみ規定し且つまた如何なる場合にも、空間を充たす出来事——数学的表出がその唯一の特徴表示である——として規定する時には、その学は**その故に、有体性に於いて其処に存する物の全内容を超越せるもの**を意味しているのである。然りとすればその学は、物を以て自然的なる感官空間の中に存する物の意味とすらすを得ない。換言すればその学の意味する物理学的空間は有体的なる知覚世界の空間ではあり得ない。然らざればその学も亦無論バークレの抗議を受けるに至るであらう。

それ故『**真なる存在**』なるものは、**知覚に於いて有体的現実として与えられている存在とは、全然且つ原理的に、別様に規定されたもの**となるであらう。蓋し此の知覚に於いて与えられている存在は専ら感性的諸規定——感官空間の規定もやはり之に属する——を具えてのみ与えられているものなのである。**本来的に経験された物**というのは単なる『**これ**』即ち**空虚なるXを示すのである**。そのXと

は即ち数学的規定及び所屬の数学式の所持者となるものであり、且つ又知覚空間の中にはなく或る『客觀的空間』——知覚空間とは此の空間の單なる『記号』である——の中に、即ち單に象徴的にのみ表象せられ得る三次元のユークリッド複素体の裡に現存するものである。

斯くて吾々は次の事を承認しよう。即ち嚮に説いた如く、あらゆる知覚に於いて有体的に与えられたるものは『單なる現出』である。即ち原理的に『單に主觀的』ではあるが而も何等空虚なる仮象ではないというのである。併し兎に角、知覚に於いて与えられたるものは、自然科学の嚴密なる方法に於いて、かの超越的存在——知覚に於いて与えられたるものはその『記号』である——の妥当なる規定、即ち何人にも行われ得且つ明瞭に吟味せられ得べき規定をなすに役立つものである。知覚に於いて与えられたるものそのものの感性的内実はそれ自体に存在する真なるものとは別のものであると言ひ得られる事は依然として事實である。が併し又、知覚せられたる規定の基体即ち所持者（空虚なるX）は物理學的實辭を以てする精密なる方法に依つて規定されるものであるという事も亦確かに依然として言ひ得られるのである。随つて逆に各々の物理學的認識は、可能なる經驗の進行——その經驗に於いて見出される感官物及び感官物的出来事も含めて——を示す指標として役立つものである。物理學的認識は、それ故、吾々すべてがその中に生活し行爲している所のその顯在的經驗の世界に於ける定位を与えるに役立つものである。

四一、知覚の實的成素と知覚の超越的客觀

以上すべてを前提として、**扱何が、コギタティオとしての知覚そのものの具体的なる実的要素に属しているのであるか。**自明なる如くそれは物理学的な物ではない。かかる全然超越的な物——即ち全『現出界』に対し超越的な物——ではない。併し**此の現出界も亦、如何に『単に主観的なる』**世界と呼ばれているにしても、その世界の如何なる個物及び出来事から見ても知覚の**実的要素**に属してはいない。即ち此の現出界は知覚に対しては『超越的』なのである。吾々は更に詳しく此の事を考察しよう。吾々は今率爾にではあるが既に物の超越性という事を言った。**超越的なものはそれが意識される意識に対し如何なる關係に立つか、謎を蔵する此の相互關係は如何に解さるべきであるか——**今度は此の事を更に深く洞見する必要がある。

依つて吾々は物理学の全体及び理論的思惟領分の全体を除外する。吾々は端的直観とそれに属する綜合との埒内——知覚は此の埒内に属する——に留まろう。然る時は、直観と直観されたもの、知覚と知覚物、とは成程その本質上互いに關係されてはいるが、併し原理的必然上、**実的に又本質上一つに結合されてはいない**という事が明証になるのである。

吾々は実例から出発しよう。空間に於ける私の位置を常に変えつつ此の機の周囲を歩き廻りながら絶えず此の機を視ている場合私は、此の一にして同じ機、即ち同一の、全然変化せずにいる機の**有体的定在**に就いての意識を連続的に有っている。併し機の知覚は絶えず変化する知覚である、即ちそれは変化交代する知覚の連続である。私は眼を閉ぢてみる。視覚以外の私の感官は機に対して無關係である。此の時私は機に就いて何等の知覚も有つていない。私は眼を開く。すると私は再び知覚を

有つ。がそれは以前と同じ知覚なのであろうか。吾々は更に精確に之を検しよう。知覚は如何なる場合にも個体的に同一なる知覚として回歸するものではない。新しい知覚を回想と結びつける所の綜合的意識に依つて自同的なものとして意識されて同一のものであるのはただ机だけである。知覚された物は知覚されずとも、又ただ単に潜在的に（曩に述べた非顯在性という仕方で）意識されているという事すらなくとも、存在し得る。而してそれは變化せずに存在し得る。併し知覚そのものはその性質上、意識の絶えざる流動の裡に在り且つ又それ自身ひとつの絶えざる流動である。即ち「知覚の今」は間斷なく變じて「たつた今過ぎ去れるもの」に就いての——「今」に接続する——意識となり、同時に又新しき「今」が閃き出し、以下之を繰返すものである。知覚された物一般と等しく、その部分、側面、契機等に歸属するものも亦、第一性質たると第二性質たるとを問わず、すべて悉く、如何なる場合にも同様なる根拠に由つて必然的に知覚を超越している。視られたる物の色は、原理的に何等色に就いての意識の實的契機でない。即ちその色は現出はするが、併しそれが現出している間その現出は、經驗の証示する所に依れば、連續的に變化し得るのであり且つ又變化せざるを得ぬのである。同一の色が色彩射映の連續的多様に『於いて』現出する。同様の事が感性的性質の各々並びに空間的形態の各々に就いても言われ得る。一にして同じき形（同一なるものとして有体的に与えられたる）は連續的に繰返し繰返し『別の仕方で』即ち常に別の形態射映に於いて現出するのである。此の事はひとつの必然的事情であり且つ又明らかに普遍妥当性を有つものである。蓋し上来吾々が知覚に於いて不變的に現出する物の場合に就いて説明して來たのは、専ら簡單の為に外ならなかつたのである。上

述の事は容易に任意の変化の場合に移して当て嵌め得る事なのである。

同一の物に就いての経験意識——『全面的』なる、即ち連続的統一的にそれ自身に於いて確認される経験意識——は、連続的な現出多様性と射映多様性とのひとつの多様な体系を本質必然的に有っている。此の現出及び射映の多様に於いて、有体的自体所与という性格を具えて知覚に入ってくる対象的契機はすべて一定の連続をなして〔顯現乃至〕^{*}射映するのである。各々の規定性は己れの射映体系を有っていて、物の全体に対すると同様に各々の規定性に対しても亦次の事が言われ得るのである。即ち規定性は、把握する意識即ち回想と新しき知覚とを綜合的に合一する意識に対して——顯在的知覚の連続過程に於いては中断されるにも拘らず——やはり同一の規定性としてそこに在るという事である。

斯くて同時に吾々は、茲に物の知覚と呼ばれる所の具体的な指向的体験の实的要素に、實際に又疑いもなく属しているものは何であるかを覚るのである。物は指向的統一である。即ち互いに融合して行く知覚の多様が連続的に統制されて流れて行く場合に自同統一的 *das identisch-einheitlich / identical and unitary* 【同一的・統一的】に意識されたものである。然るに此の知覚の多様そのものは、本質上上述の指向的統一に聯結している一定なる記述的要素を絶えず有っている。例えば如何なる知覚相にも、色彩射映、形態射映等々の或る一定内実が必然的に属しているのである。之等射映は『感覚与件』に、即ち一定類を有つ独自の領域の与件に、算入される。そして此の与件はそれ等夫々の一定類の内部に於いて、該類の具体的な体験統一（即ち感覚の『野』）に結びついて居り、更には——その仕方

はここでは詳しくは述べられぬが——知覚の具体的統一に於いて『**把握** Auffassungen / *construing*』に依つて生化されて *besetzt sind / animated by* 【生気づけられて】居り、そして此の生化作用に依つて『**示現機能** *presentive function*』を行うのであり、乃至は此の機能と一つになつて吾々が色、形、等々『**の現出**』と呼ぶ所のものを形成しているのである。此のものは、以上の外更に諸々の性格と組み合つて、知覚の**実的**要素をなす。そして此の知覚は一にして同じき物に就いての意識であるが、それが可能なのは、右の把握の**本質**に基礎を置いている——**把握統一**への——**聯結**に依るのであり、更に復**把握**の種々なる統一の本質に基づく——**同一化の綜合**への——可能性に依るのである。

之は厳に注意して居るべき事であるが、色彩射映、滑性射映、形態射映等々の機能（即ち『**示現**』の機能）を行う所の感覚与件なるものは単に色というもの、単に滑らかさというもの、単に形というものの、約言すればすべての種類の**物的契機**とは全く原理的に異なるものである。**射映は射映されたものとは、その名称こそ同じであるが、原理上同一の類に属するものではない。**射映は体験である。ところが体験は体験としてのみ可能であつて、空間的なものとしては可能でない。然るに射映されたものは原理的にただ空間的なものとして可能なるに過ぎぬ（即ち正にその本質上空間的である）のであつて、体験としては可能でない。特に又、形態射映（例えば三角形のその如き）を空間的にして且つ空間に於いて可能なる或るものと考える事もひとつの悖理である。そして斯く考える者はその射映を射映された形即ち現出している形と混同しているのである。扱更に進んで、コギタテイオとしての知覚の種々相異なる**実的契機**（それは知覚を超越せるコギタトゥムという契機に対立する）は如

何にして体系的に完全に区別さるべきであるか、又それ等実的契機はその区分——その区分の或るものは甚だ困難である——に従つて如何に性格づけられるべきであるか。此の事は大なる研究へのひとつの主題である。

(一) 上述第三五節、特に一二九—一三〇頁参照【次に又吾々は以下の事】以下。

*〔一〕内は第二版以後附加。(訳者注)

四二、意識としての存在と実在としての存在、直観仕方の原理的区別

上述考察の結果として、物はその知覚に対し超越的なこと、更には又その物に關係せる如何なる意識一般に対しても超越的なことがわかつた。此の事情はただ単に、物は事實的に意識の实的成分としては見出され得ぬという意味に於いて然るのみでなく、寧ろこれは全くひとつの形相的に洞観し得る事情である。即ち物は**全然制約なく普遍的乃至必然的に**、如何なる可能的知覚に於いても、如何なる可能的意識一般に於いても**実的に内在的な成分として与えられては居り得ないのである。それ故体験としての存在と物としての存在との間には基礎本質的な相違が現れている。体験という領域の本質**(特にその領域の分化なるコギタティオ)には、「それは**内在的知覚に依つて知覚され得る**」という事が原理的に属している。然るに空間物的なるものの本質には「それは**内在的知覚に依つては知覚され得ぬ**」という事が原理的に属している。更に深く分析するならば、物を付与するあらゆる直観の本質には「物として与えられたるものと一緒に物と類比的なる他の所与が、適當なる視向擬向に

依つて把握され得る、即ちその所与は物として現出するものの規整に於ける時には *in the constitution* 【構成に於いて】引き離し得る如き層乃至底層と同様の仕方では把握され得る——例えば種々なる特殊相に於ける『錯視物 *Schdinge / sight thing* 【視覚事物】』の如し——』という事が属している事がわかつて来る。そうであるとするならば、物に類比的なる所与に就いては物に就いてと全く同一の事が言われ得る。即ちそれは原理的超越者であるというのである。

吾々は此の内在と超越との対立を更に少しく深く辿るに先立つて、次の如き注記を加えて置きたいと思う。知覚を別にして、吾々はその本質上その指向的客観——が併しそれは如何なる種類の客観であつてもかまわない——の実的内在を拒否する如き多種の指向的体験のある事を見出す。即ち例えば各々の現前化、即ち各々の回想、感情移入に依る他人の意識の把握等々の如き之である。吾々は勿論此の種の超越を、吾々が今茲に研究する超越と混淆（*こんじょう*）してはならない。内在的に知覚され随つて又一般に体験聯関に於いて見出されるという事ができぬという性質は、物そのものに、即ち吾々が以下更に解明し決定すべき真の意味に於ける各々の實在に、本質的に且つ又全く『原理的（*princ.*）に属している。その故に物そのもの乃至端的なる物は、超越的であると称せられるのである。此の事がすなわち存在仕方の原理的區別そのもの、苟くも存在する限りの最も基本的なる區別、即ち意識と實在との間の區別を示しているのである。

内在と超越との間の斯くの如き対立には、吾々の以下の叙述に依つて示されている如く、与えられ方の原理的區別が属している。内在的知覚と超越的知覚との區別はただ単に一般に、指向的対象即ち

有体的自性 something it itself, "in person" という性格に於いてそこに存している対象が、前者の場合には知覚作用に実的に内在し後者の場合にはそうでないという点に在る許りではなく、寧ろひとつの与えられ方に存する。此の与えられ方は知覚に対するあらゆる現前化変様、即ち知覚に並行なる回想直観及び想像直観へ移つても、適当な変化の下に、その本質的區別を伴っているのである。吾々が物を知覚するのは、何等かの場合に『現実的』に且つ本来的に知覚の裡に『落ちて来る』すべての規定の点で物が『射映』するという事に依るのである。**体験は射映しない。**『吾々』の知覚は物の單なる射映を通してでなければ物そのものに近づき得ぬという事實は、物の偶然的恣意乃至は『吾々の人間的組織』の偶然性であるのではない。然らずして、此の如き性質の存在は原理的に知覚に於いてただ射映を通してのみ与えられ得るといふ事實は明証的であり、且つ又空間物たる性質の本質から取り出され得る。(加之『錯視物』を包含する如き最も広い意味に於いてそうである。) コギタテイオ即ち体験一般は上の事實を拒否するという事も亦等しく此のものの本質から取り出され得る。換言すれば、体験の領域に属する存在者にとつては、『現出』、射映を通しての顕現、という如きものは全く何の意味もない。空間的存在がない場合には、視るという事、即ち種々なる立場から、種々変つた方位に於いて、その際現れる種々なる側面から、種々なる展望、現出、射映等から視るということを云云するのは正に何の意味もない事である。然るに他方、空間的存在一般は或る任意の我にとつて(各々の可能なる我にとつて)ただ上述の与えられ方に依つてのみ知覚され得るといふ事實を本質必然性として必証的洞観に依つて把握するのはひとつの本質必然性なのである。空間的存在は或るひとつの『方位』に於いて

『現出』し得るのみである。此の方位と共に、常に新しき諸方位の体系の可能なる事が必然的に示されている。その新しき諸方位の各々には又、吾々がこれこれの『側面』等々の所与という様に呼ぶ所の或るひとつの『現出仕方』が対応する。現出仕方という言葉を吾々が**体験**仕方の意味に解すると、(が此の言葉は又、今成し終えた記述に依つて明らかなる如く、作用に双關する存在の意味をも有し得る)、それは次の如き意味となる。即ち独特に形成されている**体験の種類**、更に詳しくは独特に形成されている具体的知覚は、その本質上、それ等の働きに於ける指向的なるものは空間物として意識されているという性質を有っている。換言すればそれらはその本質上、一定の秩序ある連統的なる知覚多様——それは何処までも継続できるものであり、従つて決して完結していないものである——へ移行行く事がイデー的に可能であるという性質を有っている。そこで、此の知覚多様の本質構造の裡には、その多様は**調和的に能与なる** *harmoniously presentive* 意識の統一を——而もただ一つの、絶えずより完全に、絶えず新しき側面から、又絶えずより豊富な規定を具えて現れる所の知覚物に就いて——作り出すものであるという事が含まれている。他方に於いて空間物は、原理的に右の如き現出仕方の統一としてでなければ与えられ得ぬ所の指向的統一に外ならないのである。

(一) 吾々は此処で、本書に於いては一般にそうである様に、『原理的』という言葉に嚴密な意味に用いる。即ち**最高の**、随つて又最も根本的な本質普遍性乃至本質必然性に關して用いる。

四三、原理的誤謬の解明

上述の如くであるから、「知覚は——又、物に対する他種類の直観の各々も夫々の仕方である——物そのものには到達しない」と考えるのは原理的誤謬である。此の考えに随えば、物そのものはそれ自体にも又その自体存在に於いても、吾々には与えられて居ないといわれる。各々の存在するものには、それをそれがあるが如くに端的に直観し且つ特にそれを十全なる知覚——即ち『**現出**』を**通しての如何なる媒介をも経ずに**有体的なる自体を与える所の知覚——に依つて知覚するという事の原理的可能性が属しているといわれる。勿論神、即ち絶対に完全なる認識の——随つて亦可能なる十全的知覚のすべての——主観は、物自体そのものに就いての、吾々有限者には許されていない認識を有つてゐるのであるといわれる。

けれども斯かる見解は悖理である。此の見解には、「超越者と内在者との間には何等の**本質上の区別**も存していない」という事、即ち「此の見解の要請している**神的直観**に於いては、空間物は**実的な規整素**〔**実的構成要素**〕を成して居り、それ故それ自身ひとつの**体験**である、即ち神の意識の流れ乃至**体験**の流れに共に属している」という事が含まれている。ひとは「物の超越性は**写像乃至記号**の超越性である」という考えに依つて迷わされる。写像説は屢々激しく論難されて、その代りに記号説が置き換えられる。けれども之等の説は両者共に、**害**に正しくない許りでなく**悖理**である。吾々が見る空間物は、それが如何に超越的であるにも拘らず、知覚せられたもの、即ちその**有体性**に於いて意識に於いて与えられたものである。空間物の代りに写像乃至記号が与えられているのではない。知覚作用をすりかえて記号意識乃至写像意識としてはならないのである。

一方知覚と、他方写像的・象徴的乃至記号的・象徴的な表象との間には、橋渡しの出来ぬ本質上の区別が存している。此の種の表象の場合には吾々は或るものを、その或るものが他の或るものを模写し或は記号的に指示するという風に意識して直観する。吾々は直観の野の裡に前者〔即ち模写乃至指示する或るもの〕を有つてはいるが、吾々はそれに向つてゐるのではなくして、基づけられたる把握という仲介を通して後者〔即ち模写乃至記号せられた或るもの〕に向つてゐるのである。斯くの如き事は知覚の場合には、丁度端的回想乃至端的想像の場合と同様に、全く言われない。

直接的直観作用に於いて、吾々は或る『自体 Selbst / it itself』を直観する。此の直接的直観作用の把握の上にはより高次段階の把握は構成されない。それ故、直観されたものがそれに対して『記号』乃至『写像』の働きをなし得る如きものは何も意識されていない。正に此の故にそれは『自体』として直接に直観されてゐると呼ばれるのである。此の自体は知覚に於いては又、回想乃至自由想像に於ける『眼前に浮べる』『現前化せられたる』という変様された性格に対して、なお特に『有体的なる』自体として性格づけられる。若し人が、^(二)之等の本質的に構成を異にする表象仕方と、随つて又それと双関的に、之等表象仕方に対応する所の諸所与とを、普通行われる如くに混淆するならば、換言すればそれ故に端的現前化を象徴化——写像的象徴化たると記号的象徴化たるとを問わず——と、まして況んや端的知覚を他兩種〔即ち写像的と記号的と〕の知覚と混淆するならば、人は悖理に陥るのである。物の知覚は、回想や想像とはちがつて、非現前的なるものを現前化するのではない。物の知覚は現前せしめる、即ち或る自体をその有体的現前に於いて把握するのである。物の知覚は此の事をそれ

固有の意味に随つてなすのであつて、これ以外の事を物の知覚に不当に要求するのはとりも直さず^{あたか}恰もその意味に反するわけなのである。加之、今のうちに、物の知覚に関する場合には、物の知覚の本質には、それが射映する知覚であるという事が属している。そして又之と双関的に、物の知覚の指向の対象、即ち物の知覚に於いて与えられているものとしての物、の意味には原理的に、如上の性質の知覚に依つてのみ、それ故に射映する知覚に依つてのみ知覚され得るという事が属している。

(二) 私が『論理学的諸研究』に於いて——私は未だ、当時優勢だつた心理学の見解に余りにも支配され過ぎていた——この端的直観と基づけられたる直観との間の關係に關してなした論述は不十分であつたが、それを私はゲッティンゲン大学に於ける私の講義即ち（一九〇四年度夏学期以降）に於いて改訂増補し、且つ又私の更に進んだ研究に就き詳しく報告した——兎に角此の報告は、用語の上でも内容そのものに於いても學問上諸々の影響を及ぼしたのであつた。『年報』の最近巻で私は、講義に於いて久しく利用した此の及び他の諸研究を公けにし得たいと希つてゐる。

四四、超越的なものの単に現象的な存在、内在的なものの絶對的存在

次に又物の知覚には——此の事も亦ひとつの本質必然性であるが——或る**不十全性**が属している。物は原理的に、ただ『一面的』にのみ与えられ得る。一面的というのは單に任意の意味に於ける不十分乃至不完全という事を意味するのではなく、射映を通しての示現 *Darstellung / presentation* に依つて指定されるものを意味するに外ならない。物は必然的に單なる『**現出仕方**』に於いて与えられる。その

場合『**現実に示現されたもの**』の核は必然的に非本来的なる『**随伴所与** Mitegebenheit / co-givenness』**【其・所与性】**と多少とも曖昧なる**無規定性** Unbestimmtheit / indeterminateness **【未決】**との地平に依つて把握的に**圍繞**されている。そして此の無規定性の意味は更に又「物として知覚されたもの一般乃至そのもの」の普遍の意味に依つて、乃至は、吾々が物の知覚と呼ぶ所の此の知覚型の普遍の本質に依つて規定されている。無規定性なるものは、言う迄もなく、**嚴格に指定された様式の規定可能性**を必然的に意味するものである。無規定性なるものは、可能的なる知覚多様を**预示**しているが、此の知覚多様は連続的に相互融合し、結合して知覚の統一をなすものであつて、此の統一に於いて連続的に持続する物は常に新しき射映系列に於いて何時も何時も新しき（或は逆に遡れば古き）『**側面**』を示すのである。その場合に非本来的に随伴的に把握された物的諸契機は漸次現実的示現に、それ故現実的所与に達して行く。即ち無規定性は次第に細かく規定されて行き結局明晰なる所与に**変ずる**。逆の方向に於いては勿論、明晰なるものは復**不明晰**なるものへ、示現されたものは示現されざるものへ等々と移つて行く。**斯くの如く無限に不完全であるという事が、物と物の知覚との双関関係の否み得ない本質に属している**。物の意味は物の知覚の所与に依つて規定されるのであるならば（物の知覚の所与以外に何が物の意味を規定し得よう）物の意味は上述の如き不完全性を要求する、即ち吾々に、可能的知覚の連続的に統一なる聯関を必然的に指示するのである。この聯関というのは、既に成し遂げられた或るひとつの知覚から無限に多くの方向へ、**体系的に確りと統制されている仕方**で展びて行くものである

i 「把握的」 auffassend (英 is apprehended) 渡辺訳「統握において」。

つて、而も各々の方向へ無限であり、絶えず意味の統一に依つて全く支配されているのである。吾々が経験に於いて如何に遠く進んで行つても、又同一物に就いての顯在的知覚の如何に長き連続を経て来ても、規定せられ得べき無規定性の地平は原理的に、何時も依然として残存する。此の事には神と雖も毫も変更を加え得ない。それは恰も「 $1+2=3$ 」という事、或は又何か或る他の本質真理が存立しているという事に対して神も変更を加え得ないと同様である。

固より一般的に認め得る如く、超越的存在一般はその種類の如何を問わず、或る我に**対する存在**と解される限り、ただ物と類比的の仕方ⁱで、それ故にただ現出を通してのみ所与となり得るにすぎぬのである。でなければ、超越的存在は内在的にもなり得るような存在に外ならぬことになるであらう。然るに内在的に知覚され得べきものは**単に内在的にのみ**知覚され得るに過ぎぬのである。一にして同じきものが或る場合には現出を通して、即ち超越的知覚という形に於いて、他の場合には内在的知覚を通して与えられ得るといふような事を可能と考えるのは、ただ上述の如き、而して今解明せる如き混淆を犯す場合にのみなし得られる事である。

ところで先ず吾々は特殊的に物と体験との間の対照を、猶お別の側面から論述しよう。吾々は既に、**体験** *mental process* は「**示現** *is presented* しない」といふ事を述べた。此の事の裡には、体験知覚とは、或るものに就いての——即ち**知覚に於いて『絶対者』として与えられて**（或は与えらるべく）あるのである。射映に依る諸々の現出仕方を有する同一者としてではない所の或るものに就いての——**端的諦** *i* 手沢本のひとつでは「感性的に射出する *sensuously adumbrative*」との形容を記しているとのこと。
i i おなじく「感性的」との形容を記しているとのこと。

視 a simple seeing of something であるという事が含まれている。吾々が物の所与に就いて嚮に述べた事は一切茲ではその意味を失う。そして吾々は此の事柄を一々完全に明らかにせねばならない。感情体験は射映しない。私が感情体験を眺めるに、それはひとつの絶対者である。即ちそれは、或る場合には斯様に他の場合には又別様に示現し得る如き何等の側面も有つていない。それに就いて私は思惟に依つて、真なる事や偽なる事を思惟する事はできる。けれども、諦視的視向を受けて was in schauenden Blick dasieht / what I see when I look at it 【直觀的目ざしを受けて】其処に存して居るものは、その諸性質、その強度等々を具えて絶対的に其処に在るのである。これに反してヴァイオリンの音は、その客觀的同一性を保ちつつ射映を通して与えられる。即ちそれはその変化交代する現出仕方を有つている。その現出仕方は、私はそのヴァイオリンに近づくか或はそれから遠ざかるか、又私が演奏室そのものの内にいるか或は閉鎖されている扉を通して聴くか、等々に従つて夫々異なつて来る。私の実践的関心の埒内では、或る現出仕方は常態的な現出仕方として或る優位を有つ。即ち例えば演奏室に於いて、『正しい』場所に於いては私は音が『實際に』響く通りに音『そのもの』を聴くという。とはいえ併し、如何なる現出仕方と雖も、絶対能与の現出仕方と言われ得る事を要求する權利はないのである。音に就いてと同様に又吾々は、視覚的関係に於ける物的なるもの各々に就いて、そのものは常態的外觀を有つてゐるという事を言う。即ち吾々は色や形に於いて、即ち全体の物に就いて、それを吾々が常態的な陽光に於いて且つ又吾々に対する常態的な方位に於いて視る場合にはその物は實際の通りに見える、その色は實際の色である等々という事を言うのである。けれども此の事は、人の容易に信じ得ら

れる如く、物の客観化全体の埒内に於ける**一種の第二次的客観化**を指示するに過ぎない。若し吾々が専ら『常態的』な現出仕方にも固執して、その他の多様な現出及びそれに対する本質的關係を切除してしまうならば、物体所与の意味は最早少しも残存しなくなるであろう事は言う迄もなく明らかである。

斯くて吾々は次のことを確認する。現出を通しての所与はその本質上、その所与は何れも一面的示現に於いてでなく『絶対者』として事象を与えるというものではないという性質を有っている。それに反して内在的所与はその本質上、種々なる側面に於いて示現し射映するを得ない所の絶対者をこそ与えるという性質を有っている。更に又、物体知覚の体験に実的に属する所の射映する感覚内容そのものは、成程他の体験に対しては射映の働きをなすが、併しそれ自身が復射映を通して与えられるのではない、という事も亦勿論明証的である。

猶お又吾々は次の区別を注意せねばならぬ。体験 *Erlebnis* / *mental process* と雖も完全には知覚されない、而も決してされない。即ち体験はその全統一に於いて十全的には把握され得ない。体験はその本質上ひとつの流れである。即ち体験の道程の中過去に属する部分は知覚に対し既に失われているにも拘らず、吾々はその流れに反省的視向を向けながら、今という点から出発して泳ぎつつ追い得る所の流れである。吾々が直前に流れ去ったものの意識を有つのは、ただ過去指向の形に於いてのみ、即ち回顧的再回想の形に於いてのみである。斯くて結局私の体験の流れの全体は体験の統一である。が此の

i 「過去指向」 *Retention* で、渡辺訳「過去把持」。英語で、保有、保持力、維持などを意味する。

體驗統一に就いては、十分に『それと共に泳ぐ』知覺的把握は原理的に不可能である。ではあるが併し、體驗知覺の本質に属する所の**此の不十分性乃至『不完全性』**は、『超越的』知覺——即ち射映的示現を通しての、即ち現出の如きものを通しての知覺の——本質の裡に存するそれとは原理的に別個のものである。

吾々が知覺の領界に於いて見出す所のあらゆる与えられ方と、それ等の間の區別とは、**再生的變様**へも——但し變様せられた仕方で——入つて行く。物的現前化は示現に依つて現前化するのであるが、此の場合射映そのもの、把握、斯くて全現象は**徹頭徹尾再生的**に變様されているのである。體驗に就いても亦吾々は、現前化及び現前化に依る反省という仕方で、再生と再生的直觀の作用とを有つのである。勿論吾々は此の場合には、再生的射映は毫も見出さない。

扱吾々はこれと聯關して猶お次の如き対照に就いて述べよう。現前化の本質には、相對的な明晰性乃至不明性という程度的區別が属している。明らかに此の完全性の區別も亦、射映する現出を通しての所与に關する區別とは全く無關係である。表象は、明晰さに多少の差はあるが、程度的明晰性を通して射映するという事はない。というのは即ち、吾々の用語法に對して規定的な意味に於いてそのようなのである。その意味に随えば、空間上の形、それを覆う各々の性質、随つてまた『現出している物そのもの』の全体は——表象が明晰なる表象であるか不明なるそれであるかには拘らず——多樣に射映するものである。再生的なる物体表象はその種々異なる可能的な明晰度を、而も各々の射映仕方に対して、有っている。何人もわかる通り、今問題となつてゐるのは、相異なる次元に存する

所の区別に就いてである。更に次の事も亦明らかである。即ち、吾々が明晰及び不明晰なる視 seeing、判明及び不判明なる視という名称の下に、知覚の領界そのものの中でなす所の区別は、今述べた明晰性の区別に対し、両者共表象されるものの所与の充実性の程度的増加及び減少に關しての区別である限り、或る類比を示している事は事實であるが、併しこの区別も亦相異なる次元に属するものなのである。

四五、知覚せられざる体験、知覚せられざる実在

前節に述べた諸事情に沈潜するならば、体験と物とは両者の知覚可能性の点から見て相互に如何なる關係に立つかというその仕方の方、以下の如き本質上の区別をも亦人は了解するのである。

体験の存在仕方には「諦視的知覚の視向 ein Blick erschauender Wahrnehmung / a seeing regard of perception 【見るといふ知覚の目ざし】は、如何なる現実的体験にも、即ち原的現前として生き生きとしている如何なる体験に対しても、全く直接に向けられ得る」という事が属している。これは『反省』という形で行われる。此の反省なるものは次の如き著しき独自性を有っている。即ち反省に依つて知覚的に把握されたものは、「單に現在存在して居り且つ知覚的視向の範圍内で持続しているのみでなく、此の視向がそれに向けられる**以前に既に存在していた**所の或るもの」として原理的に性格づけられるという独自性である。『体験はすべて意識されている All mental processes are intended to』という事は、それ故、特に指向的体験に就いては次の事を意味する。即ち指向的体験は單に或るものに就いての意識である許り

でなく、又、それがそれ自身或る反省的意識の客観である場合に単に或るものに就いての意識として手前に在る許りでなく、反省せられずして既に『背景』として其処に在り、随つて又吾々の外部的なる視野に在る注意せられざる物と何よりも先ず類比的な意味に於いて、原理的に**知覚さるべく氣構えて**いるものなのである。物が知覚さるべく氣構えて居り得られるのはただ、それが注意せられざる物として既に何等かの仕方で意識されている限りに於いて——ということとは物に於いては「物が現出している場合に於いて」という意味——だけである。ところが物は**すべて**が物の制約を満足させるといふわけには**いかない**。即ち現出するものの全部を掩う所の私の注意という視野は無限ではないのである。他方反省せられざる体験も亦、物とは全然別な、且つ自身の本質に應ずる所の仕方に依つてではあるが、知覚されるべき氣構えの或る制約を必ず充たさなければならぬ。勿論それは『現出する事』はできない。がそれは兎に角として、反省せられざる体験は常に上の制約を充たすのであつて、それは体験の定在の單なる仕方に依つてであり、しかも体験が属する当の我——時には此の私の純粹なる自我視向 Ichblick / Ego-regard が体験の『裡に』働いている——に對してである。反省と体験とは、茲には單に指示したに過ぎない所の之等の**本質上の固有性**を有つてするのであるが、専ら此の故に因つてのみ吾々は反省せられざる体験に就いて、それ故に亦反省そのものに就いても、或る事を知り得られるのである。体験の再生的（且つ過去指向的）変様は上述の性状と並行的なる——但し相應に変様せられたる——性状を有つているという事は自明的である。

吾々は此の対照を一層詳しく論述しよう。吾々の知る所に依れば、**体験の存在仕方は、反省いう仕**

方で原理的に知覚され得るという事である。物も亦原理的に知覚され得るものであつて、私の周囲世界の物として知覚に依つて把握されるのである。が物は知覚されていない時も猶お此の世界に属している。それ故にそれは知覚されていない場合と雖も猶お我に對して其処に在るのである。ではあるが併し一般的に言つて、端的注意の視向 regard of simple heading がその場合の物に向けられ得るというのではない。端的觀察の可能なる野 field という意味での背景の野は、實際單に私の周圍世界の一小部分を占めるに過ぎないのである。『それは其処に在る』という事は、寧ろ次の様な意味なのである。即ち「何時も新しき物の諸々の野を（注意されていない背景として）伴える所の、可能的にして而も連統的、調和的に動機づけられている知覚系列は、現實に現出している所の背景の野を伴える顕在的知覚から更に進んで、正に当該の物がそれに於いて現れ且つ把握されるに至るであろう所のその諸々の知覚聯関に迄到るものである」という意味である。若し吾々が個々の我の代りに複数の我に就いて考えても、此の点は原理的に其の本質が少しも變らない。私の経験世界は、可能的なる相互の意思疏通という關係に依つてのみ他人の経験世界と同一のものとされ得るのであり、同時に又他人の経験の横溢に依つて豊富にされ得るものである。超越性というものの、——即ち超越という故私の時々の顕在的知覚境界との、調和的な動機づけの聯関に依る上述の如き結合を有たぬもの——は、全く根柢なき仮定である。斯くの如き結合を原理的に欠如する超越性はひとつのノンセンスである。それ故、物の世界という顕在的には知覚されていないものが手前に在るということは右のノンセンスの一種である。即ち物

i 底本では「連統的『調和的』となつてゐるが、"kontinuierlich-einstimmig / 英 continuously-harmoniously"」

の世界は、体験という原理的に意識されている存在に較べては本質的に異なる世界なのである。

四六、内在的知覚の疑なき事、超越的知覚の疑わしき事

上來述べた所から重要な帰結が生ずる。内在的知覚の各々はそれの対象の現在を必然的に保証する。反省的把握が私の体験に向う場合には、私はひとつの絶対的な自体——その定在は原理的に否定し得ない、換言すれば、それが存在しないという洞観は原理的に不可能である——を把握しているのである。言い換えれば、**斯くして与えられている体験は実は存在していない**という事が可能であると考えるような事は悖理なのである。私の、即ち「思惟するもの」の、体験流である所の体験流が、仮令如何に広い範圍に互つて把握されていないにしても、即ち過去及び未來の流域に互つて知られていないにしても、私が流れつつある生命をその現實的現在に於いて眺め且つ同時に私自身を此の生命の純粹主觀として把握する（此の事はどういう意味であるか、私は後に至つて特に論述しよう）や直ちに私は、率直に且つ必然的に「**私は在る**」、「此の生命は在る」、「私は生きている」、即ち「コギト」と言うのである。

体験の流れの各々及び我そのものの各々には、右の明証性を得る事ができるという原理的可能性が属している。即ち体験流の各々は己れの絶対的定在の保証を原理的可能性として己れ自らの裡に有っているのである。人或は問うかも知れない、「けれども、我がその体験の流れに於いて有つのはただ想像のみである、即ちその体験の流れはただ単に仮構的直観からのみ成る、というような事も考え

得られるのではないか」と。だからして——と人は言うかも知れない——此のような我は諸々のコギタテイオの仮構のみを見出す、即ちその我の反省は、此の体験媒体 *Erkenntnismediums* の性質の故に、専ら想像に於ける反省だけである、と。併しながらこれは明らかに悖理である。眼前に浮んでいるものは単なる仮構であるかも知れない。けれども眼前に浮んでいるという事その事、即ち仮構する意識はそれ自身仮構されたものではない。そしてその本質には、各々の体験にと同様に、知覚し且つ絶対的定在を把握する反省の可能なる事が属している。私が感情移入的経験に於いて指定【*bestimmen* 措定】する所の他人の意識はすべて存在しないという事の可能性には、何等の悖理も存してはいない。けれども、**私の感情移入作用及び私の意識**一般は、単に本質の上から許りでなく現存の上から言つても、原的に且つ絶対的に与えられているのである。自己自身への關係に於ける我及び体験の流れにとつてのみ此の特別の事情は成立する。即ちその場合にのみ内在的知覚という様なものがあるのであり、又必ずあらねばならぬのである。

それに反して、吾々の知る如く、物の世界の本質には、その世界の範囲内では仮令如何に完全な知覚でも絶対者を与えるものでないという事が属している。そして又これと本質的に聯関している事であるが、如何に広汎な経験でもすべて、「与えられたるものは、それが有体的ありていに自体現在しているという事が絶えず意識されているにも拘らず、現在しているのではない」という事の可能性を許すものであるという事が属している。本質法則として次の事が妥当する。即ち、「**物的現存** *physical existence* は決して所与性に依つて必然的として要求されたる現存ではなく、何等かの意味で常に偶然的なる存

在である」と。此の法則の意味は、經驗が次第に經過して行くとそのために**經驗的權利**を以て措定されたものを放棄すべく余儀なくされるという事が常にあり得る、といふ謂である。即ち後になると、あれは單なる錯覺、幻覺、單なる連絡ある夢等々であつたと言われるのである。のみならず又、此の所与の圈内では、何時でも自由に可能なる事柄として、或る現出を、それと調和的に合一され得ない他の現出に把握し変える、即ち變化させるといふような事がある、と同時に又、先の經驗措定に対する後の經驗措定の影響——それに依つて此の先の經驗措定の指向的對象は後になつて言わば改造を受ける——があるのであるが、此の事實は體驗の領界では本質上皆無の出来事なのである。絶対的なる領界の中には何等の衝突、假象、「他のものである事」、等の存する余地はない。それは絶対的措定の領界なのである。

そこで、次の事は如何なる意味に於いても明らかである。即ち物の世界に於いて私に対して其処に在るものはすべて、原理的に**單に推定的な現実**である。それに反して、此の推定的な現実が對して在る所のその**我そのもの**（『私の中で』物の世界へ算入されるものは除いて）、乃至私の體驗の顯在性は、絶対的なる現実である、即ち制約なき、又全く廃棄し得ぬ措定に依つて与えられているのである。

それ故、ひとつの**『偶然的』措定なる此の世界の措定** *Der Thesis der Welt / the positing of the world* に対つて、ひとつの**『必然的』**なる即ち全く疑なき措定なる私の純粹なる我及び私の生命の措定 *Thesis* が對立するのである。すべての有體的に与えられたる物的なるものは存在しないといふこともあり得る。けれども、有體的に与えられたる體驗は、存在しない事もあるといふ事は不可能である。此の事は、後者

の必然性と前者の偶然性とを定義する所の本質法則である。

けれども、そうかと言つて、各時の顯在的体験の存在必然性が純粹なる本質必然性の、即ち或る本質法則の純粹に形相的な特殊化であるというのでない事は明らかである。即ちそれは事實の必然性なのである。これが必然性と呼ばれるのは、或る本質法則がその事實に、即ち此処ではその事實の定在そのものに關与しているからである。明らかに廃棄し得ぬ**定在** *Daseinssthes* という本質性格を有つ所の反省がイデー的に可能であるという事は、純粹我一般及び体験一般の本質に基づいている。^(一)

以上成し終えた考察に依つて又次の事が明らかにになる。即ち、世界に対する經驗的考察から引き出された証明で、吾々に世界存在の絶対的に確實なる事を保証するという様なものは全く考えられ得ないという事である。世界なるものが疑われ得るのは、調和的經驗の莫大なる力が無いと考えしめる如き理性動機があるという様な意味に於いてではなく、或る懷疑が**考え得られる**という意味に於いてである。そしてそれが考え得られるというのは非存在の可能性が原理的可能性として決して許されぬものでないからである。如何に大なる經驗力と雖も、漸次之に匹敵し又凌駕する事ができる。が、此の事に依つて、体験の絶対的存在という事は少しの変化をも受けない。否体験は右のすべてに對し前提として常に存続しているのである。

吾々の觀察は以上を以てひとつの頂点に到達した。吾々は吾々の必要とする認識を獲得したのである。吾々に明らかとなつた本質聯関の裡には、吾々が意識の領分即ち体験の存在領界から自然的世界

の全体を引き離し得るといふ結論を導こうと欲する所の推論に対して最も重要な前提が、既に決定されて在るのである。此の推論に於いて吾々は、デカルトの（目的は全く異なるが）省察の——ただ純粹なる完成には到達しなかつただけの——核心が、今や遂にその權利を得るに至つたといふ事を確信し得るのである。勿論、吾々の最後の目的を達するには後に至つてなお若干の、又容易に提出できる補足を必要とするに至るであらう。今のところ吾々は吾々の歸結を、局部的妥当の埒内で引き出しておこう。

（一）それ故此処に問題とされているのは、本書五〇—五一頁、第六節の第二段の終りに「必然性の意識」

以下か」於いて言及した經驗的必然性の**全く著しい**場合である。此の問題に就いてはなお、『論、研、』新版、

第二卷、第三研究をも参照。

第三章 純粹意識の領域

四七、意識の双関者としての自然的世界

前章の結果に結びつけて、吾々は次の如き考察を行おう。吾々の人間的経験の事實的進行は、吾々の理性を強制して、直觀的に与えられたる物（デカルトのイマギナティオ *imaginatio* 【想像】の物）以上に出てそれ等の物の根柢に或る『物理学的真理』を置かしめる如き進行である。併しそれは又別様の進行でもあり得るであろう。即ちそれは「人智の發達は決して學問以前の段階以上に出てた事もなく、又將來も出でないであろう。即ち、成程物理学的世界には又それで真理が有るでもあろうが、併し吾々はその真理に就いて何事も知らないのである」という如き進行でもあり得るし、又更に「物理学的世界は實際現に妥当しているとは別の世界であつて、別の法則秩序を具えているであろう」という如き進行でもあり得る。がそのみならず又反對に「吾々の直觀的世界は最後のものである、即ちその『背後』に物理学的世界の如きは全然存しない、換言すれば、知覚物は数学的、物理学的な規定を欠くものである、即ち経験の所与は吾々の物理学の如き種類の物理学の如何なるものをも排除するものである」とも考え得られる。若しそうであるとするとするならば、正にそれに應じて、経験の聯関も亦、物理学上の概念及び判断の構成に基礎となる所の経験の動機づけがなくなるであらう限り、事實現にある経験聯関とは別の、而して類型的に別のそれである事になるであらう。けれども大体に於いて、吾々が『端的経験』という名称の下に包括する能与的直觀（即ち知覚、再回想等々）の埒内で

は『物』は、現出の多様の中に在つて指向的統一として連続的に継続しつつ、今あると同様に吾々に現れて來得られるであらう。

抑吾々は此の方向にならば、勿論更に先へ進んで行く事ができる。物的客観性——經驗意識の双関者としてのそれ——を、頭の中で破壊して行く事には、吾々を阻止する何等の制限もないのである。併し此の場合常に次の事を注意せねばならない。というのは、吾々がそれに就いてのみ供述をなし得る所の、即ちその存在或は非存在、「斯くある」或は「他である」に關してのみ論議し且つ理性的に決定し得る所の物、其の物が何であるかはそれが經驗の物たるに由るのであるという事である。物に對してその意味を指定するのはただ經驗のみである。而もそれは、茲には事實的な物が問題となつて居るのであるから、一定に秩序づけられたる經驗聯関に於ける顯在的經驗である。けれども吾々は、經驗の體驗種類、特に物体知覚という基礎體驗に、形相的觀察を加える事、即ち右の體驗種類からその諸々の本質必然性及び本質可能性を看取し（これは明らかに吾々のできる事である）、随つて又動機づけられたる經驗聯関の本質可能的なる転化をも形相的に辿る事ができるのである。そうする場合には、『現實的世界』と名づけられる所の吾々の事實的經驗の双関者は、多様な**可能的諸世界及び諸非世界**——即ちそれ等は又それ等で、多少とも秩序ある經驗聯関を伴える『**經驗する意識**』という**イデーの本質可能的転化の双関者**に外ならぬもの——の**特殊の場合**となつて来る。それ故人は、意識に對する物の超越性、或は物の『**自体存在**』という言葉に依つて欺かれてはならない。物なるものの超越性の真の概念——これは超越性に關するあらゆる理性的供述の基準である——は、知覚の、

即ち吾々が明示的経験と呼ぶ**一定性質の**聯関の固有的本質内実から以外には、どうしても何処からも得て来る事ができぬものなのである。それ故、此の超越性というイデーは、此の明示的経験という純粹イデーの形相的雙関者である。

此の事は、現実性或は可能性として論ぜられ得べき超越性の、考え得るあらゆる種類に就いて当て嵌まる。**自体に存在する対象は意識及び意識我がそれに没交渉なる如き対象であるのでは決していない。**物とは**周圍世界**の物である。即ち、視られていない物も、又實在可能なる物、即ち経験されてはいないが経験され得る、或は恐らく経験され得るであろう物も、そうなのである。**可經驗性という事は決して空虚なる論理的可能性を意味するのではなくして、経験聯関に於いて動機づけられたる可能性を意味するのである。**此の経験聯関そのものは徹頭徹尾『**動機づけ**』の聯関である。即ち常に、新しい動機づけを取り入れ且つ既に作り上げられたそれを改造して行くのである。動機づけは、その把握の内実乃至規定の内実に従つて夫々異なつてゐる。即ち既に『知られたる』物に關するか或は『全く未知なる』、猶お『未発見なる』物に關するかに従つて、乃至は又視られたる物の場合ではその物に就いて知られたる点に關するか或は猶お未だ知られざる点に關するかに従つて、夫々より多く或はより少く豊富であり、内容上より多く或はより少く明劃的 *legente/definie* 【明確・既定】乃至曖昧である。ここに専ら肝要なのは、可能なるあらゆる方面から純粹形相的に研究される右の如き聯関の**本質形態**のみである。本質なるものの内には次の事が含まれている。即ち、實在的には存在しているが併し猶お未だ**顯在的に**経験されてはいないというものは如何なるものでも、与えられるに至り得るという事、

また、此の事は随つて、「そのものは私の折々の経験顕在性の、現に規定されてはいないが併し規定可能なる地平に属している」という事を意味するという事が含まれている。ところが此の地平は、物の経験そのものに本質上附随する不規定性成分の双関者である。そして此の成分は充実化の可能性を——常に本質上——自由に許すものである。併し此の可能性は決して随意的可能性ではなくして、**その本質類型に随つて範示ⁱされたる**、即ち動機づけられたるそれである。すべての顕在的经验は、自己を超えて可能的経験を指示し、此の可能的経験そのものも復新しき可能的経験を指示し、斯くして無限に進む。而して以上の事はすべて、本質上規定されたる、即ち**先天的類型**「*typen*」に結びつけられている仕方及び規則形式に随つてなされるのである。

實際生活及び経験科学の仮言的推定は、悉く此の可变的なる、併し常に随伴的に措定されている地平——此の地平に依つて世界の措定はその本質的意味を保有する——に關係しているのである。

(一) 次の事を注意せねばならぬ。即ち、動機づけという此の現象学上の基礎概念、即ち『論理学的諸研究』に於いて純粹に現象学的なる領域の抽出を行うと同時に直ちに生じた概念（而して超越的な實在領域に關係せる因果性という概念の対照者として生ぜざるそれ）は、吾々が例えば目的の意欲に就いて「それは手段の意欲を動機づける」と言い得る所以のその動機という概念の普遍化なのであるという事である。なお動機づけという概念は、諸々の本質的根拠から種々に転用される。併しそれがための曖昧さは、現象学的事情が闡明^{せめい}されれば直ちに危険なきものとなり、加之余儀なきものと見えさえる。

i 「本質類型に随つて範示」 *Wesenstypus vorgezeichnete* 渡辺訳「本質典型の面であらかじめ下地を描かれている」

四八、吾々の世界外の世界の論理的可能と事象的悖理

此の世界外に實在者を仮定的に想定する *Annahme* 事は、勿論『論理的』には可能である。即ち此の想定には形式的矛盾は明らかに含まれていないのである。けれども若し吾々が、此の想定が妥当する事の本質制約を、即ち此の想定の意味に依つて要求されている明示仕方を、問題とするならば、即ち或る超越者の措置に依つて——吾々が如何にその超越者の本質を合法的に普遍化しようとも——原理的に規定されている所の明示仕方一般を問題とするならば、吾々は次の事を識るのである。即ちその超越者は必然的に**可経験的**でなければならず、而も、単に空虚なる論理的可能性に依つて案出されたる我にとつてのみでなく、どれか或る**顕在的**なる我にとつて、その私の経験聯関の明示し得る統一として、必然的に可経験的でなければならぬ、という事である。併し人は次の事を洞観できる。(但し茲では吾々は勿論未だ仔細に基礎づけ得る迄には十分論歩を進めて居らず、そうするには後に述べる分析が初めてすべての前提を供するであろう)。即ち、**ひとつの我にとつて可認識的なものは原理的に各々の我にとつても可認識的**でなければならぬ、という事である。各々の我は各々の我と『感情移入 *Einführung / empathy*』乃至相互了解という關係に**事実上**立つて居り又、立ち得るといふのではないが——例えば吾々と極めて遠い星の世界に恐らく住んでいるであろう所の靈あるもの達との場合——、併し原理的に観れば、**ある相互了解を招致する事の本質可能性**、それ故に又、事実上は離れている経験諸世界が顕在的経験の聯関に依つて結合して唯一の共同主観的世界——即ち統一的なる「靈あ

るものの世界」(人間社会の宇宙的拡大)の双関者——となる事の可能性も存立するのである。若し此の事を考慮するならば、此の世界、即ち**吾々の**顕在的経験に依つて**確定**されている**一つの**時空間的世界、の外の實在は形式理論的には可能であるが、併し事象的には悖理である。という事がわかつて来る。若し苟くも諸々の世界、諸々の實在的な物が在るならば、それ等を規整する諸々の「経験の動機づけ」は、上にその一般的性格を示した仕方、私の経験及び各々我の経験の中へ入り得なければならぬ。如何なる**人間的経験**に於いても一定して明示されない諸々の物や物の世界も、言う迄もなく在るのではある、けれども此の在るという事は、此の「人間的」経験の事実的限界内に単に事実的な基礎を有っている事なのである。

四九、世界撥無後の剰余としての絶対意識

上述の事は他方又、一般に或る世界即ち何等かの物が在ら**ねばならぬ**という意味ではない。或る世界の現存とは或る本質形態を特質とする或る経験多様の双関者の事である。けれども、顕在的経験は斯くの如き聯関形式に於いて**のみ**経過し得るという事は理解できない。吾々がかかる事を純粹に知覚一般の本質やそれに関与せる他種の経験的直覚のみから認定する事はできないのである。それに反して次の事は全く容易に考え得られる。即ち、経験が衝突のために仮象に帰するのは単に個々の場合のみではないという事、且つ又事実然る如く、一切の仮象が必ずしもより深き真理を示すわけでもなく、

i 「撥無」 Weltvernichtung (英) Annihilation of the World 否定して排除する。『無化』

一切の衝突が夫々の位置に在つてとりもなおさず全調和性保有の爲めに更に広い範圍の聯関上必要なものであるわけでもないという事である。更に言い換えれば次の事が考え得られる。即ち、經驗は互いに協調不可能なる、而して単に吾々から見てのみならずそれ自身として互いに協調不可能なる衝突に充ち満ちているという事、經驗は、その事物指定 *Dissetzungen / postings of physical things* を調和的に終りまで保持するという期待に対し突如反抗を示して来るという事、經驗の聯関は射映、把握、現出等という固い諸規制を失うという事——即ち最早何等世界というものがないという事——が考え得られるのである。ではあるが又次の様な事もあり得るかも知れない。即ち、以上にも拘らず若干の範圍に於いては粗雜なる統一形成が規整されて、物の直観に対する單なる類比にすぎぬ——というのは保持的『諸實在』即ち『知覚されると否とを問わず夫れ自体に存在する』持続的諸統一を規整する事が全く不可能であるから——如き直観に對しての当座の支点となる、という事である。

扱、吾々が前章の末尾に於いて獲得した結論を茲へ附け加えるならば、即ち、各々の「物の超越性」の本質の裡に存する非存在の可能という事を想うならば、次の事が明らかになる。即ち、意識の存在、各々の「體驗の流れ」一般は、**成程物の世界の撥無に依つて必然的に変様されはるが併しそれ自身の現存在の点では影響がない**、という事である。斯く変様されるということは慥かである。その理由は、世界の撥無という事は双關的に、「各々の體驗の流れ（即ち或る我的體驗の、完充に、それ故（過去未來）兩方向へ無限に解せられた全体の流れ）に於いて、或る秩序ある經驗聯関、随つて又理論化的理性の右經驗聯関に倣う聯関が除却されている」という事を意味するに外ならぬからである。

併しこの事には、「他の体験及び体験聯関が除却されている」という意味は含まれていない。それ故、**實在的存在**——即ち現出を通して意識に依つて示現し明現する *darstellt und ausweist / presented and legitimated* 存在——は体験の流れという最広義に於ける意識そのものの存在にとって必要ではないのである。

内在的存在はそれ故、原理的に現存のために何等の『物』をも必要とせぬ (*nulla »re« indiget ad existendum*) という意味に於いて疑いもなく絶対的存在である。

他方に於いて超越的『物』(»res«)の世界は全くただ意識に、而も論理的に案出されたそれにはなくして顕在的なそれに依属しているのである。

此の事は前諸節に於ける諸論述から極めて一般的には既に明らかになっている。ひとつの超越者が或る経験諸聯関を通して与えられている。此の超越者は、調和的なことを自証する知覚連続に於いて、即ち経験を基礎とする思惟の或る方法的形式に於いて、直接に且つ漸次完全に与えられて、益々進歩して行く明瞭なる理論的規定を多少とも間接的に得て行くのである。吾々は次の事を想定しよう。即ち、意識はそれの**体験内実及び経過**に関しては**實際それ自身**、「意識主観は経験及び経験的思惟の自由なる理論的態度に於いて、上述の如き聯関のすべてを完成し得るであろう」(茲には吾々は諸々の他の我及び体験の流れとの相互的意思疏通という援助をも併せて考えに入れねばならぬであろう)「という性質のものであるという事である、更に進んで吾々は又次の事を想定しよう。即ち、所属の意識諸規制は**實際存立しているであろうという事**、即ち意識経過の側には、或る統一的世界の現出及びその世界に対する理性的なる理論的認識に何等か必要なものは決して何ものも欠けていないという事

である。ところで吾々は問おう、これ等の事すべてを予想した上で、対応する超越的世界が**存在しない**という事は猶**思惟し得る**であろうか、然らずしてそれは寧ろ悖理なのではなからうか、と。

かくて吾々は次の事を覚る。即ち、意識（体験）と實在的存在とは決して同位**の存在種類**——平和に相隣して住まい、時々相互に『関係』し、或は互いに他と『結びつく』如きそれ——ではないという事である。真の意味に於いて互いに結びつき、全体を成し得るのはただ、本質上親近なるもの、両者共に同じ意味の固有本質を有てるものに限る。内在的乃至絶対的存在と超越的存在とは成程両者共に『**存在的**』、『**対象**』等と呼ばれはする。且つ又成程両者共に己れの**対象の規定**内実を有つてはいる。けれども、両者に於いて対象とか対象の規定とか呼ばれるものはただ単に空虚なる論理的範疇上同様な名称を与えられているにすぎぬという事は明白なのである。意識と實在との間にはその意味上真の深淵が口を開いている。後者は、射映する、決して絶対的には与えられざる、単に偶然的にして相対的な存在であり、前者は、必然的にして絶対的な存在、即ち原理上射映や現出を通して与えられざる存在なのである。

かくして次の事が明らかになる。即ち、**人間としての我及びその意識体験が世界の内に實在的に存在する**という事に就いての、また我及び意識体験に『**心的・物的**』**聯繫**から見て何等かの仕方**で属するすべてのものに就いての言説は、それ自身の意味に於いては如何に十分に基礎確実なるものであるにしても、——而もそれにも拘らず意識は、『純粹性』に於いて眺められるならば、それ自身に完結せる存在聯繫と見做されねばならない。即ち何ものもそれに侵入しそれから逸脱するを得ない絶対**

的存在の聯関と見做されねばならない。此の聯関は何等時空間的な外界を有たず又何等右外界内の時空間的聯関に於いて在る事のできぬものである。即ち如何なる物からも因果性を受けず且つ如何なる物にも因果性を及ぼし得ぬものである、——但し茲に因果性とは、普通の意味のそれ、即ち諸實在間の依属關係としての自然的因果性を指す事を前提とする。

他方に於いて、人間や人間としての我が、下屬する個々の實在として算入される所の**時空間的世界**の全体は、**その意味上單なる指向的存在**である。それ故意識に**對して**の存在という單なる**第二次的**、**相對的**なる意味を有つ存在である。それは意識が己れの經驗に於いて指定する存在、即ち原理的にたゞ、**〔調和的に〕***動機づけられたる現出多様中の同一者としてのみ直觀し得られ規定し得らるべき存在である——併し**それ以上に出れば**それは無なのである。

*「調和的」(einstimmig) という言葉は一九二二年版にだけ附加されていて、一九一三年の初版にも一九二八年版にも見えていない。(訳者注)

五〇、現象學的觀方と現象學の分野としての純粹意識

上述の如くにして、存在という言葉の普通の意味は逆になつて来る。吾々にとつて**第一のもの**たる存在はそれ自身には**第二のもの**である。換言すれば、存在が存在であるのはたゞ**第一のものへの『關係』**に於いてのみなのである。こう言つても併し、**盲目的規法**(Gesetzesordnung **【法則秩序】**)に依つて、物の秩序と結合 (ordo et conexio rerum) が觀念の秩序と結合 (ordo et conexio idearum) に従わねばなら

ぬ、という事にされたという様なわけではない。實在、即ち単独に見られた物の實在並びに又全世界の實在は、本質上（吾々の厳密な意味に於いて）自立性を欠くものである。それは、それ自身に於いて）或る絶対的なものであつて他のものへは第二次的に結びつくというのではなくして、絶対的な意味に於いては全く無なのである。即ちそれは全く何等の『絶対的本質』をも有っていない。換言すればその有つてゐるのは、原理的に**単に**指向的なにすぎぬもの、**単に**意識されたにすぎぬもの、意識に依つて表象されるもの、現出するもの、等である所の或るものの本質性なのである。

抑吾々は、再び第一章即ち現象学的還元についての考察に立ち戻つて考えてみよう。今や次の事が明らかである。即ち、世界を双関者とする自然的なる理論的観方に対して實際ひとつの新しい観方、即ち此の心的・物的なる全自然を排去しても猶お且つ或るもの——絶対的意識の全分野——を殘存保持する所の観方、が可能であるに違ひないという事である。それ故吾々は、経験の裡に素樸的に活き、且つ経験されたもの即ち超越的自然を理論的に研究するということをせずに、『現象学的還元』を行うのである。言い換えれば、自然を規整する意識に属する諸作用（超越的指定を有つ）を素樸的な仕方**で遂行し**、且つその作用に含まれてゐる動機づけに誘われて常に新しき超越的指定を行うという事をせずに——吾々はこれ等すべての指定を『作用の外に』置く、即ち吾々はそれ等すべてと関らないのである。換言すれば吾々は吾々の把握し且つ理論的に研究する視向を**絶対的な獨自存在に於ける純粹意識の方へ向ける**のである。それ故その純粹意識こそ、求められたる『現象学的剰余』として殘存する所のもの、吾々がすべての物、生物、人間（吾々自身をも込めて）を含む全世界を『排去』し

てしまつても猶お且つ残存する所のものなのである。吾々は実は何ものをも失つたのではなくして、絶対的存在の全体を獲得したのである。此の絶対的存在は、正しく解すれば、すべての世界的超越を己れの裡に蔵し、それを己れの裡に於いて『規整する konstituieren』ものである。

上の事を吾々は仔細に明らかにしよう。自然的觀方に於いては吾々は、それに依つて世界が吾々に對して其処に在る所のそのすべての作用を、無造作に**遂行する**。吾々は素樸的に知覺や經驗の裡に活きる。即ちこれ等の措定的作用 thetischen Akten / acts of positing——それに於いて吾々に諸單一物が現出して居り、而も單に現出するのみならず『手前に』、『現實的に』という性格に於いて与えられている——の裡に活きている。自然科学を研究する時吾々は、經驗論理的に秩序づけられたる思惟作用を**遂行する**。此の思惟作用に依つてこれ等の与えられたる俚に受け取られたる現實が思惟的に規定され、又それに依つて斯くの如き直接に經驗され、且つ規定された超越を基礎として新しい超越へ推論される。現象學的觀方に於いては吾々は、コギタテイオに於ける斯くの如きすべての措定 Thesen の**遂行**を原理的に普遍的に**制止する**。換言すれば遂行された措定を『吾々は括弧に入れる』。新しき研究のために『吾々はこれ等の措定に関らない』。即ちそれ等の措定の裡に活き、**それ等の措定**を遂行する事をせずして、吾々はそれ等に向けられたる**反省**という作用を遂行し、そして吾々はそれ等そのものをそれ等が然かある所の**絶対的存在**として把握するのである。今や吾々は徹頭徹尾斯かる第二段の作用の裡に活きるのである。此の作用に對する所与は絶対的體驗の無限の野——**現象學的基礎分野**——である。

五一、先驗的予備考察の意義

反省は勿論何人も遂行し且つ意識内に於いて己れの把握的視向に齎^{もたら}す事ができる。けれども、それでは未だ**現象学的**反省が遂行されたのでもなく、その把握された意識が純粹意識であるのでもない。それ故、自然の成素でない純粹意識一般の野という様なものがある、否あり得るという事、及びそれは自然の成素等ではなくして、自然はただ純粹意識に於いて内在的聯関に依つて動機づけられたる指向的統一としてのみ可能であるという事——此の認識に達するには、吾々が上来成しとげた様な根本的考察を必要とする。更に又、右の如き統一は、此の統一を『規整する』意識、——随つてあらゆるすべての絶対的意識一般——が研究せらるべき場合の觀方とは、全然別な觀方に於いて与えられて居り且つ理論的に研究さるべきであるという事を認識するにも、此の根本的考察が必要である。最後に吾々が自然科学的に基づけられたる世界觀という美名の下に徒らに困憊^{こんぱい}しつつある哲学の窮状に當面して、「意識の先驗的研究は——その先驗的觀方に於いて自然は原理的に括弧に入れられている故——自然研究を意味する事も或はそれを前提として予想する事もできぬ」という事実を明らかにするにも右の根本的考察が必要である。即ち、吾々が現象学的還元という形に於いて全世界を度外視する事は、包括的な聯関——必然的たると事實的たるとを問わず——の成素の單なる捨象とは全然別ものであるという事を認識するためには、右の根本的考察が必要なのである。若し意識體驗が、恰も色^{いろ}が延長なくしては考え得られぬと**同じ**様に、自然と組合わせなければ考え得られぬものとするならば、吾々は意識を、吾々の考えねばならぬ如き意味で絶対に独自なる領域としてそれ自身に觀る事はでき

なくなるであらう。けれども人は、右の如き『捨象』に依つては自然からは單に自然的なるもののみが得られるにすぎぬのであつて、先驗的に純粹なる意識は決して得られぬという事を洞觀せねばならない。更に又、現象學的還元とは、判断を單に全現實的存在の聯繫内の断片に制限するという意味ではないのである。特殊的現實科学のすべてに於いては、理論的關心は全現實界の特殊範圍に限られてゐるのであつて、その他の範圍は、彼之相結ぶ^{かれこれ}實在的關係の故に仲介的研究の必要に迫られない限り、何処迄も顧みられずに居るのである。此の意味に於いて、力学は光學的現象を、一般乃至最広義の物理學は心理學的なるものを、捨象するのである。併し、如何なる自然科学者も知つてゐる様に、右の故に現實界の範圍が分離して居るというものではないのであつて、全世界は結局唯一の『自然』であり、そしてすべての自然科学は一個の自然科学の分枝をなしているのである。が、絶對的本質態としての體驗の領分に関しては、事情は基礎本質的に異なる。此の領分はそれ自身に固く完結して居りながら、而もそれを他の領域から分ち得る様な限界は有たない。何故ならば、仮令此の領分を限界する様なものがあるとしても、それも猶お此の領分と本質上の共有性を共にせざるを得ないであらうからである。然るに此の領分は、吾々の分析の示した一定の意味に於いての、絶對的存在なるものの全体なのである。此の領分はそれの**本質上**、如何なる世界的、自然的存在からも獨立であり、そして又その**現存**のためにも此の世界的、自然的存在を必要としない。自然の現存は無論それ自身意識の双關者である事は明らかなのであるから、意識の現存の方を制約することは**できない**。自然は單に、統制ある意識聯繫に於いて規整されるものとしての**み存在する**だけなのである。

注記

吾々は茲に序^つでを以て次の事を言つておきたい。がそれは、誤解を防ぐために言おうと思うのである。扱、若し諸々の個々の場合に向つて分化する意識過程の、与えられた秩序を成せる事実性と、それ等の個々の場合に内在する**目的論**とが根拠ある機因となつて、正に此の秩序そのものの基礎に對する疑問が提出される場合には、理性上恐らく仮定されるであらう如き**神学的原理**をば、**世界という意味に於ける或る超越**と解する事は本質上の根拠から可能でない。蓋し若しそう解するならば、吾々の確認から改め明証的に帰結する如く、それはひとつの悖理なる循環論であらうからである。絶対者の秩序原理は、絶対者そのものの裡に、又純粹に絶対的な考察の裡に見出されねばならない。換言すれば、現世神というものは明白に不可能である故に、且つ又、他方神が絶対的意識に内在するという事は体験としての存在という意味に於いての内在とは解し得られない（そう解する事も亦同様に悖理であらう）故に、絶対的な意識の流れ及びその無限性の裡には、調和的現象の統一としての物的實在を規整するとは別の仕方の超越の立証がなければならぬのであり、且つ結局又、理論的思惟が適合する所の直覺的立証——若し此の思惟に理性的に従えば、仮定された神学的原理の統一的支配が理解され得るであらう——がなければならぬのである。斯くて又次の事も明白になる。即ち、此の支配は、因果性の自然概念——即ち實在と實在の特殊の本質に属する機能的聯関とに合うように調子を下げられた概念——という意味に於いては、因果的支配であるとは解し得られないであらう。

兎に角、上述の事はすべて茲ではこれ以上は吾々には無關係である。吾々の目的は——仮令間接には現象學は神學に対して如何に重要な意味があるとしても——直接には神學に在るのではなくして現象學に在るのである。けれども、上來遂行した基礎的考察も、それが現象學固有の研究範圍として絶對的領域を開拓する上に不可欠であつた限り、現象學に役立つたのである。

五二、補説、物理学上の物と『現出の知られざる原因』

抑今度は、以下の如き補説を加える必要がある。吾々は吾々の考察の最後の一聯を、主として感性的なるイマギナティオの物に対して行つた。そして物理学上の物——この物に対して、感性的に現出する（知覚的に与えられたる）物は『單なる現出』として、恐らくは加之或る『單に主觀的なもの』として働くと言われている——には正當な顧慮を払わなかつた。とは言え併し、嚮の吾々の論述の意味には既に、「此の單なる主觀性は（甚だ屢々なされる如く）體驗の主觀性と——宛も知覚された物はその知覚性質の中にあり、そして此の知覚性質自身は體驗であるかの如くに——混同されてはならない」という事が含まれている。現出する物は『真なる』物理学上の物の仮象乃至不完全なる**写像**であるという事も亦、自然科学者の真意ではあり得ない、（殊に吾々が彼等の言う所でなく彼等の方法の意味に抛つて考えればそうである。）同様に、現出の規定は真なる規定に対する『**記号**』であるという言説も人を誤まるものである。^(一)

抑吾々は更に、広く流布している『**實在論**』の意味に於いて次の如く言う事が許されるであらうか。

即ち、「現実的に知覚された（そして第一の意味に於いて現出する）ものがそれは又それで、それとは内面的に別個にして分離せる他者の現出乃至直観的基構と見做さるべきである」と。理論的に見るならば、此の他者は、現出体験の進行を説明する目的のために仮説的に想定さるべき全く知られざる實在、即ち此の現出の、数学的諸概念に依つて単に間接的類推的にのみ性格づけらるべき隠れたる原因と見做さるべきであろうか。

吾々の一般的叙述（それは吾々のなお進んだ分析に依つて更に遙かに深められ且つ決定的に確認されるであろう）に基づいて既に明らかなる如く、右の様な理論はただ単に、経験に固有なる**本質**の裡に含まれている所の（物的所与、随つて『物一般』の）意味——物に関するあらゆる理性的言説の絶対的規範をなす意味——に真面目に留意し且つそれを学的に討究する事を避ける限りに於いてのみ、可能なるにすぎぬものである。此の意味に反するものは最も厳密に解釈してまさしく悖理なのである。^(三)
そして此の事は疑いもなく、上述の如き型の認識論説のすべてに就いて言い得られる。

「若し知られざる仮託 *angebliche* の【公称の】原因が苟くもあるとするならば、それは、吾々にとつてではなくとも、他のよりよく且つ広く観ずる我にとつては、**原理的に**知覚され得且つ経験され得るに違いないであろう」という事は勿論容易に認証されるであろう。茲に言っているのは決して空虚なる、又単に論理的なる可能性を指すのではなく、内容に富み且つ此の内容に由つて妥当する本質可能性を指すのである。更に進んで示すべき事は、可能的知覚そのものは復、而も本質必然性に依つて、現出を通しての知覚でなければならぬであろうという事、そして吾々はそれ故、避くべからざる無限退行

に陥るであろうという事であろう。なお更に指示すべき事は、知覺的に与えられた出来事を假説的に想定された原因實在に依つて、即ち知られざる物性に依つて説明する事（例えば、遊星の或る摂動を海王星の如き未知の新遊星を想定する事に依つて説明する事）は、經驗された物を物理學的規定の意味に於いて、又原子、イオン等々という風な物理学上の説明手段に依つて説明する事とは、原理的に別ものであるという事であろう。かくて同様な意味で、猶お種々の詳論すべき事柄があるであろう。

吾々は茲では、立ち入つて斯くの如き状態の一切を体系的に遺漏なく論究する必要はない。吾々の目的にとつては、二三の主要点を明らかに取り出せば十分なのである。

論述の手懸りとして吾々は、「物理学的方法に於いては、**知覺されたものそれ自身が、常に且つ原理的に、物理学者が研究し且つ學的に規定する所のまさしくその物なのである**」という吟味し易い確認を取つてみよう。

此の命題は、吾々が物理学者の一般常用語の意味、乃至第一性質と第二性質との伝統的區別の意味を更に精細に規定しようと試みた前述の諸命題に矛盾する様に見える。諸々の明白な誤解を除去した後、吾々は、『本來的に經驗された物』は吾々に『單なるこれ』を、即ち嚴密なる物理學的諸規定——この諸規定自身は本来の經驗の裡へ這入つては来ない——の所持者となる所の『空虚なるX』を与えるものである、という事を述べたのであった。それ故、『物理学的に真なる』存在は、知覺そのものに於いて『有体的』^{ありてい}に与えられたる存在とは『原理的に別様に規定されている』存在であるというのであった。此の知覺に於いて有体的に与えられたる存在は、まさしく物理学の規定ならぬ純粹に感

性的なる諸規定を具えて其処にあるというのであった。

上述の如くであるにも拘らず、上の兩つの論述は互いに甚だよく調和するのであつて、吾々は物理学の見解のあの解釈に強く爭論するを要しない。吾々は此の解釈を、ただ正しく理解する必要があるだけである。吾々は決して、原理的に誤まれる写像説や記号説——それは吾々が嚮に、物理学上の物を特に顧慮してではなかったが、既に考察し、直ちに根本的に普遍的に論破したものである——に陥つてはならない。写像乃至記号はその外の外にあるもの——そのものは能与直観という別の表象仕方に這入つて来る事に依つて『自体に』把握され得るものであろう——を指示する。記号や写像はそれ自身に於いて、記号（或は模写）されたものの自体を『表明する』ものではない。然るに物理学上の物は、感性的・有体的に現出するものと無縁のものではなくして、その現出するものの裡に於いて、而も先天的に（廃棄し得ぬ本質根拠から）**単に**そのものの裡に於いてのみ原的に自己を表明するものである。のみならず、物理学の諸規定の所持者の役をなすXの感性的規定内実も亦、その物理学の諸規定と無縁な、そしてそれを包む、被覆ではないのであつて、むしろそのXは、それが感性的諸規定の主辞である限りに於いてのみは、物理学の諸規定——それは又それで感性的諸規定の**裡に於いて自己を表明する**——の主辞でもあるのである。物、精確には物理学者の論ずる物は、既に詳述した所に依つて、原理的に、ただ感性的にのみ、即ち感性的な諸々の『現出仕方』に依つてのみ与えられ得るのであつて、これ等現出仕方の变化的連続の裡に現出する同一者とは、物理学者が、すべての経験可能なる（それ故知覚されたる或は知覚可能なる）**聯関**——それは『情況 [Erscheinungsweise]』として

觀察され得る——に關係せしめて、因果的分析即ち實在的な必然性諸聯関への探究に附するところのものなのである。物理学者が觀察し、実験する物、即ち彼が常に見、手に取り、天秤に載せ、鎔鋳炉に入れる物、此の物が（そしてこれ以外の物ではなく）——重量、質量、温度、電氣的抵抗等々は此の物にあるのであるから——物理學的實辭の主辭となるのである。同様に又、力、加速度、エネルギー、原子、イオン等々の如き概念に依つて規定されるのは、知覺されたる出来事や聯関そのものである。感性的に現出する物、即ち感性的なる諸々の形、諸々の色、臭いや味の諸特性等を有つ物は、それ故、決して**他のもの**に対する記号ではないのであつて、言わば**己れ自らに対する記号**なのである。

ただ次の事だけは言い得られる。即ち、某々の感性的諸性狀を具え、与えられたる現象的情況の下に現出する物は、**物理学者（普遍的に斯くの如き物一般に対して、斯くの如き種類の現出聯関に於いて、既に物理學的規定を行った物理学者）**にとつては、正に此の物の夥多の因果的特性（それは正に、本性上よく知られている現出の依属性という点から觀て、因果的であるという事がわかる）を示す記号であるという事である。そこに因果的として自己を表明するものは——正に意識體驗の指向的統一に於いて自己を表明するものとして——原理的に超越的なのである。

以上總てに依つて明らかなる如く、**物理学上の物という高次の超越と雖も決して、意識に対しての、或は（單獨的に乃至感情移入の聯関に於いて）認識主觀としての役をなす我に対しての、世界を超える事**を意味するものではないのである。

一般的に略説すれば事情は次の如くである。即ち自然的經驗（或はそれが行ふ自然的措定）の基礎

の上に、物理学的思维は立つものである、そして此の思维は、それに経験の諸聯関を提示する**理性動機に従つて**強制的に、或る把握仕方即ち或る指向的構成を理性的に要求されたものとして遂行し且つそれを遂行して感性的に経験された物に対する**理論の規定**をなすに至るべく余儀なくされる、というのである。正に此の事に依つて、端的なる感性的イマギナティオ【表象上】の物と物理学的インテレクトイオ【知性上】の物との対立が出て来る。そして後者の側に対しては、物理学的概念に依つて表出され、且つ己れの意味を専ら自然科学的方法からのみ汲み取つて居り又汲み取つて宜しい所のイデオ的な存在論的思维成体のすべてが生ずるのである。

かく経験論理的理性は物理学という名称の下に、より高次の指向的雙関者を——即ち端的に現出している自然から物理学的自然を——作り出すのであるが、その場合に若し此の**明瞭な理性所与**を（これは実は、端的・直觀的に与えられた自然の**経験論理の規定**以上の何ものでもないのに）、**知られざる物的實在の世界**（現出を**因果的**に説明する目的のために仮説的に基体として置かれたもの）であるかの如くにそれ自身に樹てるならば、それは神話に耽ると一般である。

かくて人々は、悖理にも、感官上の物と物理学上の物とを**因果性**に依つて結びつける。がそれと同時に又人々は普通の実在論に於いて、感性的現出即ち現出する対象そのもの（それは自身既に超越者である）を、その『単なる主観性』の故に、現出作用即ち経験する意識一般という、右の対象を規整する所の絶対的体験と混同する。人々は尠くとも、**次の形**に於いて何時も右の混同を犯すのである。即ち人々は、宛も客觀的物理学は現出する物という意味に於ける『物の諸現出』をでなく、経験する

意識なる規整的**體驗**という意味に於けるそれを説明するのを任とするかの如くに言うのである。そこで人々は、規整されたる指向的世界の聯関の中に原理的に属し、且つただその世界に於いてのみ意味を有つ所の因果性を、啻に『客觀的』なる物理学的存在と直接經驗に於いて現出する『主觀的』存在——即ち『第二性質』を有てる『單に主觀的』なる感官上の物——との間を結ぶ神話的靱帶としてしまふばかりでなく、不当にも後者からそれを規整する意識へ移行行くことに依つて人々は因果性を、物理学的存在と絶對的意識、殊には經驗なる純粹體驗、との間を結ぶ靱帶としてしまふ。此の場合人々は、真に絶對的なるもの即ち純粹意識そのものは全く認めずに、物理学的存在を或る神話的なる絶對的實在にすり換えるのである。かくて人々は、「物理学的自然、即ち論理的に規定する思惟の此の指向的雙関者を絶對化する」ということに含まれている不条理に氣付かぬのである。換言すれば、此の自然、即ち直接直觀的なる物の世界を経験論理的に規定する所の、且つ又そうする機能に就いては完全に**知られている**所の自然（その背後に何ものかを探すことは無意味である）を、或る知られざる、ただ神秘的にのみ現れる實在——これは**自身**には決して、また如何なる固有規定の点からも、把握され得ない——であるとしてしまい、のみならず次には不当にもその自然に、主觀的現出と經驗する體驗との過程に就いての**原因的實在**という役目を要求しさえする、ということに含まれている不条理に氣付かぬのである。

これ等の誤解に於いて次の如き事情は慥かに尠からずその原因となつてゐる。それは即ち、すべての範疇的思惟統一——特に著しくは勿論、甚だ間接的に形成されたる思惟統一——の特性なる**感性的**

直観の不可能性に対し、そしてまたこれ等の思惟統一に感性的なる絵図や『模型』を与えるという認識運用上便利な欲望に対し、人々は誤まつた解釈を下しているという事である。この解釈に依れば、その感性的に直観し得られないものは、よりよき知性組織にあつては端的なる感性的直観に齎され得る或る隠れたるものの象徴的代表者であるというのであり、又模型は此の隠れたるものに対し直観的な雛形的絵図の用をなし、随つて、古生物学者が乏しい資料を基礎として絶滅した生物を描く仮説的画図と同様な機能を有つているというのである。人々は構成的思惟統一そのものの明瞭な意味を顧みず、上の仮説的なものは此の場合思惟綜合の領界に緊縛されている事を看過しているのである。仮令神の物理学と雖も實在に就いての範疇的思惟規定を端的に直観的なそれには成し得ない。それは恰も神の全能も、楕円函数を描いたりヴァイオリンで弾いたりする様には成し得ないのと同様である。

上の論述が如何に一層の沈潜を必要とするとしても、又上の論述に依つて、それに関するすべての事情を十分に闡明する必要が如何に吾々の痛感する所であるとしても、次の事は吾々に明証となつた、（それは吾々の目的にとつて吾々の必要とする事である）。即ち、原理的に観て、物理学上の物の超越は意識に於いて規整され、意識に緊縛^{けいばく}されている存在の超越であるという事、そして又、数学的自然科学を顧慮しても（仮令該科学の認識の裡に如何に多くの特殊の謎が在るとしても）吾々の結論には何等の変化も及ぼさないという事である。

『單なる事象』としての自然客観に関して吾々が上來明らかにした事は悉く、その自然客観の裡に基づけられている**価値論的**にして**実践論的**なる客観、美的対象、文化成体等々のすべてのものに対し

ても妥当するに相違ないという事は、特に論述するを要しない。此の事は又同様にして畢竟、意識に依つて規整される超越一般のすべてに対しても妥当するのである。

(一) 写像説及び記号説に就いての第四三節(一五五頁以下)【原理的誤謬の解明】に於ける論述参照。

(二) 本書に於いて悖理というのは**論理的**用語なのであつて、何等論理以外の感情的評価を表すものではない。如何に偉大な学者達と雖も時に悖理に陥る。併しその事を明言するのが吾々の学問上の義務であるとするならば、そうする事は彼等に対する吾々の尊敬を毀損する所以とはならないであろう。

(三) 上述一四四—一四五頁、第四〇節【『第一』性質と『第二』性質』以下】参照。

(四) 上述第四三節、一五五頁以下参照。

五三、心を有てるものと心理学的意識

吾々の考察の限界を別の方面へ拡げることは甚だ大切である。吾々は上來、物質的自然の全体、即ち感性的に現出する自然及びより高き認識段階としてそれに基づけられている物理学的自然を、吾々の論定範囲に入れて來たのである。けれども、**心を有てる実在者**ⁱ即ち人間や動物に就いてはどうなのであるか。それらのものの心 *Seelen / psyches* 及び**心的体験**に就いてはどうなのであるか。充実せる世界は無論単に物的なる世界ではなくして、心的・物的なる世界である。此の世界には——何人も否定し得ぬ如く——心を具えた身体と結合せる意識の流れのすべてが属すべきものである。それ故**一面意**

i 「心を有てる実在者」 *animalischen Realitäten* (英 *animate realities*) 渡辺訳「心を持って活動する生き物たち」

識は絶対的なもの——それに於いて全超越的者、随つて結局心的・物的世界の全体は規整される——であるべきであり、しかも又他面意識は此の世界の内部に下属せるひとつの實在的出来事であるべきである。此の兩つの事実は如何にして互いに調和するであろうか。

吾々は、如何にして意識が言わば實在的世界へ入り込み得るのであるか、如何にして自体には絶対的なものがその内在性を棄てて超越性なる性格を採り得るのであるか、という事を明らかにしよう。意識が右の如くなるのはただ、第一の、即ち本原的 *originären* なる意味に於ける超越に何等かの仕方で関与する事に依つてのみ可能である事を吾々は直ちに覚る。そしてその超越は明らかに、物質的自然という超越なのである。意識はただ、身体への経験關係に依つてのみ實在的な人間や動物の意識となる。そして此の事に依つてのみ、自然の空間及び自然の時間——即ち物的に測定される時間——に於ける位置を獲るのである。吾々は又次の事をも想い起す。それは、一つの世界に属する諸々の心を有てるものの間に於いて相互了解という如きものの可能であるのは、ただ意識と身体とが結合して一つの自然的な又經驗的・直観的な統一をなす事にのみ依るのであるという事、又、その統一をなすという事に依つてのみ各々の認識主観は、自身と他の諸主観とを含む充実せる世界を眼前に見出し、同時に又その世界を、自身及び他のすべての主観に共通に属する同一の周囲世界として認識し得るのであるという事である。

或る独自の把握乃至経験の仕方、即ち或る独自の種類の『統覚』ⁱが、此の所謂『結合』即ち意識の *i* Apperception (英 *apperception*) については、経験の多様を意識が統一として捉えていることを指しているのだらう。

此の実在化という作業を行うのである。此の統覚の本性は何であるとしても、如何なる特殊の種類の身分証明を要求するとしても、以下の点だけは明白である。即ち、意識そのものは、斯く統覚的に組合つても、即ち物的なものに対して心的・物的に關係しても、己れ固有の本質は少しも失わず、又己れの本質に無關係なる何ものをも己れの裡に採り入れるを得ない——若しそうすればそれは無論ひとつの悖理であろう——という事である。物的存在なるものは、原理的に現出する所の、即ち感性的射映を通して示現する所の存在である。自然的に統覚された意識、即ち人間の体験流及び動物の体験流として与えられ、随つて物体性と結合して経験されている体験流は、此の自然的に統覚されているという事に依つても、射映を通して現出するもの等には勿論なりはしないのである。

而もそれは別のもの、即ち自然の成素となつたのである。それは、それ自身に於いてはその本来あるものである、即ち絶対的本質を有つている。けれどもそれは、此の本質に就いて、その流動する「此のもののたる相」に於いて把握されているのではなくして、『或るものとして把握』されているのである。そして此の独特な把握に依つて一個独特な超越が規整される。即ち、今や或る同一的な**實在的**自我主観（i）の或る意識状態（ii）が現出しているのである。此の自我主観はその意識状態に於いて己れの**個体的なる實在的諸特性**を表明している、そして今や——状態に於いて自己を表明している諸特性の此の統一として——現出している身体と一つになつたものと意識されている。斯くて心的・物的統一なる人間或は動物は、統覚の基づけに対応して、身体的に**基づけられたる統一として現出に於いて規整**

i 「自我主観」 [Ichsubjektes (英 Ego-subject)] は human subject と言い換えられた版もあり、単に「主観」のことだろう。

されるのである。

各々の超越化的統覚に於ける如く、此の場合に於いても亦、本質上、二つの観方を行う事が出来る。その観方の一つに於いては、把握的視向は、言わば超越化的把握を通して、統覚せられたる対象に向うのであり、他の観方に於いては、把握的視向は反省的に、純粹なる把握的意識に向うのである。それ故、吾々の場合に於いて、一方には、自然的観方を執る視向が人間乃至動物の体験状態としての体験、例えば喜びの体験の如き、に向っている所の心理学的観方なるものがある。他方には、本質的に可能な事として此の心理学的観方と絡み合っている現象学的観方なるものがある。これは、反省し且つ超越的措定を排去して、絶対的にして純粹なる意識に向い、そこで絶対的体験の状態に対する統覚を眼前に見出すのである。即ち例えば、上掲の例で云うならば、絶対的な現象学的与件としての喜びという感情体験がそれである。但しそれを生化する把握機能を仲介として、即ち、人間の自我主観の、現出する身体と結合せる状態を『表明』する正にその機能を仲介としてである。『純粹』体験は、或る意味に於いて、心理学的に統覚されたものの裡に、即ち人間の状態としての体験の裡に、『横たわつて』いる。そしてそれは、それ独自の本質に依つて、状態性という形式を、それに依つて又、人間としての我及び人間としての身体性への指向的關係を採る。当該体験——吾々の例では喜びの感情——が、若し此の指向的形式を失う（それは確かに考え得る事である）という場合には、それは勿論或る変化を受ける。併しその変化はただ、該体験が純粹意識に於いて単純化される、即ち該体験は最

i 「現出に於いて規整される」ErscheinungsMäßig konstituiert 渡辺訳「現出に即応しながら、…構成されてくるのである」

早自然という意義を有たない、という変化に過ぎぬのである。

五四、続き、超越的な心理學的體驗は偶然的にして且つ相對的、先驗的體驗は

必然的にして且つ絶対的

吾々はこういう事を考えてみよう。即ち、吾々は自然的なる統覚——而も恒に不当なるそれ——をなし、その統覚のために、經驗の統一が依つて以て吾々に規整され得る如き調和的聯関が不可能になると考えてみよう。換言すれば、吾々は上の論述の意味に於いて全自然、——先ず第一には物的自然——を『撥無された』ものと考えてみよう。そうすると最早何等の身体も、随つて又何等の人間もないという事になるのである。人間としての私は最早ない事になり、まして私にとって隣人等は愈々ないという事になるであろう。けれども私の意識は、よしその體驗要素が如何に変化したとしても、依然として、己れ独自の本質を有てる絶対的體驗流で居るであろう。仮令體驗を或る人格的我の『狀態』——この狀態の変化の中に同一的な人格的特性が現れる——と解せしめる如き或るものが猶お残存するとしても、吾々は此の如き把握をも廃止し、この把握の規整する指向的形式を放棄して純粹體驗へ還元することができるであろう。**心的狀態と雖も亦絶対的體驗の規制** *Regelungen / regularities* による。即ち心的狀態は絶対的體驗に依つて規整される、即ちそれが『狀態』なる指向的にして且つそれ自らの仕方で**超越的**な形式を採るのは絶対的體驗に依つてなのである。

身体なき意識も、又——仮令如何に逆說的に響いても——心なき、即ち人格的な意識も亦無論、

慥かに考え得られる。換言すれば或る体験の流れ、即ちそれに於いて身体、心、経験的自我主観等の様な指向的経験統一が規整されないであろう如き、即ちこれ等すべての経験概念、随つて又**心理学的意味に於ける体験**（即ち人格、心を有てるものとしての我、の体験）の概念も、それに於いては何等の支点をも、又決して何等の妥当力をも有つていないであろう如き体験の流れ、が考え得られるのは慥かである。**すべての経験的統一**、並びに又心理学的体験は、右に特記した本質形態——この外にも正に猶お他の形態も考え得られる——を有てる**絶対的体験聯関を示す指標**である。即ちすべてのそれは皆同様な意味に於いて超越的、単に相対的、偶然的なのである。吾々は次の事を確信せざるを得ない。即ち、自己及び他人の体験の各々は、心を有てるものとしての主観の心理学的且つ精神物理学的なる状態であると経験上言われ得、且つ又全く正当にそう言われ得るのであるが、斯く言われ得る場合の自明性には、上に示した点から見て、その限界が有るという事である。換言すれば、経験的体験には、**その意味の前提として、絶対的体験が対立するという事**、此の絶対的体験は形而上学的構成なのではなく、適當なる観方の変更に依つて、その絶対的な事が疑いなく証示され得べきもの、即ち直接的直観に於いて与えらるべきものであるという事である。吾々は次の事を確信せざるを得ない。即ち、**心理学の意味に於ける心的なるもの一般**、即ち心的人格性、心的特性、体験、乃至状態は**経験的統一**であるという事、それ故それ等は、各種各段の實在の如く、指向的『規整』の単なる統一であり、——それ自らの意味に於いては真に存在しはする、即ち直観され得、経験され得、経験を基礎として学的に規定され得はする——、が而も『単に指向的』であり、それ故に又単に相対的である、

という事である。それ故、それ等を絶対的な意味に於いて存在するものとして措定することは悖理なのである。

(一) 第四九節、一七七頁以下参照【「世界撥無後の剰余としての絶対意識」】。

五五、結び、一切の實在は『意味付与』に依つて存在する、『主觀的觀念論』にあらず

語を用いるに當つて、或る用法に依り且つ若干の注意を払うならば、人々はまた、「**一切の實在的統一は『意味の統一』である**」と言う事もできる。意味の統一は（繰返して強調するが、吾々が何等か或る形而上學的公準から演繹するからではなく、吾々はその事を直覺的な、即ち全く疑いなき仕方
で証示し得るが故に）**意味付与の意識**——此の意識の方は絶対的であり、自身再び意味付与に依るものではない——を予想する。實在という概念を**自然的實在**、即ち可能的經驗の統一から引き出して来るならば、『一切世界』、『一切自然』というものは無論實在の一切というに等しい。けれどもそれを存在の一切と同一視し、且つかくする事自身に依つてそれを絶対化するという事は悖理である。**絶対的實在は丸い四角と全く同等に妥当し得ないのである**。茲に實在といふ世界というのはとりもなおさず、或る妥当なる**意味の統一**を示す名称である。詳しくは、**本質上正に斯様に、而して別様にではなく、意味を付与し、且つ意味の妥当性を証示する所の、（絶対的且つ純粹なる意識の）**或る聯関に係せる『意味』の統一を示す名称なのである。

若し吾々の論究に対して異論を挟む者があつて、吾々の論は一切世界を転じて仮象となし、『バー
i 「意味付与」 *sinngebung* (英 *sense-bestowal*) *sinngebendes Bewußtsein* 「意味を与える意識」

クレ流の觀念論』に陥るに等しいと云うならば、彼に対しては吾々はただ、彼は吾々の論究の意味を把握しなかつたのだと答えるより他仕方がない。世界という全く妥当なる存在から、即ち實在の一切としてのそれから何ものも控除されたのではなかつた。それは恰も四角形という全く妥当なる幾何学上の存在から、人が「それは円くある」という事を否認しても（此の場合此の事は無論明らかに自明的である）、それに依つて何ものも控除されないと同様である。實在的現實が『転釈』されたり、乃至は又否認されたり等したのではないのであつて、實在的現實に對する悖理的なる——随つて現實固有の明瞭に闡明された意味に矛盾する所の——解釈が除去されたのである。斯かる解釈は、自然的世界觀の全然関知せざる、世界の哲學的絶対化から由来する。自然的世界觀は正に自然的である。即ちそれは、吾々の記述した總措定の遂行に於いて素樸的に生きている。随つて決して悖理的となるわけがないのである。悖理は次の場合に初めて生ずるのである。即ちそれは、人が哲學的思索をする場合、そして、世界の意味に就いて究極的知識を探索するに當つて世界そのものはその全存在を或る『意味』として有つて居り此の意味は絶対的意識を意味付与の分野として予想しているという事柄に少しも氣付かない場合にであり、且つ又それと同時に、此の分野、即ち**絶対的根源の此の存在領界は、諦視的研究** *schauenden Forschung / insightful inquiry* 【直觀的研究】の到達し得る分野であつてそれは最高の學問的權威に對する明瞭なる認識を無限に豊富に有つているという事柄に氣付かない場合にある。此の latter の場合の事柄は勿論吾々の猶お未だ示さなかつたものであつて、それは此の研究が更に進んで初めて明らかになるであらう。

最後に私はなお次の事を注意して置きたい。というのは、絶対的意識に於いて自然的世界が規整されるという事に就いて今論じ終えた考察は普遍的に語られたのであったが、此の普遍性は何等反対を惹き起すべき理由がないという事である。吾々は空想的に哲学上の思い付きを敢てしたのではないのであって、此の分野に於ける組織的な基本的研究を基礎として慎重に獲得せる認識を濃縮して普遍的記述として行つたのであるという事は學問的経験のある読者ならば、上の論述の概念的精確さから察知出来るであろう。一層仔細に評論し且つ未決の俚に放置した間隙を^は埋める「理める」様にとの要求は痛切でもあろうし、又そうあるべきである。論述が更に進めば、上來述べた輪廓を具体的に仕上げる事に大いに寄与するであろう。けれども注意すべき事は、今の場合吾々の目的は、その様な先驗的規整の詳細な理論を示し、それに依つて實在領界に関して或る新しき『認識論』を立案するに在るのではなくして、ただ先驗的に純粹なる意識という觀念を獲得するに助けとなり得る様な一般的思想を明らかにするに在るに過ぎないという事である。吾々にとって肝要なのは、自然的觀方乃至その總指定の排去としての現象學的還元が可能であり、そして此の還元を遂行した後には、それに対し猶お實在性を期待する事は悖理である所の絶対的な、即ち先驗的に純粹なる意識が剰余として残存するという明証的な事柄である。

(一) 私が此處で姑く、対照【対照化】を印象強くする目的のために『意味』という概念を異常に——が併しそれ自身の仕方ですざるべく——擴張することを恕^{ゆる}されたい。

第四章 現象学的還元

五六、現象学的還元の範囲に就いての問題、自然科学と精神科学

自然の排去 Ausschaltung / exclusion 【遮断・排除】は吾々にとつて、先験的に純粹なる意識への視向擬向 Blickwendung / the turning of regard to 【目^めの向け換え】を一般に可能ならしめる方法的手段であつた。純粹意識研究の目的のためには一般に何が排去されて居なければならぬか、又、必須なる排去は單に自然領域に関するのみであるかどうか、逆に此の事を考察する事は、吾々が既に右の意識を諦視的視向 schauenden Blick / seeing regard 【直觀的な目^め】の裡に取り入れた今でも、猶お依然として有用である。基礎づけらるべき現象学的学の方から言うならば、此の事は又、「斯^し学^{がく}は、その純粹な意味を害う事なしに、**どの学ならば源泉としてよいのであるか、どの学ならば予め与えられたものとして利用してよいのであるか、又どの学はいけないのであるか、それ故どの学が『括弧入れ』を必要とするのであるか**」という意味ともなる。『根源』の学としての現象学に固有なる本質にとつて大切な事は、素樸なる（『独断的』なる）学が何れも無關心なる此の種の方法上の問題を、現象学は慎重に熟考せねばならぬという事である。

先ず第一に自明的なのは、自然的世界即ち物的世界及び心的・物的世界の排去と共に、評価的及び実践的なる意識機能に依つて規整される個体的対象性も亦悉く排去されているという事である。即ちすべての種類の文化成体、即ち工芸美術の作品、学問（但し妥当統一としてではなく、正に文化事実

として問題となる限りの（それ）の業績、あらゆる形態の美的並びに実践的価値、等が排去されているという事である。国家、風習、法、宗教等の如き種類の現実も亦無論同様である。かくして、**すべての自然科学並びに精神科学は**、その認識の総額 (Gesamtheit) を含めて、自然的觀方を必要とする所の恰もその学として、**排去を受けるのである。**

五七、純粹我排去の問題

限界点に於いて困難が生ずる。自然存在者としての、並びに又人格的団体即ち『社会』なる団体に於ける人格としての人間は、排去されている。各々の心を有てる存在者も亦同様に排去されている。併し**純粹我**に就いてはどうであるか。ものを眼前に見出す現象學的我也亦現象學的還元によつて先驗的無となつたのであろうか。吾々は純粹意識の流れに還元してみよう。反省に於いては、遂行されたコギタイオの各々は、コギトという顯現的な形を採る。吾々が先驗的還元を行う時、コギトは此の顯現的な形を失うのであろうか。

最初からして次の事だけは明らかである。即ち、此の還元を遂行した後では吾々は、先驗的剰余として残存する多様な体験の流れの裡の何処に於いても、他の諸体験に伍する或る体験としての、又本来の体験断片——それが一断片たる所の体験と共に生起し消滅するそれ——としての、純粹我なるものには決して出会わないであらうという事である。我なるものは恒常的に、否必然的に其処に在るものであると思われる。けれども此の恒常性は明らかに、漫然と停滯する体験の、即ち『固定せるイデ

『のそれであるのではない。却つて我は去来する体験の各々に属する、即ち我の『視向』は、顕在的なるコギトの各々を『通して』対象的なものに向うのである。此の視向線 Blickstrahl / ray of regard は各々のコギトと共に変替する^{へんがえ}それである。即ち新しきコギトと共に新しく放射し来り、又それと共に消失して行くのである。然るに我は同一者である。原理的に観るならば、各々のコギタティオは——仮令「各々のコギタティオは必然的に消滅するものであつて、単に、吾々が眼前に見る如く、事実上消滅するものたるにすぎぬのではない、」か否かは疑わしいかも知れぬとしても——変替即ち去来する事が尠くとも可能ではある。然るにこれに反して純粹我は、原理的に必然的なものであると思われる、そしてそれは、体験が如何に現実的に又可能的に変替しても絶対的に同一的なものとして、**如何なる意味に於いても体験そのものの実的な断片乃至契機**とは言い得ないのである。

純粹我は、特殊の意味で、徹頭徹尾各々の顕在的なるコギトの裡に生きる。ところが又すべての背景体験も亦純粹我に属し、又純粹我はすべての背景体験に属する。即ち背景体験はすべて、私の体験の流れである所の一つの体験の流れに属するものとして、顕在的コギタティオに転化し乃至はそれに内在的に摂取されざるを得ない。即ちカントの言葉を藉りれば、『**我思うは**』**すべての私の表象に伴い得なければならぬ**』のである。

世界及びそれに属する経験的主観性に対する現象学的排去の後の剰余として、我々に対して、純粹なる我（そしてその場合各々の体験流にとつて夫々原理的に異なる我）が残存するのであるが、そうするとそれと同時に一個**独特な**——規整されたのではない——超越、即ち**内在に於ける超越**が現れて来

る。此の超越は各々のコギタテイオに於いて直接に本質的なる役割を演ずるのであるが、此の役割の故に吾々は——多くの研究にとつて純粹我の問題は未解決の俛にして置く事はできるが——此の超越に排去を加える事は許され得ないであろう。併し、明証的に確定し得る直接的なる本質固有性と、及び純粹意識との同時的所与性とが及ぶ限りに於いてのみ、吾々は純粹我を現象學的与件に数えたいと思う。それに反して、純粹我に就いての、此の埒内以上に出るすべての教説には排去を加えたいと思う。その他の点に就いては吾々は、純粹我の難問題と、同時に又吾々が茲に執つた暫定的態度の確証とに對して、本書第二卷に於いて特に一章を捧ぐべき機会を見出すであろう。

(一)『論、研、』に於いては、純粹我の問題に就いて私は懷疑的態度を執つた。けれども私の研究の進むにつれて、私は此の懷疑を固執するを得なかつた。ナトルプの含蓄ある著書『心理学概論 *Einführung in die psychologie nach kritischer methode*』(第一版)に對して加えた私の批評(『論、研、』第二卷、第一版三四〇頁以下)はそれ故重要な点に於いて適切でなくなっている。(ナトルプの新著の最近あらわれた新訂版の方は、私は遺憾ながら最早披見参照するを得なかつた。)

五八、神なる超越は排去される

自然的世界を放棄した後吾々は猶お別の超越に出会う。これは純粹我の様に、還元された意識と一緒に成つて直接的に与えられているのではなく、世界という超越に對し言わば兩極的に對立し、甚だ間接的に認識される超越である。神という超越が即ちそれなのである。自然的世界を絶對的意識に還

元する事に依つて、顯著なる統制を有てる或る種の意識体験の**事實的**聯関が生ずる。そして此の聯関に於いて、經驗的直觀の領界内で**形態学的に秩序づけられた世界**——即ちそれに対しては分類的且つ記述的なる諸学が存し得る如きその世界——が指向的雙関者として規整される。正に此の世界こそ同時に、物質的底層に関する限り、数学的自然科学の理論的思惟に依つて、精密なる自然法則の支配を受ける**物理学的自然の『現出』**として規定されるものである。然るに事實の実現する**合理性なるもの**は本質の要求する合理性ではないのであるから、上述の事には或る不可思議なる**目的論**が含まれてゐるのである。

更に、經驗的世界そのものに於いて見出さるべきすべての目的論、例えば、人類に到る迄の生物系列の事実上の進化、人類の進化に於いては精神上の財宝を有てる文化の生長、等々、の如きすべての目的論に対する組織的探究は、斯くの如き成体のすべてを、与えられたる事実上の状態から、又自然法則に従つて、自然科学的に説明する事を以てして尽されるものではない。それに反して、先驗的還元なる方法に依る純粹意識への移行は、必然的に、当該規整意識の今や出現する事實性に対しての基礎に就いての問題へと導く。事實一般ではなくして、無限に増大する可能的価値と現實的価値との源泉としての事實は、『基礎 Grunde / ground 【「根拠」】に就いての問題を強制する——勿論茲に基礎と言つても、それは物的・因果的なる原因という意味ではない。猶おまた他に宗教意識の方面から吾々を此の同じ原理へ、而も理性的に基礎を与える動機という仕方で、導いて行き得るものがあるのであるが、吾々は之を無視する。此処で吾々に問題となるのは——世界の外に在る『神的』存在の現存に対

する右の如き理性根拠 *Vernunftgründe* の種々なる群を単に指示するだけの後に於いては——此の神的存在なるものは、單に世界のみならず明らかに又『絶対的』意識をも超越するものであらうという事である。それ故それは、**意識という絶対者とは全然別の意味に於ける『絶対者』**であるであらう。同様に又それは他方、世界という意味に於いての超越者と較べても**全然別の意味に於ける超越者**であるであらう。

此の『絶対者』にして且つ『超越者』なるものにも吾々は無論現象學的還元を押し及ぼす。それは、新しく創成さるべき研究分野からは——此の分野が純粹意識そのものの分野であるべき限り——何処迄も排去されているべきものである。

五九、形相的なるものの超越、普遍學としての純粹論理學の排去

如何なる意味の個体的實在をも排去したと等しく、今度は吾々は他のすべての種類の『超越』をも亦排去しようと試みる。此の試みは『普遍的対象』即ち本質の系列に対して加えられる。普遍的対象も亦無論或る仕方で純粹意識を『超越』している。即ち純粹意識の裡に実的に見出されはしないのである。併しながら、吾々は超越を際限なく排去する事はできない。即ち先驗的純化は**すべての超越の排去を意味する事はできない**。何故ならば、若しできるとすれば、成程純粹意識は残るであらうが、併し純粹意識に就いての學の可能性は残らないであらうからである。

右の事を吾々は明らかにしたいと思う。吾々はそれを、形相的なるものに対する出来る限り広汎な

排去に就いて、随つてすべての形相的なる学の排去に就いて試みよう。個体的存在の領域的に区切り得べき領界——最広の論理的意味に於ける領界——の各々には夫々存在学が属する。例えば物的自然には自然の存在学が、有心体¹には有心体の存在学が属している——すべて之等存在学は、その既に完成せられた学科たると、或は漸く要請せられたにすぎぬ学科たるとを問わず、悉く還元を受けるのである。質料的存在学には『形式的』存在学が（思惟意義の形式的論理学と一緒に）対立し、これには『対象一般』なる準領域が属する。此の形式的存在学をも排去しようと試みる時、吾々は懸念——これは又同時に、形相的なるものの際限なき排去の可能性にも関するであろうそれ——に襲われる。

次の如き考えを吾々は押え難い。如何なる存在範囲にも吾々は、学問の目的のために、或る形相的領界を附属せしめざるを得ない。がそれは格別研究範囲としてではなく、該範囲の研究者が、その範囲の本質特性に於いて相互に聯関する理論的諸動機に動かされて該範囲に関心する場合には常に踏み入る事を許されねばならぬ所の本質認識の所在としてである。就中形式的論理学（乃至形式的存在学）は、如何なる研究者と雖も必ず自由に引証するを得なければならぬのである。何故ならば、彼が何を探求するとしてもそれは常に対象であり、対象一般（特性、事態一般等々）に対し形式的に妥当するものも亦彼の関心事であるからである。また、彼が如何に概念や命題を作り、推理を行う等々としても、形式的論理学が斯かる意義や意義の諸類に対し形式的普遍性を以て論定する所の事柄は彼にとつて、あらゆる特殊研究者にとつてと同様に大切である。斯くして又現象学者にとつても同様

i 「有心体」 *Animalität* (英 *psychophysical being* 精神物理的)、渡辺訳「心を持って活動する生き物」

である。各々の純粹體驗も亦、論理的に最広の意味での対象に属する。吾々はそれ故、形式的なる論理學及び存在學を排去するを得ない——ように思われる。又全く同じ様に、明白に同様なる根拠から、普遍的ノエシス學も排去され得ないようである。蓋し斯學は判斷的思維一般——その意義内実はただ形式的普遍性に於いてのみ規定されている——の合理性や非合理性に就いての本質洞觀 Wesensinsichten / edetic insights を語るものであるから。

併し更に立入つて考察してみると、形式的論理學、及びそれと共に形式學のすべての學科（幾何學、整數論、集合論等々）を『括弧』に入れる可能性が、或る前提の下に於いて、生じて来る。その前提というのは即ち、現象學の純粹なる意識研究は、純粹直覺に於いて解かるべき所の記述的分析の課題の他には如何なる課題をもその任としているのでなく又すべきものでもない、という事である。今若し此の前提を予想すると數學諸學科の理論形式やその間接的定理のすべてやは、現象學にとつて少しも役立つ得ないものとなるのである。概念及び判斷の形成が構成的に行われぬ場合には、即ち間接的演繹の體系が築かれぬ場合には、數學に存する如き演繹的體系一般の形式論は、質料的研究の道具として役立つ得ないのである。

斯くて現象學は実に、先驗的に純粹なる意識の分野を**純粹直覺** *pure intuition* に依つて探究する**純粹記述的**學科である。それ故現象學が引証すべき機會を常に見出し得るであろう如き論理的命題はどうしても、矛盾律の如き論理學的公理であるであろう。そしてそれ等公理の普遍的にして且つ絶対的な妥当は、現象學は己れ固有の所与に照してこれを類例的に洞觀し得るであろう。斯くて吾々は、形

式的論理學及び普遍學一般を、明らかに排去的なるエポケーに入れる事ができる。それ故此の点から見て、吾々が現象學者として従おうと欲する所の規範 *norm* の正当さを確信し得るのである。その規範とは、「吾々が意識そのものに照らして、即ち純粹内在に於いて、本質上洞觀し得るもの以外には何ものをも要求しない」というのである。

以上に依つて吾々は同時に又、記述的現象學は上述すべての學科に対し原理的に非依屬的であるという明確な認識に到達する。此の論定は、現象學の哲學的評價から見て重要でないとは言えない。それ故、此の論定を此の機會に於いて直ちに記して置くことが有利である。

六〇、質料的・形相的諸學科の排去

扱、質料的なる形相的諸領界に就いてみるに、排去等は明らかに思ひも及び得ないという事をその特性とする一つの領界がある。即ち現象學的に純化された意識そのものの本質領界がそれである。純粹意識をその單獨的特殊化に於いて、従つて事實學的に——ではあるが然し經驗心理學的にはなく（何故ならば吾々の活動は、世界の現象學的排去という区域内に限られているから）——研究しようという目的を樹てる場合と雖も、吾々は意識のアプリオリはこれを無しで済ませ得ないであらう。事實學も、己れ固有の範圍の個体的對象性に関係ある本質真理の使用權は之を放棄するを得ない。然るに、緒論に於いて述べた所に依つて既に然る通り、吾々の目的とする所は正に、現象學そのものを形相的 *eientic* なる學として、即ち先驗的に純化されたる意識の本質論として基礎づけるに在るので

ある。

現象学を右の如き学として基礎づけるならば、現象学はすべての『**内在的本質**』を——換言すれば、専ら何等か或る流動し去る単独の体験に於ける意識の流れの個性的出来事に於いてのみ単独化する所の本質を——包括する。扱そこで、次の事を洞見する事が基礎的意義のある事である。それは、**決してすべての本質が此の内在の本質の範囲に属するというのではない**という事、然らずして個体的対象には**内在的**なるそれと**超越的**なるそれとの区別があると丁度同様に、個体的対象に対応する**本質**にも亦此の区別が存するという事である。斯くてそれ故、『物』、『空間形態』、『運動』、『物の色』等々は——が又『人間』、『人間の感覚』、『心』及び『**心的体験**』（心理学的な意味に於ける体験）、『人格』、『性格特性』等々も——超越的本質なのである。吾々が現象学を**内在的意識形態の**——即ち現象学的排去の埒内で体験の流れに於いて把握され得べき出来事の——**純粹に記述的な本質論**として完成せんと欲するならば、此の現象学の埒内へは、如何なる超越的に個体的なるものも属さない。従つて又現象学には**如何なる『超越的本質』も属さない**。超越的本質の論理的位置は寧ろ、当該超越的対象の本質論に在るであらう。

現象学は、それゆえ、その**内在に於いて、超越的本質の如何なる存在措定**をも行つてはならず、諸本質の**妥当乃至非妥当**に就いて、或は該本質に対応する対象性のイデー的可能性に就いて、何等の供述をも行つてはならず、且つまた該本質に関する何等の**本質法則**をも確立してはならない。

超越的・形相的な領域と学科とは、純粹なる体験領域に真に限局せんとする現象学に対しては原

理的に何等の前提をも寄与することが出来ない。ところで、現象学を恰も此の純粹さに於いて基礎づける事が（既に嚮に述べた規範に随つて）吾々の目的なのである故、また、此の純粹さを十分意識して貫徹するという事には最大の哲學的関心すらかかつて居るのである故、吾々はすべての超越的・形相的範圍及びそれに属する諸**存在学**迄への**最初の還元の拡張を明確に**遂行するのである。

それ故、吾々は、現実的な物的自然及び經驗的自然科学を排除すると等しく、形相的学、即ち物的なる自然対象そのものに本質的に属するものを研究する学をも亦排除する。幾何学、運動学、物質の『純粹』物理学等は夫々括弧を受ける、同様にして、吾々は、心を有する自然的存在者に就いての經驗科学のすべて、及び、人格的団体に於ける人格的存在者に就いての、歴史の主体としての、即ち文化の所持者としての人間に就いての、或は又文化諸相そのもの、等々、に就いての經驗的精神科学を排除したと等しく、今度は又、これ等の対象に対応する形相的学をも亦排除する。吾々はこの排除を、前以て、且つイデーに於いて行う。何故ならば、周知の如くこれ等の形相的学（例えば、理性的なる心理学、社会学）は従来、何等の——或は何等の純粹にして且つ難点なき——基礎づけをも受けるに至っていないからである。

現象学がその使命上引き受けるべき哲學的機能の事を考えるならば、次の事を明言するのは此の場合に於いても亦有益である。即ち、上述の詳論に依つて同時に又**現象学は**、他のすべての学からと同様に、**質料的・形相的な諸学からも亦絶対的に独立**なる事が確定されたという事である。

現象学的還元の此の所示の拡張は無論、自然的世界及びそれに関係する諸学に対する最初の單純な

る排去の如く、置礎的 *grundlegend* / *fundamental* 意義を有つものではない。後者の第一還元は、言う迄もなく、現象学の分野への視向擬向【目ざしを向け換えること】、及びその分野の所与一般の把握を初めて可能ならしめるものである。随つて爾余の諸還元は、此の第一還元を予想する故第二次的である。が併し、それかといつて重要性がより少いわけでは決してない。

六一、現象學的諸還元の体系的理論の方法論的意義

現象學的方法にとつては（又更に進んでは、先驗哲學的研究一般の方法にとつては）、吾々が本書に於いて立案しようと試みて來た全現象學的還元就いての体系的理論が甚だ重要である。現象學的還元の明確な『括弧入れ』には、吾々をして常に次の事を想い起さしめるという方法的機能がある。というのは即ち、当該の存在領界及び認識領界は**原理的に**、先驗現象學的領界として研究さるべき領界の外に在るという事、並びにまた、あの括弧に入れられた範圍に属する前提の侵入は悉く、悖理なる混淆即ち全くの概念飛躍なる事を示すものであるという事を想い起さしめるのである。若し仮りに現象學的範圍が、自然的なる「經驗の觀方」の範圍と等しく直接自明的に現れるとするならば、或はまた、幾何學の範圍が言わば經驗的に空間的なるものからの脱出に依ると等しく自然的觀方から形相的觀方への單なる移行に依つて現象學的範圍が生ずるとするならば、所屬の困難な考量を伴う精細なる還元を何等必要としなくなるであらう。更にまた、若し仮りに誤まれる概念飛躍への間斷なき誘惑が、とりわけ形相的學科の對象性の解釈に際してさえも存しないとするならば、個々の歩程を細心に

區別する必要もなくなるであろう。が實際は、個々の範圍に於いては一般的誤解から既に脱却した人さえをも脅やかす程に強い誘惑があるのである。

今先ず第一に挙ぐべきものは、**形相的なものを心理学化**せんとする、現代の異常に拡がつている傾向である。觀念論者と自称する人々の多くも亦此の傾向を免れぬ。そして又實際觀念論的側面に対する經驗論的見解の影響が概して強大なのである。イデー乃至本質を、『心的成体』と見做す者、即ち、物の事例的直觀を基礎とし、物的なる色、形等々を手段として、色、形に就いての『概念』が獲得される所のその意識操作に顧みて、色、形等というこれ等本質に就いての時折結果する意識をこれ等の本質そのものと混同する者は、意識を原理的に超越するものを意識流に属する実的成素と見るのである。併し此の事は、一面に於いては、それは既に經驗的意識に関するが故に心理学の壊敗^{かいふ}であり、他面に於いては（此の方面が吾々に關係がある）現象学の壊敗である。それ故、索める領域^{もと}が真に見出さるべきものであるならば、此の点を明瞭にする事が甚だ肝要である。けれどもこれは当然、吾々の研究の進むにつれて明瞭になることである。即ち先ず第一には形相的なもの一般の普遍的証 *Rechtfertigung / vindication* 【正当化・立証】に依つてであり、次には、時に形相的なものの排去としての現象学的還元の説と關聯してである。

扱形相的なものの排去は無論、あらゆる意味に於ける超越的な個体的対象性の形相学に限られざるを得なかつた。今や新しい基底的 *fundamentales* 契機が考察に入つて来る。吾々が本質及び本質態を心理学化せんとする傾向から既に解放されたとしても、吾々が簡単に**内在の本質と超越の本質**との

區別と呼んだ所の重大結果有る區別を認知して終始一貫して之を顧慮するという事はひとつの新しき大なる歩程である。他の歩程は第一の歩程と同時に爾かく無造作に生ずるものでは決してないのである。一方には意識そのものの形態の本質があり、他方には意識を超越せる個体的出来事の本質、随つて意識形態に於いて単に自らを『表明する』に過ぎぬ所の、例えば感性的現象を通して意識に依つて『規整』される所の、出来事の本質がある。

第二の歩程は、尠くとも私にとつては、第一の歩程の後と雖も猶お甚だ困難なものになっている。今此の事は、『論理學的諸研究』の注意深い読者ならば、見逃し得ない事実である。右の著書に於いて第一の歩程は十分果斷に成し遂げられている。即ち——『プラトン主義』と『論理主義』とに對して実に激しく反動したあの時代の思想に強硬に反抗して——形相的なものの独自の權利が、そのの心理学化に抗して、詳細に基礎づけられている。併し第二の歩程を見れば、それは二三の理論、例えば論理的範疇の対象性に関する、及び又それ等対象性に**就いての能與的意識**に関する理論に於いては、果斷に成し遂げられているが、併しそれに反し、同じ卷の他の論述に在つては明らかに動搖している。即ち、論理的命題なる概念が、或る場合には論理的範疇の対象性に適用され、又或る場合にはそれに対応する本質即ち判斷の思维に内在する本質に適用されている限り、動搖は明白なのである。種々の対象的の双關者を有つ種々なる意識的觀方を反省に依つて自由に驅使するに至ることは、現象學の初學者等にとつては困難である。ところが此の事は、意識の内在そのものに属さない本質領界のすべてに就いても言い得られる。人々は、啻に形式論理的或は形式存在學的な本質及び本質態に就いて（それ

故『命題』、『推理』等々、そしてまた『数』、『順序』、『複素体』等々、の如き本質に対し、上の如き洞観を獲ねばならぬのみならず、又自然的世界（例えば『物』、『物体の形態』、『人間』、『人格』等々の如き）、の領界から取られている本質に就いても亦そうせねばならない。此の洞観のひとつの指標は拡大せる現象学的還元である。此の還元の結果吾々を支配する実践的意識、即ち、自然的世界なる領界と等しくこれ等形相的領界のすべても亦、原理的には、その真の存在という点に關しては、与えられているとは現象学者の立場からは言い得ないという意識、それ等領界は、現象学者の研究領域の純粹性確保のため判断上括弧に入れられねばならぬという意識、それ等領界に關する如何なる学から、ただ一つの定理も、のみならず公理も決して引き出されて現象学的目的に対する前提として許されるを得ないという意識——此の意識は今や、方法論上の重大な意義を有つに至る。正に此の意識に依つて吾々は、生來の独断論者としての吾々の裡に、此の意識に依る以外には避け得ないであろう程深く根を張っているあの混淆から、方法的に身を護るのである。

六二、認識論的序説、『独断的』観方と現象学的観方

私は今『独断論者』という言葉を使った。茲で此の言葉は単に類比的に使用されているのではなく、認識論的なものとの類似は事象固有の本質から生じているのであるという事もおわかつて来るであろう。茲で独断論と批判主義との認識論上の対立を念頭に置いて、還元を受ける学のすべてを**独断的**学と呼ぶ事には十分な根拠がある。何故ならば、独断的学に包括された学はそのすべてがとりも直さ

ず『批判』を、而もそれ等の学自身は原理的に行い得ぬ如き批判を必要とする学であるという事、及び、他方に於いては、他のすべての学に対し、と同時に又己れ自らに対して批判を加えるという独特な機能を有っている学は現象学に外ならぬという事が、本質的源泉からして洞観され得るからである。更に精密に言うならば、現象学の著しい特質は、己れの形相的普遍性の範圍内に認識と学とのすべてを包括し、而もそれ等に於いて直接に洞観に得る所の、或は尠くとも、若しそれ等が眞の認識であるであろう場合には直接に洞観し得るに違いないであろう所のすべての点に關して包括するという事なのである。可能的方法に於けるすべての可能的なる直接的出发点とすべての直接的歩程との意味及び權利は、現象学の区域に属する。随つて、形相的な（それ故無限に普遍的に妥当する）認識のすべてが現象学の中に含まれてあるのであつて、此の認識に依つて、如何なる認識や学を任意に選んでもそれに關係する所の『可能性』なる根本問題が解答されるのである。現象学はそれ故、応用現象学として、原理的に独特な学の各々に対し究極評價的な批判を加え、それに依つて又特に、それ等の学の対象の『存在』の究極的意味規定、及びそれ等の学の方法体系の原理的闡明を行う。斯くて、現象学が言わば全近世哲学の窈かなる憧憬^{ひそ}の的である事が理解される。デカルトはその驚くべく深玄な基礎的省察に於いて既に現象学に押し迫っている。次いで又ロック学派の心理主義に於いてもそうである。即ちヒュームは現象学の領分に、但しその眼は眩まされているが、殆んど既に踏み入っている。而してカントに依つて愈々此の領分が認められるに至つたのであつて、彼の広大極まる直覺は吾々は之を、現象学的範圍の固有性を十分意識的に明瞭にするに至つて、初めて完全に了解する事ができる。その

時は吾々に、次の事が明証的となる。即ち、仮令カントは猶お未だ此の分野を奪取するを得ず、且つ又それを独自の嚴密なる本質学の研究分野として認めるを得なかつたとはいへ、彼の心眼は此の分野を凝視していたという事である。それ故、例えば純粹理性批判第一版の先驗的演繹論は、本来既に現象学的地盤の上に展開されているのである。然るにカントは、此の地盤を心理学的地盤であると誤解し、それ故にそれを又自ら放棄している。

兎に角吾々は上述の事に依つて、将来の論述（本書第三卷のそれ）を先取している。何故に吾々は還元を受ける学の全部を独断的学と呼び、それをそれと全然別の次元の学としての現象学に対立させるのであるか、その事を是証するのに今、以上序説的に述べた事柄が役立てば幸である。同時に又吾々は、それと並行して、**独断的觀方と現象学的觀方**とを対照せしめる。勿論此の場合自然的觀方は独断的觀方に、その特殊な場合として下屬するのである。

（一）此の点に就いては上述第二六節（九九頁以下）「**独断的觀方に立つ諸学**」以下）参照。そうであるとなすれば勿論、第二六節に所謂特に哲學的といわれる種類の諸学は現象学を基礎とするのである。

注記

吾々の説いた特に現象学的と呼ばれる排去が個体的現存の形相的排去から独立であるという事情は、抑も現象学的排去の埒内に於いても、先驗的に還元された体験に就いての事実学が可能ではないかどうかという問題を暗示する。此の問題は、一切の原理的な可能性問題と等しく、ただ形相的現象学的還元

象學の地盤の上に於いてのみ解決され得る。此の問題は、現象學的本質論完成の以前に於いては、何故に素樸的に現象學的事實學から始めるといふ試みが何れもノンセンであるかといふ事がわかる事に依つて解決される。詳しくは、非現象學的事實學と並んで、それと並行の且つ又同位の現象學的事實學は存し得ないといふ事が明らかになるのである。而もそれは次の理由からである。即ち、あらゆる事實學の究極的評價は、それ等事實學のすべてに対応する所の事實的な且つ又事實的可能性として動機づけられた現象學的聯関の統一的結合——此の結合された統一こそ、待望される現象學的事實學の分野に外ならない——を結果するからである。此の現象學的事實學はそれ故、その主要部分から言つて、普通的事實學の、形相的現象學に依つて可能にされたる『現象學的転回』である。そして残るはただ、此の転回から更に進んでどの程度まで業績を挙げ得るであらうかといふ問題だけである。

第三篇 純粹現象学の方法と問題とに就いて

第一章 方法に就いての予備考察

六三、方法に就いての考察の現象学に対する特殊の意義

若し吾々が、吾々に現象学的還元の課する規範に従うならば、即ち若しその規範の要求する正にその通りにすべての超越 Transcendenzen / transcendencies 【超越物】を排去するならば、それ故若し体験 Erisnisse / mental processes を純粹にそれ固有の本質に従つて受取るならば、既述のすべてに依つて、吾々に対して、形相的 eidetic 認識の分野が展開して来る。吾々が端緒の困難に打ち勝つた以上、此の分野はあらゆる方向へ限りなき分野として示現する。実的 reellen と指向的 intentionalen 【志向的】との本質成素を有つ諸々の体験種類と体験形式との多様は正に無尽蔵の多様であり、随つて又それ等を基礎とする本質聯関及び必証的 apodiktisch 【必自然的】に必然的な真理の多様も亦無尽蔵である。それゆえ意識のアプリオリの此の無限の分野——それは従来、その特性に就いて決してその權利を獲得した事がなく、のみならずそれは実は決して気付かれた事もなかった——を開墾し、そこから立派な果実を收穫する事が必要である。併し如何にしてその正しき端緒を見出し得るか。実に、今の場合端緒こそ最も困難なものであり、その状態こそ異常なものである。此の新しき分野は、豊富に確然と与えら

れて広く吾々の眼前に展開しているのではないのであつて、随つて吾々は、單純に手を伸ばしさえすれば、此の所与を學問の対象とする可能性を——まして沉んや此の場合それに従つて進むべき方法等は勿論——確保し得るというわけのものではないのである。

それは自然的觀方 attitude の所与に於けるとは、特に自然の諸客觀に於けるとは、同じくない。蓋し自然の諸客觀は、吾々が自發的に研究してそれ等客觀の認識を更に促進しようとして試みる場合、間斷なき經驗に依り、且つ又何千年來の常習的思考に依つて多様な特性、要素並びに法則に就いて吾々に十分熟知されているのである。その場合知られざるものはすべて知られたるものの地平をなしている。すべての方法的努力は所与に結び付き、方法の進歩はすべて既存の方法に結び付く。總じて其處に有るのは、確証された學的方法一般の予め与えられた不動なる様式に順応し、そして此の様式の指導に依つて發見される所の、特殊方法の單なる發展なのである。

現象学に於いては甚だしく異なる。その異なる点というのは、事象を規定するあらゆる方法の以前に既に或る方法を必要とする、即ち苟くも先驗的に純粹な意識の事象分野を把捉的視向 Blick / regard の中へ齎すためには或る方法を必要とするという事であり、又その際に、絶えず意識されている所の、それゆえ新しく指向された所と言わば絡み合っている所の自然的所与からの困難な視向転向 turning of the regard を必要とする、随つて常に、新しく指向された所与と自然的所与とを混淆する危険に脅かされているという事である。というのは自然的対象領界に対しては吾々に役立つすべてのもの、即ち習慣的直觀に依る熟知、伝承的な理論構成や事象に適合せる方法やの恩恵等が現象学には欠如してい

るからである。既に完成された方法に対してさえも、承認されている諸学及び實際生活に於ける有効確實なる多種多様の適用に依つて培われ得る如き歡迎的信賴が明らかに欠如している。

新興現象学はそれ故、懷疑という根本的氣分を清算せねはならない。現象学は単に、新しき種類の事象から新しき種類の認識を贏^かち得る所の方法を發展せしむべきのみでなく、それは又、右の方法の意味と妥当とに關して、由つて以て如何なる手強き抗議に対しても抵抗し得べき余蘊^{よゝん}なき明晰さを獲ねばならない。

現象学の相違点は單に上述に止まらないのであつて、なお次の事——此の事は、原理的な點に關係している故、上述よりも更に遙かに重要である——がある。即ち、現象学は『第一』哲学である、随つて施さるべき理性批判の一切に対し手段を供給する」という要求をその本質上提出せざるを得ぬという事、それゆゑ現象学は、最も完全なる無前提性と（己れ自身に關係して言うならば）絶對的な反省的洞觀とを要求するという事である。己れ自らの本質を、それに依つて又己れの方法の原理をも、極めて明晰に実認するという事は現象学固有の本質なのである。

右の諸理由からして、方法の基礎部分への洞觀を、随つて此の新しき学に対し出発点からして直ちに、且つその進行に於いて常に方法上規定的であるものへの洞觀を獲んとする慎重な努力は、現象学に対しては、類比的努力としてそれが爾他諸学に対して夫々の場合に有ち得るであろう意味とは全く別個の意味を有っている。

六四、現象学者の自己排去

先ず第一に、第一步を直ちに阻止するかも知れぬ所の方法上の懸念に就いて述べよう。

全自然界及びすべての超越的・形相的領界を吾々は排去する、そして吾々はその事に依つて『純粹』意識を獲得する筈である。ところが吾々はたった今、『吾々は』排去すると言つたではないか。吾々現象学者は**吾々自身**を——その吾々も矢張り自然界の成員なのであるのに——除外例となし**得る**のであるか。

吾々が『排去』の意味を変えさえしない限りは此の事には全く何等の困難もないと吾々は容易に確信する。のみならず吾々は、吾々が自然的人間として語るべき如くに安んじて語り続け得る。何故ならば吾々は、自然的人間であり且つ言説に於いても亦自然的人間として吾々を指定するという事はこれを現象学者としても止むべきでないのであるから。けれども吾々は、新しく企てらるべき現象学の台帳へ登録するべき論定に關して、方法の一部として現象学的還元の規範を吾々自身に課する。此の規範は同時に吾々の經驗的**定在**にも關係し、且つ此の種の自然的指定を顕現的或は含蓄的に含む命題を登録する事を吾々に禁ずるのである。個体的定在に關する限り、現象学者の態度は、他の如何なる形相学者、例えば幾何学者と異ならない。幾何学者達はその學問上の論文に於いて、彼等自身及び彼等の研究に就いて語るのが稀れでない。併し数学的思考をなす主観は、数学上の命題の形相的内実そのものの中へ一緒に入るべきものではないのである。

六五、現象学の自己自身への退帰的關係 Die Rückbeziehung

他面に於いて又人は、吾々は現象学的観方に於いて任意の純粹体験へそれを研究するために視向を向けるが、併し此の研究そのものの、此の観方の及び此の視向擬向の体験は、現象学的純粹性に於いて観れば、同時に又研究さるべきものの範圍にも属すべきものであるという事に対して怪訝を感ずるかも知れない。

此の事も亦何等難点でない。心理学に於いても事情は無論全く同じであり、論理的ノエシス学に於いても亦同様である。心理学者の思惟はそれ自身或る心理学的なものであり、論理学者の思惟は論理学的なもの、即ちそれ自身矢張り論理学的規範の範圍へ入るべきものである。此の自己自身への退帰的關係【再帰的参照】が仮りに疑わしいとしてもそれはただ、その時々と思惟者のその時々と思惟の現象学的、心理学的及び論理学的認識に対し、それに関係ある研究範圍内の他のすべての事象の認識が依属するという事——そういう事は明らかに悖理な前提である——があるような場合だけの事である。

自己自身に退帰的に關係されたすべての学科に於いて、勿論次の点に或る難点が存している。それは即ち、それ等学科への最初の入門も、又最初の究明も、それ等学科が後になって初めて学的に終決的に形成すべき方法的手段を以て操作せざるを得ぬという点である。研究対象に就いても方法に就いても暫定的予備的な考量なくしては、新しい学問の企画は成立しない。併し、創立当初の心理学、
i 「視向擬向」 Blickrichtung (英 line of vision) 訳語「擬向」は「向き変え」の意に使われているが、こゝは「視線」。
ii 「退帰的關係」 Rückbeziehung (英 Reflexive Reference) 渡辺訳「關係がそれ自身へ逆に跳ね返ってくる事態」

現象学等々が、斯くの如き予備的労作に於いて由つて以て操作する所の概念及びその他の方法的要素はそれ自身が心理学的、現象学的等々の要素なのであるが、その学的刻印は、既に基礎づけられ終えた学の体系内に於いて初めて獲得されるのである。

それ等の諸学特に現象学の、眞の完成に妨げとなる惧れのあるような大した懸念は、此の方面には明らかに存在しない。ところで現象学が更に、**単なる直接的直覚の埒内**に於ける学、即ち純粹に『**記述的**』なる本質学たらんとするならば、斯学の態度の概要は全く自明的なものとして前以て示されている。斯学のなすべき事は純粹な諸々の意識の出来事を範例的に眼前に据え、それ等を完全な明晰さに齎し、それ等に此の明晰さの範囲内で分析と本質把握とを加え、明晰なる本質聯関を辿り、其時々に諦視されるものを、忠実に概念的なる表出——その意味は全く、諦視されたもの乃至普遍的に洞見されたもののみに依つて指定される——に言い表す、等々という事である。此の態度は、素樸的に働けば、差し当つてはただ、新しい範囲に於いて探索し、その範囲内での視る事、把握する事、分析する事を一般的に練習して覚え込み、そしてその範囲の所与を少しは識るに至るといふ事に役立つにすぎない。併し次には、此の態度そのものの本質に就いての、此の態度に於いて現れる所与種類の本質に就いての、完全な明晰さ及び洞観並びに完全に忠実にして確實な概念的表出の本質、作業、制約に就いての、その他猶お種々の斯くの如きものに就いての学的反省が、方法を普遍的に且つ論理上厳密に基礎づけるといふ機能を担当する。自覚して此の方法を遵守するならばその時それは、学的方法——それは、必要な場合には、厳密に言い表された方法的規範の適用に依つて、境界を樹てて匡正すきようせい

る所の批判を行うことを許す——の性格と位置とを採る。現象学が本質的に自己自身に關係されているという事は今次の点に於いて示されている。即ち、現象学に於いて、明晰、洞観、表出等々という名称の下に方法的反省に於いて考量され確認されるものは、それはそれで自身現象学の領分に属するという点、すべての反省的分析は現象学的本質分析であつて、獲得された方法的洞観は、その確認そのものから見て、それが言い表すその規範に従うという点に於いてである。新しい方の反省に於いて人は、常に次の事を確信できるに相違ない。即ち、方法的供述に依つて供述された事態は完全に明晰に与えられ得るという事、使用された概念は与えられたものに實際忠実に適合するという事、等々である。

上述の事は、現象学に關係あるすべての方法的研究に就いて——吾々がその研究の埒を如何に広く張ろうとも——明らかに当て嵌まる。それ故、現象学への途を用意しようと欲する本書はその内容上、全巻を通じてそれ自身徹頭徹尾現象学なのである事は自明である。

六六、明晰なる所与の忠実なる表出、一義的用語

吾々は直ちに、前節に現れた極めて一般的な方法的思想を、更に少しく追求して行こう。そこで吾々は、純粹直覚内の本質論以外の何ものでもあつてはならぬ現象学に於いて、先驗的に純粹なる意識の範例的所与に依つて直接的本質諦視を成し遂げ、そしてそれを**概念的**に、乃至術語的に確定しよう。使用される言葉は日常用語から取られ、多義的——即ち意味の変化に従つて曖昧——であるかも

知れない。けれどもその言葉が顯在的表出という仕方では、直観的に与えられたものと『合致』するや否や、それはその「此処に且つ今に於いて hic et nunc」顯在的にして明晰な意味としての或る一定の意味を取る、かくて此の点からしてその言葉は学的に確定され得るのである。

直観的に把握された本質に忠実に適合させて言葉を使用するという事を単に実行しただけでは、――仮令、此の直観的把握の側では必要事は十分に成し遂げられていても――無論それで万事満足なわけではない。学が可能であるのはただ、思惟の成果が知識という形で保存され得、且つ更に進んだ思惟に対して供述命題――これは論理的意味の点では明瞭である、そして表象根柢は明瞭でなくても、随つて洞観はなくとも、了解乃至判断的に顯在化され得る――の体系という形で適用され得る場合に限られる。無論学は、所屬の基礎づけと顯在的洞観とを任意に（而も共同主観的に）招致するために主観的と客観的との準備を同時に要求するのである。

扱、上のすべてには又次の事も必要である。それは、同一の言葉や命題は或る直観的に把握され得る本質――それはそれ等の言葉や命題の『充實的意味 erfüllenden Sinn / fulfilling sense』を成す――に對する一義的並列【一義的対応】を保持するという事である。此の言葉及び命題はそれ故、直覺及び十分習熟せる範例的单独直観を基礎として、判明にして唯一なる意義を（習慣上事情に依つては押し迫つて来る所の他の意義を言わば『抹殺』して）付与されている。それでそれ等は、顯在的思惟のあらゆる可能的聯関に於いて、己れの思惟概念は之を固持して居り、他の充實的本質を有する他の直覺的所与への適應能力は之を喪失するのである。一般に通用する言葉に無いような術語は出来るだけ避けると

いう事は十分理由のある事である。それゆえ一般用語法に存する多義性に対しては注意が必要であり、嚮^{さき}の聯関に於いて確定されたものが新しい聯関に於いても實際同様な意味に適用されているか否かを度々吟味する事が必要である。けれども今は、これ等の及びそれに類似の諸規則を（例えば、共同主観的の協同研究の産物としての学に関係ある諸規則をも）更に詳しく論ずべき場所でない。

六七、闡明の方法、『所与近接』と『所与隔遠』

表出 *Ausdruck* / *expression* でなく、表出に依つて表出され且つ表出以前に把握され得べき本質及び本質聯関に関する所の方法的考察は、吾々としては一層関心が深い。探究の眼が体験に向けられると、体験は一般に**空虚**と**曖昧な隔遠**と——それは体験を、個別的論定 *Feststellung* / *findings* 【確認】にも形相的論定にも適用し得ないものにする——に於いて示現して来るであろう。若し吾々が体験そのものでなく寧ろ体験の与えられ方に関心を有つて、空虚そのもの及び曖昧そのもの——此の場合にはこれ等も曖昧ではなく極めて明晰に与えられる——の本質を探究しようとするならば、その時は事情は異なつて来るであろう。けれども、若し曖昧なる被意識者そのもの——例えば回想乃至想像に於いて不明晰に髣髴^{ほうふつ}しているもの——がそれ固有の本質を示すとしても、その示すものは単に不完全なものであり得るにすぎない。換言すれば、本質把握の基礎に横たわっている**単体直観**が明晰性段階の低い場合には、**本質把握も矢張明晰性段階が低い**。そしてそれと双関的に、その**把握されたもの**はその意味が『**不明晰**』である、即ちそれには漠然さがあり、外的及び内的の粉乱があるのである。異な

場合に把握されたものが同一のもの（乃至同一の本質）であるか或は違つたそれであるかという事は、決定不可能であるか乃至は『単に粗笨そほんにのみ』決定され得るにすぎぬかであらう。他の把握されたものに實際如何なる成分が含まれているか、又、時には既に曖昧ながら浮び上つて現れている所の、即ちぼんやりと輪郭だけ示されている所の成分は『本来』何で『ある』か、という事は確定され得ない。それ故、往々流動的不明晰さに於いて、多少共直観からの隔遠に於いて、髣髴しているものを正常的近接に迄、即ち**完全な明晰さに迄**齎して、そのものに対して、それ相應に大切な本質直覚——指向された本質と本質関係とはそれに依つて完全に与えられるに至る——を行うという事が必要である。

随つて本質把握は、髣髴している単独体と等しく、それ自身に明晰性の段階を有つてゐる。ところが如何なる本質にとつても、丁度個体に於ける対応的契機にとつてと等しく、言わば**絶対的近接**——これに於いて本質の所与は、此の明晰性の段階度から見て、絶対的所与であり、換言すれば**純粹なる自体所与**である——なるものがある。对象的なるものというのは、単に一般に『自体に』視向の前に立ち且つ『与えられ』ているものとしてのみならず、**徹頭徹尾、それがそれ自身に然るが儘に、純粹に与えられたる自体として意識されているものである**。不明晰さの残滓が未だ残存している限りは、その残滓は、『自体』に与えられたものの裡に於いて、或る契機に暗い陰を投ずる、そのため此の契機は純粹所与者の光環の中へ這入らないのである。全き明晰さの対極である**全き不明晰さ**の場合には、全然何ものも与えられるに至らない。即ち意識は『不明なる』**最早全然直観的ならぬ**、本来の意味に於

いて最早全く『能与的 presentive』ならぬ、意識である。そこで吾々は次の如く言わねばならない。

深い意味に於ける能与意識と、非直観的なそれに対しては直観的な、『不明なる』それに対しては『明晰』なる意識と、此の二つは綺麗に一致する。所与性、直観性、明晰性、の段階も亦同様である。極限「零」は不明性であり、極限「一」は全き明晰性、直観性、所与性である。

けれども此の場合所与性は、原的所与性とは、随つて知覚的所与性とは、解され得ない。『自体に与えられた』という事を吾々は、『**原的に与えられた given originarily**』という事、『**有体的**』ありていという事と、同一視しない。精確に定められた意味に於いては、『与えられた』という事と『自体に与えられた』という事とは同一である、それで（後者の）過冗な表現を用いても、それは吾々に対し単に、より広義——此の広義に於いては畢竟あらゆる表象的なものに就いて「それは表象に於いて（併し恐らくは『空虚な仕方で』与えられている」と言われる——に於ける**所与性**を除外するという事に役立つにすぎないにきまつている。

吾々の規定は加^{しかのみならず}之、言う迄もなく明らかである如く、**任意の直観**、或は**空虚表象**に対して、それ故に又**対象性に関する制限なし**に妥当する。尤も吾々が今関心を有っているのはただ体験の与えられ方及び体験の現象学的（実的並びに指向的）成素に就いてだけではあるが。

併し将来の分析を顧るならば、次の事をも亦注意すべきである。即ち純粹我の視向は当該意識体験を貫通するとしても、一層はつきり言うならば、純粹我は『与えられたもの』の方へ『**向き**』そして時にそれを『**把捉する**』としても、或は又そうでないとしても、上述の事情の最も本質的な点は依然

保持されているという事である。それゆえ例えば『知覚的に与えられた』という事は——此の与えられたものの存在把握という本来的にして正常の意味に於いて『知覚された』という、それ程の意味でなしに——単に『知覚を待構えている』という意味でもあり得る。同様に、『想像上与えられた』というのではまだ必ずしも『想像して把握する』という意味になる必要はない。そして此の事は一般に、即ちすべての明晰性段階或は不明性段階に就いても亦そうなのである。後に至つて更に詳細に論ぜらるべき『待構え *Bereitschaft / readiness*』という事を茲に予め指示しておこう。併し同時に又、吾々は所与性 *givenness* という名称を——何等の反対的な詞も附加されていなかったり文脈上自明的であつたりする場合には——**被把握性** *Erfaltheit / being seized upon* 【把握されている】という意味、及び本質所与の時には原的把握性という意味が、**同時に含まれているものと解する**という事をも附記しておこう。

六八、真の明晰性段階と真ならざるそれ、正常的闡明の本質

扱、吾々の記述を更に続行する必要がある。吾々は所与段階或は明晰性段階という事を言うが、その場合吾々は明晰さの**真の**程度的段階——人はそれに不明性の内部に於ける**程度的段階**をも連ねる事ができる——と、**真ならざる明晰さの段階**、即ち**明晰さの範圍の外延的拡大**——時には同時に明晰さが内包的にも増加する——と、此の両つを区別せねばならない。

既に与えられた、即ち既に現実直観された契機は、多かれ少かれ明晰に与えられて居り得る、例えば音、色の如きがそれである。吾々が、直観的に与えられたもの以上に及ぶ所の解釈を悉く除外す

るとする。そうすると吾々の問題となるのは、直観的なものが正に現実直観的であるその埒内に現れる所の程度の段階である。直観性そのものに依れば、明晰なる名称の下に連続的な強度的區別を意味させる事が許される、(此の強度は零に始まって、上の方は固定的極限に終っている)。人はこゝう言うかも知れない、低い段階は或る仕方で此の極限を指示する、即ち、不完全な明晰さという状態で或る色を直観する時、吾々はその色を、それが『それ自体に』あるが俚に『思念 meinen / mean』する、その思念された色こそ正に完全な明晰さに於いて与えられている色なのである、と。併しながら人は、指示という譬喩に依つて——宛も或る事象が他の事象を表す記号でもあるかの如くに——迷わされてはならない。それと同様に又人は此の場合に、(吾々は既に嚮に嘗て述べた事柄を想起する)、不明晰なものを通しての明晰な『それ自体』の示現——恐らく、直観に於いて或る物的な特性が或る感覚契機を通して『示現 darstellen / presented』する、即ち射映する如き示現——という事を口にしてはならない。**程度の明晰さの區別は、与えられ方に於ける全然独特な區別なのである。**

ところが直観的に与えられたもの以上に及ぶ所の解釈が、現実直観的な把握に対し空虚解釈を織り交ぜ、それ故に又それが、準程度的に愈々益々、空虚表象的なものに就いては直観的に、又既に直観的なものに就いては空虚表象的になり得るという場合には、事情は上述と全く別である。それで此の場合には、**明晰になるという事は相互に結合する二様の過程をその本性とする、即ち、直観化の過程と、既に直観的なものの明晰さの増加の過程とがそれである。**

扱、上述に依つて**正常的闡明の本質**は記述された。何故ならば、次の事が通則であるからである。

というのは即ち、純粹直観というものは現存するものでない、換言すれば純粹なる空虚表象が移行して純粹直観となるのである、寧ろ場合に依つては中間段階として、**不純直観**——それはその対象たるものを或る側面乃至契機から直観に齎し、他の側面は単に空虚に表象する——が主要な役目を演ずるのである、という事である。

(一) 上述四節、上巻一六三頁参照。【「扱吾々はこれと聯関して」以下】

六九、完全に明晰なる本質把握の方法

完全に**明晰なる把握**というものは、絶對的に疑いなき同一視及び區別、表明、關係づけ等々を、随つてあらゆる『論理的』作用の『洞觀的』遂行を、その本質上許すものであるという特長を有つてゐる。**本質把握の作用**も亦それに属する。此の作用の対象的双関者へ、上に既に述べた如く、今や詳細に闡明された所の明晰さの區別が移渡される。それは、他方に於いて、前述に於いて獲得された吾々の方法論的認識が完全なる本質所与の達成に移渡されると同様である。

それゆえ一般に、**形相的学一般の方法の一基礎部分**をなす所の方法は、歩一歩的前進を要求する。本質把握に役立つ所の単独体直観は、本質普遍者を全く明晰に獲得せんとするにはそれだけでも十分に明晰であるであらう、けれどもそれは主要目的を達するには不十分である。即ち、一緒に絡み合つてゐる本質を一層詳細に規定するに就いては明晰さが欠如しているのである。それ故、範例的單

i 「移渡」übertragen (英 are transferred just as) 渡辺訳「そのまま転用して」当てはめて語られる」

独体を更に詳細にする事、或はより適當なる单独体——それに於いて、紛然と不明に指向された单独特徴が目立つて来る事ができ、又そうなると極めて明晰な所与にまで齎される事ができる——を新しく調達する事が必要である。

更に詳細にするという事は、こういう場合何時も、**不明性の領界内に於いても既に行われる**。不明に表象されているものは、それ独自の仕方で、吾々に一層近づいて来て終には直觀の門を敲くのであるが、併しだからといってそれは此の門を潜る必要はない（又恐らくそれは『心理学的障碍のため』に此の門を潜る事はできない）のである。

更に次の事を述べておくべきである。**其時々与えられているものは多くの場合、未規定的規定可能性の庭** *Hof / hato*——これは、表象系列への分散に依つて『展開的』に近づけられるという仕方を有っている、即ちこれは先ず最初には恐らくもう一度不明性の裡に在り、次いで新規に所与の領界に在り、そして終には指向されたものが完全所与というはつきり照らし出された圈内へ入つて来るに至る——に取り囲まれている。

猶お注意しておきたい事は、**本質把握の明証は悉く、その根柢に在る所の具体相に於ける单独体の完全に明晰ならん事を要求するというのは、恐らく言いすぎである**という事である。色と音との間に於ける、又知覚と意志との間に於けるその如き最普遍的なる本質區別を把握するには、明晰段階の低い類例が与えられれば無論それで十分である。その類例に於いて既に最普遍者即ち類（色一般、音一般）は**完全に与えられている**（が種差は猶お未だ与えられて居ない）と言つて宜いであらう。斯

く言うのは好ましくない言い方ではある。けれども私は此の言い方を避け得ないように思う。此の事情を、生き生きとした直覚に依つて現前化されん事を希望する。

七〇、本質闡明の方法に於ける知覚の役割、自由想像の優位

吾々は更に、本質把握の方法の特に重要な特徴二三を挙げよう。

直接直覚的な本質把握は、その普遍的本質上此の本質把握（吾々は既にこれに重きをおいた）^(二)は範例的単独体の**単なる現前化** *Vergegenwärtigung / presentation* を基礎として遂行され得るという性質を有っている。ところで現前化、例えば想像 *phantasy* は、右に述べた如く、完全なる本質把握並びに本質洞観を可能ならしめるほど完全に明晰であり得るものである。一般に**原能的能与の知覚** *Originality / presentive perception* は、あらゆる種類の現前化に比較して、特長を有っている。特に外部知覚は勿論そうである。けれどもそれは単に定在確認——これは無論今は問題でない——のための経験作用としてのみでなく、現象学的なる本質確認のための根柢としてである。外部知覚は、それに於いて原性なる様態に於いて現実的に与えられている所のすべての対象的契機に就いて、完全なる明晰さを有っている。ところが外部知覚は又、時にはそれに再帰的に関係 *zurückbezogenen / related back to* せる反省と協働して、現象学的種類の普遍的なる本質分析に対し、更には加之作用分析に対し、明瞭不変なる単独化を提供しもある。怒りは反省に依つて消滅し、内容が速かに変容するであろう。怒りは又必ずしも知覚のように待構えているものではない、換言すれば便宜の実験装置に依つて何時でも生ぜしめられ

得るものではない。怒りをその原性に於いて反省的に研究するというのは、消滅して行く怒りを研究するという事である。此の事は成程決して無意義な事ではない、併し恐らくは、本来研究の目指した所を外れているであろう。それに反して、外部知覚、即ち外部的なるだけに一層達し易い知覚は、反省に依つて『消滅』するということがない。此の外部知覚の普遍的本質、及びそれに普遍的に属する成分と本質双関者との本質、の方は吾々は、明晰さを招致するに何等特に勞する事なくして、之を原性の埒内で研究する事ができるのである。若し、知覚にも亦明晰さの別がある、即ち闇の中、霧の中等々に於ける知覚の場合に關してそうである、と言う人があるにしても、吾々は今此処では、その區別が嚮に述べた區別と然く全く同列に置かるべきか否か更に詳細に考量する事には手を着けまいと思う。知覚はその周囲に常態として霧がかかっているものであるのではないという事、及び、明晰な知覚は必要に應じて何時でも吾々はそれを自由に招致できるものであるという事、此の事を指摘しておけば十分である。

扨、若し原性の特長が方法上甚だ重要なものであるとするならば、吾々は、原性は何処で、又如何にして、又如何なる範圍に於いて、種々なる種類の體驗にあつて實現され得るのであるか、感性的知覚という斯く甚だ特長ある範圍には、如何なる種類の體驗が此の点特に似るのであるか、その他此の種の諸点に關して考察を加えねばならぬであろう。にも拘らず吾々は、この事はすべて度外視して差し聞えない。現象学に於いても、又すべての形相的学に於いても、現前化、更に詳しくは自由想像の方が知覚に比較して有利である、のみならず知覚そのものの現象学に於いてさえ（感覚与件の現象学

は勿論除外）そうである、という事は根柢のある事なのである。

幾何学者はその研究思考に當つて、図形乃至模型を手懸りとする知覚に依つてよりも、比較できぬほど多く想像に依つて操作するものである。而も『純粹』幾何学者、即ち代数学的方法を抛棄する幾何学者さえそうなのである。図形や模型は努力を省いてくれるのに、想像に依る場合には幾何学者は明晰なる直観を得るために努力しなくてはならぬのは勿論である。けれども現実に図形を描き模型を造るという場合には幾何学者は束縛されている。然るに想像に於いては、仮構図形を勝手に改造でき、絶えず変様される可能的形態を通覧でき、随つて無数の新形象を産み出せる。此の点で想像に於いて幾何学者は比較できぬほど自由なのである。此の自由は、幾何学者に対して、本質認識の無限の地平を有つ所の広大なる本質可能性の彼方に至る通路を初めて拓いてくれるものである。それゆえ作図は通例、想像構成並びにそれを基礎として行われる形相的に純粹なる思惟に**追隨**するものであつて、既に予め遂行された過程の段階を固定し且つそうする事に依つてその過程を再び現前化する事を一層容易ならしめるというために主として役立つものである。図形に關して『追考』される場合にも亦、それに新しく結び付く思惟過程は、その感性的根柢から言えば想像過程——その成果がその図形に於ける新しき線を確定する——である。

還元せられたる体験及びそれに本質上属する双関者を取扱う所の現象学者にとつても、極大体の点から見れば事情は右と異ならない。現象学的本質形態も亦無限に多いものである。原的所与という補助手段は、現象学者と雖も僅かに限られた範囲の利用をなし得るにすぎない。原的所与に於いて現象

学者は、知覚及び現前化のすべての主要類型をば——詳しく言えば知覚、想像、回想等々の現象学にとつての知覚的挙例として——自由に駆使できるといふ事は成程事実である。同様に又現象学者は、最普遍者に応ずるためには、原性の領界内で判断、推量、感情、意欲等に対する範例を意の俚に用ひはする。けれども、すべての可能なる特殊相に應ずるためにそうするわけには行かぬ事は自明的である。丁度それは、幾何学者が無限に多種類の物体を表す図形や模型は之を意の俚にするを得ないのと同様である。現象学に於いても亦、本質研究の自由といふ事は必然的に想像に依る操作をどうしても要求するのである。

他方又、(此の場合にも亦最近模型蒐集等を甚だ重んじて徒勞でない所の幾何学に於けると等しく)、今要求されている完全なる闡明をなすに当つて想像所与を自由に改造して想像を豊富に働かせるといふ事、併し又それ以前に、原的直観に於けるできる限り豊富にして適当な觀察に依つて想像を肥やしておく——今茲に肥やすといふ意味は無論、経験そのものに妥当を基礎づける機能があるといふ謂ではない——という事も、勿論必要なのである。歴史に現れるものは異常に多く利用できる。併し芸術特に詩に現れるものは更に遙かに多く利用できる。無論後者は想像ではある。けれども、創作の獨創性、個々特性の豊富さ、動機づけの緊密さ等の点で、吾々自身の想像の働きを抜く事遙かなるものがあり、且つ又それに加えて、それが了解把握されるに際して、芸術的叙述法の暗示力に依つて優れて容易に、完全に明晰なる想像の裡へ入つて来るのである。

かくて、若し逆説的な言い方を好むならば、まこと洵に人は——そして又多義なる意味を十分了解するな

らば精密なる真理として——次の如く言い得られる。『**仮構** Fiktion / feigning』こそ**現象学並びにすべての形相学的生命素をなす**、即ち**仮構**こそ『永遠真理』の認識がそれから營養を吸収する源泉である。^(二)

(一) 上述第四節、上巻四六頁以下参照。【「本質諦視と想像」】

(二) 此の命題は、形相的な認識仕方を自然主義的立場からして輕蔑するために引用するに特に恰好なものとされないとも限らないであらう。

七一、体験の記述的形相学の可能性の問題

繰返し吾々は上述に於いて、現象学を直截^{ちよくせつ}に記述的学と呼んだ。そこで又、方法上の基礎的疑問と、此の新範圍への吾々の熱心な究明を妨げる懸念とが生じて来る。現象学に対し単なる記述という目的を負わせるのは正当であるうか。記述的な形相学——それは畢竟^{ひつぎやう}背理なる或るものではなからうか。

斯くの如き疑問を起さしめる動機には、吾々誰しも直ぐ動かされ易い。如何なる研究が茲で可能であるか、如何なる出発点を採るべきか、如何なる方法に随うべきか、之等の事を問いながら、吾々のような仕方では新形相学の中へ言わば手探りしつつ入って行く者は、高度の發達を遂げた古い形相的学科、それゆえ数学の諸科、殊に幾何学と算術とを、知らず識らず目標とする。けれども吾々は直ちに、之等の諸学科は吾々の場合に於いて、指導の任に就き得るものでないという事、即ちこれ等の諸学科に於いては事情が本質的に異ならざるを得ないという事に気付くのである。未だ毫末^{じうまつ}も真の現象学的

本質分析を識らぬ者には、現象学の可能性を狐疑せしめるような危険が此の場合多少存在している。学的形相学の考案を今のところ有力に代表し得るものとしては、数学の諸科が唯一のものである。それ故、猶お他に別種の形相的学科が、即ち非数学的な、その全理論類型上從來既知の諸学科とは根本的に相違せるそれが有るかも知れぬというような考えには、差し当つては想い及び難いのである。それゆえ若し人が、一般的考量に依つて、現象学的形相学の要請に賛成させられた場合には、現象の数学というようなものを創立せんとする所の即刻不成功に帰すべき企てをして、ついに現象学考案の抛棄へ誘惑されて行くという事があり得るであらう。若しそうなれば愈々似て背理に陥るに至るのである。

吾々は、**数学諸科の固有性を、体験の本質論の固有性に対立せしめて**、そのごく一般的な性質を明らかにしよう。そしてそれに依つて又、目的並びに方法にして、体験の領界に於いて原理的に不適当なのは一般如何なる種類のそれであるかという事を明らかにしよう。

七二、具体的、抽象的、『数学的』等の諸本質学

吾々は、本質及び本質学を質料的と形式的とのそれに分かつ事から出発しよう。現象学は明かに質料的形相学に属する故、吾々は形式的本質学科を、随つて形式的数学学科の全体を除去する事ができる。苟くも方法上類推といふものが指導的であり得るならば、吾々が問題を質料的数学学科例えば幾何学の如きの範囲に限り、随つて、現象学は**体験の『幾何学』**として規整【構成】されねばならぬ――

——或は規整され得る——か否かと一層特殊的に問う場合に、類推は最も效力を發揮するであらう。
今所期の洞観を獲るためには、一般知識学からの二三の重要な規定を念頭に置く事が必要である。^(二)
理論的科学の各々はイデー的に完結せる総体を、認識範囲——此の方は又上位の類に依つて規定されている——への關係を通して結合する。根本的統一は之を吾々は、絶対最高類へ——随つて其の時々の領域及び領域の類要素、即ち領域類に於いて互いに一致し又時に互いに他を基礎とする所の最高類へ——遡及する事に依つて初めて獲得する。最高の具体的類（領域）の構造が、一部は選言的な最高類から、一部は相互に基づけられている（且つ又そういう仕方で相互抱合的な）最高類から成つていゝるという事は、それに属する具体者の構造が、一部は選言的な最低種差から、一部は相互に基づけられている最低種差——例えば物に於いては、時間的、空間的、及び物質的等の規定——から成つていゝるという事に対応するものである。各々の領域には一つの領域的存在学が対応する。そしてそれは、独立的に完結し、時には相互の上に立つ所の諸領域学——これは正に、該領域内に於いてその統一を保つてゐる所の諸最高類に対応する——の一系列を率いてゐる。下屬諸類には單なる学科乃至所謂理論が、即ち例えば円錐曲線という類には円錐曲線に就いての学科が対応してゐる。かくの如き学科はその本性上、それが認識及び認識基礎づけをなすに當つては、本質認識の全基底——それは最高類に於いてその統一を保つてゐる——を用いねばならぬであらう限り、それには明らかに何等完全なる独立性はないのである。

最高類が領域的（具体的）なそれであるか或は單に該類の要素であるかに従つて夫々、**学は具體的**

学であり或は**抽象的**学である。此の区分は明らかに、具体的と抽象的との類一般の区分に対応するものである。^(三)それゆえ夫々の範圍には、前者の場合には自然の形相学に於ける如く具体的対象が、後者の場合には空間形態、時間及び運動の形態の如き抽象的对象が、属する。あらゆる抽象類が、具体類へ、且つ最後には領域類へ本質關係を有しているという事が、抽象学科と完全なる学とのすべてをして、具体的なる学、即ち領域的なる学に対する本質關係を有たしめるのである。

形相的なる学の区分にはその他猶お、経験科学の区分が精確に並行している。経験科学も亦領域に従つて分化する。例えば吾々はただ**一つ**の物的自然科学を有っている。それ故すべての個々の自然科学は本来は単なる学科にすぎないのである。單に形相的法則のみならず經驗的法則——自然領界への如何なる分化にも先立つて物的自然一般に属する法則——も亦非常に多数存するという事に依つて、個々の自然科学は統一を得ている。なお又、種々異なる領域も亦經驗的規則に依つて結合されているという事が証示され得る。即ち例えば物的領域と心的領域との如きがそうである。

扱、既知の形相的諸学を瞥見すると、吾々の目につく事は、それ等諸学は**非記述的**に進行するといふ事實である。即ち例えば幾何学は、形相的最低種差を、それゆえ空間へ描かるべき無數の空間形態を——記述的自然科学が經驗的自然形態に就いてするように——單独体直覺に依つて把握し、記述し、且つ分類的に排列するのでないといふ事實である。幾何学は反対に、若干少数種の基本形象、即ち立体、面、点、角等々のイデー、即ち『公理』に於いて規定的作用を演ずる所のイデーを確定する。それゆえ幾何学は、空間内に『現存』する所の、換言すればイデー的に可能なる所の空間形態の**すべて**、及

びそれに属する本質関係のすべてを、吾々の直覚には一般にどこ迄も未知である所の本質を代表する精密に規定的なる概念の形で、純演繹的に導出するものであるが、此の事は、公理即ち本原的な本質法則の助けを籍りて可能なのである。幾何学範圍の類の本質或は空間の純粹本質はその性質が、幾何学がその方法に従つて實際あらゆる可能性を——而も精密に——知悉するに絶対的確信を有ち得る、というように出来上つてゐる。語を換えて言えば、空間形態一般の複素体はひとつの顯著なる論理的基本特性を有つてゐるのであつて、吾々は之を、**深い意味に於ける『決定的』複素体乃至数学的複素体**という名辭を導入して言い表す。

斯くの如き複素体は次の如き性格を有つてゐる。即ち、与えられたる場合にその場合々々の範圍の本質から汲み取らるべき**概念及び命題の有限数が、該範圍のあらゆる可能的形態の總体を、純粹分析的必然という仕方です完全且つ一義的に規定する**、それゆゑ随つて、該範圍内には**最早原理的に何ものも規定の余地を残してゐない**、という事である。

右の如く言う代りに吾々は又次のようにも言う事ができる。即ち、斯くの如き複素体は、『**数学的に遺漏なく定義され得**』るという特性を有つてゐる、と。『**定義**』というものは公理的概念と公理との体系内に存する。そして『**数学的に遺漏なし**』という事の本性は、複素体に關する**定義的主張が、考へ得る最大の予断——最早何ものも無規定の俛ではないという予断——を含んでゐる**という点に在る。

決定的複素体という概念と等価的な概念が、次の諸命題にも含まれてゐる。

如何なる論理的形式に依るにせよ、上に特記した公理的概念から形成される命題は何れも、公理からの純粹なる形式論理的帰結であるか、或は矢張り公理からの純粹形式論理的なる反帰結（即ち公理に對し形式的に矛盾的）であるか——この場合には矛盾對當が公理からの形式論理的帰結であらう——である。数学的・決定的な複素体に於いては、『真』と『公理からの形式論理的帰結』との兩概念は等価的である。同様に又『偽』と『公理からの形式論理的反帰結』の兩概念も等価的である。

純粹分析的仕方に依つて複素体を、上に述べた仕方で、『遺漏なく定義する』ところの公理体系を私は又決定的公理体系とも呼ぶ。斯くの如き体系の上に立つ演繹的学科の各々は、決定的学科乃至深い意味に於いて数学的なる学科である。

吾々が複素体の質料的特殊化を全く規定せずにおき、随つて形式化的普遍化を企てる場合にも、定義は悉く依然存立している。その時、公理体系は公理形式の体系へ、複素体は複素体形式へ、複素体に関する学科は学科形式へ、夫々転化して行く。^(三)

(一) 更に詳しくは、第一篇第一章、特に第二、二五及び一六節参照。

(二) 上述第一五節、上巻七四頁参照【「更に進んで類は」以下】。

(三) これに就いては『論、研』第一卷（第二版）第六九及び七〇の兩節参照。——茲に導入した諸概念は私が一八九〇年代の初めに既に（拙著『算術の哲学』の続篇として考案した『形式数学諸学科の理論研究』に於いて）、但し主として、虚数の問題に對し原理的解決を見出さんとする（『論、研』第一卷（第一版）二五〇頁の簡単な論及を参照）目的のために、使用したものである。爾来私は講義に演習に屢々、ⁱ「矛盾對當」伝統的論理学の用語、二命題の關係を言うが、要するに一方が真なら他方が偽となる關係を言う。

右に關係ある諸々の概念及び理論を（一部分は完全に詳細に）展開する機会を得た。そして一九〇〇年乃至一九〇一年の冬学期には、ゲッティンゲンの『数学協会』の二回講演に於いてそれ等の概念、理論を取扱った。然るに此の方面の思想の個々の点は、その出典を挙げずに文献中に流用されている。——私の決定性の概念が、算術の基礎づけのためにダキット・ヒルベルトの導入した『完備の公理』に対し密接なる關係のある事は如何なる数学者も直ちに合点する所であらう。

七三、現象学の問題への適用、記述と精密なる規定

扱質料的数学一般の代表者としての幾何学に比較して、**現象学**はどうかであるか。現象学が具体的、形相的学科に属する事は明らかである。現象学の範圍を成すものは**体験本質**であり、これは抽象者ではなくして具体者である。具体者はそれ自身、多種の抽象的契機を有っている。そこで疑問となるのは、それ等抽象的契機に属する最高類は今の場合にも亦、決定的諸学科、即ち幾何学の方法に従う『数学的』諸学科、の範圍に入るか、という事である。今の場合にも亦、それ故、吾々は決定的公理体系を求め、そしてそれの上に演繹的理論を築くべきであるか。即ち、今の場合にも亦吾々は『基本形象 Grundgebilde【根本形象】』を求め、そしてそれから該範圍のあらゆる他の本質相 Wesensgestaltungen【本質諸形態】及びその本質相の本質規定 determinations を、構成的に、即ち公理を整合的に適用して演繹的に、導出すべきであるか。所が斯くの如き導出の本質には、間接的な論理的規定——その結果は、仮令それが『図形に描かれ』る場合と雖も原理的に、直接的直覺に依つては把握され得ない——である

という事が属している、そして此の事も亦注意すべき事柄なのである。吾々は吾々の疑問を次のような言葉を以て——同時に双関的な言い方に依つて——も亦言い表す事ができる。即ち、意識の流れは眞の数学的複素体であるか、と。此の意識の流れは、事実に於いてみる時、物理学的自然と同等であるか。(物理学的自然は、物理学者を究竟的に指導する理想が厳密なる概念に依つて妥当的に捉えられる時は、無論具體的な決定的複素体と呼ぶべきであらう。)

当該の原理的疑問のすべてを完全に明らかにしようという事、随つて決定的複素体という概念を確定した後必須条件——質料的に規定された範圍が、若し此の考案に相応し得べきであるならば、満足させねばならぬ条件——を考量しようという事は、知識学上の至つて重要な問題である。そうするためひとつの条件は『**概念構成**』の**精密性**という事である。此の精密性なるものは、決して吾々の自由恣意や論理的技巧のする事ではなくして、要求されている公理的概念——ところがこれは直接的直覺に於いて証示され得ねばならぬ——から観て、それは**把握された本質そのものの精密性**を前提している。けれども『精密』なる本質は如何なる程度まで本質の範圍内に於いて見出され得るのであるかという事、そのみでなく又精密なる本質は、現実的直覺に依つて把握され得るすべての本質に、随つて又すべての本質要素にも、基体として置かれ得るかという事——それは全然その範圍の特性に依属する事である。

今触れた問題は、『**記述**』とそれの『**記述的諸概念**』との關係及び『**一義的な**』即ち『**精密な規定**』とそれの『**イデーの諸概念**』との關係の原理的闡明、並びにそれと並行して、『**記述学**』と『**説明学**』

との間の猶お未だ殆んど理解されていない関係の闡明——そういう基底的にして且つ又猶お未解決なる諸問題に密接に結び付けられている。此の点に關する試論は、本研究の續きに於いて報告しようと思う。けれども今は吾々は吾々の考究の輪郭を余りに長く保留しておくべき場合でない。が又吾々は、斯くの如き疑問を今既に遺漏なく論ずべく十分に用意しているわけでもない。そこで以下に於いて、概略を明らかにすべき二三の点を指示して満足するという事にしよう。

七四、記述学と精密学

吾々は吾々の考察を、幾何学と記述的自然科学との対比に結び付けて始めよう。幾何学者は、記述的自然科学者のする様に、事実に感性的・直観的形態に關心を有ちはしない。幾何学者は後者の様に、曖昧な形態・類型——それは感性的直観を基礎として直接に把握され、そしてそれのあるが儘に曖昧に概念的乃至術語的に確定される——の**形態学的概念**を構成しはしない。それ等概念の**曖昧**という事、即ちそれ等概念の適用領界が流動的だという事情は、概念に附着さすべき汚点ではない。何故ならば、それ等概念はそれが役立つ所の認識領界に対して絶対に不可欠である、換言すればその認識領界に於いてそれ等のみが唯一正當なる概念であるからである。若し物の直観的所与を、その直観的に与えられた本質性格に就いて、適當な概念的表出に齎す事が必要であるとすれば、そうするには正にその物の所与をそれが与えられる通りに受取るといふ事が肝要である。そしてその物の所与は必ずしも流動的所与として以外の仕方与えられずとは限らない。そしてそういう流動的所与の場合に

は、類型的本質はただ直接的に分析する所の本質直覺に依つてのみ把握され得る。如何に完全な幾何学でも、又その実用に如何に完全に熟達していても、それに依つて記述的自然科学者は、彼が「鋸齒状の」、「刻目のある」、「レンズ形の」、「繖形花様の」、「さんけい等々という言葉——之等の言葉は皆本質上（そして偶然ではなく）不精密であり、随つて又非数学的でもある所の概念である——を以て、あのやうに端的なわかり易い、全く適当な仕方では表出している所のその当のものを、精密に幾何学的な概念に依つて表出するという助けとはなし得ないのである。

幾何学的概念は『イデーの』概念である。即ちそれは人の『見る』を得ない或るものを表出する。此の幾何学的概念の『根源』は、随つて又その内容も、「端的直觀から直接に取り出された本質は表出するが何等の『イデー的なもの』をも表出しない概念」としての『記述概念の根源や内容とは、本質的に別のものである。精密な概念は、カントの意味に於ける『イデー』の性格を有つ本質を、その双関者としてゐる。このイデー乃至イデーの本質には、記述的概念の双関者として形態学的本質が対立する。

イデーの本質がイデーの『極限』——それは原理上感性的直觀の裡には見出されない、そして形態学的本質は、それに到達はしないが、往々それへ向つて多少とも『近迫 approach』しては行く——である事を示す所のイデー化、此のイデー化は、単なる『抽象』に依る本質把握——取り出された『契機』はこれに依つて、原理的に曖昧なもの、即ち類型的なものとして本質の領域へ高められて行く——とは根本的に本質上異なるものである。流動するものをその範圍とする類概念乃至類本質が固定的

であるという事及び綺麗に区別され得るという事は、イデー的概念（及びイデーのなるものを悉くその範圍とする類）の精密さと混同されてはならない。かくて更に次の事が洞観され得る。即ち、精密なる学と純粹に記述的なる学とは成程互いに結び付きはする、併しそれ等は相互に代り合う事はできないという事、換言すれば、精密なる、即ちイデーの基構 *substructions* に携わる学は、仮令如何に発達しても、元來純粹記述の權利に属する諸課題を解決する事はできないという事である。

七五、純粹体験の記述の本質学としての現象学

現象学に關していえば、それは現象学的觀方に於ける先驗的に純粹なる体験に就いての記述的本質学たらんとするものである。そしてそれは、記述的な学科、即ち基構を構成するのでもなくイデー的概念を構成するのでもない学科は悉く然る如く、その權利をそれ自身の裡に有っている。還元せられたる体験に於いて、実的成素としてにせよ或は指向的関者としてにせよ、よし如何なるものが純粹直覺に依つて形相的に捉えられ得るにせよ、それは現象学に固有であり、且つ又それは現象学にとつて絶対的認識の広大な源泉である。

併しながら吾々は、無數の形相的具体者を有する現象学的分野の上に真に学的なる記述はどの程度迄うち樹てられ得るのであるか、そして又その記述は何事を成就し得るのであるか、という事を少しく仔細に検討しよう。

意識一般の固有性には、意識は種々異なる次元へ向つて進行する波動であるという事、それゆえ

何等かの形相的具体者及びそれを直接に規整するすべての契機を、概念的に精密に固定する事は問題になり得ないという事、が存している。例えば吾々が、『物の想像』なる類の体験を、それが——現象学的・内在的知覚に於いてにせよ或はその他の（如何なる場合にも還元せられたる）直観に於いてにせよ——吾々に与えられているが俟に受取るとする。そうすると此の物の想像——それが体験の流れの中を流れ去る恰もその通りにその具体相の全き充実に於ける物の想像、又、それがその物を時に此の時に彼の側面から現出せしめる際の規定性乃至非規定性、恰もそれ等に於ける物の想像、又、それにまさしく固有なる判明性乃至曖昧性、動搖的明晰性乃至間歇的（かんげつ）不明性、恰もそれ等に於ける物の想像——こそは、現象学的に単独なるもの（形相的単独性）なのである。個体だけは之を現象学は拋棄する。併し現象学は、充實的具體相に在る全本質内実は之を形相的意識に迄高め、そしてそれを、各々の本質と等しく単に *hic et nunc*（此処に且つ今）にでなく無数の事例に於て単独化し得るのである所のイデー的・同一的本質として受取るのである。人は直ちに次の事を覚るであろう、即ち、此の及び此の種各々の流動的**具体者**を、概念的且つ術語的に**固定する事**は想い及び得ないという事、それから、斯くの如き具体者の直接的にして且つ等しく流動的な部分と抽象的な契機との各々に就いても、右と同じ事が言い得られるという事である。

扱吾々の記述的領界に於いては**形相的単独性**の一義的規定という事は問題にならないとしても、**より高い段階の特殊性**の本質に就いては事情は全く別である。後者の本質は確定的区別、同一視の保持、及び嚴密なる概念的把握を、同様に又要素的本質への分析を、受け得る。随つて当然それに対しては、

包括的なる学的記述の課題を課する事ができるのである。

それゆえ吾々は、知覚一般の類的本質を、乃至は物の物性、動物的存在等々の知覚の如き下屬種の類的本質を、同様に又回想一般、感情移入一般、意欲一般等々のそれを、記述し且つそうする事に依つて**厳密なる概念**に依つて規定する。所が前以て存するのは、最高普遍性即ち元來包括的本質記述を可能ならしめる所の体験一般、コギタティオ一般である。此の場合に又、類的本質把握、分析、記述の本性の中には、高次段階の作業の低次段階のそれに対する一種の依屬性——即ち言わば、体系的なる帰納的方法、普遍性階段の歩一的上昇という様なものが方法上要求されるという如き種類の依屬性——は存しないという事が明らかに含まれているのである。

此処に、も一つの帰結を附け加えておこう。上に詳論した所に従えば、演繹的なる理論構成は現象学から除外されている。**間接推理**は現象学に必ずしも無下に拒まれてはいない。けれども、現象学の認識はすべて、内在的領界に純粹に適應したる記述的認識であるべきであるから、推理、即ち各種の非直観的方法是單に、事象——後に来る直接的本質諦視に依つて所与とさるべきそれ——に向つて吾々を導くという方法的意義を有するにすぎない。必要に際して類推を行えば、それは現実的直覚以前に本質聯関に就いての推量を示してくれるかも知れない。するとそれからしてそれ以上の推理が行われ得る。けれども結局は、本質聯関の現実的諦視が推量を**贖**^{あがな}わねばならない。然らざる間は吾々は、何等の現象学的成果をも得ないのである。

還元された現象の形相的範圍（その全範圍にせよ或は或る一部の範圍にせよ）に、記述的方法の外

にイデー的概念構成の方法——それは直観的所与に純粹且つ嚴密なイデー的概念を置き換える、すると更に此のイデー的概念は**記述的**現象学の対応者としての体験の普遍学に対する基礎手段として役立ち得さえするというような、そういう方法——がないかどうか、という不可避的疑問には、上述を以てしては勿論答えられていない。

以上成し了えた研究は多くの未解決の点を残さざるを得なかつたとはいへ、それは吾々に著しく刺戟を与えた。而もそれは啻に、一聯の重要な問題を吾々の視野の中に持ち來したという点に於いてのみではなかつたのである。類推を以てしては——これは今や吾々にとつて全く明晰な事であるが——現象学の基礎づけのためには何等得る所がない。若し徹底的に**精密なる**觀念科学なる所の歴史的に与えられている先天的科学の方法が、その俟あらゆる新しい先天的科学の、殊に吾々の先驗的現象学の模範でなければならぬと——あたかもただ一つの方法上の型即ち『精密性』なる型の形相学のみが存し得るのであるかの如くに——考えるならば、それは人を迷わす先入見であるにすぎない。記述的本質学としての先驗的現象学は、数学的諸学とは**全然別個の基礎的部類の形相的学**に属するのである。

第二章 純粹意識の一般構造

七六、以下の研究の主題

先験的意識なる領分は、或る一定の意味で『絶対的』である所の存在という領分であるという事が、現象学的還元によつて吾々に明らかになつた。すべての他の存在領域が根ざす所のもの、それ等がその本質上關係しているもの、随つてそれ等が悉く本質上依属しているもの、それは即ち存在一般なる原本範疇（或は吾々の用語では原本領域）である。範疇論は是非共、あらゆる存在区別中最も根本的な此の区別——意識としての存在と意識に於いて自らを『表明』する所の、即ち『超越的』なる存在としての存在との区別——から出發せねばならぬ。然るに此の区別は、人の明らかに知る如く、現象学的還元なる方法によつてのみその純粹相に於いて獲得され認証され得るものである。先験的存在と超越的存在との間の本質關係の裡に、吾々が既に繰返し触れた所の、併し後になつてなお一層深く探究さるべき所の、現象学と爾他すべての学との間の關係が、その基礎を置いている。此の後者の關係の意味には、現象学の支配区域は或る注意すべき仕方での学（それ等を現象学は排去するにも拘らず）の上に迄延びるという事が含まれている。排去なるものは同時に又、「価値顛倒をなす記号変更」という性格を有っている、そして此の記号変更によつて、価値顛倒されたものは再び現象学の領界へ編入される。譬喩的に言うならば、括弧に入れられたものは現象学の目録から払拭されてしまつたのではなく、ほんのただ括弧に入れられ、且つそうする事に依つて指標を与えられたにすぎない。

いのである。ところで括弧に入れられたものは、此の指標を持つて、研究の主要主題に属するのである。此の事情を、それ固有の種々異なる視点と共に、根本的に了解するという事が是非とも必要である。一例を挙げれば、例えば、物的自然は排去を免れぬ、然るにも拘らず自然科学的な経験及び思惟の側からいえば自然科学的意識の現象学があり、のみならず自然科学的意識の双関者としての自然そのものの現象学もある、という如きはそれである。同様にして、心理学や精神科学は排去を蒙つても、人間、人間の人格、人間の人格的特性、及び人間の（人間的なる）意識進行等の現象学、更には社会的精神、社会的形態、文化形象等々の現象学は存在する。すべて超越的なものは、それが意識に於いて与えられる限り、啻にそれに**就いての意識**の側面、例えばそれが同一のものとして与えられる時の種々異なる意識仕方の側面から見て現象学的研究の対象であるのみならず、更に又——此の事と本質的に結び合っている事ではあるが——与えられ且つ与えられるという事に於いて受取られたものとしても亦、現象学的研究の対象である。

斯くして現象学的研究の広大なる領分が存在する。然るに人は、体験という觀念から出発するため此の領分に向注意していない——特に人が、吾々誰しもそうである様に、心理学的観方を以て発足し、体験の概念を先ず現代の心理学に依つて与えられる場合には、殊更そうである——、そして又人は、内的障礙に征服されて、右の領分を兎に角現象学的領分として承認しようとする氣持を、当初は殆んど有たないであろう。括弧に入れられたものを斯く包含する事の結果として、心理学と精神科学とに対して全く独自の且つ当初は混乱的な事情が生じて来る。此の事をただ心理学に就いてだけ指摘

するに、吾々は次の事を確認する。即ち心理学的経験の所与としての、随つて人間乃至動物の意識としての意識は、経験的心理学の経験科学的研究に於いても、形相的心理学の本質学的研究に於いても、心理学の対象 *Object*【客観】なのである。他方に於いて、心的個人とそれの心的体験とを含む全世界は——すべて絶対意識の双関者として——括弧入れという変様に於いて現象学の中へ入る。斯くてそれ故、意識は異なる——而も現象学そのものの範囲内で異なる——把握仕方乃至聯関に於いて現れて来る。即ち、現象学そのものに於いて、或る時は絶対意識として、他の場合にはそれと双関的に、これは自然的世界に編入される心理学的意識として——或る仕方では価値顛倒が行われ、然も意識として固有の内実を喪失する事なしに——現れて来る。これは難解な聯関であり而も格別重要なそれである。のみならずこれも亦此の聯関に由来する事であるが、絶対意識に関する現象学的論定 *Essstellung* / *finding*【確認】の各々は、形相的・心理学的論定——それは厳密に考量すれば決してその儘で現象学的論定ではない——へ転釈され得るのである。併し此の場合現象学的な考察法の方が一層包括的な考察法であり、且つ又絶対的考察法として一層根本的な考察法である。以上の事を悉く洞観し、且つ更に進んでは純粹現象学、形相的心理学、経験的心理学、乃至精神科学の間の本質關係を明徹限なき明晰さに齎すという事が、此処に關与せる諸学科及び哲学にとつて重大な要件である。特に現代のようには旺盛に努力向上しつつある心理学も、上述の本質聯関に關し広汎なる洞観を驅使してのみ初めて、今猶おそれに欠如する根本的基礎づけを贏^かち得る事ができるのである。

i 「心的個人」 psychischen Individuen 渡辺訳 「心理作用を行う諸個人」

今示した指示に依つて吾々は、吾々が未だ現象学の了解から如何に遠ざかつてゐるかを覺らしめられる。現象学的観方を行う事を吾々は既に学んだ。人を迷わす方法上の懸念の一聯を吾々は既に取り除いた。純粹記述の權利を吾々は既に擁護した。かくて今や研究の分野は広々として横たわつてゐる。然るに吾々は猶お未だ、**重大なる諸主題**はこの分野の中の何れであるか、更に詳しくいえば、**体験の最一般的本質性**に依つて如何なる**基礎的方向の記述**が示されてゐるかを知つてゐないのである。此の間の事情を明らかにせんがために吾々は以下の諸章に於いて、まさしく此の最一般的本質性を、尠くとも二三の特に重要な特徴に就いて、性格づけるべく試みよう。

元來吾々は、此の新しき考察と同時に方法の問題を捨ててゐるものではない。これ迄の方法的論究が既に、現象学的領界の本質への最一般の洞観に依つて規定されてゐたのである。此の領界を——その個々の点に就いてでなくその徹底的一般性に就いて——一層深く透徹して認識すれば、それに依つて又吾々は一層内容豊富なる方法上の規範——すべての特殊方法がそれに繫縛されざるを得ぬ規範——をも示されるに違ひないという事は自明である。方法は無論、或る範圍へ外部から齎されたものでも又齎さるべきものでもない。形式的論理学乃至ノエシス学は、方法を与えるのではなくして、可能的方法の**形式**を与えるのである。そして形式の認識は方法論から見て如何に有用であり得るにしても、**規定せられた方法**——単なる技術的特殊性に從つてでなく、一般的な方法的類型に從つて規定せられた方法——は、或る規範、即ち該範圍の領域的基礎性狀と一般的構造とから発し、随つて認識的把握の点では本質上この構造の認識に依属してゐる所の規範なのである。

七七、体験領界の根本特性としての反省、反省に依る研究

純粹なる体験領界の諸々の最一般の本質特性の中、吾々は先ず第一に**反省**を取扱おう。吾々が斯くするのは、反省には**普遍的**なる方法論的機能があるからである。即ち現象学的方法なるものは、徹頭徹尾反省の作用の中に働いて居るのである。併し反省の作業能力、随つて現象学一般の可能性には、懷疑的な懸念が加えられる。此の懸念を吾々は何よりも先ず第一に、徹底的に片附けたいと思う。

予備考察に於いて吾々は既に、反省に就いて語らざるを得なかつた。^(二)あの場合——吾々が猶お未だ現象学の地盤に足を踏み入れぬ以前——に吾々に明らかになつた事柄を、吾々は今、現象学的還元を厳密に遂行しても、猶お且つ引き継ぐ事ができる。何故ならば、あの諸論定は、全く体験固有の本質的なものに関したのであり、それ故に吾々の知る如く、ただ把握の点でだけ先驗的に純化されて、確實なる所有として吾々に残る如きものに関したのであるからである。吾々は先ず初めに、既に知り得た事柄の要旨を再説し、次いで直ちに、事象と、並びに反省に依つて可能にされ且つ要求される現象学的研究の様式とへの、より深き究明を試みよう。

各々の我はそれの体験を体験する。そしてこの諸体験の中に諸種のものが実的及び指向的に包蔵されている。我は体験を体験するというこの事は「我は体験とそれの中に包蔵されているものとを『視向の中に *im Blicke / eye on* 【目むしの中に】』有ち、且つそれを内在的経験乃至其の他の内在的直観及び表象の仕方で把握する」という意味ではない。視向の中に在らざる各々の体験も、理念的可能性から言

えば、『視向せられた erblickten / regarded』体験になり得る。即ち私の反省がそれに向う、そうするとそれは私の我にとつての客観 Objekt となるのである。体験の諸成分及び体験の指向性（可能的自我指向が時にそれに就いての意識である所のもの）への可能的自我指向 Ichblicken / Ego-regards 【私の目ざし】に關しても、事情は右と全く同様である。反省は又再び体験であり、体験として新しい反省の基体となり得る。斯くて、原理的普遍性を以て、無限に至り得る。

その時々现实的に体験される所の体験が、新しく反省的視向の中へ入り込むと、それは现实的に体験された体験として、即ち『今』在りとして、現れる。然もそのみならずそれは、たつた今在りしとして、且つ又それが視向されなかつた体験であつた限りは、とりも直さず視向されざりし体験として、即ち反省されざりし体験としても亦現れる。自然的觀方に於いては次の事は、吾々がその事を熟考せずして自明な事柄として許している。それは即ち、体験は、吾々がそれに向つて居り且つそれを内在的經驗に依つて把握している時にのみ存するのではないという事、又、体験は過去指向 Retention 【過去把持】（『第一次』回想）の範圍内に於ける内在的反省に依つて、『たつた今』ありし体験として『猶お未だ意識せられ』ている場合には、それは現実であつた、即ち吾々に依つて現實的に体験された体験であつたのである、という事である。

次に又吾々は下の如く確信している。即ち、再回想を基礎として、且つ又それに『於いて』反省も亦吾々に吾々の以前の体験——それは、内在的に知覚された体験ではなかつたが、『當時』は現在的な、

i (auf das, wovon sie evtl. Bewußtsein sind) Ichblicken を指してゐるので、「私の目ざしが時に…」

當時は内在的に知覚可能な体験であつた——を告知してくれるのである。恰も此の事が、素樸的・自然的見解に従えば、**未来回想**即ち未来視向的な期待に就いても等しく妥当する。そこで先ず第一に問題になるのは、直接的過去指向の精確な対応者たる（言い得るならば）直接的『**未来指向** Protection 【未来把持】』であり、次にはこれとは全く別様に現前化する未来指向即ち本来の意味に於いて再生産するそれ——再回想の対応者——である。此の場合に、直覺的に期待されたもの、未来視向に於いて『未来に来る』として意識されたものは未来回想に『於いて』可能なる反省に由つて同時に又、知覚されるであろう或るものという意義をも有っている。恰もそれは過去回想されたものが既に知覚されたりしものという意義を有っているのと全く同様である。それゆゑ未来回想に於いても亦吾々は反省する事ができ、且つ又吾々が未来回想に於いて焦点としていなかった所の吾々自身の体験を、未来回想されたもののものに属するとして意識する事ができる。吾々が『吾々は来るべきものを見るであらう』と言う——此の時反省的視向は『未来の』知覚体験に向つている——場合に、吾々の何時もする所の如きは即ちそれである。

以上はすべて、吾々が自然的觀方に於いて、恐らくは心理学者として、明らかにし、且つそれ以上の聯関に迄辿る所である。

抑今や吾々は現象学的還元を遂行する。すると以上の諸論定は（その括弧の中に於いて）變じて、吾々が純粹直覺の埒内に於いて取得して体系的に研究する事のできる本質普遍性の範例的事例となる。例えば吾々は生き生きとした直觀（よしそれが想像であるにせよ）に於いて何か或る作用遂行—

—例えば自由に且つ成果を収めつつ経過して行く所の理論的な思想進行に対する悦びの如き——に心を置いてみる。吾々はすべての還元を遂行して、現象学的事象の純粹本質の中に何が存しているかを見よう。それで先ず第一に、経過しつつある思想へ眼を向けよう。それから吾々は範例的現象を形成してみる。すると悦ばしき経過の間反省的視向は此の悦びに向っているわけである。此の悦びは反省という視向に於いてしかじかに動搖しつつ、消失しつつ、視向せられ且つ内在的に知覚せられた体験となる。それと同時に思想経過の自由は阻まれる。即ち此の思想経過は今や変様された仕方で意識されて居り、その進行に附随する悦ばしきも共に本質的に影響を受けている——、此の事実も亦確認できる、が此の場合吾々は再び新しい視向擬向 *Blickwendungen*【目ざしの振り向け】を遂行せねばならない。けれども今は此の新しい視向擬向の事は姑く措くとして、以下の事柄に注意を向ける事にしよう。

悦びに対する最初の反省はその悦びを、顕在的な現在の悦びとして見出す、**が併しその時丁度始まった許りの悦びとしてではない**。その悦びは持続しつづつつある所の、既に以前に体験された所の、そしてただそれに注目しなかつたに過ぎない所の悦びとして、其処に在る。換言すれば次の可能性が明らかに存立している。即ち、悦ばしきものの過去の持続と与えられ方とを辿る事の、又理論的な思想経過の以前の道程へ、そして又以前にその思想経過へ向けられていた所の視向へも、注意する事の可能性が存立している。他方に於いては、その思想経過への悦びの放射に注意し、それに依つて経過し了えた現象に於いては、悦びへ向けられたる視向が欠如するという事を対照に依つて把握する事の可能性が存立している。併し又吾々は、後から客観となつた悦びに就いて、その悦びを客観化する

る反省への反省を行い、それに依つて又一層有効に、**体験**されてはいる *erlebt / which is lived* が併し視向されてはいない悦びと**視向され** *erblickter / regarded* ている悦びとの区別を明らかにする事の可能性を有っている。同様に又、視向擬向 *Blickzuwendung / advergence of regard* と共に初まる把握、表明等々の作用に依つて現れる所の変様をも明らかにする可能性を有っている。

比較的高い普遍性に於いてにせよ、乃至は特殊の種類^の体験である事が本質的に明らかになる様なものに就いてにせよ、上述の事はすべて之を吾々は現象学的観方に於いて、且つ又**形相的**に、觀察する事ができる。**反省されていない意識という様態**に於いて体験されている諸体験を含む体験の流れの全体に、学的なる、即ち体系的完全性を目指す所の本質研究を施す事ができる。而もそれ等の体験の中に**指向的**に含まれている体験契機の可能性のすべてに關しても、随つて又特に、時にそれ等体験に於いて変様されて意識されている諸体験と**それ等体験**の諸被指向者 *Intentionalen* 【志向的相關物】とに關しても、そうする事ができる。後者の例としては吾々は、すべての現前化の中に指向的に含まれて居り且つそれ等の現前化に『於いて』反省に依つて取り出され得る所の、体験の諸変様という形で既に之を知つた。例えば、各々の回想の中に在る『知覚された事がある』、各々の期待の中に在る『知覚されんとしてゐる』の如きがそれである。

体験の流れの研究の方は多種独特に組立てられた反省的作用に於いて遂行される。ところが此の反省的作用自身も再び又体験の流れに属するのであり、そしてそれに対応する一層高段階の反省に於いて、現象学的分析の対象とされる事ができ、且つ又そうされねばならぬのである。何故ならば此の現

象学的分析は、一般現象学並びにそれにとつて全く不可欠な方法論的洞観に対して基礎を置くものであるからである。心理学に対しても明らかに同様な事が言い得られる。反省に依る、或は——普通にはそれと同じ意味と解される言葉では——回想に依る、体験の研究という事を曖昧に言っただけでは、多くの誤謬——真面目な本質分析を欠くという正にその故に、此の場合に直ちに一緒に結び付くのを常とする誤謬、例えば「内在的な知覚乃至観察というようなものは決してあり得ない」という如き誤謬——以外には、猶お未だ何等得る所がないのである。

吾々は更に少しく仔細に事象に立ち入って検討しよう。

(一) 上述第三八節、上卷一三七頁「作用への反省」以下、及び第四五節、上卷一六四頁「知覚せられざる体験」以下、参照。

七八、体験反省の現象学的研究

今論述し了えた所に依れば反省とは、すべての多様な出来事（体験契機、被指向者）を含む体験の流れが由つて以て明証的に把握され且つ分析され得べきその作用を表す名称である。吾々は之を「反省」とは意識一般に就いての認識のための意識方法の名称である」とも言い表す事ができる。ところが又、恰も此の方法に依つて、反省そのものが可能的研究の対象となる。即ち反省は、本質的に相属的な種類の体験を表す名称でもあり、随つて現象学の主要なる章の主題である。その主要章に於ける課題は、種々異なる『反省』を区別して体系的秩序に於いて完全に分析するという事である。

此の場合人が先ず第一に明らかにせねばならぬのは、**如何なる種類の『反省』も意識の変様——**も原理上**各々の意識**が蒙り得る如き変様——という性格を有つてゐるという事である。

変様に就いては此処では、各々の反省は本質上観方の変更から生ずる——此の事に依つて、予め与えられたる体験或は体験与件（反省せられざるそれ）は或る転化を受けて、まさしく、反省せられたる意識（乃至意識せられたるもの）という様態となる——、その限りに於いてだけ論ぜられる。予め与えられたる体験はそれ自身既に、或るものに就いての反省せられたる意識という性格を有ち得る、それ故此の場合の変様は比較的高い段階のものである。けれども結局吾々は、絶対に反省せられざる体験及びその実的或は指向的なる「与えらるべきもの」に歸つて行く。斯様に**各々の体験は、本質法則上、反省的変様へ移される事ができる、そしてそれは、吾々が一層精確に識るに至るであらう所の種々異なる方向へ向つてそうなのである。**

反省の本質研究の、現象学にとつての、又等しく心理学にとつての、方法論上の基底的意义は、内在的本質把握並びに他方内在的経験のすべての様態が、反省なる概念に属するという点に存する。それ故例えば内在的知覚——或る別様「客観的」に意識されたものからそのものに就いての意識への視向転向 *Blickwendung / turning of one's regard* を予想する限り實際ひとつの反省である所の内在的知覚——の如きはそれである。同様にして、既に吾々が（前節に於いて）自然的観方の自明性の論究に當つて言及した如く、各々の回想は啻に己れ自らへの反省的視向擬向 *Blickwendung* を許すのみならず、回想に『於ける』独特の反省をも亦許すのである。例えば或る楽曲の経過は、回想に於いて、初めは反省せられ

ずに『過ぎ去った』という様態に於いて意識されている。けれども斯く意識されているものの**本質**には、そのものが「知覚された事がある」という事を反省する可能性が属している。同様に、期待にとつても、即ち『来るべきもの』に就いての望見視向的意識にとつても、視向を此の来るべきものから転じてその「知覚されるに至るであろう」へ向ける事の可能性が存立する。『私はAの事を回想している』と『私はAを知覚した事がある』と、それから『私はAを望見している』と『私はAを知覚するであろう』との夫々の命題は先天的且つ直接的に等価的である、併しその意味は夫々異なる意味であるが故にただ単に等価的なるにすぎない——此の事は上の諸本質聯関に由来するのである。

此の場合現象学の課題は、反省なる名称の下に含まれる全体験変様を、それが本質關係を有し且つ予想している所の変様のすべてとの聯関に於いて、体系的に研究するという事である。此の方の課題は、**各々の体験**がその原的経過の間蒙らねばならぬ所の本質変様の総体と、及び加之、各々の体験に於いて『操作』の仕方でイデール *ideell / idealiter*【理念的】に遂行されていると考えられ得る種々なる種類の転化とに關するものである。

各々の体験はそれ自身に見て生成の流れである。それが然かあるのは、不變的本質類型の**根源的産出**という点から見てである。即ちそれは、**原性**——体験の生き生きとした「**今**」は、体験の『**以前**』及び『**以後**』に対して、此の原性に於いて意識される——というそれ自身流動的な位相に依つて媒介されている所の過去指向と未来指向との間断なき流れである。他面に於いて各々の体験は、根源的体験のイデールなる『**操作的**』変形の如くに見做され得る所の再生産の種々なる形をその並行者と

している。即ち、各々の体験はその『精確に対応』し然も徹頭徹尾変様されている対応者を、再回想に於いて、同様に又、可能なる未来回想に於いて、可能なる単なる想像に於いて、及び又斯くの如き転化の反復に於いて、有つてゐる。

勿論吾々は、並行的体験のすべてを、共通的な本質要素を有つ体験と考える。それゆえ並行的体験は同じ指向的対象を意識しているべきである。そして又同一の与えられ方に於いて意識しているべきである。何故ならば周囲がすべて同じ指向的対象——これは他の点に於いては可能的変化を受け得る——であるからである。

上來注意した諸変様は、**各々の体験に理念的に可能なる転化として属するものであり、随つて言わば、各々の体験に対して遂行されていると考えられ得るイデオールなる操作を示すものである。**それゆえ、それ等変様は際限なく繰り返され得るものであり、変様せられたる体験に対しても亦遂行され得るものである。逆に吾々は、既に右の如き変様として性格づけられて居り、次に常に**それ自身に於いて体験として性格づけられてゐる所の各々の体験から出発して、或る原本体験に——即ち現象学的意味に於いて絶対的に原的なる体験を示現する『印象』に——遡及せしめられる。**斯くて物の知覚は、回想、想像現前化等々のすべてと較べて原的なる体験である。物の知覚は、具体的体験が総じて原的であり得ると等しく原的である。何となれば、精確に觀察すれば物の知覚は、その具体相に在つて、**ただ一つの、併し又断えず、連続的に流動する絶対的に原的なる位相即ち生き生きとした今という契機、を有つてゐるからである。**

吾々はこの変様を、非反省的に意識されている顕在的体験に対し第一次的に加える事ができる。何故ならば、直ちにわかる通り、すべて反省的に意識されている体験はその第一次的変様に関与せねばならぬからである——というのは取りも直さず、反省的に意識されている体験は体験への**反省**として、且つ又完全なる具体相に於いて見れば、それ自身非反省的に意識されている所の体験であり、且つかくの如きものとしてすべての変様を採るものである、という事に依つてなのである。それ故反省そのものは確かに一種の新しい普遍の変様である。即ち反省とは、我がその体験へ斯く**向う**という事であり、又、それと一致する事であるが、コギトの作用（特に最低的にして且つ基底的な層の、即ち端的表象の層の作用）——此の作用に『於いて』我がその**体験**に向う——を遂行するという事なのである。けれども、反省が直覚的乃至空虚的な把握乃至把握と結び合っているという恰もその事は、反省的変様の研究をして、上に指示した変様の研究と必然的に結合するに至らしめるのである。

反省的に**経験する**作用に依つてのみ吾々は、体験の流れに就いて、又それが純粹我に必然的に關係されている事に就いて、多少知るのである。随つて又吾々は、体験の流れは一にして同じき純粹我の諸コギタティオの自由遂行の野であるという事、その流れのすべての体験は、我がそれに視向を投じ或は『それを通して』我以外の他のものを視向するという恰もその限りに於いて、その流れの体験であるという事に就いて知るのである。吾々は、これ等の経験が、**還元せられたる**経験としても意味と權利とを保有するものなる事を確信する。そして吾々は、斯くの如き性質の経験一般の**權利**を類的なる本質普遍性に於いて把握するのである。それは丁度、吾々がそれと並行に、体験一般に係る**本**

質諦視 Wesenserschauungen / seeing an essence の權利を把握するのと同様である。

斯くて吾々は例え、内在的に**知覚する反省**の、即ち端的に**内在的知覚**なるものの**絶対的權利**を、而も流れつつあるそれを實際に原的なる所与に迄齎すものに關して、把握する。それと同様に又吾々は、『猶お未だ』生き生きとしているもの乃至『たった今』在りしものという性格に於いて、内在的過去指向に依つて意識されているものに關して——但し勿論單に、斯く性格づけられたものの内容及ぶ限りに於いてだけであるが——**内在的過去指向の絶対的權利**をも把握する。それゆえ例え、音の知覚であつて色の知覚でなかつた、という点に關して把握するのである。それと同様に又吾々は、内在的再回想の**相對的權利**——此の回想の**内実**が、個々の場合に見て、眞の再回想性格を示す（回想されたものの各々の契機が一般にこの性格を示すのでは決してない）限りに及ぶ權利、即ち全く右の如く各々の再回想に際して存する權利——を把握する。けれども勿論此の權利は、單に『相對的』なる權利、即ちそれに優る權利のあり得る——にも拘らず矢張りそれは權利ではある——ところの權利である。等々。

それゆえ吾々は、極めて完全に明晰に、且つ又無制限的に妥当するという事を意識して、次の事を洞觀する。即ち、體驗が認識上確証されるのはただそれが**内在的知覚の反省意識**に於いて与えられている限りに於いてのみであるとか、乃至は更に體驗は單にその時々**の顯在的今**に於いてのみ確保されるだけであるとか考へるのは悖理であるという事、**視向の過去擬向**に依つて in the turning back of the regard 『猶お』と意識されて眼前に見出されているもの（**直接的過去指向**）の在りしことを疑うのは、

更に又視向の裡に入り来る体験は恰もその入り来るが故に結局根本的に異なるものに変化しはしないか等々と疑うのは、背理であるという事である。今の場合肝要なのはただ、形式的には如何に精確なるにも拘らず、惜しむらくは妥当の源泉への、即ち純粹直覚の源泉への適合を全く欠如する所の議論に依つて迷わされないという事である。即ち『すべての原理の原理』——完全なる明晰さが全真理の尺度であるという事、及び己れの所与に忠実なる表出を与える所の供述は仮令如何なる巧論をも懸念するには及ばないという事——に対し何処迄も忠実を守るのが肝要なのである。

七九、批評的余論、現象学と『内省』の諸難点

最後の叙述に依つて読者は、現象学は方法論上の懷疑に襲われるものではない——それに並行して経験心理学に於いては此の懷疑は、甚だ屢々内経験の価値の拒否及び不当なる制限へ導いたのであるが——という事を覚るであらう。にも拘らず近時ヘンリイ ジェイムズ・ワット⁽¹⁾は現象学に対して此の懷疑を主張できると考えたのである。が勿論此の場合彼は『論理学的諸研究』の導入せんと試みた純粹現象学固有の意味を把握せず、且つ経験心理学の事情に対する純粹現象学のそのの差異を認めなかったのである。吾々(人間)の内経験の所与を表出する**定在確定** *Daseinsfeststellungen / existential findings*【現存在確認】の範圍と原理的認識価値とに対する疑問、随つて心理学的方法の疑問が提出されるか、又は他方、現象学的方法の疑問、即ち純粹反省を基礎として体験そのものに——体験自身の、自然統覚 *Naturapercaption* から脱却せる本質からみて——関係すべき所の**本質確定**の、原理的可能性と範圍とに

対する疑問が提出されるか、此の兩つの間に於いて難点は相似てはいるが、併し等しく又相違があるのである。にも拘らず此の兩者の間には内面的關係が、加之著しい程度に於いて一致が存在する。それ故に、吾々がヲットの異論、特に次の如き注目すべき文章を顧みる事は正当である。

『如何にして直接体験の認識に達するかという事に就いては、言うまでもなく人は殆んど推測を下す事すらできない。何故ならば、直接体験は知でもなく知の対象でもなくして或る別個のものであるから。体験の体験に関しては、仮令それがある場合にも、それに就いての報告が紙上に記録されるという事は不可解である。』然るにこれこそは常に、内省の根本問題の究竟的疑問なのである。『今日人は此の絶対的記述を現象学と称している。』

次にヲットは更に進んで、テオドール・リップスの論述を引用しつつ下の如く言っている。『内省の対象の**知られたる**実在には現在の我と現在の体験との実在が対立する。後者の実在は体験される〔即ち単に体験されるのであつて、「知られる」、換言すれば反省的に把握されるのではない〕。恰もその故にそれは絶対的実在である。』そこで今度は彼は彼自身の意見として次の如く附加している、『抑、此の絶対的実在を如何に処置し得るか……に就いては、人々は甚だしく意見を異にするであらう。此の場合問題になっているのは勿論言うまでもなく単に内省の結果に就いてだけである。ところで若し此の常に背觀する所の觀察が必ず、対象としてまさに**所有せられた**体験に於いての知であるとするならば、それに就いて何等の知を有つ事ができず単に意識されているにすぎぬ状態を、人は如何にして確定するといふのであらうか。全論議の重要な点は言うまでもなくまさにその点に懸つている。換言

すれば知らざる直接体験という概念の由来の点に懸っているのである。観察は人の為し得るところに違いない。体験は畢竟何人も為すところである。ただ人はこれを知らないのである。若し仮りに人がそれを知るとしても、彼は彼の体験が實際絶対的に、彼の想う通りであるという事を如何にして知り得るのであるか。現象学は誰の頭から、出来上つて生命を得て飛び立ち得るのであるか。現象学は可能であるか、そして又如何なる意味に於いて可能なのであるか。すべて之等の疑問が押迫つて来る。内省問題の実験心理学の側からの論議は、恐らく該範圍へ新しき光を投ずるであろう。何故ならば現象学の問題は、実験心理学にとつても必然的に起きるのと同じであるからである。実験心理学の解答の方が、恐らく確かに一層慎重であろう。何故ならば実験心理学には現象学の発見者の如き興奮がないから。実験心理学は何といつても本来、寧ろ帰納的方法に拠っているのである。^(三)

帰納的方法の全能に対するこの敬虔なる信仰——それは右の最後の一二行に依つて窺知される（併し若しヲットが此の方法の可能性の制約を熟考するならば、彼は此の一二行に固執する勇氣は殆んどないであろう）——があるにも拘らず、『機能分析的心理学は知の事実を決して説明し得ないであろう。^(四)』と告白しているのは寔に驚くべき事である。

現代心理学の特徴を示すこれ等の語句に対しては——それ等の語句が心理学的に言われているまさにその限り——吾々は先ず第一に、心理学の問題と現象学の問題との間の嚮^{さき}の區別を主張し且つその点に関して下の如く強調せねばならぬであろう。即ち「幾何学が黒板の上の図形や柵の中の模型の存在性は如何にして方法的に確証せられ得るかという事に関心すべきでない」と等しく、現象学的本質論

は、現象学者が現象学的論定をなす際に根柢として役立つ体験の**存在性**を由つて以て確証し得る所の方法に対しては、何等関心すべきでない」と。純粹本質の学としての幾何学及び現象学は、實在的存在性に就いての論定には関知しない。明晰な仮構がこれ等の学に対して、顕在的なる知覚及び経験の所与に比して**暫**に同等によき根柢を提供するのみならず、**広範囲に亙つて一層よき根柢を提供する**という事は、無論まさしく右の事実と聯関してゐるのである。^(五)

扱、現象学は体験に關して何等の定在論定 *Daseinsfeststellungen* 【現存在確認】をもなすべきでなく、随つて、自然的意味に於ける『経験』や『觀察』——事実学がこれ等の如きものに基づかざるを得ぬというその意味に於ける『経験』や『觀察』——をなすべきでない。とはいへ併し現象学は、現象学可能の原理的制約として、反省せられざる体験に就いて本質論定 *Wesensfeststellungen* 【本質確認】を行う。併し此の本質論定を現象学は反省に、詳しくは反省的本質直覚 *Wesensintuition* に負うのである。その故に内省に關する懷疑的懸念は現象学にとつても亦——即ち此の懸念は明らかに、内在經驗的反省から各々の反省一般にまで及ぼされるものである限り——問題となるのである。

若し仮りに『体験の体験に關しては、仮令それが有る場合にも、それに就いての報告が紙上に記録されるといふ事は不可解である』とするならば、現象学は一体どうなることであらう。若し仮りに現象学が、『知られたる』、反省されたる体験に就いては供述をなす事が許されるが、併し端的なる体験そのものの本質に就いては許されないとするならば、現象学はどうなることであらう。若し仮りに『如何にして直接体験の認識』——又は直接体験の本質の認識——に達するかという事に就いては、言

うまでもなく人は殆んど推測を下す事すらできない』とするならばどうなることであろう。或は下の如く抗議出来るかも知れない。成程現象学者は、彼の行うイデー化のための類例的体験として彼の念頭に浮んでいる体験に関して、何等定在論定を行うべきではないであろう。が併し此のイデー化に依つて現象学者が諦視するのはただ、彼が時々まさしく類例に於いて念頭に浮べた事のあるその体験のイデーだけなのである。彼の視向が体験に向うや、その体験は初めて、彼にそれとして今現れているその体験となり、彼が視向を転ずるや、それは別の体験となる。把握された本質は単に反省された体験の本質であるにすぎない。それ故、反省せられたるとせられざるを問わず反省一般に對して妥当する所の絶対妥当なる認識を反省に依つて獲得し得るという意見は、全く根拠なきものである。『人がそれに就いて何等の知を有つ事ができぬ状態を』仮令本質可能性としてでも、『人は如何にして確認できるというのであろうか。』

上の事は明らかにあらゆる種類の反省に関して言われているのである。併しながら、現象学に於いては、如何なる反省も絶対的認識の源泉たることを要求する。想像に於いては、仮令ケンタウルにせよ、或るものが私の念頭に浮んでいる。私は、ケンタウルが或る『現出仕方』で、或る『感覚射映』、把握等々に於いて示現しているのを知っていると考える。此の時私は、「斯くの如き対象一般は、ただ此の種の現出仕方に於いてのみ、即ちただ斯くの如き射映機能に由つてのみ——此の場合他に如何なる役割を演ずるとしても——直観せられ得る」という**本質洞観**を有っていると考える。けれども私は、ケンタウルを視向の裡に有っているのであるから、ケンタウルの現出仕方、射映している与件、把握を視

向の裡に有つてゐるのではない。又私は、ケンタウルの本質を把握してゐるのであるから、ケンタウルの現出仕方等々やそれ等の本質を把握してゐるのでない。そうするためには或る反省的な視向擬向 Blickwendungen / turning of the regard を必要とする、然るにこれは全体験を熔解し変様する。それゆえ私は、新しきイデー化に於いては新しきものを眼前に有つ、随つて私は、「私は反省せられざる本質成分を獲得した」と主張する事は許されない。私は、「感覚与件——それもそれとして把握を受ける——を通して上に示した仕方で射映しつ『現出』に於いて示現するという事が、物そのものの本質に属する」等々と主張する事は許されないのである。

此の難点は、指向的体験の『意味』に就いての、即ち思念されたもの、指向的に対象的なものそのもの、供述の意味等々に属するすべてのものに就いての、意識分析にも亦明らかに關係する。何故ならば、それも亦己れ自らに向けられたる反省内に於ける分析だからである。ヲット自身は加之更に次の如くに迄言つてゐる。『心理学は「記述さるべき体験の対象的關係は内省と同時に變化させられる」という事を明らかにせねばならぬ。恐らく此の變化には、人の信ぜんとするよりも遙かに重大な意義があるであろう』と。若しヲットにして正しいならば、「吾々は此處に在る此の書物にたつた今注意してゐた、そして今も猶お注意してゐる」という事を内省に依つて確認すれば吾々はそれに依つて余りに多くを主張し過ぎたという事になるであらう。そういう確認は精々反省以前に妥当したにすぎない。ところで反省は、注意という茲に『記述さるべき体験』を變化せしめるものであり、而も（ヲットに依れば）対象的關係の点で變化せしめるものである、というのである。

種類と方向との如何を問わず、すべて真の懷疑論なるものは、己れの提題に於いて否定する恰もそのものを、論議をなすに際して暗々裡に、その論議の妥当可能性の制約として予想するという原理的自家撞着を徴表としている。此の徴表は今問題となつてゐる論議に対して亦中つてゐる事^{あた}を、人は容易に確めるであらう。「私は反省の認識意義を疑う」と言う者は誰でも、ひとつの自家撞着を主張しているのである。何故ならば、彼は、己れの懷疑に就いて供述しているゆゑ反省しているのであるからであり、且つ又、此の供述を妥当なりとして提言する事は、反省は疑われたる認識価値を実際に且つ疑いもなく（即ち今の場合に対しては）**有つてゐる**という事、反省は対象的關係を変化せしめ**ない**という事、反省されざる体験が反省へ移行してもその本質を喪失し**はしない**という事、等を予想しているからである。

更に、右の諸論議に於いては常に事実としての反省に就いて、及び反省に由来している事乃至由来するかも知れぬ事に就いて論ぜられてゐる。それと共に無論又『知られざる』、反省されざる体験——これも亦事実としての、即ち反省された体験がそれから生ずるその体験としての体験——に就いて論ぜられてゐる。それ故、反省されざる体験——それには反省されざる反省も含まれる——に就いての**知**が常に前提されるのである。然るに同時に斯くの如き知の可能性が疑問とされる。詳しくは即ち、反省されざる体験の内容及び反省の作業に就いて**何等か或る事柄**を確認する事の可能性が疑われる——即ち反省はもとの体験をどの程度まで変えるか、又前者は後者を言わば変造して全く別個の体験としはしないか、という事が疑われる——その限りに於いて、右の如く知の可能性が疑問とされるので

ある。

併しながら、若し此の疑いとそれに於いて仮定された可能性とが妥当であるとするならば、反省されざる体験と反省とが一般に有り且つ有り得るという事の確実性に対しては、些の権源〔権原〕も残存しなくなるであろうという事が明らかである。けれども更に又、反省されざる体験と反省とが有るという此の事柄——これは実に不変の前提であつた——は反省に依つて知られ得るのみである事、而して又、直接知としては反省的な能与直観に依つて基礎づけられ得るのみである事、が明らかである。反省に伴つて起きる変様が現実である、或は可能であるという主張に關しても亦右と全く同様である。併し若し斯くの如き変様が直観に依つて与えられているとするならば、それは直観内実に於いて与えられているのである。随つて「此処には何等の認識可能なるものも全くない、即ち反省されざる体験の内実の点から見ても又その体験の受ける変様の仕方の方から見てもない」と主張するのは悖理である。

以上を以て悖理を明らかにするには十分である。此処に於いても、如何なる場合に於いても然る如く、言葉の上の論議を去つて本質直覚へ、即ち原能的能与の直観及びそれ独得の権利へ立ち戻るならば、それに依つて懷疑はその力を失うものなのである。すべては確かに左の点に懸つている。即ち此の本質直覚をこそ實際に遂行するという事、そして又克己して、疑問的なものを真の本質明晰の光へまで高め、或は吾々が前節に於いて試みた叙述を、それが遂行され提示されている通りに直覺的に受取るという事に懸つているのである。

反省なる現象は實際、純粹にして且つ場合に依つては完全に明晰なる所与の領界である。反省は對象の所与そのものから能与意識及びその主觀に到る迄可能であり、知覺せられたもの即ち有体的ありていなる『其処』から知覺作用に到る迄可能であり、回想されたもの——回想されたもの即ち『嘗て在りしもの』として、『念頭に浮んでゐる』通りに回想されたもの——から回想作用に到る迄可能であり、供述から、それが經過的に与えられてゐるという点で供述作用に迄可能である、等々である。此の場合知覺作用は恰も此の知覺されたものの知覺作用として、夫々の場合の意識は夫々の場合に意識されたそのものの意識として与えられるに到るのである。本質上から言つて——随つて、単に偶然的根拠からではなく、即ち單に『吾々にとつて』や吾々の偶然的な『心的物的素質』にとつて等では決してなく——、實的或は指向的意味に於いての意識や意識内容というようなものはただ此の種の反省に依つてのみ認識し得られるものなる事は明証的である。此の絶對的にして洞觀的な必然性には、恰も $\infty+1$ と ∞ という事への洞觀に対すると等しく、神と雖も亦繫縛されてゐる。神と雖も彼の意識と意識内実とに就いては、認識は單に反省的にのみ獲得できるにすぎないであらう。^(七)

以上の事は同時に、「反省は完全認識という理想とは何等二律背反的争鬭に坐するものであり得ない」という事を意味してゐる。各々の存在種類は——此の事は吾々が既に屢々強調せざるを得なかつた所であるが——本質上**その**与えられ方を、同時に又その認識方法の仕方を有つてゐる。此の本質的固有性を欠点として取扱ひ、その上『吾々の人間的』認識の偶然的、事實的欠点という種類へ算入するという事は悖理である。所でも一つ別の、併し同様に本質洞觀に依つて考量すべき疑問は、今

問題となつてゐる認識の可能的『射程』に對するそれ、即ち時に現実に与えられて居り且つ形相的に把握さるべきもの以上に出る所の供述を、吾々は如何にして警戒すべきかという疑問である。更に又一つ別の疑問は、**經驗的方法**のそれ即ち「吾々人間は、例えば心理学者として、吾々の人間的認識にでき得る限り重い權威を付与するためには、与えられた心的・物的状態の下に在つて如何に処置すべきであるか」というそれである。

なおその他強調すべき事は、吾々の繰返し洞觀（明証乃至直覺）に訴えたのは、今の場合に於いても、すべての場合に於ける如く、空語ではないのであつて、緒論篇の意味に於いて、すべての認識に於ける究竟なるものへの復歸を意味するのである、それは恰も、論理学及び算術の最本原的公理の場合に洞觀という事を言うのと正に同じである、という事である。^(八)ところで、意識の領界内に於いて与えられたものを洞觀的に把握する事を習得した者は、既に特に引用した『如何にして直接體驗の認識に達するかという事に就いては、人は推測を下す事もできない』というような文章を読んではただ驚くより他仕方ないことであらう。斯くの如き文章から悟り得られるのはただ、「内在的本質分析なるものは、すべての内在的なる心理学的記述に於いて规定的概念として働くべき諸概念を確定するための、唯一可能なる方法をなすものなるにも拘らず、現代の心理学はこの内在的本質分析に對し如何に無知であるか」という事だけである。^{(九)、(一〇)}

茲に論ぜられた反省の問題に於いて、現象学と心理学との間の密接な聯繫が特によく感知される。體驗種類に關する本質記述の各々は、可能なる經驗的定在に對し無制約的に妥当する規範を意味する。

特に此の事は、恰も内経験のすべての様態に就いて言われ得る如く、心理学的方法に對してさえも規整的である所の体験種類のすべてに就いても亦勿論言われる。それゆえ現象学は心理学の方法論的基礎問題にとつての法廷である。現象学が普遍的に論定したものを、心理学者はすべて彼の爾後の方法が可能なるための制約として承認し且つ場合に依つては要求せねばならない。此の現象学の論定したものに悖るものは、**原理的なる心理学的悖理**を示すものである。それは恰も、物的領界に於いて幾何学上の真理や自然一般の存在学の真理への撞着は悉く、**原理的なる自然科学的悖理**の特徴であるのと同様である。

それゆえ此の種の原理的悖理は、内省の可能性に對する懷疑的懸念を克服するに実験心理学の研究方法としての**心理学的帰納**に依らんとする希望の裡に現れている。此の間の事情も亦、物的自然認識の範圍に於いて「外部知覚は（實際それは何れも、一つ一つに取つてみて、錯誤し得るものなのであるから）畢竟悉く錯誤しはしないか」という上と並行的な懷疑を克服するに実験物理学に依らんとする——然るに此の実験物理学は言う迄もなく外部知覚の正しき事を歩一步毎に予想している——場合と丁度同様である。

なお、此処に一般的に述べた事を私は、すべての今後の研究に依つて、殊に反省の本質洞観の範圍に就いての解明に依つて、確証しようと思う。又、此処では少しく言及するに止めた所の、現象学（或は、此処では姑く未だ現象学から引き離されて居らず、且つ何時も現象学と密接に結びつけられている所の形相的心理学）と経験科学的心理学との間の関係も、それに附属するすべての深奥な問題と共に

に、私は本書の第二巻に於いて闡明しようと思う。現象学（或は形相的心理学）は、恰も数学中の実質的学科（例えば幾何学や運動学）が物理学に対して置礎的であるのと同様な意味に於いて、経験心理学に対して方法的に置礎的な学であるという確信は、左程遠からざる時期に於いて共有財となるであろうと私は信じている。

『可能性』の認識は現実性の認識に先行せねばならぬという存在学上の古い説は、私の観る所では、それが正しく理解され且つ正しい仕方で行用される限りは、ひとつの偉大なる真理なのである。

（一）Sammelbericht II: 《Über die neueren Forschungen in der Gedächtnis- und Assoziationspsychologie aus dem Jahre 1905》Archiv f. d. ges. Psychologie [Bd. IX(1907). 参照。ヘンリー・ジェイムズ・ラット H. J. Watt は専らテオドル・リップスを目指して論戦している。その場合私の名前を挙げてはいないが、併し私は彼の批評は私へも向けられたものと見做して差し聞えないと思う。何故ならば、彼の引用叙述の大部分は私の「論理学的諸研究」（二九〇〇—一〇二）の叙述——年次から言えばそれ以後である所のテオドル・リップスの諸著の叙述であると等しく——とする事もできるのであろうから。

（二）前掲書五頁参照。

（三）前掲書七頁参照。

（四）前掲書一二頁参照。

（五）上述第七〇節、二七頁以下参照【「本質闡明の方法に於ける」以下】。

（六）前掲書一二頁参照。

（七）吾々は此處で巧みに議論を神学の領分へ導き入れよう等とするのではない。神なる觀念は認識論的

考察に於いて必須なる限界概念なのである。換言すれば、哲学上の無神論者と雖も欠くを得ないと思われる或る限界概念を構成するために不可欠なる指標なのである。

(八) 本書印刷中、私はテーオドル・ツイーエン Theodor Ziehen の最近著《Erkenntnistheorie auf psychophysiologischer und physikalischer Grundlage》を通読して、『かの疑わしき所謂直覚乃至明証』に関する次の如き特色ある語句を見た。曰く『かの疑わしき所謂直覚乃至明証』、それは二つの主要特性を有っている。第一にそれは哲学者の如何に依つて、或は哲学学派の如何に依つて変化する。第二にそれは、論者が彼の説の甚だ疑わしき正にその点を述べる場合に、特に生じ易いものである。されば吾々は虚喝に依つて疑惑を防がれるという事になるのである。』と。此の批評の目指しているのは、前後の聯関から推定して、私が『論、研、』に於いて詳論した「普遍的対象」乃至「本質」及び本質直観の説である。それ故にツイーエンに於いて更に次の如く述べられている、『此の超經驗的概念を通俗的な一束の慣用概念から区別せんがために、人はその概念に屢々、更になお或る特殊の普遍性、絶対的精密性等々を歸したのである。私は、斯くの如きはすべて人間の僭越であると考える。』(前掲書四一三頁)。この語句と等しく彼の認識論の特性を示すのは、私の直覚的把握に関する(然も著者ツイーエンの思う所では実に前者よりも一層普遍的に妥当なる)語句(四四一頁)である。曰く『私が斯くの如き第一次的直覚に対する真の認証と考へ得ると思われるのはただ、斯くの如き直覚確認の点に於ける思惟し感覺する全個人の一致だけである。』と。——兎に角『直覚』に拠証する事に依つて人が屢々不法を犯した事のあるのは固より否むべきでない。問題はただ、**有名無実**の直覚に依る此の不法が、**真実**の直覚に依つてなされるとは別様に摘発され得るのであるか否かの一点である。經驗の領界に於いても亦、經驗に拠証する事に依つて甚だ多くの不法が犯された事はある。けれども、若しその故を以て經驗一般を『虚喝』

第三篇 純粹現象学の方法と問題とに就いて

なりとして、経験の『認証』を『斯くの如き「経験」確認の点に於ける、思惟し感覺する全個人の一致』に依属せしめようとするならば、それは暴論であらう。此の点に就いては本書第一篇第二章参照。

(九)『ロゴス』誌第一卷(三〇二—三二二頁)所載の拙論参照。

(一〇)これも亦本書印刷中に入手したアウグスト・メッセル August Messer とヨナス・コーン Jonas Cohn との二論文(フリッシャイゼン・ケーレル編纂の『Jahrbücher der Philosophie(第一卷所載)』は、一般に行われている先入見の束縛から脱する事、及び——現象学の努力に対する如何なる同情にも拘らず——『本質論』として現象学の特質を把握する事は、徹底的なる学者と雖も如何に成功し難いものであるかを、又もや示している。両者共に、殊にメッセルは(『Archiv. f. d. ges. Psychol. XXXII 所載の彼従前の批評に於いても)、私の論述の意味を誤解した。而もその誤解たるや、上記諸論文に於いて私の説として論難されているものが**全然私の説ならざるものである程に甚だしいのである**。本書の詳論に依つて、最早此の種の誤解の生ぜざらん事を私は期待する。

八〇、純粹我に対する体験の關係

先験的に純化された体験範圍の普遍的なる本質固有性の中に於いて、第一の位置は本来、『純粹』我に対する各体験の關係に帰すべきものである。各々の『コギト』即ち既に特記した意味に於ける各々の作用は、私の作用として性格づけられている。即ち該作用は『我から發出 hervor / proceeds』し、我は該作用の裡に『顕在的に生き』ている。此の事に就いては吾々は既に論じて置いた。それゆえ吾々は嚮に詳論した所を簡略に想起する事にしよう。

觀察しつつ**私**は或るものを知覚する。同様な仕方では回想に於いて屢々或るものに『心を用い』ている。想像された世界内の活動を、仮構する想像に依つて**私**は準觀察的に追窮する。或は又私は沈思する。私は推論を行う。私は或る判断を——場合に依つては一般に判断なるものを『抑止しつつ』——差し控える。私は適意乃至不適意を感じる。私は喜び或は悲しむ。私は願望する。或は私は意欲し且つ行為する。或は又私は、喜び、願望、意欲 *Wollung / wishing*、及び行動を『抑止』する。すべて斯くの如き作用に際して私は、其の場に、**顯在的に**その場に、在る。反省に依つて私はその場合、私を人間として把握する。

所が私は現象学的エポケーを行う。即ち自然的指定の全世界と等しく『人間としての我』も排去を蒙る。然る時には固有の本質を有つ純粹なる作用体験が残留する。ところが又私は覚るのであるが、該作用体験を人間の体験と解するという事は、必然的に同時にその場合にあらねばならぬわけでない所の凡百のもの——定在指定は措いて——を導入する所以であり、又、他面に於いては如何なる排去も**コギト**の形を廃棄し、作用の『純粹』主觀を抹殺するを得ないのである。即ち、『に向つては』『に心を用いている』『に對して態度を定める』『から受ける、蒙る』等という事は、その本質の裡に**必然的に**、それはまさに『我から彼方へ』或は逆の方向に『我へ此方へ』であるという事を蔵している——而して此の**我こそ純粹**我なのであつて、これは如何なる還元も如何ともなし得ないもののである。

以上吾々は『コギト』なる特殊型の体験に就いて語つた。私の顯在性に対して一般的环境を形成す

る所の他の諸体験は、吾々が今語つた所の顯著なる對我關係性なるものを勿論欠いている。然も猶おそれ等体験と雖も純粹我に關与し、純粹我はそれ等体験に關与する。それ等体験は純粹我に『その体験』として『属』する。即ちそれ等体験は**純粹我**の意識背景、**純粹我**の広野なのである。

体験する我なるものは、斯くの如く『その』体験のすべてと独特な仕方で絡み合っているものであるから、**それ自身として** (*für sich / for itself*) たり、**独自の**研究対象となしたりされ得るものでは決してない。我の『關係仕方』乃至『態度の採り方』を外にしては、我は本質成素を全く欠如し、何等の表明可能なる内容をも全然有たず、それ自身としては記述不可能である。即ちただ純粹我というのみでそれ以上は何ものでもないのである。

それにも拘らず、その時々 of 体験種類乃至体験様態に於いて体験しつつある我は**如何であるか**というその特殊な仕方に関してまさに、多様な重要記述への機縁があるのである。此の場合**体験そのもの**と体験する**純粹我**とは——必然的相互關係はあるにも拘らず——絶えず互いに区別される。更に又、**体験仕方**という**純粹に主観的なもの**と、爾余の、言わば**私から轉向せる体験内実**とが互いに区別される。それ故、体験領界の本質には或る非常に重要な二面性がある。蓋し此の体験領界に就いては吾々は、体験に於いては**主観に向つた側面**と**客観に向つた側面**とを區別すべきであると言ひ得られるからである。この言い方は、宛も「体験に於ける体験の（言はば）『客観』は純粹我に類比的なものである」と吾々が説くかの如くには断じて誤解してはならぬ言葉である。斯く誤解の虞れはあるが然も猶お此

i ich-abgewandt (英 *turned away from the Ego*) 渡辺訳「自我とは反対方向の」

の言い方で正しいのであるという事は後に証明されるであろう。なお吾々は直ちに又次の事を附け加えよう。即ち、此の二面性には、尠くとも重要な道程に於いては、研究の（ほんとの分離ではないが）或る区分が対応している、即ち研究の一部は純粹主観性の方に向い、他の部分は主観性に対して客観性を『規整』するに必要なものの方に向つてゐる、という事である。吾々は、体験（詳しくは体験する純粹我の体験）の客観への『指向的關係』に就いて、又、多種の体験要素及びそれと聯關する『指向的雙關者』に就いて多くの言うべき事があるであろう。けれども斯くの如き事は、包括的研究に於いては、純粹我及びその関与仕方をもその場合何等深く研究しなくとも、分析的乃至綜合的に研究記述せられ得る。勿論、純粹我が恰も必然的にその場にあるものなる限り、人は屢々純粹我に触れざるを得ぬのは言う迄もない。

吾々が本篇に於いて更に続行しようと思ふ省察は、主として、自然的觀方から出發するに當つて先ず第一に現れる側面としての、客観に向つた側面に加へようと思ふ。此の側面は、本篇の序説的諸節に於いて示された諸問題が既に指示している所である。

八一、現象学的時間と時間意識

あらゆる体験の普遍的特有性としての現象学的時間に就いては、特別に論ずる必要がある。

此の**現象学的時間**、即ち**一つの体験流（一つの純粹我のそれ）**に於けるすべての体験の此の統一的形式と、『客観的』**時間**即ち**宇宙的時間**との間の區別は、十分に注意さるべきものである。

意識は、現象学的還元によつて、啻に物質的實在への統覚的『結合』（無論これは譬喩である）及び空間への——第二次的ではあるが——被包含性を喪失するのみならず、又宇宙的時間への下属性をも喪失する。本質上体験そのものに属する所の時間——今、以前、以後という、乃至それ等に依つて様態的に規定されている所の同時、継起等々という、所与様態を有つそれ——は、太陽の位置、時計、物的手段に依つては側定され得ない、否何としても測定され得ないものである。

宇宙的時間の現象学的時間に対する關係は、具體的な感覚内容（例えば視覚的感覚与件の野に於ける視覚的感覚内容）の内在的**本質**に属する『拡がり』が、客觀的な空間的『延長』、即ち現出し且つ此の感覚与件に於いて視覚的に『射映』する物的客觀の延長に対する所の關係と、或る点で類比的である。感覚契機を、それを通して射映する物的契機を有てる色乃至拡がりであるかの如くに、即ち物としての色や物的なる延長であるかの如くに、それ等と同一なる本質類の下に撰する事は悖理であるが、此の事は又、現象学的な時間的なものと世界時間的なものとに就いても等しく言い得られる。体験及びその体験契機に於いて超越的時間は現出的に示現する事はできる。けれども、示現と示現せるものとの間に譬喩的類似を——若しそれが類似であるならば本質の一致を予想するのに——仮定するという事は、常に然る如く此の場合に於いても、原理的に何等の意味もない事である。

なお又、「宇宙的時間が現象学的時間に於いて自らを表示する仕方は、世界の時間以外の事象的本質契機が現象学的に自らを表示する仕方と全然同一である」とは決して言うべきでない。色及びその他の感性的なる物的性質の（感官の野の適當なる感官与件に於ける）自己示現は、右とは本質的に別

様であり、他方又、感官与件内の拡がりの形に於ける物的空間形態の自己射映も亦別様であるのは確かである。けれども曩に述べた所ではすべての場合に共通性があるのである。

なお又時間は、後に述べる諸研究に依つて明らかになるであらう如く、ひとつの全く**充足せる** abgeschlossene / delimited **問題領域**、異常なる困難を伴えるそれ、を表す名称である。これは後に明らかになる事であるが、今迄の吾々の論述は、全次元に就いては殆んど沈黙して来たのであり、そして、差し当りただ現象学的観方だけに於いて明らかなものと、新次元は措いて、ひとつの充足せる geschlossenes / closed 研究範囲を成すものとを混乱なく保つためには、止むを得ず沈黙せざるを得なかつたのである。吾々が還元に依つて露呈した所の先験的『絶対』者は、実は究竟者であるのではない。それは、或る深く且つ全く独特な意味に於いてそれ自らが規整され、そしてその源泉を究竟的にして真に絶対的なものの裡に有つ所の或るものである。

幸い吾々は時間意識の謎をば吾々の準備的分析に於いては、その分析の嚴密さを危くする事なしに、問題とせずにおく事ができる。それに就いては吾々は、以下述べる所に依つてただ纔かに触れるに留めておこう。

体験一般に対して時間性なる名辞が表現する所の本質特性は、単に個々体験の各々に普遍的に属するものを表すのみでなく、**体験を体験に結びつける必然的形式**を表すものである。各々の現実的体験は（吾々は体験現実に対する明晰なる直覚を基礎として此の明証を得るのであるが）、必然的に持続的体験である。そしてそれは此の持続に依つて持続の無限連続——**充実せる連続**——に属する。それ

は必然的に、全方面へ無限なる充実せる時間地平を有っている。此の事は又同時に、「それは一つの無限なる『**体験の流れ**』に属する」という事を意味する。個々体験の各々は、始まり得ると等しく終り得るものであり、随つてその持続を終結し得るものである。例えば喜びの体験の如きそれである。けれども体験の流れは、始まつたり終つたりする事ができない。各々の体験は、時間的存在として、該体験の純粹我の体験である。此の事には、我が此の体験へその純粹なる自我視向 *Ichtheilung* を向け、そしてこれを現実存在するとして、或は現象学的時間に於いて持続するとして、把握する事の可能性（此の可能性は、吾々の知る通り、空虚なる論理的可能性でない）が、必然的に属している。

ところで更に又此の事情の**本質**には、我は視向を時間上の**与えられ方**に向けて、次の事を明証的に（吾々はすべて、茲に記述された事を直覺に於いて追生活して、此の明証を實際に獲得するのであるが）認識するのであるという事の**可能性**が属している。その事というのは即ち、持続的体験は、若しそれが所与様態の連続的流動に於いて経過乃至持続の統一者として規整されないならば、不可能であるという事、更には、時間的体験の此の与えられ方は、種類と次元とは新しくはあるが、それ自身又体験である、という事である。例えば、始まりがあり終りがありその間は持続する喜びの如きを私は、先ず第一にはそれ自身を純粹視向の裡に有つ事ができる。即ち私は喜びの時間的变化と同行するのである。けれども又私はその喜びの与えられ方に注意する事もできる。即ち『**今**』という時々の様態に注意する事もでき、又「此の今、及び原理的に各々の今、には、新しく且つ常に新しき今が必然的連続をなして接続する」という事、「それと同一の事であるが、各々の顕在的な今は「たつた今」へ、「た

った今」は再び、そして連続的に、常に新しき「たつた今のたつた今」へ等々と変化して行く」という事に注意する事もできる。此の事は新しく接続せる今の各々に就いて言われ得る。

顕在的な今は必然的に点的なるものであり、何時も変わらずに点的なるもの、即ち常に新しき質料に對する停滯的形式で居る。『たつた今』の連続に就いても事情は同様である。即ちそれは常に新しき内容の形式の連続である。此の事は同時に又次の事を意味する。即ち、喜びなる持続的体験は恒常的形式の意識連続に於いて『意識的に』与えられている。その形式とは、諸々の過去指向 Retentionen【過去把持】（併しそれは同時に存するものではなくして、**連続的・指向的に繼起的に關係さるべきもの**——「過去指向の過去指向」の連続的相互滲透——である）の連続の極限位相としての印象なる位相である、という事を意味する。此の形式は絶えず新しき内容を受取つて行く。随つてそれは、体験、今が於いて与えられる所の印象の各々、即ち持続の連続的に新しき点に對應する印象に『適応』して行く。印象は過去指向へ、過去指向は変様された過去指向へ、等々と連続的に変化して行く。

併しその外になお、連続的变化の逆方向がある。即ち、「以前」には「以後」が対応し、過去指向の連続には未来指向の連続が対応する。

(二) 著者の此の問題に関する長く結論を得なかつた研究は、一九〇五年に主要な点に於いては完成を見た。そしてその成果はゲッティンゲン大学の講義で発表された。

八二、続き、三重の体験地平、同時に体験反省の地平として

なお併し此の場合吾々の認める所は以上に留まらない。**各々の体験**今は、よしそれが新しく現れる体験の開始位相であるにしても、必然的に「**以前**」なる地平を有つ。然もそれは原理上、空虚なる以前、内容なき空虚形式、ノンセンスではあり得ない。それは必然的に、過ぎ去れる今——これは此の「過ぎ去れる今」なる形式に於いて、過ぎ去れる或るもの、過ぎ去れる**体験**を含んでいる——という意義を有つ。新しく始まる体験の各々には、必然的に諸々の体験が時間上先行している。即ち体験過去なるものは連続的に充実しているのである。けれども又各々の体験今は、「**以後**」なる必然的**地平**をも有っている。そしてこれも亦空虚な地平ではない。各々の体験今は、よしそれが終止する体験の持続の終末位相のそれであるとしても、必然的に、新しき今へ転化して行く。それ故その今は必然的に、充実せる今なのである。

更にこれに加えて次の如く言い得られる。即ち、今なる意識には、たつた今過ぎ去つたという意識が必然的に結び付く、而して後者の意識自身も復ひとつの今である。**如何なる体験も終止及び終止完了の意識なしには終り得ない**。そしてこの意識はひとつの十分充実せる新しき今である。体験の流れは無限の統一であつて、その**流れの形式はひとつの純粹我の体験のすべてを**——多種の形式体系を以て——**必然的に包括する**所の形式である。

これ等洞察のより詳細なる描出と、その重要な形而上學的帰結の証示とを、吾々は予告せる將來の論述に譲る事にしよう。

反省的（内在的）知覚の可能的所与としての体験の、上述所論の一般的固有性は、一層包括的な固

有性——「各々の体験が本質上それ自身に完結せる体験聯関の中にある」ということは、啻に時間的繼起という視点の下に於いてのみでなく、**同時性**なる視点の下に於いても亦そうである」という**本質法**則に於いて表されている所の固有性——の一部なのである。此の同時性とは、各々の体験**今**が、諸体験——それ等も亦まさに『**今**』なる原性形式を有し、それ自身として**純粹我の一つの原性地平**、純粹我の原的なる意識・今の全体をなしている——の地平を有つていふという意味なのである。

此の地平は統一的に過去なる様態へと入つて行く。各々の「以前」は、変様せる今として、此の変様せる今に属するすべてのものを包括して、右の「以前」がそれに対して「以前」なるその今の眼中にある体験の各々に対して、無限の地平を含んでいる。簡単に言えば、『同時に在つた』という地平を含んでいる。嚮に示した記述は、それ故、新次元に依つて補足さるべきであつて、吾々は此の補足を行つて初めて、純粹我の現象学的なる時間の野の**全体**——此の純粹我はその時間の野を『**彼**』の体験の任意の一つからして、以前、以後、同時の三次元に向つて、完全に測定する事ができる——を有つ。換言すれば吾々は、時間的体験統一の、**その本質上統一的**にして且つそれ自身に嚴密に充足せる abgeschlossenen / self-contained **流れの全体**を有つのである。

一つの純粹我と、全三次元に互つて充実せる、此の充実に於いて本質的に聯関せる、その内容的連続に於いて前進する、一つの体験の流れ、此の両者は必然的雙関者である。

八三、『イデー』としての統一的体験流の把握

以下述べる所は右の**意識の原本形式**と本質法則的に關係がある。

純粹なる自我視向が反省に依つて、而も知覺的把握に依つて、何等か或る體驗に加わると、此の聯関の及ぶ**限り**、他の體驗へも視向を向けられるという先天的可能性が存立する。併し原理上此の全聯関は、唯一の純粹視向を通して与えられたもの乃至与えられ得べきものでは**決してない**。にも拘らず此の聯関も亦、原理上別種の仕方ではあるが併し**或る**仕方に依つて、直覺的に把握され得る。即ち、固定された體驗からその體驗地平の新體驗へ、その新體驗の固定から右新體驗の地平の固定へ等々の如き、**内在的直観の『進行の無際限』**という仕方に依つて把握され得る。併し、此処に**體驗地平**と言ふのは、單に既述次元より見たる現象学的時間性の地平という意味のみではなく、**新しき種類の所**与狀態の区別の意味である。それ故、自我指向の客観となつた、随つて**視取** *schicken* された【目差された】ものという狀態を有つてゐる體驗は、視取されてゐない體驗の地平を有つてゐる。即ち『**注意**』という狀態に於いて、時には又漸増的明晰度に於いて把握されてゐるものは、明晰不明、並びに鮮明不鮮明という相對的區別を有つ背景的不注意の地平を有つてゐる。此の點に次の事の形相的可能性の根柢があるのである。即ち、視取されざるものを純粹視向に齎す事、附帶的に注意されたものを第一次的に注意されたものに、不鮮明なものを鮮明なものに、不明なものを明晰なもの、乃至愈々明晰なものにする、という事である。^(二)

斯様に把握から把握への連續的進行に於いて吾々は又或る仕方で**體驗の流れ**をも統一として把握する、と私は言つた。吾々はその體驗の流れを單獨的體驗の如くには把握しないが、併し**カントの意味**

に於けるイデーの仕方で把握する。体験の流れは、無闇に措定され主張されたものではなくして、絶対に疑いなく与えられたもの——言葉の適当に広い意味に於ける所与 *Gegebenheit* / *givenness*——である。此の疑いなきは、直覚に基づくものであるが、併し又、体験の存在に対して存する疑いなき、随つて内面的知覚に於いて純粹に与えられるに至る所の疑いなきとは全く別個の源泉を有つものである。これこそまさに、カントの『イデー』を諦視する所のイデー化の固有性である、(であるからと言って、此のイデー化は、「その内容——此処では体験の流れ——の十全的規定には達し得ない」という事の洞観を決して失わない)。同時に又吾々は次の事を覚る、即ち、体験の流れ及びその成素そのものには、区別し得る一聯の所与様態が属して居つて、これが体系的研究は一般現象学の一主要課題をなさねばならぬであろうという事である。

吾々の考察からして吾々は又、「如何なる具体的体験も、完全なる意味に於いて独立的なるものと**は見做され得ない**」という形相的に妥当且つ明証なる命題をも引き出す事ができる。各々の体験は、性質上、形式上任意的でなく被拘束的な所の聯関の点から見て、『補足必要的』である。

例えば、吾々が何か或る外部知覚——例えば具体的充実さに於いて見たる此の一定の家の知覚——を観察するとする。するとその知覚には、必然的規定部分として、体験周囲なるものが属する。けれども無論此の規定部分というのは、特殊的な、必然的な、然も『**本質的ならぬ**』規定部分、即ちその変化に依つて体験の**固有的**本質内実が少しも変化を受けぬ如き規定部分なのである。知覚なる類の最低種差、その内面的特性、は同一と考え得られるのに、**知覚そのものの方は上述の故に、周囲規**

定の変化に従つて夫々変化するものである。

右の特性から見て本質的に同一なる二つの知覚が、周囲規定から見ても亦同一であるという事は原理上不可能である。蓋し若し同一ならばそれ等は、個体的に**一つの知覚**であろうから。

一つの体験流に属する二つの知覚、随つて二つの体験一般に就いて、人は上述の事を兎に角洞観する事ができる。各々の体験は、その後の体験の（明るい、又は暗い）庭 *Hof* に影響を与える。

更に又、一層詳細に觀察するならば、以下の事が示されるであらう。即ち、**同一の本質内実を有つ二つの体験流**（二つの純粹我に対する意識領界）というものは**考え得られない**という事、並びに又——之は從來述べた所から既に推知され得る事であるが——一つの体験流の**完全に規定された体験**は決して他の体験流には属し得ないという事である。ただ内的性状の同一な体験のみが両者に（個体的同一的に共通なのではないが）共通であり得るのであつて、その上に絶対に相等的な『庭 *Hof*』を有つている二つの体験が両者に共通なのでは決してあり得ない。

（一）それゆえ此処に『地平』というのは、第三五節、上卷一二七頁【「ひとつの経験背景を」以下】に於ける『庭』及び『背景』という言葉と同様な意味である。

八四、現象学的主要主題としての指向性

拙吾々は、『客観的』側面の現象学の一般主題と率直に呼ばれ得るところの体験の固有性、即ち指向性へ移ろう。すべての体験は何事かの仕方で指向性を分有しているものである——とは言え併し

吾々は、例えば、可能的反省の視向の中へ客観として入り来る体験の各々に就いて、よしそれが抽象的な体験契機であつても、「それは時間的体験である」と言い得るように、それと同じ意味に於いて**各々の体験に就いて**、「それは指向性を有つ」と言うわけには行かない。かく指向性を分有する限りに於いて指向性は体験領界一般の本質固有性なのである。深い意味に於ける**意識**を性格づけるもの、体験の流れ全体を意識の流れと称すると同時に又**一つの意識の統一**とも称する事を正当ならしめるもの、それは指向性である。

第二篇の意識一般に関する準備の本質分析に於いて既に吾々は、（猶お現象学の門に入る前に、特に又還元なる方法に依つて此の門に入らんとする目的のために）、指向性一般に就いての、又『作用』、『コギタティオ』の特質に就いての極めて一般的な規定の一聯を究明せねばならなかつた。^(一)その後吾々はその規定を使用した。そして又、根源的分析を現象学的還元の厳格な規範の下に行うという事は猶お未だ成し遂げなかつたが併し吾々は上述諸規定を使用して差し間違えなかつたのである。何故ならば、それ等規定は体験の純粹なる固有本質に関するものであり、随つて心理学に於ける統覚と存在指定との排去に依つて影響を蒙る事があり得なかつたからである。今問題となるのは、**現象学的構造全般の包括的名稱として指向性を論究し、該構造に本質的に関係せる問題を（それが一般的序論に於いて可能なる範囲内で）略述する**という事である。それゆえ吾々は既述の事を（併し本質的に別途の吾々当面の目的を助成するに必要な形で）約説しよう。

吾々は指向性を、体験の特性即ち『或るものに就いての意識である事』と解した。此の驚くべき特

性——理性学上及び形而上学上の謎のすべては此の特性に由来する——は、最初顕現的な**コギト**に於いて吾々に現れた。即ち、知覚作用に或るもの例えば或る物に就いての知覚作用であり、判断作用は或る事態に就いての判断作用であり、評価作用は或る価値態に就いてであり、願望作用は或る願望態に就いてであり、等々である。行動作用は行動に向い、行為作用は行為に向い、愛する作用は愛せられたるものに向い、喜ぶ作用は喜ばしきものに向い、等々である。顕在的な**コギト**の各々に於いて、純粹我から発出する『視向 Blick / regard』は、その時々を意識双関者なる『対象 Gegenstand』、即ち物、事態等々へ向う、そしてその対象に**就いて**の極めて様々なる意識を完成する。抑ところが現象学的反省の教えた所に依れば、此の表象的、思维的、評価的、……なる自我擬向 Ichzuwendung / Ego-advertence 【自我の配意】、此の**顕在的**なる「双関対象に係わっている」という事 Sich-mit-dem-Korrelationsgegenstand-zu-schaffen-machen」「双関対象へ向っている」という事 Zu-ihm-hin-gerichtet-sein / being-directed-to-it」（或は又それから転じている——然も視向はそれへ向けて——という事）は、それ自身の裡に指向性を蔵する事はできるが、併し必ずしも体験の各々に於いて見出され得るというものではないのであった。そこで例えば次の如き事が明らかである。即ち、**コギタ**テイオ的に知覚された対象が擯出的 auszeichnende / distinctive【際だった】自我擬向【自我の配意】を受けると、その中から目立つて来るところのその対象的背景は、実際に体験から言えば**対象**的背景であるという事である。換言すれば、吾々は今純粹対象へ『**コギト**』という状態に於いて向っているのであるが、然も多種の諸対象が『**現出**』しているのであって、それ等諸対象は直観的に『意識』されて居り、合流して意識された対象の野の直観的統一となるのである。その意

識された対象の野というのは、**潜在的なる知覚の野**である。と言うのは、斯く現出しているものへは凡て、特殊なる知覚（覚認的コギト）が向い得るという意味に於いてであつて、体験上現存する感覚射映、例えば視覚的な感覚の野の統一に於いて拡がつている所の視覚的感覚射映が、如何なる対象的把握をも受けず、一般に視向擬向 *Blickzuwendung / the adverting of the regard* に依つて始めて対象の直観的現出として規整される等という如き意味に於いてではない。

これに属するものとしては更に又、背景隔遠——或は、時々のコギタテイオの裡に活きる顕在的純粹我が関係点である故、**自我隔遠乃至自我近接**とも言い得られる——の種々異なる段階に於ける、適意『**発動**』、判断発動、願望発動等々の如き種類の、顕在態背景の体験がある。適意作用、願望作用、判断作用、等々の如きものは、独時の意味に於いて『**遂行** *vollzogen / effected*』されて居り得る。即ち此の遂行の裡に『生き生きと働』いている（或は、悲哀の遂行に於ける如く顕在的に『受動的に働』いている）所の我に依つて遂行されて居り得る。けれども又、斯くの如き意識仕方は、斯く『遂行』されてはいなく共、既に『**発動** *regen / stirring*』して居り、『背景』に於いて出現して居り得る。遂行されてはいないにも拘らず此の非顕在性は、その独自の本質上既に『或るものに就いての意識』である。それゆえ吾々は、コギトの特性即ち『への視向』乃至（更になお種々に了解し、現象学的に研究さるべき所の）自我擬向⁽¹⁾を、指向性の本質に算えることをしなかつた。吾々は此のコギタテイオ的なものは之を寧ろ、吾々が指向性と呼ぶ所の普遍的性質の特殊的様相だと考えたのである。

i 「発動」 *regungen* (英 *arousal*)、渡辺訳「気持ちが崩しかけてゐる」

第三篇 純粹現象学の方法と問題とに就いて

- (一) 第三六——三八節、上卷一三一——一四〇頁参照【「顕在的意識の体験が」以下】。
- (二) 第三七節、上卷一三三頁以下参照【「コギトに於いて純粹我が」以下】。

用語に就いて

『論理学的諸研究』に於いては、右の普遍的性質は即ち『作用性格』と呼ばれ、此の性格を有つ具體的体験の各々は『作用』と呼ばれている。此の作用なる概念は、從來絶えず誤解を受けて来ている。それゆえ私は（既に年来の私の講義に於けると等しく、茲に於いても）、用語を些か一層周到に限定し、以て作用と指向的体験との両語を最早不用意に同義として使用せざることの必要を感じるのである。私の独創に係る作用概念が全く不可欠なる事、併し又遂行されたる作用とされざる作用との様態上の區別を常に顧慮するの必要なる事、この事は更に後になつて明らかにするであらう。

何等の附加語なくただ単に作用とのみ言う場合には、専ら本来の作用、即ち言わば顕在的な、遂行せられたる作用だけを意味する事にする。

なお其他極一般的に言つておくべき事は、現象学の初めにあつては、すべての概念乃至用語は、当初無差別的統一に於いて諦視されたものの範囲内の新しき現象学的成層に対する意識分析や認識やの進歩に随つて分化するの危機に絶えず立っているので、何等かの点で常に不安定なるを免れ得ないという事である。すべて選ばれた用語というものはその聯関傾向を有っている。即ち関係方向を指示するものである。此の関係方向からして後に屢々、用語は単に一つの本質層のみをその源泉とするも

のでないという事がわかつて来る。それと同時に又、用語は一層適當に制限するか、でなければ変様せねばならぬという事が明らかになる。それ故、最後決定的な用語を期待するのは、学問の非常に進歩した発展段階に於いて初めて可能なのである。学問上の、漸く緒についた許りでこれから進んで行くという論述に対して、用語の論理という如き外面的・形式的な基準を与えて、学問上の大発展の終局的成果にして初めてそこに安住する種類の用語を出発点に於いて要求するという事は、混乱に導く事であり、且つ根本的に本末顛倒の事である。出発点にとつては如何なる表現でもよく、取りわけ、吾々の眼を明晰に把握され得る現象学的出来事に向け得る如き、適當に選ばれた具象的表現ならばどれでも結構なのである。明晰性というものは、無規定性の或る庭と相容れぬものではない。此の庭を更に一層規定乃至闡明するという事がとりも直さず今後の課題である。と等しく他方又聯関の比較乃至交換に依つて行わるべき内部分析、即ち成素乃至層への分解も亦そうである。与えられたる直覺的呈示に満足せず、恰も『精密』諸科学に於けると等しく『定義』を要求する人々や、乃至は、若干の事例の粗雑な分析に依つて表面的に固定的なる概念として獲得された現象学的諸概念を、非直觀的、科学的思惟に於いて自由自在に処理する事ができ、且つそうする事に依つて現象学を促進する事ができると信ずる人々は、未だ極めて初心者なのであつて、彼等は現象学の本質、及び現象学の原理的に要求する方法体系を把握していないのである。

以上述べた事は、内在的・本質的なものを目指しての心理学的現象の記述という意味での「經驗的方向を執る心理学的現象学」に対しても亦等しく当て嵌まる。

指向性なる概念は、それを吾々が上に解した如く漠然たる広さに解すれば、現象学の初めに於いて全く必要不可欠なる出発概念であり、基礎概念である。此の概念は一般的なものを示すのであるが、その一般的なものは、更に詳細に研究する以前には猶お甚だ曖昧なものであらう。又それは非常に多くの相異なる形態をとつて現れるであらう。又本来指向性の純粹本質を成すものは何であるか、その本質を本来自身の中を含むのは具体的形態中の如何なる成素であるか、その本質が内面的に無関係なのは如何なる成素に対してであるか、という事を嚴密明晰なる分析に依つて明らかにする事は猶お甚だ困難であらう。——併し兎に角、吾々が体験を指向的な体験として認め、それに就いてそれは或るものに就いての意識であると供述する場合には、体験は或る一定の且つ極めて重要な視点の下に眺められているのである。なお、斯く供述する際に、それは具体的体験に就いてであるか乃至は抽象的体験層に就いてであるかという事は吾々に無関係である。何故ならば抽象的体験層と雖も亦上述の特性を示し得るからである。

八五、感覺的ヒュレーンと指向的モルフエー

指向性なるものは、その謎に富む形と段階とを姑く措いて、或る普遍的媒体——これは畢竟、それ自身として指向的な性格を有せざる所の体験をもすべて自らの裡に含む——にも等しいものである。此の事は吾々が上に（体験の流れを意識の統一と称した時に）既に指示した事であつた。ところで、全体験時間性を規整する究極的意識の暗き深奥処に降る事を思い止まつて、寧ろ体験を、内在的

反省に於いて統一なる時間的出来事として現れている俟に受取る所の觀察段階——吾々は当分此の段階に緊縛されている——に於いては、吾々は原理的に次の如き區別をせねばならない。

一、『論理學的諸研究』に於いて『第一次内容』と呼ばれた⁽¹⁾體驗のすべて、

二、指向性なる特性を自らの裡に有つ體驗乃至體驗契機。

前者には、最上類から見て統一なる或る『**感覺的**』體驗、例えば色彩与件、触感与件、音響与件等々の如き『**感覺内容**』が属する（吾々はこれ等を最早現出する物的契機、即ち色彩性、粗笨性^{そはん}等々とは混同しないであろう、後者は寧ろ前者に由つて體驗的に『示現』するのである）。感覺的なる快感覺、痛感覺、痒感覺等々に就いても同様であり、『衝動』の領界の感覺的諸契機も亦無論そうである。吾々は斯くの如き具體的な體驗与件がそれよりも一層包括的な具體的體驗に於ける成素である事を認める。此の具體的體驗なるものは全体として指向的である。というのは即ち、あの感覺的契機の上には言わば『生化』的 *biocellende / animates* 【生氣づける】な、**意味付与的**な（或は意味付与作用を本質的に含んでいる所の）ひとつの層が横たわつていて、此の層に依つて、**それ自身には毫も指向性を有たぬ所の感覺的なもの**から、まさしく具體的な指向的體驗そのものが出来て来る、という組織になつてゐるのである。

體驗の流れに於ける斯くの如き感覺的體驗は、到る處に且つ必然的に何等か或る『**生化的把握**』を（此の生化的把握が要求し可能ならしめる所の性格の一切と共に）有するものであるか否か、換言すれば、その感覺的體驗は常に**指向的機能**を行つてゐるものであるか否か、という事は此處では決定され得な

い。他方又、指向性を本質的に将来する性格は、感覺的根柢がなくとも具體的結成をなし得るか否かという事も亦吾々は差し当り姑く措く事にしよう。

何れにしても現象学的範圍の全般に互つて（全般——というのは規整せられた時間性の、絶えず固持さるべき段階の内部でのそれ）**感覺的ヒュレー**〔素材〕と**指向的モルフェー**〔形式〕との右の注目すべき二重性と統一性が支配的な役割を演じている。吾々が何等か或る明晰な直観、乃至は明晰に行われた評価、適意作用、意欲等々の如きものを想いみるならば、實際右の材料と形式という概念は、**驀地**に吾々に迫つて来る。其処に在る指向的体験は、（非常に広義に解した）意味付与に依る統一である。感性的与件は、種々なる段階の指向的形成乃至意味付与に対する、即ち端々な且つ独特に基づけられたそれに対する、材料として現れる。この事は後になつて一層詳しく述べるであらう。上來の議論が如何に妥当であるかは、猶お別方面からも、『双関者』の説に依つて確証されるであらう。上に未解決の俚にしておいた可能性に就いて言えば、随つて、それは**形式なき材料及び材料なき形式**という名辭を与えらるべきであらう。

用語に関して次の点を附記しておきたい。第一次内容という語は最早十分意を尽すものでない様に吾々には思われる。他方又此の同じ概念を表すに感性的体験 *sinnliches Erlebnis* という語も用に堪えない。何故ならば此の語には、感性的知覚、感性的直観一般、感性的喜び等々の一般用語法が障礙をなすからである。蓋しその場合感性的体験と称されるのは、単なるヒュレー的体験でなく指向的体験なのである。『單なる』或は『純粹なる』体験と言つても、又新しい多義性があるために、事情は一層よく

なりはしない事は明らかである。なお又此の上に、『感性的』という言葉に属し且つ現象学的還元を受けても依然として存続する所の特有の多義性がある。『意味付与的』(sinngebend) sense-bestowing と『感性的』(sinlich) sensuous との対照に依つて生ずる所の、且つ又時々は甚だしく意味を混乱せしめるものでありながら最も最早殆んど避け得ない所の二義性の事は姑く措くとしても、次の事には言及しておくべきであろう。それは即ち、狭義に於ける感性というのは常態的外部知覚に於いて『感官』に依つて媒介されたものの現象学的剰余を表すという事である。還元の後には、外部直観の当該『感性的』諸与件の本質親近性なるものが現れて来、そして此の親近性には独自の類本質即ち現象学の一基礎概念が対応する。広義の、そして本質に於いて統一的なる意味に於いては感性は又、独自の類統一を有ち且つ他方では無論又あの狭義の感性に対する普遍的性質の本質親近性をも有つ所の感性的なる感情及び衝動をも含んでいる、——と言うのは凡て、此の他にヒュレーなる**機能的**概念の示す所の共通性は度外視しての事である。右の広狭両義が合したために、固々は狭義なる感性という言葉を用いてから情緒及び意志の領界即ち指向的体験（それに於いて該領界の感性的与件は機能作用的『材料 Stoffe、suffs』として現れている）へ移すに至らしめたのである。それゆえ吾々はどうしても、機能の一致と形成性格への対照とに依つて全群を表現する所の新用語を必要とする。そこで吾々はそのために**ヒュレー的 hylic Data 乃至材料的与件 stuff Data** 或は又単に**材料**という言葉を選ぶ。その性質上避け難い旧くからの言葉を想い起す必要がある場合には吾々は、**感性的 sensuelle 又は感性的 sinnliche 材料**という。此の材料を形成して指向的体験とし、そして指向性なる特性を導入するものは、意識という言葉

にそれ特有の意味を与えるものと恰も同じものである。即ちそれに随つて恰も意識そのものはそれ自身、意識が或るものに就いての意識であるその或るものを指示するのである。ところで、意識契機、意識態、其他之に類する合成語や、同様に又指向的契機という言葉は、次に明らかに成つて来る所の雑多なる曖昧さのために、全く使用不可能なものである。それゆゑ吾々はノエシスの契機 *noetic moment*ⁱ 或は簡単にノエシス *Noesis* という用語を導入する。此のノエシスは言葉の最広義に於けるヌース *nous* 【理性】の特性を成すものである。此のヌースというのは、そのすべての顕在的生命形式に随つて吾々をコギタティオへ、随つて指向的体験一般へ連れ戻すものであり、その故に又形式なるイデーの形相的前提ⁱⁱである所のもののすべてを（又本質上そのみを）包括するものである。が同時に又、ヌースなる語がその顕著なる意義の一つ、即ちまさしく『意味 *sense*』を想い起さしめるといふ事は歓迎できない事でない。仮令、ノエシスの契機に於いて遂行される『意味付与』は、種々のものを含み、且つその基底としてのみ、意味に於いての深い概念に結び付く所の『意味付与』を含むに過ぎぬとはいへ。

体験の此のノエシスの側面を心的側面と呼ぶ事も亦十分な根拠があるであろう。何故ならばブシュケーⁱとか心的なるものとか言う場合に、哲学者の心理学者達が或る仕方にて特を選んで目指した所のものは指向性を導入する所のものであつたのであつて、感性的契機の方は身体及びその感官活動に属するとされたからである。此の旧来の傾向は最近には、ブレンターノの『心的現象』と『物的現象』と

i "eo ipso", 渡辺訳「それ自身からして本来」
ii "eidetische Voraussetzung der Idee der Norm", 渡辺訳「ノルム【規範・形式】という理念の形相的前提」

の區別に於いて發現している。此の區別は、現象學の發展に途を拓いたという故を似て特に意義深いものである——よしブレンターノ自身は現象學の地盤から隔る事猶お遠いものがあつたとはいへ、又よし彼は彼の此の區別を以てしては、彼の本来志した區別、即ち物的自然科學の經驗的範圍と心理學のそれとの區別に合致しなかつたとはいへ。それに就いて今吾々にとつて特に關係のあるのはただ次の事だけである。即ち、成程ブレンターノは猶お未だ材料的契機という概念は見出さなかつた——而して此の事は、彼が材料的契機（感覺与件）としての『物的現象』とそれのノエシ스의把握に於いて現出する所の對象的契機（物の色、物の形等々）としての『物的現象』との原理的區別を考慮しなかつたがためである——けれども彼はそれに反して他方に於いて、『心的現象』なる概念を、彼の區分的規定の一つに依つて、即ち指向性なる固有性に依つて性格づけたのである。恰も此の事に依つて彼は、言葉の歴史的意義に於いて仮令抽出ではないにしても或る強調を有していた所のあの顯著なる意味に於ける『心的なるもの』を現代の視野の裡に齎したのであつた。

併しながら、『心的なるもの』という言葉は指向性の同義語として使用する事には反對すべきである。というのは此の意味に於ける心的なるものと、心理學的なるもの（随つて心理学固有の對象であるもの）の意味に於ける心的なるものとを、同じ言葉を以て言い表すのは疑いもなく不都合であるという事情に由るのである。しかのみならず加之なお此の後者の概念に就いて見るに、それには、『心なき心理学』への周知の傾向を源泉とする所の好ましからぬ二重の意味がある。人が心的なるもの——殊に顯在的に心的なるもの（それに対応する『心的性向』と反對）——という名辭の下に好んで、經驗的に措定さ

れた体験の流れの統一に於ける体験を考へるというのは、此の『心なき心理学』に聯関しての事である。扱ところが、此の心的なるものの實在の所持者、心的実体、或はその『心』及びその心的、實在的特性を、心的とも、或は心理学の対象とも呼ぶ事は避け得ないのである。吾々の觀る所では、『心なき心理学』は、何か或る朦朧たる「心の形而上学」の意味に於ける心的実体の排去を、心一般の、即ち經驗に於いて事實的に与えられた心的實在——その状態が**体験**である——の排去と混同するものである。此の實在は決して、身体に緊縛されて居り且つ或る仕方で經驗的に統制——性向概念は此の統制に対する單なる指標である——されてゐる所の單なる体験の流れではない。それは兎に角として、此の「心的なるもの」という言葉は、多義性の存する故に、とりわけ此の言葉に就いての流通概念が、特に指向的という種類のものを指すのでないという事情の故に、吾々の用に堪えないのである。それゆゑ吾々は**ノエシス**的という言葉を固執して次の如く言う、

現象学的存在の流れは材料的層とノエシス的層とを有つ、と。

特に材料的なるものを目指す所の現象学的なる觀察と分析とは、**ヒュレー**的・現象学的なるそれと名付けられ得る。同様に又他方、**ノエシス**的契機に関するそれは**ノエシス**的・現象学的なるそれと名付けられ得る。兩者の中**ノエシス**的なるものの側の分析の方が、遙かに重要且つ豊富である。

(一) 第二卷(第一版)、第六研究、第五八節、六五二頁〔第二版、第二卷第二冊、一八〇頁〕。なお第一次内容という概念は、拙著『算術哲学』(二八九一年)の七二頁及び其他諸處に現れてゐる。

八六、機能の問題

併しなから何よりも大問題なのは、**機能の問題**、即ち『**意識対象性の規整** Konstitution【構成】』の問題である。これは、例えば自然に就いていえば、ノエシスが、材料的なるものを生化しつつ且つ互いに交織して多樣的・統一的なる連続及び綜合となりつつ、或るものに就いての意識を成立せしめて、対象性なる客觀的統一が該意識中に調和的に『表され』、『明らかにされ』、且つ『理性的』に規定され得るようにするその仕方に関する問題である。

此の意味（数学の意味とは全然違う意味）に於いての『機能』[Funktion]、数学に於いては函数と邦訳さる』は、全く独自性のもの、即ちノエシスの純粹**本質**に基づいているものである。意識はとりもなおさず或るもの『に就いての』意識である。換言すれば『意味』——即ち言わば、『心』、『精神』、『理性』の精髓——を自らの裡に蔵するというのが意識の本質である。意識とは、『心的複合』、融合せる『内容』、それ自身に意味なく、よし任意に混合しても何等の『意味』をも与え得ない所の『感覺』の『束』乃至流れ、等を表す名称ではなくして、意識とは徹頭徹尾『意識』である。即ちあらゆる理性非理性、あらゆる正不正、あらゆる實在仮構、あらゆる価値無価値、あらゆる業績非行等の源泉なのである。それゆえ意識は、感覺論がそのみを認めんとするもの、即ち實際それ自身に意味のない、非理性的な——併し無論理性化を受ける事はできる——材料、とは根本的に異なっている。此の理性化するものが何を意味するかは、吾々は後問もなく一層明らかに了解するであらう。

機能という視点は現象学の中心的視点である。それゆえ此の視点から発出する研究は殆んど現象学

の全領界を覆うものであつて、凡ての現象学的分析は畢竟するに、成素乃至底層として、此の研究に何等かの仕方で仕えるものなのである。個々の体験に留まつて分析し比較し、記述し分類する代りに、『綜合的統一』を可能ならしめる右諸作用の機能という『目的論的』視点の下に於ける個々のものの觀察が現れる。此の觀察は、意識の多樣——本質上体験自身に於いて、体験の意味付与に於いて、体験のノエシス一般に於いて言わば**指定されている**所の、言わばそれ等から取り出さるべき所の意識の多樣——に向うのである。それ故例えば經驗や經驗思维の領界に於いては、形態多樣なる意識連続と、及び意識体験——これはそれ自身に於いて、感官の相属に依つて結合されている、即ち時に此の時に彼の仕方で現出し、直觀的に現れ、或は思维的に規定される所の一にして同じ客觀的なものに**就いて**の統一的に包括的な意識に依つて結合されている——の断続的結合に向うのである。如何にして同一者が、即ち客觀的な、非実的に内在的な各種の統一が、『意識』され『思念』された統一なのであるか。非常に相異なりながら然も本質上要求されている所の構造を有つ意識形態は如何にして思念されたものの同一性に属するのであるか。如何にして之等諸形態は方法上嚴密に記述し得られるのであるか。之等の事を上述の觀察は探究しようと企てるのである。又更に進んで此の觀察は、各々の對象的な領域や範疇の對象性の統一は、『理性』及び『非理性』という二重の名称に対応して、如何にして意識に依つて『証示』され又『拒絶』され、思维意識の形式に依つて規定され、『より詳細に』規定され、或は『別様に』規定され、乃至は『無なる』『仮象』として徹頭徹尾否認され得、且つ又

i 「指定されている」 vorgezeichneten (英 predestinated) 渡辺訳「あらかじめその下図を描かれ」

されねばならぬのであるか、という事を探究しようと企てる。陳腐ながら然も甚だ謎に富む名称、即ち『現実』と『仮象』、『真の』實在、『仮象實在』、『真の』価値、『仮象価値と無価値』等々という名称を以て示される区分はすべて右と相聯関している。そして此の区分の現象学的説明は茲の研究に連接するのである。

それ故、各々の領域及び範疇の客観的統一は如何にして『意識上規整』されるかという事を、極めて包括的普遍的に探究する事が必要である。その統一——恰も本質可能性として——に就いての現実的及び可能的なる意識の聯関のすべては、如何にして該統一の**本質**に依つて指定されるかという事を体系的に示す必要がある。その意識の聯関というのは即ち、該統一に指向的に關係している所の端的な或は基づけられたる直観、比較的低き、又は高き段階の思惟形態、混乱せる或は明晰なる、表出的なる或は非表出的なる、先学的なる或は学的なる思惟形態、進んでは嚴密なる理論科学の最高形態に至る迄がそれである。可能的意識の基礎的種類のすべて、及びそれに本質的に属する転化、融解、綜合を、形相的普遍性及び現象学的純粹性に於いて体系的に研究して、之を明らかにする事が必要である。それ等は如何にしてそれ等固有の本質に依つてすべての存在可能性（及び存在不可能性）を指定するか。絶対に確乎たる本質法則に随つて存在する所の対象は如何にして全く一定の本質内実の意識聯関に対して双関者なのであるか。並びに又逆に、斯くの如き性質の聯関の存在は存在する対象と如何にして等值的であるか。これ等の事を研究する必要があるのである。そして此の事は常に、すべての存在領域、普遍性のすべての段階、下つては存在の具体的結成に到る迄に、關係している。

現象学は、その純粹に形相的な、各種の超越を『排去』する観方に依つて、純粹意識というそれ固有の地盤に於いて、特有の意味に於いて先驗的な問題の此の全複合にまで必然的に到達する。そしてその故にそれは先驗的現象学という名に値するのである。現象学はそれ自身の地盤に於いて、体験を宛も任意の死んだ事物、即ち単に存在はするが併し何ものをも意味せず、何ものをも思念せざる『内容複合』であるかの如くに、要素、複合構成という点に就いて、部類及び下位部類という点に就いて觀察するのでなく、指向的体験として現れ、且つ純粹にその形相的本質を通して現れる所の原理的に独特な性質の問題を『に就いての意識』として捉えるに到らねばならない。

勿論純粹ヒュレー論は先驗的意識の現象学に属する。而もヒュレー論はそれ自身に完足せる *essence* 学科という性格を有っている、即ちかかるものとしてその価値をそれ自身の裡に有っている。けれども他方又機能の視点からみるに、それは指向的織物の中へ可能的なる緯を供給し、指向的形成に対し可能的材料を供給するという事に依つて意義を有っている。啻に之等問題の困難という点に就いてのみならず、絶対的認識のイデーという立場からの問題の順位という点に就いても、ヒュレー論はノエシス的、機能的現象学（なお此の両者は本来引き離され得ない）の遙か下層に在るという事は明らかである。

扱吾々は以下章を重ねて一層詳細なる論述に着手しよう。

シュトゥンプは彼の重要な伯林学士院論文に於いて、機能ベルンという言葉を『心的機能 psychological function』という風に結びつけて、彼が『現出』と呼ぶものと対立させて使っている。此の区別は心理学上の区別であると彼は言っている。するとそれは『作用 acts』と『第一次内容』という吾々の（ただ正に心理学的なるものの範囲に使用しただけの）対立と一致する。が注意すべき事は、これ等用語は吾々の論述に於いては、此の尊敬する学者に於けるとは全然別の意義を有っているという事である。彼と私との著書をただ表面的に読む人達が（シュトゥンプの『現出』の論としての）現象学の概念を吾々のそれと混淆した事は既に屢々であつた。シュトゥンプの現象学は、上に私がヒュレー論と呼んだものに当るであろう。ただ併し吾々の規定は、その方法上の意味に於いて、先験的現象学の包括的な埒に依つて本質的に制約されている。他方から言えばヒュレー論なる理念は、そっくり現象学からして形相的心理学——吾々の観る所ではシュトゥンプの『現象学』は之に下屬する——の地盤へ移されるのである。

(1) C. Stumpf, 《Erscheinungen und psychische Funktionen》(S. 4ff.) 及び《Zur Einteilung der Wissenschaften》
両論文共一九〇六年の《Abh. d. Kgl. Preuß. Akademie d. Wissensch.》所載。

第三章 ノエシスとノエマ

八七、予備的注意

指向的体験の固有性をその一般性に於いて示す事は容易である。『或るものに就いての意識』という言葉は、特に任意の引例に依つてならば、吾々誰しも之を了解するのである。指向的体験に対応する現象学的固有性を純粹に且つ正しく把握するとなると一層困難になる。哲学者や心理学者の多数の者は（若し吾々が文献に依つて判断する事を許されるならば）、此の『或るものに就いての意識』なる名称が艱難なる確認の、即ち形相的確認の大分野を劃するものであるという事を、今日に於いても猶お異様な事と考えている。何故かといえば、各々の表象作用は表象されたものに、各々の判断作用は判断されたものに（等々と）関係するという事を単に言つたり認めたりしただけでは、何等得る所がないも同然であるからである。或は又、その他に論理学、認識論、倫理学等を、それ等が多く明証を有つているという点で、引合いに出して、扱之等の明証を指向性の本質に属するものと**呼んで**も、又何等得る所がないに等しいからである。同時に又、現象学的本質論を或る極めて旧いものであると、即ち旧い論理学や所詮それと同列に置かるべき諸学科に対する新しい名称であると主張するのは、甚だ単純な遺口である。何故ならば、先験的観方の特性を把握せず、又純粹に現象学的な地盤を実際に獲得しないならば、仮令成程現象学という言葉は使われているにしても、事象は捉えられていないからである。加之、観方の単なる変更や或は現象学的還元の単なる遂行の如きでは、純粹論理学から現

象学の如きものを作り出すには不十分である。何故ならば、その場合人々の引用するであろう論理学上の、又同様に存在学上の、純粹に倫理学上の、及びその他すべての先天的なる諸命題は、真に現象学的なるものをどの点に於いて表現しているのであるか、又その現象学的なるものはその都度現象学のどの層に属するのであるかということは決して容易に明瞭でないからである。それ所でなくそれは寧ろ反対に、艱難極まる諸問題を蔵しているのであつて、それ等問題の意味は、基準的なる基礎的區別に就いて未だ何事も知らぬ人には無論誰にもわかつていないのである。純粹に論理的な洞観から、乃至は意義論的な、存在学的な、又ノエシ学的な洞観から、同様に又普通の規範的且つ心理学的なる認識論から、出發して、真の意味に於いて内在的・心理学的なる所与の把握へ、次に現象学的所与の把握へ、そして最後に、先驗的關係が先天的に吾々に明らかにしてくれる所の本質聯関のすべてへ達する途——此の途は實に、（若し私が敢えて私自身の経験からして判断するを許されるならば）、遠く且つ荆棘に富む途なのである。これと同様な事は、對象的洞観から出發して、本質的にそれに属する所の現象学的洞観への途を進まうと試みる際には、如何なる場合にも妥当するのである。

それ故、『或るものに就いての意識』というのは、甚だ自明な事であり、然も又同時に極めて不明な事なのである。最初の反省に依つて迷ひ込まれる迷宮のような邪路は、厄介な問題領界を悉く否定する懷疑を生み易い。指向的体験例えば知覚体験を、それそのものに固有の本質に関して把握するという勇氣を有ち得ないがために、既に渺からざる人が門戸を鎖している。知覚の裡に生きつつ知覚されたものに、觀察して理論を構成しつつ、向つていふという事をせずに、寧ろ知覚作用へ視向を向け、

或は知覚されたものの与えられ方の特性へ視向を向け、そして内在的本質分析に於いて現れるものをそれが現れている通りに受取るという事、此の事に彼等は成功していないのである。若し人が、正しい観方を獲得してそれを習練に依つて確立したならば、就中又若し、根本的に先入見を捨てて、流布学習されている理論を一切顧慮せずに、明晰なる本質所与に従うの勇氣を獲得したならば、直ちに確實なる成果が、——そして同様な観方を採るすべての者に於いて同様なる成果が——生ずる。又、自身に見たものを他人に伝達し、他人の記述を再吟味し、空虚な語義の不識裡の混入を剔抉し、すべての妥当領界に於いての如く今の場合に於いても亦可能なる誤謬を直覺に照しての再検討に依つて分別淘汰する、等という事を行う確実なる可能性が生ずるのである。捉兎に角事象に向う事にしよう。

八八、体験の实的成素と指向的成素、ノエマ

本書の考察に於いて一般に然る如く、吾々は極めて一般的な区別——それは言わば現象学の直ぐ戸口に於いて捉えられ得、且つ又更に進んで的方法的処置に対して規定的である——を目指して進む事とする。そうすると吾々は、指向性に関して直ちにひとつの全く基本的な区別に遭遇する。即ち指向的体験の**本来の成素** *components* とその**指向的関者** *correlates* 乃至その成素との区別に遭遇する。第二篇の形相的予備考察に於いて吾々は既に此の区別に論及した。⁽¹⁾ 此の区別は、自然的観方から現象学的観方への移行に依つて現象学的領界の独自存在を明らかにするために、吾々に役立ったのであった。併しあの個所では、「此の区別は、現象学の全問題群を御約する故に、此の領界そのものの内部

に於いて、随つて先驗的還元の埒内に於いて、根本的な意義を得るのである」という事には言及できなかった。それゆえ吾々は、一方に於いて、体験の**実的分析**に依つて見出される所の部分と契機とを区別せねばならない、(此の場合吾々は体験を、何か他の対象と同様に対象として——其の対象の断片、或は其の対象を實的に組成している非独立的契機を問題としつ——取扱う)。けれども他方に於いて、指向的体験なるものは或るものに就いての意識であり、そしてそれはその本質上、例えば回想、判断、意志等々としてそうである。それゆえ吾々は、此の『或るものに就いての』という側面から觀て本質上如何なる事が供述され得るかと問う事ができるのである。

各々の指向的体験は、それがノエシスの契機を有つ故に、恰もノエシスの体験である。何等か或るひとつの『意味』、又時には多様な意味を自身の裡に蔵し、此の意味付与を基礎として、又それと一つになつて、それ以上の作業——これはその意味付与に依つてまさしく『有意味的 sinnvolle / sensefull』となる——を遂行するというのが、指向的体験の本質である。斯くの如きノエシスの契機は例えば次の如きものである。即ち、純粹我に依つて意味 (Sinn) 付与の力で『思念 *gemeinen / meant*』されている対象への純粹我的視向擬向、即ち「純粹我的『意念 (Sinn)』の裡に在ⁱⁱる対象」への視向擬向、更に進んでは該対象の把握、即ち、『思念 *Vernemen / meaning*』の中へ入つて来た他の対象へ視向を向けながらも該対象を固持すること、同様に又表明、関係づけ、取り纏め、(信、推測、評価等々という如き種類の) 諸作業、等がそれである。上述の事はすべて、当該諸体験——それ等は仮令如何

i 「視向擬向」 *Blickrichtungen* (英 *directions of the regard*) 渡辺訳「目やちを向ける」

ii "im Sinne liegt" (英 *inherent in the sense*) 渡辺訳「念頭にある」

に構造が相異なっているにしても、又自身に於いて変化し得るにしても——に於いて見出され得る事である。斯様に此の一聯の範例的契機は成程体験の实的成素を示してはいるが、然も又それは、即ち意味という名称に依つて、**非实的**なる契機をも示しているのである。

实的な、ノエシ的な内実の多様な与件には、それと双関的な『**ノエマ的内実**』乃至簡単には**ノエマ**——これ等の用語は今後絶えず使用するであらう——の裡に在つて、真に純粹なる直覺に依つて呈示され得る所の与件の多様が、何時も対応している。

例えば知覚はそのノエマを、最下低にはその知覚意味、**即ち知覚されたもののものを有つて**いる。同様に時々の回想はその**回想されたもののものを**、まさしく該回想のノエマとして、**即ちそれが該回想に依つて『思念されたもの』、『意識されたもの』である**^{によぜ}如是の俛に、有つてゐる。又、判断は**判断されたもののもの**の das Geurteilte als solches を、適意は意に適うものそのものを有つてゐる、等々であるの如何なる場合にも、ノエマ的双関者——これは茲で（非常に広義に於いて）『意味』と呼ばれる——は、それが知覚、判断、適意等々の体験の裡に『**内在的**』に存している通りに、**即ち、吾々が、純粹に此の体験自身に問いかける場合に該体験に依つて吾々に提供される通りに、正確に其俛に受取らるべきである。**

すべて之等の事を吾々は如何に解しているかは、範例的分析の遂行（吾々はこれを純粹直覺に於いて行おうと思う）に依つて明らかになるであらう。

今仮りに、吾々が庭へ眼をやつて、花盛りの林檎の樹、芝生の清々しい新緑等々を愉快な氣持で眺

めているとする。すると、此の知覚及びそれに伴う愉快さというものは、それと同時に知覚されたる愉快なるものであるのではない事は明らかである。自然的観方に於いては、吾々にとって、此の林檎の樹は超越的な空間現実の中に定在するものであり、知覚並びに愉快さは、吾々に、即ち実在的な人間に属する心的状態である。一方の実在者と他方のそれとの間、即ち実在の人間乃至実在的知覚と実在的な林檎の樹との間には実在的関係が存立している。斯くの如き体験状態にあつては、或る場合には次のように言われる。即ち、「此の知覚は『単なる幻覚』であり、知覚されたもの即ち吾々の眼前の此の林檎の樹は『現実の』実在に於いて存在するのではない」、というのである。そうなると、以前には現実に存立する関係だと考えられた実在的関係は攪乱されてしまう。残るのはただ知覚だけであつて、そこには此の知覚が関係する**現実的なもの**は何もないのである。

扱吾々は現象学的観方へ移つて行こう。超越的世界はそれの『括弧』を受ける。即ち吾々はそれが現実にと在るという事に関してエポケーを行う。そこで吾々は、知覚と適意的評価とのノエシス的体験の複合に於いて本質上何が見出され得るかと問おう。物的にして且つ心的なる全世界と同時に、知覚と知覚されたものとの間の実在的関係の現実的存立も排去される。然も知覚と知覚されたものとの間の（同様に又適意と適意的なるものとの間の）或る関係は明らかに残存している。即ち此の関係は、それが先験的な体験の流れへ入るや否や、『純粹内在』に於いて、即ち現象学的に還元された知覚体験と適意体験とを純粹に基礎として、本質として与えられて来るものである。此の事情こそ今吾々の取扱わんとする所のもの、即ち純粹に現象学的なる事情なのである。現象学は幻覚、錯覚、一般に

誤謬知覚に關しても亦言うべき何ものかがあり、而も恐らくは非常に多くがあるという事はあるであらう。併しながら、それ等は今の場合に、それ等が自然的觀方に於いて演じた役割の点で現象学的排去を蒙る事は明証的である。今の場合には吾々は、知覚に対しても、又任意に繼續する知覚聯関に対しても（例えば吾々が漫步しつつ花盛りの樹を眺める場合の如きに際して）その知覚聯関に『現実』に於いて何かが対応しているかどうかという種類の問いをかける必要がない。此の定立的現實は無論判斷上、吾々に対し其処に在るのでないのである。然も言わば、万物皆旧態依然としている。現象学的に還元された知覚体験と雖も、『此の庭に在る等々の、此の花盛りの林檎の樹』に就いての知覚なのであり還元された愉快さも亦同様に此の樹自身に対する愉快さなのである。その樹は、それが**此の知覚に於いて現出している樹、此の愉快さ『に於いて』、『美しい』、『愛らしい』**樹等々であつた時に**有つていた**所の諸々の契機、性質、性格の如何に些少のニュアンスをも喪失してはいないのである。吾々の現象学的觀方に於いては、吾々は次の如き本質上の疑問を提出する事ができ、又提出せねばならない。即ち、『**知覚されたものそのもの**』とは何であるか、それは**それ自身の裡に此の知覚ノエマとして如何なる本質契機を蔵しているか**という事である。吾々は本質上与えられたものへ純粹に帰依する事に依つてその答えを得る。というのは吾々は『現出しているそのもの』を完全なる明証に於いて忠実に記述できるのである。今ただ之を一つ別の言葉で言い表すに止めておくならば、それは『知覚をノエマの側面に就いて記述する』という事である。

（二）第四一節、上卷一四六頁以下參照〔知覚の實的成素と知覚〕以下〕。

(二)『充実的意味』に関する『論、研』第二卷(第一版)(第二版、同卷第一冊)、第一研究、第一四節、五〇頁参照、(なお『知覚意味』に関する、第六研究、第五五節、六四二頁(第二版、同卷第二冊一六九頁)参照)、更に進んで、作用の『質料』に関する第五研究、第二〇——二二節参照【第二〇節以下を参照】、此の点は第六研究第二五——二九節其他に頻出。

八九、ノエマ的供述と現実供述、心理学的領界に於けるノエマ

上述の記述的供述 *Aussagen / statements* はすべて、現実供述と同語ではあり得るにも拘らず、**根本的な**意味変様を受けていることは明らかである。それは丁度、記述されたもの自身が、『精確に同じ』ものとして現れていながら、然も、言わば符号の逆変に依って、根本的に別個のものとなっているのと同様なのである。還元された知覚に『於いて』は(即ち現象学的に純粹な体験に於いては)、吾々は該知覚の本質に何としても属するものとして、知覚されたもの其のものを見出す、そしてそれは『物質的な物』、『植物』、『樹木』、『花盛り』等々と呼ばれ得る。この**引用符**には明かに意義がある。即ちそれはあの符号変更を、即ちそれに応ずる右の諸語の根本的意義変様を表しているのである。**単に樹木というもの**の即ち自然内の物は、知覚意味として知覚に、而も不可分離的に属している所の**知覚されたものそのもの**では決してない。単に樹木というものは、焼失したり、化学的元素に分解したり等々するという事ができる。然るに意味——此の知覚の意味、即ち此の知覚の本質に必然的に属するもの——は焼失できない。それは何等の化学的元素、力、実在的特性をも有たないのである。

純内在的に且つ被還元的に体験に固有なるもの、即ち体験から引き離して、それ自身にあるが俚には考え得られなく、而も又形相的観方に於いては恰もその観方に依つて形相の中へ移つて行くものはすべて、自然及び物理学の全体から、同様に又全心理学から、深淵に依つて隔てられている——併し此の譬喩でさえも、自然主義的である故、その区別を示すには力が弱すぎる位なのである。

知覚意味は無論、現象学的に還元されざる知覚（心理学の意味に於ける知覚）にも亦属している。それゆえ茲で同時に人は、現象学的還元は有用な方法的機能——即ちノエマの意味を単に対象といわれるものから峻別して確定し、そしてそれを、（そうすると実在的に解される所の）指向的体験の心理学の本質に不可分解的に属するものと認めるといふ機能——を心理学者のために獲得してくれ得るという事をも明らかにすることができるのである。

此の場合、心理学的観方並びに現象学的観方の両方面に於いて、判然注意しているべき事は、意味としての『知覚されたもの』は知覚的に現出するものに於いて或る場合には『現実的に現出する』もの、而もそれが恰も知覚に於いて意識されているまさしくその様態、その与えられ方に於いて現出しているもの、以外には何ものをも含まない（それゆえ又『間接知見』に基づいて何ものかが該被知覚者に含まれている等と期待してはならぬ）という事である。知覚に内在する此の意味へは、**独自の反省**が何時でも向い得る。そして現象学的判断が忠実なる表出に依つて適応すべきはただ、此の反省に於いて把握されたものに対してのみなのである。

九〇、『ノエマの意味』、『内在的客観』と『現実的客観』との区別

各々の指向的体験は、知覚と同様に、その『指向的客観』を、換言すればその対象の意味を有っている——此の事こそとりも直さず指向性の基礎をなす点である。之を言い換えてだけみるならば、意味 (Sinn) sense を有つという事、或は或るものを『意念 (Sinn) に於いて有つ』 etwas "im Sinne zu haben" / "to intend to" something という事が、全意識の基礎性格なのであつて、この故に全意識は常に一般に体験であるのみならず、意味を有つ、即ち『ノエシス的な』体験であるのである。

吾々の類例分析に於いて『意味』として出て来たものが、完充 *volle / ein* なるノエマを尽くすものでない事は勿論である。此の事と対応して指向的体験のノエシスの側面は、単に本来的『意味付与』の契機——『意味』は特にこれに双関者として属する——からのみ成っているものではない。完充なるノエマはノエマ的諸契機の複合であるという事、即ち特に意味契機と呼ばれるものは完充的ノエマにあつて単に一種の必須なる**核層** *Kernschicht / core-stratum* をなすにすぎぬという事——爾余の諸契機は本質的に此の核層に基づいている、吾々はただ此の故にのみ之等諸契機をも等しく、併し意味は拡張して意味契機と称して差し聞えないであろう——は、後間もなく明らかになるであろう。

兎に角吾々は差し当つて、今までにただ一つ明らかになつた事に留まるとしよう。吾々の示した通り、指向的体験なるものは、若しそれに適当に視向を向ける場合には、それから『意味』を取り出す事のできる性質のものである事は疑いがない。此の意味を吾々に定義してくれる事情——即ち表象乃至思惟された「単に客観といわれるもの」の非現存（乃至非現存の確信）は、該表象（同様にその時々

の指向的体験（一般）からその「表象されたもののそのもの」を奪う事はできない、それ故「単に客観といわれるもの」と「表象されたもののそのもの」との両者は区別されねばならぬという状況——は、掩い得ないものであつた。此の区別は、斯く著しいものであるから、これを術語的に言い表さねばならなかつた。スコラ哲学に於いて一方『精神的』、『指向的』乃至『内在的』客観と他方『現実的』客観とを区別しているのは、実に右の区別を指すもののなのである。ところが、意識区別の最初の把握から、該区別の正しい、現象学的に純粹な確定、及び正当な評価に至る迄には、大した進行がある——然るに、調和的、結實的な現象学にとつて決定的なる此の進行こそ恰も従来嘗て遂行されたことのなかつたものなのである。決定的なる点は就中、現象学的純粹さに於いて現に眼前に在るものの絶対に忠実なる記述、及び所与を超越するすべての解釈を遠ざけるという事に存する。命名は、今の場合、既に解釈を、而も屢々甚だ誤まつた解釈を示すものである。斯くの如き誤まつた解釈は今、『精神的』、『内在的』客観という如き言葉に於いて露われて居り、そして『指向的』客観という言葉に依つて尠くとも助成されるのである。

次の事が兎角容易に言われ過ぎる弊がある。即ち、体験に於いては、指向がその指向的客観——それ自体不可分離的に指向に属し、随つて指向そのものに**実**的に内在する指向的客観——と共に与えられている。指向的客観は、それに対応する『現実的客観 *wirkliche Objekt*』が現実そのものに於いて存在してもしなくても、その間に破壊されていてもいなくても、それに拘らず、無論指向の、被思念的、表象的等なる指向的客観であり、且つどこ迄もそうなのである等々。【原著では改行】ところで、若し吾々

が此の遣口に従つて、現実的客観（外部知覚の場合には知覚されたる自然物）と指向的客観とを分ち、後者を『内在的』客観として知覚乃至体験に実的に含ましめようと試みると、吾々は、「そうすると、唯一つの実在のみが見出され且つ可能であるにも拘らず、二つの実在を相對立せしめねばならなくなる」という難点に陥るのである。物即ち自然客観は吾々は之を知覚する。例えば庭の彼処^{あそこ}に在る樹の如きである。知覚的指向の現実的客観というのは即ちそれであつて他の何ものでもないのである。が第二の内在的樹木、或は又彼処のそとに私の前に立つてゐる現実的樹木の『内部的写像』は断じて与えられていない。随つて斯くの如きものを仮説的に假定する事は、徒らに悖理に陥るにすぎない。心理学的・實在的知覚に於ける実的断片は、又ひとつの實在なるもの——他の實在者に対して写像として働くであろう如き實在者——であろう、けれども、それがそうであり得るのは、ただ或る模写意識に依るほかないであろう。即ち、此の模写意識に於いて先ず最初に或るものが現出する——これに依つて吾々は第一の指向性を有つ——、次に此の或るものは又他の或るものに對する『写像客観』として働く——これに対しては、第一の指向性に基づけられたる第二の指向性が必要である——、という事になるのである。ところが併し、同様に明瞭な事には、此の意識仕方の各々は悉く、既に内在的客観と現実的客観との區別を必要としてゐる、それ故、此の意識仕方は、構成に依つて解決さるべきであつたその当の問題を己れ自身の裡に含んでゐるのである。そのみならず、知覚に對する構成なるものは、吾々が嚮に論述した次の如き異論を免れ得ないものである。即ち、物的なるものに就いての知覚に模写機能を入れる事は、該知覚に写像意識を——これは記述的に見れば、本質的に別様に規

整されている意識であるのに——嫁する謂いなのである、というのである。兎に角、今の場合重要な事柄は、知覚に対して、随つて又各々の指向的体験に対して、模写機能を期待すると、それは、（吾々の批評からして直ちに明らかなる如く）不可避免的に無限退行を伴うものである、ということである。

斯くの如き錯誤に対抗して吾々は、純粹体験に於いて与えられたものに倚つて、それを、それが現れている正確にその通りに、明晰性の埒内に於いて受取らねばならない。そうすると、『現実的』客観は『括弧に入れ』られねばならぬ。今此の意味を勘考するに、吾々が自然的観方を執る人間として出発する場合には、現実的客観というのは彼処のそとに在る物の事をいうのである。吾々はそれを見る、吾々はそれの前に立つ、吾々は眼をそれに固定して向けた、そして吾々は、吾々がそれを空間中に吾々の対立者として其処に見出すその通りに、それを記述し、且つそれに就いて吾々の供述を行う。同様に又吾々は、それに対して評價的態度を採る。吾々が空間中に見る此の対立者は吾々に気に入ったり、或は吾々をして行為をなさしめる動機となったりする。吾々は其処に現れているものを掴んだり加工したり等々する。ところで若し吾々が現象学的還元を行うとする。すると各々の超越的指定、随つて就中知覚そのものの裡に存する指定は、夫々排去的括弧を受け、そして此の括弧は、知覚に基づけられている作用のすべて、即ち知覚判断の各々、それを基礎とする価値指定、時には又価値判断、等々にも及ぶのである。この事には次の事が含まれている。即ち、吾々は之等の知覚、判断等々のすべてを、それ等がそれ自身に於いて然る所のその本質性として観察し記述する事、即ちその本質性に関聯してか又はそれに於いてか孰れかの仕方で明証的に与えられているものを確定する事、だけは許

すが、併し吾々は、『超越的』全自然という如き『現実的』なる物の定立を使用したり或はその定立に『係わ』ったりする所の判断はこれを承認しないというのである。現象学者としては吾々は斯くの如き措定 *Setzungen / posings* をすべて差し控える。と言つても吾々は、『措定の地盤の上に立たない』、即ち措定に『係わらない』場合に措定を抛棄するのではないのである。措定は無論そこに在る。即ち現象に本質的に同時に属しているのである。吾々は寧ろ措定を眺める。措定に係わる事をせずに、吾々は措定を客観とする。即ち吾々は措定を現象の要素 *Bestandstücke / component parts* と見、知覚の定立 *die Thesis der Wahrnehmung / the positing pertaining to perception* をきろしく該知覚の成分と見るのである。

そこで吾々は一般的に——この排去を明晰な意味に把持しつつ——『還元』された全現象の裡には明証的に何が『横たわっている』のであるかと問おう。すると恰も知覚の裡には次の事が横たわっているのである。というのは、知覚はそれのノエマの意味を、即ちその『知覚されたもののそのもの』を有っている、即ち『彼処の空間中に在るあの花盛りの樹』——引用符を附けて解する——を、即ちとりも直さず現象学的に還元された知覚の本質に属する**双関者**を有っている、という事である。これを譬喩的に言えば、知覚の受けた『括弧入れ』は、知覚された現実に関する判断（即ち、変様されざる知覚を基礎とし、随つて該知覚の措定を自らの裡に取り入れる判断）を悉く阻止するものである。併し此の『括弧入れ』は、「知覚は或る現実**に就いて**の意識である」、（併し今はもう此の現実の措定を同時に「遂行」する事は許されない）、という事に関する判断を阻止するものではない。随つて此の『括弧入れ』は、特殊な仕方では知覚的に現出している此の『現実そのもの』の記述を阻止するもの

でない。(此の時此の『現実そのもの』は此の特殊な仕方によつて、例えばまさに、知覚されている現実、単に『一面的』にのみ、即ち此の又は彼の定位に於いて等々で現出している現実として、意識されている。)斯くして吾々が細心周到に注意を払わねばならぬのは、真に本質中に含まれているものの以外には何ものをも体験へ差し入れる事なく、且つこの含まれているものはそれがまさに該本質中に『横たわっている』正確にその通りに『差し入れる』ようにという事である。

(一) 上述第四三節、上卷一五五頁以下参照【「原理的誤謬の解明」以下】。

九一、指向性の最広領界も同断

上來特に知覚を採つて比較的詳細に論述した事柄は、今度は實際**指向的体験の全種類**に就いても言い得られる。還元の後吾々は、回想に於いては回想されたもののものを、期待に於いては期待されたもののものを、仮構的想像に於いては想像されたもののものを見出すのである。

これ等体験の各々には或るノエマの意味が『内存』"wohnt" "ein" / "Inherting" している。そして此の意味は——仮令それが種々異なる体験に於いて如何に親近であろう共、加之時には核部から見て如何に本質上相等しかろうとも——、種類の異なる体験に於いては必ず別種の意味である、即ち時に共通な点があつても、それは尠くともその性格を異にする、そして此の事は必然的にそうなのである。何れの体験に於いても或る花盛りの樹が問題とされるであらう。そして又此の樹が、現出しているもののものの忠実な記述が必然的に同じ言葉で以て行われるという風な仕方では現出しているであらう。

併しそれにも拘らずノエマ的関者は、知覚、想像、写像的現前化、回想等々に応じて夫々本質的に異なつたそれなのである。即ち、現出者は第一の場合には『有体的現実』^{ありてい}として性格づけられ、次の場合には仮構として性格づけられ、更に次の場合には回想的現前化として性格づけられる等々なのである。

右の如きが、知覚されたもの、想像されたもの、回想されたもの等々そのものに於いて——知覚意味、想像意味、回想意味に於いて——不可分離的なものとして、又当該種類のノエシスの体験と双関して必然的に属するものとして、我々が眼前に見出すところの性格なのである。

それ故、指向的関者を忠実完全に記述する必要がある場合には、吾々は斯くの如き決して偶然的ならざる、本質法的に統制されている性格のすべてを同時に把握して、それを厳密なる概念に依つて確定せねばならない。

これに依つて吾々の覚るのは、吾々は**完全** *vollen/fully* なる**【全き】**ノエマの内部に於いて（實際、既に吾々が予め告知した如く）**本質的に種々異なる層を区別せねばならぬ**という事である。此の層というのは、ひとつの**中心的『核』**の周囲に、即ち純粹なる**『対象の意味』**の周囲に集まつている、——即ち吾々の挙げた諸例に於いて常に、全く同一なる客観的用語を以て記述され得る（何故ならば、異種類の並行的体験中にひとつの同一者があり得たから）ものの周囲に集まつている。同時に又わかる事であるが、吾々が定立に対して遂行した括弧入れを再び撤去する場合には、意味に就いての種々異なる諸概念に対応して並行的に、**非変樣的客観性の種々異なる諸概念が区別され得るに違いない。**（『単

に対象といわれるもの』、即ち、或る場合には知覚され、他の場合には直接に現前化され、第三の場合には絵画に於いて写像的に表現されている等々の同一者は、この諸概念の中ただ一つの中心概念を指示している。吾々は兎に角姑く斯くの如き指示を以て満足する事にしよう。

吾々は意識の領界内に於いて更に猶お何ものかを顧眄^{こべん}blicken / scrutinize して、最も重要な意識仕方に就いてそのノエシス・ノエマ的構造を識ろうと試みよう。實際の証示に依つて又吾々は同時に、ノエシス、ノエマ間の基底的双関關係が**例外なく**妥当する事を、歩一步確かめて行こう。

九二、ノエシスの見地及びノエマの見地より見たる注意の変化

吾々は既に準備的諸章に於いて屢々一種の顯著なる意識変化に就いて述べた。(その意識変化はすべて他の種類の指向的出来事と交叉し、随つて独自の次元の全く普遍的なる意識構造を成している)。即ち吾々は譬喩的に、純粹我の『精神的視向』乃至『視向線 Blickstrahl / ray of its regard』という事、視向の擬向及び転向¹という事に就いて述べたのであった。これに属する現象は、吾々に対して、統一的に、全く明晰判明にはつきりわかつて来たのであった。これ等現象は、苟くも『注意』という事が論ぜられる場合には必ず、他の諸現象から現象学的に分離せずに、重要な役目を演ずる、そして之等諸現象と混じて注意の様態と呼ばれるのである。吾々は吾々として此の注意という言葉を確認し、且つ又**注意の変化**という事に就いて述べようと思う。併しこれはただ全く、吾々の明らかに区別した出来事、

i 「擬向及び転向」Zuwendungen und Abwendungen (英 adverting toward and turning away from)「振り向けおよび反らし」

並びに、次に一層詳細に記述さるべき相属的現象變化の群に關してのみのことである。

此の場合論ずるのは、一系列の理念的に可能なる變化であるが、此の變化は、ノエシ스의核とそれに必然的に属する種々異なる種類の性格的契機とを既に予想して居り、それ自身自発的には所属のノエマ的作業を變化せしめず、然も又全体験の變化を、体験のノエシ스의並びにノエマ的側面から表示するものである。純粹我の視向線は、時に此の時にあのノエシス層を通して、或は（例えば回想に於ける回想の場合の如く）此の又はあの嵌入段階^{かんにゅう}を通して、時には真直ぐ前方へ、時には反射的に進むのである。潜在的ノエシス乃至ノエシ스의客観の与えられたる全分野内に於いて吾々は、時には全体者、例えば知覚的に現在する樹木を、時には該全体者の此の或はあの部分や契機を、更には又その傍に在る物乃至多様な聯関や経過を眺める。今突然吾々が、吾々に『落想 *entfallenden / comes to mind*』する回想客観 *an object of memory* へ視向を向けるとする。すると、視向は、知覚のノエシス——それは、絶えず現出している物の世界を、多様に岐れてはいるが併し連續的に統一的な仕方で、吾々に規整してくれる——を通してでなしに、回想のノエシスを通して、回想の世界の中へ入って行き、此の世界の中を漂泊し有り、他段階の諸回想の中や或は想像の諸世界の中に移って行き等々するのである。

簡單を期するために吾々は一つの指向的層に、即ち端端的な確實さに於いて其処に存する知覚世界に留まる事にしよう。今吾々は、知覚的に意識された物、或は物的なる出来事を——恰も吾々がそれに就いての具体的全意識を現象学的持続の該当切断部に於いて、完充なる内在的本質上確定すると同時

i 「嵌入段階」 *Schachtelungsstufe* (英 *encasement-level*) 入れ子構造の段階。

に——そのノエマ的内実に関してイデーに於いて確定するとしよう。すると此の場合、此のイデーには、所属の**一定**の漂泊をなしつつある注意線の確定という事も亦含まれる。何故ならば此の注意線も亦ひとつの体験契機であるからである。其処で明らかな事は、吾々が恰も『注意及びその様態の分布に於ける単なる変化』という名称を以て呼ぶ所の確定的体験の変化仕方が可能であるという事である。これは明らかな事であるが、此の場合体験の**ノエマ**的要素はその尽でいるのである、がそれは、次の如くに一般に言い得られる限りそうなのである。即ち、「同じ対象性は、同じ現出仕方、同じ定位、同じ現出徴表に於いて現れて、絶えず有体的に定在する事をその性格とするものである。又この同じ対象性に就いては、不定なる指示及び非直観的な随伴的現前の同じ様態に於いて其々の内容要素が意識されるものである。等々」と言い得られる限りそうなのである。吾々は、並行的なるノエマ的要素を剔出比較して、下の如く言う、「此の変化は**専ら**次の事をその本性とする。即ち、比較の際或る場合には此の対象的契機が、他の場合には彼の対象的契機が『**拔擢され**』ているという事がその本性である。或は、一にして同じ対象的契機が、或る時には『**第一次的に注意された**』契機であり、別の時には、依然として現出してはいるが——『全然注意されていない』という程ではないにしても——単に**第二次的**であり、又は単に『猶おまさしく随伴的に注意されている』契機である、という事がその本性である。」と。即ちとりも直さず、注意そのものに特に属する種々の様態があるのである。此の場合、**顕在性様態**の群は**非顕在性**の様態から區別される、即ち吾々が単に不注意と呼ぶもの即ち謂わば死せる意識的所有とでもいふべき様態から區別されるのである。

他方又明らかな事は、これ等の変様は啻にノエシスの成素に於ける体験そのものの様なるのみならず、体験の**ノエマ**にも亦加わるものである、即ちそれはノエマの側に於いて——ノエマの同一核を損う事なしに——一種独特の性格づけをなすものであるという事である。注意というものを人は、物を照らす光に比するのが常である。独特の意味に於いて注意されたものは多少とも明るい光錐の中に在る。併し又それは半蔭影乃至全き闇へと推移して行く事もあり得るのである。此の譬喩は、現象学的に確定さるべき様態のすべてを夫々區別して明示するには不十分であるが、併し又それは、現出者そのものに於ける変化の特徴を示すだけの力は有っている。此の照明の変遷は、現出者に対してそれ固有の**意味**成素には変化を加えるものでないのであつて、明暗は現出者の現出仕方を変様するものであり、ノエマ的客観へ視向を向ける事に依つて見出され且つ記述され得るものである。

此の場合ノエマに於ける変様は、同一不変者に対して単なる外面的附加物が添加するという如き性質のものでないのは明らかであつて、却つて具体的ノエマが根本から変化するのである。即ち係る所は同一者の与えられ方の必要的様態なのである。

抑それにも拘らず、更に仔細に見れば、右の事情は、「その時々の様態に於いて注意的性格を帯びたノエマ的内容の**全体**（言わば**注意の核**）」は、任意の注意変様に対して、恒常的に保持さるべきものである」というのではない。然らずして、ノエシスの側面から見ならば、「或るノエシスは、注意の様態に依つて、殊には特別の意味に於ける積極的注意なるものに依つて——必然的にせよ又は一定の可能性から見てにせよ——制約されている」という事がわかるのである。すべての『作用遂行』、

『顕在的態度決定』、例えば疑惑裁定、拒否、主辞措定、及びそれに対する述定的措定等の遂行、評価及び『他のものの故にする』評価、選択の評価等々の遂行——これ等のものはすべて、我がそれに向つて態度を採るそのものに対する積極的注意を予想している。併しながら此の事は、到達範囲を増減する變化的視向の此の機能がノエシス、ノエマの双關的變様の獨特の次元を意味するものであるという事實には、何等の變化をも及ぼさない。（此の次元の体系的なる本質研究は、一般現象学の基礎的課題のひとつである。）

注意の形態は、顕在性様態に於いては、とりわけて**主観性なる性格**を有つて来る。そうすると、此の顕在性様態に依つて恰も様態化される機能、乃至此の様態をその性狀上予想する機能はすべて、此の主観性なる性格を獲て来るのである。注意光線 *aufmerkende Strahl / ray of attention* なるものは、純粹我から放射して對象的なものに終極する、即ち對象的なものに向い或はそれから転ずるものである事は明らかである。此の光線は我から離れるのではなくして、それ自身自我光線 [*Ichstrahl / Ego-ray*] であり、且つどこ迄も自我光線なのである。『客観』なるものは此の光線を蒙る。即ち目標点である。即ち又我に對して（乃至我そのものの方から）關係づけられる。が併しそれ自身『主観的』なのではない。それ故、自我光線を自らの裡に有つ所の態度決定は、我そのものの作用であつて、我は能動し或は受動し、自由であり或は制約されるのである。我——吾々は吾々自身をもちう言い表す——は、斯くの如き作用の裡に『生き』ているのである。此の生きているという事は、内容の流れに於ける何等かある『内容』の存在を意味するのではなくして、純粹我が、コギトという一般的様態を有てる或る指向

的體驗に於いて、『自由なるもの』——純粹我はこれである——として生きている際の、その多様な記述可能な仕方を意味するのである。ところが此の『自由なるものとして』という言葉の意味するのは、「自由に自身から出て行く」又は「自身へ還つて来る」という如き——即ち自発的行動又は客觀から何ものかを受ける、蒙る等々という如き——生の様態にほかならぬのである。自我光線或はコギトの外部で、體驗の流れに於いて進行するもの、それは本質的に全く別個の性格を有っている。即ち、それは自我顯在の外部に在る。が然も、既に嚮に吾々の指示した如く、それは、我の自由なる作用に対する潜在性の野である限り、我への從屬性を有っているものである。

注意の現象學に於いて体系的徹底的に取扱わねばならぬノエシス・ノエマ的主題の一般的特性叙述は以上を以て終る。

(一) 注意は現代心理学の主要題目である。現代心理学の支配的に感覺論的な性格が著しく現れている点では、此の主題の研究に如くものはない。何故かというに、注意と指向性との間の本質聯関——即ち、注意は**指向的**變様の基礎的種類以外のものでは決してないという此の基本的事実——さえも、私の知る所では、從來曾て重視された事がなかったからである。ところが、『論、研、』(該書〔第一版〕第二卷、第二研究、第二二—二三節、一五九—一六五頁〔第二版、第一卷第一冊、一六〇——一六六頁〕、及び第五研究、第一九節、三八五頁〔第二版、第一卷第一冊、四〇五頁〕の論述参照)の刊行以来は、注意と『対象意識』との聯関に於いて數言を費した人は間々あるにはある。けれども、少數の例外(テーオドル・リップス及びアレクサンデル・プフェンデルの著書を指す)を除いては、其の行論は次の事実

に對する理解の欠如を歎ぜしめる如きものである。即ち、此處に論ずる所は注意論の根本的にして最初の**第一歩**に就いてであるという事実、及び更に進んだ研究は指向性の埒内に於いて、而も直ちに經驗的研究としてでなしに、**何よりも先ず**形相的研究として行われねばならぬという事實である。

九三、高次意識領界のノエシス・ノエマ的構造への移行

以下続行する考察に於いて吾々は『高次』意識領界の構造を討究してみたいと思うのであるが、該構造に於いては、**多種のノエシスが、具體的體驗の統一にあつて堆積されて居り、随つてノエマ的雙関者も亦同様に基づけられて fundierte / founded いるのである。**何故ならば、一般に認め得られる本質法則の示す通り、**如何なるノエシ스의契機も特にそれに屬するノエマ的契機のないものはないのであるから。**

具體的完全さに於いて見た高次級のノエシスの場合にも亦、ノエマ的成素に於いて、先ず**嶄然頭を擡げる**所の中心的核が現れて来る。即ちそれは、『思念された客観性そのもの』、現象学的還元が要求する引用符をつけた客観性である。この場合にも亦此の中心的ノエマは精確に、変様された客観的成素——中心的ノエマがまさしくノエマ即ち意識されたもののものであるのはこれに於いてなのである——に於いて受取られねばならない。続いて又此の場合に人は次の事をも覺るであらう。即ち、**此の新しい種類の客観性**——と呼ぶ理由は、変様されて受取られた客観的なものは確かに意味という名称の下に、例えば意味に就いての吾々の学的研究に於ける如くに、それ自身又一つの客観的なもの

の（それは一種独特の權威を有つものではあるが）となるからである——は、その与えられ方、その『性格』、その多種の樣態を有つていたのであつて、これ等に依つてそれは当該のノエシスの體驗乃至当該の體驗性質の充實なるノエマに於いて意識されたる客観性であるのである、という事を覺るであろう。此の場合に於いても亦、ノエマに於けるすべての區別には、變様されざる客観性に於ける並行的區別が対応するに相違ないのは勿論である。

扱更に進んで、一層詳細なる現象学的研究の対象を確定すべきである。即ち、一固定種（例えば知覺）の变化的特殊化の諸ノエマに就いて、恰も此の種類そのものに依つて本質法則的に拘束されているのは何であるか、又此の分化的特殊化に依つて拘束されているのは何であるか、という事である。ところで此の拘束はすべてを貫徹している。というのは、本質の領界には何等の偶然もなく、すべては本質關係に依つて連結されているのであり、とりわけてノエシスとノエマとはそうであるからである。

九四、判断の範圍に於けるノエシスとノエマ

「基づけられたる本質 fundierter Wesen / founded essences」なる右の領界からの一例として、吾々は**述定的判断** prädicierende Urteil / predicative judgment を考察しよう。**判断作用**即ち具體的判断體驗のノエマといふのは『判断された事柄そのもの geurteilte als solches / judged as judged』である。ところがそれは吾々が普通簡単に**判断**と呼んでいるものにほかならない、或は尠くともその重要な核から見てこれにほかならない。

今、完充なるⁱⁱⁱノエマを把握するためには、ノエマは實際、それが具体的判断作用に依つて意識されたノエマである所のその完充なる「ノエマの具体性」に於いて受取られねばならない。判断された事柄を判断の主辞とされたものと混同してはならぬ。判断作用が知覚作用又はその他の端的に『測定』する表象作用を基礎として築かれる場合には、表象作用のノエマは（恰も表象的ノエシスが具体的なる判断ノエシスの本質要素となると同様に）完充的に具体的なる判断作用の中へ入つて行つてそれに於いて或る形を採るのである。表象されたもの Das Vorgestellte（そのもの）が命題上の主辞乃至賓辞等の形を採るのである。簡單を期するために今吾々は、言語的『表出』という一層高次の層は姑く措く事にしよう。右に述べた『被客観化対象 Gegenstände worüber / objects about which』、特に主辞対象 Subjektgegenstand は、**判断の主辞とされている対象である**。この対象を以て形成された全体、即ち**判断された「何」の総体**は——更にこれを精確に解して、**性格づけ**を伴つて、即ちそれが体験に於いて『意識されたもの』となつてゐる時のその**与えられ方に於いて見るならば**——、それは**完充なるノエマ的関者**、即ち判断体験の（最広義の）『意味』を形づくつてゐるものである。一層簡潔に言うならば、それは『その与えられ方の「如何」に於ける意味』——此の与えられ方がその性格として見出される限り——である。

ところで此の場合現象学的還元を看過してはならない。これは、吾々が吾々の判断体験の純粹ノエマ Das Geurteilte（英 what is judged）を dem Beurteilten（英 what is judged about）と混同されてはならない。後者を渡辺訳は『判断される場合に主題・話題となるもの』。判断と、それについて判断してゐるそれとを混同しないように。i i 『測定』する表象作用ⁱ „setzenden“ Vorstellens aufbaut（英 „positing“ objectivating）『定立的な』表象作用ⁱ。i i i 『主辞対象が判断の主辞とされる対象』では同語反復にみえるが、Subjektgegenstand は die Beurteilten である。

マそのものを獲得せんとする場合に、判断決定を『括弧に入れる』事を吾々に要求するものである。で吾々は此の括弧入れを行うとする。すると、現象学的純粹さに於いて、判断体験の充實なる具体的本質即ち今の用語に従えば**具體的に本質として捉えられた判断ノエシス**と、それに属し且つ必然的にそれと合一せる**判断ノエマ即ち形相としての『下されたる判断』**（これも亦現象学的純粹さに於いて）とが互いに対立して来るのである。

此の場合心理主義者達はあらゆる点で反感を感じる。蓋し彼等は元來、經驗的体験としての判断作用と『イデー』としての、即ち本質としての判断とを區別するを好まぬのである。吾々にとっては此の區別は最早何等の基礎づけを必要としない。けれども此の區別を承認する者でも困惑する事であろう。何故ならば彼は、此の一つの區別だけでは決して十分でないという事、及び二つの相異なる側面から見て判断指向性の本質中に存する二三のイデーを確定する必要があるという事を是非共認めねばならぬからである。就中認めねばならぬのは、あらゆる指向的体験に於ける如く此処でノエマ、ノエシスの両側面を原理的に區別すべきであるという事である。

此処で批評的に述べておくべき事は、拙著『論理学的諸研究』に於いて確定しておいた『**指向的**』**本質及び『認識的』本質**という概念の正しいのは勿論であるが、併しこれ等の概念は、それが原理上ただ単にノエシスの本質のみならず又ノエマの本質をも指す言葉と解され得る限り、なお第二の解釈をも容れ得るという事であり、又、該書に於いて一面的に論述した如きノエシスの解釈は、純粹論理学的なる判断概念（随つて、規範的な論理的ノエシス論のノエシスの判断概念に対立して、純粹普

遍学の意味での論理学が要求する概念」という考えに必要な、今問題となる解釈では決してないという事である。**判断を下す事と下されたる判断**との、既に日常語に於いて行われている区別は、正しい事柄を、即ち判断体験には**双関的に**ノエマとして単に**判断なるもの**が属している事を暗示している。

そうであるとなると、まさしくノエマこそ『判断』、乃至**純粹論理学的意味に於ける命題と解さるべきもの**となるであろう——、但し、純粹論理学が関心するのは充満なる存立に於けるノエマに対してではなくして、ノエマが**一層狭い本質**（これを更に詳細に規定するには、『論理学的諸研究』に於ける上述の試案的区別がその進路を示している）に依つて全く一定的に考えられる限り、ノエマそのものに對してなのである。若し吾々が、一定の判断体験から出発して、充満なるノエマを獲得せんとする場合には、吾々は、右に述べたように、判断『なるもの』をそれが恰も此の体験に於いて意識されている精確にその俚に受取らねばならない。然るに形式論理学的考察の方の場合には、判断『なるもの』の同一性は遙かにその範圍が広いのである。「SはPである」という明晰なる判断と、『同じ』盲目的判断とはノエマ的には異なっている。併し意味の核からいえば同一である。ところで此の意味の核のみが形式論理学的觀察にとつて専ら大切なものなのである。此の区別は、既に論及した所の、知覚のノエマと該知覚に並行なる現前化——現前化とは、知覚の場合と同じ対象を、知覚の時と精確に同様な規定内実に於いて、即ち同じ性格づけ（例えば『確かである』、『疑わしくある』等々の如き）に於いて、髣髴表象させる事——のノエマとの間の区別と同様な区別である。作用の種類は種々相異なる、猶又その他にも現象学上の諸々の区別の存する余地は広い——けれどもノエマ的「何」は同

一なのである。なお吾々は次の事を附け加えておきたい。即ち、形式論理学（普遍学中の述定的意義に関する学科）の基礎概念を成す所の右にその性格を示した判断のイデーに双関的に対立するものとして、ノエシスのイデーがある。これ即ち第二の意味に於ける『判断』、詳しくは判断作用一般として解されたる、即ち形相的であつて且つ純粹に形式に依つて規定されている普遍性に於いて解されたる『判断』である。これは、判断作用の形式的なノエシスの権理論の基礎概念である。^(二)

右に吾々が論述した事は悉く、他のノエシスの体験、例えば勿論、述定的確実性として判断作用に本質上親近な体験のすべてにも、随つて、それに対応する期待 *Anmutungen* 【察知】、推量、懷疑、拒否等に就いても当て嵌まる。此の場合此の一致は、何れの場合にも同一なる意味内実——これはただ種々異なる『性格づけ』に依つて装われているにすぎない——がノエマの中に現れる限りに及び得るのである。同じ『SはPである』が、ノエマの核として、或る確実性、可能なりとの期待【察知】、乃至推量等々の『内容』であり得る。ノエマの中には単に『SはPである』のみがあるわけではないのであつて、この『SはPである』は、それがノエマに於いて内容として取り出して考えられる通りに見て、ひとつの非独立的なるものである。それはその都度完充なるノエマが必ず有たねばならぬ変化的性格づけに於いて意識されている。即ちそれは、『確実』乃至『可能』、『蓋然』、『無』等々の性格に於いて意識されている、（これ等の性格には總じて変樣的引用符がついて居り、又これ等性格は、『可能なりと考える』、『蓋然的なりと考える』、『無なりと考える』等々のノエシスの体験契機に双関者として夫々特に附屬している）。

以上に依つて、同時にわかる如く、『**判断内容**』に就いて、同様に又推量内容、疑問内容等々に就いて二様の基本的概念が区別される。論理学者が判断内容という言葉を用ゐ、明らかに判断というノエシス概念乃至ノエマ的・論理的概念——この両つの概念の性格を吾々は嚮に示した——を（仮令かくも必要なる区別はしなくとも）指しているように使用するのは稀でない。推量、疑問、懷疑等々に於いても、判断に於けるこれら等両つの概念に対応する対概念が右両概念に（但し無論その対概念は右の両概念に対しても又、相互間に於いても一致することなしに）並行する。ところで**此處に於いて**判断内容——判断が推量（乃至推量作用）、疑問（乃至疑問作用）及びその他の作用ノエマ乃至ノエシスと同一的に共有し得る所の『内容』としてのそれ——の第二の意味が出て来るのである。

（二）ボルツァーノの『判断自体』、『命題自体』等の概念に就いてみるに、ボルツァーノが己れの創見の真の意味を自覚しなかつた事は『知識論』の叙述から推知できる。共に『判断自体』と呼び得られる如き原理的に可能なる二つの解釈——即ち判断体験に特有なるもの（**ノエシス的イデー**）とそれに双關的な**ノエマ的イデー**と——があるのであるが、この事はボルツァーノが決して覺らなかつた所である。彼の記述説明は曖昧である。客觀的方向を執れる数学者として、彼が問題としていたのは——時にはその反対を示す如き口吻もある様ではあるが（前掲書、第一卷、八五頁、メーメルMeumelの思惟論からの賛成的引用参照）——いつもノエマ的概念であつた。彼がこのノエマ的概念を念とした事は、恰も算術学者が数を念とすると全く同様であつた——即ち算術学者が目的とするのは数計算であつて、数と数意識との關係の現象学的問題ではないのである。現象学は此の論理的領界に於いて、一般の場合に然る如く、此

の大論理学者には**全く未知のもの**であつた。此の事は、残念ながら極めて稀觀の書となつたボルツァーノの『知識論』を真に研究し、加之基本的なる形相的概念の如何なる發見——現象学的には素樸なる業績——をも現象学的發見と混同する事を肯んじない人ならば、何人にも明らかなことに違ひないのである。若し此の混同を犯すとするならば、徹底すれば必ず、概念を創造する数学者の悉くを、例えば集合論の基礎概念の創見の点でゲオルク・カントールの如きを現象学者と呼び、遂には又幾何學上の基礎概念の太古無名の創始者さえをも然か呼ばざるを得ないであらう。

九五、情緒及び意志の領界に於ける類比的區別

扱上述に於けると類比的な議論が、容易に確められる如く、情緒及び意志の領界に就いても当て嵌まる。即ち適意不適意、あらゆる意味に於ける評価、願望、決意、行動等の体験に当て嵌まる。これはすべて数種の、屢々又多種の指向的成層を、即ちノエシスの成層及びそれに対応して又ノエマ的成層を含む体験なのである。

これ等に於いてはその成層構造は、一般的に言つて、全現象の最高層がなくなることがあつても、爾余のものは依然具體的に完備せる指向的体験たるに變化がないという風に出来て居り、逆に又具體的体験は新しきノエシスの全層を採り得るといふ風に出来ている。例えば、具體的表象の上層に『評価』という非独立的契機が加わり、或は逆に又それがなくなるという場合の如きである。

斯くの如き仕方では、知覚、想像、判断等々の作用がその上を全く覆う所の評価作用の層を基づけて

いるとするならば、**基づけの全体**（最高層の名に倣つて具体的評価体験と呼ばれる）の裡には**種々異なるノエマ乃至意味**が存する。知覚されたもののそのものは意味として特に知覚に属する。併しそれは具体的評価作用の意味の中へ、**該評価作用の意味**を基づけつつ、一緒に入り込んで行く。随つて吾々は次の如く区別せねばならぬ。即ち、評価作用の裡に価値ありとして存する所の対象、物、性質、事態、換言すれば、価値意識を基づける表象、判断等々の対応ノエマと、他方に於いては、価値対象そのもの、価値態そのもの、乃至それに対応するノエマ的変様、及び一般に具体的価値意識に属する完備的 complete ノエマ、とを区別せねばならない。

之を説明するために先ず第一に述べたい事は、更に一層の明瞭を期するには吾々は、価値ある対象と価値対象と、価値ある事態と価値事態と、価値ある特性と価値特性と（これ等の言葉自身にも亦失張二重の意味がある）を一層明瞭に分けておくために区別的な相対的用語を導入するのが（此の場合に於いても又これと類比的なすべての場合に於いても）好都合であるという事である。吾々は、価値ある、即ち価値性格、**価値性**を有てる単なる『事物』ということを行い、これに對立させて、**具体的価値**そのもの乃至**価値客観性** Wertobjektivität / value-Objectiveness という言葉を用いる。同様にそれと並行的に、**単なる事態** Sachverhalt / predicatively formed affair-complex 乃至**単なる事情** Sachlage / lay of things という言葉と、**価値態** Wertverhalt / predicatively formed value-complex 乃至**価値情** Wertlage / lay of values という言葉を（即ち評価作用が事態意識をその基づけの根柢としてしている場合に）用いる。価値客観性はそれの事物を内含する。即ち価値客観性は新しき客観的層として**価値性**を導入する。価値態はそれ自らの裡に

それに所属の単なる事態、価値特性、同様に又事物特性及びそれ以上に価値性を蔵している。

今又更に進んで、単なる価値客観性とノエマの裡に在る引用符をつけた価値客観性とを区別せねばならぬ。知覚されたものの真存在如何を問題とせぬ意味に於いて知覚されたもののものが知覚作用に對立すると等しく、評価作用には評価されたもののものが對立する。そしてこれも亦価値の存在（評価された物の存在及びその物の真に有価値的な事）はどこ迄も問題とされぬのである。ノエマの把握のためにはすべての顯在的措定が排去さるべきである。なお又十分注意すべき事は、評価の充なる『意味』にはその意味の「何」が、それが該価値体験に於いて意識されているその全ての充実さを伴つて、属しているという事、及び、引用符をつけた価値客観性はその俟完充なるノエマなのではないという事である。

以上行つた区別は又同様に、意志の領界に於いても行われる。

一方には、その都度吾々の行う**決意作用**がある、（それは、それが礎底として要求する所の、且つ具体相に於いて見てそれが自らの裡に包む所のすべての体験を含む）。それには多種のノエシス的契機が属する。意志措定の根柢には評価的措定、事物措定等々が在るのである。他方には、特に意志の範圍に属する一種独特の客観性としての**決意**がある、そしてこれは同種の他のノエマ的客観性に明らかに基づいたものである。吾々は現象学者として吾々の措定のすべてを排去する。すると又現象学的に純粹なる指向的体験としての意志現象には、その『**意欲**されたものそのもの Gewolltes als solches / *willed as willed*』が**意欲に固有なるノエマ**として残る。これ即ち『**意志思念** *volition-meaning*』なる

ものであつて、これは、これが充ちたる本質に於ける此の意志に於いて『思念 Meinung / meaning』となつてゐる精確にその俛の姿に於いてであり、且つ又意欲され且つ『それを目指して』意欲されてゐるものの全部を伴つてゐる。

今吾々は『思念』と言つた。此の言葉は、恰も『意味 Sinn / sense』及び『意義 Bedeutung / signification』という言葉と同様に、今あらゆる場合に使用の必要を迫られるものである。扱**思念作用** (Meinen oder Vermeinen) the meaning or intending to には**思念** die Meinung / the meant が、**意義作用** dem Bedeuten / signifying には**意義** die Bedeutung / the signification が対応する。然るにこれ等の言葉は総じて、転化のため甚だ多くの曖昧さを帯びてゐる——そして、厳密に学問的区分を行うべきこれ等の双関的層への移入に由来する曖昧さをも尠からず帯びてゐる——、それ故、これ等の言葉に就いては出来るだけ用心するが好いのである。今吾々の考察は、『指向的体験』なる本質類の最広範囲に行われてゐる。ところが『思念作用 Meinen / Meaning 【私念】』という言葉は普通は更に狭い領界に限られてゐる、(併し此の領界は同時に、更に広い領界の現象の底層たるの働きをしてはゐる)。それ故、術語として此の言葉(及びこれとの姉妹語)が使用され得るのはただ此の狭い方の領界に対してのみである。広い範囲を表すためには確かに吾々の新しい術語及びそれに添えた実例分析の方がより有効である。

九六、以下諸章への導き、結語

ノエシス(即ちノエシスの成素を強調した意味での具体的に完備せる指向的体験)とノエマとの区

別を一般的に剔出するに當つて吾々はあれほど慎重な注意を払つたのであつた。その理由は、此の區別を把握熟知する事は現象学にとつて極めて重大なる意義のある事であり、加之現象学の正しき基礎づけにとつて絶対に決定的であるからである。これは一見自明の理を云々しているように見える。即ち如何なる意識も或るものに就いての意識であり、諸々の意識仕方は甚だしく相異なっているという自明の理を云々しているように見える。けれども更に詳細に見て、吾々は非常な困難を感じたのである。困難とはノエマの在り方の了解、即ちノエマは体験の裡に如何に『横たわつて』いるか、且つ体験に於いて如何に『意識』されているかというその仕方、に就いてである。とりわけ殊に困難なのは、実的要素として体験そのものの所属なるべきものと、ノエマの所属なるべきもの即ちノエマに固有なりとして帰せらるべきもの、との明確な區別に關してである。更に續いては、ノエシスとノエマとの並行的構造を正しく整頓する事も亦余程困難である。吾々が既に表象及び判断に對する此の種の區別の諸章を成功し終えたとしてさへも——此の區別はそれ等諸章に於いて始めて現れ、此の區別に對して論理学は、価値はあるが併し決して十分でない予備研究を提供するにすぎぬ——情緒作用の場合に判断と並行的なる區別を、啻に要請し主張するのみでなく真に明らかに与えられしめるためには、若干の労苦と克己とを必要とするのである。

ただ単に前進的省察を行うにすぎぬ事情にある今に於いては、現象学の諸部分を体系的に詳論するのは今の課題ではあり得ない。がそれにしても、今迄よりも一層深く事象の中へ入つて行つて右の如き体系的研究の端緒を立案するという事が、吾々の目的上必要である。かくする事は、ノエシス・ノ

エマ的構造を、現象学の問題及び方法に対するその意義が明らかになり得る迄闡明するために必須である。現象学の豊穡さ、現象学の諸問題の大きさ、現象学の遣口等に就いての内容豊富な概念を獲られるのはただ、諸々の範囲に漸次実際に踏み入つて、それに属する問題の広さを明らかにする場合にのみ可能である。ところで、それ等範囲の各々に実際に踏み入つて、その範囲が確固たる研究地盤と感じられるのは、専ら、現象学的取捨闡明の遂行に依るものであつて、これに依つて此処に解決すべき諸問題の意味も亦始めて明らかになり得るのである。此の遣方を堅く遵奉して吾々は、以下続行する分析及び問題証示を、既に一部は今迄のそれを行つた如くに行おうと思う。取扱われる材料が初心者には如何に多様に映じようとも、然も実は吾々は狭い領界だけを守っているのである。吾々が、現象学入門に比較的理解し易いもの、及び、体系上の幹線を辿り得るに絶対に必要なものを選び出すのは当然である。すべてが困難である。すべてが「特に現象学的な」本質直観の所与への骨の折れる精神集中を必要とする。現象学への、随つて又哲学への、『王者の途』はない。あるのはただ、現象学固有の本質が指し示す**唯一**の途だけである。

最後になお次の注記をしておきたい。吾々の論述に於いて現象学は**新興**の学なる事が示されている。此処に試みた分析の成果の中幾何が終決的であるかは、将来を俟つて始めて明らかにされ得る。上來吾々が記述したものの多くは確かに、永遠の相の下に於いて (sub specie aeterni) は、別様に記述されねばならぬであろう。けれども一つ吾々がそれに向つて努力してよろしい、又努力せねばならぬ事がある。即ちそれは、吾々が吾々の視点から、又極めて真面目な研究に従つて、

実際に見る所のものを、毎歩忠実に記述するという事である。吾々の態度は、必ずしも最捷徑しやうけいならぬ未踏の途に於いて出合うものを用意深く記述する所の、世界の未知の地方の探検家のそれである。時と事情とに應じて供述されねばならなかったものと、見たものの忠実な表現なるが故に——仮令新研究のため、多種の訂正を伴う新記述を必要とするに至るにしても——引き続いてその価値を保有するものとを、供述しようという確固たる自覚が彼の心を満たしている筈である。同様な心持を以て以下吾々も、現象学的形態の忠実な叙述者でありたく、猶お又吾々自身の記述に対しても内的自由の習慣を警戒する事にしたいと思う。

第四章 ノエシス・ノエマ的構造の問題に就いて

九七、実的な体験契機としてのヒュレー的契機とノエシス的契機、非実的な

体験契機としてのノエマ的契機

前章に於いて吾々は、ノエシス的なものとノエマ的なものとの區別を導入するに方^{あた}つて、**实的分析及び指向的分析**という言葉を用いた。吾々は此の点を承けて議論を始めようと思う。現象学的に純粹なる体験はそれの实的成素を有っている。簡單を期するため吾々は最低段階のノエシス的体験に局限しよう。即ちそれ故、種々堆積的に築かれたノエシス的層のためその指向性が複合的となつてゐる（吾々が思惟作用、情緒作用及び意志作用に於いて確認した如く）のでないノエシス的体験に局限することにしよう。

その例として引きたいのは例えば感性的知覚の如きである。即ち例えば、丁度今庭を眺めながら吾々が有つてゐるところの樹木の端的知覚の如きである。此の時吾々は、彼処のあの樹を意識の統一に於いて熟視している。その樹は或る時は靜かに立つて居り、又或る時は風に揺らぐように見える。そして吾々が絶えず熟視しつつそれに対する吾々の空間的位置を——例えば窓へ歩み寄るとか、單に首を回らしたり眼を転ずるとか、同時に又眼の調節を増減したり等々するとかして——變更する限りでも亦、非常に相異なる現出仕方で見れる。こういう仕方での**一つの知覚の統一**も非常に多様な変様をそれ自身の裡に含み得る。此の変様を吾々は、自然的觀方を採る觀察者としては、時に現實的客觀に該

客觀の變化として歸し、時には吾々の實在的な心的・物的主觀 psychophysical subjectivity に対する實在的にして且つ現實的な關係に歸し、最後には此の主觀そのものに歸する。ところで茲で記述する必要のあるのは、吾々が『純粹內在』に還元する場合に右の中で現象學的剩余として殘留するものは何であるか、又その際純粹體驗の**實的成素と呼ばれ得るものは何であるか**、そして然らざるものは何であるかという事である。此の場合十分はつきりさせておく必要のある事がある。それは、知覺體驗の本質にはそれ自身の裡に『知覺された樹そのもの』が含まれている、即ち樹そのものと全世界との實在性の排去に影響されぬ充實なるノエマが含まれているというのは成程事實であるが、併し他面に於いて、引用符をつけた『樹』を有つ此のノエマが知覺に**實的に含まれざることは現實の樹と同様である**という事である。

純粹體驗としての知覺の裡に吾々が**實的に見出すもの**——即ち恰も部分、断片、乃至断片として取り出すことのできぬ契機が全体の裡に含まれている如くに知覺の裡に含まれているもの——は何であるか。吾々は斯くの如き眞の、即ち**實的なる成分を既に屢々材料的成分及びノエシス的成分という名稱の下に取り出した**。吾々はこれ等をノエマ的成素と對照させよう。

樹幹の色は、知覺的に意識された色としてのみ見るに、吾々が現象學的還元以前に（尠くとも『自然的』人間として、物理學的知識の混入以前に）現實的樹木の色として受取つた色と精確に『同じ』である。扱此の色は、括弧の中へ入れられて、ノエマに属している。が併し此の色は**實的成素として知覺體驗に属するものではない**。仮令吾々は知覺體驗に於いても亦『色の如き或るもの』——即ち『感

覚の色」、即ちノエマ的乃至『客観的』なる色がそれに於いて『射映』するその具体的体験のヒュレ一的契機——を見出すとはいへ。

ところが此の場合感覚の色の連続的多様に於いて射映するのは一にして同じきノエマの色である。それゆえ此のノエマの色は、可変的知覚意識の連続的統一に於いて、同一の、それ自身に於いて不変の色として意識されている。眼の置方、相対的方位が多種に変化し、視向が断えず幹や枝の上を彷徨しながらも、又同時に吾々が更に近寄つて行つてそのため種々なる仕方では知覚体験を流動させながらも、吾々は色の点で——その、即ち樹の色の点で——不変なる樹を見る。吾々が感覚反省を——即ち射映に対する反省を——行うならば、吾々はその射映を明証的所与として把握する。そしてその射映とそれに対応する対象的契機とを吾々は、観方や注意方向を変更しつつ、完全なる明証さに於いて関係させることもでき、その契機に対応する対象的契機として認め、そして同時に又直ちに、例えば或る一定の「物の色」に属する諸射映色が右の一定の「物の色」に対する関係は宛も連続的『多様』が『統一』に対する関係と同様な事を知ることができるのである。

加之吾々は、現象学的還元の遂行に依つて、次の如き普遍的本質洞観を獲得するのである。即ち、樹なる対象が一般に或る知覚に於いて、それが該知覚に於いて現出している通りに客観的に規定されたる樹として現出し得るのは、ヒュレ一的契機が（若し又連続的知覚系列の時ならば——ヒュレ一の連続的变化が）恰もそれであつて他でない**その場合にのみ**可能であるというのである。随つて此の事には次の事が含まれている。即ち、知覚のヒュレ一的内実の変化は悉く、若しそれが知覚意識を全然廃棄

するのでないにしても、尠くとも次の如き結果を有たざるを得ないという事である。即ち、その現出者は或る客観的に『別の』現出者——それはそれ自身に於いて別なるにせよ、乃至その現出の定位仕方が別なるにせよ、等々——となる、という結果である。

以上に依つて又全く疑いがない事がある。それは、此処に於いて『統一』と『多様』とは全然異なる次元に属するという事、即ちヒュレー的なものはすべて具体的体験に**実的**成素として属し、それに反して、多様者としての体験に於いて『現示するもの』、『射映するもの』は**ノエマ**に属するという事である。

扱ところで材料は、嚮に既に吾々の述べた通り、ノエシスの契機に依つて『*besetzt / animated*』される。即ち材料は（我はそれにでなく対象に向つてゐるのに）吾々が反省に依つて恰もその材料に頼り又その材料を以て把握する所のその『把握』、『意味付与』を受けるのである。此の点に関して直ちに以下の帰結が生ずる。即ち、啻にヒュレー的契機（感覚の色、感覚の音等々）のみならず、それ等を生化する把握も——随つて**両者が一つになったもの**、即ち色、音、その他あらゆる対象性質の**現出**も——体験の『**実的**』成素に属するのである。

扱かくて一般に以下の様に言う事ができる。即ち、知覚はそれ自身に於いて**その対象**に就いての知覚である、そして『客観に』向けられた記述が対象に於いて取り出す成分の各々には知覚の**実的**成分が対応しているというのである。但し茲ではつきりさせておかねばならぬのは、この事は、対象が**此の知覚**そのものに於いて『そこにある』**その通りに終始忠実に対象を記述する**限りに於いてである

という事である。凡てこのノエシスの成分は吾々は之を単に、ノエマ的客観及びその諸契機に助けを藉りてのみ言い表すことができる。随つて例えば、樹の幹、幹の色等々に**就いての意識**——詳しくは知覚意識——というように言うことができる。

併しながら吾々の考究が他面に於いて示した所に随えば、ヒュレー的成素とノエシスの成素との体験の实的統一は、『それに於いて意識されている』ノエマ成素の統一とは全然別の統一であり、且つ又、前者の体験の实的成素のすべてを、それを通し又それに於いてノエマとして意識に現れて来るものと合一させる所の統一とも別の統一である。材料的体験の『基礎の上に』ノエシスの機能に『依つて』『**先験的に規整されたもの**』は『与えられたもの』であり、そして吾々が体験及びそのノエマ的に意識されたものを純粹直覚に於いて忠実に記述する場合には**明証的に**与えられたものであるという事は成程事実である。けれどもそれは、体験の实的なる、随つて本来的なる規整要素とはまさに、全く別個の意味に於いて体験に属するものである。

現象学的還元と、同様に又純粹なる体験領界とを『先験的』と呼ぶ事の根拠はとりも直さず次の点に存する。即ち、吾々は此の還元によつて材料とノエシスの形式との絶対的領界を見出すという事(この材料と形式との一定種の交織には、しかしかに与えられた「規定された」乃至「規定され得べき」もの——これは意識そのものに対しては対立者、原理的に他なるもの、非実的者、超越者である——の此の驚くべき意識的所有が、**内在的な本質必然性上**、属している)、及び、超越者に就いての客観妥当的認識 *objektiv gültiger Erkenntnis / an objectively valid knowledge* の本質と可能性とに関する極めて深い

認識問題のただ一つ考え得る解決に対する源泉が此処に在るという事である。『先驗的』還元は現實に關してはエポケーを行う。ところが此の還元が現實の中から取り残しておくものにはノエマ（と共にノエマそのものの中に存するノエマ的統一）が属し、随つて又實在的なものが意識そのものに於いて恰も意識され且つ明細に与えられるその仕方が属している。茲に問題となつてゐるのは専ら**形相**的な、随つて絶対に必然的な聯関に就いてであるという事を識るならば、それに依つて研究上広大な分野——即ちノエシス的なものとノエマ的なものの、意識体験と意識双関者との本質關係の分野——が展開されて来る。所で後者の（即ちノエマ的なもの乃至意識双関者という）本質名稱は、意識対象性そのものと、同時に又被思念性乃至所与性のノエマ的な「如何に」の形式とを包括する。吾々の実例範圍に於いて先ず第一に出て来る普遍的明証事は、知覚は対象の空虚なる現前所有ではなくして、『己れの』対象を所有し且つそれを**何等か或るノエマ的成素**——これは『同じ』対象に就いての別の知覚に対しては毎時別ではあるが併し常に本質上指定されたそれである——の統一として所有する事が知覚の固有的本質に（『先天的』に）属している、換言すれば、その時々、客觀的にしかじかに規定された対象の本質には、如上の記述的性質の知覚に於いてこそノエマの対象であり且つ此の知覚に於いてのみそうであり得る等々という事が属している、という事である。

九八、ノエマの在り方、ノエシスの形式論、ノエマの形式論

抑なお重要な補足が必要である。先ず第一に十分注意せねばならぬのは、或る現象がその現象その

ものを実的に分析する反省へか、或はその現象のノエマを分解する全く別種の反省へ移り行くという事は、必ず、新しい現象を産み出すものであるという事、及び、若し吾々が或る点で旧現象の改造である所の此の新現象を旧現象と混同して、旧現象に实的乃至ノエマ的に含まれるものを新現象に帰するならば吾々は誤謬に陥るであろうという事である。それゆえ例えば、「射映する色彩内容の如き材料的内容が、それが分析的体験に存すると丁度同様に知覚体験に存する」等と言おうとするのではないのである。唯一点だけ述べてみるならば、材料的内容は、知覚体験に於いては、实的契機として含まれてはいたが併し知覚されていたのではない、即ち对象的に把握されていたのではない。然るにそれは分析的体験に於いては对象的である、即ち知覚体験の場合には存しなかつた所のノエシスの機能の目標点なのである。此の材料は更にこれ以上諸々の示現機能を帯びてはいるが、併しこの機能も亦本質的变化（無論別次元のそれ）を受けたのである。此の事はなお後になつて論ずるであらう。明らかに此の区別は現象学的方法にとつて本質的に問題となるものである。

以上の注記を終えて吾々は、吾々の特殊主題に属する次の諸点へ吾々の注意を向ける事にしよう。先ず第一に、各々の体験はその性質上、それ及びその实的成分、方向を逆にしても同様にノエマ——例えば見られたる樹そのもの——へ視向を向け得る原理的可能性が存立するようになってゐるものである。扱此の「ノエマへの」視向設定に依つて与えられたものは、成程それ自身、論理的に言つて、対象ではある、が併し全然**非独立的**なる対象である。その**存在**(*esse*)は只管その『**被知覚**』(*percipi*)に尽きる——但し此の命題は決してバークレの意味では言われ得ない、何故ならば、此処では無論被

知覚は存在を実的成素として含むのではないから。

以上は勿論之を移して形相的なる觀察仕方に就いても言われ得る。即ち、ノエマの形相はノエシス的意識の形相を指示する、換言すれば両者は**形相的に相属する**。指向的なるものそのものは何であるかと云うに、それは、それに就いての意識たる（しかじかの**性質の**）意識の「指向的なるもの」としてなのである。

併しかく非独立的なるにも拘らず、ノエマはそれ自身として觀察され、他のノエマと比較され、その可能なる形態変化如何が研究され、等々出来る。人は**ノエマの普遍的且つ純粹なる形式論を立案**できる。それに対しては、**ヒュレー的成分と「特にノエシス的」な成分とを含む具體的なノエシス的体験の普遍的にして且つ等しく純粹なる形式論が双關的に対立する**であろう。

勿論これ等兩つの形式論は、言わば**映像**の如くに相互關係をなすものでも、又單なる記号變更に依つての如くに相互に移行するものでも、（例えば吾々が吾々のノエマNに『Nに就いての意識』を代置するという風に）、**決してない**であろう。此の事は言うまでもなく、吾々が嚮に物の**ノエマ**に於ける統一的性質と可能的なる物の知覚に於ける該性質のヒュレー的な射映の多樣との相属性に關して論述した事から既に歸結する。

ところでこれと同一の事が、「特に**ノエシス的**」なる契機に就いても亦当て嵌まるに違いないように思われるかも知れない。とりわけ人は、ヒュレー的与件——例えば色彩与件、觸覚与件等々の如き——の複合的多樣をして一にして同じき客觀的な物の多樣的射映という機能を獲得せしめる所のそ

の機能を指摘するかも知れない。實際、材料自身に於いてその本質上、客觀的統一への關係は一義的に指定されているわけではなく、却つて同じ材料的複合が多様な、聯絡なく相互に飛躍する把握——それに随つて種々異なる對象性が意識される——を受け得るものであるという事に注意しさえすれば宜い。この事に依つて既に「体験契機としての生化的把握そのものの裡に本質的區別が存して、射映——該把握はこの射映に随い、且つ又それはこの射映の生化に依つて『意味』を規整する——と共に分化 differenzieren する」という事が明らかにするではないか。斯くして人は以下の如き結論を導くかも知れない。即ち、ノエシスとノエマとの間には成程並行が存してはいるが、併しそれは、形態が両者の側面に於いて、且つ又両者の本質上の相応に於いて、記述されねばならぬような並行である。彼等の云うところに依れば、ノエマ的なものは統一の野であり、ノエシス的なものは『規整作用ある』多様の野である。多様なものを『機能的』に合一して同時に統一を規整する所の意識は實際、ノエマ的雙関者に於いて『対象』の同一性が与えられる場合の同一性をば決して示していない。例えば、物の統一を規整する或る持続的知覚の種々異なる切断が、或る同一的なもの、即ち此の知覚の意味に於いて不変なる此の一本の樹を——その樹は或る時は此の方位に於いて、又或る時はあの方位に於いて、或る時は前面から、又或る時は背面から、何等か或る部分の視覺的に把握された性質に就いて言えば最初には不明瞭且つ無規定的に、次には明瞭且つ規則的に、等々、というように現れつつ——示す場合、その場合には、ノエマに於いて見出される対象は文字通りの意味に於ける同一的对象として意識されている、けれどもその対象に就いての意識はその内的持続の種々異なる切断に於い

て非同一的な意識、即ち單に結合されたる、連續的に合一的な意識なのである。

以上述べた所に於いて如何に正しい事が含まれているにせよ、然も右に導出した結論が全然正当であるとはいえない——仮令これ等難問に於いて兎に角最大の注意が払われているにしても。此処に存する並行——その中には、極めて容易に混淆され易い**若干の並行**がある——は、大きな、且つなお甚だ闡明を要する難点を含んでいる。吾々は、具体的なるノエシスの体験即ちそのヒュレー的契機を籠めたる体験と、ノエシスの契機の單なる複合としての純粹なるノエシスとの間の區別を、慎重に注意せねばならぬ。更に又吾々は、充ちたるノエマと、例えば知覚の場合ならば『現出している対象そのもの』とを、どこ迄も區別せねばならぬ。吾々が此の『対象』及びその対象的『賓辭』のすべて——常態的な知覚そのものに於いて現實的として指定された「知覚された物の賓辭」のノエマ的諸変様——をとってみると、この対象及びこの賓辭は、規整的な意識体験（具体的ノエシス）の多樣なるに対して無論統一をなしている。けれどもそれは又**ノエマの多樣の統一**でもあるのである。これは吾々が、今迄不当にも等閑に附した所のノエマ的『対象』（及びその『賓辭』）のノエマ的性格づけを注意の圈内に入れるならば、直ちにわかる事である。それ故、例えば、現出している色は、**ノエシス**の、特に上の如きノエシスの把握性格の、多樣なるに対して、統一をなしている事は慥かである。けれども、更に詳細に研究するならば、これ等性格の變化のすべてには、仮令其処に引き続いて現出している『色自身』に於いてではなく共、その色の變化的な『与えられ方』に於いて、例えばその色が現出している時の『私に対する方位』に於いて、**ノエマ的並行者**が対応しているという事がわかつ

て来る。そこで一般に、ノエマ的『性格づけ』の中にはノエシス的性格づけが反映しているのである。**如何に**してそういうことが起るかという事、この事が今度は——そしてこれは単に此処に例として選んだ知覚領界に対してばかりでなしに——包括的分析の主題とならねばならない。で吾々は、多様なノエシス的性格を有する種々異なる意識を順を追つて分析し、そしてそれをノエシス・ノエマ的並行の点から見て仔細に探究して行こう。

ところで吾々が前以て銘記しておかねばならぬ事がある。それは、**ノエマ的に斯く斯くと『思念された』対象の——即ち『意味』に於ける対象の——統一と、規整的意識形態との間の並行**（『物の秩序及び関係対觀念の秩序及び関係』 *ordo et connexio rerum-ordo et connexio idearum*）は、**ノエシスとノエマとの並行——殊にノエシス的性格とそれに対応するノエマ的性格との並行という意味に解してのそれ——と混同されてはならぬという事である。**

以下これから行ふ考察は此の後者の方の並行に就いてなのである。

九、ノエマの核と、現前及び現前化の領界に於けるその諸性格

斯くて吾々の課題は、ノエシス的事件とノエマ的事件との兩つの並行系列に於いて示されたものの圏域を著しく拡大して、完充なるノエマ並びに完充なるノエシスに到達するという事である。吾々が今迄特に——無論未だその中に如何なる大問題が伏在するかという予想もなしに——注目して来たものは、まさしくただ或る中心的核にすぎず、その上一義的に規定された核ですらないのである。

先ず第一に吾々の想い起すのはあの『対象の意味』の事である。即ち嚮に吾々が異種の表象のノエマ即ち知覚、回想、写像表象等々を比較した結果、総客観的用語を以て記述さるべきものとして、加之都合よく選択された極端の場合——即ち、全然同様な、同様の方位をとれる、あらゆる点で同様に把握された対象、例えば一本の樹が、知覚的、回想的、写像的等々に示現するという場合——に於いては相互に同一の用語を以て記述さるべきものとさえして、生じたあの『対象の意味』の事である。現出作用の同一的な『客観的』「如何」を有つ同一的な『現出している樹そのもの』に対して、直観の種類に應じて、又その他の表象仕方に随つて変化するところの『与えられ方』の相違が存続する。この同一的なものは或る時は『**原的**』に、他の場合には『**回想的**』に、又別の場合には『**写像的**』に等々と、意識される。ところでそれと同時に、『**現出している樹そのもの**』に於ける諸性格が現れているのであるが、これ等はノエマ的双関者への視向擬向 *Blickrichtung*【目ざし向け】に依つて見出されるのであつて、体験やその実的成素への視向擬向に依つては見出され得ない。即ちその時示されているのはノエシスの契機の意味の『**意識の仕方** *Weisen / modes*【諸様式】』ではなくして、**意識されたもの自身乃至そのものが現れる仕方**である。言わば『イデエールなるもの *Ideellen / ideally inherent*』に於ける性格としてそれは自身『イデエール』であつて実的でない。

更に精細に分析を行う時は、人は、上に実例として挙げた諸性格が一つの系列に属するものでない事を認めるであらう。

一方には**再生的変様**、即ち**自己固有の本質上**——慥かに注目すべきことであるが——**他者の変様と**

して現れる所の端的現前化がある。現前化するものは、それ固有の現象学的本質から云つて、知覚を遡示するものである。例えば過ぎ去れるものへの回想は、既に嚮に吾々の述べた如く、『知覚したことがある』という事を内含している。それゆゑ回想に於いて、或る仕方では、『対応的』知覚（同じ「意味の核」に就いての知覚）が意識されてはいるが、然も現実的にそれの中に含まれてゐるのではない。回想は、まさしくそれ固有の本質上、知覚『の変様』である。これと**双関的に**、「過ぎ去つた」という性格を有つものが、それ自身に於いて、『現前的であつたことがある』として、随つて、『現前的』——それは変様されざるものとしてはまさに知覚の『原的』乃至『有体的に現前的』である——の或る変様として現れて来る。

他方に於いて、**写像化**の変様は別の変様系列に属する。それは『写像』に『於いて』現前化する。写像は、併し、原的に現出しているものであり得る。例えば吾々が知覚的に把握する『描かれたる』写像の如きである（これは物なる絵、即ちそれに就いて例えば「それは壁に懸つてゐる」等と言われるようなそれではない）。然るに写像は、吾々が回想乃至自由想像に於いて写像表象を有つ場合に於ける如く、再生的現出者でもあり得る。

同時に人は、此の新系列の性格は第一の系列のそれに**退帰的に關係してゐるのみならず**、又複合を予想してもいるという事を認めるであらう。此の複合を予想しているという事は、『写像』と『模写されたもの』との間の、意識の本質にノエマ的に属する区別を顧みての事である。これに依つて又人

i i 「遡示」 weist zurück auf 'Wahrnehmung' (英: refers back to perception) 渡辺訳 「知覚」といふものに逆に関係づけられて
i i 「退帰的に關係」 ersten zurückbezogen (英: are related back to the first series) 渡辺訳 「逆に関係づけられ」

は、此の場合ノエマは常に、相異なる表象客観そのものに属しはするが併し相互に指示し合う所の一對の性格を自身の裡に藏するという事を知るのであらう。

最後に、**記号表象**は、右と類比の**記号 Zeichen と記号されたもの Bezeichneten**との対立に依つて、右とよく似てはいるが然も新しい型の変樣的なるノエマ的性格——それには、例に依つて、並行的なるノエシス的性格が対応する——を吾々に示してくれる。それ故この場合にも亦、表象複合と、ノエマ的なる**対客観 Objekthaben**にあるノエマ的に相属的なる性格の**対**——記号表象としての表象複合に固有なる統一の双関者として——とが現れるのである。

なお又人は次の事をも認めるであらう。即ち、『写像』は、写像たるの意味に随つて、それ自身に或るもの**の変様**——その或るものは此の変様がなければとりもなおさず有体的な乃至は現前化された自体として其処に在るであらう——として現れるのであるが、丁度それと同様に『記号』も亦——但しそれはその仕方で——同様に或るものの変様として現れるというのである。

(一) 上述第九一節、一二六頁以下参照【指向性の最広領域も同断以下】。

(二) 此の区別に就いては後述第一一二節、一九〇頁以下参照【デュラーの銅版画以下】。

一〇〇、ノエシス及びノエマに於ける、表象の本質法則的段階形成

今迄取扱つて来た表象変様の型のすべては、絶えず新しい段階形成に到達できる。それは、指向性がノエシス及びノエマに於いて**段階的に累積**するか、或は寧ろ独特の仕方**で相互に嵌入し合う**、とい

う風にして到達するのである。

端的現前化即ち、知覚の端的変様というものがある。ところが又、**第二、第三及び本質上任意の段階の現前化**というものもある。その例としては吾々は、回想に『於ける』回想を挙げることができる。回想に於いて生きつつ吾々は、現前化の様態に於いて或る体験聯関を『遂行』する。此の事を吾々は次の事に依つて確める。即ち、回想に『於いて』反省し（この反省は又この反省で原的反省のひとつの現前化的変様である）、そこで体験聯関は回想的なる『嘗て体験された』として性格づけられているのを知る、という事に依つてである。それ故、かく性格づけられた体験をしつつある間に、吾々がそれを反省してもしなくても、回想も亦、『嘗て体験されたことのある回想』として性格づけられて現れることができ、随つてそれを通じて視向は第二段の「回想されたもの」に向けられていることができる。第二次的に変様された体験聯関に於いても亦再び回想が現れることができ、かくして理念的に無限に考えられ得る。

単なる記号変更（その特性は後に至つてなおわかつて来るであろう）に依つてこれ等の出来事は**すべて、自由想像なる型へ移され、想像の裡に想像が生じ、かくて任意の嵌入段階に於いて想像が生ずる。**更にこれ等のものの**混合**も亦同様である。各々の現前化はその本質上、その直下段階に就いてい**えば、知覚の現前化変様を自身の裡に蔵している**（知覚は現前化に於ける不可思議なる反省というものに依つて把握的視向の裡に入つて来る）。そのみに止まらない。吾々は現前化現象の統一に於いて知覚の現前化と**並んで**同時に又、回想、期待、想像等々の現前化——それ等の場合該現前化そのも

のは回想、期待、想像等々諸型の孰れでもあり得る——をも亦見出すことができる。以上はすべて異なる段階に於いて同様である。

此の事は**模写的表象**や**記号表象**という複合型に就いても亦言い得られる。高次段階の表象の中から、甚だ錯雑ではあるが而もわかり易い表象形成をもっている一例をとつてみよう。或る名称は、称呼することに依つて、ドレスデンの画廊と吾々が最後に其処を訪れた事とを回想せしめる。即ち吾々は場内をぶらぶらと通つて行つたり、或る画廊を描いたトゥニエの絵の前に立つたりするのである。更に又、その描かれた画廊に在る絵には又絵が描かれて居り、後者の絵の方には又読みとれる署名がしてある、等々というような事を付け加えるとする。すると吾々は、把握可能なる対象性から見て、如何なる表象交入や如何なる間接性が実際に将来できるかを考量するのである。けれども、**本質洞観**、とりわけ相互嵌入の任意的続行の理念的可能性への洞観の例としてはこれほど複雑な場合を必要とするわけではない。

一〇一、段階の性格、種々異なる『反省』

己れの組成中に反復された現前化変様を含む如き段階成体のすべてに於いては、**それに対応する段階形成のノエマ**が規整される事は明らかである。第二段の模写意識に於いては、『写像』はそれ自体に第二段の写像として、即ち写像の写像として性格づけられている。吾々が、昨日若い頃の体験を回想したという事を回想しているとすれば、この『若い頃の体験』というノエマはそれ自体に、第二段

の「回想されたもの」という性格づけを有っている。以下すべてこの通りである。

各々のノエマ的段階には**段階性格**が属する。それは、各々の「性格づけられたもの」がその段階に属することの由つて以て明らかになる如き一種の指標としてである、——仮令此の「性格づけられたもの」が他の点では第一次客観であるにせよ、乃至は何等か或る反省的視向擬向 *Blickrichtung / regard*【目ざし向け】の裡に横たわる客観であるにせよ。何故ならば、**各々の段階には言う迄もなくそれに於ける可能的反省が属する**からである。それゆえ例えば、第二段の回想段階に於いて回想された物に就いて言えば、同じ段階に属する（随つて第二段階に於いて現前化されている）「恰も右の物に就いての知覚」に対する反省があるからである。

更に、各々のノエマ的段階は、次いで来る段階の所与『**に就いての**』『表象』である。併し此処に所謂『**表象**』とは表象体験の意味ではなく、又『**に就いての**』というのも此処では意識と意識客観との關係を指すのではない。それは言わば**ノエシ斯的指向性に対するノエマ的指向性**である。前者は後者を意識双関者として自身の裡に懷いて居り、そしてその指向性は或る仕方でノエマ的指向性の線を通つて行つてゐる。

此の事は、吾々が注意的な自我視向を意識の対象者に向わしめておくならば、一層明瞭になるであろう。そうしておくとその自我視向は、段階序列を成しているノエマを**通つて**行つて——遂に最終段階の客観に達する、此の客観は自我視向が通つて行かずに固定するものである。ところが視向は又**段階から段階**へと漂泊して、それ等のすべてを通つて行くことをせず却つて各段階の所与に固定的に向

けられることもできる、そして此の事は『直進的』視向擬向に於いてか或は反省的視向擬向に於いて行われる。

嚮の例で言うならば、視向はドレスデンの画廊の段階に留まることができる。即ち吾々は『回想に於いて』ドレスデンを、又画廊の中を散歩するのである。次に吾々は、これも亦回想の範囲内で、絵画觀賞に耽り、随つて今度は吾々は写像世界にいたのである。次には第二段の写像意識に於いて、描かれた画廊に向つて、吾々はこの美術館の描かれた絵を眺める、或は又吾々はノエシスを段階的に反省する等々である。

相互に関係し相互に基づいている多様な指向性はこの多様な可能的視向擬向を本質的に受け得る。それで吾々がこれと類比的なる基づけを見出す場合には必ず——以下に於いて吾々は猶お多くの全く別種の基づけを知るのである——これと類比的なる「**移り変る反省の可能性**」が現れて来るであろう。

此の間の事情が、学問的に徹底的なる本質研究を如何に多く必要とするかは言うを俟たない。

一〇二、性格づけの新次元への移行

現前化に依る変様の形態多様な範囲に於いて吾々の遭遇した独自の性格づけの**すべて**に就いて、吾々は明らかに、且つ又既に示した根拠に基づいて、ノエシス的なものとノエマ的なものとを區別せざるを得ない。ノエマ的『対象』——写像客観或は模写された客観、記号の働きをする客観及び

記号された客観（夫々に属する『の写像』、『模写された』、『の記号』、『記号された』等の性格づけを**度外視して**）——は、明らかに、体験に於いて意識されているが併し体験を超越した統一である。そうであるとするならば、該対象に**あつて**意識的に現れ且つ右対象への視向設定 *Blickensstellung / focusing the regard* に依つて**その**特性として把握されるところの諸性格は、実的な体験契機とは見做され得ない。実的な体験要素であるものと、それに於いて非実的な者として意識されているものとの両者が相互に如何なる関係にあるうとも、又此の両者が如何に困難な問題を伴おうとも、吾々はあらゆる場合に右の両つを区別せざるを得ないのである。而も、ノエマの核、即ちノエマ的諸『性格』の其の時々の所持者として現れる『指向的对象そのもの』（その『客観的』な与えられ方に於いて見て）に就いても、又性格そのものに就いても、区別せざるを得ないのである。

ところで、常にノエマの核に附着する所の右の如き諸性格の中にはなお全く別個のものがあり、又、それ等諸性格がノエマに属する仕方にも甚だ異なるものがある。それ等は**根本的に異なる類に**、言わば根本的に異なる**次元の性格づけ**に属する。此の場合予め言つておくべき事は、此処で示さるべき、或は既に示したところの性格の**すべて**（それは全く、必須なる分析記述的研究を示す名称である）は、**現象学的全範囲に及ぶ**という事である。仮令吾々が、『表象』という一定にして基礎的な概念に依つて包括され、且つ他のすべての指向的体験に対して必須なる根柢をなす所の比較的最簡単な構造の指向的体験を特に選んで先ず第一に研究するにしても、右の性格の基礎的類や種差は、此の基づけられた体験のすべて、随つて**指向的体験一般のすべて**に於いても存するのである。此の場合事情は、ノ

エマの核即ち『対象ノエマ』は、常に且つ必然的に意識されているのであって、それは是非どうか性格づけられて居らねばならぬ、即ち各々の類から出るこの又はあの（これ等の方は互いに他を除外し合う）種差の点で性格づけられて居らねばならぬ、という事になっている。

一〇三、信性格と存在性格 Glaubenscharaktere und Seinscharaktere / Belief- & Being-

扱今度は吾々は新しい性格を捜してみる。すると吾々は先ず第一に、嚮に扱つた性格群には、明らかに全く別種なる**存在性格**が結びつくという事に気がつく。ノエシス的な、即ち存在状態に双関的に関係せる性格——『**信憑的**ⁱ **性格**乃至『**信性格**』——は、直観的表象の場合には、例えば常態的知覚の裡に『覚認 Gewahrung』として実的に含まれている「知覚の信」の如きであり、更に詳しくは言わば「知覚の確実性」の如きであつて、これには、現出している『客観』の側でノエマ的双関者として存在の性格即ち『**現実的**』というそれが対応している。『**確実**』なる再現前化、即ち嘗て在りしもの、今在るもの、将来在るであろうもの（それは未来回想の期待に於いて）に対する各種の『**確かなる**』回想も、此の同じノエシス的乃至ノエマ的**性格**を示す。即ちそれ等は**存在を『措定** *setzende*』する作用、『**措定的** *metrische*』作用である。併し此の作用 *Aktus* という言葉を用いる場合注意すべき事は、此の語は或る働きを、即ち特別な意味に於ける「態度決定」を指すが、今此の意味だけは姑く別にしておきたいという事である。

i *doxische* (英 *doxie*) ドクサ (臆見、主観的信念、感覺的知覚) 「信憑」と訳すのは信にたるに傾いた意に取っている。

知覚的乃至回想的に現出しているものは、今迄考察した領界に於いては、単に『現実的』に存在するという性格——が又それは他の存在性格に对照させれば『確実』に存在するという性格とも呼ばれ得る——を有つていた。なんとなれば何者此の性格は変様ができるから、或は同じ現象に於いて顕在的変様に依つて変化され得るからである。『確実』なる信という仕方は、単なる期待乃至推量或は疑問乃至疑惑という仕方へ移つて行き得る。そこで移つて行つた時は、現出者（それは又、性格づけのあの第一の次元から見て『原的』『再生的』等々として性格づけられている）は、夫々の場合に從つて、『可能的』、『蓋然的』、『疑問的』、『疑惑的』という存在様相を採つてしまうのである。

例えば、知覚された対象は最初には、端的なる自明性に於いて、即ち確実性に於いて、其処に在る。ところが突然吾々は、吾々は単なる『錯覚』に囚われているのではなからうか、見られたるもの、聞かれたるもの等々は『単なる仮象』ではなからうかと、疑惑的になる。換言すれば、現出者は依然その存在の確実性を保つてはいる、併し吾々は何等か或る性状複合の点で不安である。あの物は人間かと『期待される』。すると又反対の期待が生じて来る。森が暗いので動いている人間に似て見えるがあれは樹が動いたのかも知れない。そこで今度は、一方の方の『可能性』の『重量』が著しく増して来る。即ち吾々は、『矢張りあれは確かに樹だったのだ』というような風に確定的に期待して、その方の可能性に賛成する。

回想に於ける存在様相もこれと同様に、或は一層遙かに屢々、変換する。即ちその仕方は、全く絶对的に知覚乃至不明表象の埒内で、創始し交代するのであつて、特別な意味に於ける何等か或る『思

惟』の関与を伴うこと——乃至概念や述定的判断を伴うこと——がないのである。

同時に覺られることであるが、所属の諸現象はなお多種の研究を暗示し、なお多種の性格(例えば『**決定的**』、可能性の『**重量**』、等々の如き)が此処に現れ、そして、とりわけ、その時々々の性格の本質的根柢に対する問題、即ちノエマ及びノエシスの本質法則的に統制された構造に対する問題が一層深い研究を要求するのである。

今は、例に依つて、**問題の群**を明らかにした事で吾々には十分である。

一〇四、変様としての信憑的様相^{ドクサ}

抑、吾々が特に問題としている一系列の信様相に就いてなお指摘しておきたい事がある。それは、**変様という言葉の**、既に特記した所の、**特に指向的なる意味**、即ちノエシスの乃至ノエマ的性格の嚮の系列の分析に於いて吾々が明らかにした意味が、この一系列の信様相に於いて再び生きて来るといふ事である。此の系列に於いては信の確実性が、変様されざる、換言すれば**信の仕方の『様相化されざる』**——と此処では呼ぶべきであらう——**原形式** *Urform / primal form* の役を演ずる事は明らかである。これに対応してその双関者に於いては、**単なる存在性格**(ノエマ的なる、『**確実**』乃至『**現実的**』にある)という事は、**すべての存在様相の原形式**としての働きをなす。此の原形式から湧き出るすべての存在性格——**特に存在性格** *Seinscharaktere* と呼ぶべき存在様相 *Seinsmodalitäten*——は、實際、それ固有の意味で原形式への退帰的關係 *Rückbeziehung / a relation back to* 【逆に関係づけ】を有っている。『**可能的**』

という事は**それ自身に於いて**『可能的である』と同じ意味であり、『蓋然的』、『疑惑的』、『疑問的』というのは『蓋然的である』、『疑惑的乃至疑問的である』と同じ意味である。ノエシスの指向性は此のノエマの關係に於いて反映している。それゆえ人は又、『**ノエマ的指向性**』を率直に**ノエシ的**——にして且つ本来的に指向性と呼ばれる——**指向性の『並行者』**なりと称せざるを得ぬ事を感じるであらう。

斯くて此の事は移して以て完充⁽¹⁾な『**命題**』⁽²⁾ *Sätze / posita*』即ち意味の核と存在の性格との統一に就いても当て嵌められる。

なお又、存在様相という用語は此の存在性格の全系列に適用するが便利である。随つて変様されざる『存在』をも亦——苟くもそれが**此の系列の項**と見做さるべき場合には必ず——此の用語を以て包括するが便利である。それは宛も算術学者が一をも亦数なる名称を以て包括するのと似ている。同様な意味に於いて吾々は、**信憑的様相**という言葉の意味を拡張して、此の語を——加之屢々意識して二重の意味を与えてノエシ的とノエマ的との並行を総括する意味に解するであらう。

更に進んで、様相化されざる存在を『確実である *gewiß sein*』と解する場合に、『**確実 *gewiß***』という言葉の曖昧なるに注意せねばならない。而もそれは単に、この語が時にはノエシ的なる『**確実である**』⁽³⁾ *【確信している】*』を意味し、時にはノエマ的なるそれ『**確実である**』を意味する点で曖昧であるというに止まらない。此の語は更に又、例えば肯定の双関者即ち『然り』を『否』の対応者としても『**非ず**』

i 「命題」 *Satz* (複 *Sätze*)、英訳では *proposition* であるが広い意味で使われるとき、女性形 *posita* 中性形 *positum*

の対応者としても表出するという事さえもできる、（此の点でこの語は甚だ混乱的なのである）。斯くの如き曖昧は今の場合、飽く迄も厳に除却せねばならない。語義は、論理的に直接なる等値の域内で絶えず推移するものである。併し吾々の任務は、等価性を全般的に取り出して、概念は等価的でもその背後に在つて本質的に異なる所の諸現象に存するものを截然と分解するにある。

深い意味に於いて、信の確實性とは単に信といわれるものである。信の確實性は吾々の分析に依れば實際、一樣に信——乃至『判断』（併しこの語を使う事は往々甚だ不適当である）——という名称の下に解される多様な作用に於ける極めて顕著な特殊位置である。此の特殊位置を参酌して確實性と他の信様態との習慣的同一視への聯想を悉く払拭する所の、特別の言葉が必要である。吾々は、吾々の取り出したすべての『信様相』の指向的退帰関係性 Rückbezogtheit を適当に表す所の原信 Uriglaube / primal belief 乃至原信憑 Uridoxa / protodoxa なる用語を導入する。なお附け加えておきたいが、此の語（乃至『信憑の様相』^{ドクサ}）をば吾々は、原信憑^{ウルドクサ}の本質を基礎とする指向的变化のすべてを表すためにも、又以下の分析に依つて新しく取り出さるべき諸転化を表すためにも用いるであらう。

『信』（乃至『判断』）という類は確實性、推量等々に於いてただ分化するだけであるとして、それは宛も加之、丁度感官性質という類に於いて色、音等々が等級的種であると等しく、同位的種の一系列を（よし人がその系列を何処で中断するにしても）指すかの如く説く根本的謬論は、吾々の見る所では最早殆んど批評を要しない。その外に、吾々の現象学的確証の帰結を辿る事は、例の如く此処に

i "Glaubensgewissheit ist schlechthin" (英 "Belief-certainty is beliefsimpliciter") 「信念確實性とは信念自体なのである」

於いても断念せざるを得ない。

(一) 吾々の異常に拡張した意味に於ける『Satz』(『命題』、『措定』) という概念に就いて、更に詳しくは第四篇、第一章に於いて論ずるであろう、二五六頁以下【『理性と現実』以下】。

一〇五、信としての信様相、存在としての存在様相

上述の極めて顕著なる事情を中心として指向性——第二次的様態はこれに依つて原信憑^{ウルドクサ}に退帰的に関係 *zurückbeziehen* 【逆に関係】する——を論ずるならば、此の論述の意味の上から、一般に高次段階指向性の本質に属する種類の重複的視向擬向 *Blickrichtung / directions of regard* の可能なる事が必要である。此の可能性は事実存立している。吾々は一方に於いて、例えば蓋然性意識(推量)に耽りつつ、蓋然的であるものに心を向ける事ができる。が又他方に於いては、蓋然性自身乃至そのものに、即ち推量ノエシスが賦与する性格に於いてのノエマ的客観に心を向ける事もできる。ところで、意味成素を有ち且つ右の蓋然性性格を有てる『客観』は第二の視向設定に於いては存在的として与えられている。即ち随つて、その客観に就いて意識は変様されざる意味に於ける端的信である。これと同様に吾々は、可能性意識(期待)に、或は又疑問、疑惑に——その際可能的、疑問的、疑惑的として吾々に意識されているものに視向を向けて——耽る事もできる。が又吾々は、可能性、疑問性、疑惑性そのものに心を向けて、時には意味客観に於いて、『可能的である』、『疑問的である』、『疑惑的である』という事を表明的に把握、述定する事も出来る。此の場合にはその客観は変様されざる意味に於いてあると

して与えられているのである。

斯くて吾々は一般に、次の如き極めて顯著なる本質固有性を確認し得るであろう。即ち、各々の体験は、『指向的客観そのもの』に就いて該体験のノエシスに依つて規整されるところのノエマ的契機^{ウルドクサ}のすべてに關して、**原信憑**という意味に於ける**信意識**としての働きをなすという事である。換言すればこれは又次の如くにも言い得られる。即ち、

新しきノエシスの性格の附加の各々、或は旧性格の変様の各々は、啻に新しきノエマ的性格を規整する許りでなく、恰もそうする事に依つて又、意識に**対して新しき存在客観**が規整される。ノエマ的性格には意味客観に於ける述定可能なる性格が、単にノエマ的に変様されているのでない現実的な客位語として対応する。

以上の命題は、吾々が新しきノエマ的領界を熟知し了えた場合には、一層明晰になつて来るであろう。

一〇六、肯定と否定並びにそれ等のノエマ的雙関者

更に又、新しき退帰關係的 *rückbezügliche / retrorelated* 変様、即ち、各種の信様相への本質的な指向的退帰關係 *Rückbeziehung / relation back to* の【志向的に逆に関係づけられている】故に時に高次段階的である変様は、**拒絶**並びにそれに類比的な**同意**である。更に特殊的に言えば**否定**と**肯定**とである。各々の否定は或るものに就いての否定であつて、此の或るものは吾々に何等か或る信様相を遡示 *zurück / refers us*

back to する。それ故ノエシス的には、否定は何等か或る「Positionⁱ」の『変様』である、Positionとは肯定という意味ではなく、何等か或る信様相の広義に於ける『措定 Setzung』という意味である。

否定の新しいノエマ的作業は、それに応ずる措定的性格の『抹殺 Durchstreichung』【取り消し線を引くこと】である。即ち否定特有の双関者は抹殺性格即ち『非』という性格である。此の抹殺の否定抹線は、措定的なるものを、更に具体的にいえば、『命題 Satz / posium』を貫通する。但し此の貫通は該命題特有の『**命題性格**』即ちその存在様相の抹殺に依るのである。まさに此の事に依つて、此の性格及び命題自身は他の**その『変様』**として其処にある。別言すれば、端的なる存在意識がそれに対応する否定意識へ転化することに依つて、ノエマに於いては『**存在的**』という端的性格から『**非存在的**』という性格が出て来るのである。

右と類比的に、『可能的』、『蓋然的』、『疑問的』からは、『不可能的』、『非蓋然的』、『非疑問的』が出て来る。そして此の事に依つて全きノエマ即ち全き『**命題**』（具体的なるノエマ的充実 Fülle に於いて見たるもの）が変様される。

不定^マ『否定』は、譬喩的に言えば、抹殺するのであるが、それと恰も同様に肯定は『傍線を引く』【アンダーライン】。即ち肯定は**措定を**（否定の如く『廃棄』せずに）『同意しつつ』『裁可』する。これも亦、抹殺変様と並行して、ノエマの変様の一系列を示している。併し此の事は此処では更に進んで追窮するを得ない。

i Positional を「措定的」と訳しているのは Setzung との区別のため「措定」と訳していない。渡辺訳は「設措定」

上来吾々は、純粹我の『態度決定』の特性に就いてはこれを措いて問わなかったのであるが、純粹我は拒絶——此処では特に否定的拒絶——に於いては、拒絶されるもの即ち抹殺さるべき存在に**對抗して『向かつて』**いる。同様に肯定に於いては純粹我は肯定されるものに**傾き、それを目指して向つ**ている。右の事情の此のような記述的側面も亦等閑に附してはならぬのであつて、独自の分析を必要とするのである。

更に又、指向性の交錯に應じて夫々の場合に種々異なる視向擬向が可能であるという情状をも等しく考慮に入れねばならない。吾々は否定意識に耽る事ができる。換言すれば否定を『遂行』する事ができる。此の場合には即ち、我の視向は抹殺を蒙るものに向けられている。が又吾々は視向を把捉的視向として抹殺されたもののものに、即ち**抹線を附せられたもの**に向ける事もできる。此の場合にはそのものは**新しき『客観』**として其処にあり、而も其処に**端的なる信憑的^{ドクサ}原樣態に於いて、『ある』**として其処にあるのである。新しき観方は新しき存在客観を産出するのではない。例えば拒絶の『遂行』に於いても拒絶されたものは被抹殺性という性格に於いて意識されているのである。けれどもその性格がノエマ的な意味の核の**述定可能的規定**となるのは新しき観方に於いて初めて可能なのである。この事は無論肯定に対しても同様である。

それゆえ此の方面に於いても亦現象学的本質分析の諸課題が存在する^(二)。

(二) 上述諸章に於いて試みた信憑的^{ドクサ}現象の本質に関する説明を基礎として、アドルフ・ライナハ【Adolf Reinach, 1883-1918】の犀利なる論文『否定判断論に於いて』(Münchener Philos. Abhandlungen, 1911)を省察し、

そして該論文の問題を吾々の観方に移して究明するならば、得る所が多いことであろう。

一〇七、反復されたる変様

上述の如き分析の冒頭以来吾々が既に獲得した所を以て、直ちに、以下述べる如き洞観の進歩を完成するに十分である。

如何なる被否定者及び被肯定者そのものも存在客観である故に、それは、存在様態に於いて意識されているもののすべてと等しく、肯定乃至否定され得る。随つて、各歩毎に新しく行われる存在規整の結果、**反復的変様の理念的に無限なる連鎖が生ずる**。斯くて第一段階に於いては、『非・非存在的』、『非・不可能存在的』、『非・非疑問存在的』、『非・非蓋然存在的』等々が存するのである。

これと同様な事が、直ちに観取できる通り、嚮に論じた存在変様のすべてに就いても亦言われ得る。或る事が可能的 *möglich*、蓋然的 *wahrscheinlich*、疑問的 *fraglich* 等々であるという事は、それ自身が又可能性、蓋然性、疑問性等の様態に於いて意識される事ができる。即ちノエシスの形成にはノエマ的存在形成が対応するのである。即ち例えば可能的である、蓋然的である、疑問的であるという事が可能的であり、『また』可能的である、蓋然的であるという事が蓋然的であつて、此のような事はすべての複合に於いて当て嵌まるのである。次に又一層高次段階の形成には被肯定者及び被否定者が対応し、これ等は再び又変様可能であつて、斯くして無限に至ると考え得るのである。此処に論じているのは決して単なる言葉の上の繰返しに就いてではない。この事は、可能性及び蓋然性が常に考量され、否

定され、疑われ、推量され、問題とされ、確定され等々する所の公算論及びその応用を想起しさえすれば明らかである。

ところで常に注意すべき事がある。というのは、変様という事を言うがそれは此処では、一面に於いては現象の可能的転化、随つて可能的なる顕在的操作に関するものであり、他面に於いては、遙かに興味の深いノエシス乃至ノエマの本質固有性に（その固有本質に於いて、且つ又他のもの、即ち変様されざるものに戻して解釈する如き生起の随伴的顧慮を聊かも含まずに）関係するのである。併し両方面に於いて共に吾々は純粹に現象学的なる地盤の上に立つのである。何となれば、転化乃至生起という事を言つても、それは此処では現象学的なる本質の出来事に関するのであつて、毫も自然事実としての経験的体験を指すのでないからである。

一〇八、ノエマ的性格は『反省』に依る規定性にあらず

吾々は、吾々が明らかに識るに至つたノエシス及びノエマの新しい群の各々の場合に、心理主義的な思考習慣に甚だしく反する所の以下の如き基本的認識を新に又確かめることが必要である。その認識とは即ち、ノエシスとノエマとの間こそは、忠実なる記述の要求する精確にその通りに、真真正正に區別せねばならぬという事である。既に人が純粹に内在的な本質記述に通曉して（この事は、他の場合には記述を称揚するような人の多くも中々成功し難い）、各々の意識に対し指向的客観が、該意識所属の内在的に記述され得るものとして帰属するという事を承認したとしても、ノエマ的性格、

とりわけ今考察したそれを、**単なる『反省に依る規定性』**と解しようとする誘惑は矢張り大きいのである。指向的客観が**意識仕方** *Bewußtseinsweisen*——指向的客観が恰も意識客観であるのはこれに於いてである——に退帰的に關係されるという事に依つて指向的客観の取得する規定性、——それは何を意味するかという事を、吾々は反省の常用狹義的概念【流布している見方】を念頭に置いて理解しよう。

そうすると、被否定者 *negatum* 【否定された事柄】、被肯定者 *affirmatum* 等々というものが生ずるのは、判断対象は否定作用に対する關係的反省に於いては否定されたる対象として、肯定作用に対する反省に於いては肯定されたる対象として、推量作用に対する反省に於いては蓋然的対象として性格づけられる（その他すべて準之【之に準ずる】）という事に依るといふ事になる。が、これは單なる構成であつて、此の構成の悖理なることは、若し仮りにこれ等の賓辭が實際單に關係的な反省賓辭にすぎぬとすれば、それ等はまさしく、作用面に対する顯在的反省に於いてのみ、又作用面へ關係させてのみ、**与へられ得る**ということになるという点に既に現れている。然るにこれ等の賓辭は斯くの如き反省に依つて与えられるのでないことは明らかである。吾々は、直接に視向を恰も双關者に向けて、双關者固有の事象如何を把握する。吾々は、現出している対象そのものに於いて、被否定者、被肯定者、可能者及び疑問者等々を把握する。この場合吾々は、決して作用を顧みない。逆に、斯くの如き反省に依つて生じたノエシスの賓辭は、決して今問題となつてゐるノエマ的賓辭と同様な意味を有つてはいない。これと關聯して、**真理**の立場からしても亦、非存在 *Nichtsein* は『**妥当的に否定されている**』と、可能在 *Möglichkeit* は『**妥当的に可能なりとされている**』と、明らかにただ單に等価的なのであつて同

一ではない。

自然的な、即ち何等心理学的先入見に依つて迷わされざる言説も亦、若し必要とあれば、吾々のために証言してくれる。吾々は、実体鏡 stereoscope を覗きながら、此の現出しているピラミッドは『無』である、単なる『仮象 Schein / semblance』であると言う。換言すれば、現出しているものそのものは特定の明らかなる主辞であつて、吾々はそれ（それは物のノエマであつて決して物ではない）に、吾々がそれ自身に於いて性格として見出すもの——即ちまさしく無という性質——を帰するのである。此の場合人はただ、現象字に於いてはいつもそうであるように、現象に於いて真に諦視さるべきものを、転釈することをせずに、それが現れている恰もその通りに受取つて、それを正直に記述するという勇氣を有たねばならない。すべての理論はこの記述に準ずべきものである。

（一）『論、研、』第二卷（第一版）、第六研究、第四四節、六一一頁以下（第二版、第二卷、第二部、一三九頁以下）参照。

一〇九、中性変様 Neutralitätsmodifikation

信の領界 Glaubenssphäre に加えらるべき変様の中、吾々はなお一つ極めて重要な変様を挙げねばならない。それは全然隔離された位置をとるものであり、随つて上に論じた変様と決して同一列に置くを許されないものである。今此処で吾々が此の変様に一層詳細な考察を下すならば、この事の正しいと

i "wirklich zu Erschauende" (英 "really to be seen in") 渡辺訳「本当に観取されるべきもの」

いうことは次の事実によつて証明される。即ち、此の変様が信措定 *Glaubenssetzungen* に対する關係の独特なる仕方と、及び此の変様は一層深い研究によつて初めてその固有性——決して特に信の領界にのみ属する意識変様ではなく、却つて極めて重大な**普遍的**意識変様であるということ——が明らかになるという事情とに依つて証明されるのである。其の他に又、吾々の猶未だ有たない一種の眞の信変様 *Glaubensmodifikation / belief-modification*——今問題となつている新変様はこれと混同され易い——を論ずる機会が将来あるであらう。それは即ち仮定 *Annahmen / assumption* という変様である。

今吾々が問題とする変様は、それが加えられるあらゆる様相を或る仕方ですべて全然廃棄し、全然無力にするものである——が併しこれは否定とは全く別個の意味に於いてである。蓋し否定は更に一步進んで、吾々の見た通り、被否定者に於いてその積極的作業を、即ち自身又存在である或る非存在を有つてゐるのである。中和性変様は抹殺しない。それは何等『作業』しない。それはすべての作業の意識的対応者である。即ちすべての作業の**中和化**なのである。此の中和化は、「作業を差し控える」、「作業を作用の外に置く」、「作業を『括弧に入れ』」、「その俚にされてあらしめ」斯くて『その俚にして』有つ」、「作業の中へ」「這入つて考える」即ち「作業されたものを、それと『協同して働く』事なしに『単に考える』」、という事の各々の中に含まれてあるものである。

従来此の変様は学的に決して明らかにされたこともなく、随つて又術語として確定されたこともなく（従来人は此の変様に触れた場合には必ず他の変様と混同した）、且つ又一般用語に於いても此の変様を表す一義的な名称は欠けていた。それ故吾々は此の変様は之を、除去ということに依つてただ

限定漸進的にのみ表し得るだけである。何故ならば、今仮りに此の変様を表すために纏めてみた言い表しは、皆意味に冗長な所があるからである。孰れの場合にも或る随意的行為が——その様な事は全く問題とさるべきでないのに——同時に示されている。それ故吾々はその行為を除去するのである。此の行為の結果は孰れの場合にも或る固有の内実を有っている。此の内実は此の行為に『由来』する（その事も亦勿論ひとつの現象学的与件ではあろう）。併し此の内実は、此の事から離れてそれ自身に觀察される事もできる。蓋し右の如き随意的行為が無くても、此の内実は体験聯関に於いて無論可能であり且つ實際現れているからである。かくして吾々は「その俟にされてあらしめる」という事からすべての意志的なものを排去して、然も又それを疑わしきもの、乃至は仮説的なものという意味には解しない。そうすると、何等か或る『その俟にして』有つという事、或は更に適切には『現実的に』でなしに其処に在りとして意識されている或るものが『其処に在る』のを有つという事が、残存する。措定性格は無力になつてゐる。それゆえ信は最早厳密には信でなく、推量も厳密には推量でなく、否定も厳密には否定でなく、其他準之。それは『中和化されたる』信、推量、否定等々であつて、これ等の双関者は変様されざる体験の双関者を繰返してはいるが、併し根本的に変様された仕方では繰返してゐるのである。即ち、単なる存在、可能存在、蓋然存在、疑問存在、並びに又非存在、及びその他の被否定者乃至被肯定者の各々——これ等は意識にとつて其処に在るのであるが、併し『現実的』という仕方に於いてではなく、『単に想われたもの』として、即ち『単なる思想』として在るのである。それ等は皆変様の『括弧』をつけていたのであつて、これは、嚮に吾々があれほど屢々

論じたところの、又現象学の開拓に非常に重要であるところの括弧と極めて近いものである。単なる措定 (Setzungen) Postings、即ち中和化されざる措定は、総じて『存在するもの Seiendes / what exists』として性格づけられている所の『命題』(《Sätze》) posita を、双関成果として有っている。可能性、蓋然性、疑問性、非存在 Nichtsein、及び「然り在り」Jasein——これ等はすべて自体に或る『存在するもの』である。即ち、その双関者に於いては『存在するもの』として性格づけられて居り、意識に於いては『存在するもの』として『思念 vermeint / intended to』されている。ところが中和化された措定は、これと次の点で本質的に区別される。即ち**中和化された措定の双関者は措定可能なるもの、実際に述定可能なるものを含まない**、中和的意識はそれの被意識者に対して如何なる点から見ても『信 Glaubens / believing』なる役目を演じない、という事である。

一一〇、中和化されたる意識と理性の判決、仮定作用

茲に實際、意識の比類なき固有性が存するという事は、本来の、即ち中和化されざるノエシスはその本質上『**理性の判決**』を免れぬのに、**中和化されたノエシスにとっては理性非理性の問題は無意味である**ということに徴して明らかである。

それと双関的に、この事は**ノエマ**にとつても亦同様である。存在的(確實的)、可能的、推量的、疑問的、無的等々としてノエマ的に性格づけられているものは、夫々、『妥当的』乃至『非妥当的』にその性格づけられてあり得る。即ち夫々『**真実**に』、可能的に、無的に、等々にあり得る。それに反して、

単に想うということは何ものをも『**措定**』しない。即ちそれは何等の**措定的意識**でもない。現実性、可能性等々に就いての『**単なる思想**』は何ものをも『**要望** präntiert / claims』しない。即ちそれは正しとして承認さるべきでもなければ、又正しからずとして拒否さるべきでもない。

勿論単なる想うという事はすべて**仮定作用** Annehmen 即ち**推定作用**に移され得る。そして此の新しい変様は（まさに想うという変様と同様に）、限りなく自由に随意に行い得るものである。けれども、**推定作用** (Ansetzen) は又**措定作用** (Setzen) の如きものであり、**推定** (Ansatz) は又一種の『**命題**』(**措定**) (《Satz》) である。ただ異なる点は、それは**信措定**に対する全く独自の、即ち上に論じた主要系列に分離対立する所の変様だという事である。此の変様は、理性に依つて判断の主辞とさるべき**措定の統一の中へ項として**（該変様の**推定**が**仮言的**『前件 Vordersatz』乃至後件として）這入り込み得、随つて又理性の評価さえをも受け得る。正しいとか正しくないとか言われ得るのは、単に其処にある思想に就いてではなく、無論**仮言的推定**に就いてなのである。思想と**推定**との両者を混同し、単なる『**想い**』乃至**単なる思想**を論ずる場合に存する曖昧さを看過するのは根本的誤謬である。

此の外なお又、同様に人を迷わす曖昧がある。それは「**想う**」という言葉に、それが次の如くに使用される点に於いて存在するものである。即ち、或は**表明的**、**理解的**、且つ**表出的**なる**思惟**という特別な領界、即ち特有な意味に於ける論理的**思惟**に適用され、或は吾々が今丁度考えている如くに何等表明や理解的**述定**を問題とせぬ所の**措定的**なるものそのものに適用される点に於いてである。

i 「**推定作用**」 Ansetzen 或 An-setzen へ、渡辺訳「**論題提起的定立作用**」、同じく An-satz 「提起された論題・発端」

上に論じた事柄はすべて、吾々が先ず第一に選んだ領界、即ち単なる感性的直観及びその不明表象への転化という領界に於いて見出されるものである。

一一一、中和性変様と想像

ところで、『単に想う』という言葉の危険な曖昧さがもう一つ問題となる。換言すれば、甚だ陥り易い混同、即ち**中和性変様**と**想像**との混同を防止せねばならない。此の場合、混乱的で且つ實際容易にその混乱を解き難いというのは次の点に存する。それは、想像そのものが實際ひとつの中和性変様であるという事、想像はその型が特殊なるにも拘らず普遍的意義を有っている、即ち**すべての**体験に適用できるという事、想像は大抵の想いの形態の場合にも働いて居りながら然も同時に、多様な——すべての種類の指定に随う——形態を有てる普遍的な中和性変様から区別されねばならぬという事である。

更に詳しく述べるならば、**想像作用**は一般に『**指定的**』**現前化** *Vergegenwärtigung / presentation* の、随つて考え得る最広義の回想の、**中和性変様**である。

此処で注意すべき事は、普通の用語では**現前化**（再生）と**想像**とは混用されているという事である。これ等の言葉の吾々の用法としては、吾々は吾々の分析を顧慮して、**現前化**という普遍的な言葉を、それに属する『**指定**』が本来的なそれか中和化されたそれかという点は示さぬようにする。次に**現前化**一般は二つの群に分たれる。即ち各種の**回想**と**その中和性変様**とである。それにも拘らず此の区

別は眞の分類とは見做され得ない。この事は後に至つて明らかになるであらう。

他方に於いて、各々の体験一般（各々の言わば現実的に生き生きとした体験）は『現在の存在する』体験である。その本質にはそれに対する反省の可能という事が属しているのであつて、この反省に於いてそれは必然的に、確実的且つ現在の『存在する』として性格づけられている。それゆえ各々の体験には、各々の原的 *originally* に意識されている個別的存在にと等しく、可能的と考え得る回想変様の一列が対応する。体験に就いての原的意識としての体験作用には、それに就いての回想が可能的双関者として対応し、従つて又回想の中性変様として想像が対応する。この事は各々の体験に於いてそうなのであつて、純粹我の視向方向の如何を問わない。以下これが説明に役立たしめるために述べてみよう。

吾々が何か或る対象を現前化したとする——直ちに又吾々は、それは単なる想像界であつて吾々は注意して此の想像界に向つてしていると仮認しよう——、そうすると必ず、次の事は想像意識の本質に属するものと云う事ができる。印ち、此の想像界のみならず、此の世界を『与える』知覚作用も亦同時に想像されているというのである。吾々は此の世界に向つて、けれども『想像に於ける知覚作用』（即ち回想の中性変様）に向うのは、吾々が、既に述べたように、『想像に於いて反省する』場合に限られる。ところで基礎的な意義のあるのは、何時でも可能なりと考え得られる此の変様——即ち各々の体験（又想像的体験自身さえも）を、精確にそれに対応する単なる想像、乃至それと同じものである中和化せられたる回想へ移す所の変様——を、各々の『措定的』体験に対立せしめられ得る

所のその中和性変様と混同しないという事である。此の点から見て回想は、全く特殊な措定的体験である。常態的知覚はこれとは別のものであり、可能性、蓋然性、疑問性の知覚的乃至再生的なる意識、懷疑、否定、肯定、推定等々の意識は又別のものである。

吾々は、例えば、変様されざる確実さに於いて措定する所の常態的知覚の中和的変様は、知覚的に示現された模写的世界に対する常態的觀察に於いて成素として見出される所の中和的なる写像客観意識であるという事を確信できる。試みに吾々はこの事を明らかにしてみよう。例えば今デュラーの銅版画『騎士と死と悪魔』を眺めているとしよう。

先ず第一に吾々は、物としての『銅版画』即ち画帖中の此の版画をその双関者とする所の常態的知覚を区別する。

第二に区別するのは、『馬上の騎士』と『死』と『悪魔』という無彩色の小図形が黒線で吾々に現れているところの知覚的意識である。これ等の図形に対して吾々は、美的觀賞の場合には、客観として向つてはいない。吾々が向つているのは『写像に於いて』示現された實在、更に精確には『模写された』實在、即ち肉と血とから成る騎士等々である。

斯くて、『写像』（小さな灰色の図形——それに於いて或る別のものが、基づけられたるノエシスの力で、類似性に依つて『模写的に示現』されている）に就いての、模写を仲介し可能ならしめる所の意識は、知覚の中和性変様の一例である。此の模写的写像客観が吾々の前にあるのは、**存在的としてでもなければ、非存在的としてでもなく、又何かその他の措定様相に於いてでもない。**そうではなく

して寧ろそれは、存在的としてではあるが併し、存在の中和性変様に於いて「宛も存在的」として意識されているのである。

ところで**模写されたもの**も亦、若し吾々が**純粹に美的な態度**をとつて此の模写されたものをも再び『単なる写像』として受取り、それに対して存在乃至非存在、可能存在乃至推量存在等々という極印を捺さぬならば、上と同様である。けれどもこれは、明らかなる如く、何等欠如を意味するのではなく、或る変様、即ちまさに**中和化**という変様を意味する。吾々はこの中和化をただ単に、先行指定に加えられた改造的操作と考へてはならない。それは時にはそうでもあり得る。けれども必ずしもそうとは限らない。

(一) 質と対応・本質に就いての論証 (二〇二頁) 参照【二一四節「各々のコギトには」以下】。

一一二、想像変様の反復可能性中和性変様の反復不可能性

中和化的現前化という意味に於ける想像と中和化的変様一般との間の根本的區別は——更に此の決定的差異点を明示するならば——、現前化としての**想像変様**の方は**反復可能**である(任意段階の想像即ち想像『に於ける』想像というものがある)が、**中和化**という『操作』の繰返しの方は**本質上不可能である**という点に現れている。

再生的(並びに模写的)変様の反復を可能なりとする吾々の主張は、可成り一般的な反対を受けるかもしれない。其の現象学的分析の習練が、現状より将来一層広く行互るならば、初めて事情も変つ

て来るであろう。けれども、體驗を『内容』として扱い、或はアトム化的物体化的心理学に対して幾多流行的異論があるにも拘らず矢張りまさに一種の微小物と見做される所の心的『要素』として取扱う限りは、随つて又、『感覺内容』とそれに対応する『想像内容』との間の區別を『強度』、『充実性』等々の如き事物的徴表に於いてのみ見出し得ると考える限りは、事情は有利に転じ得ないのである。

これこそ第一に識らねばならぬと思うのは次の事である。それは、此處で論じているのは**意識の區別**に就いてであつて、随つて想像内容というものは單なる変色した感覺与件ではなく、その本質上対応感覺与件に**就いて**の想像であるという事であり、更に又此の『に就いての』というものは、当該感覺与件の強度、内容充実等々の如きものの稀釈（どれほど有效な稀釈でも）に依つては生じ得ないという事である。

意識の反省に熟して居り（且つ苟くも指向性の所与を觀る事を嘗て習得した）者ならば、想像に於ける想像、乃至回想又は想像に於ける回想の場合の意識段階を、全く無造作に**觀取** *sehen* するであろう。すると又彼は、此の段階形成の本質性狀の特質は何であるかを識るであろう。即ち、**高次段階の想像の各々**はそれに於いて間接に想像されたものの**直接的想像**へは自由に移され得るが、併し他方此の自由なる可能性は、**想像から対応知覚**への移行という場合には**存しない**という事を識るであろう。此の点自発性にはひとつの深淵があるのであつて、純粹我がこれを越え得るには實現的行為、創造の本質的に新しい形式（恣意的幻覺も亦これに算えられ得る）に依る外はない。^(二)

(二) 中同性變様論のうち上來論じた諸点に関しては、既に拙著『論、研、』が——その要点に於いて、と

りわけ想像に対する關係に就いて——正しい見解に到達している。同書第五研究、特に第三九節に於ける『性質的変様』と『想像的変様』との対立を参照。この中前者は**此處**で論じている中和性変様を指したものである。——マイノングの著書『仮定に就いて』“*Über Annahmen*”（一九〇二年）は、本章所説の問題と極めて近い諸問題を詳細に論じている。それ故私は、私の旧著のみを引用して彼の斯書を引用するを得なかつた理由を説明する必要がある。私の見る所では斯書は、此の点に於いても又他の点に關しても、拙著『論、研、』の並行的諸章と——材料から見ても理論上の思想から見ても——甚だ多くの符合を示しているのであつて、事柄に於いても方法に於いても私の試論以上何等實際的進歩を遂げていないのである。私が当然重要視すべきものと依然信じている所の多くの根本思想が、彼の斯書では顧慮されて居らず、とりわけ上に論じた諸点に關してさえそうである。私が最後の論述に於いて明示した混同が、とりも直さず仮定に就いてのマイノングの見解の核心を成しているのである。

一三、顯在的措定と潜在的措定

中和性変様及び措定に關する吾々の考察には、重要な続行が是非とも必要である。吾々は『措定 *setzen*』の意識という言葉を広義に使用したが、此の語は必然的に分化を必要とする。

吾々は**顯在的措定**と**潜在的措定**とを區別し、此の區別にも拘らず必須なる包括的名称として、『措定的意識 *positionales Bewußtsein*』なる語を用いようと思う。

措定 *Setzung* の顯在性と潜在性との區別は、嚮に述べた注意と不注意との顯在性の區別と密接な關

係に在るが、併し決してこれと一致するものでない。中和性変様を顧慮するならば、注意的自我対向に於ける顕在性と非顕在性との一般的區別に二重性が入つて来る。換言すれば、顕在性という言葉の概念に二重の意味が入つて来るのである。この二重の意味の本質を吾々は闡明せねばならない。

中和性変様は、**現実的**なる信、推測等々と、信、推測等々の中へ『単に身を置いて考える』という独自の様態された意識との対照に於いて吾々に現れて来た。これを双關的に言えば、存在しているもの、恐らく存在するであろうもの等々を、『**現実的**』に眼前に有っているか乃至は『**現実的に**指定して』有つていふという事と、それ等を單に『其俟に在るもの』という仕方で**現実的に**指定せず¹に有つていふという事との対照に於いて現れて来たのである。ところで非中和的意識と中和的意識との、指定の潜在性から見て本質的に異なる態度をも、吾々は最初から予示しておいた。各々の『**現実的**』意識からは、その中に潜在的に含まれている多種の指定が引き出される。そして引き出された以上それは**現実的**の指定である。即ち**現実的に**指定的に思念されたものの各々の中には**現実的**の客位語 Prädikationen 【賓辞要素】が潜んでいるのである。けれども中和的意識はその中に如何なる『**現実的**』の客位語をも『含んで』はいない。注意的顕在性に依る展開、即ち意識された対象的なものの種々なる賓辞 Prädikaten への対向 Zuwendungen 【配意】に依る展開は、専ら中和的な作用のみを、乃至は専ら変様されたる賓辞のみを結果せしめる。中和的意識と非中和的意識とに於ける此の異種類の潜在性、即ち上の如く注意対向の一般的潜在性が二重の潜在性に分れるという此の注目すべき事柄は、茲に更に深い研究を必

i Rücksichtnahme (英 turning of the Ego's regard) 渡辺訳「注意する自我の配意」

要とする。

前々節の考察に依つて明らかになつた如く、各々の現実的体験は、現在的に存在する体験として——或は「現象学的時間意識に於いて規整された時間的統一として」ともいう事が出来る——或る仕方自身にその存在性格を伴うものなる事、恰も**知覚せられたものと同様である**。顕在的な体験現在の各々には、中和性変様、即ち可能的にして且つ該体験現在に内容上精確に相応する想像・体験現在が、イデオールに対応する。斯くの如き想像体験の各々は、現実的に存在するとしてでなく、『宛も』現在的に存在するとして性格づけられている。それゆえ此の間の事情は、任意知覚のノエマ的所与をそれにイデオールに精確に対応する想像化（想像観）の所与と比較する場合と、實際全然同様である。即ち、知覚されたものの各々は『現実的に現在のなる存在』として性格づけられて居り、それに並行する想像されたものの各々は、内容上は同じものとしてではあるが、併し『単なる想像』として、即ち『宛も』現在のなる存在として性格づけられている。それゆえ次の如く言われる。

根源的時間意識そのものは知覚意識の如き働きをなし、そして対応する想像意識をその対応者となす、と。

ところで此のすべてを包括する時間意識なるものは、言う迄もなく、何等深い意味に於ける**連続的な内在的知覚でない**。「深い意味に於ける」というのは即ち「**顕在的に指定する知覚**という意味に於ける」という意である。斯くの如き知覚は勿論とりも直さず吾々の意味に於ける体験、即ち内在的時間の中に存し、現在的に持続し、時間意識に於いて規整せられたものである。換言すれば時間意識

は、言う迄もなく連続的な内的反省ではないのである。此の反省に於いては、体験は、特有の意味に於いて**措定された体験**として、又**存在するとして**顕在的に**把握された体験**として、对象的となるであらう。

体験の中には内在的反省と呼ばれる特別な体験がある。内在的反省とは、更に仔細に言えば即ち、その対象に対して——対象の存在を顕在的に把握しつつ、措定しつつ——向っている所の内在的知覚の事である。体験の中には又此の他に、超越的方向をとれる、又右と同様な意味で存在措定的なる知覚、即ち所謂外部知覚なるものがある。普通の語義に於ける『**知覚**』とは、何か或る物が我に対して**有体的現在に於いて現出している**という事を一般に意味するばかりでなく、我が現出している物を**覚認** *gewahr / attentively perçevies* する、即ちその物を現実に定在するとして把握し措定するという事をも意味する。定在措定 *Daseinsetzung* の此の顕在性は、嚮に論述した通り、知覚的写像意識に於いて中和化されている。吾々が模写されたものにでなく『写像』に向っている場合、吾々が対象として把握するものは現実的なものではなく、とりも直さず写像即ち仮構物である。その『把握』は対向の顕在性を有っている。けれどもそれは『現実的』把握ではなく、『宛も *gleichsam*』という変様に於ける単なる把握である。即ちその措定は顕在的措定ではなくして『宛も』に依つて変様されている措定なのである。

中和化された措定の注意的顕在性は、精神的視向を仮構物から転向する事に依つて潜在性へ移入する。換言すれば写像は矢張り現出してはいるが、併し『注意』されてはいない。即ちそれは——『宛

も』の樣態に於いて——把握されていないのである。此の事情とそれの潜在性との本質中には、**潛在的視向擬向**【目ざしの振り向き】の可能性が存している。けれども今の場合此の可能性は決して**措定**の**潛在性**を生ぜしめるものでない。

吾々が、『**潛在的**』な（非中和的な、即ち**現実措定的な**）**回想**を、回想されたものが、例えば**視向**転向に依つて**成程**猶お現出してはいるが併し最早**潛在的に措定**されてはいない、という様な**回想**と比較するに、事情は矢張り同様である。『猶お』現出しているものの**措定**の**潜在性**というのは、此処では、**注意的潛在性**に依つて啻に一般に**把握的**コギタテイオが生ずるばかりでなく、全く『**現実**に』**把握する所**の、即ち**潛在的に措定する所**のコギタテイオが生ずるという意味である。回想の**中和性**変様即ち単なる**想像**にも亦**注意的潛在性**があるのであつて、これが**潛在性**に転化する事に依つて生ずるのは**成程**『**作用**』（コギタテイオ）ではあるが、併し全然中和化された、即ち「宛も」の樣態に於ける全然**信憑的**^{ドクサ}な**措定**なのである。想像されたものは『**現実**に』**現在の**、過去の乃至未來的として意識されているのではなく、単に**措定**の**潛在性**なきそれとして念頭に『**浮んで**いる』にすぎない。単なる**視向擬向**は此の**中和性**を除き得ない。それは恰も他の場合に**措定****潛在性**を生ぜしめ得ないと同様である。

各々の知覚はその知覚背景を有っている、此の事は吾々が更に進んで説明する場合に役立ち得る。特別に把握された物は、同時に**知覚的に現出している所**の、特別な**定在**定立を欠く所の、それの**物理的周囲**を有っている。この周囲も亦『**現実的に存在する**』周囲であつて、それは**潛在的に存在を措定する視向**が——本質可能性の意味に於いて——それに向い得るように意識されている。それは言

わば**潜在的措定の統一**なのである。回想の場合にも、その回想背景に就いて云えば右と同じである。或は又知覚乃至回想の場合にも亦、過去指向及び未来指向、過去回想及び未来回想——それ等は多少とも充實的に、又その明晰度を変じつつ追つて来る、が併し**顕在的定立** *Tiesen / postings* の形に於いては遂行されていない——に接する知覚乃至回想の庭 *Hofes / hals* に就いて見れば矢張り右と同じである。これ等すべての場合に於いて、適當なる**視向擬向**（**注意的顕在性**）に依つて『**潜在的措定** *Sezungen*』を**顕在化**するという事は、必然的に、常に新しき**顕在的措定**を行う結果になるのであつて「此の事は如上の事情の本質に属するものである。ところが若し並行的なる中和性変様へ移つてみれば、すべては——『**潜在性**』そのもののさえも——「宛も」の変様へ翻訳される。写像客観乃至想像客観も亦（而も必然的に）**注意的背景**を有つ。此の場合にも亦『**背景**』とは**潜在的なる対向**【**配意**】及び『**把握** *Erfassungen / seizings-upon*』を表す名辞である。けれども此の場合には原理的に言つて、**現実的対向**を將來してもその結果**現実的措定**に至るのではなく、必ず単に変様されたる措定に至るにすぎない。

猶お吾々が此処に於いて特に興味を感じるのは、特に**信定立** *Glaubenshesen / doxic posting* と呼ばれるべきもの（**信憑的** *ドクサ* **原定立** *doxischen Urthesen / doxic primal posting*）の様態的転化即ち**推量**、**期待**、**疑問**、等々に就いても、同様に又否定及び肯定に就いても上述と事情は同一であるという事である。これ等のものに於いて意識されている双関者、即ち可能性、蓋然性、非存在等々は**信憑的措定**を——それと同時に又特に『**対象化**』と呼ばれるものを——**受け得る**。けれども吾々が推測、疑問、拒否、肯定等々の『裡

i 「過去指向及び未来指向、過去回想及び未来回想」続く「庭」にも掛かり“Hofes an Retentionen und Protentionen”

に生き』ている間は、吾々は何等信憑的^{ドクサ}原定立を行わない、——尤も定立という概念を必然的に拡大した事になる意味に於いての他の『定立^{ドクサ} Thesis』、即ち推測定立、疑問性定立、否定定立等々は無論行うとはいへ。けれども吾々はいつも、対応する信憑的^{ドクサ}原定立を行い得る。即ち現象学的事情の本質の裡には、その中に含まれている潜在的定立を顕在化する理念的^{ドクサ}可能性が根ざしている。扨此の顕在化は、最初から顕在的定立が問題となつて行つてゐる場合には、何時も何時も、出発の定立の裡に潜在的に含まれてゐた定立としての顕在的定立となつて行くものである。若し吾々が出発の定立を中和性の言葉に翻訳すれば、潜在性も亦それに翻訳される。吾々が単なる想像に於いて推測、疑問等々を行う場合には、嚮に論述した事柄は勿論すべて依然存立しているのであるが、ただ変更した符号を着けてゐるのである。根源的な作用或は作用ノエマから、注意の可能的視向擬向 *turning of the regard* に依つて取出され得る信憑的^{ドクサ}定立及び存在様相はすべて、今や中和化されてゐるのである。

(一) 第三五節 (上巻、一二六頁以下) 【『作用』としてのコギト』以下)、第三七節 (上巻、一三三頁以下) 【『コギトに於いて純粹我が』以下)、第九二節 (二二八頁以下) 参照 【『ノエシスの見地』以下)。

(二) 上述第一〇五節 (一七五頁) 参照 【『信としての信様相』以下)。

一四、定立の潜在性と中和性変様とに就いての統論

非中和的意識と中和的意識との区別は、上述の分析に依れば、啻にコギトなる注意の様態に於ける意識体験に関する許りでなく、又注意の非顕在性なる様態に於ける意識体験にも関する。そうすると

此の區別は、此の意識『背景』が注意的に転化して『前景』となる場合の——更に精確に言えば、もとの体験が信憑的^{ドクサ}コギトへ、否寧ろ原信憑^{ウルドクサ}へ由つて以て移行するその注意的顯在性へ転化する場合の——二重の態度に現れる。此の事は、言う迄もなく、あらゆる場合に可能である。何故ならば、各々の指向的体験はその本質上、そのノエシス並びにそのノエマを、ノエマ的に規整された対象性とその賓辞とを、『眺め遣る』という事の——それ等を原信憑^{ウルドクサ}の仕方^{ウツツ}で措定しつつ把握するという事の——可能性を含んでいるからである。

右の事情を又、吾々は次の如くにも言う事ができる。即ち、**中和性変様**は、現実に定立たる唯一の定立であるところの**顯在的定立**に対して加えられた**特殊の変様**ではなくして、**顯在的なる原信憑^{ウルドクサ}**的措定可能性乃至措定不可能性に対する態度に現れるところの**全意識一般の根本本質的固有性**に加えられるものであるというのである。それ故に必須なのは、此の中和性変様を、正に顯在的原措定^{Ursetzungen / primal postings}乃至その受ける変様に於いて呈示するという事である。

更に詳細に規定するならば、問題は次の如くである。

意識一般は、その種類、形式の如何を問わず、**ひとつの根本的区分に依つて分けられている**。即ち先ず第一に、吾々の知っている通り、各々の意識——それに於いて純粹我は最初からその意識を『遂行』する我として生きているのではなく、随つて最初から『コギト』の形を有っているのではない——は、該意識を此のコギトの形に移す本質可能的変様を受け得る。それ故コギトなる様態の範囲内に於ける**意識遂行の仕方**に**二つの根本的可能性**が存立する。之を換言すれば左の如くである。

各々のコギトには——そのノエマが並行的コギトの中にその**精確に対応する対応ノエマ** Gegennoema を有つという仕方で——**ひとつの精確に対応する対応者** Gegenstück が属している。

相並行する『作用』の關係の本質は、両作用の中の一方は『**現実的作用**』である、換言すればそのコギトは『**現実的**』なる、即ち『**現実に指定する**』コギトである、然るにこれに反して他方の作用は作用の『**影**』、即ち**非本来的なる**コギト、『**現実的**』に指定するのでないコギトである、という点に存する。前者の作用は現実的に作業し、後者の作用は作業の単なる反映である。

右の区別に対応して**双関者の根本的区別**がある。即ち一方には、変様されていない、即ち**現実的作業**という性格を有つ所の、規整されたノエマ的作業があり、他方には、それに**精確に対応する作業の『単なる思想』**がある。現実的な作業と変様された作業とは、理念的には**絶対精確に相对应する**、**が然も同じ本質を有つてはいない**。何故ならば本質に変様が加わるからである。即ち、**原本質** originären Wesen には該本質の『影』としてその**対応本質** Gegenwesen が対応するからである。

勿論人は、影、反映、写像等という譬喩的用語に対して、単なる仮象とか妄想とか等々の意味を少しでも入れてはならない。若しそうすれば言う迄もなく現実的作用乃至**指定的双関者**が与えられていることになるからである。これとは別の、甚だ陥り易い混同、即ち此処に問題となつて**いる変様と想像変様**（これも等しく各々の体験——**内的時間意識に於ける体験**現在としてのそれ——に対して**対応者**即ち該体験の想像写像を創造する）との混同は、改めて警告するに及ばない。

現実とノエマ的作業の無力なる反映との如く**相對立する二つの部類に指向的体験を分ける根本的区**

分は、此処に於いて（即ち信憑的範圍から吾々が出発するに方つて）以下の**基本的諸命題**に於いて証示される。即ち、

各々の**コギト**は、それ自身に於いて、**信憑的原措定** *Ursatzung* であるか然らざるかである。が併し各々のコギトは、これも亦意識一般の普遍的基礎本質に属する所の法則性に依つて、**信憑的原措定**へ移され得る。ところでこれは種々なる仕方依るのであるが、とりわけは、最広義の『**定立的性格** *theitische Charakter*』の各々——それは、コギトに属する（右と応じて最広義の）ノエシス的『**定立 Thesis**』の双関者として、此のコギトのノエマに於いて規整される——が存在性格への転化を受け、随つて又**最大広義の存在様相**という形をとるという仕方に依つてである。此の仕方に依つて『蓋然的』という性格——それは推測（詳しくは推測そのものの『作用性格』、『**定立**』と特に呼ばるべきもの）のノエマ的双関者である——は蓋然**存在**へ転化する。それと同様に又、『疑問的』というノエマ的性格、即ち此の特に疑問性定立の双関者たるものは**疑問存在**という形へ、否定の双関者は**非存在** *Nichtsein*の形へ転化する。換言すれば転化して生ずる形は悉く、言わば顕在的な**信憑的** *Ursatzung*の烙印を受けている形なのである。併し更にこれに止まらない。吾々は、定立の概念をあらゆる作用領界の上に拡張し、随つて例えば適意定立、願望定立、意志定立を——そのノエマ的雙関者なる『**適意な**』、『**望ましき**』、『**実践的に當為的な**』等々を有てるそれ——を論ずるといふ、その根拠を見出すであらう。当該作用の**信憑的** *Ursatzung*の原定立への先天的に可能なる移行に依つて、右の双関者も亦、極めて拡大された意味に於ける存在様相の形を採る。すると『**適意な**』、『**望ましき**』、『**當為的な**』等々は**述定可能**となる。

何故ならば、顕在的な原信措定 *Urglaubenssetzung* に於いてはそれは快適である、望ましくある等々として意識されるからである。^(二)併しこの移行は——これ等の例に於いて——次の如く解さるべきである。即ち、この移行はもとの体験のノエマを——ただこの移行に伴つて合法的に変化する所と様態だけを除いて——その全本質に関して含んでいる、と。^(三)が併し此の点はなお補足を要するであらう。^(四)扱、原信憑^{ウルドクサ}は、夫々の場合に依つて、現実的信憑^{ドクサ}、即ち言わば現実に信ぜられたる信であるか、でなければ此の信の無力なる対応者、即ち（単なる存在、可能存在等々の）単なる『想い浮べ』であるかであるが、この事に依つてそれ等の場合が根本的に区別される。

夫々の場合の原体験 *ursprünglichen Erlebnisses* の右の信憑^{ドクサ}の変化は、それ自身から何を生ぜしめるか。原体験のノエマ的成素の現実^{ドクサ}なる信憑^{ドクサ}の原措定への展開であるか。乃至は専ら原信憑^{ウルドクサ}の中和性への展開であるか。この事は当該指向的体験の本質に依つて、予め絶對的に確然と規定されている。それ故、各々の意識体験の本質に於いて、**潜在的なる存在措定**の確然たる全内容が最初から予定されて *vorgezeichnet* いる。換言すれば、当該意識の最初からの性質の如何に應じて、夫々可能的なる現実的措定の分野であつたり、或は又可能的なる中和的『影の措定』の分野であつたりするのである。

繰返して言う、**意識一般**はその性質上二重の型を有っている。即ち原像と影と、乃至**措定的意識**と**中和的意識**とである。前者の性格は、その信憑^{ドクサ}的潜在性が現実的に措定する信憑^{ドクサ}的作用に至るといふ点に存し、後者の性格は、それが単に右の如き作用の影像のみを、即ち単に右作用の中和性変様のみを生ぜしめるといふ点に在る。後者を換言すれば即ち、そのノエマ的成素の中に信憑^{ドクサ}的に把握し得べ

き何ものをも全く含まないという点、又これと同じ意味であるが、それは何等『現実的』ノエマを含まずして、単に現実的ノエマの対応像を含むに過ぎないという点に在る。ただ一つの信憑的^{ドクサ}措定可能性だけが中和的体験にも残存する。即ちそれは、内在的時間意識の与件として——中和的体験を正に、変様されたるノエマに就いての変様されたる意識なりと規定して——該中和的体験に属するところの^{ドクサ}信憑的措定可能性である。

爾今^{じこん}吾々は『**措定的** positional¹』及び『**中和的** neutral』という言葉を、術語として使用する事にする。各々の体験は、それがコギトの形をとるにしても、又は何等か特別の意味に於いて作用なるか然らざるかであるにしても、何れも右の対立を免れない。それ故**措定性** positionalität とは、現実的措定 Position の現存乃至遂行を意味するのではなくして、単に「顕在的に措定 secundär²する信憑的作用^{ドクサ}」の遂行に対する或る潜在性を表すにすぎない。兎に角吾々は、体験は最初から遂行された措定であるという事柄を、矢張り措定的体験の概念の中に入っているものと解する。かく解する事は、遂行された措定の各々には、多くの潜在的措定が本質法則的に属するものなるが故に、失当の感を減ずるのである。

措定性と中和性との区別は、以上に依つて明らかなる如く、単なる信措定にのみ関する特性、即ち単なる一種の信変様——例えば推測、疑問等々、或は別の方面では假定、否定、肯定の如き——を表すものではない。随つて原様態の、即ち深い意味に於ける信の、指向的転化を表すものではない。それは実に、吾々の予言した如く、**意識の普遍的区別**である。が併し此の区別は、吾々の分析の進行に

i 本訳では措定的だが、渡辺訳では「設定立的」と訳し分ける。以下「措定的・性」は、positional, positionalität であらう。

於ける十分なる根拠から推して、措定的（即ち顕在的、現実的）信とその中和的対応者（単なる『想い浮べ』との間の——信憑的^{ドクサ}コギトなる狭い領界内で特殊的に示された——區別に結びついているものと思われる。信の作用性格とその他すべての種類の作用性格——随つてすべての意識種類一般——との間には、まさしく極めて顕著な且つ根深い纏れ合いが現れたのである。

（一）第一〇五節の終りの諸句（一七六頁）参照【時には意味客観に】以下】。

（二）更に後述第一一七節（二二〇頁）最後の段を参照【右の如き仕方ですべての】以下】。

一一五、応用、拡張せられたる作用概念、作用遂行と作用発動

上述の記述の二三を参考する事が矢張り重要である。^(一)コギト一般は顕現的指向性である。吾々は、顕現的コギトへ移行して、顕現化されざる体験及びそのノエシス・ノエマ的成素を反省するのではなく、該体験が指向性を、乃至は該体験に固有なるノエマを、自身の中に含むという事を認める事はできない。然る限り指向的体験一般なる概念は、既に潜在性と顕在性との対立を——而も普遍的意義に於いて——予想しているのである。此の事は例えば、知覚、回想等々の場合の、注意されているのではないが後に至つて注意され得る背景に就いての意識に關してそうである。顕現的な指向的体験は『遂行されたる』『我思う』である。併し此の『遂行されたる』『我思う』は又、注意変更という途に依つて、『遂行されざる』『我思う』へ移行することができる。遂行されたる知覚、遂行されたる判断、感情、意志、という体験は、注意が『専ら』或る新しきものに向う場合——此の事には、我は新しき

コギトの中に専ら『生きてゐる』という事が含まれてゐる——にも消失しない。以前のコギトは『色淡くなり』、『闇』に没するのであるが、併しそれは矢張りひとつの——既に変様されてはゐるが——体験定在を有つてゐる。同様に、体験背景に於いて諸々のコギタテイオが——時には回想的乃至中和的に変様されたそれが、時には又変様されざるそれが——^{くつき}崛起して来る。例えば信、現実的信が『発動』する。吾々は『吾々が信ずることを知る以前に』既に信じてゐるのである。これと等しく、或る場合には、適意乃至不適意の指定、願望、又決意が、吾々がそれ等の『中に』『生き』る以前に、吾々が本来のコギトを遂行する以前に、我が判断的、適意的、願望的、意欲的に『活動』する以前に、既に働いてゐることがあるのである。

それ故コギトなるものは實際、知覚、判断、適意等々の**本来的作用**を示すものである（此の意味で最初から吾々は此の概念を導入しておいたのである）。けれども他方に於いて、上に記述した場合に於ける体験の全構造は（その指定及びノエマ的性格のすべてを含めて）、それが右の顕在性を欠く場合にも、同じである。この点に於いて吾々は**遂行されたる作用と遂行されざる作用**とを一層判明に區別する。後者は『遂行から脱出した』作用であるか又は**作用発動**であるかである。此の作用発動という言葉を又吾々は広く、遂行されざる作用一般という意味に使つても毫も差し支えない。斯くの如き作用発動はその指向性のすべてと共に体験されてはゐるが、併し我はそれに於いて『**遂行する主観**』として生きてゐるのではない。それゆゑ作用なる概念は、一定にして且つ全く不可欠なる意味に於いて拡張される。遂行されたる作用——或は或る点から見て（即ちそれが過程を意味しているとい

う点から見て）一層適切にいうならば、**作用遂行**——は、**最広義に於ける『態度決定』**を形成するものである。ところが深い意味の態度決定を論ずるには、吾々が後に一層詳細に論究するであろう如き性質の基づけられたる作用を顧慮する必要がある。即ち例えば、憎しみという——換言すれば憎む人の憎まれたものに対する——態度決定（憎まれたものの方は意識に対して、下層ノエシスに於いて、定在する人乃至事物として既に規整されている）の如きを顧慮する必要がある。なお存在要求に対する否定乃至肯定等々の如き態度も等しくその一つであらう。

以上に依つて明らかなる如く、広義の作用なるものは、特にコギタティオと呼ばれるものと全く同様に、それ自らの裡に中和性と指定性との区別を蔵している。即ちそれはコギタティオへ転化する以前既にノエマ的指定的に働いている作用である。ただ吾々はその働きを狭義の作用即ちコギタティオに依つて始めて認めるだけの事である。その中に既に指定乃至『宛も』の形態に於ける指定が、此の指定の属する全ノエシスと共に、現実的に現存している——転化と結合してもそれは決して指向的に豊富になるものでも、又其他の仕方で変化するものでもないという理念的な場合を予想して。孰れにしても吾々は斯くの如き変化（取りわけ又転化後直ちに体験流の中に出現する指向的增加乃至新形成）はこれを除外して宜しいのである。

中和性という標題の吾々の全討究に於いて、信憑的措置を特に挙げておいた。中和性は潜在性をその指標とした。要は即ち、**定立的作用性格一般の各々**（各々の作用『指向』、例えば適意指向、評価的、意欲的指向、適意指定義欲指定の独自の性格）**はその本質の裡に、それと或る仕方**で『合致』する性

格の信憑的定立類を蔵しているという点に在った。当該作用指向が中和化されざるものであるか中和化されたるものであるかに応じて、その裡に含まれている信憑的定立——本書で**原定立**と考えられたもの——も亦夫々中和化されざるものか或は中和化されたるものである。

斯く特に信憑的原定立を挙げる事は、以下進んでの分析に於いては制限を受けるであらう。吾々の明らかにした本質法則性は——最初に、又比較的一般的には、信憑的原定立の代りに**信憑的様相**（独特なる、即ち仮定をも包括する意味に於いての）が、すべての定立中に含まれる『**信憑的定立**』と見做され乃至これを代理せざるを得ないという点で——一層精確なる規定を必要とするという事が明瞭になるであらう。併し次に此の**信憑的様相**一般の全般的優先の内部に於いて、**信憑的原定立**即ち**信確實性** Glaubensgewissheit / doxic certainty が全く特別の優先を有っている。此の優先というのは、右の様相そのものが**信定立**へ転化され得るのであつて、転化されると又全中和性は、**原定立**に再帰せしめ zurückgezogen られた特別の意味に於ける**信憑的潜在性**にその指標を有つ、という意味の優先なのである。此の場合、**信憑的なるもの一般**が各種の**定立的なるもの**と『**合致**』する仕方は、更に詳細の規定を受けるであらう。^(三)

扱、（若干の欠陥はあるが）直ちに最も広く普遍的に主張されたところの、併し単に特殊の作用領界に於いてのみ明らかにされたところの上の諸命題は、基礎づけの一層広い土台を必要とする。ノエシストノエマとの並行は、吾々無論未だ指向的領域の全般に互つて仔細に論究したわけではない。恰も本篇の此の主要主題そのものが、又おのずから更に分析を拡張する事を要求する。ところで此の拡張

の実行に依つて、中和性変様に関する吾々の一般的主張も、同時に証明され且つ補足されるであらう。

(一) 上述第八四節、九一頁以下参照【「現象学の主要主題」以下】。

(二) 後述二一九頁以下参照【「ところで此の事は」以下】。

一一六、新しき分析への移行、基づけられたるノエシスとそれのノエマ的双関者

今迄吾々は、広くはあるが併し甚だ限られた埒内でのノエシスとノエマとの構造に於ける、一聯の一般的な事柄を研究して来た——研究したといつても無論単に甚ださやかな程度に於いてである。即ち単にそれらの事柄の精確な明示に必要な範囲に於いてであり、又ノエシスとノエマなる全般的二重主題を伴う問題群に就いて一般的にして然も内容豊富な觀念を得んとする吾々の主要目的のために必要な範囲に於いてであるに過ぎなかつた。吾々の研究は、仮令如何に雑多なる錯綜を導入したとはいえ、体験流の単なる下層——それには依然、比較的構造單純なる指向性が属する——に関するものであつた。吾々は（最後の予備的考察を除いては）感性的直観、殊に現出している實在に就いてのそれ、並びに又それから不明化に依つて生じ且つ又勿論類の共通性に依つてそれと結合している感性的表象を、特に選んだ。此の表象という言葉は同時に類をも表した。その場合吾々は無論同時に、表象に本質的に属する現象のすべてを、随つて反省的な直観及び表象一般——その対象は最早感官物ではない——を顧慮した。吾々の結論の普遍妥当的な事は、吾々が研究範囲を拡大すれば直ちに——吾々が研究を進めて来、且つ下層範囲に結びつき得るすべてのものの副次的なる事を明らかにした、

あの仕方に依つて——認めざるを得なくなる。そこで吾々は識るのであるが、中心的なる意味の核（これは勿論更に進んだ分析を必要とする事が大きい）とその周囲に群がる定立的諸性格との間の区別はすべて再現しているものであり、又——現前化、注意、中和化等の変様の如く——之亦意味の核を独自の仕方です（にも拘らずその『自同者』には手をつけぬ）ところのすべての変様も等しく再現しているのである。

斯くて吾々は二つの相異なる方向へ進む事ができる（両者共表象に基づく指向性に達する）。即ちノエシス的綜合定立 Synthesen への方か、或は、種類は新しいが併し**基づけられている fundierten 措置 定 仕方**へ吾々を昇らしめる方向かである。

後者の方向を採ると、吾々の出合うのは、（先ず第一に極めて端的な、即ち下段乃至上段の綜合定立を離れた）**情感的、欲求的、意欲的**なるノエシスである（これは『表象』に、即ち知覚、回想、記号表象等々に基づいて居り、又その構造に於いて段階的基づけの明白なる区別を示している）。茲では吾々は何時も全作用の研究に當つて特に措定的形式を採るのであるが（この事は又中和的底層を除外するを要しない）、その理由は、右の措定的形式に就いて言われ得る事は、通常に変様すれば、それに対応する中和化にも移されるからである。例えば、美的適意の如きは知覚的乃至再生的内実の中和性意識に基づいて居り、喜び乃至悲しみの如きは（中和化されざる）信乃至信様態に基づいて居り、意欲乃至嫌厭けんえんも亦同様である、——但しそれは快適的、美的、其他なりとして評価されたもの等々に關してである。

此の構造の諸種類には未だ少しも立入らぬ今に於いて、吾々の関心を有つのは、新しきノエシスの契機と同時に、その双関者に於いても亦新しきノエマ的契機が現れるという事である。一方には、信樣態に類比的ではあるが併し同時に又自身、その新しき内実に於いて、信憑論的（「信憑的」と訂正）なる指定可能性を有つ所の新しき性格がある。他方に於いては、此の新しき種類の契機には又新しき種類の『把握』が結びつく。即ち、下に在るノエシスの意味に基づいているところの新しき意味が——同時に前者の意味を包みながら——規整されるのである。新しき意味は全然新しき意味次元を導入する。即ち此の意味と同時に規整されるのは単なる『事物』の新しき断片的規定ではなくして、事物の価値、即ち価値性乃至具体的価値客觀、即ち美醜、善惡、乃至使用物、芸術作品、機械、書籍、行為、事業等々である。

更に又、比較的高き段階の完充^{III}なる体験の各々も亦、その完充なる双関者に於いて、吾々がノエシスの最低段階に於いて諦視したのと同様な構造を示す。比較的高き段階のノエマに於いて、例えば評価されたそのものの如きは、新しき定立的性格に取り囲まれたひとつの意味の核である『価値的』、即ち『適意的』、『喜ばしき』等々の働きは、宛も『可能的』、『推測的』乃至時には又『無的 nothing / null』、或は『無論實際 ja wirklich / indeed』と同様である——それをこれ等と同一列に置く事は背理ではあるが。

此の場合意識は、此の新しき性格から見て、又ひとつの**指定的意識**である。即ち『価値的』は価値的であるとして信憑的^{ドクサ}に指定 *seindar* され得るのである。『価値的』に対し**その性格づけ**として属す

る所の『である』は更に又、各々の『である』乃至『確實』と等しく、**様相を変じて考えられる事も出来る**。即ち様相を変じて考えられるとその意識は**可能的価値**に就いての意識であり、その時の『事物』は価値的とのみ考えられる。或は又此の事物は、**推測上価値的**なりと、或は**非・価値的**なりと意識される、〔非・価値的というのは併し悪、醜等々の如く『無価値的』』という程の意味ではなく、単に『価値的』の抹殺を表すだけである。すべて右の如き変様は価値意識即ち評価的ノエシス——並びに又それに応じてノエマ——に対し、単に外面的のみならず内面的に冒すのである（二二〇頁参照【嚮に既に吾々の指示した】以下）。

注意的視向は、雑多化せる本質可能性に依じて、種々異なる指向的層を**通つて**『事物 Sache / materially determinate affair【事象】』及び事物的契機に向う（この事は、既に吾々が低段階として識つた所の、変様の相属的体系を結果せしめる）。次に又その視向は価値に、即ち高段階の規整されたる規定に、それを規整する把握を通つて向う。更に又その視向は、ノエマそのものに、その性格に、或は別の反省に於いてはノエシスに向う。（以上はすべて、注意、随伴・注意、非・注意等々という種類の異なる独自の様態に当て嵌まる。）かくて又、以上の夫々に依じて、注意的変様の形に於いて根深い変化の多様が生じて来るのである。

これ等の複雑なる構造を**截然と区別して**、例えば、『**価値把握**』は事物把握に対し如何に關係するか、新しきノエマ的性格づけ（善、美等々）は信様相に対し如何に關係するか、それ等性格は如何にして体系的に種別整頓されるか、等々という如き事を遺漏なく明らかにするためには、格別困難なる研究

を行わねばならない。

(二) 上記の領界から出発する最広義の**表象概念**を確実且つ本質的に限界づける事は、体系的なる現象学的研究にとって勿論ひとつの重要な課題である。すべて此の種の問題に対しては、企画中の諸拙著の参照を乞う。本書の研究に於いて簡単に暗示した論定は、右諸著の理論内容から取つたものである。

一一七、基づけられたる定立と中和化変様論の結了、定立の一般概念

今度も吾々は猶お、中和化に対するノエシス的、ノエマ的な新しき意識層の關係を考察しよう。吾々は此の変様を**信憑的**の**措定性**に加えた。**信憑的**の**措定性**は、吾々の容易に納得できる通り、今取出された層に於いて實際あの役割を——即ち吾々が予め最広の作用領界に於いて**信憑的**の**措定性**に課したところの、又判断様態の作用領界に於いて特に論究したところのあの役割を——演ずるものである。推測意識の裡には『推測的』、『蓋然的』が措定的に含まれて『在り』、同様に又適意意識の裡には『適意的』が、喜悦意識の裡には『喜悦的』が含まれて在る等々である。その裡に在るという事は、換言すれば、**信憑的**の**措定**を受け得るという事であり、随つて又**測定**され得るという事である。それゆえ新しき種類の基づけられたる情緒ノエシスを有てる情緒意識の各々は、措定的意識なる概念の下に入る。それは、吾々が此の概念を——**信憑的**の**措定性**の点から見て、又結局は措定的確実性の点から見て——整理しておいた通りである。

けれども併し、更に詳細に見るならば、**信憑的**の**措定性**に対する中和性変様の關係は、その根柢には

如何に重要な洞察があるにせよ、然も或る点に於いてはひとつの迂路であると吾々は云わざるを得ないであろう。

吾々が先ず第一に明らかにしたいのは、適意作用（『遂行され』ていると否とを問わず）、同様に又各種の情緒作用及び意志作用は、とりもなおさず『作用』即ち『指向的体験』であつて、それにはその都度『intento《『指向』》即ち『態度決定 Stellungnahme / position-taking』が属するという事である。換言すればそれ等は、最広の、併し本質的に統一ある意味に於いて『**措定**』であるが、ただ必ずしも信憑的措定ではないという事である。嚮に吾々は序でを以て、作用性格一般は『**定立**』——拡張された意味に於いては定立、又特殊の意味に於いてのみは信定立乃至その様相——であると言つたが、あれは全く正当であつた。適意ノエシスと特に呼ばれるもの——同様に願望ノエシス、意志ノエシス等々——が信措定と本質的に類比をなす事は明らかである。評価、願望、意欲に於いても亦——その裡に『在る』信憑的措定性を別にして——或るものが『**措定**』されている。この或るものこそ又、異なる意識種類の一切の並行及びそれ等種類の一切の分類の源泉なのである。即ち分類されたのは実は措定種類であつたのである。

各々の指向的体験の本質には、基づけという仕方で結合されている『**措定性格** Setzungscharaktere』、『**定立**』を缺くとも一つ、普通は数個有つてするという事が含まれている（此の外に右体験の具体的要素の中に何が見出されるにしても）。ところで此の多くの措定性格の中の一つは、必然的に、他すべて

の措定性格を自己の裡に統一し且つそれ等を統率する言わば**主存在的**なる措定性格なのである。

これ等の特に『作用性格』、『措定』と呼ぶべきものの性格をすべて結合するところの最高の類統一は、本質的な且つ類的なる差異を除外するものではない。随つて、情緒措定は措定であるという点で信憑的措定と事実近似してはいる、が併し決して、信のすべての様態の如くには、相属的なのではない。すべての措定性格の類としての本質共通性と同時に、そのノエマ的措定双関者（『ノエマの意味に於ける措定的 theuſchen 性格』）の本質共通性が与えられる。そして又、若し吾々が後者をその一層広いノエマ的根柢に於いて捉えるならば、恰もその事に依つて eo ipſo すべての『命題 Satze / posita』の本質共通性が与えられる。そして一般論理学、一般価値論及び倫理学——これ等は、その究極の深奥処まで追窮すれば、一般的なる**形式的並行学科即ち形式的論理学、形式的価値論及び実践論**、の規整に迄至る——の間の常に感知される類比は、畢竟右の本質共通性に基づいているのである。⁽¹⁾

かくして吾々は『**定立**』という**一般化された名称**に立戻らされる。そこで此の名称に吾々は次の如き命題を適用する。即ち、

各々の意識は顯在的にか或いは潜在的に『定立的 theuſches』意識である。この場合に、以前に用いた『**顯在的措定**』という概念（及びそれと共に**措定性**という概念）は、右に対応する拡張を受ける。この事に含まれる意味は、「中和化及びその措定性への関係に就いての吾々の説は、拡張された定立概念にも移される」という事である。随つて、定立的意識一般には——それが遂行された措定的意

i 「主存在的」 archonische (英 archontic) 渡辺訳「支配者的な」。古代ギリシャの最高官職アルコンから来た言葉。

識なるか否かを問わず——吾々が中和化的変様と呼ぶ全般的変様が加わっている。而もそれは次の如き仕方では直接にである。吾々は一方に於いて、措定的定立ⁱの性格として、それは顕在的定立であるか或は顕在的定立へ移され得るかであるという事を、随つてそれは『現実的』に措定——拡張された意味に於いて顕在的に措定——され得るノエマを有っているという事を、挙げた。この措定的定立に対するのは、非本来的なる定立、『宛も』の定立、己れのまさしく中和化されたノエマに対して何等か或る顕在的定立の遂行を取入れる能力のない無力なる反映である。中和性と措定性との区別は、並行的なるノエシスの及びノエマ的なる区別である。それは、此処で把握される通り、あらゆる種類の定立的 thetischen 性格に直接に当て嵌まる。即ち信憑的^{ドクサ}原措定という言葉のただ一つ慣用的な狭い意味に於ける『措定』を通つての迂回なしに当て嵌まる、——とはいえこの措定に照してのみ右の区別は明らかにされ得るのである。

ところで此の事は、此の特殊の信憑的^{ドクサ}措定の優先的待遇がその深い基底を事象の裡に有つてゐるという事を示している。吾々の分析に依れば、信憑的^{ドクサ}様態こそは、就中特に信憑的^{ドクサ}原定立即ち信確實性の原定立は、その措定的潜在性が意識の全領界を掩うという独自の優先を有っている。夫々の定立は、その類の如何を問わず、その本質に固着的に属する信憑的^{ドクサ}性格に由つて、顕在的な信憑的^{ドクサ}措定へ転化させられる事が本質法則的に可能である。措定的作用は措定する。併しそれが如何なる『性質』に於いて措定するにしてもそれは又信憑的^{ドクサ}にも措定している。措定的作用に依り他の様相に於い

i 「措定的定立」 positionalen Thesen (英 posting of positions)

て何が措定されるにしてもそれは又存在的としても措定されている。ただそれは顕在的でないにすぎない。併し此の顕在性なるものは、原理的に可能なる『操作』という仕方によつて本質的に産出せられ得る。それ故各々の『命題』、例えば各々の願望命題は、信憑的命題へ転化させられ得る。併し転化した場合両命題は或る意味で一つになっている。即ち同時に信憑的命題でもあり且つ願望命題でもあるのである。

嚮に既に吾々の指示した通り、此の場合に合本質法則性は先ず第一に次の如くである。即ち**信憑的なるものの優先は本来普遍的に信憑的諸態に及ぶものである**といふのである。何故ならば、各々の情意体験即ち評価、願望、意欲の各々は、**夫自身に於いて**、「確かである」としてか、或は「期待されてある」としてか、或は推測的、疑惑的なる評価、願望、意欲としてか、孰れにか特性づけられているからである。^(三)此の場合例えば価値は、吾々が信憑的措定様態に着眼点を置いていない時には、必ずしもその信憑的^{ドクサ}性格を顕在的に措定されているわけではない。評価に於いては価値が、適意に於ては適意的なるものが、喜びに於いては喜ばしきものが、意識されている。併しそれは往々、吾々は評価に於いて単に、全然『確か』であるわけでないとか、或は此の事柄は単に、有価値的と、恐らくは有価値的ならんと思われる（其の事柄に対して吾々は未だ評価の興味方しているのではないが）、というような工合に意識されることがある。評価意識の斯くの如き変様に於いて働いている場合には、吾々は信憑的^{ドクサ}なるものに着眼点を置く必要がない。けれども、吾々は信憑的^{ドクサ}なるものに着眼点を置くようになることが出来る。例えば期待定立に於いて働いて次にそれに対応する信定立へ移るような場

合がそれである。此の時その信定立は、述定的に言い表せば、次の如き形になる。即ち、『此の事柄は価値のある事柄であるかも知れぬ』、或は又ノエシスの側面乃至評価する我の方に転じていえば『此の事柄は私には有価値的（恐らくは有価値的ならん）事柄と思われる』、となる。その他の様態に於いても亦同様である。

右の如き仕方ですべての定立的性格の裡には信憑的様態が伏在している。そして様相が確實性という様相である場合には、ノエマの意味の部分が定立的性格と合致するゆえ信憑的原定立が伏在する。ところが此の事はすべての信憑的变化にも当て嵌まる故、各々の作用の裡にも（今度は最早ノエマが合致するのでなしに）矢張り信憑的原定立が存在する。

斯くて吾々は次のようにも言う事ができる。即ち、各々の作用乃至各々の作用双関者はそれ自身の裡に或る『論理的なるもの』を、顕現的にか含蓄的に蔵している、と。各々の作用は常に論理的に表明せられ得る。詳言すれば、それは、『表出作用 Ausdruckens』のノエシス層が全ノエシス的者 Noetischen に（同様に表出のノエマ層は全ノエマ的者 Noematischen に）依つて以て接続せしめられる所以のものなる本質的普遍性に依つて表明せられ得るのである。此の場合明らかなのは、中性変様への移行と同時に、表出作用そのものも、又それに依つて表出されたものそのものも中和化されるという事である。

以上に依つて左の如き結論を得る。即ち、すべて作用は一般に——情緒作用、意志作用と雖も——対象を根源的に『規整』する故『客観化的 objectivierende』作用であり、それゆえ種々異なる存在領域の、

随つて又所属の存在学の、必須の源泉である、と。例えば、評価意識は、単なる事物世界に比して新しき種類の『価値論的』対象性即ち新領域の『存在者』を規整する。この事は、新しき種類の内実を有つ対象性——価値——を、評価意識に於いて『思念された』る対象性として取り出して来る所の顯在的な信憑的^{ドクサ}指定が、まさに評価的意識一般の本質に依つて理念的可能性として示される限り然るのである。右の如き対象性は情緒意識に於いては情緒的に思念されている。即ち此の対象性は、情緒作用の信憑的^{ドクサ}内実が顕在化される事に依つて、信憑的^{ドクサ}なる、更に進んでは論理的に表出的なる「思念されてある」に至るのである。

非信憑的^{ドクサ}に遂行されたる作用意識の各々は、右の如き仕方では、**潜在的に客観化的であつて、信憑的^{ドクサ}コギトだけが顯在的客観化を遂行する。**

論理的なるものの遍漫性ⁱ——結局は述定的判断の遍漫性——を闡明し得る根拠たるところの源泉の最も深いものが右の点に存在する（此処で吾々は、未だ詳細に論じてない意識的表出作用の層を附加しておく）。そして其処からして論理学そのものの支配の遍漫性の究極的根拠も亦理解せられる。情緒指向性及び意志指向性を本質的に取扱うノエシスの乃至ノエマ的諸学科及び存在学的諸学科（孰れも形式的と質料的）の可能性——加之必然性——は更に後に至つて明らかになるであろう。此の主題は吾々は後に至つて、二三の補足的知識を確めてから、取り上げるであらう。^(二二)

（一）この点に就いては後述第四篇、第三章参照【「理性論的問題群の一般性段階」以下】。

i 「遍漫性」 Universalität (英) universality 【普遍性】 渡辺訳「普遍性を有する」と」

(二) 上述二一四頁参照【「内面的に冒すのである」へ】。

(三) 後述第四篇の最後の章【第三章】、三二九頁以下参照。

一一八、意識の綜合定立、文章法的形式 Syntaktische Formen

今度は吾々は嚮⁽¹⁾に示した方向の中第二のもの即ち**綜合定立的** *synthetisch* 意識の形式に眼を転ずる。すると、一部はすべての指向的体験へ一般的に、一部は指向的体験の特殊類の特性に、本質可能性として属するところの指向的結合に依る「体験の多様な形成仕方」が吾々の視野の中へ入つて来る。意識と意識とは単に一般に結びつく許りでなく、結合して**一つの意識**となる——此の意識の双関者は**一つのノエマ**であつて、このノエマの方は又結合せる諸ノエシスの諸ノエマに基づいている。

此処で吾々は、**内在的時間意識の統一**を指したのではなかった、(仮令、此の統一がひとつの体験流の体験のすべてに対する総括的統一なる事、即ち「意識を意識と結合する**意識**」の統一なる事を忘れてはならないとはいえ)。個々の体験の何れか一つをとつてみれば、それは連続的な『根源的』時間意識にあつて現象学的時間の中に拡がる統一として規整されている。適當なる反省的觀方をとれば、吾々は、体験持続の種々なる切断部に属する体験道程が意識に於いて与えられる仕方に注意を向けて、それに随つて次の如く言う事ができる。曰く、「此の持続統一を規整する意識全体は、持続の体験切断部が依つて以て規整される切断部から、連続的に合成される。随つて諸ノエシスは、相互に結合される許りでなく、(充實された体験持続の) **一つのノエマ**——これは結合された諸ノエシスの

諸ノエマに基づいている——を有つ一つのノエシスを規整する」と。個々の体験に就いて言われ得る事は等しく体験流全体にも当て嵌まる。仮令諸体験がその本質上如何に相互に疎遠であるにしても、それ等は全体として一つの時間流として、即ち一つの現象学的時間に於ける肢体として規整されるのである。

それにも拘らず吾々は、根源的時間意識の此の原綜合定立 *ursynthese*（これは能動的なる、断絶的綜合定立と見てはならぬ）を、それに属する問題群と共に、故意に除外したのであった。それ故今吾々は、此の時間意識の埒内でなく**時間そのもの**即ち具体的に充実されている現象学的時間の埒内での綜合定立に就いて論じようと思う。換言すれば即ち、持続的統一として、即ち体験流——これ自身が即ち充実せられたる現象学的時間に他ならぬ——に於ける流れつつある経過として——從來常に吾々の解釈した如くに——解したところの、ただ単に体験というものの綜合定立に就いてである。他方又、例えば空間物性を規整する全意識に本質的に属するものの如き**連續的綜合定立**は勿論極めて重要ではあるが、それに就いても吾々は論述しまい。吾々は後になって、十分な機会を得て此の綜合定立を一層精確に識るであろう。今吾々が関心を向けるのは寧ろ**肢体を有つ綜合定立** *many-membered syntheses*、随つて断絶的に中断された作用が結合して肢体有る統一即ち高次段階の綜合定立的作用の統一となるその独特の仕方に対してである。連續的綜合定立の場合には吾々は『高次の作用』⁽³⁾という事を言わない。此の場合統一は寧ろ、統一されたものと同一段階の次元に（ノエシス的にも、又ノエマ的乃至對象的に

i 「肢体を有つ綜合定立」 *gegliederten Synthesen / many-membered syntheses*、渡辺訳「分節化された綜合」

も)属している。なおこれは容易にわかる事であるが、吾々が以下述べる一般的な事柄の甚だ多くは、肢体ある——**複定立的** polytetsche なる——綜合定立に対すると等しく連続的綜合定立にも当て嵌まるものである。

高次の綜合定立的作用の例として挙げられるのは、意志の領界では『他のために』**關係をつける意欲**であり、又感情作用の圈内では**關係づける適意**、即ち『**を顧慮して**』或はこれと同じ意味で『他のために』喜ぶという事である。異なる類の作用に於いても右に類する作用上の出来事はすべて同様である。勿論**選択の作用**もすべてこれに属する。

或る点で全般的なる別の一群の綜合定立を、吾々は更に立入って考察してみたいと思う。これは**蒐合的** (colligierende / collecting (取集める)、**選言的** (『これかあれか』に關する)、**表明的**、**關係づける等**の綜合定立を包含する。即ち総じてそれは、それに於いて規整される綜合定立的对象性の純粹形式に随つて形式存在学的形式を規定し且つ他方に於いてはノエマ形象の構造上**形式論理学** (専らノエマに關する文章論理学) の文章法的**意義形式**に於いて反映されているところの、綜合定立の全系列を包含する。

既に**形式的**なる存在学及び論理学に対する關係に依つて暗示される通り、茲に論じているのは本質的に完結せる綜合定立群であつて、この綜合定立は、その適用が、結合さるべき體驗の種類の点で、無制限に普遍的に可能であるという性質を有つて居り、随つて此の體驗の方も亦如何程でも複合的なノエシスの統一であり得るのである。

(一) 一二二頁参照【「斯くて吾々は二つの」以下】。

(二) 『算術の哲学』【"Philosophie der Arithmetik" 寺田弥吉訳 1933】、八〇頁其他各所参照。

一一九、複定立的作用の単定立的作用への転化

肢体を有つ綜合定立 *membered syntheses* 即ち複定立的作用の**すべての種類に就いて**、先ず第一に注意すべきは次の事である。即ち、

綜合定立的・統一的なる意識の各々は、特殊的なる定立乃至綜合定立が如何に多くそれに含まれているにしても、綜合定立的・統一的なる意識としての右意識に属するところの総体対象 *total object* を有っている。これが低次乃至高次段階の綜合定立的肢体 *members* に指向的に属する諸対象と対立させて総体対象と呼ばれるのは、後者諸対象がすべて、矢張基づけに依つて前者総体対象に寄与し且つ含まれるからである。限界ある独特のノエシスの各々は、よしそれが非独立的な層であるにしても、己れの持分を総体対象の規整のために寄与する。例えば、必然的に事物意識に基づけられている故に非独立的なる評価という契機も、对象的なる価値層即ち『有価値性』の層を規整するのである。

嚮に挙げた最一般的なる意識綜合定立の特に綜合定立的と呼ぶべき諸層も、換言すれば特に綜合定立的意識そのものから由来している形式のすべても、随つて又結合形式や、肢体そのものに（それが綜合定立の中へ含入されている肢体なる限り）附着する綜合定立的形式やも、皆右の新しき層に属するものである。

嚮に吾々は、綜合定立的意識に於いては綜合定立的總体対象が規整されると言った。けれども綜合定立的意識に於いて此の總体対象は、端的定立に於いて規整されたものとは全く別の意味で『対象的』である。綜合定立的意識乃至それに『於ける』純粹我は、対象的なものに**多線的**に向う。然るに端的に定立的な意識は**一本**の線に向う。それゆえ綜合定立的集合 collecting は『複数的』意識である。即ちこの意識は、一つ、一つ、一つと取り蒐められる。同様に又本原的 primitiven な関係づける意識に於いては、関係が二重の措定に於いて規整される。其他何れの場合にも同様である。

綜合定立的对象性——これはその本質上『**根源的**』にはただ綜合定立的にのみ意識せられ得る——の右の如き多線的（複定立的）規整の各々は、**多線的に意識されたものを、一本の線で端的に意識されたものへと転化させる事**、即ち前者に於いて綜合定立的に規整されたものを、『**単定立的 monothetischen**』作用に依つて**独特の意味で『对象的にする事**』が、本質法則上可能であるという性質を有っている。

斯くして、綜合定立的に規整せられたる**蒐合 collection** は特異の意味に於いて对象的となる。即ちそれは、端的なる信憑的定立が今述べた根源的に規整された集合に**退帰的に**関係する事に依つて、随つて定立が綜合定立にノエシス的に特殊な結びつき方をする事に依つて、端的なる信憑的定立の対象となる。これを換言すれば次の如くである。**複数的意識は本質上單数的意識へ移され得る**。後者は前者から一つの対象として、即ち單独的のものとして多数性という性質を取り出して来る。そうすると多

i 「退帰的に關係する事に依つて」 in der Rückbeziehung (英 in the relation of a simple positing back to the collection)

数性の方は別の多数性乃至他の対象と結合されたり、それ等と関係せしめられたり等々され得る。

蒐合 collecting 意識に全く類比的なる構造を有つ選言的意識並びにその存在の乃至ノエマ的関連者にあつても、事情は明らかに同じである。同様に関係づける意識から、それに結びついている端的定立の形で、綜合定立的根源的に規整されている関係を取り出してそれを特異の意味に於ける対象となし、且つかかる対象として他の諸関係と比較し、一般に諸賓辞の主辞として用いるという事ができる。ところが此処で完全に明証にせねばならぬ事がある。それは、端的に対象化されたものと綜合定立的に統一なるものとは実は同じものであるという事、それから、次いで来る定立乃至取出しは綜合定立的意識に対して何等捏造的に附加するのではなくして綜合定立的意識の与えるものを把握するのであるという事である。与えられ方が本質的に異なることも亦勿論明証的である。

論理学に於いては此の合法則性は『名辞化』の法則に於いて現れている。これに依れば各々の命題及び命題に於いて区別できる各々の部分形式には名辞的なるものが対応する。即ち命題そのもの——例えば『SはPである』という如き——には「**という事**」で括つた**名辞的命題**が対応するのである。例えば新しい命題の主辞の場所では『Pである』には「Pである事」が、『類似的』という関係形式には**類似性**が、複数形式には**複数性**が対応する等々である。^(二)

『名辞化』から生ずる概念は、専ら純粹形式に依つて規定されると考えれば、**対象性一般という理念の形式的・範疇的な転化** [formal-categorical variations] をなしているものであつて、形式的存在学——これには形式的数学の全学科が含まれる——の基礎的な概念材料を提供するものである。此の事は、

命題の論理学としての形式的論理学と一般的形式的存在学との關係を了解する上に決定的な意義がある。

(一)『論、研、』第二卷、第五研究、第三四—三六節、更に第六研究の第四九節に現れたる最初の試論を参照。
又一般に綜合定立論に就いては右第六研究の第二篇を参照。

一二〇、綜合定立の領界内に於ける措定性と中和性

すべて本来の綜合定立——いつも吾々が念頭に置いて來たのはこれである——は、端的定立の上に築かれる(此處に端的定立というのは嚮に吾々の確定した広い意味、即ちすべての『指向』、すべての『作用性格』を包括する意味である)。そして**本来の綜合定立そのものが定立**、即ち高次段階の定立なのである。^(二)それ故、顕在性及び非顕在性、中和性及び措定性に関する吾々の論定はすべて、別に詳説を要せずして移して以て綜合定立にも当て嵌められる。

それに反して、基づける定立 fundierenden Thesen の措定性乃至中和性は基づけられたる fundierten 定立のそれに対して、如何なる種々の仕方で關係するかという事を論定するには、此處で一層詳細な研究を必要とする様である。

単に吾々が綜合定立と呼ぶ特殊的な基づけられたる作用に就いて許りでなしに一般的に、高次段階の措定的定立は専ら低次段階にある措定的定立のみを前提すると無造作に言えない事は明らかである。例えば、顕在的な本質諦視は勿論措定的作用であつて、中和化せられたる作用ではない。中和

化せられたる意識は範例を直観する何等か或る意識（此の意識の方は勿論、中和的意識、想像意識であり得る）に基づけられているのである。同様の事が、現出している適意客観に就いての美的適意に對しても、模写的『写像』に於いての措定的なる模写意識に對しても、言われ得る。

抑今度は吾々の関心を有つところの綜合の群を考察するに、直ちに認められる事は、此の群に於いては**各々の綜合定立は、その措定的性格の点で、それを基づけるノエシスの措定的性格に依属している**という事である。更に精確に言えば、低次定立の全体が措定的である場合には綜合定立は措定的であり（措定的ならざるを得ず）、然らざる場合には綜合定立は中和的であるという事である。

例えば、蒐合する事は、現実的に蒐合するか或は『宛も』の様態で蒐合するかかである。即ち現実的に定立的か或は中和化的に定立的かである。前者の場合では、個々の蒐合肢体に關係する作用の全体が現実的定立であり、後者の場合ではそうでない。此の他すべての、論理的なる文章法的形式に反映する部類の綜合定立に於いても事情は同一である。純粹中和性は決して措定的綜合定立に對して作用し得ない。尠くともそれは『推定 Ansatz [提起された論題]』への転化を受けねばならない。即ち或は仮言的なる前件乃至後件とか、例えば『ディオニュシオス偽書』の如き仮定的に推定された名辞とか等々への転化を受けねばならない。

（一）なお綜合定立という概念は、二重の意味——殆んど弊害はないが——を有っている。というのは或時は綜合定立的現象全部を指し、或時は該現象の最高定立なる單なる綜合定立的『作用性格』だけを指すのである。【複数の定立を持つということ、それを一つの定立としていること。】

一二一、情緒及び意志の領界に於ける信憑的なる文章法的形式 Syntaxes

抑若し吾々が、如何にして右標題の種類の綜合定立は、命題の論理的形式論が組織的に展開するところの供述命題の文章法的形式を以て表出されるに至るかを問うならば、答は即座に与えられ得る。吾々は言うであらう、それはとりも直さず**信憑的綜合定立**であると。或は又（それが表されるところの論理的・文法的なる文章法的形式を想つて）**信憑的なる文章法的形式**であると。信憑的作用特有の本質には、『そして』という文章法的形式、乃至は複数形式、『或は』という文章法的形式、主辭措定を基底としての賓辭の關係づけの措定という文章法的形式等々が属する。『信 Claude』と論理の意味に於ける『判断 Urteil』とは（これ等をそのまま同一視せんとする人はないにしても）密接に相属するものであるという事、信綜合定立 Glaubenssynthesen の『表出 Ausdruck』は供述命題の形式を採るという事、此の事は勿論誰しも疑わないであらう。この事は如何に正しいにしても、猶お上述の見解が真理の全体を包括するものでないという事も見易い所である。『そして』、『或は』、『若し……ならば』乃至『……であるから』、及び『それ故』等の綜合定立——約言すれば先ず最初は**信憑的**として現れる綜合定立——は、決して**単に信憑的**なる綜合定立ではないのである。

右の如き綜合定立が**非信憑的定立**に固有なる本質にも属するという事はひとつの根本事實である。それは即ち次の如き意味に於いてである。

蒐合的喜悦、蒐合的適意、蒐合的意欲等々の如きものがあるのは疑いない。これを私の慣用語を以

て換言すれば、信憑ドクサ的なる『そして』（論理的なる『そして』）の外に又価値論的乃至実践論的なる『そして』もあるのである。同様な事が『或は』及び此の種の綜合定立のすべてに就いて当て嵌まる。例えば、我が子の群を可愛げに眺めている母親は、愛という一つの作用に於いて各々の子供一人々と、引くるめて全部の子供とを包括している。愛という蒐合的作用の統一は、愛とそしてそれに加えて蒐合的表象作用とではない——蒐合的表象作用は必須の根柢として愛に下屬しているとはいへ。そうではなくして愛することそのことが蒐合的なものである。換言すればそれはその『根柢に在る』表象作用乃至時に複数的判断作用と等しく多線的である。吾々は、複数的なる表象作用乃至複数的なる判断作用の場合と全然同じ意味で、複数的愛ということを言つても毫も差し間違えない。文章法的形式は情緒作用そのものの本質の中へ、即ち特に情緒作用に固有なる定立的層の中へ入り込んで行く。この事は此処では綜合定立の全体に互つて詳論するを得ない。ただ暗示を得るには右の例で十分であろう。扱ところで吾々は、嚮に研究したところの信憑ドクサ的定立と定立一般との本質的姉妹關係を想起しよう。定立一般の各々の裡には、それが例えば右の愛の指向としてのノエマ的に働くものに従つて、それに並行的なる信憑ドクサ的定立が蔵されている。信憑ドクサ的定立の領界に属する文章法的形式とそれ以外のすべての定立に属するそれとの間の並行（信憑ドクサ的なる『そして』、『或は』等々と価値的乃至意志的なるそれとの並行）は、明らかに右の本質的姉妹關係の特殊の場合である。何故ならば綜合定立的情緒作用——綜合定立的というのは即ち、右に論究した文章法的形式から見てである——は、**綜合定立的な情緒対象性**を規整する（これは相応せる信憑ドクサ的作用に依つて顯現的に客觀化されるに至る）からである。

愛の客観としての愛せられる子供の群はひとつの**蒐合体**である。それは、吾々が嚮に論述した所に依つて双関關係を示して言い表せば、単に具體的な蒐合体とそして**それに加えて**愛とを意味するのではなく、ひとつの**愛の蒐合体**を指すのである。ノエシスの観れば、我から発出する一本の愛の線は一束の何本かの線に分かれ、これ等の線は夫々個々の客観に向う。それと同様に、夫々の場合に蒐合されているところの対象と同数の**ノエマ的な愛性格**が愛蒐合体そのものに分布される。随つて矢張り同数の措定的性格があつて、それ等の綜合定立的に結合して措定的性格のノエマ的統一をなす。

惟うにすべてこれ等の文章法的形式は並行形式である。換言すればこれ等は特有の情緒成分及び情緒綜合定立を有てる情緒作用自身に属するものでもあり、同様に又これ等と並行的にして且つその本質を一にする**信憑的**^{ドクサ}措定性——これはその時々々の低段階及び高段階へ適当に視向を擬向する *Blickwendungen / turning of one's regard* 事に依つて右の文章法的形式から取出され得る——にも属するものである。此の事は勿論ノエシスの領界から移してノエマ的領界へも当て嵌められる。価値論的なる『そして』は己れの裡に本質的に、**信憑的**^{ドクサ}なる『そして』を蔵している。即ち此処に考察する群に属する価値論的なる文章法的形式の各々は論理的なる文章法的形式を蔵している。この事は、端的なるノエマ的双関者の各々が己れの裡に、『存在の *seind* 【存在する】』という様相か或は他の存在様相と、それから右様相の基体として、『或るもの *etwas*』という形式及び其他右様相に属する諸形式とを含んでいるのと、全く同様である。吾々がその中に於いて言わば只管情緒に浸つて——それゆえ**信憑的**^{ドクサ}潜在性を顕在化せずに——生きているその情緒作用から、最初は単に潜在的なる情緒対象性が顕在的なる、

即ち信憑的^{ドクサ}に又時には表出的に表明されたる情緒対象性へ、それに於いて転化するところのその新しき作用を作り出すというのは、常に、特殊な且つ本質可能的なる視向擬向とそれに一緒に含まれている定立的又は綜合定立的・信憑的^{ドクサ}なる手続との為す業である。此の場合次の事は可能であり、且つ又経験的生活に於いては極めて普通の事である。それは即ち、吾々は例えば若干の直観的对象を信憑^{ドクサ}的に措定しつつそれを眺めるという事、同時に又綜合定立的なる情緒作用——例えば蒐合的適意の統一、或は選出的情緒作用即ち愛好的適意乃至忌避的不適意の統一——を、全現象を信憑^{ドクサ}的に翻すに至る様な事を全くせずに、遂行するという事である。けれども此の全現象を信憑^{ドクサ}的に翻すという事は、例えば多くのもの又は多くのものの中の一つのものに対する適意に関し、或は他のものに較べて一つのものの特に好むという事に関し（等々で）供述を行う場合には、吾々はこれを行うのである。

価値論的乃至実践論的なる対象性、意義、意識仕方等の本質を認識するには、随つて又倫理的な、美的な、その他それと本質上親近な概念や認識の『根源』の問題を解くには、右の如き分析の慎重なる遂行が如何に重要であるかは取り立てて言う迄もない。

此処では固々吾々の課題は、現象学的問題を解決する事ではなくて、現象学的主要问题を学的に取り出して来たり、又はその問題と関聯する研究方向を描出するにある。それゆえ吾々としては議論を此処迄運んで来れば十分であるに相違ない。

（一）著者が此の根本事実に想い当つた（既に十年以上も以前）のは、形式的なる価値論及び実践論を形式的論理学に類比的なるものとして考案しその実現を試みた時の事である。

一二二、肢体ある綜合定立の遂行様態、『主題』Artikulierten Synthesen【分節化された綜合】

普遍の変様の重要な一群が定立と綜合定立との領分に属するが、それを手短かに指示するには直ぐ此処に續けて論ずるのが最も便宜である。

綜合定立は一步一步**遂行**され得る。即ちそれは**根源的生産** ursprünglicher Produktion に依つて生成し發生する。かく生成が意識の流れにその根源をおくことは全く独特のものである。定立及び綜合定立は、純粹我がその歩みを——新しく一步踏出す毎に——顕在的に進めるといふ事に依つて生成する。純粹我そのものは此の歩みの中に生き、これと共に『歩行』する。措定、或るものに對する措定、前提としての措定、結論としての措定等々は、純粹我の**自由なる自発性乃至能動性**である。純粹我は定立の中に在る受動的なるものとして定立に於いて働くのではなく、定立は産出の源泉としての純粹我からの放射である。各々の定立は**起定點**を以て即ち**根源措定**の點を以て初まる。最初の定立も、綜合定立の聯関の中に在る更に進んだ定立の各々も矢張りそうである。此の『起定』は、根源的顕在性の顯著なる一樣態として、まさしく定立そのものに属する。それは宛も fiat **〔生成あれ〕**【斯くあれかし】、即ち意欲及び行動の起定點と似ている。

ではあるが吾々は一般的なるものと特殊的なるものとを混同してはならない。自発的決意、意志的、実行的行為は他の作用と並んで**一個**の作用である。その綜合定立は他の綜合定立の間にあつて特殊

i 「起定點」Einsatzpunkt (英 point of initiation)、『起定』Einsetzen (英 initiation) 渡辺訳「出動開始」。(Einsetzen)

の綜合定立である。併し種類の如何を問わず各々の作用は、言わば創造的な始原——これに於いて純粹我は自発性の主体として出現する——なる此の自発性樣態に於いて始まり得るものである。

此の起定 *Einsetzen* 樣態は直ちに、そして本質必然性に随つて、別の樣態へ移つて行く。例えば知覺に依る、**把捉** *Erfassen*、**捕捉** *Ergreifen* は即刻連續して『**把持** *im Griff haben*』へ轉化する。

定立が綜合定立への單なる進行だったのであつて、純粹我が新しく一步を進めて、今や、今し方把持していたものを綜合定立的意識の遍漫的 *durchgehenden / all-inclusive* 統一に於いて『**猶お**』**把持**『**保有**』しているという場合には、又別の新しい樣態變化が繼發する。『猶お』**把持**『保有』というのは、新しい主題的客觀を把捉し、或は寧ろ總体主題中の新肢体を主要主題として把捉し、然も以前に捕えた肢体を矢張り今の總体主題に属するものとして保持するのである。例えば私が物を蒐合する場合に、把捉的視向を新しい客觀に向けている間に、今し方知覺に依つて把捉したものを逃がさないという如きがそれである。証明を行いつつある場合には私は、前提思想を一步一步通過して行き、綜合定立的進行を放棄する事なく、既に獲得したものは之を手放さない。併しながら新しき主題として原顕在性が遂行されると同時に顕在性樣態は本質的に變化してしまつてゐるのである。

勿論此處では不明化も亦問題ではあるが、併し問題は**單にそればかり**ではない。寧ろ今吾々が述べようと試みた区別は明晰不明晰の区別に比して全く新しい次元を提供する（此の兩つの区別は互いに甚だ密接に纏れ合つてはいるが）。

更に氣のつく事は、右の新しい区別も、明晰度の区別乃至その他すべての指向的区別と等しく、ノ

エシス・ノエマ双関関係の法則に支配されるという事である。それゆえ此の場合にも亦、此の場合の種類のノエシスの顕在性変様にはノエマの変様が対応する。換言すれば、定立の変転乃至綜合定立の進行に於いて『思念されているものそのもの』の与えられ方は変化する。そして此の変化は、その時々
のノエマ的内実自身に於いて示される事ができ、又それに於いて固有の層として浮彫うきぼりの如く明示され得る。

斯くの如き仕方では顕在性様態（ノエマ的に言えば所与様態）は——流水の如く連続的な変化の事は姑く措いて、或る**断絶的範型**に従つて必然的に変化する。然も此の変化を貫いて、本質を共通にする或るものが引き続いて存留する。ノエマ的には同一的**意味**としての「何」が存立を持続し、ノエシスの側面では此の意味の双関者が、更には定立乃至綜合定立に随つての分枝の全形式が存立を持続する。

扱ところが今度は新しい本質変様が起きる。純粹我は定立から全然**退去**し得る。即ちそれはその『**把持**』から定立的双関者を**解放**する。換言すれば**純粹我は『別の主題に転向する』**のである。たつた今迄はまだ純粹我の主題（理論的、価値論的等の）であつたもの——と同時にその（多少とも不明になつてはいるが）分枝のすべてを含めて——は、意識から消失してしまつたのではなくて矢張り意識されてはいるのだが最早主題として把持されてはいないのである。

この事は綜合定立の肢体に就いての如く、孤立的定立に就いても言い得られる。今私は瞑想している。すると街の方からの口笛が、一瞬時私を私の主題（此処では思惟主題）から転ぜしめる。一瞬間

は音響の方へ向うのであるが、併し又間もなくもとの主題に帰る。音響把握は消失してしまったのではなく、口笛は依然変様されている。けれども最早精神的に把持されているのではない。口笛は主題に属しているのではない。並行的主題にすら属してないのでない。吾々の気づく通り、同時的な時に互いに**交叉し『攪乱』する諸主題**乃至主題的諸綜合定立の右の如き可能性は、更にそれ以上の可能的変様を暗示し、そしてあらゆる基礎的種類の作用乃至作用綜合定立を指す『**主題**』なる標題は、實際現象学的分析の重要主題をなしているのである。

一二三、綜合定立的作用の遂行様態としての混乱性と判明性

扱吾々は猶お、上に優先的に待遇した様態を源泉とする顕在性と言わば反対の方向に在る遂行諸様相を考察しよう。或る思想は、單純にか又は多様の定立を具えて、『**混乱的**』思想として出現する事があり得る。その時それは、如何なる顕在的・定立的なる分枝をも有たぬ端的表象の如くに現れる。例えば吾々は或る証明、理論、談話等を想い起す——『それは吾々の念頭に浮ぶ』。にも拘らず最初は吾々は決してそれに向つてはいない。即ちそれは『背景』に於いて出現している。次に自我視向 a regard of the Ego は一線的 einstrahlig / single ray に、当該ノエマ的対象性を非肢体的把持に依つて an unmembered grip 把握しつつ、それに向う。そうするとひとつの新しい過程が始まり得る。混乱的再回想は**判明**、明晰なるそれへと移行する。即ち、吾々は歩一步一步と証明行程を回想する。吾々は論証提題や綜合定立を『再』産出する。吾々は昨日の談話の経過を『再』通過する等々。勿論、再回想——即

ち『以前』の原的産出の再産出——に依る右の如き再生産は、本質的ならぬものである。複雑なる理論を成就するために吾々は、例えば**新しい**理論の著想を、初めは統一はあるが混乱的に、次には進行を自由行為的に行つて、展開した。そしてそれを綜合定立的なる顕在性へ転化せしめた。以上示した事はすべて、言う迄もなく同様な仕方で、あらゆる種類の作用に適用され得る。

混乱性と判明性との此の重要な区別は、後に至つて論すべき『表出 *Ausdrücke*』の、即ち表出的なる表象 *Vorstellungen / objectivings*、判断、情緒作用等々の現象学に於いて重要な役割を演じている。此の事は、吾々の其時々読書の『思想内容』をなす所の元来常に甚だしく複雑なる綜合定立的成体を吾々が把握する慣いなるその仕方を想い、且つ又、読んだものの了解に於いて、此の所謂「表出の思想的根柢」の点で、真に原的に顕在化されるものは何であるかを考えるならば、明らかになるであろう。

一二四、『ロゴス』のノエシス・ノエマ的層、意義作用と意義

表出の作用層即ち特に『論理的』と呼ぶべき作用層は、以上考察した作用のすべてと交織しているのであつて、それに於いても等しくノエシス・ノエマの並行は明らかにされ得る。此の並行關係に依つて惹き起されるところの、且つ当該（並行）關係が言葉に表される場合には必ず働くところの、一般に行われて避け難い用語法の二義性は、表出とか意義とかいう言葉を使う場合にも勿論矢張働く。此の二義性が危険なのはただ、此の二義性を二義性と認めなかつたり、或は並行的諸構造を区別しな

かつたりする間に限る。けれどもその区別が行われた場合には吾々は、その時の用語が何れの構造を指すべきなのかを其時々疑いのないように気を付けさえすれば宜い。

吾々は、表出の感性的な、言わば身体的な側面と、非感性的な、『精神的』な側面との区別から議論を始めよう。前者の詳細な論述に入る必要はない。又両側面の合一仕方に就いても等しくその必要がない。併し言う迄もなく之等も、現象学上の重要な問題を示す名称ではある。

吾々は専ら『意義作用』及び『意義』に注目する。元来これ等の言葉は単に言語の範圍即ち『表出作用』の範圍に関するものである。けれどもこれ等の言葉の意義を拡大して適当に変様する事は、殆んど避け難い事でもあり同時に又重要な認識の進歩でもある。そうする事に依つてこれ等の言葉は、或る仕方では、ノエシス・ノエマ的範圍の全体に、それゆえ又表出作用と絡み合っていると否とを問わずすべての作用に、適用されるようになる。⁽¹⁾それで吾々も、すべての指向的体験の場合に、常に『意味 Sinn』という言葉を使つた（尤も此の言葉は一般には『意義 Bedeutung』と同義に使われるが）。明瞭を期するため吾々は、旧來の概念を表すには**意義**という言葉の方を採りたい。とりわけ『**論理的**』乃至『**表出的**』**意義**と連用する場合にそうである。意味という言葉は、今後も之を従来通り意義よりも範圍を広く使用しよう。

一例をとつて言うならば、知覚に於いては或る対象が、一定の意味を有つて、一定の充実さに於いて単定立的に措定されて、其処に在ると言えるであろう。この対象は通例最初の、端的なる知覚的把

捉に直ちに結び付くのを常とするものであるが、吾々は、与えられたものの表明ⁱと、取出した部分乃至契機を関係づけて一つにする事とを、『これは白くある Dies ist weiß.』という図式に随う如き仕方ⁱで、遂行しよう。此の過程は毫も『表出』を必要としない。語音の意味での表出をも、言葉の意義作用の如き表出をも必要としない（此の場合後者は勿論語音からは——語音が『忘れ』られる場合の如く——独立にも存し得る）。けれども吾々が『これは白くある』と『思惟』乃至『供述』した場合には、それと同時に新しい層が、純粹に知覚的に『思念されたそのもの』と一つになつて、其処に在る。此の仕方でも、回想されたもの、想像されたそのものの各々も、表明され表出され得る。或る任意の作用の、『思念されたそのもの』の各々、ノエマの意味（即ちノエマの核）に於いて思念されたものの各々は、『意義』に依つて表出せられ得る。それゆえ吾々は一般的に左の如く論定する。即ち、

論理的意義は表出である、と。

語音が表出と呼ばれ得るのは、それに属する意義が表出するからに外ならぬ。意義の中には元來表出作用が含まれているのである。『表出』は、すべての『意味』（ノエマの『核』）に順応してこの意味を『ロゴス』の、**概念的なるもの**の、随つて又『**普遍的なるもの**』の国に高めるところのひとつの注目すべき形式である。

此の場合右最後の語句は、明確に規定された意義に解してあるのであつてその意義はこの語の爾余の意義からは区別せられねばならぬ。概して今指示した事は、論理的思惟とその双関者との本質闡

i 「表明」 Explizieren (英 explicating) 渡辺訳「説明開陳作用」

明の根柢をなすところの現象学的分析の大きな主題を示すものである。ノエシスの側から観れば『表出作用』という名称は特殊の作用層を指すべきであつて、此の作用層には爾余すべての作用が独自の仕方で順応せしめられ得、随つて此の作用層と著しく融合せしめられ得る——この事は恰も、各々のノエマ的作用意味、随つて又それに含まれている「対象性への関係」が、表出作用の有つノエマ的なものに依つて『概念的』に表されるという仕方に依るのである。此処に或る独特なる指向的媒体が存するのであつて、それは、各々の他の指向性を形式上及び内容上言わば反映し、独自の着色して模写し、同時に又それに『概念性』なる自己独自の形式を付与するという特徴をその本質上有つてゐる。勿論此処に止むを得ず使用している反映とか模写とかいう言葉は、その使用を媒介する譬喩性が人を誤らせ易いものであるから、注意して受取られねばならない。

意義作用及び意義という名称の示す現象には、異常に困難なる問題が結びつく。^(三) 各々の学は、その理論的内実、即ちそれに於いて『学説』であるもの（定理、証明、理論）から観て、特に『論理的』というべき媒体即ち表出なる媒体に於いて客観化される。それゆゑ表出及び意義に就いての問題は、普遍的に論理的なる関心に導かれてゐる哲学者や心理学者達にとつては、最も手近かの問題であり、随つて又、真面目にその根柢を探ろうとすれば直ちに一般に現象学的なる本質研究に迄進まざるを得ざらしめるところの第一の問題である。此の点からして人は左の如き問題に導かれる。即ち、『表出されるもの』を『表出する』という事は如何に解すべきか、表出的体験は非表出的体験に対し如何なる関係にあるか、非表出的体験はそれに附加する表出作用に依つて何を受けるか、等という問題であ

る。換言すれば人は左の如きものを示されているのを知るのであらう。即ち非表出的体験の『指向性』、それに『内在する意味』、『質料』と性質（即ち定立の作用性格）、先表出的なるものの裡に存する此の意味とこれ等の本質契機とが表出現象そのものの意義及び該意義固有の諸契機に対する區別、等々がそれである。此処に指示した大問題が、その十分なる深い意味から云つて、如何に低く評価される慣いであるかという事を、吾々は現代人の文献から今猶お屢々発見するのである。

表出なる層は——これはその特質をなす点であるが——、爾他すべての指向的者 *Intentionalen* にまさに表出を与えるという事を除けば、生産的でないのである。これは又次の如く言換えても差し間違えない。即ち、**その生産性即ちそのノエマ的作業は、表出作用並びにそれと共に新しく入り来る概念的なるものという形式に尽きる、と。**

此の場合表出する層は表出を受ける層と、定立的性格から観て、その本質が完全に一致している。そして此の合致に依つて前者は後者の本質を己れの裡へ余蘊なく取入れるゆえ吾々は、表出的なる表象をそのまま表象と呼び、表出的なる信、推量、疑いをその俚まとめて常に信、推量、疑いと呼び、同様に又表出的なる願望乃至意欲を即ち願望乃至意欲と呼ぶのである。規定性と中和性との區別も表出的なるものへ移行するという事は明らかな事実であつて、此の事は嚮に既に吾々の論及したところである。**表出する層は表出を受ける層と別の性質の措定的乃至中和的定立は有ち得ないのであつて、両層の合致の中に吾々の見出すのは區別さるべき二つの定立ではなくしてただ一つの定立である。**

右に属する構造を完全に解明する事は非常な困難を伴う。感性的なる語音層を捨象した後にも、吾々

が此処に予想した如き種類の成層が猶お實際に存在する、それゆえ如何なる場合にも——如何に不明晰な、空虚な、単に言葉の上だけの思惟というような場合に於いてさえも——表出的意義作用の層及び表出されるものの底層が存在するという事実、此の事実を承認する事すらが既に容易ならぬ。況んやこれ等成層の本質聯関を了解する事に至つては一層容易でない。何故ならば吾々は成層という譬喩に囚われ過ぎてはならぬからである。蓋し表出なるものは上に塗つたラックとか上へ着た着物とかいう如きものではない。それは或る精神的形成であつて、これは指向的底層に新しき指向的機能を加え且つ又それから双関的に指向的機能を受けるものである。此の新しい譬喩が又何を意味するかは、現象そのもの及び現象のすべての本質的変様に徴して学ばねばならぬ。とりわけ重要なのは、其の場合に現れるところの種々異なつた種類の『普遍性』(Allgemeinheit) に対する了解である。即ちそれは一方に於いては、各々の表出及び表出契機、並びに又非独立的なる『ある』、『非』、『及び』、『…』の時に『等々に属する所の普遍性を意味し、他方に於いては『ブルーノ』の如き固有名詞に対して『人間』という如き『普通名詞』(allgemeine Namen) を指す、更に又別の場合には、右に述べた相異なつた意義の普遍性と比較してそれ自身に於いて文章法的形式を有たぬ所の本質に属する普遍性をも意味するのである。

(一) 此の点に就いては『算術の哲学』二八——二九頁参照。其処では既に『現象の心理学的記述』と『現象の意義の明示』とが区別されて居り、『論理学的内容』が心理学的内容に対立して論じられている。

(二) この事は之等の現象がその主要主題をなしている所の『論、研、』第二巻から知られる。

(三) これこそは実に、『論、研、』が現象学へ侵入せんと努めたあの途であつた。反対の側面即ち経験及び感性的所与という側面から行く第二の途、即ち著者が矢張り一八九〇年代の初め以来辿つた途は、右の著書では十分に示されなかつた。

一二五、論理的・表出的領界に於ける遂行様相と、闡明の方法

勿論以上示した困難を説明するには、嚮に論じた頭在性様態の差異を特に考慮せねばならぬ。即ち定立及び綜合定立のすべて——随つて又表出的なるそれ——に加わるところの作用遂行様相の差異である。ところでこの加わり方は二重である。即ち右様相は一方に於いては意義の層即ち特に論理的と呼ぶべき層そのものに加わり、他方に於いては基づけるところの底層 *Unterschichten* に加わる。

読書の場合吾々は、各々の意義を明確且つ自在に遂行する事ができる。と同時に又嚮に示した仕方で意義と意義とを綜合定立的に結合する事ができる。真の産出という様態に於ける此の意義作用の遂行に依つて吾々は、『論理的』了解の完全なる判明さを獲得する。

此の判明さは、嚮に述べたあらゆる様態の混乱へ移り得る。例えば、たつた今読んだばかりの文章がぼんやりとして来て、生き生きとした明確さを失う。即ちそれが吾々の『主題』でなくなり、『猶お把持されてい』なくなるという如きである。

けれども斯くの如き判明性及び混乱性は、表出される底層に関するそれとは區別されねばならぬ。語乃至文の判明なる了解（乃至は供述作用の判明、明確なる遂行）は、底部の混乱と相容れぬもので

はない。底部の混乱は、不明晰をも意味するが、単にそののみを意味するものでない。底層は混乱せる統一体であり得る（そして多くの場合そうである）。此の統一体はその明確さを己れ自身の裡に顕在的に有するのではなくて、論理的表出の真に明確に且つ又根源的顕在性に於いて遂行された層への単なる順応にその明確さを負うている。

此の事は極めて重要な方法論的意義を有っている。嚮に学の生命素なる供述を顧慮して吾々の述べた所の**闡明の方法**に就いての論述が、本質的補足を要するという事を吾々は注意しよう。混乱の思惟から本来的にして且つ十分に顕現的な認識——即ち思惟作用の、判明なると同時に又明晰なる遂行——へ達するに必要な事柄は、今や容易にこれを示す事ができる。即ち先ず第一にすべての『**論理的**作用（意義作用）』は、それが未だ混乱の様態に於いて遂行されていた限り、原的な自発的顕在性の様態へ移されねばならぬ、随つて完全なる**論理的判明性**が獲られねばならぬというのである。ところが併し基礎づける所の**底層**の方に於いてもこれと類比的の事を行わねばならぬ。即ちすべての生き生きとしていないものを生き生きとしたものへ、すべての混乱を判明へ、更に又すべての非直観性を直観性へ転化させねばならぬ。吾々が底層に於いてこの為事 *Arbeit / work* を遂行して初めて——但し、此の為事に於いて撞着が現れて来て、そのため更に為事を進める事が無用になるのでない限り——嚮に述べた方法が働き出して来る。此の場合考慮すべき事は、直観即ち明晰意識という概念は、単定立的 *monothetical* 作用から移して綜合定立的作用にも当て嵌まるという事である。

猶お他に問題となるのは、更に深く分析すればわかる通り、各々の場合に獲らるべき**明証の種類**、

乃至はその明証の向けられてゐる層である。純粹に論理的な關係——ノエマ的意義の本質聯関——に就いての明証のすべて——随つて吾々が形式的論理学の根本法則から獲る明証——は、意義が与えられるという事をこそ、換言すれば、当該意義法則の指定する形式の表出的命題が与えられるという事をこそ必要とする。意義の非独立性という事は、法則の明証を媒介する「論理的本質成体の例証」も底層——即ち論理的表出を受ける底層——を伴うという事を含んでいる。けれども此の底層は、純論理的洞観が問題となつてゐる場合には、明晰にする必要がない。以上の事は、適當なる変様の下に、応用論理的なる『分析的』認識のすべてにも当て嵌まる。

(一) 上述第一二二節、二三五頁以下参照【「肢体ある綜合定立」以下】。

(二) 第六七節、二〇頁以下参照【「六七、闡明の方法」以下】。

一二六、表出の完全性と普遍性

更に進んで特に挙ぐべきは、完全表出と不完全表出との區別である。^(一)現象に於ける表出者と被表出者との統一は成程或る合致という統一である。併し上層は必ずしもその表出を全底層に及ぼすを要しない。表出は、それが底層の綜合定立的形式及び材料のすべてを概念的、意義的に表す場合には完全であり、単に部分的に表す場合、例えば、長く待った客を載せた車が入つて来るというような複合的な出来事を眺めて、車だ！ お客様だ！ と家の中へ叫ぶ如き場合には、表出は不完全である。——勿論完全性の此の區別が、相對的な明晰、判明の區別と交叉する事は言う迄もない。

表出そのものの本質即ち表出の**普遍性**に属するところの不完全性は、右に述べたものとは全然別個の不完全性である。『あれかし』は願望を、命令形は命令を、『でもあろう』は推量乃至推量的なるもののものを、等々と普遍的に表出する。表出の統一に於ける一層詳しい規定も亦、すべてそれ自身普遍的に表出されている。表出作用の本質に属する普遍性という意味の中には、被表出者の特殊性のすべてが表出に於いて反射し得るわけでは決してないという事が含まれている。意義作用なる層は、底層の一種の重複ではない——而も原理的に。底層に於ける可変性の全次元は決して表出的意義作用の中へ入っては来ない。即ちその次元乃至その双関者は無論決して『表出せられ』ない。例えば相対的な明晰、判明の変様、注意的変様等々がそうである。けれども又、本質的区別の由来は表出という言葉の特別の意味が示すところのものにも存する。この事は綜合定立的形式と綜合定立的材料とが表出される仕方に就いて言い得られる。

なお此処で注意すべきは、すべての形式意義及びすべての『共義的』意義一般の『非独立性』という事である。孤立した『及び und / and』、『……の時に wenn / if』、孤立した所有格『天の des Himmels / of the heavens』等も意味はわかるが、然も非独立的であり、補足を必要とする。此処で問題となるのは、^(三) 斯く補足を必要とするという事は何を意味するか、其の事は両つの層に就いて、又不完全なる意義作用の可能性に関して、何を意味するかという事である。

(一) 『論、研、』、第二卷、第四研究、第六節以下参照。

(二) 同上書、第五節、二九六——三〇七頁参照。

一二七、判断の表出と情意ノエマの表出

必要な現象学的洞観を欠いた恰もそのために、從來未解決の俚に残存して来たところの、意義領界に於ける最古最難の問題の一つ——即ち**判断作用の表出としての供述作用は爾他諸作用の表出に対し如何に關係するか**という問題——を解くべき場合には、吾々は下の諸点をすべて明らかにしていなければならぬ。『その通り！ So ist es！ / thus it is!』というのが表出される表出的述定がある。表出的なる推量、問い、疑い、表出的なる願望、命令等々がある。此処で、構造の一部が独特なる、且つ二義的に解釈できる文章形式が、言語の上で出て来る。即ち供述文の外に、疑問文、推量文、願望文、命令文等々があるのである。もともとの論争は、此の場合それ等は——文法上の語音及びその歴史的形式は別問題として——同列の種類の意義であるか、乃至はこれ等文章はすべて其の意義上実は供述文ではないかという点に懸つていた。若し後者だとすれば、所属の作用成体のすべて、例えばそれ自身としては判断作用でないところの情意領界の作用成体の如きが、それに基づいている判断作用を迂回しなければ『表出』に達し得ないという事になるであらう。

併しながら、此の問題は**作用乃至ノエシス**には如何に關係を有っているにしても、それだけでは不十分であつて、斯くの如き意義の反省の場合にこそ視向がそれに向つてゐるところのノエマを常に看過してゐるという事が、事象の了解を妨げるのである。此の場合単に正確な問題設定に達し得ようと

i 「供述文」 Aussagesätzen (英 predicative propositions) 渡辺訳 「言表命題」

するだけにでも、総じて、吾々の示した種々異なる構造を顧慮する必要がある。即ち例えば、指向的者のすべて、定立的及び綜合定立的層のすべてを貫くものとしてのノエシスとノエマとの双関關係に對する一般的認識、論理的意義層の、それに依つて表出される底層からの區別に對する一般的認識、更には又、此処でも指向的領界の他の場所に於ける如く、本質上可能なる反省の方向及び變様の方向に對する洞觀、等を必要とする。併し特に必要なのは、各々の意識が如何にして判斷意識へ移行され得るか、各々の意識から如何にしてノエシスの並びにノエマ的種類の事態が取出され得るかというその仕方に對する洞觀である。吾々が最後に遡及させられる**根本問題**は、今述べた問題分析の全系列の聯関から結論する通り、左の如く言い表さるべきである。

表出的意義作用なる媒体、即ちロゴスなる此の獨特の媒体は、特に**信憑的**と呼ぶべき一つの媒体であるか。それは、意義作用が意義せられたものに適合する事に依つて、如何なる**措定性自身**の裡にも**必ず伏在する信憑的なものと合致するのではないか**。

種々の表出仕方——例えば情意体験のその如き——があるという事は、勿論否定できないであらう。肢体ある表出の肢体ある情意的体験への直接的適合——此の場合**信憑的なものが信憑的なものと合致する**——に依るところの、体験（或は、表出という語の意味と双関的に云えば、体験のノエマ）の直接的なる、即ち端的なる表出というのは、右の中の唯一獨特の仕方であると思われる。それ故、専ら**信憑定立的なる体験**としての表出をして、情意体験——これはそれ自体として、又その肢体すべてから觀て多様に定立的である、けれどもその根柢に於いて必然的に又**信憑定立的**でもある——

—への適合を可能ならしめるのは、すべての成分から観て情意体験に内在している所の信憑的形式であると言われるであろう。

更に精確に言えば、若し此の直接的表出が忠実完全なものだと云うならば、それは信憑的という点で様相を変ぜられていない体験にのみ属するわけであろう。私が私の願望に確信が有てない場合に、若しそれに直接に適合させて『SがPならん事を』と言ったとすれば、それは正確ではない。何故ならば、すべての表出作用は、その根柢に在る把握の意味に於いて、深い意味に於ける信憑的作用即ち信の確實性であるからである。^(二)それゆえ此の信憑的作用は単に確實性（例えば願望の確實性、意志の確實性）のみを表出し得るだけである。それゆえ右の如き場合には、忠実なる表出としては単に間接的にのみ、即ち『恐らくSはPでもあろう』という如き形式で表出を行うべきである。様相が現れるや否や、出来るだけ適合的な表出を獲るには、変化した定立的質料を有ち、右様相の裡に言わば潜伏しているところの信憑的定立を頼りにせねばならない。

今此の見解を正しいものと見做すならば、猶お補足として次の事を述べねばならない。

何時の場合にも、『迂路』に依る間接的表出というものは多様に可能である。各々の対象性はそれ自身の本質上——それが端的作用に依るか或は多様且つ綜合定立的に基づけられている作用に依るか、その孰れに依つて規整されているを問わず——関係づける表明が多様に可能であるという性質を有っている。それゆえ各々の作用、例えば願望作用には、それ乃至そのノエマ的対象性乃至そのノエマ総体に関係せる種々の作用が加わり得る。即ち例えば主辞定立、それに対して措定された賓辞

定立——これ等に於いてもとの作用では願望的に思念されたものの如きが判断的に展開され、それに対応して表出される——の聯関等がそれである。そうであるからして表出が直接に適合しているのは、**もとの現象に對してではなくして、それから導来された述定的現象に對してである。**

此の場合常に注意せねばならぬのは、**表明的乃至分析的綜合定立**（概念的・意義的表出以前の判断）と、他方に於いて供述乃至**普通の意味の判断**と、最後に、**信憑** *Doxa* (belief) (信)と、これ等は十分区分すべきものであるという事である。人が『判断論』と呼ぶものは甚だしく多義的である。信憑ドクサという思想の本質闡明は、供述乃至表明のそれとは別物である。(三)

(一) 吾々が此処で常に行っているように、表出作用を意義作用そのものの意味に解するならば、表出作用が或る信憑ドクサ的作用を**表出する**と称する事は許されない。併し若し表出作用という言葉を語音に關せしめるならば、勿論右のように言う事もできるであらう。けれどもその場合には意味は全然變つてゐるであらう。

(二) 此の節全体に於いては『論、研、』第二卷、第六研究、末章を参照の事。爾來著者は其の説に停滯していないという事、そして難点、未熟点は多いにしてもその個所の分析が進歩的方向に動きつつあるという事は、人の認める所であらう。此の分析は種々論難を蒙つた。併しながらそれ等の論難は其処に於いて試みた新しい根本思想、問題捕捉に對する眞の理解を欠いていたのである。

第四篇 理性と現実

第一章 ノエマの意味と対象への関係

一二八、緒論

前章の現象学的遍歴は、すべての指向的領界に互つて吾々を可成かなりによく案内してくれた。吾々は、実的分析と指向的分析乃至ノエシス的分析とノエマ的分析とを区別するという根本的見地に導かれて、何処までも分岐して行く構造に到る処に於いて遭遇した。此の区別の場合實際に問題となつてゐるのは、すべての指向的構造を貫通する——随つて現象学的方法の支配的な指導精神をなし且つ指向性の問題に関するすべての研究の進行を規定するに相違ない——基礎的構造に就いてである。此の事は最早蔽わんとして蔽い得ぬ明白な事実である。

これと同時に明らかな事は、根本的に対立しながら然も本質上相互に関係ある二つの存在領域の区別が、右の区別そのものと恰も一緒に現れて来たという事である。意識一般が独自の存在領域と見做さるべき事は、將に吾々の強調した通りである。ところであの時吾々の認めた所に依れば、意識の本質記述は、意識に於いて意識されているものの本質記述に遡及するのであり、意識の双関者は意識から不可分離的に、然も非実的に意識の中に含まれてゐるのである。斯くてノエマ的なものは、意識には属しながら然も一種独特なる対象性として区別された。これと同時に認められる事であるが、単な

る対象（変様されざる意味に於ける対象）の方は根本的に相違する諸最高類に属するが、対象の意味のすべて及び完全に解せられたるノエマのすべての方は、爾余の点では如何に相違していても、原理的に唯一の最高類に属しているのである。ところでそうすると又次のように言う事ができる。即ちノエマとノエシスという本質は相互に不可分離的である。換言すればノエマの側面に於ける最低種差の各々は、ノエシスの側面に於ける最低種差を形相的に遡示するⁱ、と。この事は勿論移して以て類及び種の形成に就いても言い得られる。

指向性が本質上ノエシスとノエマとの両側面を有っているという事を認めるならば、その当然の帰結として、体系的現象学としては一面的に、体験の、特に指向的体験の实的分析のみを目指してはならないという事になる。けれども初めは、此の弊に陥らんとする誘惑が非常に大きいのである。何故ならば、心理学から現象学への歴史的にして且つ自然的な進行は、純粹体験の内在的研究即ち純粹体験の固有本質の研究を以て純粹体験の实的成分の研究とするのを、宛も自明の事かの如くに思う考え方を伴うからである。実は形相的研究の広大なる範囲が両側面に向つて展開しているのであつて、此の両範囲は絶えず相互に関係してはいるが、然も、明らかにわかる通り、遙か遠くまで分れているのである。人が作用分析乃至ノエシス的分析と考へたものは、徹頭徹尾『思念されたもののそのもの』への視向方向に於いて獲られたものである。それ故その時人の記述したのはノエマの構造であつたのである。

i 「遡示」*eidetisch zurück auf* (英 *eidetically point back to*) 渡辺訳：ノエシスの側面の種差「へ」と逆に関係づけられている」

吾々は次の吾々の考察に於いて、ノエマの一般的構造を屈指したいと思うが、それは従来屢々話題には上つたが併しノエマ分析の指導的見地となつていなかった所の見地、即ち「**対象に対する意識の關係という現象学的問題**は何よりも先ずノエマ的側面を有つている」という見地の下に於いてである。ノエマはそれ自身に於いて、即ち自己固有の『意味』に依つて、対象的関係を有つてゐる。そこで吾々は問う。意識の『意味』は如何にして、己れの所有するところの——且つノエマの内実を非常に異にする多種の作用に於いて『同じ』であり得るところの——『対象』に近づき来るか、吾々は此の事を意味に於いて如何にして認めるのであるかと。——そうすると、新しい構造が現れて来るのであつて、これに非常な意義のあるという事は明白である。何故ならば、更に此の方向を進んで行き、且つ他の並行的ノエシスを反省すると、最後に吾々は次の如き問題に逢着するからである。即ちそれは、対象的なものに真に『關係』して『正当』なる意識たらんとする意識の『要望』は本来何を意味するのであるか、『妥当的』なる対象的關係と『非妥当的』なるそれとはノエシスとノエマとの側面から觀て現象学上如何に解明されるのであるか、という問題である。これに依つて吾々は重大なる**理性の諸問題**に直面するのであつて、これを先驗的地盤の上に立つて解決し、且つ**現象学の問題**として言い表す事が、即ち本篇に於いて吾々の目的となるのである。

(一) これは未だ『論、研、』の觀方である。右著書に於いては事柄の性質上、止むを得ず大部分ノエマ的分析の論述を行つてゐるとはいへ、然もノエマ的分析は寧ろノエマに並行するノエシスの構造に対する指標と見做されている。両構造の本質上の並行性は右著書では未だ明らかにされるに至つていなかった

のである。

一二九、『内容』と『対象』、『意味』としての内容

吾々の今迄の分析に於いては、或るノエマの『核』を、代る代るそれに属する諸々の『性格』——これと共にノエマの具体的結成は種々異なる変様の流れに引込まれて現れる——から分つという不断の役割は、之をノエマの一般的構造が演じていた。此の核は未だ学問上正当に承認されるに至つていなかった。此の核は統一体として、又吾々が一般的に取扱ひ得るほど明らかに、直観に於いて出現して来た。そこで今やこれを一層詳細に考察して、現象学的分析の中心点に置く時期に達している。これを行うや否や、遍く意義を有ち、且つ作用のすべての類を貫く所の区別——これは多数の研究群に對して指導的である——が現れて来る。

吾々は先ず、意識内容という慣用の曖昧な言葉から論を始めよう。吾々は内容を『意味』と解して、この意味を、これに於いて或はこれを通して意識が『己れの』ものとしての対象的なものに関係するものであると考える。吾々の論究の言わば標題且つ目標として、吾々は左の如き命題を採用する。各々のノエマは或る『内容』即ち己れの『意味』を有つていて、それを通して『己れの』対象へ関係する。

作用と内容と対象との間の基礎的区別が今や終に達成されたのは非常な進歩であるという讃辞が近時度々聞かれる。斯く併列した此の三語は、特にトゥヴルドフスキー Kazimierz Skrzypna-

Twardowski (1866-1938) の優れた論文⁽¹⁾以来、何時しか標語になってしまった。それにも拘らず、或る一般慣用的混同を峻厳に検討してその誤謬を明らかにしたという此の著者の功績は甚だ大であり且つ疑いないが、然も、彼は（これは別に非難として彼に加えべき事等ではないが）所属の概念の本質の闡明に当って前諸時代の哲学者達が（彼等に不注意の混同はありながらも）熟知していた事柄以上に、特に著しく進んだわけではなかったと言わざるを得ない。根本的進歩は、意識の体系的現象学以前等に於いては、全く不可能である。『表象』の『作用』、『内容』、『対象』等という如き現象学的に闡明されていない概念では、吾々の役に立たなかつた。表象の作用、殊に表象の内容、乃至表象そのものと呼び得ないというものは一体何であらう。そしてそう呼び得るものは、それこそ学問的に認識する必要があるのである。

此の点に関して最初の、又私の惟う所では必然的の、進歩を試みたのは『質料』と『性質』との現象学的強調であり、『認識の本質』から区別された意味の『指向的本質』という思想であつた。此の区別は一面的にノエシスの方面のみを眺めて遂行企画されたのであるが、此の一面性は、ノエマの並行を顧慮する事に依つて容易に克服される。それゆえ吾々は之等諸概念を次の如くノエマ的に解する事ができる。即ち『性質』（判断性質、願望性質等々）というのは、従来吾々が最広義に於ける『指定』の性格、『定立的』性格として論じて来たものに他ならない。当時の心理学（ブレンターノの心理学）に由来する此の用語は、私には今では殆んど不適當のように思われる。蓋し独特の定立の各々はその性質を有っているが、併し定立そのものは性質とは呼ばれ得ないのである。ところで、その度毎に『何』——これは『性質』から指定特性

を受ける——であるところの『質料』は『ノエマの核』に対応するものなる事は明白である。

此の端緒の一貫的遂行、これ等概念のより深き闡明、より進んだ分解、これ等の概念のノエシス・ノエマ的範圍のすべてを通ずる正確なる貫徹、これがこれからの課題である。此の方向に於ける真に成功的なる進歩は悉く、現象学に対して異常な意義があるに相違ない。勿論吾々の論ずるのは傍系的な特殊点に就いてではなくして、各々の指向的体験の中心的構成に属する本質契機に關してである。

更に少しく事象に立入るために、吾々は次の如き考察を以て論を初めよう。

指向的体験は『**対象的なものへの關係**』を有っているという事は、常に人の言う所である。けれども又人は、それは『**或るものに就いての意識**』、例えば此処の庭に在る花盛りの林檎の樹に就いての意識であるとも言う。此の例に關して右の二通りの言い方を区別するということは、差し当り必要あるまいと考える。今吾々が前述の分析を思い出してみると、充ちたるノエシスは、その指向的にして充ちたる「何」としての充ちたるノエマに關係している事がわかる。ところでそうすると明らかなる事は、此の關係は、意識の有つ指向的に対象的なものへの意識の關係と言う場合に考えられているものとは同じであり得ないという事である。何故ならば、各々のノエシス的契機、特に各々の定立的・ノエシス的契機には、ノエマに於ける或る契機が対応する、そして此の契機に於いて、定立的諸性格の複合に對して、これ等性格に依つて性格づけられているノエマ的核が分たれるからである。更に進んで吾々は『への視向』——これは場合に依つてはノエシスを（顕在的コギトを）貫通し、特に

定立的と呼ぶべき契機を私の指し示す放射線ⁱへ転化せしめる——を想起して、この放射線を有つ此の我はそこで、存在把握的な、乃至は推量的、願望的等々なる我として如何にして対象的なものに『向』うのであるか、私の視向は如何にしてノエマの核を貫通するか、という事を精細に注目してみる——そうすると吾々は次の事に注意される。即ちそれは、対象的なものへの意識の關係（特に『方向』）という言葉はノエマの**最内面的**契機を指すという事である。この契機は今言つた核そのものではなくて、言わば核の必須的中心点を成して、それに特に属するノエマ的諸特性に対して、即ち『思念されたものそのもの』のノエマ的に変様された諸特性に対して『所持者』たるの役を務める所の、或るものである。

此の事を更に精細に検討すると、吾々は直ちに次の事を認める。それは、『内容』と『対象』との區別は、実は單に『意識』乃至指向的體驗に就いて許りでなく、**單獨にノエマだけに**就いても行わねばならぬという事である。それ故ノエマも亦対象に關係し、且つ該対象に關係する『媒介』たる『内容』を有っている。ところで此の場合その対象はノエシスの対象と同じ対象なのであつて、此処でも亦『並行』が完全に証明されるのである。

(一) K. Twardowski, 《Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen》, Wien 1894. 【川村安太郎訳『表象の内容と対象』1929】

i 「放射線」"Strahlen der Setzungsaktualität des Ich" (英 "rays of positing actuality of the Ego")

一三〇、『ノエマの意味』なる本質の限界づけ

右の如き注目すべき諸構造を、吾々は更に詳細に考察しよう。考察を簡単にするために、吾々は注意的変様を度外視して、更に措定的作用に局限しよう——吾々はこの作用の定立の中に、場合に依り夫々基づけの段階順序に依じて、とりわけて夫々別の或る部分定立の中に生きてみる（その間其他の部分定立は成程遂行されてはいるが、併しそれは第二次的機能に於いてである）。斯くの如く簡單化しても吾々の分析は、その妥当の普遍性を毫末も損失するものでないという事は、後に至つて造作なく明らかにされ得る。吾々の問題とするのはまさに、斯くの如き変様に対して無関係なる本質にほかならない。

斯くて吾々は生き生きとしたコギトの中へ入つて行つてみる。そうするとそれは、その本質上嚮に特記した意味で対象性への『方向』を有つている。換言すればコギトのノエマには、或るノエマ的成素を有つた『対象性』——引用符に入れられた——が属している。此のノエマ的成素というのは、一定限度の記述に於いて、即ち『**思念された俤の、思念されたる対象者**』の記述としてすべての『**主観的**』**表出を避ける**』ところの記述に於いて展開されるものである。其の場合には、『対象』、『性状』、『事態』等の如き形式存在学的用語も、『物』、『図形』、『原因』等の如き質料存在学的用語も、又『粗なる』、『堅き』、『色のある』等の如き実質の規定も使用される——けれどもそれ等は皆引用符を、随つてノエマ的に変様された意味を有つている。他方又此の思念されたる対象者そのものの記述には、『知覚的』、『回想的』、『明晰直観的』、『思维的』、『所与的』等の如き用語は**排斥**されている。何故ならばこれ等の用

語は別次元の記述に——即ち意識されているものなる対象者にでなく、それが如何に意識されているかというその**仕方**に——属するからである。他方又物なる客観が現出している場合には、次の如く言う事も亦該記述の埒内へ入るであろう。即ち、此の客観の『前面』は色、形等々から見てこれこれに規定されている、その『背面』は『或る』色を有っているが『それ以上詳しくは規定されていない』色なのである、要するに此の客観は孰れにしても、どうなのであるか『不定』である、と。

右の事は単に自然対象に就いて許りでなく全く一般的に、例えば価値客観に就いても、言い得られる。価値客観を記述するには、思念されている『事象』の記述と、更に加えて『価値』の賓辞の明示とが必要である。例えば吾々が現出している樹に就いて、吾々の評価的思念の『意味に於いて』「此の樹は『素敵な』匂いのする花で一杯だ」と言う場合等がそれである。此の時価値賓辞も亦その引用符を有っている。即ちその価値賓辞は単なる価値そのものの賓辞ではなくて、価値ノエマの賓辞なのである。

以上に依つて明白に、**各々のノエマに於ける全く確定的なる内実**が限界づけられた。各々の意識はそれの『何』を有つて居り、又各々『それの』対象者を思念する。各々の意識の場合にその右の如きノエマ的記述を、『それが思念されている精確にその通りに』——原理的に言えば——遂行し得るにちがいない事は明証的である。吾々は表明及び概念的把握に依つて、形式的乃至質料的なる、実質的に規定されたる乃至は又『不定なる』(空虚的)に思念されたる『**賓辞**』の一切を悉く獲得する。そして此の賓辞は、その**変容されたる意義**に於いて、所論の「ノエマの対象核」の『**内容**』を規定

する。

(二) 此の不定性という空虚性は、直観の空虚性、即ち不明表象の空虚性と混同されてはならない。

一三一、『対象』即ち『ノエマの意味に於いて規定せられ得るX』

扱ところですべて賓辞というものは『**或るもの** *etwas*』に就いての賓辞であつて、此の『**或るもの**』も亦賓辞と共に、そして勿論不可分離的に、当該の核に属する。吾々が嚮に論じた中心的統一点というものは即ちこれである。それは諸賓辞の結合点乃至『所持者』であるが、併しそれは、諸賓辞の或る複合乃至何等か或る結合を統一と呼び得る如き意味に於ける「諸賓辞の統一」では決してない。それは諸賓辞と並列したり諸賓辞から分離したりさるべきではないが、併しこれ等からは必然的に区別さるべきである。同様に又逆には、諸賓辞自身は**その或るもの**の賓辞なのである。換言すれば諸賓辞はそれなくしては考えられ得ず、然もそれからは区別され得るのである。吾々は言う、指向的客観は意識の連続的乃至綜合定立的進行に於いて常に意識されている、併しそれに於いて毎時『別様に現れる』、——仮令それは『**同じもの**』であつて単に別の諸賓辞に於いて、即ち別の規定内実を以て与えられているのにすぎぬとしても、又『それ』は単に種々異なる側面から出現する（此の場合不定の俚になつていた賓辞は一層詳細に規定されて来る）としても、或は又『その』客観は此の所与期間の間は変化せずだったが、併し今『それ』即ち此の同一者は変化して、此の変化に依つて美を増し使用価値を減ずるとしても、等々。若しこの事を常に、其の時々に思念されたものの**そのもののノエマ的記述**と解し、

此の記述を、如何なる場合にも可能なるが如く、十全に遂行するならば、同一的な指向的『対象』は変交代する『諸賓辭』から明白に區別される。それは**中心的なるノエマ的契機として**、即ち『対象 Gegenstand』『客観 Objekt』、『**同一者**』、『その可能的諸賓辭の規定可能なる主辭』——**すべての賓辭を捨象した純粹なるX**——として區別される。そしてそれはこれ等の賓辭から、更に精確にはその賓辭ノエマから分たれるのである。

吾々は一つの客観には多様の意識仕方、作用、乃至作用ノエマが有るとする。明らかにこの事は偶然事でない。蓋し若し多様の指向的体験も、連続的な乃至は本来綜合定立的（複定立的 polythetical）な統一に結合されて考え得られるという事がないとすれば、如何なる客観も考え得られないのである。右の体験に於いて『それ』即ち客観は同一的客観として、然もノエマ的に異なつた仕方——即ち性格づけられた核は可变的であるが『対象』、即ち諸賓辭の純粹主辭はとりも直さず同一的主辭であるという仕方——で意識されている。吾々は作用の内在的持続の部分的期間の各々を『作用』と見做し、且つ作用總体を連続的に結合されたる諸作用の或る調和的統一と見做す事が確かに出来るという事は、明らかである。そこで吾々は下の如く言い得る。数個の作用ノエマは此の場合何時も**異なつた核を有っている**、が併しながらそれにも拘らずそれ等の作用ノエマは**密集して同一的統一となる**、換言すれば各々の核の中に存する『或るもの』乃至規定され得べきものがそれに於いて同一的として意識される所の統一となる、と。

ところで同様に、又**分離した作用**——例えば二つの知覚、又は一つの知覚と一つの回想——も密集

して一つの『調和的』統一となる事ができる。そして、密集した作用の本質に明らかに無縁でないところの此の密集という特性に由つて、最初は分離されていた核の、場合に依つて其の規定を異にした或るものが、今は同じ或るもの乃至は調和的に同じ『対象』として意識されている。

それ故各々のノエマの中には、右の如き純粹なる「対象的な或るもの」が統一点として存在する。と同時に吾々は、ノエマの点から観て、二様の対象概念の区別すべき事を覚る。それは即ち、此の純粹なる統一点即ち此のノエマ的な『単なる対象そのもの』と、『その規定の「如何に」に於ける対象』——其時々の『開放された俤でいる』、そして此の樣態に於いて共に思念されている不定性、をも含めて——とである。此の場合この『如何に』は精確に、その時々が指定するもの、随つて斯くの如きものとして真に該體驗のノエマに属するものと解されねばならない。吾々が繰返し論じた『意味』とは、此のノエマ的な『「如何に」に於ける対象』（嚮にその性格を示した記述に依つて右対象に於いて、明証的に發見し概念的に記述し得るものすべてを具えた対象）である。

読者は、吾々が今心して『意味』と言つて『核』と言わなかつた事に注意されたい。何故そうしたかというに、真の、具體的に完全なる「ノエマの核」を得るには、吾々は、嚮にその性格を示した、そして吾々に意味を決定してくれる記述に於いては、表されて来ないところの次元の区別を、なお考慮に入れねばならぬという事が明らかになるだろうからである。此処では吾々は、差し当つて専ら其の記述の把握するものに限るとしよう。そうすると随つて『意味』はノエマの基礎部分となる。この意味はノエマの如何に依つて一般には變化するものであるが、併し場合に依つては——即ち『規定の

「如何に」に於ける対象』そのものが同じものでもあり兼ねて又絶対的に同様として記述さるべきものでもあるとして其処に在る場合には——絶対的に同様であり、又時には『同一的』意味として性格づけられさえする。如何なるノエマに於いても此の意味は欠如し得ない。随つて意味の必須的中心即ち統一^一点即ち規定せられ得べき純粹Xも欠如し得ない。『或るもの』のない、更に又『規定する内容』のない『意味』というものは無い。これは此の場合明白な事であるが、右の如き事は後から来る分析や記述に依つて初めて挿入される事ではなくして、それは明証的記述の可能の条件として此の記述以前に、實際に意識双関者の中に存しているのである。

意味に（空虚なるXとして）属する意味の所持者と意味の本質を基礎とする所の、任意段階の意味統一への調和的結合の可能性とに依つて、単に各々の意味がその『対象』を有つ許りでなく、種々異なつた意味も同じ対象へ関係する——それはまさに、それ等の意味が、合一された意味の規定可能なる諸Xが相互に、且つ又その時々の意味統一の総体意味のXと、合致するに至る所以のその意味統一に入れられ得べき限りそうなのである。

吾々の論述は、単定立的作用から移して、綜合定立的作用、乃至更に明らかに複定立的作用にも当て嵌まる。定立的肢体を有つ意識 many membered consciousness に於いては各々の肢体は右に述べたノエマ的構造を有っている。即ち各々の肢体は、『規定する内容』を具えたXを有っている。併し綜合定立的なる総体作用のノエマは其上に、『主存在的 actionic』^二定立に關係して、綜合定立的XとそのXと、の「規定する内容」とを有っている。作用遂行に於いては純粹我的視向線は、多くの線に分れ

ながら、綜合定立的に統一されるに至るXへと向う。名辭化という転化の場合には、綜合定立的なる総体現象は変様するのであるが、それは、顕在性の線が最高の綜合定立的Xに向うという仕方に変様するのである。

(一) 第二一七節、二四二頁【二七頁】参照【「多くの措定性格の」以下】。

一三二、充実の様態に於ける意味としての核

意味は、吾々の規定した通り、ノエマの総体に存する**具体的本質ではなくして**、それに内存する一種の抽象的形式である。即ち若し吾々が意味、随つて『思念されたもの』を——それが依つて以て思念されたものである所以のその規定内実を毫も逸せずに——固持するならば、明らかに、『如何に』に於ける対象——**その与えられ方の「如何に」に於ける対象**——という**第二**の概念が生じて来る。若し吾々がその場合、注意的変様を、即ち遂行様態の区別の如きすべての区別を度外視するならば、認識上非常に規定的な明晰性の充実の区別が——矢張り又必ず措定性なる特待的 *Devorzagen*【優先的】領界に於いて——問題となつて来る。同じものでも不明に意識されたものと明晰に意識されたものでは、そのノエマ的具体相から観れば、全体験が異なっているのと同じように非常に異なっている。けれども、不明に意識されたものが依つて似て思念されるその規定内実が、明晰に意識されたもののそれと絶対的に同一であるという事には何等の妨げもない。両者の記述は合致するであろう。そして綜合定立的なる統一意識は両者の意識を、真に狙う所は同じ「思念されたもの」として、包むのであ

る。それゆえ吾々が**完全なる核** vollen Kern / full core として算えるであろうのは、とりも直さず、**完充**に具体的なる当該ノエマ的成素、随つて**充実** Fülle / fullness という様態に於ける意味なのである。

一三三、ノエマ的命題、定立的命題及び綜合定立的命題、表象の範圍に於ける命題

扱次に必要なのは、上述の區別を作用のすべての範圍に於いて慎重に施行する事、並びに又、ノエマの意味としての意味に対して特殊關係のある**定立的契機**を補足として參酌する事であると思われる。此の定立的契機は『論理学的諸研究』に於いては（性質という名称で）初めから意味（即ち『意義の本質』）という概念の中へ取入れられていた。随つて『質料』（今の用語では意味）と性質との両成分は右の統一内に於いて區別せられた。⁽¹⁾併しながら、意味という語はこれを単にかの『質料』と定義し、随つて意味と定立的性格との統一はこれを**命題** Satz / posium と呼ぶ方が、一層適當と思われる。そうすると、**単肢的命題** one-membered posita（知覚及び其他の定立的直觀の場合の如き）と、複肢的 many-membered 即ち**綜合定立的命題**——例えば述定的なる信憑的命題（判斷）、述定的肢体ある質料的 posita 有つた推量命題等々——とがある事になる。更に又**適意命題**、**願望命題**、**命令命題**等々にも單肢的のものあり複肢的のものもある。これに依つて命題という概念は勿論異常に、恐らくは怪訝な程、とは云え然も重要な本質統一の埒内で、拡大される。無論これは常に念頭に置くべき事であるが、吾々の解釈では意味及び命題という概念は、表出及び概念の意義は毫も含まないが、併し他方表出的命題乃至命題意義の方はすべて包括するのである。

意味及び命題という概念は、吾々の分析に従えば、すべてのノエマの完充なる組織に属する抽象的層を指す。此の層をその十分に包括的な普遍性に於いて獲得し、随つてそれが**實際すべての作用領域**にその座を占めている事を洞観するという事は、吾々の認識にとつて得る所が大である。端的**直観**に於いても亦、対象なる概念に不可分離的に属する意味及び命題という概念は、必然的に適用されて来る。そこで**直観意味及び直観命題**なる特殊的概念が必然的に造られざるを得ない。それゆえ例えば外部知覚に於いては、吾々は、対象の意味、即ち知覚の変る毎に（『同じ』物の場合にも矢張り）変るところの「**此の知覚の事物意味 Dingsein**」を、『知覚された対象そのもの』の中から、被知覚性な性格を捨象して、すべての表明的乃至概念化的思惟以前に此のノエマの中に存する或るものとして、諦視に依つて取り出さねばならない。吾々が此の意味を十分に、即ちそれが**直観的充実さ Fülle**を具えた俚に受取ると、**現出**という一定にして且つ甚だ重要な概念が生じて来る。これらの意味には、命題、直観命題、表象命題、知覚的命題等々が対応する。外的直覚の現象学——これがそのものとして関係するのは、単なる対象即ち変様せられざる意味に於いての対象ではなくして、ノエシスの双関者としてのノエマである——に於いては、此処に明らかにした如き諸概念は学的研究の中心点をなしている。

先ず吾々は一般的主題に戻る。そうすると更に進んで今度来る課題は、意味の基礎的種類を区別することである。即ち端的意味と綜合定立的（乃至綜合定立的作用に属する）意味、換言すれば**第一段階の意味と高次段階の意味とである**。一部は内容的規定の基礎的種類に随い、一部は意義範圍のすべ

てに對して矢張同様の仕方でその役目を演ずるところの綜合定立的形成の基礎的形式に隨ひ、かくして一般に、意味の一般的構造に對して形式と内容との上から先天的に規定的であり、すべての意識領域に共通であり、乃至は又類的に完結した領域に固有的である所のものをすべて顧慮する——漸くの如くする事に依つて吾々は意味（意義）の体系的にして一般的なる形式論の考案¹⁴⁶へ上昇する。なお之に加えて措定性格の体系的區別を考慮するならば、それに依つて同時に命題の体系的類型論が成就されたのである。

（一）同書第五研究、第二〇及二二節、三八六——三九六頁（第二版、第二卷第一冊、四一一——四二二頁）。なお第六研究、第二五節、五五九頁（第二版、第二卷第二冊、八六頁）参照。中和的な『その俚にして』おく」は此處では吾々は同書に於けると異なり、他の諸性質と並んでの一『性質』（定立）とは見做さず、全性質、随つて又全作用一般を『反映』する変様と見做す事は勿論である。

一三四、命題学的形式論 Apophantische Formenlehre

此處で主要課題となるのは、『論理的』意義、乃至**述定的命題**、即ち形式論理学の意味での『判断』の、体系的なる『分析的』**形式論**を立案する事である。（これはただ**分析的**或は**述定的**なる**綜合定立**の形式のみを問題とするのであつて、此の形式の中へ入つて来る意味名辭は規定せずにおく。）右の課題は特殊的課題であるとはいへ、然もそれは次の事実に依つて普遍的なる意義を有つてゐる。というのは、**述定的綜合定立**という名称は、有り得るすべての意味種類に對して可能なる操作——即ち表

明、及び表明されたものを（規定主辞の規定として、全体の部分として、話説主辞に対する關係体として、等々と）關係づけるところの把握という如何なる場合にも同様に可能なる操作——の、一部類を示すという事実である。この操作とは、蒐合、選言、仮言的結合等の操作が絡み合う。この事はすべて、あらゆる供述乃至それと共に新しく出現する表出的乃至『概念的』把握——これはすべての形式及び質料に、意義的表出として接合する——の以前に於いてである。

この形式論——この考案には吾々は既に屢々触れた、そしてこれは、吾々の示した所に依れば、学としての普遍学の原理的に必須なる底層をなしている——は、今の研究の成果に依つてその孤立性を喪失する。即ちそれは、考案として立案された意味一般の普遍的形式論の内部にその故郷を、ノエマ的現象学に於いてその究竟の源泉地を獲るのである。

吾々は此の事を更に少しく立入つて明らかにしよう。

分析的・文章法的操作は、吾々の言つた通り、すべての可能的意味乃至命題に対して可能なる操作である、——仮令その時々々のノエマ的意味（これは無論、そのものとしての、又その規定内実のその時々々の「如何に」に於ける、『思念されたる』対象に外ならぬ）は、如何なる規定内実を『表明せず』己れの裡に含んでいるにしても。併し此の規定内実は、何時でも表明せられるし、又此の表明（『分析』と本質上聯関のある操作ならば）でも施行される。斯くして生じた綜合定立的形式（これを又吾々は、文法上の『文章論 Syntaxen』に合せて文章法的 Syntaktischen 形式とも名づけた）は、全く規定され

i "Relatum seines Referenten" (英 relatum of its referent) 渡辺訳「その關係主体の關係項」

た形式であり、確乎たる形式体系に属して居り、抽象に依つて取り出して概念的・表出的に把握せられ得る。そこで吾々は例えば、端的なる知覚定立に於いて知覚されたもののものを、『これは黒い、インク壺だ、此の黒いインク壺は白くない、若し白ければ黒くない。』等々という表出に依つて表す如き仕方で分析的に扱う事ができる。一歩進む毎に吾々は新しい意味を得る。即ちもとの単肢的命題の代りに綜合定立的命題——これは、『すべての原信憑的命題は表出せられ得る』という法則に随つて、表出乃至適意的供述に齎される——を得るのである。肢体ある命題の内部に於いて、各々の肢体は、分析的綜合定立に由来するところのそれぞれの文章法的形式を有っている。

若し吾々が、これ等の意味形式に属する措定を信憑的^{ドクサ}原措定であると仮定すると、論理学的意味での判断の種々の形式（命題学的命題）が生じて来る。これ等の形式のすべてを先天的に規定して、無限に多様にして然も法則に従つて限界づけられた形式成体を体系的なる完全さに於いて熟知せんとする目標は、吾々に**命題学的なる命題乃至文章法的形式論**の構想を示してくれる。

ところで措定、特に綜合定立的総体措定は信憑的^{ドクサ}様相でもあり得る。即ち例えば吾々は、推量を行つて、此の『推量的』という様態に於いて意識されているものを表明するとか、或は又或るものが疑問的として其処に在つて、此の疑問性意識に於いて吾々がその疑問的なるものを表明するとか、等々の如きである。吾々がその様相のノエマ的双関者を（『Sはpであるかも知れぬ』、『Sはpであるか』等々と）表出したたり、又端的なる述定的判断自身に対してもこれと同じく、肯定や否定を表出するようにして、（例えば『Sはpでない』、『Sは兎に角 doch「やっぱ」pである』、『Sは確かに、實際pで

ある』と）表出するとする——そうするとこれに依つて形式という概念と、命題の形式論という概念とは**拡大される**。そうなる⁽²⁾と形式なるものは多様に、即ち一部は本来文章法的なる形式に依つて、又一部は信憑的様相に依つて、規定される。此の時総体命題には、総体定立と、その中に含まれて、或る信憑的定立とが、常に依然として属している。それと同時に斯くの如き命題の各々も、又これに直接的に適合した概念的『表出』も、様態の特性を賓辭に転化せしめる意味表明及び適意に依つて、供述命題即ち判断へ移行させられる——此の判断は某々形式の内容の様相に關して（例えば『SがPである事は確かである、可能である、蓋然的である』等と）判断するのである。

この事は、**基づけられたる定立即ち情緒及び意志の領界の意味及び命題に就いても、又特有的にそれに属する綜合定立及び対応する表出仕方**に就いても、判断の様相に於けると矢張り同様である。そこで、命題、特に綜合定立的命題に就いての新しき形式論の目標が容易に示される。

此の場合直ちにわかる事であるが、**信憑的命題の、適当に拡大された形式論に於いて——吾々が存在様相と丁度同じような仕方**で當為様相（という如き類比的用語が許されるならば）をも判断質料へ取入れるならば——**すべての命題の形式論が反映する**。斯く取入れるというのは何を意味するかという事は、勿論長々しく絮説^{じよせつ}する必要のない事であつて、精々引例に依つて説明すれば十分である。即ち例えば吾々は、『SがPであれかし』の代りに、『SはPである』という事のあれかし、又は、その事は望ましい（願望^{ねんぼう}されているというのではない）と言つたり、『SはPなるべきである』の代りに、『SはPである』という事はあるべきである、又は、その事はそうあるべき事柄である、と言う等々の如

きである。

現象学そのものは此の形式論の体系的完成を己れの課題とするものではない。此の形式論の方に於いては、命題学的形式論に於いて識り得られる通り、本原的な公理的基礎形態からして演繹的に、すべてのそれ以上の形態の体系的可能性が導出される。然るに現象学の方の分野は、**直接的**直覺に依つて示され得るアプリオリの分析、直接洞觀的な本質及び本質聯関の確定、及びそれ等を、先驗的に純粹なる意識に於ける全層の体系的連結に於いて記述的に認識する事、に在るのである。理論を樹てる論理学者が、形式的意義論に於いて孤立せしめるもの、即ち彼の一方的なる関心方向のために、それが現象学的に織り込まれているところのノエマ的及びノエシスの聯関に対する注意も了解もなしに、それ自身に在るものの如くに取扱うところのもの——そのものを現象学者は、その十分なる聯関に於いて、受取る。本質の現象学的なる交織を**全面的**に辿る事は、現象学者の重大なる課題である。論理学的基礎概念の端的なる公理的呈示の各々は、現象学的研究に対する題目となる。其の場合最広の論理学的普遍性に於いて、『**命題**』（**判断命題**）として、定言的乃至仮言的命題として、賓辭の規定即ち名辭化された形容詞乃至關係代名詞として、等々として、端的に露呈されるものが既に、それが再び当該のノエマの本質聯関へ埋置される *zurückgehört* 【置き戻される】や否や——その露呈されるものは此の聯関の中から、ものを理論的に見る視向が取出したものである——直ちに、純粹現象学の困難且つ広汎なる諸問題群を結果せしめるのである。

(二) 上述第一二七節、二五一頁以下【「判断の表出」以下】、又第一〇五——一〇六節、一七五頁以下【「信

としての信様相」以下）、の論述の意味に於いて。

一三五、対象と意識、理性の現象学への移行

各々の指向的体験はノエマと、それからノエマの裡に於いて意味——これに依つて体験は対象に係する——とを有っている。それと等しく又逆に、吾々が**対象**と呼ぶもの、即ち吾々がそれに就いて語り、吾々が現実として眼前に有ち、可能的乃至蓋然的と考え、如何に無規定的にでも思惟するものは、すべて、恰もそうする事に依つて既に意識の対象である。そして此の事は、世界乃至現実一般は、凡そそれが何であり又何と呼ばれるにしても、現実的及び可能的意識の埒内に於いては、それに対応するところの、多少とも直観的な内実を以て充実された、意味乃至命題に依つて代表されざるを得ない、という事を意味している。それ故、現象学が『排去』を実行すると、即ち先験的現象学として實在に就いての顕在的措定のすべてを括弧に入れ、又其他嚮に述べた諸々の括弧入れをも実行すると、そこで今度吾々は、「現象学的に排去されたものは、或る符号変更を受けてはいるが然もすべて現象学の埒内に属する」⁽¹⁾という嚮の提題の意味と正しさを、一層深い根拠からして了解する。即ち、排去を蒙る實在的及び観念的現実、現象学の領界に於いては、それに対応するところの意味及び命題の全多様に依つて代表されているのである。

それゆえ例えば、自然内の現実的な物の各々は、意味及び変化しつつ充実されている命題ⁱのすべ

i wechselnd erfüllte Sätze (英) changing fulfilled posita 渡辺訳「種々様々に充実した命題」

て——これに於いてその物は、斯く斯くに規定されて居り且つなお更に規定せらるべき物として、可能的なる指向的体験の双関者である——に依つて代表されている。随つて又、『**完充なるノエマ**〔核〕』の（或は又此処では同じ意味であるが、すべての可能なる『主観的現出仕方』の）多様——これに於いてその物は同一者としてノエマ的に規整されて居り得る——に依つて代表されている。ところで斯くの如き規整は、先ず第一には本質上可能なる個別的意識に加わり、次には又、可能的なる共同意識、即ち『交通』しつある意識我及び意識流の本質上可能なる多——それにとつて**一つの物**は、同じ「客観的に現実的なるもの」として共同主観的に与えられ且つ同一とされ得る——にも加わる。これは常に念頭に置くべき事であるが、吾々の全論述は——随つて又此処の論述も——現象学的還元の意味に於いて、又形相的普遍性に於いて解さるべきものである。

他面に於いて各々の物——畢竟は、唯一の空間、唯一の時間を有つ物の世界の全体——には、ノエシスの側の可能的出来事、即ち個々の個人及び共同体個人の此の出来事に關係する可能的体験——嚮に考察したノエマの多様の並行者として自己の本質自身の裡に、意味及び命題に依つて此の物の世界に關係するという特性を有っている体験——の多様が対応する。それゆえ此の多様に於いては、ヒュレー的与件の当該の多様が、所屬の『把握』、定立的作用性格等々——これ等は互いに結合統一して、吾々が此の物の世界に就いての**経験意識**と呼ぶ恰もそのものを作り上げる——を具えて出現する。物の統一に對立するのは、無限なるにも拘らず展望できる全く規定されたる本質内実を有つところの、

i 「完充なるノエマ」原著・英訳、渡辺訳を見つゝ“voller Kern”, “full cores”とある。渡辺訳「全核」

ノエシスの体験の無限の理念的多様である（これ等体験のすべては『同じ』物に就いての意識なる点で一致している）。此の一致性は、意識の領界そのものに於いても——即ちこの方も亦今吾々の限界づけた群に矢張り属する所の体験に於いても——与えられるに至る。

何故ならば、経験的意識に限ったのは、恰も『世界』の『物』に限ったと同様に、単に例としてそうしただけの意味であるからである。吾々如何に範圍を拡張しても、又如何なる普遍性段階乃至特殊性段階に於いて働いても——降つては最低の具体相に至る迄——、すべてのものが悉く本質的に描示されている。体験領界は、その先験の本質構造から觀て嚴密に法則的であり、可能的本質形態の各々は、それに含まれるノエシス及びノエマから觀て明確に規定されているが、それは恰も、空間の中へ描き入れらるべき可能的図形の各々が、空間の本質に依つて——無條件的に妥当なる法則性に随つて——何とか規定されているのと同様である。それ故、茲で「対象と意識との」兩側面に於いて可能性（形相的存在）と呼ばれるのは絶対に必然的な可能性、即ち、形相的体系の絶対に確定的なる組織体内の絶対的に確定的なる肢体（glied / member）である。吾々の目的はこの肢体を学的に認識するという事である。換言すれば、この肢体を、純粹なる本質直覚から湧出する概念と法則供述との体系に依つて理論的に明示し且つ知悉（ちしつ）するという事である。形式的存在学、及びそれに接続する範疇論——存在領域及びその存在範疇の分布並びに右領域及び範疇に適合せる実質的存在学の規整に就いての論——が行うところの基礎的区別のすべては、吾々が更に進んで微細の点まで了解するであろう通り、現象学的研究の主要題目である。それには必然的にノエシス・ノエマ的な本質關係が対応する

のであつて、吾々はこれを、体系的に記述し、可能性乃至必然性に應じて規定せねばならない。

右の考察に依つてその特性を示されたところの、対象と意識との間の本質聯関は、何を意味しているか、或は意味すべきかを、更に精確に省察してみると、吾々は二重の意義のあるのを覚知するであろう。そして此の二重の意義を追窮する事に依つて吾々は、吾々の研究が重大なる転換期に直面している事に気が付く。吾々は対象に対して、『命題』の、乃至は或るノエマ的内実を有つ体験の、多様を帰せしめる。而もそれは、この内実^{しかのみならず}に依つて同一化する綜合定立——これの力に由つて該対象は同じ対象として其処に在る事ができ又在らざるを得ぬ——が先天的に可能となるという仕方に於いてである。種々なる『規定内実』を具えた種々なる作用乃至作用ノエマに於けるXは、同じものとして必然的に意識されている。併し**それは現実 *wirklich* に同じものであるか。又その対象自身は『現実的』であるか。**それは——多様にして調和的な、加之直觀的に充実された命題は（仮令如何なる本質内実の命題でも）意識に於いて経過するのに——然も非現実的であるという事はないであろうか。

吾々の関心を有つのは、意識及びその経過の事実性に於いてではなくして、此処で明示すべきであると思われる本質問題に就いてである事は勿論である、意識乃至意識主觀そのものは、現実に関して**判断**し、それに就いて問い、それを推量し、疑い、その疑いを決裁し、そして同時に『**理性の判決**』を下す。吾々は此の判決の本質、並びに又それと双関的に『現実』の本質——形式的及び領域的範疇のすべてから觀てすべての種類の対象に係るそれ——を、先驗的意識の本質聯関に於いて、随つて純粹に現象学的に、明らかにすべきではなからうか。

それ故、対象性、例えば物の対象性のノエシス・ノエマ的『規整Konstitution』という吾々の用語の裡には、二義性が存在したのである。吾々は此の言葉を用いる時には何時でも、とりわけて『現実的』対象、『現実的世界』の——或は尠くとも、『ひとつの』現実的世界一般の——物を考えていた。そうすれば併し、此の『現実的』という事は対象に対して何を意味するのであるか（現実的といわれながら然も対象は、意識に対してはただ意味及び命題を通してのみ与えられているのである）。それは又此の命題そのものにとつて、このノエマ乃至これに並行なるノエシスの本質性状にとつて、何を意味するのであるか。それは又形式及び充実性から観た命題の特殊的なる構造法に対して何を意味するのであるか。又此の構造は、如何にして特殊の対象領域に應じて特殊化するのであるか。斯くて此の問題は、「すべて意識聯関——これは単なる対象（というのは普通の用語の意味では何時も**現実的**の対象を意味する）を、恰もその現実性に於いて、必然的たらしめる——は、現象学の学たる性質を失わずに、如何にしてノエシスの乃至ノエマ的に記述せられ得べきか」となる。併し**一層広い意味に於いては、或る意識聯関——これは、本質上「同一的Xの意識」を自身に伴っている以上、自身の裡に明白なる統一を有している——に於いても、対象——『それが現実的対象たると否とを問わず』——は『規整』せられるのである。**

實際吾々が以上述べた事柄は、現実という言葉を如何に深い意味に用いても、ただ現実にだけ関するもののではない。現実性問題は**すべての**認識そのものの裡に、随つて又対象の可能的規整に関する吾々の現象学的認識の裡にも潜んでいる。即ちすべて認識は、言う迄もなく、『現実的に存在する』

対象として思念されている『対象』をその双関者として有っているのである。そこで吾々は一般的に問う事ができる、「Xのノエマ的に『思念』された同一性は、如何なる場合に『単に』思念された同一性でなくして『現実的同一性』であるか、そして一般に此の『単に思念された』というのは如何なる意味であるか」と。

斯くして吾々は、現実性の諸問題と、それと双関的なる、現実性を自身の裡に明示する理性意識の諸問題とに対して、新しき省察を向けなければならない。

(一) 第七六節、四八頁参照【此の事情を、それ固有】以下】。

第二章 理性の現象学

ただ単に対象ということを口にする場合、通例人は、その時々が存在範疇に属する現実的な、即ち真に存在的なる対象を思念している。そこで人がその対象に就いて何を言い表すとしても、——若し理性的に語るものであるならば——、人は其場合思念されるように供述されたものを、『基礎づけ』、『明示』、直接に見又は間接に『洞見』せねばならない。論理的領界即ち供述の領界に於いては、『真実である』乃至『現実的である』という事と『理性的に明示せられ得る』という事とは原理上双関關係に在る。そしてこの事は、信憑的なる存在様相乃至指定様相のすべてに就いてそうである。此処に所謂理性的明示の可能性というのは、言う迄もなく、経験的可能性の意味ではなく、『概念的 idente』可能性即ち本質可能性の意味である。

一三六、理性意識の第一基礎形式、即ち原的能与の『見ること』 das originär gebende "Sehen" 我々は、理性的明示とは何を言うか、換言すれば理性意識の本性は何であるか、と問うてみる。すると我々は、実例の直覺的現前化及びその実例に施す本質分析の開始に依つて、直ちに二三の区別を提供される。

先ず**第一**に提供される区別は、指定されたものがそれに於いて**原的所与** originärer Gegebenheit に達する指定的 positionalen 体験と、原的所与に達せざるそれとの間の区別、即ち随つて、『知覚する』、『見る』

作用——最広義に於ける——と、『知覚せ』ざる作用との間の区別である。

そこで、例えば或る風景に就いての如き回想意識は、原的能与のものでない。即ちその風景は、宛も吾々がそれを現実的に見る時のように知覚されていないのである。斯く言つても吾々は決して、回想意識はそれ独自の権利を有つていないと言つた積りでなく、それは『見る』意識ではないと言おうとしただけに外ならぬ。斯くの如き対立が**すべての種類の措定的体験に類推される事**は現象学の示す所である。例えば吾々は、 $\infty+1=2$ であるという事を『盲目』的に述定する事もできるし、又此の同じ判断を洞観的に行うこともできる。後者の場合には事態、即ち判断の綜合定立に対応する綜合定立の対象性は、原的に与えられ原的な仕方で把握されている。併しその事態も、洞観の生き生きとした実行の**以後**に於いては最早そうでない。蓋し此の洞観は直ちに不明となつて過去指向 Retention【過去把持】的変様に入るからである。仮令此の変様でも、同じノエマの意味に於いての爾余任意の不明乃至混乱的意識に比較すれば、例えば嚮に嘗て覺えた、そして恐らくは洞見したものの『**放心的**』再生に比較すれば、或る理性上の優位は有つてにしているにしても——それは最早原的能与の意識ではないのである。

右の区別は純粹なる意味乃至命題に關するものではない。何故ならば、純粹なる意味乃至命題は、右の例の各組の両項に於いて同一的であり、且つ又同一的なりとして何時でも意識に依つて諦視され erschaffen 得るからである。右の区別は、意識ノエマの具体相に於いて、單なる抽象者であるために、補足的諸契機に対して参加を要求する所の**單なる意味乃至命題が、如何にして充實せられたる意味乃**

至命題であつたり或は充実せられざるそれであつたりするかというその仕方に関する區別である。

意味の充実性だけでは不十分であつて、外に充実化の『如何に』という事が肝要である。意味を体験する仕方は『直覚的』な仕方であつて、その場合『思念されたる対象そのもの』は直観的に意識されたる対象である。そして此の際、直観仕方が恰も**原的能与**の仕方に外ならないというのがとりわけて顕著な場合である。風景の知覚に於ける意味は、知覚的に充実されている。即ち、色、形等々を（それ等が『知覚の中へ入つて来る』限り）有つてゐる所の被知覚対象は、『有体的』^{ありてい}という仕方で意識されている。これと似た特徴を、吾々は作用領界のすべてに於いて見出す。今度の事情も亦、並行性の意味に於いて二面的である。即ちノエマ、ノエシスの二面を具えている。ノエマ的観方を採ると吾々は、有体性（原的充実性 as originary fullness）という性格が純粹なる意味と融合している事を知る。そして此の**性格を有つた意味は今や、ノエマ的指定性格** Setzungscharakter — 此処では存在性格 Seinscharakter と言つても同じ——の根柢の役を務めている。ノエシ斯的観方を採る場合にもこれと並行的な事が言われ得る。

ところで、特に**理性性格と呼ぶべき性格はひとつの特徴として存在性格に固有である**。そして此の特徴が存在性格に属するのはその本質上、此の性格が単に一般的に意味をでなく充実せられたる原的能与の意味を基礎とする措置である**場合にであり、且つその場合に限る**。

此処でも、又各種の理性意識の場合にも、「属する Zugehören」という言葉は独特の意義を取る。例

i 「**存在性格**」原著では Setzungscharakter 「指定性格」である。続く「存在性格」は訳上の補い語で同じ性格をさす。

えば、「物が有体的に現出してゐる」という事にはすべて措定が属してゐる *gehört*。併し此の場合措定は、単に一般的に此の現出と一つになつてゐる（例えば甚だしきは、單なる普通の事実——事實等は此処では問題外——として）のではなく、それは此の現出と独特の仕方で一つになつてゐる。即ち措定は現出に依つて『**動機づけ**』られてゐる。然も又單に一般的に動機づけられてゐるのでなく『**理性的に動機づけ**』られてゐるのである。「措定なるものは原的所与をその**根源的權利根拠**としてゐる」といつても右と同じ意味である。他の与えられ方に於いても此の權利根拠は決して欠如する必要はない。が併し、權利根拠の相對的評價に於いて顯著なる役目を演ずる所の**根源的根拠**という特權は欠けている。

同様に、**本質諦視**に於いて『**原的**』に与えられた本質乃至本質態の措定はまさに、その本質乃至本質態の措定『**質料**』*the position "material"*、即ち本質乃至本質態の与えられ方に於ける『**意味**』に『**属する**』。その措定は、**理性的なる**、そして**信確實性** *Glaubensgewißheit* 【信念上の確信】として根源的に動機づけられたる措定であつて、それは『**洞見的**』措定特有の性格を有つてゐる。若し措定が**盲目的**措定ならば、即ち若し言語意義が不明且つ混亂的に意識された作用基底に基づいて遂行されてゐるならば、洞観という理性性格は必然的に欠如する。というのは此の性格は、事態の斯くの如き（此処でも猶おこういう言葉を使おうというならば）「与えられ方」、即ち意味の核の斯くの如きノエマ的装いと、**本質上相容れぬ**のである。併し他面に於いて此の事は、本質認識の不完全なる再現前化という例に依つてわかる通り、第二次的の理性性格を排斥するものではない。

それ故、洞觀 *Eisicht*、一般には**明証** *Evidenz* は、全く異色ある事柄である。それは『核』からいえば、**理性指定とそれを本質上動機づけるものとの統一**である——此の場合此の全事情はノエシス的にも、又ノエマ的にも解され得る。動機づけという言葉は、主として、（ノエシス的）指定と、**被充実 *Erfülltheit* という状態に於けるノエマ的命題との間の関係に適合する。**ノエマ的意義での『**明証的命題**』という言葉は直ちに了解できる。

明証という言葉が、或る場合にはノエシス的人格乃至充実なる作用（例えば判断作用の明証）に用いられ、或る場合にはノエマ的命題（例えば明証的な論理的判断、明証的な供述命題）に用いられ、二重の意味を有っているのは、ノエシスとノエマとの双関係の諸契機に関する言葉の、普遍的且つ必然的な二重意義の一つの場合である。此の二重意義の源泉を現象学的に明示すれば、それに依つて此の二重意義は無害となり、加之その必要不可欠なる事が認められさえする。

猶お注意すべき事は、**充実化**という言葉は、右と全く別方向に存するも一つの二重意味をも有っているという事である。即ち或る場合にはそれは、**顕在的定立**が意味の特殊の様態に依つて取り入れる性格としての『**指向の充実化**』の事であり、他の場合にはそれは、とりもなおさず此の様態の特性そのもの、乃至は、理性的に動機づける『充実さ』を自身の裡に蔵するという当該意味の特性の事である。

一三七、明証と洞觀、『原的』明証と『純粹』明証、実然的明証と必証的明証

嚮に引用した幾組かの例は、同時に又**第二、第三**の本質的區別を説明する。普通吾々が明証とか洞

観 Einsicht (乃至洞見 Einsehen) とか呼ぶものは、『他様である』という事を排斥する『所の措定的信憑ドクサ的にして同時に十全能与的な意識の事であつて、その定立は十全的所与に依つて、全く異例なる仕方で動機づけられて居り、且つ最高の意味に於いて『理性』の作用である。この事は数学上の例が吾々に説明してくれる所である。嚮の風景の例に於いては吾々は、成程「見る」という事は有つてゐるが、併し慣用の深い語義に於ける明証、即ち『洞見』は有つていない。更に精細に觀察すると、吾々は此の兩つの対照的な例に於いて、二重の差異に氣がつく。即ち、『第一に』前者の例に於いては論題は**本質**であり、後者の例に於いては**個別者**である。第二に〔前者の〕形相的な例に於いては**原**的所与は**十全的**であり、〔後者の〕經驗領界からの例に於いては**不十全的**である。場合に依つては互いに交叉する所の此の兩つの差異は、明証の種類という点から觀て意義の深い事が明らかになるであらう。

第一の差異に就いてみると、**個別的なるものを言わば『突然的 assertorische』に見る** Sehen——例えは或る物乃至個別的事態を『覺認する』——という事は、**本質乃至本質態を『必証的 apodiktische』に見る、即ち洞見する**という事から、その理性性格上本質的に區別される。これは現象学上確認され得る事実である。ところで又これと同様な事が、此の洞見の変様に就いても言い得られる。此の変様は時に——即ち、洞觀を突然的に見られたるものへ加える場合に、又一般的に言えば措定された個々のものの『**斯くある**』の**必然性の認識**に於いて——兩者の混合に依つて生ずる。

明証と洞觀とは、慣用の深い意味に於いては、同様の意義に、即ち必証的洞見の意義に解される。吾々

は此の兩つの言葉を術語として分けたいと思う。吾々は是非共、その意義上実然的なる「見る」と必証的な洞見とを包括する所の広義の言葉を必要とする。以下は極めて重要な現象学的認識と見做すべき事柄であるが、右の兩語は実は一つの本質類に属するのであつて、これを更に一般的に言へば、**理性意識一般は定立的様相の最高類**を示すものである——原的所与に關係せる『見る *Sehen / seeing*』(極度に拡大した意味に於いて) そのものは、此の最高類に於いて、明瞭に限界づけられたひとつの種を成している。そこで、此の最高類に命名するには、(今為した如く、併し更に遙かに歩を進めて) 「見る」という言葉の意義を拡張するか、或は『洞見』、『明証』という言葉の意義を拡張するか、孰れかの途を択ばねばならない。そこで惟うに、最広概念を表すには**明証**という言葉を択ぶのが最適のようである。そうすると、所与の原性 *originalität* への動機づけ關係をその性格とする理性定立の各々を表すには**原的明証**という言葉が適當となつて来るであらう。更に又**実然的明証**と**必証的明証**とを區別して、**洞観**という言葉をして特に此の**必証性** *apodiktizität*を表さしむべきであらう。又一層進んで、**純粹洞観**と**不純洞観**(例えば、その存在そのものが決して明証的たるを要しない所の事实的なものの、必然性の認識)とを對立せしめ、又同様に、全く一般的に、**純粹明証**と**不純明証**とを對立せしむべきであらう。

更に深く研究に沈潜するならば、これ以上の區別、即ち明証性格に影響する所の諸々の「動機づける根柢」の區別も亦生じて来る。例えば、**純形式的**(『分析的』、『論理的』)明証と、**質料的**(綜合的・先天的)明証との區別の如きがそれである。けれども此処では吾々は、第一線を描く以上に進むわ

けに行かない。

一三八、十全的明証と不十全的明証

次に吾々は、嚮に示した明証の区別の第二のもの——これはあの十全的所与と不十全的所与との區別と聯関して、同時に『不純』明証の顯著なる型を記述する機縁を吾々に与える——を顧慮しよう。物の有体的現出を基礎とする指定は成程理性的指定ではあるが、併し現出は常に、一面的且つ『不完全』なる現出にすぎない。有体的なりと意識されて其処に在るのは、単に『本来的』に現出しているものだけでなく、單に此の物自身、總体的——直觀的なのはただ一面のみであり、加之不定なる点多々あるが——なる意味に随つての全体者もそうである。此の場合、物が『本来的』に現出しているところのものを、決して物としてそれ自身に引離してはならない。蓋しその意味双関者こそは、完充^三なる「物の意味」に於いて**非独立的**部分を成しているのであつて、この部分が意味の統一性と意味の独立性とを有ち得るのは、空虚成分と不定成分とを**必然的に己れの裡に藏する所の全体者に於いてに限るのである。**

物としての実在者、即ち物という意味での存在は、原理上、孤立的現出に於いてはただ『**不十全的**』のみ現出する。これと本質上聯関する事であるが、**右の如き不十全的に現れる現出の上に立つ理性指定は何れも『最終決定的』、『克服不可能』ではあり得ない。**又この指定は何れも、孤立させて観て、ただ單なる『その物は現実的である』という事と等価的なのではなくて、經驗の進行が『より強き理

性動機』——即ち、もとの指定が、一層広い聯関に於いては『抹殺さるべき』指定である事を示す動機——を将来せぬという事を前提とした上での『それは現実的である』と等価的であるにほかならない。此の場合に指定が理性的に動機づけられているというのは、それ自身として引離して観た現出(十分に充實された「知覚の意味」)に由るにほかならない。

原理上単に不十全にのみ与えられ得る種類の存在(實在の意味での**超越**)の領界内に於ける理性の現象学は、それ故、此の領界内での先天的に示されている種々の出来事を研究すべきである。此の現象学の明らかにすべきは次の事である。即ち、不十全なる所与意識——乃至連続的に相互移行する常に新しき現出へ連続的に進行しつつある一面的現出作用——は、規定され得べき一にして同じXと如何に關係するか、そしてその場合如何なる本質可能性が生ずるか、又その場合一方に於いては、経験の進行が可能であつて且つ連続的に先行する理性指定に依つて絶えず理性的に動機づけられている——これが取りも直さず経験の進行というものであつて、この進行に於いて先行現象の空虚位地は充實され不定性は漸次詳細に規定され、かくて**不斷に増進する理性力と全く調和的に充實する**という仕方で進行する——のは如何にしてであるかという事である。他方又明らかにすべきは、右と反対の可能性である。即ち、絶えず同じものとして意識されているXの**不調和**、『別様規定』——此のXがもとの意味付与と一致するとは別様の規定——の**融合乃至複定立的綜合定立の場合**である。その際明示せねばならぬのは、以前の知覚経過の指定成分は——その意味をも引くるめて——如何にして抹殺を受けるのであるか、全知覚は場合に依つては、如何にして言わば**爆裂崩壊**して『物に対する相互矛盾

的把握』、物の推定となるのであるか、此の推定の定立は、如何にして廃棄され、且つこの廃棄に依つて独特に變様されるのであるか、或は又此の一つの定立が、變様されざる俾で居りながら、如何にして『反対定立』の抹殺を『誘起』するのであるか、等々、其他此の種の事柄である。

更に立入つて又吾々は、もとの理性推定が蒙る所の独特の變様を一層詳細に研究すべきである。（該措定が此の變様を蒙るのは何に由るかというに、該措定は、調和的充實化の進行中に於いて、その動機づける『力』の点で積極的な現象学的増大を受けるからであり、又、絶えず『重量を増し、随つて又不斷に且つ本質的に重量を——ではあるが併し程度的に異なる重量を——有つからである。』それ故に又更に別の可能性を分析せねばならない。というのは、措定の重量は如何にして『反対動機』のために損害を蒙るか、両者は疑いに於いて如何にして互いに『平衡を保つ』か、措定は己れよりも『一層多き』重量を有つ他の措定と競争すれば如何にして『重量に於いて凌駕』され『抛棄』されるか、等々という事である。

以上に加えて、又措定性格に於ける變化に対して本質上規定的な出来事——即ち所屬の措定質料としての意味に於ける出来事（例えば諸現出の『衝突』乃至『對抗』という出来事）——を、包括的な本質分析に引入れるべきは勿論である。何故ならば、此処に於いても例の通り、現象学の領界内には何等の偶然も、何等の事実性もないのであつて、すべては、本質上一定的に動機づけられているからである。——

同様にして、すべての種類の直接的なる理性作用の本質研究は、ノエシス的及びノエマ的所与の一

般現象学の聯関に於いて遂行さるべきものであらう。

要望されたる対象の**領域及び範疇の各々に現象学上対応しているのは、単に或る基礎的種類の意味乃至命題ばかりでなく、斯くの如き意味に就いての或る基礎的種類の原的能与の意識、及びこれに所属して、右の如き性質の原的所与性に依つて本質上動機づけられている所の或る基礎型の原的明証も亦そうである。**

右の如き明証——此の言葉は拡大した吾々の意味に解して——の各々は孰れも、**十全的な、即ち原理上最早『強め』たり『弱め』たりできぬ、随つて重量の程度のない明証であるか、或は、不十全的な、随つて又増加通減可能なる明証であるかの孰れかである。**或る領界に於いて右の中孰れの種類の明証が可能であるかという事は、その領界の類型の如何に依つて決せられる。それ故その明証種類は先天的に予示されているのであつて、或る領界（例えば本質關係の領界）に於いて明証に属する所の完全さを、本質上これを容れぬ他の領界に於いて求めるといふ事は悖理である。

なお注意すべき事は、吾々は、『十全的』、『不十全的』という概念のものと意義、即ち与えられ方に關しての意義を移して、理性指定の、右意義に依つて基づけられている本質固有性そのものに當て嵌めても、恰も右の聯関の故に差し聞えない、——これは転用に依つて生ずる種類の曖昧の一つであるが、此の種の曖昧は、吾々がこれを曖昧と認めて、もとの意義と派生的意義とを十分意識して區別すれば、直ちに無害となるものである。

一三九、すべての理性種類の交織、理論的、価値論的、及び実践論的真理

措定はその性質の如何を問わず、それが理性的なる場合には、上來論述した所に依つて、その意味の措定としてその権利を有っている。そして理性性格なるものはとりもなおさず権利性なる性格に外ならぬのであつて、この権利性なる性格は本質上理性に——随つて、事實的に措定作用を営む我的偶然的境遇に於ける偶然的事実としてでなしに——『属する』ものである。これと双關的に「定立せられたる」**命題**も権利を有つていと言われる。即ち、命題はノエマ的権利性格を具えて——この性格も亦本質上、斯く性質づけられたノエマ的定立と此の意味質料とを合せたものとしての命題に属する——理性意識の中に存在している。更に之を精確に言えば、右意識には、斯くの如き性質の充実——この方は定立の理性特長を基礎づける——が『属し』ている。

命題は此の場合、それ自身にその権利を有っている。が又『**或る命題のために何事かを弁ずる**』事もできる。即ち命題は『自身』には理性的でないのに然も理性に關与する事ができる。信憑的領界に留まるならば、吾々は原信憑ウルドクサに対する信憑的諸様相の独特の聯関を想起する、換言すればそれ等様相はすべて原信憑ウルドクサを遡示 *zurück / weis back* する【逆に關係づけている】。他方又吾々はこれ等の様相に属する理性性格を観察するならば、直ちに次の如き考えが湧いて来る。即ち、これ等の理性性格は——別に質料や動機づけ状況やは如何に異なつてにしても——すべて、原信 *Urglaubens* の領分に属する所の言わば原「**理性性格**」を、即ち原的オリジナリな、そして結局完全なる明証の場合を遡示 *zurückweisen* するという事である。此の二種類の指示 *Zurückweisung* の間に深い本質聯関が存する事は明白であらう。

此処で示しておきたい事はただ、推量はそれ自身に理性的という性格を有ち得るという事である。吾々が此の推量に存する所の、対応的原信への指示に随つて、此の原信を『推定 Ansetzen』の形で取得する、そうするとそれは『此の原信のために何事かを弁ずる』。信そのものは、それだけでは、理性的として性格づけられているのではない、よし之は理性に關与しているとはいへ。吾々にわかる通り、此処で、これ以上の理性論的区別、及びそれに関する研究が必要である。己れ固有の理性性格を有つ種々異なつた諸性質の間に於いては、本質聯関が、而も**交互的**聯関が顯著である。そして**すべての線は結局原信及びその原「理性」に、**換言すれば『真理 Wahrheit』に帰着する。

真理は明らかに、**原信憑^{ウルドクサ}**——即ち**信確實性**——の完全なる理性性格に対する双関者である。『供述命題の如き或る原信憑^{ウルドクサ}的命題が真である』という言い表しと、『それに対応する信、判断には完全なる理性性格が属している』という言い表しとは、等価的**双関者**である。言う迄もなく此の場合体験乃至判断者という事実を云々してゐるのではない、——勿論真理なるものが**顕在的**に与えられ得るのは**顕在的**なる明証意識に於いてに限るといふ事は形相的に自明であり、随つて又此の自明性そのものの真理性や、右に述べた等価性の真理性や等々も矢張りそうではあるが。若し吾々が**原信憑^{ウルドクサ}的明証**即ち**信確實性**の明証を有たぬ場合には、その意味内実なる『SはPである』の代りに『SはPでもある』という**推量**の如き**信憑^{ドクサ}の様相**が明証的であり得ると吾々は言う。此の様相的明証は明らかに、變更した意味の**原信憑^{ウルドクサ}的明証**即ち『SがPである』といふ事は**推量的**（蓋然的）である』といふ事の明証乃至真理と、等值的且つ必然的に結び付いている。他方又『SはPである』といふ事のために何事かを

弁ずる』という真理、更に又『SPは真であるという事のために何事かを弁ずる』という真理等々とも結びついている。以上に依つて、現象学的根源研究を必要とする本質聯関が示される。

けれども明証とは決して、信領界に於ける（加之的判斷〔述定的判斷〕の領界のみに於ける）右の如き理性の出来事のみを示す名称にすぎぬのではなく、**すべての定立的領界を示す、特に又該領界の間に成立する意義深き理性關係を示す名称である。**

それゆえ此の事は、情緒定立及び意志定立の領界に於ける理性の、至難にして且つ広汎なる問題群にも当て嵌まる。同様に又此の理性の『理論的』なる、即ち信憑的なる理性との交織にも当て嵌まる。『理論的』乃至『信憑論的なる真理』乃至明証は、『価値論的及び実践論的なる真理乃至明証』をその並行者とする。此の場合後者の名称の示す『真理』は、信憑論的真理即ち特に論理学的（命題学的）と呼ぶべき真理に於いて表出され認識されて来る。之等の問題を取扱うには、吾々が嚮に着手せんと試みた如き種類の研究——即ち、信憑的定立を爾余すべての種類の措定即ち情緒及び意志の措定と結び付ける所の本質關係、更に又すべての信憑の様相を原信憑へ遡元 zurückleiten【フィードバック】せしめる所の本質關係に関する研究——が基礎とならねばならぬという事は言を俟たない。まさに此の事に由つて、何故に信確實性と、それに応じて真理とが全理性に於いても斯くも主要なる役割を演ずるかという事も亦、究極的根柢からして明らかにされ得る、——この役割というのは、猶お又同時に信憑的領界に於ける理性の問題は問題の解決に當つて価値論的及び実践論的なる理性の問題に先立たねばならぬという事を自明ならしめる役目である。

(一) 一〇四節、一七二頁参照【「変様としての信憑的」以下】。

(二) 此の方向へ最初に進出したのはブレンターノの天才的著書『*Vom Ursprung der sittlichen Erkenntnis*』(1889)であった。これは、私が最大の感謝を捧ぐべき義務を感じている書物である。

(三) 認識とは多くは論理的真理を示す名称であつて、主観の明証的判断作用の双関者として主観の立場から表されたものである。けれども又、各種の明証的判断作用そのものをも、又最後には信憑的なる理性作用の各々をも示す名称である。

一四〇、確証、明証なき権利づけ、措定的洞観と中和的洞観との等価性

(顕著なる場合だけを挙げていえば) 同じ意味や命題の作用ではあるが併し有っている理性価値を異にする作用間に於いて、その本質上将来せられ得べき『合致』という結合が吾々に提供する諸問題に關しては、更に進んで研究する必要がある。例えば明証的作用と非明証的作用とが合致するに至る事があり得るが、此の場合後者から前者への移行に際して前者の方は証明する作用という性格をとり、後者の方は証明される作用という性格をとる。前者の洞観的措定は、後者の非洞観的措定に対して能『確証的』"bestätigend / confirmatory"なる役割を果たす。『命題』は『認証 bewährt』乃至『確証 bestätigt』られる。即ち不完全なる与えられ方が完全なる与えられ方に転化する。此の過程の情況は如何であるか、又如何であり得るかという事は、当該措定種類の本質に依つて、又完全なる充実に於ける其の時々の命題の本質に依つて定められる。吾々は命題の各類に対して、原理的に可能なる認証の形式を現象学

的に明らかにせねばならない。

若し指定が非理性的でない場合には、それを確証する顕在的理性指定へそれが移行せしめられ得るという事、及び如何にして移行せしめられ得るかという事に対しての、動機づけられたる可能性をその本質から看取する事ができる。これは洞見できる事であるが、右の場合に不完全なる明証の各々が、**対応する**原的明証即ち同じ意味の明証に終極する所の充実進行を指定するわけではないのであって、反対に斯くの如き言わば原的なる確証は、或る種の明証に依つては原理的に排斥されるのである。この事は例えば、過去回想にも、又或る仕方では各々の回想一般にも、同様に又本質上感情移入——これには吾々は次巻に於いてひとつの基礎的種類の明証を属さしめる（そしてこれは次巻に於いて詳細に研究するであろう）——にも、当て嵌まる。何れにしても右に依つて、非常に重要な現象学上の主題が示されているのである。

なお注意すべきは、右に言及した動機づけられたる可能性というのは、空虚なる可能性とは明確に区別されるという事である。⁽²⁾即ち前者の可能性は、与えられた通りに充実している命題が自身の裡に含むものに依つて一意的に動機づけられているのである。空虚なる可能性というのは、此処に在る此の機が、現実には四本の足を有っているのに、今は見えていない下面に於いては十本の足を有つという如きである。これに反して、私が現に行っている一定の知覚に対して、此の四つという数は動機づけられたる可能性である。知覚『条件』が或る仕方で変化し**得る**という事、その『結果』知覚がそれに応ずる仕方で知覚系列——即ち私の知覚の意味に依つて指定されて居り、且つ私の知覚を充実し、

私の知覚の措定を確証する所の一定種の知覚系列——へ移行し得るという事は、各々の知覚一般にとつて動機づけられている。

なお又、明示 *Ausweisung* の『空虚』乃至『単なる』可能性に就いては、更に二つの場合が區別さるべきである。その一つは、**可能性が現実性と合致する場合**即ち恰も此の合致に依つて可能性の洞見が**原的なる所与意識及び理性意識をそれ自身に伴う場合と**、も一つはそうでない場合とである。後者は右に引用した例に当て嵌まるものである。**現実的経験**——単に、現前化に於ける『可能的』知覚の経過でなく——は、**實在的なものに対する措定**、例えば自然現象の定在措定、の**現実的明示**を提供する。それに反して、**本質措定**乃至**本質命題の場合**には何時も、**該措定の完全なる充実の直觀的現前化は充実そのものと等価的であつて**、それは恰も、**本質聯関の直觀的現前化**、加之**単なる想像が**、該聯関への洞觀と先天的に『等価的』であるのと同様である、即ち前者は後者へ**単なる觀方の変更に由つて**移行するのであつて、此の交互移行の可能性は偶然的なものではなくして**本質必然的可能性**なのである。

(一) これは可能性という言葉の極めて本質的な曖昧の一つであつて、此の他にも**なお別の可能性**(形式論理学的可能性、数学的・形式的無矛盾性)がある。蓋然性論に於いて受持の役のある可能性が、随つて又吾々が推量意識の並行者としての**信憑的様相**^{ドクサ}の論に於いて述べた所の**可能性意識**(期待性)が、**動機づけられている可能性**を双関者として**いう事は原理的な重要さを有つ事柄**である。動機づけられざる可能性からは決して蓋然性は築かれない。動機づけられたる可能性のみが『重さ』其他な有つている。

一四一、直接的理性指定と間接的理性指定、間接的明証

周知の如くすべての間接的基礎づけは直接的基礎づけに遡源^{もともと}する。すべての対象範囲並びにそれに関する指定に於いて、**すべての権利** *Rechts* **【正当性】の源泉は、直接的なる——更に狭く限定すれば**
原的なる——明証に、或は又それを動機づける原的所与に存する。ところで此の源泉からは、自身には何等の明証を有たぬ指定の理性価値が種々なる仕方で間接的に汲み取られる事ができる。即ちこれから導出される事ができる。が又その指定が直接的なる場合にはその理性価値は確認確認される事ができる。

吾々は後者の場合を考察してみよう。吾々は、**非明証的なる直接的理性指定の原的明証**（所与の原性に関する吾々の指す意味に於いてのそれ）**に対する関係に就いての困難なる諸問題を、ひとつの例に由つて指示しよう。**

明晰なる**回想**は悉く、**何等かの仕方**で根源的且つ直接的なる権利を有っている。というのはそれは、それ自身に観て、多少を問わず若干『重さがある』、即ち『重量』を有っているのである。けれどもそれは単に、相対的にして且つ不完全なる権利を有っているにすぎない。それが現前化するもの、例えば過ぎ去つたものの如きに就いてみれば、回想の裡には顕在的現在への関係が存している。この回想は過ぎ去れるものを指定し、同時に又、曖昧、不明、不定なる仕方ではあるが、必然的にひとつ

i 「に遡源する」 zurück (英 leads back to) 渡辺訳「間接…は、直接…へと、ひとを連れ戻す。」

の地平を措定する。若し此の地平が明晰にされ、定立として判明にされるならば、地平は、定立として遂行されたる諸回想の聯関——この聯関は**顯在的な知覚に、即ち顯在的な** *hic et nunc*（此處に**且つ今**）に終極するであろう——に於いて表明されざるを得ないであろう。吾々の所謂最広なる、即ち時間様態のすべてに關係する意味に於いての、各種の回想に就いても、右と同じ事が言い得られる。斯くの如き命題に於いて明らかに本質洞觀が現れている。それは本質聯関を指示するのであつて、この聯関の明示に由つて、各々の回想が可能とし『必要』とする所の認証の意味及び種類が解明されるであろう。回想から回想へと進んで判明化的なる回想聯関——この終極点は知覚現在に終る——に到る進行毎に、回想は確認されて来る。此の確認は或程度まで相互的なものであつて、回想の重量は互いに函数的に依属している。即ち各々の回想は聯関にあつて、此の聯関の拡大と共に増大する力——より狭い聯関に於ける場合や、孤立している場合よりも大きい力——を有つている。ところで表明が**顯在的な今**に迄達すると、**知覚及び知覚の明証の光の幾分が全系列を照り返す**のである。

吾々は次の如くにさえ言い得るであろう。**回想の理性的性質、權利性格は、すべての混乱不明を貫いて働く知覚——これはよし『遂行されず』に在るにしても——の力から人知れず発出する。**と。

併し何れにしても、知覚權利の間接的反射を本来所有するものが出現するには、右の如き認証を**必要とする**。回想に**固有なる種類の不十全性**というのは次の点に存する。即ち、回想されざるものが『現實に回想されたもの』と混合する事ができる、或は又、種々異なる回想が互に混和して回想の統一を呈して来る事ができる、然るにこの統一の地平が顯在化して展開する際には、所属の回想系列は分

離する——而も統一的なる回想形象は『爆裂』して、分れて互いに相容れざる回想直観の多となる如き仕方である。此の場合、吾々が（無論非常に一般化できる仕方である）知覚に対して序でに指示しておいたものに類似の出来事を記述せねばならないであろう。

以上はすべて、**直接的理性指定の『確認』や『認証』**の広汎重要な問題群を範例を挙げて指示する事に（並びに又、理性指定を分つて純粹的と不純的、非混合的と混合的とする事に対する説明にも）役立つであろう。けれども此の場合吾々はとりわけて、「すべての間接的理性指定、更に進んではすべての述定的且つ概念的なる理性認識は、**明証**に遡源 *zurück führt / leads back to*する【連れ戻す】」という命題が妥当する**一つの意味を把握するのである**。原的明証のみが『根源的』権利源泉 *Rechtsquelle* 【正当性の源泉】なる事は明白である。それゆえ例えば回想の、随つて又すべての再生作用（感情移入を含む）の理性指定は、根源的ではなく、或る点『派生的』である。

けれども権利は又、原的所与の源泉から、全く別の形で汲み取られる事もできる。

斯くの如き形は既に序でを以て示されたのである。生き生きとした明証から非明証への連続的移行に於ける理性価値の衰退が即ちそれである。けれども今は、本質上別個の群に属する場合を示す事にしよう。それは、命題が、進行途上毎時**明証的なる綜合定立的聯関**にあつて、直接に明証的なる基礎に對して**間接的**に關係している場合である。これに依つて、現象学的に觀て直接的明証とは別な理性性格を有つ所の理性指定の新しい普遍的な型が生じて来る。斯くてこれも亦一種の派生的なる『**間接**

i 「権利」は訳者の補助語、原著では“Es kann aber auch...”であるのみ、渡辺訳は「種々の明証を」

的明証』である——これが即ち、通例専ら此の『間接的明証』なる語を似て目指すところの明証なのである。此の派生的なる明証性格はその本質上、直接的なる諸明証から出発し種々なる形で経過し且つ進行毎に諸明証に依つて支持される所の指定聯関の末項に於いてのみ現れ得る。此の場合これ等明証の中、或るものは直接的であり、或るものは既に派生的であり、或るものは洞観的であり、或るものは非洞観的であり、原的であり或は非原的である。これに依つて現象学的理性論の新分野が示される。ノエシス及びノエマの側から観て、此処に於いて課題となるのは次の事である。即ち、各種各形の**間接的なる基礎づけや証示** *Ausweisen* に**存する**所の、又すべての定立的領界に存する所の、**理性の一般的並びに特殊的なる本質的現象を研究する事**、換言すれば、斯くの如き明示 *Ausweisung* の種々なる『原理』——即ち、例えばそれが内在的対象性に関するか超越的なるそれに関するか、十全的に与えられるそれに関するか不十全的に与えられるそれに関するかに随つて、夫々本質上別種なる所の原理——を、現象学的根源に遡源せしめ *zurückzuführen*、そしてすべての關係ある現象学的層を顧慮してこの根源からして『了解』できるようにする事である。

(一) 上述第一三八節、二九二頁以下参照【「十全的明証」と以下】。

一四二、理性定立と存在

右に示した研究群の目的なる理性の普遍的本質了解——此処に理性とは、**すべての指定種類に**（価値論的及び実践論的なる措定にも）及ぶ所の最広義に於けるそれ——と同時に、恰もそれに依つて

ego、**真存在の理念** idee des wahrhaft Seins / idea of true being を真理、理性、意識等の理念と結びつける所の本質双関関係の普遍的解明も亦獲られたに違いない。

此の場合直ちに次の如き普遍的洞観が得られる。即ち、単に『真に存在する対象』と『理性的に措定せられる対象』とが等価的双関者であるばかりでなく、『真に存在する対象』と根源的な完全の理性定立に依つて措定される対象とも亦等価的双関者であるというのである。此の理性定立には対象は、不完全的にでなく、即ち単に『一面的』にでなく与えられるであらう。此の理性定立の根柢に質料として存する意味は、把握に依つて示された vorgezeichneten【予め下図を描かれた】側面の何れから見ても、規定さるべきXに対して何かを『未決』の俥に残すという事はない。即ち猶お未だ確定的規定性でない規定可能性、完全に規定された、完結した意味でない意味、というものは其場合存しないのである。理性定立は根源的定立であるべきであるから、それは、完全な意味に於いて規定されたものの**原的所与**をその理性基礎とせねばならない。即ち、Xは単に完全なる規定性に於いて思念されている許りでなく、恰も此の規定性に於いて原的に与えられているのである。そこで右の等価性というのは左の如き意味である。即ち、

各々の『真に存在する』対象には、可能的意識——これに依つて対象自身は原的に、同時に又完全に十全的に把握され得る——という理念が、(無制約の本質普遍性のアプリアーリに於いて) 原理的に対応する。逆に、若し此の可能性が保証されている場合には、恰もその事に依つて ego 対象は真

i 「根源的定立」 "Da die Vernunftthesis eine ursprüngliche sein soll," 渡辺訳「理性定立は根源的なものであるべきはず」

に存在しているのである。

此の場合なお次の事は特別の意義を有っている。即ち各々の**把握範疇**（各々の対象範疇の双関者）の本質に於いては、該範疇の対象に就いての、如何なる形態の具体的、完全的乃至不完全なる把握が可能であるかが、確定的に示されているという事である。更に又、各々の不完全把握に対して、如何にしてそれは完全化さるべきか、如何にしてその意味は完備化され、直観に依つて充実さるべきか、及び如何にして直観は更に豊富化さるべきかが、本質的に示されているという事である。

各々の対象範疇（換言すれば、吾々の狭く且つ精確な意味に於ける各々の領域及び各々の範疇）は、それ自身原理的に、十全的所与に迄齎され得る普遍的本質である。此の対象範疇は、特殊的なる対象、即ち具体的体験の多様に於いて意識される対象の各々に対して、**該範疇が十全的に与えられるという事に依つて、洞観的な普遍的規則**を指定する（此の場合体験というのは勿論、個別的特殊者の意味でなく、本質、最低の具体者の意味に解すべきである）。即ち右の対象範疇は、その下に属する対象が、意味及び与えられ方から観て、如何にして十分なる規定、十全的な原的所与にまで齎され得るかという其の仕方、孤立的なる、乃至は連続的に経過する如何なる意識聯関に依つて、又此の聯関の如何なる具体的本質裝備に依つてであるかという其の仕方に対して、規則を指定するのである。以上の短い文章に如何程の意味が含まれているかは、末章の一層詳細なる論述（第一四九節以下）に於いて明らかになるであろう。此処では例を挙げて簡単に指示すれば十分であろう。即ち、或る物の見えていない規定 *Bestimmtheiten* 【規定性】も、吾々が必然的明証を以て知っている通り、物の規定一般と等しく

必然的に空間的規定である。これが即ち、現出している物の見えざる側面に対する可能的なる空間的補足の仕方に対して一つの合法的規則——十分に展開すれば純粹幾何学と呼ばれる規則——を与えるのである。更に進んだ物的規定は時間的規定であり、物質的規定であつて、これに属するのは、可能的なる（それゆえ自由・恣意的ならぬ）感官補足に対する、更に進んでは可能的なる定立的直観乃至現出に対する新しき諸規則である。これ等の規則は如何なる本質内実を有し得るか、これ等規則の材料、その可能的なるノエマ的（乃至ノエシス的）把握性格は如何なる規範に従うか、この事も亦先天的に示されている。

一四三、カントの意味に於けるイデーとしての「物の十全的所与性」

標題は右の如くであるが、これを論題とする前に、嚮に吾々の論述した（二九二頁）所と一見矛盾するかの如き観ある点を除くために、附言を必要とする。嚮に吾々は、原理的にただ不十全的にのみ現出する（それ故ただ不十全的にのみ知覚され得る）対象があると言つた。併しながら、吾々の附加した制限的但書を見落してはならない。即ち吾々は、**完結的現出に於いては**、知覚し得られるのは不十全的であると言つた。完結的意識に於いては、完全に規定されたり又同様に完全に直観されたりしては与えられ得ない所の対象——自然乃至世界という名称が包括するすべての超越的对象、すべての『**実在**』はこれに属する——があるのである。

i 底本二九二頁は、原著で指す付近ではあるが、第一三八節のその次頁「即ち物という意味での」以下ではないか。

けれどもそれにも拘らず（カントの意味に於ける）『イデー』としては完全なる所与性が示されて *vorgezeichnet* いる【下図が描かれている】——連続的現出の無限過程の、その本質型上絶対的に規定されたる体系として、即ち此の過程の野として、種々異なつてはいるが併し一定の諸次元を有つた**現出**の先天的に一定の**連続体**（固き本質法則性に依つて支配されている）が示されている。

此の連続体は、詳しくは全面的に無限なる連続体と規定されるのであつて、それはその相のすべてに於いて同じ規定可能なるXの諸現出から成つて居り、且つ又、その任意の線の各々が連続的経過に於いて調和的な現出聯関——これ自身は可動的現出の統一と呼ばれるべきである、そしてこれに於いて絶えず与えられている一にして同じXは連続的・調和的に『益々詳細に』且つ決して『別様に』でなく規定されて行く——を生ぜしめる様に聯関的に秩序づけられ、本質内実上規定されている。

扱経過の完結的な統一、それ故に有有限なる、但し可動的なる作用というものは——連続体なるものは全面的に無限的である故に——考え得られない（若しそう考えれば有有限無限という矛盾に陥る）。ではあるが併し、此の連続体のイデー及び此の連続体を範とする完全なる所与のイデーは眼前に**洞観的に**存している——『イデー』独自の仕方**で洞観的に**、又イデーの本質に依つて**固有の洞観型**を示して。

本質的に動機づけられたる無限性というイデーはそれ自身が無限性なのではない。此の無限性なるものは原理上与えられ得ないという洞観は、此の無限性の**イデー**の洞観的所与性を排斥するのではなく、却つてそれを要求するのである。

一四四、現実と原能的能与の意識、終結的諸規定

斯くて、真存在なる形相は十全所与存在及び明証的措定可能存在なる形相と双関的に等値であるという事に變りがない——ただ後者は、有限的所与性の意味でか、或はイデーの形に於ける所与性の意味でかである。前者の場合には存在は『内在的』存在即ち完結的体験乃至体験のノエマ的関與者としての存在であり、後者の場合には、超越的存在、即ちその『超越性』がまさしく、存在『質料』として右存在に依つて要求されるところのノエマ的関與者の無限性の裡に存する所の存在である。

能与的直観が**十全的**且つ**内在的**なる場合には、成程意味と対象とは一致しないが、併し原的に充實された意味と対象とは一致する。対象とはとりも直さず、十全的直観に於いて原的な自体として把握され措定されているものであつて、かく原的なものが故に洞観的であり、意味完備性及び完備的な原的意味充實の故に絶対的に洞観的である。

能与的直観が**超越的**なる場合には、对象的なるものは十全的に与えられるに至り得ない。与えられるのは、ただ斯くの如き对象的者^{もの}乃至その意味及びその『認識的本質』の**イデー**、随つて又十全的経験のまさしく合法的なる無限性に対する先天的規則、だけである。

其の時々遂行された経験及び此の規則（乃至該経験を掩う多様な規則体系）を基礎としては、それ以上の経験経過は如何にして進行するであろうかという事は、勿論一義的に推知する事ができない。反対に無限に多くの可能性が展開している（が併しこの可能性は非常に内容豊富なる先天的統制

に依つて、範型を示されている。幾何学の規則体系は、今此処で觀察されている運動の部分を補足する事のできる可能的運動形態のすべてを絶対的に確實に規定する。併し現実に運動しているものの現実的な運動経過は、幾何学は一つもこれを示さない。經驗を基礎とする經驗的思惟は此の場合如何に役立つか。經驗的に措定された統一——と言つても之は無限の多義を含む——としての物性を学的に規定するという如き事は如何にして可能となるか。自然客觀、自然現象等々のイデー（個別的特殊者のイデーとして十分に規定されているイデー）に随つて一義的に規定するという目的は、自然定立の内部に於いて如何にして達せられ得るか。これ等の事は新しき研究層に属する。即ちこれ等は、特に經驗的というべき——特殊的に言えば物理学的、心理学的なる、一般的に言えば自然科学的なる——理性の現象学に属するのであつて、此の現象学は經驗科学そのものに属する所の存在学的並びにノエシス学的諸規則をその現象学的源泉にまで遡源 zurückführen せしめる。ところで斯くいう意味は、此の現象学は、それ等規則の内容が埋まり込んでゐる所の現象学的層、即ちノエシス的並びにノエマ的層を探索して形相学的に研究するものであるというのである。

一四五、「明証の現象学」に対する批判的考察

上述の考察から推して明らかなる通り、意識一般をでなくして理性意識を直覺的に研究せんとする所の**理性の現象学**、即ち**精確な意味に於けるノエシス学**は、是非とも一般現象学を予想する。措定性の領内に於いて、**各種の定立的意識は規範の支配下にある**という事は、それ自体ひとつの現象学的事

実である。規範とは、種類及び形式の上から厳密に分析記述さるべき或るノエシス・ノエマ的聯関に關する所の本質法則にほかならない。勿論此の場合に『**非理性**』も亦理性の否定的対応者として常に顧慮されねばならない。それは恰も、明証の現象学が明証の対応者即ち**不条理**の現象学を自身の裡に含む⁽³⁾のと同じである。**明証に就いての普遍的本質論**（と共に、此の本質論の、最普遍的なる本質區別に關する分析）は、理性の現象学の、基礎的ではあるが比較的小さな一部分を成すものである。同時に又、明証の背理なる解釈に反對して本巻の初めに於いて私の簡単に主張した事柄が確証される、——そして此の事を完全に洞觀するには右に行つた考察だけで既に十分である。

明証とは決して、判断（普通明証という事を言うのは判断の場合に限る）に附着して、より優れたる世界からの神秘的なる声の如くに——宛も斯くの如き声は吾々自由思想家に何事か言う事があつて、且つその権源 *Rechtswort* 【正当性の名目】は誇示する必要のないかの様に——「此処に真理あり！」と吾々に叫びかける所の、何か或る意識指標であるのではない。吾々は最早諸々の懷疑論と論争したり、如何なる明証指標説、明証感情論も克服できぬ旧型の疑惑——（デカルトの仮構なる）悪魔とか、或は事実上の世界の経過の致命的変革とかの結果、各々の誤まれる判断そのものが思惟必然性、先驗的当為等々という此の指標、此の感情を具えるようになりはしまいかという疑惑——を吟味したりする必要はない。此の種の現象そのものの研究に、現象学的還元の埒内に於いて着手するならば、人は、此の場合の研究対象は固有なる措定様態——これはノエマの形相的に規定されたる本質規整に属する（例えば、ノエマの性状に対する根源的洞觀性を『**原的**』に附与する本質諦視という様態）——

—である（随つて決して、何等かの仕方で作用に附随する内容や、種類の如何を問わず附加的なもの、等ではない）という事を極めて明白に認識する。次に進んで人は、本質法則は又、右の特殊の規整を有たぬ措定的作用の、それを有つ措定的作用に対する關係を統制するという事、例えば『**指向充実**（Erfüllung der Intention）の意識の如きもの、即ち特に措定的性格に関する權利付与や確認の意識の如きもの、並びに又それに対応する**權利剝奪、確認撤回等の対応性格**（Gegencharaktere【對應的性格】）のあるという事を認識する。更に進んでは又人は、論理学の原理は深き現象学的解明を要求する、それでは例え矛盾の原理は吾々を、可能的認識と可能的確認撤回（乃至理性的抹殺）との本質聯関へ遡源せしめるといふ事を認識する^{（四）}。要するに人は、此處で研究対象となるのは決して偶然的事実ではなくして、互いに形相的聯関をなす形相的現象であり、それゆゑに形相に於いて起る事柄は事実に対して絶対に踰え難き規範の働きをなすのであるという洞觀を得る。現象学の此の章に於いて人は又、各々の措定的体験（例えば各々の任意の判断体験）が同じ仕方で明証的となり得るとは限らないという事、明細に言へば、各々の措定的体験が直接的に明証的となり得るとは限らないという事、更には、理性措定のすべての仕方、直接的乃至間接的明証のすべての型は、根本的に相異なる諸対象領域がそれに於いてノエシス・ノエマ的に相分れている所のその現象学的聯関に根ざしているという事等、をも明らかにするのである。

特に肝要なのは、すべての範圍に於ける連統的な同一的合一化及び綜合定立的な同一化を、その現象学的規整の点から体系的に研究すべきであるという事である。若し人が先ず第一に——これ

は必要なる第一歩であるが——、指向的体験の内面的構成を、一般的構造のすべてに互つて、即ちこれ等構造の並行性を、意味、意味主語、定立的性格、充実性等の如きノエマに於ける諸成層を、識るならば、次にはすべての綜合定立的合一に於いて、単に一般的に作用結合のみならず、一つの作用の統一となる結合が、如何にして右合一と同時に生ずるかを悉皆【残らず】明らかにする事が必要である。とりわけ明らかにする必要のある問題は、同一化的合一は如何にして可能であるか、規定され得べきXは如何にして此処彼処で合致するに至るか、その場合意味規定とその空位——即ち此処ではその不定契機——とは如何に係するか、等であり、同様に又、高低の意識段階に於いて、如何にして充実性は、随つて如何にして確認、証示、進行的認識等の形は、明晰となり分析的洞観に達するかという事である。

ところでこれ等及びすべてこれ等に並行なる理性研究は、『先驗的』観方即ち現象学的観方に於いて行われる。此の研究に於いて下される判断は何れも、自然的現実の定立を背景として予想する自然的判断ではない。そしてこれは、現実意識、自然認識、自然に關する価値諦視及び価値洞観等の現象学を研究する場合に於いてさえも矢張りそうである。如何なる場合にも吾々はノエシス及びノエマの形態を追窮する。即ち、吾々は体系的にして且つ形相的な形態学を立案し、如何なる場合にも本質必然性と本質可能性——後者は必然的可能性、即ち本質に於いて定められ本質法則に依つて限界づけられてゐる所の両立可能性なる合一形式として——とを取出すのである。『対象』とは吾々から観れば、常に、意識の本質聯関を示す名称である。対象は先ず最初にはノエマ的Xとして、即ち種々なる本質

型の意味及び命題の意味主語として現れる。更には又対象は、『現実的对象』なる名称として現れる。此の場合には対象は、或る形相的に観られたる理性聯関——これに於いて、これの中に存する意味上統一的なるXは理性に依る措定を受ける——を示す名称なのである。

『目的論的』に相属的な意識形態の、一定的で、形相的に限界づけられていて、且つ本質研究に依つて固定さるべき群を示す右の類の名称としては、『可能的対象』、『蓋然的对象』、『疑問的对象』等の語がある。其の場合聯関はいつも別様の聯関であり、その別様性が嚴密に記述せられ得る聯関である。それ故例えば左の如き事は容易に洞見できる。即ち、斯く斯くに規定されたXの**可能性**は、單に、此のXが意味成素に於いて原的に与えられる事に依つて、随つて現実在の実証に依つて証示される許りでなく、單なる再生的に基づけられている期待も亦、調和的接合に於いて相互的に權利づけられ得るという事、同様に又**容疑性**は、或る記述的種類の被変様の直観の間の矛盾現象に於いて証示されるという事、等々である。それには理性論的研究が結び付くが、これは事象、価値、実践的对象等の區別に關してであり、且つこれ等に向つて規整される意識成体を追窮する。斯くて現象学は實際、それが排去する所の自然的世界の全体及び觀念的世界のすべてを包括する。換言すれば現象学はこれ等を、対象意味及びノエマ一般をノエシスの完結的体系と結び付ける本質法則性に依つて、又特に、『現実的对象』をその双関者とする理性法則の本質聯関——それ故此の現象的对象の方は其の折々に、目的論的に統一的なる意識形態の一定的全体系に対する指標を示す——に依つて、『世界意味』として包括するのである。

(一) すべての定立的現象は『反映』され『無力』となつて、想像及び中和性の領界に移入する。すべての理性現象も亦同様である。中和的定立は確証せられ得ない。併し『擬似的』に確証せられ得る。即ちそれは明証的でなくして、『宛も』明証的等々である。

(二) 『論、研、』第二巻、第六研究、第三九節、五九四頁〔第二版、第二巻、第二冊一二二頁以下〕特に五九八頁〔同上、一二六頁〕参照。概して第六研究の全体は、本章に論述した理性問題の研究に対して現象学的予備労作を提供する。

(三) 上述第二篇の第二章、特に第二一節、上巻、八八——八九頁参照〔『觀念論の側』以下〕。

(四) 『論、研、』第二巻、第六研究、第三四節、五八三頁以下〔第二版、第二巻第二冊、一一一頁以下〕参照。——残念ながらザルヘルム・ヴントの意見は此の点に就いて、現象学全体に就いてと同様に、全く別である。吾々の研究は純粹に直觀的な所与の領界を一步も出ていないのに、彼はこれを『スコラ学』と解釈している。意味付与的作用と意味充實的作用との區別を彼は、吾々に依つて『選ばれたる形式的図式』と稱し、吾々の分析の結果は『幼稚極まる』『言葉の繰返し』即ち『明証は明証であり、抽象は抽象である』と言うものと稱してゐる。(Kleine Schriften I, S. 613) 彼はその批評の結論を次の如き言葉で初めている。その言葉を私は矢張り此處に引用しておきたい。『フッサールは新しい論理学を、実践的よりも理論的な方向に於いて基礎づけようとしているのであるが、その基礎づけは、彼の概念分析の何れに於いても、それが積極的内容を有つている限り、實際 $A \equiv A$ であつて、他の何ものでもないという事の確言に終つてゐる』(a. a. O. S. 613-614)

第三章 理性論的問題群の一般性段階

理性の現象学の問題群に關する吾々の省察は、今迄一般性の高処に働いていたのであるが、斯くの如き高処は、問題の本質的分岐、及び問題の形式的並びに領域的存在学との聯関を明らかにするものでない。此の点に就いて吾々は一層詳細なる考察を試みねばならない。斯くする事に依つて初めて、理性の現象学的形相学の十分なる意味、及び右形相学の諸問題の全財産が、吾々に開示されるであろう。

一四六、最も一般的なる問題

吾々は理性問題群の源泉に遡つて、これをその分岐する処まで、出来るだけ体系的に追窮して行かう。

全現象学を掩う問題名称を指向性と呼ぶ。此の名辭はまさしく意識の基礎的特性を示すものであつて、現象学上のすべての問題——ヒュレーの問題さえも——が此の名称に包括されるのである。斯くて現象学は指向性の問題に始まる。けれども先ず初めは一般性に於いてであつて、意識に於いて意識せられたるものの現実（真実）存在の問題は研究圏内に引入れられない。最も一般的なる意味に於ける定立的性格を有つた措定的意識は『思念 *vermeinen / meaning*』と呼ばれ得るものであり、且つ思念として必然的に、妥当性 *Gültigkeit / validity* と非妥当性との理性対立の下に立つという事は、論外に置か

れる。扱これ等の問題には吾々は最後の諸章に於いて、今迄に吾々の知つた意識の主要構造を顧慮しつつ、近づく事が出来た。研究対象は形相的始元 *Arrange* であるから、自然吾々は分析を出来る限り一般的に行つた。すべて形相的領界に於いては、探究的分析が特殊なるものに関する場合と雖も、体系的道程はより高き一般性からより低き一般性へと進む。吾々は理性及び理性定立一般、原的明証及び派生的明証、十全的明証、不十全的明証、本質洞観及び個体的明証等々に就いて述べた。吾々の行つた記述は既に、広大なる現象学的地盤を予想している。即ち最も一般的なる意識構造に関する諸章に於いて吾々が取出した所の困難なる区別の全系列を予想している。意味、命題、充実された命題（『論理学的諸研究』の用語では認識的本質）等の概念なくしては、勿論、何等か或る理性論的問題を根本的に言い表すに至る事は全然不可能である。これ等の概念は又別の概念、及び別の概念に應ずる本質区別——即ち指定性と中和性との区別、定立的性格とそれの質料との区別、命題なる形相の中へ入つて来ない独特の諸本質変様（例えば注意的諸変様）の区分、等々——を予想している。同時に吾々は、此処に吾々所論の最一般的なる理性論的層に於ける必須的分析の範圍の価値を侮られない様に、前章の本質記述は單なる端緒と見做さるべきものなる事を強調する。此処に於いても亦吾々は例の通り、單に方法的意図を達成したに過ぎない。その意図とは即ち、現象学的研究の一分野として描かるべき原理的に新しき層の各々に対して、吾々がその層を確保でき、それに関する出発点的問題、基礎的問題を言い表す事ができ、且つそれを取囲む問題地平を自由に眺める事の出来るような、十分に確乎たる地盤を獲得せんとする意図である。

一四七、問題の分歧、形式論理学、価値論及び実践論

理性の一般現象学は、吾々が、理性性格に対して規定なる更に進んだ構造的區別——定立の基礎的性質に依る相違、即ち端的定立と基づけられたる定立との區別及びそれと交叉する所の単肢的定立と綜合定立との區別——を顧慮すると、分歧して来る。理性問題（明証問題）の主要群は、定立の主要群及び定立が本質上要求する措置資料の主要群に係る。先ず第一位に来るものは勿論原信憑（ウルドクサ）であり、対応的な存在様相を有つ信憑的様相である。

右の如き理性論の目標を追窮する場合、人は必然的に、形式論理学、及びそれに並行的なる（私が**形式的価値論及び実践論**と呼んだ）学科の、**理性論的解明の諸問題**に到達する。

先ず第一に、命題——特に**綜合定立的命題**——の諸純粹形式論に就いての上掲論述を参照せられたい。その純粹形式論は、述定的なる信憑的綜合定立に関するものであり、並びに又信憑的様相に属し、更には情緒作用及び意志作用に属する綜合定立的形式に関するものであった。（随つて例えば引出 *Bevorzugung* 【優先】の形式、『他者のために』する評価や意欲の形式、価値論的な『及び』や『或は』の形式に関するものであった。）これ等の形式論に於いてノエマ的に論ずる所は、純粹形式からみての綜合定立的命題に就いてであつて、理性の妥当乃至非妥当は問題とされていない。それ故これ等の形式論は猶未だ理性論の層には属さないのである。

ところで吾々が右の理性の妥当乃至非妥当の問題を——而も命題が専ら純粹形式に依つて規定され

ていると考えられる限り、命題一般に対して——提出するならば、吾々は直ちに、形式論理学の領分、及び、その本質上適當なる形式論を基礎としてその上に築かれている所の上述の形式的なる並行的学科の領分に入っているのである。綜合定立的形式——これはかかる綜合定立的形式として明らかに、当該命題範疇の定立乃至命題の種々なるものを予想する、が併しその特殊性は不定の俚に放置する——の裡には、該学科の本質法則に於いて現れる所の「**可能的妥当性の先天的制約**」が存している。

特に、**述定的**（分析的）綜合定立の純粹形式の裡には、**信憑的なる理性確實性の**（ノエマ的に言え、**可能的真理の**）可能性の先天的制約が存している。此の制約の客觀的闡明を行うのが最狹義の形式論理学、即ち**形式的命題学**（『判断』の形式論理学）——随つてそれはこの『判断』の形式論をその基礎とする——である。

同様の事が、情緒及び意志の領界に属する綜合定立及びそのノエマ的雙関者にも当て嵌まり、随つて又右に属する綜合定立的『命題』——これの体系的形式論は復、形式的妥当論の建設に対して土台を提供すべきである——にも当て嵌まる。これ等領界の純粹なる綜合定立的形式（例へば目的と手段との聯関）の裡には、**価値論的及び実践論的『真理』の可能性の制約**が、まさしく實際に存している。此の場合、価値論的及び実践論的**合理性**のすべては、例えば情緒作用の如きに於いても行われる所の『客觀化』に由つて、吾々に了解できる仕方で転化して、**信憑的合理性**となり、又ノエマ的には**真理**となり、對象的には**現実**となる。そこで吾々は、真乃至現實的なる目的、手段、摂取性 *Vorzuglichkeiten* 【長所・卓越性】等々という事を言うのである。

すべてこれ等の聯関には、独特にして極めて重要なる現象学的研究が加えられる事は勿論である。形式的学科の今示した特徴の性質からして既に現象学的であつて、吾々の分析の多くのものを予想している。**純粹論理学**を『独断的に』取扱う学者は、命題学的形式（『命題一般』乃至『判断』、即ち定言的、仮言的、連接的、選言的等々の判断）を抽象的に解して、それ等に対して形式的真理の諸公理を決定する。分析的なる綜合、ノエシス・ノエマ的な本質關係、彼が取出して概念的に決定する本質が純粹意識の本質複合に入つてゐるという事、等に就いては彼は少しも知る所がない。彼は、此の十分なる本質聯関に於いてのみ十分に了解され得るものを引離して研究するのである。吾々が或は真理の形式的制約を、或は認識の形式的制約を口にする場合に、本来その意味する所は何であるかという事を、先驗的に純化されたる意識に於ける直覺という源泉に遡る事に依つて吾々に明らかにしてくれるのは、現象学にして始めて能くする所である。一般に現象学は、認識、明証、真理、存在（対象、事態等々）等の諸概念に属する所の**本質**及び**本質關係**に就いて吾々の蒙を啓いてくれる。現象学は吾々に、判断作用及び判断の構成の了解を教え、ノエマの構造は如何にして認識に対して规定的であるか、その場合『命題』は——その認識的『充実性 Fülle』の種々なる可能性も亦——如何にしてその特殊的役割を演ずるか、その仕方 of 了解を教えてくれる。現象学は、如何なる充実仕方が明証の理性性格に対する本質制約であるか、その折々に問題となつてゐるのは如何なる種類の明証であるか等々という事を示してくれる。とりわけ現象学が吾々にわからせてくれるのは、**論理学の先天的真理**の場合の論題は、**命題の直覺的充実** *Erfüllung*（これに依つてそれに應ずる事態が綜合定立的直觀に達

する)の**可能性と命題の純粹なる綜合定立的形式**(純粹論理的形式)との間の本質聯関であるという事、及び右の可能性は同時に**可能的妥当の制約である**という事である。

現象学は又、精確に觀ればノエシスとノエマとの双関關係に應じて二重の事を區別すべきであるという事をも示してくれる。形式的命題学(例えば三段論法論)に於いて論ずる所は、ノエマ的命題としての判断、及びその『形式的真理』である。即ちその觀方は全然ノエマ的である。他方**形式的なる命題学的ノエシス学**に於いては觀方はノエシス的である。即ち論ずる所は判断作用の合理性、正当性であつて、此の正当性の**規範**が、而も命題の形式に關係せしめて、示されるのである。例えば矛盾を人は真なりとは見做し得ない。妥当なる推理式の前提形式に従つて判断する者はそれに対応する形式の結論を引出さ『ざるを得ない』等々である。現象学的聯関に於いては、斯くの如き並行は造作なく明らかになる。判断作用乃至ノエシスに關する出来事も、同様に又ノエマ乃至命題に於ける右と本質上対応する出来事も、それが研究されるのはとりも直さずそれ等の必然的相互關係の点であり、又十分なる意識**連鎖**の点である。

右と同じ事が、言う迄もなく、ノエシス的統制とノエマ的統制との並行性の点で、爾余の形式的諸学科にも当て嵌まる。

(一) 第一三三——一三四節、二七一——二七八頁参照【一三三、ノエマ的命題】以下。

一四八、形式的存在学の理性論的諸問題

以上の諸学科から転じて吾々は、それに対応する諸**存在学**に導かれる。此の聯関は、各々の作用の内部に於いて遂行され得る普遍的に可能なる視向擬向 *Blickwendungen / turning of one's regard* 【向け換え】に依つて、既に現象学的に示されている。此の場合、該擬向が視向の中へ齎す所の成素は、多種の本質法則に依つて相互に結合されている。最初の觀方 *Einstellung / attitude* は対象的なものに向つた觀方であるが、ノエマ的反省はノエマ的成素に導き、ノエシス的反省はノエシス的成素に導く。吾々が此處で関心を有つ所の諸学科は、右の諸成素の中から純粹形式を抽象的に取出して来る。即ち形式的命題学はノエマ的形式を、それに並行するノエシス学はノエシス的形式を取出して来る。此の兩つの形式が相互に本質法則的に結合されているのと同様に、此の兩形式は又存在的形式——これは視向を存在的成素へ逆転する事に依つて把握され得る——とも、本質法則的に結合されている。

各々の形式論理学的法則は、形式存在学的法則へ等価的に転ぜられ得る。そうすると、判断に就いての代りに事態に就いて、判断肢（例えば名辞的意義）に就いての代りに対象に就いて、賓辞意義に就いての代りに徴表に就いて判断される、等々となる。論ずる所も亦最早判断命題の真理性、妥当性に就いてではなく、事態の存立、対象の存在等々に就いてである。

言う迄もなく此の転向の現象学的内実も亦、基準となる諸概念の内実に遡る事に依つて闡明され得る。

なお又形式的存在学は、形式的なる命題学的真理の右の如き単なる転向の領界を超えて遠く拡がる。

i "Rückwendung des Blickes" "turning the regard back to"

嚮に述べたあの『名辞化』に依つて、重要な諸学科が成長して形式的存在学⁽¹⁾に属するものとなつて来る。複数的判断作用に於いては複数は複数的定立として現れる。名辞化的転向に依つて複数は集合なる対象となり、かくて**集合論**の基礎概念が生ずる。集合論に於いては、固有的種類の特性、関係等々を有つ所の対象としての集合に**就いて**判断される。これと同じ事が、**数学の諸学科**の基礎概念としての関係、集合数等々の概念にも当て嵌まる。此処に於いても亦吾々は、命題の単なる形式論の場合と等しく、右の諸学科を展開する事、随つて数学、三段論法等々を研究する事は、現象学の任務でないと言わねばならない。現象学が、現象学的分析の題目として関心するのは、公理とその概念的存立とだけである。

以上述べた事はおのずから、**形式的なる価値論及び実践論**にも、並びに又理論的な被願望体として右両論と並列さるべき、(非常に拡大した意味に於ける) **価値、福利**——約言すれば、情緒意識及び意志意識の双関者たる**全存在領域**——の、**形式的諸存在学**にも、移される。

読者は、『**形式的存在学**』なる概念が右の考察に於いて**拡大された**事に気がつくであろう。価値、実践の対象は、『対象』、『或るもの一般』という形式的なる名辞の下に属する。それ故それ等は、普遍的なる分析的存在学の立場からすれば質料的に規定されている対象であつて、それ等に属する、価値及び実践の対象の『形式的』存在学は、質料的なる学科である。他方に於いて、定立的諸類(信、乃至信様相、評価、意欲)と、種としてそれに属せしめられる綜合定立及び文章法的形成との並行に基礎を置く所の類比は力を有っているが、此の力は中々に強いものであつて、カントが目的の意欲と

手段の意欲との關係を直ちに『分析的』と名付けて、それがため明らかに類比と同一とを混同した程である。信憑^{ドクサ}の述定的綜合定立に属する所の本来的に分析的なるものは、情意^イ指定の綜合定立に関する所の、右分析的なるものの、形式的類比体と混同されてはならない。理性の現象学の深奥にして重要な諸問題は、これ等の類比乃至並行の根本的解明から出發するものである。

(一) 第二一九節、二二六——二二九頁参照【「複定立的作用の」以下】。

(二) 『道德哲学原論』 „Grundlegung zur Metaphysik der Sitten“ (第一版、四一七頁) 参照、『目的を意欲する人は(……)その目的に必要なくべからざる自力内の手段をも意欲する。この命題は意欲に関しては分析的である。』

一四九、領域的存在学の理性論的諸問題、現象学的規整の問題

形式的諸学科が吾々に与える理性論的諸問題を論究し了えた後、次に行うべきは**質料的諸存在学への**、先ず第一には**領域的諸存在学への**移行であろう。

各々の対象的領域は意識に於いて規整される。領域的類に依つて規定された対象は、それが現実的対象である限り、知覚——一般に明晰な又は曖昧な表象、思惟、証示等——を受け得る(先天的に定められたる)仕方を、それ自身として有っている。それゆえ吾々は、合理性を基づけるものという点から観て、再び意味、命題、認識の本質へ立戻る。けれども今度は、吾々の念頭に置くのは領域的及ⁱ 読点を追加した。本来的に分析的なものはドクサの述定的綜合に属しているものことであり、それと……とは混同されてはならない。

び範疇の本質の質料的普遍性であるから、単なる形式へではなく、命題——その規定内実はその領域の規定性に於いて解される——へ立戻るのである。此の、場合各々の領域は、完結せる独自の研究群に対する手引きを提供する。

例えば物質的な物 Ding/Thing という領域を手引きとして採ってみよう。此の導きの意味を正解するならば、吾々はそれに依つて同時に、比較的完結した広汎なる現象学的一学科に対して基準を与える所のひとつの普遍的なる問題を捉える。即ちそれは、**物なる領域の対象性の、先験的意識に於ける普遍的『規整』の問題、更に簡潔には『物一般の現象学的規整』の問題である。**これと共に吾々は又、此の手引きの問題に附属する研究方法をも識るに至る。かくてこれと全く同様な事が、**各々の領域、及びその現象学的規整に関する学科の各々にも当て嵌まる。**

論点は次の如くである。物の領域に留まる事によると、此の物というイデーは、吾々が今此のイデーに就いて論ずる場合には、或るノエマ的要素を有つ『物』という概念的思想に依つて意識的に代表されるのである。各々のノエマには、合致に依る綜合定立的統一化が可能であるという事に依つて統一されている可能的なる諸ノエマの理念的に完結せる一群が、本質上対応している。此の場合の如くノエマが調和的ノエマなる時には、その群の中には又、直観的にして且つ特に原能的能与的な諸ノエマもあるのであつて、それ等に於いて此の群の互いに種を異にするすべてのノエマは、措定性の場合にそれ等から確証即ち理性力の充実を汲み取りつつ、同一化的合致に於いて充実されて来るのである。そこで吾々は、丁度今吾々の有っている、言葉の上だけの、懼おそらくは全く不明なる、物という表象

から出發しよう。吾々は同じ『物』一般に就いて自由に直觀的表象を產出して、此の言葉の曖昧な意味を明らかにする。この場合問題になるのは『一般的表象』なのであるから、吾々は例を挙げて行かねばならない。吾々は物に就いての任意の想像直觀——例えば羽のある鳥、白い鳥、黄金の山等々に就いての自由直觀の如き——を產出する。これ等と雖も亦勿論物であり、随つてこれ等に就いての表象は、現實的經驗の物に就いての表象と恰も同様に、例示の役に立つ。これ等に於いて吾々はイデー化の遂行に依つて『物』なる本質を普遍的に限界づけられたるノエマ的規定の主辭として、直覺的明晰さに於いて把握する。

扱（嚮に既に論定した事柄を想起して）注意すべき事は、右の場合成程『物』なる本質は原的に与えられているのではあるが、併し此の所与性は原理的に、十全的所与性ではあり得ないという事である。吾々はノエマ乃至事物・意味 Ding-Sinn / physical thing-sense を十全的所与に齎す事はできる。けれども多様な事物意味は、その充実相に於いて觀ても、『物』なる領域的本質をそれに内在する原的・直觀的成素として含んではない。恰も此の事は、一にして同じき個別的なる物に関する意味が此の物の個別本質を含んでいないのと同様である。換言すれば、事物個體の本質に就いての場合にせよ、又は物一般なる領域的本質に就いての場合にせよ、孰れの場合にも、目指す本質をその本質規定の全充実相に於いて**十全的**の仕方で獲得するには、個々の事物直觀或は事物直觀の有限完結的連続乃至蒐合では決して十分でない。けれども**不十全的**の本質諦視には右の孰れでも十分であつて、それは、不明表象を範例的土台として樹てられ得る如き空虚なる本質把握と比較すれば、本質を原的に示したという

大きな長所を常に有っている。

この事は、個別本質から昇つて物なる領域に至る迄、本質普遍性の段階のすべてに対して当て嵌まる。

ところで併し、**各々の不完全性なる所与性**（各々の不十全的に能与的なるノエマ）が、**その完全化の理念的可能性に対して自身の裡にひとつの規則を蔵している**という事は、普遍的なる本質洞観である。私が今有っているケンタウル現出——ケンタウルの本質を単に『一面的』に示す現出——の本質には、私は此の物の種々なる側面を辿つて、最初は不定的で開放的でいた点を、自由想像に於いて一定的且つ直観的になし得るという事が属している。絶えずより完全に直観化しより詳細に規定して行く所の此の想像過程の進行に於いて、吾々は高度に**自由**である。吾々は勿論、より詳細に规定的な特性及び特性の変化を、想像されたるケンタウルに対して随意に直観的に配当する事ができる。けれども、吾々は**調和的**なる直観進行——それに於いては、規定されべき主辞は同一的に同じものであり、調和的として何処迄も規定され得べき状態に在り得る如き直観進行——の形で前進すべきである以上、**吾々は全然自由であるわけではない**。例えば吾々は、**可能的なる物一般**というイデーが固く吾々に課する所の枠としての**法則的空間**に依つて、**繫縛**されている。吾々は吾々の想像するものの形を如何に随意に変ずるにしても、**空間形態は再び空間形態へ移入するものなのである**。

叔斯くの如き規則乃至法則の論は現象学上何を意味するか。『物』という不十全的に与えられたる領域が、**可能的直観**——これは無論**可能的知覚**というに等しい——の**進行に対して規則を与える**とい

う事には、如何なる意味が含まれているか。

これに対する答は次の通りである。即ち、斯くの如き事物ノエマの本質には、**調和的直観の『進行の無際限性』**⁽³⁾の観念的可能性が、それも絶対洞観的に、而も類型上一定的に指定されたる諸方向に向つて、（随つて対応ノエシスの連続的並置の並行的無際限性も亦）属している。吾々は此処で、物一般なる普遍的『イデー』の洞観的獲得に就いての嚮の論述を想起するのであるが、あの論述は、下つては、個別的に規定されたる物の最低の具体相に至る迄の、低段階普遍性の各々に對しても亦依然當て嵌まるのである。斯くの如き物の超越性は、それに就いての直観の進行のあの無際限性に於いて現れる。直観は何処までも直観連続へ移入せられ得るし、既に与えられた連続は拡大せられ得る。物の知覚は決して終極完結的なものではないのであつて、不定性を一層詳細に規定し、不充実性を充実にして行く所の新しき知覚に対する余地が、常に残存している。Xなる同じ物に何時も属している所の事物ノエマの規定内実は、一步一步毎に豊富になつて行く。これはひとつの本質洞観であるが、知覚及び知覚多様の**各々**は拡大が可能であり、随つてその過程は無限過程である。それゆゑ事物本質の如何なる直覚的把握も、それ以上の知覚がそれに対してノエマ的に新しいものを附加し得ないという程に完全ではあり得ないのである。

けれども他方吾々は、物という『イデー』は之を明証的且つ十全的に把握する。吾々は之を通過の自由過程に於いて、調和的直観の進行の無際限性の意識に於いて、把握する。斯くて吾々は差し當つて、物の――そして此の個別的なる物の――充実にせられざるイデーを、調和的直観が恰も『達するそ

の範圍迄』与えられているが併し同時に何処迄も『無限に』規定され得る所の或るものとして、把握する。『等々』という事は、事物ノエマに於ける洞觀的にして且つ絶対的に不可欠的な一契機である。更に進んで吾々は、此の無限性の範例的意識を基礎として、一定の無限方向の『イデー』を——而も、吾々が通過する直觀的経過 *anschaulichen Ablaufs / the intuitional course* の方向の各々に就いて——把握する。更に又吾々は、**物一般という領域的『イデー』**を、経過の**所屬性質 *gearten***の一定の無限の中に在って自己を保持し、且つノエマの一定性質の無限系列の所屬無限性に於いて現れる所の同一者として、把握する。ⁱⁱⁱ

物と等しく又、物の本質内実に属する**性質 *Beschaffenheit / property***の各々、とりわけ**規整的『形式』**の各々もイデーなのであつて、この事は、領域的普遍性から最低の特殊性に至る迄当て嵌まる。更に詳しく述べれば次の如くである。即ち、

物はその觀念的本質上 *res temporalis* **〔時間的物〕**として、即ち**時間という必然的『形式』**に於いて現れる。直覺的『イデー化』（これは『イデー』諦視として此処で特にその名に値する）は、吾々に、物を必然的に持続的として、その持続の点から觀て原理上無限に延長し得るものとして、認める事を教える。吾々は**『純粹直觀』**（かく呼ぶ理由はこのイデー化はカントの純粹直觀を現象学的に淨化

i *"sich in so gearten bestimmten Unendlichkeiten des Ablaufs durchhaltend"*「経過のそのような性質を帯びた無限性の中で自己を保持し」。すなわち「**所屬性質**」の「所屬」に対応する語がない、続く文にはあるが。
ii *und in den zugehörigen bestimmter gearten Unendlichkeitsreihen von Noemen*「そして、〔先の経過に〕所屬するところの一定性質を帯びたノエマの無限系列において」。すなわち「**zugehörigen**「所屬する」を系列ではなく経過と取る。
iii *「我々は、物一般を……所の同一者として把握する。」*

した概念であるから）に依つて、時間性及びその裡に含まれるすべての本質契機の『イデー』を把握する。

更に物は、そのイデーの上から言つて、*res extensa*〔延長ある物〕である。例えばそれは空間的に見て無限に多様な形の変化を有っているが、又形態及び形態の変化が同一的に確定している場合には位置の無限に多様な変化が可能である。要するに物は無限に『可動的』なのである。吾々は空間なる『イデー』とそれに属する諸々のイデーとを把握するのである。

最後に物は *res materials*〔物質的な物〕である。即ち物は**実体的統一**であり、かかるものとして**因果性**（而も可能上形態無限なる因果性）の統一である。これ等の特に実在的と呼ぶべき種類の特性に於いても亦吾々は、イデーに逢着する。斯くて事物イデーの成素のすべてはそれ自身イデーである。即ちその各々が『無限的』可能性の『等々』というものを含んでいるのである。

以上吾々の述べた所は『理論』でも『形而上学』でもない。目指す所は、事物ノエマ及びそれと双関的に「物を与える意識」の裡に廃棄不可能的に含まれている所の本質必然性を、全く洞観的に把握して体系的に研究せんとするに在る。

（一）第一四三節、三一〇頁以下参照【「カントの意味に於けるイデーとしての」以下】。

（二）カント『純粹理性批判』、（五）空間論（第一版二五頁）参照【「空間について」の節の第5項】。

一五〇、続き、先験的手引としての物なる領域

吾々は既に、物の直観そのものが（ノエシス及びノエマの点から観て）自身の裡に蔵している所の無限性——或は「物のイデー、及びそのイデーが無限性の次元に就いて自身の裡に蔵するもの」とも換言できる——を、極めて一般的に明らかにし了えた。である以上吾々は又、現象学的研究の手引として物なる領域は如何程迄役立ち得るかという事をも、間もなく了解し得るであろう。

個別的なる物を直観しつつ、そして此の直観に於いてその物の運動、その接近及び隔遠、その旋回及び回転、その形の變化及び性質の變化、その因果的狀態等を辿りつつ、吾々は、或る仕方
で合致し、合一して統一意識となつて行く所の直観の連続を遂行する——すると此の場合視向は、同一者に、即ち意味（乃至措定的なる、或は中和化されたる命題）のXに、即ち自身變化、旋回等々する所の一にして同じきものに、向けられている。吾々が自由直観に於いて、此の直観過程の進行の無限性を意識しつつ、無限に可能なる變様を種々なる根本方向に辿つて行く場合にも亦、右と同様である。更に又、吾々がイデー化の觀方に移行して、物なる領域的イデーを明らかにする場合——随つて此の場合の態度は幾何学者が自由に且つ純粹に幾何学的直観を行ふのと似ている——にも亦右と同様である。

併し以上にも拘らず吾々は、直観そのものの過程及び直観に属する本質及び本質の無限性に於いても、直観の材料及びノエシスの契機に於いても、直観のノエマ的成素に就いても、ノエシス、ノエマ両側面に於いて区別でき且つ形相的に把握できる諸層に就いても、何等知るを得ない。吾々が顯在的に體驗（乃至想像變様に於いて非反省的に意識）しているものも、吾々はこれを視てはいない。それ

ゆえ観方の変更が必要である。即ちヒュレー的、ノエシスの、ノエマ的と種々異なる『反省』が必要である（これ等を総括して反省と呼んで差し間違えない理由は、これ等はXへの素々の『直進的』視向方向 *Blickrichtung* からの転換であるからである）。此処に於いて自身に於いて相属する広大なる研究分野を、乃至は事物領域なるイデーに下属する大問題を、吾々に展開してくれるのは、即ち右の諸反省なのである。

即ち詳しくは左の如き疑問が起こるのである、**直観的に表象する事物意識の統一に属するノエシス及びノエマは如何にして体系的に記述せられ得べきか。**

若しノエマの領界に限って言えば、此の疑問は次の如くなる。

それに於いて『現実的』なる物が与えられるに至り、且つ直観的に、即ち根源的『経験』に於いて、己れの**現実性**を証示する所のその、多様な措定的直観、乃至『**直観命題**』の状態は如何であるか。

^{ドクサ}信憑的定立は捨象することとして、単なる——ノエマ的に解したる——**現出**の状態は如何であるか、（この現出はそれ自身に、純形相的に見て、一にして同じき物、夫々の場合に全く規定されている物——これは此の直観の多様乃至現出の多様に**必然的**双関者として属する——を『現出せしめる』）。現象学は原理上、曖昧なる言説、模糊たる一般性に留まるものではなく、体系的に規定されたる、本質聯関及びその究極的に到達できる分化にまで透徹する闡明、分析並びに記述を要求するものである。即ちそれは仕上げの**為事** *Arbeit / work* を要求するのである。

物という**領域的イデー**、此の物の、存在的として措定され規定的な意味内実を有った同一的Xは、

現出の多様に対して規則を課する。 という意味は、この多様がそれ自身に於いて、純粹に本質上、物乃至一定の物に対する關係を有つてゐるという事実からして既に明らかに帰結する通り、この多様は決して偶然的に集まる如き多様ではないというのである。領域なるイデーは、全く規定されたる、一定的に配列されたる、無際限に進行する、イデーの總体として見て固く完結した現出系列を指定する。即ち、領域的なる物のイデーに於いてその成分として一般的に示される部分的イデーと本質的且つ研究可能的に聯関してゐる所の右系列經過の一定的なる内的組織を指定する。例えば——此の組織の一部として——單なる *res extensa* [延長ある物] の統一は、*res materialis* [物質的なる物] なるイデーの規範となる統一がなくても（よし *res extensa* ならぬ *res materialis* は考え得られないとはいへ）考え得られるという事がわかる。換言すれば、物の現出の各々が、**物の図形**と吾々の呼ぶひとつの層を、自身の裡に必然的に蔵しているという事が、（常に形相的・現象学的直覺に於いて）明らかになつて来る。此の物の図形とは、『実体性』及び『因果性』（即ち引用符を着け、ノエマ的に変様されたる意味でのそれ）という規定を毫も含まぬ所の、單に、『感性的』性質のみを以て充たされたる空間形態である。既に**單なる** *res extensa* という所屬のイデーにしてからが、現象学の諸問題の豊富さを示す名称である。

現象学に未熟なる者としての吾々は左の事柄を單なる事実と考える。即ち、『吾々人間』に対しては空間物は常に或る『定位』に於いて、例えば視覺的視野に在つては上下、左右、遠近に定位して、現出するという事、吾々は物はこれをただ或る『奥行』、『距離』に於いてのみ見る事ができるとい

う事、その物が於いて見られる所の变化的距離のすべては、吾々が脳中に『定置』する奥行定位のすべての、見えないが併しイデーの極限点として吾々の熟知している所の中心点に關係しているという事——すべてこれ等の所謂事実性、随つて『真の』、『客觀的』空間には無關係なる空間直觀の偶然性は、些末なる經驗的分化に至る迄本質必然性なることが証示される。それ故、空間物的なるものという如きものは、啻に吾々人間にとつてのみならず、神——絶對的認識のイデー的代表者としての——にとつても亦、そのものが多樣的ながら一定的の仕方では『遠近法的に』變化しつつ且つ同時に變化的『定位』に於いて与えられて居り且つ与えられて居らざるを得ぬ所の現出を通してのみ直觀せられ得るものである、という事が認められる。

其次に、此の事柄を單に一般的提題として基礎づけるのみならず、個々形態のすべてに就いて追窮する必要がある。『空間表象の根源』——これが最深の現象学的意味は今迄決して把握されなかつた——に就いての問題は、すべてのノエマ的（乃至ノエシス的）現象——空間はこれに於いて直觀的に示現し、現出の統一、記述的なる示現仕方の統一として、空間的なるものを『規整』する——の現象学的なる本質分析に還元される。

此の**規整の問題**が此の場合意味する事は、明らかに次の事柄に外ならない。即ち、統制ある、**必然的に**相屬して一現出者の統一を成している現出系列は——その（一定の『等々』に於いてまさしく一義的に知悉できる）無限性にも拘らず——直覺的に通觀され理論的に把握され得るという事、該系列はそれの**形相的特性**を分析し記述され得るという事、及び、**統一としての一定的現出者と現出の一**

定的なる無限の多様との間の双関關係の法則的作業は、十分に洞見せられ得、随つてすべての謎から脱せしめられ得るといふ事である。

右の事は、*res extensa* (又 *res temporalis* も) の裡に存する統一に就いても当て嵌まる。と同様に又それよりも高次の統一、即ち基づけられたる統一、『物質的なる物』即ち**実体的・因果的なる物**といふ言葉の示す統一、に就いても当て嵌まる。すべてこれ等の統一は、『多様』に於ける經驗的直觀の段階に於いて規整される。そして如何なる場合にも此の相互の本質聯関は、完全に、すべての層に到る迄、即ち意味及び意味の充実性の点、措定的機能の点等々から觀て、限なく明らかにされねばならない。最後には此の事からして、**現象学的に純粹なる意識に於いて、現実的なる物という概念が表すのは何であるか**、それは如何にして、構造上研究され本質上記述されたるノエシス・ノエマ的聯関の絶対必須的双関者であるか、という事の洞觀が生じて来なければならぬ。

一五一、物の先驗的規整の諸層、補説

此の諸研究は、**原的に經驗する意識の埒内に於ける物の規整の種々なる段階及び層**に依つて本質的に規定されている。各々の段階、及びその段階に於ける各々の層は、それが**それ固有の統一を規整し**、此の統一の方は又物の十分なる規整に対して**必須なる媒介項**であるといふ事をその性格としている。感性的性質を具えた感官物をその双関者とする所の、端的に感覺的なる事物規整を例として採つてみれば、唯一の意識流、即ち唯一の知覚的自我主觀の可能的諸知覚が吾々の問題となる。それに於い

て吾々は諸種の統一層、即ち**感覺的諸図形**、高低各序位の諸『**視覚物**』を見出すのであつて、これを吾々はこの序位に於いて完全に取出し、そのノエシス・ノエマ的規整に関して、孤立的にも聯関に於いても、研究せねばならない。此の段階の諸層中**最上位**に在るのは**実体的・原因的なる物**——元來特に実在と呼べるべきもの、併し矢張りこれも一つの經驗的主觀及びその理念的なる知覚多樣に、規整的に結び付けられている——である。

次に**次位高次段階は共同主觀的に同一なる物**、即ち高次序位の規整的統一である。その規整は、『相互了解』という關係に立つ所の無限に多数の主觀に關係している。共同主觀的世界は、共同主觀的なる、即ち『**感情移入**』に依つて媒介されている經驗の、双関者である。斯くして吾々の問題となつて来るのは、多樣なる、即ち多くの主觀に依つて既に個別的に規整されたる感官物の統一であり、更に進んでは、それに対応する、随つて種々の自我主觀及び意識流に属する知覺の多樣である。が就中、感情移入なる新しきものと、及びそれは如何にして『客觀的』經驗に於いて規整の役割を演じて、あの分立的多樣に統一を与えるのであるかという疑問とである。

此の場合に研究はすべて、事象の本質上必要なる通り完全に且つ全面的に行われねばならない。それゆゑ吾々は嚮に、概説の目的に随つて、單に第一の体系、規整的なる現出の多樣の基礎体系のみを——即ち一にして同じき物がそれに於いて絶えず調和的に現出しているその体系のみを——念頭に置いたのであつた。すべての体系的なる線の方角への際限なき進行に於いて、知覚は純粹なる合致に到達する。即ち定立は間斷なく確認を受ける。此の場合には漸次詳細なる規定があるのみであつて、別

様なる規定は決して存しない。先行の経験経過に依つて（此のイデー的に完結した体系の内部で）規定されるに至つた事物規定は、領域的本質に依つて形式的に示されている同様なる性状範疇の別の規定に依つて、『抹殺』や『補足』を受けるものではない。そこには調和性の攪乱も、又攪乱の再調整もないのであり、況んや措定された物がそれに依つて徹底的に抹殺されるに至る所のあの調和性の『爆裂』等というものは存しない。ところが併し、此の存在しない場合も、現象学上矢張り考慮に入れなければならない。何故ならば、これ等と雖も亦経験現実の可能的規整の聯関に於いて、その役割を演じて居り、或は演じ得るからである。事實的認識の途も、イデー的に可能なる認識の途も、誤謬を通過しているのであるが、この事に依つて既にそれは、最低の認識段階、即ち直観に依る現実把握の段階に在るのである。それ故吾々は知覚の経過——それに於いて調和の部分的断片が出現し、調和は『訂正』に依つてのみ維持せられ得る——を、体系的にノエシスの本質要素及びノエマの本質要素から見て性格づけねばならない。その知覚の経過とは即ち、解釈の変化、独自の定立的出来事、嚮に把握した事柄を例えば『仮象』、『錯覚』なりと価値顛倒乃至価値廃棄を行うこと、局部的に相容れぬ『衝突』への移行等々である。調和という連続的綜合定立に対して吾々は、衝突、転釈乃至別様規定（其他名称の如何を問わず）という綜合定立の權利を認めねばならない。即ち『眞の現実』の現象学にとつては『無き仮象』の現象学も亦全く必要不可欠なのである。

これは難なくわかる事であるが、今物質的な物の規整を例として——即ちあらゆる『思惟 Deikan』に先立って存する多様な経験の体系に於ける規整に関して——述べられた事柄は、問題から云つても方法から云つても**すべての対象領域に移されるに違ひないのである**。その場合には勿論、『感性的知覚』の代りに、当該領域に本質上附属する種類の原的能与の作用が入り来るのであつて、現象学的分析は予めこれを剔出研究せねばならない。

種々なる領域の錯綜には甚だ困難なる諸問題が附着している。これ等諸領域は、規整に依る意識形成の場合の錯綜を制約する。『客観的』なる物の世界の共同主観的規整に関する上述の指示に依つて既に明らかにした通り、物は経験する主観に対して孤立するものではない。斯くて此の経験する主観そのものも、経験に於いて、恰も**共同主観的共同社会**が動物的共同社会として規整されるように、實在的なものとして、即ち**人間乃至獸類**として規整されるのである。

それ等の共同社会は、仮令心的實在に本質的に基づいている——その實在の方は又物的實在に基いている——とはいえ、新しき種類の**高次の対象性**なる事がわかる。兎に角如何なる心理主義的乃至自然主義的転釈にも属せざる多種の対象のある事は明らかである。すべての種類の**価値客観及び実践**の客観、即ち吾々の實際生活が確乎たる現実として規定する具体的文化成体のすべて、例えば**国家、法、風習、教会**等々がそれである。吾々はこれ等客観のすべてを、その基礎の種類から観て、又その段階序位に於いて、それ等が与えられる通りに記述し、そしてそれ等に就いて**規整の問題**を提出解決せねばならない。

それ等客観の規整は又全く自明的に、空間物性及び心的主観の規整に遡源する。即ちそれ等客観はまさしくこれ等の實在に基づいてゐるのである。爾他すべての實在の基礎には、最低段階として最後に物質的實在が存する。それ故に**物質的自然の現象学に優越なる地位が与えられる事**は慥かである。けれども、成心を離れてこれを観、而して現象学的にその源泉に遡るならば、基づけられたる諸統一は正に基づけられてはゐるに違ひないが併し**新しき種類の統一**なのである。それ等統一を以て規整される此の新しきものは、本質直覚の教える所に依れば、爾他諸實在の單なる總計に還元し得られるものでは断じてない。斯くて實際、**右の如き諸實在の独特なる型の各々はそれ独自の規整的現象学を、随つて又新しき具體的理性論を伴つてゐるのである。**孰れの場合にも、原理的な点では課題は同一である。即ち、右の如き客観すべての原的所与性を規整する所の意識形成の完全なる体系を、段階及び層のすべてに就いて認識して行き、それに依つて、当該種類の『現実』の「意識に於ける対等者」を明らかにする事が必要なのである。存在と意識との双関關係に関する（例えば、全現實は『心的なるものに解消する』という如き）、多くの陥り易き誤解を除くために今此處で有りの俚に述べねばならぬ事は、現象学的觀方に於いて直覺に照して把握せられたる「規整的諸群の本質聯関」を基礎としてのみ言われ得るのである。

一五三、先驗的問題の全広袤、研究の区分

今迄の處で可能であつた様に一般的に行われた説明では、今可能なりとして認められ且つ要求され

た研究の広大なる広袤に就いては何等十分なる心象を喚起する事ができない。そうするには、尠くとも現実の主要型に対しては、詳論的研究の若干が必要であろう。随つて、意識の一般的構造の問題群に關して吾々が遵守した如き手続が必要であろう。然るに、自然科学、心理学及び精神科学という名稱に依つて示される学問の大群の相互關係——特にそれ等の現象学に対する關係——に就いての現代甚だ殷^{さか}んに論争されつつある諸問題の討究に依つて、吾々が、同時に又この規整問題へも一層明白に迫るべき機会を得るのは、次の卷に於いての事である。けれども、今迄の処だけで既に、規整問題は真に重大問題であるという点、及び、**すべての實質的科學の眞の意味に於いて原理的なものすべて**に關する研究範圍が展開するという点迄は明らかになつたであろう。無論此の『原理的なもの』というのは、基礎概念及び基礎認識から觀て領域的イデーの周圍に集まるもの、及びそのイデーに対応する領域的諸存在^{しよ}に於いて己れの体系的展開を見出し、乃至は見出さざるを得ないもの、以外のものでは決してない。

右述べた事は、實質的領界から移して、**形式的領界及びそれに特定なる存在學的諸學科**にも、随つて又、吾々が規整という概念を適當に拡大する限りは、すべての原理及び原理學一般にも当て嵌められる。此の拡大と同時に勿論、規整的研究の範圍も、終にはそれが全現象學を包括し得るに至る程に拡大される。

右の事は、以下の如き補足的考察を行うならば、おのずから認めざるを得ないであろう。

第一に、対象規整の諸問題は、可能的なる**原的能與**の意識の多樣に關してゐる。それゆえ例えば物

の場合には、一にして同じき物に就いての可能的なる**経験**、加之知覚、の総体に関している。これには、再生的なる指定的種類の意識の補足的顧慮、及びその種意識の規整的なる理性作業——或は結局これと同じ意味であるが、端的に直観的なる認識に対するその種意識の作業——の研究、が連接する。同様に又、不明に表象する（が併し端的なる）意識及び此の意識に関する理性の諸問題及び現実性の諸問題の顧慮もこれに連接する。要するに、吾々は先ず第一には、**単なる『表象』の領界内を研究する**のである。

ところで右の研究に結合するのは、**より高次の（狹義に於いて所謂）『悟性の領界』或は『理性の領界』**の作業——その表明的、関係づける、及び其他の、『論理学的』（それから又価値論的、実践論的）綜合定立をも含めて、換言すればその『概念的』操作、即ちその供述、その新しき、間接的なる基礎づけの形式をも含めて——に関する適當なる研究である。それ故、最初は、**單定立的**操作、例えば單なる経験に於いて与えられ（或は与えられたりとイデーに於いて考えられ）た所の対象に、吾々は**綜合定立的操作**を加える事ができ、そして此の操作に依つて、益々高次の綜合定立の対象——これは定立総体の統一の裡に多様の定立を、又右定立の総体質料の統一の裡に多様にして互いに分肢する質料を、含んでいる——を規整する事ができる。吾々は蒐合する事、即ち種々なる段階序位の蒐合（集合）——集合の集合——を『形成』する事ができる。又吾々は、『全体』から『部分を』、即ち主体（主辞）に於いて特性、賓辞を『取出』し乃至『引出』す事も、対象を対象に『関係せしめる』事も、任意に或る対象を關係中心とし或る対象を被關係対象とし『する』事も、其他種々の事がで

きる。斯くの如き綜合定立を、吾々は、『現實的に』、『本来的に』、即ち**綜合定立的原性**に於いて遂行する事ができる。遂行されるとその綜合定立の対象は、その綜合定立的形式から云つて、原的に与えられたる（例えば現實的に与えられたる、蒐合、対主辞下屬、關係等々という）性格を有つ。そしてそれは、定立が原性なる十分の性格を有つ場合、随つて定立的なる作用性格が理性的なりとして原的に動機づけられてゐる場合には、原性なる十分の性格を有つのである。吾々は自由想像を將來することが出来る。即ち原的所与と擬似所与とを關係づける事ができる。或は、綜合定立を専ら変様に於いて遂行し、斯くて意識されたるものを『推定』に転化し、假説を『形成』し、それから『歸結を導出』する事もできる。或は又、比較と區別とを遂行して、それ等に依つて示されたる相等性乃至差別性そのものに対して再び綜合定立的操作を加え、そのすべてにイデー化、本質推定乃至本質推定を結び付け、斯くて無限に至る事もできる。

此の際その操作の基礎には、低段階乃至高段階の客觀化の、或る場合には直觀的な作用が、或る場合には非直觀的乃至全然混亂的な作用が、存する。不明乃至混亂の場合には吾々は、綜合定立的『成体』の闡明を志す事、即ち右成体の『綜合定立的直觀』に依る可能性の問題及び完成の問題、或は又右成体の、顯現的乃至原的能与的な綜合定立作用に依る、乃至は間接的な『推理』或は『証明』の途に依るその『現實性』の問題、完成可能性の問題を、提出する事ができる。現象学的には、これ等綜合定立の型のすべては、それ等に依つて『規整』されたる綜合定立の対象への双關係に於いて研究されねばならず、種々の所与様態と、その、右対象の『現實存在』或はその**眞可能性**、**現**

実蓋然存在等に対する意義が説明されねばならず、そして此の事は理性問題及び真理問題乃至現実問題のすべてに關してそうなのである。それゆえ此処にも亦『**規整の問題**』が在るのである。

扱成程論理学的綜合定立は、端的なる質料（意味）を有てる最低定立に基礎を置いてゐるのではあるが、併しそれは、綜合定立的段階の本質法則性、特に理性法則——非常に広い、が一定的に限界されたる『形式的』領界に於ける——は綜合定立の**肢体**という特殊の質料に非依属的であるという仕方に於いてである。恰も此の事に依つて、言う迄もなく、**普遍的**にして且つ**形式的なる論理学**は可能であつて、この論理学は、論理学的認識の『質料』を捨象してそれを不定的に自由に変更できる普遍性に於いて（『何か或るもの』として）思考するのである。随つて**規整に關する研究も亦分れて**、一方に於いては、**形式的なる基礎概念**に加えられて**これのみを理性問題**、或は**現實問題及び真理問題**の『手引き』として採る研究となり、他方に於いては、**領域的基礎概念**に——先ず第一には**領域そのもの**の概念に——加えられ、而もかかる領域の個別者は**如何にして与えられるに至るか**という問題を伴う所の、嚮に述べた研究となる。**領域的範疇及びそれに依つて指定される研究を以て、領域的質料に依つて綜合定立的形式を受ける所の特殊の規定はその權利を得るに至る**。そして、**特殊的束縛**（領域的公理に於いて表出される如き）を**領域的現實に加える所の影響も亦そうである**。

以上詳論した事は明らかに、移して以て、作用領界及び対象領界のすべてに、随つて又、**己れ特有の定立と質料とを有つ情意作用の出現をその規整上先天的に必要とする所の対象にも亦當て嵌まる**。そしてその仕方は、又これの形式及び質料的特殊性を説明する事が、適當なる規整的現象学の、未だ

着手されていないことは勿論殆んど予想だにされていない大課題である所の仕方なのである。

以上に依つて又、規整的諸現象学の、先天的諸存在学、最後には**すべての形相学的学科**（此処では現象学そのものは除外して）に対する密接なる関係も明らかになる。**形式的及び質料的諸本質論の段階次序は、或る仕方で、規整的諸現象学の段階次序を指定し、これ等の普遍性段階を規定し、そして存在学的及び質料的に形相的なる基礎概念及び原則に依つてこれ等に『手引き』を与えるものである。**例えば、時間、空間、物質、及びそれ等の最近の派生概念の如き自然の存在学の諸基礎概念は、物質的物性に就いての規整的意識の諸層に対する指標であり、同様に又該存在学の原則は、層内部及び層間の本質聯関に対する指標である。かくて純粹に論理学的なるものの現象学的解明に依つて、純粹時間論、幾何学、其他すべての存在学的学科の**間接的命題**のすべても亦、先驗的意識の本質法則性及び此の意識の規整的多様に対する指標であるという事及びその理由がわかつて来る。

ところでこれは明確に注意せねばならぬ事であるが、規整的諸現象学とそれに対応する形式的及び質料的諸存在学との間の右の如き諸聯関には、**後者に依る前者の基礎づけというものは毫も存しないのである。****現象学者というものは、存在学的なる概念乃至命題を規整的本質聯関に対する指標として認める場合にも、即ち、その概念乃至命題を、己れの権利及び妥当を純粹に己れの裡に有する所の直覺的証示に対する指標と見る場合にも、存在学的に判断するものではない。**此の一般的論定は、更に後に至つて、一層根本的な詳論——それは此の事情の重要性の故に絶対に必要とされている——に依つて、確証されるであらう。

第四篇 理性と現実

規整問題に対する、意識のノエシスの層をもノエマ的層をも等しく顧慮する全面的解決は、理性の形式的及び質料的形態のすべての側面と、理性の常態的（積極的・理性的）形態と等しく変態的（消極的・理性的）形態の側面とを、同時に観る所の完全なる理性現象学と明らかに等価的となるであろう。が併し更に進んで、吾々は、かかる完全なる理性現象学は現象学一般と合致するに至るであろうという事、即ち、対象規整なる総括的名称に依つて要求されるすべての意識記述の体系的完成はそれ自身の裡に意識記述のすべてを悉く包括するに違いないであろうという事を想わざるを得ない。

底本：

純粹現象学及現象学的哲学考案（上）1939.2.2 第1刷（1987.11.5 第6刷より）

純粹現象学及現象学的哲学考案（下）1941.10.7 第1刷（1987.11.5 第4刷より）

なお原著として参照したのは“herausgegeben von Elisabeth Ströker, Bd. 5”で1992年に再刊されたもの。英訳は公開されている、F. Kersten 訳を参照した。“archive.org”では原著の写真版、英訳が“Ideas, Part I”の名で公開。

作成者：石井彰文

作成日：2016.9.10.